DS
834
.5
M3K3
v.13

Kaga-han shiryō

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY





加賀藩史料

第拾參編

自文政四年
至文政拾貳年


LIBRARY
APR 19 1968
UNIVERSITY OF TORONTO
DS
834
.5
M3K3
V. 13

加賀藩史料第十三編

文政四年

正月朔日。前田齊廣病むを以て年頭の禮を行はず。

〔横山氏日記〕

正月元日　快晴

一、御前御疝邪等御難儀被遊候に付、御禮被爲請間敷旨、舊臘書立之通に付、年寄中等五時過より段々登城之事。

一、頭分以上登城、年寄中謁、四時過退出之事。

一、松之間二之間において、年寄中・御家老中・若年寄中一列に而、以遠藤數馬年始御祝詞申上候處、追付名越三左衞門を以御意有之候事。

正月六日。市川三亥を召出して藩臣たらしむ。

〔金龍公記史料〕

正月六日。辟支藩富山臣市川三亥爲藩臣。以名善書也。

日附前出と異なり。諸士系譜亦六日とす

〔金龍公史料〕

正月四日。於江戸邸料理間。辟富山臣市川三亥。新賜祿二百五十石。職俸百石。爲頭並。定住江戸。屬青山將監。

正月十八日。楮の取締と他國出の口錢に就いて令す。

〔留帳拔書〕

御領國中出來楮皮之儀、御締茂有之品に候處、近年猥に相成、無謂他國江相洩候躰に相聞候處、當時追々楮苗も爲植付、御國用も足り、おのづと紙直段も下直に可相成儀に候處、前段之通無謂他國江洩有之候而は其詮茂無之に付、今般詮議之上産物方年寄中江も相達、堅く他國洩無之樣嚴重に取締之儀、河北郡下矢田村彌兵衞・能瀨村直右衞門兩人江主付申渡、御國用之餘分は一束に付八分宛口錢取立、他國出指解候條、各支配之內楮苗植付候村々江此段嚴重可被申渡候、以上。

巳正月十八日　　産物方役所

有賀甚六郎殿

中村逸角殿

正月十九日。具足の鏡餅直を行ふ。

〔諸事覺書〕

正月十九日

一、今日御鏡直に付年寄中等熨斗目・上下に而定刻出席。

一、如御例御具足之鏡餅頂戴被仰付候旨、月番より演述有之、松之間二之間に而年寄中等頂戴、相濟御臺所奉行へ御禮申述事。

但、御鏡餅に熨斗を添頂戴之事。

正月廿一日。定火消役等に對し、消防に從ふ者の粗暴の擧動を戒め且つ手鎌の使用を禁ず。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通、定火消役等へ申渡候付、爲御承知指進候條、御組人持へ御申聞可被成候、以上。

正月二十一日

近年火事之節、途中曁於火事所、がさつ之儀共有之躰被聞召候。以來互に相心得、人込之中之儀に候へば、人數等へ相障り申儀も無據可有之儀に候條、何分互に致用捨、がさつ之儀無之様、主人々々より可申渡置候。且手鎌を以人を打候儀抔有之間敷事に候處、心得違之者共

右躰之儀も有之由に候間、是以後手鎌致持參候儀可致無用候。旣に江戶表抔において手鎌無之候而も相濟申儀に候。畢竟互に禮讓を失ひ候より事起り、申分も致出來候事に候。一統禮讓を失ひ罷在候儀に付而は、兼而頭・支配人迄被仰出置候儀も有之候間、前條之趣主人々々より下々迄、嚴重に可申渡置旨被仰出候事。

巳 正 月

二月四日。諸士にして江戶に勤務する者の町人より金子を借用することを禁ず。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

二 月 四 日　　村 井 又 兵 衛

奥 村 伊 豫 守 樣

定番頭江

御家中之人々江戶表へ相詰候內、御用聞町人より金子致借用、返濟方等閑之人々も有之哉、町人共も其役前により好を結び候而、自分之望を叶可申ため、不賴入とも其模樣に仕成候族之者も有之躰に相聞候。不埒之至に候。當時專ら風俗御改之御時節、加樣之習俗は急度可改

儀に候間、是迄借用之人々も有之候者、早速夫々返濟、わけ相立可申候。若此後右躰之儀於有之は、急度御咎可被仰付候。此段可申渡旨被仰出候。

右之趣被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

辛巳二月

二月十三日。御郡を割いて金澤町支配に編入したる地の町名を定む。

〔國事雜抄〕

今般町支配に引請候御郡地ヶ所。

有松村領は有松町。泉村領並泉村領並泉出町共に泉新町。泉野村領・六斗林は六斗林町之內建込。橋より末は地黃煎町。下三屋は三俣町。泉野村領出町は野田寺町へ建込。同所町端十六軒之間は十一屋与唱可申候。石坂村領は川より末は針屋町、石坂村領川より西は石坂川岸。上野村領は上野町。田井村領出町は金浦町。卯辰村領崩山は觀音下町へ建込。卯辰村領新町は川より南は卯辰西養寺前、川より北は卯辰誓願寺前。談議所村領下町は談議所町。本通之內は春日町へ建込。卯辰村領祇園前は卯辰祇園前。卯辰領山上下町は山下町。同寶藏寺より

春日鳥居迄之内裏通りは寶藏寺町。山上村領新町は山上町。但四町有之に付東西南北を付唱可申候。大樋村領者大樋町。同所裏通りは大樋七軒町。大衆免村領は大衆免町へ建込。淺野中嶋村領は中嶋町へ建込。淺野村領は下淺野町へ建込。上安江村領は下荒町へ建込。長田村領出町は長田町。廣岡村領は長田町へ建込。

右之通町名に相改。

二月十三日

二月十四日。諸士にして町會所より仕送を受くる者の妄に外出するを戒む。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

二月十四日　　村井又兵衛

奥村伊豫守殿

定番頭江

町會所仕送之人々、御用之外は無謂外出不仕儀等、先達而被仰渡置候處、近くは支配頭へ不及屆、忍候而致外出候者も多、其內心得違之者は殺生抔にも罷越候哉に相聞候。不心得之至

に候。元來仕迯之儀は、誠難澁至極に而、勤仕にも指支候人々、格別仕迯被仰付候御趣意候へ者、於自宅も如何にも艱難相暮、速勝手取直方專要可相心得旨等、去年十月被仰出候通に候。依而御噂之趣有之候間、以來無謂外出、榮耀ヶ間敷儀有之間敷候。如斯被仰出申渡候上は、心得違之人々有之候者、人多相成候共、乍御心外御咎可被仰付候條、急度相心得可申候。

右之趣被得其意、組・支配之人々へ――

右之通一統可被申談候事。

辛巳二月

二月十四日。火災の際に於ける諸士の心得を諭す。

〔宮私隨筆〕

別紙寫之通定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

二月十四日　奥村内膳

奥村伊豫守殿

定番頭江

近年火事之節、途中暨於火事所、がさつ之儀ども有之躰被聞召候。以來互に相心得、人込之中之儀に候へば、人數等相障申儀も無據可有之儀候條、何分互に致用捨、がさつ之儀無之樣主

人々より可申渡置候。畢竟互に禮讓を失ふるより事起、中分も致出來候事候條、がさつ之儀無之様下々迄嚴重爲相心得可申候。右に付而は定火消役等之人々へも被仰渡候趣有之候事。

一、火事之節辻立等不致、且無用之人々火事場へ不罷越様、前々より相觸置候處、又々猥に相成候躰候。以來急度可相心得候事。

右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、――尤家來末々迄不相洩申渡候様可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

二月十八日。稻垣貞九郎その妾を殺害したるを以て知行を召放たる。

〔横山氏日記〕

二月十八日

一、左之通今日表方に而申渡有之候事。

稻垣貞九郎

堀孫左衛門江

右貞九郎儀、前月二十四日妾を及殺害候首尾以覺書被出候付、猶更相尋候趣有之候處、貞九郎手前重而被相尋、委曲以紙面被申聞、則相達御聽候處、妾みす不屆之申分有之、叱申儀に候得ば、不意之場所に而茂無之處、箱を以而躰をも打候段、先以おくれたる儀。且不得止与

存、みすを突のけ、上に乘掛り、脇刺を以胸先を突込候由之處、妾之妹駈參り取支候とて、みす起上り、妹もろとも逃行候段。暫追掛ながら若黨部屋迄爲逃延、たをれ候故生死之程見屆候与申儀は、甚手ゆるき致方に候。元來手打之儀は御定も有之、若黨・小者に而も殺害仕儀有之儀候はゞ、公事場江斷可請指圖儀。但當座成敗不致而不叶首尾之者は其分に候得共、女之事、右之次第に候得ば、手餘り候与申に而も無之、幾重にも取縮方等有之儀に而、不得止与申譯も難相立、前後不都合至極之首尾、士道を取失候致方に候。依之御知行被召放候旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

辛巳二月

二月廿九日

一、左之通表方に而申渡有之。

堀　孫左衞門

湯原　主馬

孫左衞門方組稻垣貞九郎儀、妾を及切害候時宜、初發より存込違被致、取捌方被仰出之御趣意に相違仕、恐入迷惑至極被奉存、主馬方にも同樣被奉存候。依而自分之儀、尙相心得可被申哉之旨以紙面被申聞、則相達御聽候處、貞九郎手前先達而被仰出候通不都合至極に候處、

取捌方未熟に被思召候。乍然此度之儀は、先其分に被思召候。以來之儀急度相心得可申候。此段可申渡旨被仰出候事。

二月十九日。前田齊廣の子他龜次郎着袴の儀を行ふ。

〔官私隨筆〕

一、左之紙面到來、返書遣之。

明日他龜次郎殿御着袴に付、中將樣初方々樣へ御祝詞申上候間、御自分樣にも同日御登城御申上可被成候。御當病等に而御出難被成候はゞ、御紙面を以御申上可被成候。

御前樣・鈞姬樣へは、同日出町飛脚傳附、以御紙面御申上可被成候、以上。

二月十八日

奥村伊豫守樣

奥　村　內　膳樣

二月十九日

一、右に付今日布上下に而四時過登城、以名越平兵衞御祝詞申上候處、御喜悅之旨以同人被仰出。

〔諸事覺書〕

二月十九日

一、今日他龜次郎殿御着袴御祝有之、年寄中等出席之上服上下に改、表方席において御近習頭を以御祝詞申上。勝千代様江御附頭を以右同様申上候事。

二月。富田景周再び藩政釐革に關して建言す。

〔富田痴龍上書〕

文政三年十二月廿八日參照

先達而御左右へ奉指上候一冊之趣は、御當國には迂遠の儀共故、いかゞ可有御座哉と奉存候所、幸御主意通に相適ひ、無比類御眞翰被成下趣、生々世々冥加之至り、堪老涙かね、意底之ほどは其萬分も不得盡筆舌、難有仕合御座候。乍憚右之尊慮に被爲在に於ては、無疑畢竟御徳化人心を浹洽し、何事茂御主意通に可成御儀と奉存上候。尚更心附之趣共可申上旨、畏入候。餘り舌長なる申過し共、不敬之事奉恐懼候得共、御爲と一圖に任御意、前書同事の老の繰言ながら書記し、愚意之趣乍恐重て上之申候。

一、蓮池御普請も是切に御指止め、江戸・京御手役者茂御歸し可被遊思召之所、年寄共より御普請是切に被仰付候ては、却て御費も有之候。御能は御養生にも可被成間、何分御手役者は此まゝに被成置候様相願候由。是は年寄ども申上方一段尤に奉存候。人生は貴賤となく折々心を慰め申さでは、氣血澁滯仕候。心は五管四支百骸の主と御座候へば、心を勞し候へば諸

病是より起り候事は、醫書にも多く相見え候。乍恐自然御氣血滯り、御病身に被爲成候ては、假令堯舜に齊しき明君にても、病の爲に冒され御政事御裁斷も難被爲遊、何事も徒に相成候。左すれば蓮池御普請并御手役者などの御費用は、格別結構なる御榮耀さへ無之候はゞ、三州御太守之上にては甚纔なる御儀と奉存候。かほどの事はいかにも被爲仰付、朝夕風月の氣色、四時花木の咲かはるありさまなど御覽、或は御能被遊、御身體の動作を御試み、彼是御心を御養ひ、いさゝかも御勞神なく、永くいつまでも御機嫌よく御仁政御行ひほど難有事は無御座候。是亦三州萬民の爲に御座候。此道理に候得ば、乍恐御一身の御事と不被爲思召、只今より此所尚更御肝要に御養生第一に被爲在候樣奉存候。御難澁に付御心配被遊候と申御文段折々有之。是を奉承候毎に、私儀御病氣にても御發の事も可有之歟と、寢食不安奉存罷在。此儀何よりも御大事之儀、御序も候はゞ申上度と、ひたもの是まで奉存罷在候へども、不束に申上候も不敬恐入罷在候之所、此度幸を以奉申上候。右御普請等被遊候とも、漢文帝惜吉金之費、被爲輟露臺之役候其主意だに御會得於被爲在は、下々奉見習奢侈に移り候事は一圓無之儀。管仲は驕り者にて候へども、齊の桓公に用ひられ、齊の國よく治り、桓公五覇の第一と仰がれ候にて御考可被遊候。敢て御前のみ折角御勞神御儉約にて、御勝手直り候もいとも不奉存候。國を富ませ候は只々治法の樹かたにより可申候。此所御聰明之御眼力、不

申上とも御理會の御事ながら、尚更申上候。何とやらケ様に申上候へども、阿諛追從にへつらひ申様にも可被爲思召歟と、其儀に還て相泥み申上かね候へども、最早私極老御登庸の望も絶候身分故、私を離れ神以眞實を振ひ奉申上候。

一、御節儉之爲綿衣被爲召事も右に准じ可申哉。百萬石の御身にさへ綿衣を被召候と申候へば、賢君と誰彼可奉存候へども、是は乍恐分限の次第有之、禮記等に粗相見え申候理を以て推候へば、御上綿服被爲召時は、下々は最早是より下り着用可仕服無御座候。齊晏平仲は至て儉約なる人にて、出仕に洗濯せる衣冠を着し、一つの裘を三十年着用しけるを、孔子是を評し、賢大夫なれども其下に居る者難澁なりと申され候。況や百萬石の重き御身分をや。是を偪下と申、凡下の僭上仕候と同事に申有之候。しかれども漢文帝は賢君なり。其帝記に貴爲天子。富有四海。身衣弋綈。足履革舄。以韋帶劍。莞蒲爲席。兵木無刄。衣緼無文。集上書嚢。以爲殿帷。以道德爲麗。と見え候事、謙德公或は米澤侯・細川侯など綿衣被爲召、人人是等心服仕候美談も申傳へ候得ば、私儀愚見を以一概には難申上奉存候。此所御勘辨被遊候て、事宜によりいづれにも人々心服のよきを御取用ひ宜くと奉存候。御家中の服制も一統綿衣はいかゞ。堂上とはたがひ高下の色制なければ、上下の分相わからず。さあれば頭分以上或は歳五十以上の者は絹・紬、夫以下は一圓木綿衣に止り候もしかるべき歟。

一、老子經に、大國を治るは小鱗を煮の如しと見え候。小鱗とは小魚いわし・ごりの類ひに御座候。此類を煮には、最初其煮汁を塩梅の加減より致し、その鍋内へ右の小魚をそろりとあけ煮あげ申候へば、味ひもよく小魚の形も損じ不申候。夫をまだ煮あがらざるより色々と箸にてうへしたうち返し、あとより醤油をさし塩を加へ、又煮直しなど致し候へば、皆小魚崩れ爛れ申候。國政も此氣味にて、最前とくと正法をさだめ、夫に諸民を從はせ候を仁政とは申候、大學にも、仁親以爲寶と有之、仁より上は無之候。然れども仁の用は、譬へば春の日影のうらゝかに、諸の草木禽虫まで生育せる惠の如くにて、泛と承りてはよりどころなき樣に御座候へ共、卽ち其所に眞の滋味有之て、自然の恩澤相こもり、人々心に何となくおもしろくうれしく思ひ候に、仁の德相備り候。仁政とて、圖りなく金銀を多く人々に與ふる事にても無之、只下々の迷惑する事いやがる事を除き、何ごともおだやかに、直すにせわくるしからぬが仁政に御座候。如此下々の心すなほに成居不申而は御命令不宜候。管子にも政之所興。在順民心。政之所廢。在逆民心。と御座候。又下令如流水之原。令順民心。とも御座候而、百姓の身にとり過役もかゝり不申、安く可順事を行ふ儀にて候。今幸に御前御仁德の深き、此御難澁の中にても諸士の除知米をも御かり上げ無之、町家書上銀も不被仰付等の御恩庇は、中々古の明王賢君にも恥させらるゝ事なく、陽廣公の御心持の御樣子に奉爲似御仁

心は不及申、其上尙書に有之ごとく、不通聲色。不殖貨利。の御行ひども、且舊軄等のごとく諸人を煩らはせらるゝ御慰事も曾て不被爲遊、すべて御身の御愼かた皆古の法言の規矩に引合候事は、千載の一遇三州の大幸に奉存候。さて又前文に最前とくと正法を定むと記置候。其正法はいかなる法ぞと申候へば、祖法とて、御國なれば御國初御先祖樣がたたて置せらるる御遺則に御順はせ候事にて、いにしへ三代の聖王といへども、舊典の遺法に順はざるは無之候。周書にも典常を師となし、利口を以其官を亂る事なかれといましめ有之。又詩經にも、不愆不忘。率由舊章。遵先王之法而過者未之有。と見え候。德川御家にも東照宮御建置の御祖法のごとく、今に參勤をはじめ大小名の御作法等、却而何事も動かざる故、足利家の時代の如く國大名各勝手次第も不相成、御治世長う相つゞき候。是と申も年久敷御例と成來候故、只今にては常と成り、天下の廣大といへども誰一人關東の令には背く者無之候。さらばとて只今にても新法しばしば出候ては、何程御治世久くとも、容易に諸侯をはじめ其儀に從ひ申者にても有之間敷候。さすれば御家にても御祖法を御重んじ、成かぎり御用ひ、二百餘年來の御掟を以て、夫に古今推遷の時宜を御斟酌被遊候はゞ、士は勿論末々までも是に歸服不仕は有まじく候。堯舜を祖述し文武を憲章すと中庸に有之も、此儀与奉存候。さあれば其內に他國よりからき御政御座候とも、是迄の御先格故下々夫を聊も御怨みに奉存候事は無御

座候。夫とも若舊制あらため申さで叶はざる時は、新舊の兩法を引くらべ、舊法より新法に十倍の利百倍の功あらば改むべしと、古人も申置候。加程の者に御座候を、近年は其御祖法をも顧みず、御勝手役人より容易に新奇の仕法を樣々取立、御國用の不足をあがなはんと、下々を欺き金銀を取上んと仕るはなげかしく、御隣國江聞え候ても御名目甚だよからざる御儀に奉存候。町・在の者に限らず、却て三州に住居仕候者は、皆乍恐御國主の御子同事に御座候。しかるに其物をたぶらかし、親の益に取上げ候事は、唐の太宗の若損百姓。以奉其身。猶刻股以啖。腹飽而身斃。と被仰候も同儀に御座候。惣て太宗の治體の樣子、貞觀政要御覽御考可有御座、政務の味甚すぐれ申候。とかく前冊にも如申に、御政事に寛篤とゆるやかに事すくなく、禮儀を本として末利を押へ、道德の端を廣めて淫佚の原を防ぎ候事にとゞまり候。如斯にして後御仁化能四民に蒙るべく、風俗も正に移り可申候。繁法のよからぬは、尾張侯の温和政要にもかゝせ置れ候通りに御座候。役人も能々呑こみたる者を御撰み、三人の方には二人、二人のかたには一人にても、易簡なるかたのよき事は、尾州の儒官細井甚三郎が尾張侯へ書上げ候根芹と申書にも記置候。させる器量もなき役人のみ多御座候得ば、俗に申手取足取仕內、各々面々のかはるごとく人々の了簡も一致不仕、其間には自然と御不益の事共もまゝ可有御座候。諺に小田原談合益なく損多しと申候。また百人瓢を荷うて走候はゞ

無必ゝわれむ、一人持てはやし走りたるがよからんと戰國策に見え申も、此意趣と奉存候。

一、有德院樣御代初など、莫大の金銀御不足にて、御番方御切米の渡切さへ定りの時節相延、諸侯大名半年詰に被仰渡、米穀御借上げほどの御難澁に至り候へども、ほどなく御仁德により御取直し御座候へば、當時は萬貫目の御借財は莫大に候へば、畢竟御德にさへ人々なつき、何れも和同仕御爲專らに、諸士は勿論町・在迄もおのれが身上と意得、御儉約を申上候はゞ自然と御財用融通仕り、其内に漸くと御勝手御取直し必可有之候。劉向が新序にも、德莫大於仁。而禍莫大於刻。と前册にも記し候ごとく相見え候。其仁を今はまだるく思ひ、莫大の金銀の御不足を算用詰の折、秋毫の利屈御儉約にて直さんと謀れば、禍の端を開くのみならず風教を傷り、不仁なる仕形どもの出來り、第一には人和をうしなひ、豪商巨賈の金銀の融通すべきものも長物となりて、黨中に隱れあるのみにて人間の用をなさず、士風よりも其功劣り候。とかく融通の源は、御仁和と御信義との二つに止り候。管子曰。桀霸有天下而用不足。湯有七十里之薄而用有餘。天非獨爲湯雨菽粟。而地非獨爲湯出財物也。伊尹善通移輕重。開闔決塞通於高下徐疾之筴坐起之費時也。と相見え候。謙德公御代には、町人へ御借銀被仰付候へば難有がり、其一町之者共を招きあつめ祝ひいたし候と申世談も有之。また江戸・大坂町人ともも御かり銀被仰付候へば、甚規模に思ひ、ことの外難有がり候よし申傳へ候。

加様之所に至候へば、何ほどの御借財高に候とも、御通用に滯り候儀必無之道理と奉存候、當時は御かり銀沙汰有之候へば、各用心いたし、取かくし候樣なるうらはらなる違ひは、右和信の二つの者行屆ざる故と奉存候。融通のよからざるも皆是に預り候。然るに是を刻薄役人の心には、からくりの仕形猶多からざる故通用あしくと心得、彌種々の知巧をめぐらし候は可惜事に御座候。難澁はいづれの國にも有事に候へども、上の勞する所は下も勞し、下の悅ぶ所は上も悅ぶ樣に、上下共苦を共にし候へば、下々はいかほどの難儀の事有ても難儀とも覺えず、上をもうらむる心なく、上の勞神をいかにもして共なきやうにと思ふのみなり。是を卽ち上下和同と申て、ひとへに上の仁心より出る事に御座候。此場所は中々からくりにてまゐるものにても無之候。若また上のみ素服を着、膳味を減じ苦しめども、下は夫とも思ひわきまへず。又下のみ晝夜はげみ食業に苦しめども、上にはさほどにもわからざるには、中間に姦吏等のしわざ有之、上下の道ふさがる故な也。是を無和同と申候。此意味は古書に多く見え候。

一、歌舞伎・遊所の儀は、元來末々の渡世の爲被仰付との被仰出にて、下々鰥寡孤獨も多く候へば、何歟それらへの御慈悲においては、是又一種の難有御仁政に御座候。左候へば御領國の遊民共に所作爲仕隨分事足り可申儀。此譯なれば金銀も御國中切にて通環仕り、他國に

泄し不申可宜候。然に戯場へは過分給銀の京・大坂等の伎藝の役者を呼下し、遊所も是まで在來の家共を段々打こぼち、新に青樓を過大に建つらね、淫亂の穽を設け、奢侈に日々に至り候は、第一下々渡世の御慈悲の御主意にたがひ申候。夫故誰にも御慈悲の爲とは曾て不奉存、ひとへに運上の御手段とのみ相心得申体は、御仁政に違ひ殘念の至り奉存候。將亦右体之儀共町奉行切に承屆候樣被仰出候へども、是は御國風に専ら預り候事、此儀いかゞ可有之哉。當時五ヶ年御儉約はじめの御國政、諸士風俗奢侈等嚴重被仰出には、乍恐不相應之樣に誰彼奉存候。夫故去暮出野菜の樣なる見ぐるしき出奔も有之、誠に是は婬源を開き求めて罪梯を作る趣段。夫のみならず兩刀を帶する者を御禁制など、其場にはひそかにかくれ行者の兩刀預り人を立置と言樣なる仕形、不都合の次第共也。漢の昭帝共時の文學に民の疾苦を問ふとき、文學對之曰。治人之道。防淫佚之原。廣道德之端。抑末利而開仁義。然後敎化可興而風俗可移と。まことにしかなり。しかしながら右遊所等一旦御聞屆被仰上は、今更相止み候も最初未熟の御詮議に相當り、却而御手薄に聞え可申間、是は此まゝにまづ被成置、輕き者渡世を専らに輕き裝束等相用ひ、夫に准じ何事も品輕く、御領國の者迄にて仕候事に成候はゞ、去秋被仰出も相立ち可宜奉存候。若又他國者の金銀を釣取御益に仕る手段に候へば、夫は中國筋にて京・大坂等へ便利よき往來の地にも候はゞ、姦計ながらもさる事可有之

且右入用の役者を招き下し、及び伎女裝束等品多く取寄候に、過分京へ泄銀有之、却て御國候へども、北阪の御國に候へば其儀不便利、畚の沙汰は必有まじく奉存候。

一、風俗之事も去秋被仰出、是は亦御國政に於て尤不可忽儀。古語にも入國は先づ其俗を見ると有之。風俗により其國の善惡邪正强弱相知れ候。依て孔子國々の詩を集め、詩經三百篇を編申され、今にも五經の一に相備り候。譬へば御上御能御好御座候へば、夜中往來の者みな謠をうたひ、當時歌舞伎流行候へば皆じやうるりのみ口ばしり往來仕候。是自然の理にて、一國の風俗かやうの所にかゝり申候。御家中に於ては、大小將組の風俗第一惡く御座候所、近くは殊の外宜く相成候躰、是ひとへに御威光と奉存候。是より追々御下知ども御座候はゞ、萬の風俗段々可相直と難有奉存候。

一、是まで御家中困窮御救の御貸銀等の御仕方、乍恐いかゞに奉存候。貧窮は祿の高下に拘り不申候。又貧にも富にも子細有之所、夫に無差別、一統に五百石以下三百石以下のと祿高を極め御救ひ御座候。御仁政とは乍申、是には御詮議も可有之歟と奉存候。其貧になり候所以、或は父母兄弟又は自身にても數年多病、人參等過分に服し、先年馬場木工のごとく御知行をも自分より除知相願候樣の類、或は親類の爲に費多く候か、また厄介人等多く及難澁候か、或は火災水難にかゝり候か、其故を其頭よりつぶさに常々遂穿鑿置、無餘儀困窮に候は

ゞ知行の高下に預からず、相應右等のつぐのひにも可相成程御救ひも有度事に御座候。ケ樣の子細も無之分限を取失ひ、放埒のおごりに過分の費多く難澁仕る輩へは、却て御しかり有之、後日相嗜み候樣御仰出可然と奉存候。かゝる輩に人並の御救ひ是迄のごとく被下候は、益そのおごりを長じ可申候。是孔子のいへる惠みて費る事多しと、右共に相當り申候。此所乍恐御勘辨被爲在、以後はその頭々へ被仰渡、其困窮の所由を御吟味のうへ御救ひ御座候はゞ、御救銀の員數も減じ、且御救銀を給はる人々も格別に難有可奉存候。その無謂、みづからおごりて難澁の人々も是にこり、後々行ひをあらため可申、是即ち人氣をすゝむる兩可の御善制かと奉存候。

一、出納常平と申事御座候。納とは、年分御收納の米穀は勿論、小物成等惣じて御納め高に御座候。出とは御上の年中惣御入用、御家中及び末々まで被下高等に御座候。是を引合せ出納を計會符合候樣仕事に御座候。然れ共當時過分の御借銀御利足等に引け候ては、中々難引合と奉存候。左あれば前にも記候通、算用法の御符合圖りは暫く被爲指置、先人心の固膠せるを、御仁化御信義を以解せられ候はゞ、おのづから金銀等の通用の道も開け、過分の御借財御座候とも、かの出納符合を極め置候うへ、物には損益賞罰有之故、かの減損せる金銀を以是の不足を補益し、かの罰せる祿秩を以て此に賞せる增俸を行ふ事、是國政の古法に御座

候。無左共出納の圖りなく、出方諸納に越ゆれば不足次第に相倍し、終には逼迫無爲方場に至り候。用を節にするとて、賞にも罰すべきにも節を失はず、出納を刻算して行ふべき儀に御座候。

一、有司役人御選擧のあらましは、室新助が献可錄に、有德院樣御守に付申上候趣宜樣に奉存候。猶更御覽可被爲遊奉存候。

是より學業之事相記候

一、申上候にも不及儀与奉存候へども、御國政の規矩の爲に、御左右に被爲差置、御平生御覽可然と奉存候は書經は根元、之につゞき春秋左傳或は管子・孟子・漢の鹽鐵論・唐の貞觀政要・宋の大學衍義等に御座候。あまり多端に御覽は、泛濫と歸宿なくよろしからず候。右申上候類を幾度も御玩味、御心を被爲留、乍恐文義に御通じかねの所は和解被仰付、御自得理會を御専要に被爲遊樣奉存候。古人も申置候如く、書を多く見、是も馳馬上に燈を見申如く、ちら〳〵と見通し候ては、腹味相知不申候。將又學記に、欲化民成俗。其必由學。と見え、陽廣公御遺訓のはじめにも、貴も賤も學文なくしては國家治る事難し。善は諸人の賢愚邪正を知て其器に當るを以て司とすと被仰、又學文は聖賢の道をしり善道を行はん爲なりとも被爲仰置候。何卒御政暇には御觀書被爲在、御宜しく可有御座と奉存候。

一、卿大夫の家は君の股肱腹心、御國においては纔に七・八家に止り候所、其面々不學にて、献可替否の志なく候ては、第一御政事行届かざる元に御座候。近來抜群の人傑出不申儀は、幼少より全學古の勉を欠、墻に面して立が如くなる故に御座候。周書に、古へを學びて官に入事を儀するに、制を以てすれば政則ち迷はずと見え候。松雲公御代奥村壹岐父子などは、水戸の朱舜水先生の門弟にて、學業の信篤き事、舜水文集御覽御座候へば能相知れ申候。壹岐著述の讀書抜尤錄と申は、板行になり世上に御座候。夫故公にも格別に御用ひ、御國政御委任の体舊記にも相見え候。丹後守などは別て御秘藏の御様子にて、右居宅へ御成も御座候程之事に御座候。丹後守は東照宮百年忌の節、爲御名代日光の龍宮城より上りたると申傳へ候鐘に有し銘、諸大名の使者一圓讀得不申候を、丹後守少の滯りもなくさら〳〵と讀候て、諸國の使者皆驚き申候と申物語も日記に相見え候。左候得ば學力も餘程有之体。夫故にも御座候哉、公の御代の御政務凡て格別の事どもに奉存候。しかれども當時宿老の面々は、學問有之、學業人情第一に被爲仰候儀御肝要奉存候。御政事の規矩は學問に止り申候。將亦執政今更稽古もなりかね可申間、是は格別年若なる面々及び無息の面々ねは、每度御噂の御意もの面々各互に志一致せず、取嗘方一様之様に出不申候は御爲に甚よろしからず。卽舜命九官濟々相讓と見え、又衆賢和於朝。則萬物和於野。と見え候て、大臣の不和は甚よからざる儀

に奉存候。是も其元は學文規矩なき故と奉存候。

一、學業はとかく士以上に有之、下々に無之が宜御座候。上職の人學なく文盲にて下のみに文才有之候へば、下々上の事をあなどり、聖言を假て己を立候故、御國政の妨に相成候。秦の世に儒者を埋み民を愚になせるも此意味にて、學者多く上の令をも受がはざる故、天下の人民治め難きを以ての事に御座候。しかれば士以上には學文無之て難叶、是に就ては學文仕方は素讀のみ名聞の學文は不仕、一句半語にても實用自得の修行を致し、是を身に行ひ候樣被仰渡、其頭々へも其心得被仰渡、學問人情文章等難仕候輩有之候はゞ、其作文御覽にも可入旨被仰出可然奉存候。且又御番人などは、四書の小本を懷中し出で、大小將をはじめ御番中にも透々には見讀候樣に被仰出可然奉存候。則常憲院樣御代歟、御番中懷中の爲板行に被仰付四書の小本世上に有之候。是等の舊例も御座候へば、學問の進みに相成よろしかるべく奉存候。

一、惣ての事御近習向より始り候事は、御家中へはやく移りやすく御座候。さあれば表小將など年若なる輩も、右の小本懷中仕罷出、御番の透々見申樣被仰付候においては、御家中自然と押移可申候。扨又勝千代樣御近習なども、學問ずきの者被爲置候儀必御爲に宜可有之候。御手跡も御好、優美に被爲遊候御樣子。就夫ては御幼少に被爲在御内より、御學問は勿論、

御詩作も御慰にあそばさせられ候はゞ、人情にも自御通、御一段に可有御座与奉恐察候。時過て然後學べば則勤苦難成と學記にも相見え申候。むかし周の成王襁褓の内より召公を太保とし、周公を太傅とし、又太師を置、孝仁禮聽之に化せしむる事古訓に御座候。
一、陽廣公など元より御聰明は不及申御事ながら、御幼少より今枝民部御附にて、何か御學問を御すゝめ申上、夫故別て御學道にも御長じあらせれ、御仁聞高く、御威望殊に備り、其頃諸侯に相並ぶかたもなく候。依て大猷院様にも民部輔導の宜しき故としばしば上意有之よし。卽木下順庵が錦里文集にものせ、當時板行にも相成天下に聞え候。其後大猷院様御所望にて、一本種と申書御著述御献上にて、尤御賞美の事舊記に相見え候。松雲公にも御幼少より御學文又御好にて、御詩作もよく被遊候故、諸侯之内にては水戸黄門君と松雲公を海内にて今人々奉賞譽候。尤公には殿中において毎度御講釋被爲遊、格別の御德名も高く、諸國に於ても誰不奉存者は無御座候。此御兩公御文學の初終の御傳は、私燕臺風雅と申書を編述いたし、其内にあらまし記置申候。若御覽も可被爲在御儀に候はゞ可指上候得共、全部二十卷ばかり御座候故、騰寫はかどりがたく、しばらく遲れ可申と奉存候。詩歌は人情風俗にかゝり候ものゆゑ、慰とは乍申是には様子も有之、風流道のみに無御座候。且は字數も自然と御覺被遊、畢竟何歟故實等御考共にも可相成と奉存候。

一、御前には縱令詩歌御好不被遊候共、或は名月抔の佳節には、御儒者の內又無左とも學問好候輩へは命を賜、詩歌共得手に御任せ作り指上る事なども折々可然と奉存候。微妙公御以來泰雲公まで、御代々被仰付候。右夫々被仰付詩ども、後々紛失もいかゞ殘念に奉存故、是等も燕臺風雅中江及見聞候分は撰入仕置候。又書も能仕候者には、貴賤の差別なく折々被仰付、御慰に被爲在候はゞ、遊藝ながら是又君子玩事にて、風俗にもかゝり、自然と人々文雅なる遊び事にも遠ざかり可宜と奉存候。是等は敢て御政事の益に成ほどの儀にて無之候得共、又諸士學を志すべき其端を開き候御術に可相成哉と奉存候。右等中上候內、若々思召に相應じ候儀も有之候て、御取用ひも御座候へば難有奉存候。但此儀被仰付候ても、初發ばかり事々鋪有之、一兩年も過候へばいつしか元のごとくにては一向其詮無之、剩最初被仰出候事も徒に相成候。是を詩經にも、靡不有初。鮮克有終。とそしり有之候。とかく其初に何事も緩々と可有、連續と御思惟被爲在、其上に被仰出候而は、いつまでも弛み不申、段々後々に至り候ほど相すゝみ、年月を經その事常となり、何事も成就の場に可至事を御下知御肝要と奉存候。左候はゞ世の風俗も次第に相直り、達學達才の人物も追々出候て、御國体元祿・享保のむかしに立かへり、有學の役人も多くなり、文質彬々たる御國と可相成と刮目して奉待御事に奉存候。玉不琢不成器。人不學不知道。とて何ほど生才有之候ても、學を以て矯不

申とては、諸有司役人には難成儀と奉存候。

此一冊重て相認奉差上候。各御披見之上、御様子次第被入御覽候樣致度候、以上。

文政四年二月　　富田痴龍判

伊藤平左衛門殿

關屋中務殿

人見吉左衛門殿

三月十六日。前田齊廣先に參覲の延期を請ひたるにその許可せられたることを告ぐ。

〔橫山氏日記〕

三月十六日

一、左之通今日關屋中務を以被仰出候に付、於表方席各拜見相濟、若年寄中被呼立拜見有之候。依之各明日御機嫌相伺候旨、月番靭負演述有之候事。

中將樣御病氣に付、追々御願、御在國被加御療養候得共、御疝邪幷御氣塞之御症御治し不被成、御快氣之躰不被爲在、迚長途之御旅行難被成に付、猶又八・九月頃迄御參府御用捨之儀、當月六日御用番水野出羽守殿に御願書御指出被成候處、翌七日御付札を以、御願之通被仰出

候。此段被仰聞候事。

三　月

三月十七日。前田齊廣の子延之助金澤に生まる。

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

三月十七日朝五時過、於二之御丸御廣式御男子樣御誕生有之、御生母は直姬樣御產婦之方なり。御墓御用は奥村内膳殿なり。三月二十三日御七夜御祝有之、御名延之助殿と佐久間武太夫より奉指上なり。四月十八日御血忌明御祝有之なり。

〔横山氏日記〕

三月十七日

勝千代樣御產婦之方、今朝平產、御男子樣御出生被成候。思召有之、先達而被仰聞は無之候。此段可相達旨御意に候事。

三月十七日

同月廿三日

今般御出生之御男子樣、御名延之助殿与被稱、殿付に唱候樣被仰出候。此段何茂江可被申聞旨御意に候事。

役所は御郡所

三月十八日。御郡方出火の場合に於ける原因調査の手續を改む。

〔留帳拔書〕

支配所御郡方村々之内是迄出火燒失之砌、火本人幷火之番人・村役人等役人等役所呼出、出火之樣子夫々遂詮議候上、委曲御用番ゟ及御達候振に候。然所前段之通火本人等呼出候而は、金澤往來雜用も相掛難事之上、不時成失墜有之、下々において誠に可及難儀筈。誠に小村貧村等之儀は別而不便至極之趣、兼而拙者共見察罷在に付、今度遂詮議、委曲御用番ゟ及御達趣有之候所、其通御聞屆之旨被仰渡候。依而已來若出火燒失いたし候節、一通り自火に紛無之分は、其裁許々々手前へ火本人等呼出、出火之樣子嚴密に相糺、口書取立、其段早速可及注進、火本人等役所ゟ指出候に不及候。若出火之樣子何与歟怪敷儀有之、或は人損、又は一村皆燒失与歟申樣成儀致出來候節は、尤是迄之通火本人等夫々役所ゟ可指出候。右之通申渡候上は、猶更火之元御縮方之儀嚴重被相心得、聊茂火之廻り麁抹無之樣一統可申渡候。右之趣可得其意候、以上。

巳三月十八日　　中村逸角

有賀甚六郎

三月廿七日。大聖寺侯前田利之参覲の途金澤に宿す。

〔横山氏日記〕

三月廿七日

一、備後守樣昨日御在所御發駕、夜前松任御泊に而、今朝五半時過此表江御着被成候由之事。

一、右に付御使御近習頭名越三左衞門被遣候由之事。

一、備後守樣今日此表江御着に付、御登城可被成處、御斷之儀被仰進候に付御登城無之旨。

且又各今日退出より直に御旅宿江爲伺御機嫌罷出候旨、月番より演述有之候事。

三月廿八日

一、備後守樣今朝五時過御發駕被成候由之事。

四月朔日。江戸上野本坊火災の歸路加賀藩の抱鳶等町鳶の家屋を破壞す。

〔江戸狀留書抜〕

一、四月朔日上野御本坊出火之節、此方樣御人數引揚之時分、尾張樣火消御人數と池之端仲丁に而及口論、右內濟之節仲人町鳶口上不宜旨に而、御抱鳶町鳶之者共家々をこわし候付、

三月廿五日臨邸とあるは誤なるべし

町奮配下之鴦共竹鎗を持騒立候に付、水野出羽守殿江及御内談候趣申來。重而水野殿より御內談之趣、町御奉行江被達置候間、御懸念之筋は有之間敷旨御挨拶有之旨、四月九日出に申來。然處鴦共歸參願御家老方に而申渡候旨、十日出申來候事。

四月二日。鷹司政凞本鄉邸に臨みて前田齊廣夫人を訪ふ。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

是の年三月二十五日鷹司准后政凞公江戶表江御下向、西ヶ久保天德院江御着なり。兼而御下向候はゞ、此方樣江御出御對面も被遊度、且其節御家之饗膳之儀御聞及に付御乞ひ之儀前廉御書通にて申來り、依て其儀中將樣江眞龍院樣より御願之處、公金澤表に被成御座候得共御許容被成進、依て四月二日本鄉御屋敷御本宅江御招請、眞龍院樣御對顏被爲遊候なり。

〔又新齋日錄〕

一、文政四年三月廿五日鷹司准后樣江戶御屋敷御廣式江被爲成御饗應有之、其節之御詠歌。

白きつゝじの數多さけるを

卯の花の色まどはせる岩つゝじいはねにあまる盛えならぬ

老らくのまれなるけふの松かげにつきぬちぎりや言の葉の種

海山のへだてもよしやうちとけてけふくみかはす千代の盃

待得し夕ぐれ芙蓉の山を見て

まちえつゝ霞をわけてあふぎ見るげにたぐひなきふじのしば山

わかれををしみて

稀にあふ袖のわかれも夜の鶴千世のちぎりはつきじとぞ思ふ

四月十八日。前田齊泰弓初・乗馬初及び甲冑着初の式を行ふ

〔諸事覺書〕

二月廿二日

勝千代樣御弓初幷御馬御召初暨御具足御召初に付於二御丸御作法

一、中將樣より勝千代樣江御弓矢等被進候御使若年寄之事。

但、御進物は御歩相添先達而相廻し、御附御歩罷出請取候筈之事。

一、御馬被進候御使も若年寄相勤、御馬奉行丹羽八郎右衛門幷明石數右衛門御馬指添罷出、奥之口御式臺において御馬奉行御繮指上、御頂戴可被遊事。

一、伊藤平右衛門等内被爲召、御弓矢等被進候御禮幷御馬被進候御禮可被仰上事。

一、御居間書院代御奥書院宜段、甲斐守等より勝千代樣江可申上事。

一、御弓初御規式御初に付、吉田才一郎御弓矢持檜垣之御間に罷在、宜時分指上可申候。御

替弓等は原佐左衛門持候而、檜垣之御間に扣可罷在事。

一、勝千代樣御弓矢御持出、御卷藁江御向御肩被爲拔候節、才一郞儀御側へ進出御袖等奉直、御射初相濟御緣頰江御披被遊、御弓矢・御韘才一郞江御渡、一先可被爲入事。

一、才一郞江御次に而、御弓初御用相勤候付拜領物被仰付候段若年寄申渡、御目錄御用人可相渡事。

一、勝千代樣御居間書院代江御出被遊、御熨斗三方御表小將指上、才一郞儀甲斐守誘引に而罷出、今日御弓初御用被仰付、拜領物も被仰付難有仕合奉存旨申上、御意有之、御手自御熨斗被下、甲斐守御取合申上、退去。

一、右相濟御前へ御出被遊、御兩殿樣江御雜煮等上之、御盃事被遊候事。

付札

本文御前へ御出御盃事等被遊候儀、當時中將樣御保養中被爲在候付、猶更御差略被遊、御馬・御弓初も被爲濟候上御出之處に而、御兩殿樣被爲兼、御手自御熨斗被進候筈之事。

一、御居間書院代、御規式中甲斐守・修理・若年寄御緣頰に伺公之事。

一、原佐左衛門江蔦之間代において、手傳御用相勤候付拜領物被仰付候段、若年寄申渡、御目錄御用人可相渡候事。

一、御馬場宜敷候段甲斐守等より勝千代樣江申上候はゞ、堂形御馬場江御出、御馬具所へ可被爲入候事。

一、甲斐守・修理幷若年寄御馬場江罷出可申事。

一、御馬奉行幷明石數右衞門罷出、御馬被爲召候節御轡數右衞門指上可申事。

一、右相濟御殿へ被爲入、御前へ御出被遊候付、中將樣御手自御熨斗被進、御頂戴之事。

一、御馬奉行丹羽八郎右衞門幷明石數右衞門江、蔦之間代において、御乘馬初御用相勤候付拜領物被仰付候段若年寄申渡、御目錄御用人可相渡事。

但、御中間小頭以下江被下物之儀は御用人可申渡事。

一、御具足は干鯛一箱御添、於御次中村宗兵衞江御渡被進候事。

一、勝千代樣江段々之御禮、伊藤平右衞門等內を以可被仰上候事。

一、年寄中等江於席、御兩殿樣御兼合に而御吸物・御酒被下之。かよひ坊主之事。

一、御近習頭分以上幷御用人、且又勝千代樣御附頭分以上江、御次において御吸物・御酒可被下候事。

一、吉田才一郎・吉田權平・原佐左衞門へ、竹之御間御勝手御廊下之內御屛風圍に而御吸物御酒被下之、且又御射手裁許江茂、同所御屛風圍之內に而右同樣被下候事。

一、御馬奉行幷御馬役等、竹之御間御勝手御廊下之內御屏風閙に而、御吸物・御酒可被下候事。

但、右御祝都而御兩殿樣御兼合に而被下候事。

以　上

二　月

勝千代樣御弓初幷御乘馬初暨御具足御召初に付御部屋向御作法

一、御附之人々一統服紗小袖・布上下着用、五時前相揃可申事。

一、中將樣より御弓矢等被進候御使若年寄、熨斗目上下着用御使相勤可申旨、藤田平兵衛等へ申談。御品物は當時御相殿之御儀之間、御歩指添、竹之御間御勝手御廊下通において御附御歩ゟ引渡、請取之、御次入口迄持參、中村宗兵衛等へ相達、御居間に飾置可申事。

但、御使之若年寄は、御相殿之御儀に付、常席に罷在御使相勤候趣、平兵衛等內ゟ可申達候事。

一、勝千代樣御熨斗目御半袴御居間に御着座之上、藤田平兵衛等內御使誘引、御前へ罷出御口上申上、御目錄御直々御取御頂戴、御弓矢・御肴も御頂戴。畢而御請被仰上、御使退去之節中村宗兵衛等內誘引いたし、御居間書院代御奥書院前通り御緣頬において、御熨斗頂戴被仰付候段同人

等内演述、御三方坊主持出頂戴。畢而同人等内を以御禮申上候事。

一、右御使ゟ従勝千代様御肴一折被下候事。

一、御馬被進候御使若年寄熨斗目・布上下着用、藤田平兵衛等申談、宜時分御使相勤可申候。誘引前條之通に而、右御使於御居間御前ゟ罷出、御口上申上、御目録御直に御取御頂戴被遊、御使退去。

但、御馬尺付等者、退去之上平兵衛等ゟ相達候筈之事。

一、御馬御頂戴に付、御使若年寄奥之口御式臺ゟ罷出、御馬两疋共御馬奉行之内并明石數左衛門差添罷出在之。勝千代様右御式臺へ御出に付、御馬牽出、御使之若年寄致會釋、御馬奉行御繦上之、敷付ゟ御出に而两疋共御頂戴被遊、御入之事。

一、右之内甲斐守・修理儀御式臺に伺公之事。

一、御使重而御前へ被召出、御請被仰上、退去之節中村宗兵衛等内誘引、御居間書院代御奥書院前御縁頰通において、前條御使之通御熨斗頂戴。畢而宗兵衛等内を以御禮申上候事。

一、右御使ゟ従勝千代様御肴一折被下候事。

一、右被進候御馬之内に而御召初被遊候事。

一、御具足は於御次中村宗兵衛ゟ御渡被進候事。

一、御附平士以下一統江茂、御兩殿樣御兼合に而御吸物・御酒被下候事。

但、御附頭分以上之儀は御表御作法書に有之事。

以上

二月

〔横山氏日記〕

四月十八日

一、今日勝千代樣御弓初・御乘初・御具足御召初御規式有之に付、御附甲斐守・修理・若老掃部・市三郎熨斗目・上下に而、五時前より出席いたし、其外年寄中等者服紗袷・上下に而常刻出席之事。

但、若年寄兩人共御使有之付熨斗目・上下之事。

〔溫敬公記史料〕

文政四年四月十八日學射。吉田才一郎爲師範。後吉田權平爲師範。是日始乘馬。又擐甲。注曰。擐甲修式而已。至文政六年十月十二日初擐甲于江戶邸。有澤才右衞門相之。

文政六年十月十二日の條參照

四月廿二日。老馬賣買に關する取締方を令す。

〔御郡典〕

老馬幷病馬之儀は、他國に遣し候儀不相成。御領國中に而賣買之儀は不指支候得共、若他國江可遣哉与皮多共無覺束存、一圓に指押へ、馬主等及迷惑に候族有之躰に相聞得候。仍而以來御領國中に而も、他支配江老馬等賣渡候節は、他國江不指遣趣買人より一札を取、役所江可指出候。先々奉行人手前に而縮方可申付候。右之通相極候上は、以後心違無之樣相心得可申、彌他國江牽出候儀及見聞に候はゞ、尤指押、早速可及斷候。此段夫々可申渡置候、以上。

巳四月廿二日　　有賀甚六郎

能州四郡十村中

文政二年六月五日の條參照

四月廿五日。前田齊廣、齊泰より竹澤御殿内部の造營を繼續せんとの申出に同意を與ふ。

〔於江府御親翰帳之內書披〕

一筆致啓達候。就者今度竹澤御殿向御普請方被仰付候樣被致度旨、從加賀守樣被仰出候趣、委曲以御紙面御申越、御書出をも被遣之。則何も示談之上、御用番より中將樣奉御聽候處、御許容被爲在候段、御用番より先便申進候通に候處、昨日拙者江別段以御親翰、加賀守樣御孝養之程くれ〲御喜悅至極に被思召、是等之趣御自分迄申達、加賀守樣江被申上候樣被仰

出候。依而御親翰之拜寫別紙進之候條、宜被達御聽候樣にと存候。右申進度如此御座候、以上。

四月廿六日　　　　前田土佐守

長甲斐守樣

御親翰拜寫

御仕居表向聞處いまだ不申付、時節柄に付先相止め候處、今般加賀守より達而申付候樣申付越候。追々物入可有之儀、彼是氣之毒に存候へ共、加賀守よりも孝養之志に而申越候儀、無味にも難相成、及斷候はゞ加賀守にも甚志を屈し可申事に付、加賀守存寄之通可申付と存候。於此方も加賀守志大慶至極に而、保養之一助にも相成り、大悅不過之存候條、右悅び候段者、猶又御手前より甲斐守迄も吳々宜被申達、加賀守江も被申聞候樣可被申達候。且又右之次第に付、彌可申付候條、甚氣之毒に存候段は、御手前より算用場奉行江も無急度可被申入置候。此段先申遣候、以上。

卯月廿五日

土佐守殿

四月。町會所より仕送を受くる諸士の文武稽古の爲にする場合に限り外

出するを許す。

〔雑事日記〕

町會所仕迯り之人々文武稽古外出之儀、以來於學校師範人幷押立稽古所相立致師範候者之方ゟ能越候分迄承届可申候。且稽古所相立候而も、名前等相知不申分は、頭々ゟ得与被相糺候上承届、其餘は都而指留可申候。將又江戸等詰人留守近き若火事之節見廻人幷代判人之儀、仕迯り人は指省可然候。此段諸頭ゟ寄々可被申談候事。

辛巳四月

四月。前田齊廣、與力番所より足輕番人の呼び方等に關して令す。

〔御親翰之寫〕

石川・河北等與力番所より足輕番人を呼候節呼方之儀に付懸合之趣令承知候。右者門番と呼候も、番人与呼候も、下番与呼候茂、夫々階級茂無之事に候所、與力共よりは下番与呼申儀を好み、足輕よりは下番与呼ばれ候事をきらひ申儀、畢竟双方にがさつ若輩之心底より、右等之わらべ敷懸合も致出來候儀、皆以心得風俗不覺故に候。たとへ右樣之儀下より申出し候とも、其頭たるもの道を以念頃に申諭し候はゞ、輕きものたりとも恥を知り申所へ自然に可至事に候。元來右等之がさつ若輩之懸合起り候も、人情下り辭讓之心なく、敬の本意も取失

ひ候より起り申事に候。いはゆる恕の道にて我心を以人をおしはかり候得者、己がきらふ事は人もきらふ物に候得者、與力共を外より見下し候得者、與力共甚きらひ可申事、其心を以足輕共を察し候得者、足輕之心もおしはかられ申事に候間、其所を以、與力共よりも足輕を叮嚀に取扱ひ候得者、おのづから足輕よりも與力を敬ひ候心は生じ申候道理に候。依之敬と辭讓との二つを以、頭たる者申諭し候はゞ、必人氣も宜押直り、自然与善道に志し候道理に候。然るを頭たる其方共、下より申儘を同樣に尤之樣に存じ、年寄共ゟ相達候儀、先以不行屆事に候。右に申候處之道理を以、其方共より下々ゟ念頃に申し諭し、下々より恥て申出候事を指扣へ申樣に相成候てこそ、其方共を申付置き候詮も有之事に候所、諸共に下々より申儘を尤と聞受け候儀は、其方共心底手薄に而恥辱之事に候。何れも不存哉、此所相考可申候。右之序ゆゑ、過ぎ去り候事ながら申聞置候。先年寺社奉行と使番と、殿樣の文字之儀に付掛合有之。且又三の丸馬廻番所与與力番所与、令承知、致承知と申儀に付而懸合有之。近年ヶ樣之若輩成る掛合折々有之、重き頭役等申付置候者共に者、別而不似合儀、甚なげかしき至りに候。重き面々に如此童部敷心得有之候而者、下ゟ之諭之方不行屆事故、下々の人氣恥を知り道に志し申す道理は無之筈之事に候。尤當時之其方共には、ヶ樣之若輩成心得者有之間敷候得共、近年之悪習俗にて、右之道理に心付き候面々も有之候而も、先多く之習俗に押さ

れ、ヶ様に成行き候事与存候間、今般改め而風俗之儀申出候時節に付、ヶ様之小事より相改め不申而者全行届不申故、以來心得之爲に申聞候間、向後者多分之習俗に從ひ不申、人々志次第其身之器量を相立可申候。公邊之御樣子を奉考候所、諸役人等ヶ様之若輩成る儀は聊も無之事に候。畢竟右樣之若輩成る心得は甚以恥敷事に候間、以來之所右に准じ候儀共者得与相心得、私之心なく公之心に相成候得者、ヶ様之若輩成る所に心は留り不申ものに候。右等之趣得与相心得可申候。乍併何れも支配下の人は多き事、殊に數年來之習俗にて、下々迄右樣之若輩がさつ之心底染込候事故、中々念頃に其方共申諭し候とも、容易には中心會得も有之間敷候間、何分寄々理解を述相諭し可申候。其上にも何分生質も正直に無之不致會得、彌增申張り候樣成る人品も有之候はゞ、名書を以頭々より可達聽候。此段も申聞置候。猶委細之儀は內膳等江申含置候條、人々此文意相分兼候儀も有之候はゞ、內膳等へ相尋可申候。

〔御親翰之寫〕

別紙之趣者、今般石川・河北門與力番所より足輕番人を呼立候唱方之儀に付、寺社奉行幷大組頭・持方頭より年寄共江相達候儀に付而、則寺社奉行・大組頭・持方頭近く呼び申諭し候書面に而、一躰江者不相當事に候得共、惣じて近年ヶ様之辯口無き若輩之懸合も折々有之。是等も近年之習俗に候故、一躰江被爲見置候得者、又何れも心得に相成候故爲見置候事に候。

將又右之序に付、幸兼々致歎息罷在候事共を左に申聞候。

一、當時之如く世風人情衰へ候根元を、乍不肖相考へ候處、治平久敷相續き候儀は、偏に東照宮御盛德之御餘光に而、諸侯を初下萬民迄安穩に罷在候儀、無此上難有き事に候。然所治平久敷相成候故、左樣之處を奉存付候事も薄く、安穩之世に生れ、世祿之身分生ながら安樂に有之事故、上より下迄、萬事さのみ心力を不盡とも飢寒之憂に不至事故、只心ならず安逸に流れ、夫より不思奢侈に至り、奢侈よりして難澁に至り、難澁より不義不筋之人欲も致出來、追々年を積み如此世風に衰候て、萬事に勵み薄きより、次第に人才も出不申、經濟に心を留め申す人も少く成行き候事、試に以國家之憂不過之、なげかはしき事に候。今般五ヶ年省略之儀幷風俗之儀申出候に付而も、上之難澁を察し驚き候人々者有之候得共、風俗之儀を致歎息候人々は薄き樣に存候。難澁之儀も尤國家之强弱に拘り候事には候得共、此儀は飢寒之處ゟ不至候得者、先其分に而、申さば二段之儀。此人情下だり衰候儀者、誠に憂是より大成るは無之事に候故、今般其所肝要主意に候間、此所何れも深く存付き、上〻之心配歎息を相察し、人々志を勵み可申事に候。

一、近頃諸頭・諸奉行・諸役人之躰を相考候處、何れも相應之面々不少候得共、中に者甚正理人情經濟に疎き人々も相見え、一圓理解之通じ兼候人々も有之、甚以歎息之至りに候。元來

頭役は不及申、諸奉行・諸役人は上ミ之耳目羽翼に候得者、夫々其器量を以其ケ所に指置き、日夜心力を盡し、少も私之心なく相勵み候てさへ容易に不行屆事は、和漢古今顯然たる事に候。然るを左樣之心付もなく、常に古今盛衰之處は如何樣之儀かとの穿鑿も無之、人道正理之事も相互に論合、心をみがき候志もなく、只偶然与今日安んじ罷在候人々多相成り、殊に以此方才德も無く、國老之面々も器量も薄く候故、百官之撰方も年功順に流れ候故、先達而一統申渡候通之事に候。先頃以來平士役懸り之人々も追々近く呼び、役向之儀等相尋候處、相應之者も尤相見え候得共、中には相尋候品々是非之答もいたし兼候人品も又不少。畢竟頭々撰方常々等閑故与存候。畢竟ケ樣之理非之答もいたし兼候樣成人々を撰出し候頭は、其身器量無之故に候。頭役に左樣之人品を指置候儀、是全く此方之不明、且は國老共之穿鑿全く薄き故与誠に汗面之至りに候。何れにも頭たるものは勿論、諸奉行・諸役人は人物器量揃ひ不申而者、甚心配之至りに候間、何分にも頭々平士役相撰み候節、年功且仕來りに不拘、人才之致出來候樣心力を盡し可申儀肝要之事に候。是迄之樣子相考候處、頭々も組之人々遠々敷樣子に而、得与人品も見屆候程之儀は無之与相察し候。以後は何とか組之人々は相招き、咄之序に教諭有之、及問答、其人々之氣質器量を得与見屆可申。且又俄に人才も出來不申ものに候間、組々子弟年若幼少之人々、追々右之主意を以用立候人々致出來候樣可心懸候。且

別而大小將組は人撰を以申付候組故、別而頭役等彼の組より多く申付候事に候處、兎角大小將より申付候人々は一風童部敷風俗有之。此儀に付而者先頃別段小將頭江申出置候儀も有之に付、此所令文略候。右に申候通り、組之人々念頃に致敎諭候とも、其頭共器量無之而者何之詮も無之事に候間、ヶ樣之處何れもいかゞ存候哉。何れも之中には志有之人々は、兼而致歎息罷在儀共可有之候。此序に人々心底に有之儀無泥可申聞候。ヶ樣に何れも近く呼寄候儀、人々申聞候所を以、此方之智も開け申す一助にも相成候事に候條、無言に而退き候而者其詮無之候間、人々器量次第可申聞候。將又右等之外にも可申聞候儀多端有之候得共、一時に者難申聞候間、時に臨み追々可申聞候。猶委細之儀は內膳等江申含置候間、彼等よりも承り理非之論可申述候。

〔御親翰之寫〕

何れも之內文才も有之、經濟に志有之面々は、別紙兩通之文意、試に婦人女子江之敎諭之如く文言成事共に而、却而致歎息候得共、中には甚疎き人々茂相見え候に付、如此相諭し申事に候。文才之志有之面々は、別紙兩通抔之儀は素より會得之事に而、敎諭にも足らざる事共に候。依之別紙兩通之外にも、當時之濁世を引直し候便にも相成候儀心付之趣も有之候はゞ、夫々志次第可申述候。

五月四日。前田齊廣の側室坂井氏を下宿せしむ。

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

五月四日勇姬樣御生母坂井伊兵衞女御中﨟るん、今般思召被爲在、金谷御廣式ゟ被遣候旨一端被仰出候得共、相望不申体に被聞召候に付、御暇被下、御表小將澤田一郎右衞門妻に被下候。御充行も唯今迄通被下置、早速引越可申旨被仰出、俄に下宿。餘程混雜有之由なり。

五月十二日。馬廻頭笠間源太左衞門等戲場娼館を廢して風俗を肅正せんことを請ふ。議遂に行はれず。

〔金龍公記史料〕

五月十二日。馬廻頭笠間以信・堀善勝・大地文寶連署建言。其略曰。閤下每出令以移風易俗返古淳朴之域爲今日急務。而近者設亂風敗俗之戲場置娼館、是所期與所行相爲矛盾也。臣等以爲不廢此二者不能興士氣敦風俗也。書入。公召山崎範僴。與三人相問難。親聽其議。既而使以信等條陳救貧民使曠夫得伸其情之術。以信乃上陳曰。臣等以爲夫使人無怨曠之懷之道。必先杜絶私窩娼館。正國中風俗振起士氣。然後求其方法。自應有使人達其慾之道。然閤下聽臣

笠間源太左衞門　堀孫左衞門　大地縫殿左衞門

等之言。近者所設戯場娼館欲急一切罷之。方今町奉行所施設已至十之七八。則假令下其令有不得奉者。故爲今之計。先禁爲盛大之擧。以足使貧僕賤隷之徒達其慾爲定限而可也。如臣等所見。則先使四民專力其業以儉素爲本知游惰奢侈之害。如閣下積年所期一變風俗而後使怨曠之徒遂情慾之政可施也。若夫貧民救助之法既先世所置之悲田院而足矣。書入。由是戯場娼館不果罷。

五月十四日。前田齊泰金澤野町筋に行歩を行ふ。

〔諸事覺書〕

五月十四日

一、今日九半時之御供揃に而、勝千代樣野町筋御行歩に御出、新町松任屋幸助方へ御立寄被遊候旨、御附頭より昨日及達候事。

五月十九日。遠田誠摩・堀孫左衛門等藩財政の收支に關する調査主任を命ぜらる。

〔横山氏日記〕

五月十九日

一、左之通表方に而申渡有之。

遠田誠摩
堀孫左衛門
大地縫殿左衛門
山崎頼母

今般御取箇御符合之御詮議就被仰付候、各儀諸向御入用方取しらべ御用主付被仰付候。笠間源太左衛門・一木逸角儀茂右御用兼帯被仰付候條、申談可被相勤候。追而御前ゟも可被爲召候事。

笠間源太左衛門
一木逸角

今般御取箇御符合之御詮議就被仰付候、各儀諸向御入用方取しらべ御用兼帯被仰付候。御算用場奉行主付被仰付候條、申談可被相勤候。追而御前ゟ茂可被爲召候。且又源太左衛門方宗門奉行は御免被成候事。

〔官私隨筆〕

五月廿一日。前田利命の十七回忌法會を寶圓寺に修す。

當月就御法事、鳴物等遠慮、且又人持・頭分拜禮之儀別紙兩通之趣一統相觸候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候。將又小松御城番之儀御申談、一人罷出候樣直に申遣候、以上。

五月六日　　　　　　　　　　　　横山求馬

奥村伊豫守樣

香隆院樣十七回御忌御法事、當月廿一日於寶圓寺就御執行、御射手・御異風稽古幷諸組弓・鐵炮稽古之儀、御法事前々日より御法事中相止可申事。

一、鷹野其外諸殺生、且又鳴物之儀、十九日より廿一日迄三日可有遠慮事。

一、普請作事之儀、十九日より廿一日迄指止可申事。

但、指急候普請等之儀は不及遠慮候。

右之通被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

五月六日　　　　　　　　　　　　横山求馬

〔諸事覺書〕

五月廿一日
一、今日香隆院様十七回御忌御法事一朝之御執行有之。年寄中・御家老中・若年寄・御用番主附之外は、各六半時より御寺へ相詰候事。
但、格別之御省略に付詰人一統半袴着用。各より例之通今朝以使者御香奠献上之事。
一、今日御參詣無之、御名代土佐守、勝千代様御名代甲斐守儀相勤、續而御銘々様御代香、右相濟、年寄中等拜禮、八時前各退出之事。

天正寺村等は越中國

五月廿七日。御扶持人十村等前田齊廣に謁し改作仕法に關する命を受く。

〔杉木氏御用方雜錄〕
是年文政四年辛巳五月十一日天正寺村十兵衛・沼保村次郎左衛門・山田村祐三郎出府之儀、改作所より申來、則同十八日迄に追々金城ゟ參着。外御郡にも同様出府人有之。何れも被仰渡を相待居候處、同廿六日田井村次郎吉等拾貳人、明廿七日五つ時御算用御奉行大地縫殿左衛門殿宅にて御用有之旨、改作所申談に付一統罷出候處、大地殿御同役山崎頼母殿・堀孫左衛門殿、改作御奉行に而は小堀八十太夫殿・千羽彦太夫殿立會に而、右次郎吉等拾貳人在役之人与無役之者別に兩度に呼出有之。十村役風俗・改作御法之儀に付被仰出之趣御書立、御算用場御用番大地殿讀聞、相濟候又今日御前ゟ被爲召候間、正九つ時不遲一統御算用場ゟ相揃可申、

着東はきそくと訓む

尤着東目立不申又不見苦樣可心得旨、小堀殿・千羽殿重而申談に付、餘りあしからぬ染或は縮之帷子に、小倉又は葛布之袴着用罷出候所、刻限良有之、小堀殿・千羽殿且改作方御用番山森雄次郎殿・寺尾喜左衞門殿誘引に而各登城。河北御門御番所等小堀殿指引有之、二之御丸御式臺之横新口与申より上階、柳之御間御廊下之内双方に溜居候處、八つ時頃小堀殿・千羽殿より、今日御居間奥御舞臺御白洲江御召出し之筈に候得共、雨天も難計、御舞臺江被召出候間、其心得に罷在候樣にと有之。時刻暫して小堀殿等四人又誘引に而、御次波之御間之奥御襖より御奥打過、御舞臺口鏡之御間續御廊下に溜り居候處、山森殿・寺尾殿は此處に居溜り、千羽殿先立に而、次郎吉等在役之七人御舞臺江被召出候。其節御橋掛口に而一寸默禮、立ちながら腰をかゞめ御舞臺際へ進、夫より膝折、御舞臺先に御前近く一行に平伏。正面は御居間之由に而、御簾之內に御前御着座。其前江御廊下紅毛氈之上左右に銀之御香爐、御緣側之左席は御用部屋關屋中務殿・伊東平左衞門殿、右席は御算用場御奉行大地殿・山崎殿・堀殿着座。改作御奉行小堀殿は御舞臺之內ワキ柱之方に横向、千羽殿はシテ柱之方に横向に而、各次郎吉等七人之後へ左右斜めに着座也。于時伊東殿御親翰讀聞有之。尤御仕法追々可被仰出、御內密之儀に候間嚴重に心得可申旨。大地殿よりは御用之趣出情に相勤候樣、且小堀殿よりは御請申上り。千羽殿よりは、御前近く被爲召御用被仰下候儀大切至極に候間、入情相

勤候様各申渡。相濟、末座より鏡之御間續御廊下江退去、御舞臺へ出候初之ごとし。次に大丸村與左衞門等無役之五人右同様。事終、次郎吉等一同柳之御間御廊下へ退息。尙於改作所御用有之旨千羽殿申談有之。各下城直に御算用場へ相揃、御居間迄被爲召難有段改作所迄御禮申述候。且又改作御奉行揃にて、十村役風俗・改作御法之儀に付尙更書立相渡、御仕法方追々千羽殿にて申談有之間、明日より三四人宛も代々罷出可申、尤御内密之儀に候間、此段心得候様申談。相濟、各退出候處、翌廿八日九つ時千羽殿江一統御用之旨重而申談に付、罷出候處、御仕法方内しらべ之儀申談有之。翌廿九日より千羽殿・有賀甚六郎殿之兩宅へ寄合、六月八日頃迄に内しらべ一先相濟。其後も時々寄合候而御仕法被仰渡方荒々相決、御窺事相濟候躰に而、同廿八日表向御手開御仕法追々被仰渡有之候事。

〔十村役風俗之儀に付御内密被仰出之御書立等〕

文政四辛巳五月廿七日五つ時、於大地縫殿左衞門殿御屋敷、堀孫左衞門殿・山崎頼母殿御立會、遠田誠摩殿御役引。小堀八十太夫殿頭並御郡方改作方兼帶・千羽彥太夫殿御出席。田井村次郎吉等十二人兩度御呼立、十村役風俗・改作之御法之儀に付被仰出之趣御書立、御用番大地殿御讀渡、御書立別に寫尙又今日其方共御前近被爲召候間、正九つ時御算用場江相揃可申、着束目立不申不見苦様可相心得旨被仰渡候。着束帷子・小くら袴下物なし。

右刻限八十太夫殿・彦太夫殿、改作所御用番山森雄次郎殿・寺尾喜左衛門殿登城御誘引。河北御門御番所八十太夫殿御指引、新口ゟ向、雄次郎殿・喜左衛門殿御付添、柳の御間御廊下双方に溜。八つ時彦太夫殿御出、今日御白砂ゟ可被召出之處、雨天故御居間奥御舞臺ゟ御呼出に候間、其御心得可有之被仰渡。時刻暫有八十太夫殿等御四人亦御誘引、(略指懷中物等御廊下溜に置。)御次波の御間奥御襖(此所開候得者足輕横目御番。)御奥深入、御舞臺口御廊下に溜。(御算用場御奉行始御一統無帶劍。)御橋懸り口御横目松尾治部殿着座。(是より奥都而御横目指引。)彦太夫殿御先、次郎吉等七人御舞臺ゟ罷出、御橋懸り口に而默禮、御舞臺半に着座。夫より御舞臺先迄進む。進退都而八十太夫殿・彦太夫殿御指圖。御舞臺正面御居間御簾の內御前出御被爲成、御緣側紅毛氈、(左右に御香爐。)左席御用部屋關屋中務殿・伊藤內膳殿着座、(人見吉左衛門殿御役引。)右席大地殿・堀殿・山崎殿着座。御舞臺次郎吉等七人一行列座、ツキ柱の方横向八十太夫殿、シテ柱の方横向彦太夫殿。君臣座定、內膳殿御眞簡御讀上、大地殿御用之趣被仰渡、八十太夫殿高聲に御居間近被爲召候儀難有奉存候段御請被仰上。彦太夫殿今般御居間近被爲召候儀難有奉存、大切至極相勤可申旨被仰渡、末座より退出。次に大丸村與右衛門等五人右同樣。柳の御間御廊下に休息、御算用場ゟ退候樣被仰渡、各下城。御改作所御一統御揃、次郎吉等十二人御呼出、尚更御書立御渡、追々御用有之候間、千羽殿御屋敷ゟ出可申、都而御隱密に候間、急度相心得候樣被仰渡。(御書立別に寫。)

巳　五　月

［十村役風俗之儀に付御内密被仰出之御書立等］

十村役風俗之儀、前々數度御穿鑿茂有之候得共、立直不申に付、舊染御改之ため、去々年數人御咎被仰付、當時一統恐入罷在躰に候得共、不年以前ゟ立戻り可申に付、根元之所深く御僉議有之候處、畢竟改作御草創より年久鋪儀故、御趣意に戻り種々煩敷趣茂有之に付、無據風俗茂不宜處ゟ押移、自然与不正之趣茂出來候儀与被思召候。十村役之者右之通に而者、第一百姓之ため惡鋪、隨而改作之御法往々可及違亂に付、今般右樣之煩敷儀且無用之費を省、諸事易簡に取流、農方役人共農事勢子方・御收納差引方等萬事無泥事に被爲遊、百姓共安堵いたし農業相勵、改作之御法永久相遂候樣被仰付度に付、思召之趣極御内密に而取調理方之儀實意を盡し、聊茂無私相心得可申候。自然御趣意心得違いたし候歟、又は人々自由を構、異存之者於有之に者、嚴重御咎可有之候間、謹而御趣意通得与會得可奉畏候。

右之通可申渡旨被仰出候事。

辛　巳　五　月

［十村役風俗之儀に付御内密被仰出之御書立等］

十村役之儀者、第一御收納取立申役人故、手緩き治方に而者行屆不申に付、強而詮議を加へ

申故、下々何廉不勝手なる扱方与而已相心得、勿論不正之取扱有之候得者、彌以不心服之筋申立候儀者當然之事に候。然處御收納にも不拘人々迄茂、一統押並而十村を惡鋪申成候。是偏に身分輕くして役重き故之事に候。先以十村之儀者、専農取治之ため被立置候役向に付、御收納方而已之勤に而、外御用に爲携候而者、農事差引難行屆、暨其昔はむざと外御用相勤候得者、御咎茂可被仰付程之儀之樣子に而、改作方一途に爲相勤來る所、其後外御用多、十村他役所江呼出、御用筋申渡候所江至候に付、無斷他役所江罷出候儀は不相成趣折々申渡置、改作方幷人支配兩役所之外者、御郡方へ出役人之御用筋等茂手代等を以相辨來候處、次第に外御用繁多相成、手代共等差出候儀も時に寄彼是及遲々、手茂廻り兼候儀間々有之躰。於爰他手合より之見察に而者、十村役筋に誇り、身分進退に不預、彼向江者甚麁略に取扱、多分心得方等閑之樣に誹謗を請申儀与相聞。將又農事穿鑿方は、時勢人勢相替、奉行示方茂不行屆、隨而十村茂表向而已を相飾、田畑勢子方は自然与等閑に相成、別近來之模樣勤向柔弱至極に相成、指懸候儀迄取計、諸向より惡鋪申立候事を相厭、無用之心配追從を以何歟煩敷費用も有之躰に候。且又十村相勤候得者、代官口米暨鍬手米、其外配下より野菜類に而も貰請、人夫等も遣易、都而辨利之形。加之御收納詰暨村々上納等之節、百姓調達銀口入、或は與書等を以銀米多取扱、多端至極之業に付、其所に者潤澤も有之樣に他より相察、奸利之者共を

悉く惡敷申立、奸計を相働、改方等ゟ樣々申込いたし、元より一々實事と者難聞請品に而も、前段之通十村取扱之筋多端至極之事故、其內に者疑鋪相聞候儀も出來、假令其事に當り候而者急度申譯相立候儀に而も、畢竟身分輕き者故、第一穩便を相好候弊より、萬端泥深相成、種々輕薄之譯煩敷儀不少躰。右銀米才覺等に付而は、手代等も人多に召仕、自ら人々暮方も僭上に相成、彼是雜費多、夫故十村役之者多半勝手向不如意に相成、中には不正之所業を成候者も出來、正路之者も其爲に疑を蒙、彼是以相混甚歎ヶ敷儀、誠役業茂遂兼候程之儀に候。此煩は御國に茂不限、他國にも有之に付、既に公邊にも大庄屋差止め、其外私領に於ても其類多く候躰。皆以其人之科に而も、根元不容易役筋より、時勢に依而如此之場に至、身分身分に於而も後來不全勤向、其內に者種々難事出來、品により下々入組取扱に付而は、役筋十村申譯難相立場に至候儀茂可有之哉に候。十村役手前如此に而は、第一百姓共爲惡敷、畢竟改作御法及違亂可申儀。仍而何分御收納取治方にも不指障、何茂身分々々之儀過無之、末々迄致安堵、差引之役人も無用之心配を省、諸事無泥易簡に相辨、改作之御法永久相遂候仕法可有之事に候。此儀に付、今般拙者共ゟ御內々取調理被仰出之趣有之儀、其方共ゟ茂被仰渡有之通に候。依而右之趣意能々可致會得、追々遂內詮議候趣共可有之候條、心付之品等實意を以無泥可申出候事。

五月。江戸に於いて諸向役人の町人より贈物を受くべからざること等を令す。

〔典制彙纂〕

御横目江

御當地御用聞町人共、是迄都而其役先之人々、幷足輕・小者小屋々々へ罷越、別而御算用者小屋々々へ罷越候躰被聞召候。右に付而者不正之儀も種々有之候間、以來用事之外猥に不罷越樣、享和三年申渡置候所、其後相弛、且惣而役先之人々へ、折々は贈物等もいたし候樣子相聞え候。向後堅可爲無用段、町人共江申渡候。役先町人より音物致受納候儀者、先以有之間敷事に候。御家中之人々急度可有其心得候事。

一、諸向御道具早々新出來・御修覆之節、職人等其先々へ直に呼寄候儀無之樣、文政四年諸役人江申渡候所、近年違失有之向々も有之体に候。以來心得違無之樣可相心得候。若御好等之品、向々より職人江直に不申談而者差支之筋有之節者、其段御省略方頭江相達、指圖を請可申候。

一、御修覆物等買手方へ指出候節、是迄御省略方裏印等之指紙而相添指出候得共、以來右指

紙面相止、御道具等員數紙面に調相添、先々より直に會所へ指出、出來之上も買手方より案內次第請取人指出可申候。御買上物等御用に付而も、町人共其先々江罷越不申樣、會所奉行江も申渡候。

右之趣一統可被相觸候事。

五　月

六月三日。前田齊泰學校に臨む。

〔橫山氏日記〕

六月三日

一、勝千代樣九半時過學校江御出、七半時御戾り之事。

一、於兩學校稽古御覽順左之通之事。

一、御門より直に射場江御出、吉田才一郎方的御覽被遊。相濟、御馬場通學校御玄關より御上り被遊、講釋御聽聞。夫より武學校江被爲入、高木庄兵衞方鎗術、高柳淸馬方鎌玉術、佐野茂兵衞等乘馬御覽被遊候事。

六月九日。老臣橫山求馬等に命じ、寬文以降の令にして後世の法と爲す

べきものを輯集せしむ。

六月九日。命老臣横山隆章・奥村直從・村井長道。輯錄寛文以後改令可爲後世法。

〔金龍公記史料〕

横山隆章は求馬、奥村直從は從宜の誤、内膳、村井長道は靱負

六月十四日。前田左衞門曩に藩侯名代として瑞龍寺參詣を命ぜられ、尋いで之を辭したるを以て減知逼塞を命ぜらる。

〔横山氏日記〕

文政七年十二月十六日の條參照

六月十四日

土佐守殿ゟ

前田左衞門

右左衞門儀、前月廿日高岡瑞龍寺ゟ之御名代相勤候に付、御香茂請取置候處、勝手難澁至極之旨に而、地廻會所銀借用願出候得共、前々例茂無之儀故不承屆候處、用意方一圓不致出來旨に而、指掛り及御斷候。右御用は日數相掛り候儀に而も無之、從者減少等も不苦儀、其上前田姓に付重き御名代之儀に候得ば、幾重にも致勘辨、先相勤可申處、右族は役儀被仰付置候詮茂無之、不覺悟千萬之儀に候。其外彼是不應思召儀ども有之に付、役儀被指除、本高千

五百石之内五百石御減少、知行高千石に被仰付、仙石内匠等並に被仰付、逼塞被仰付候旨被仰出候條、此段可有御申渡候事。

六　月

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

五月二十日前田左衛門直與ゟ高岡瑞龍寺御名代被仰付、御香木も請取候上勝手難澁之旨申立及御斷。然處前田姓にて重き御名代、幾重にも可相勤處、役儀被仰付置候詮も無之、其外不應思召儀も有之に付、役儀被指除本高千五百石之內五百石減知、逼塞被仰付、末席ゟ御指加有之なり。

六月十七日。御算用場奉行の產物方御用を免じ年寄村井又兵衛をして直轄せしむ。

村井又兵衛
長世

〔橫山氏日記〕

六月十七日

一、左之通今日產物方又兵衛殿申渡有之候事。

御算用場奉行ゟ

產物方御用各兼帶被仰付置候得共、御免被成、以來拙者直に取捌候樣被仰出候事。

六月十七日

進士源兵衞・竹田彥六郞へ

右產物方御用歸役被仰付、定檢地奉行は御免被成候條、可被申渡候事。

山本彥右衞門

一、右之趣に付御算用場幷二ノ御丸產物方役所被指止、越後屋敷之內產物方役所相建、山本彥右衞門等罷出候樣申渡有之由之事。

〔國事雜抄〕

產物方御用、是迄御算用場奉行兼帶相勤候處、今般右御用御免被成候に付、以來拙者直に取捌候條、其心得を以願書等拙者名前を以被指出、且又右しらべ方、以後於越後屋敷爲取捌候之條、爲承知申達候、以上。

巳六月十九日　村井又兵衞

遠所奉行連名殿

六月十九日。定番御步の人數增加したるを以て今後の召仕方に關して議す。

〔諸事覺書〕

六月十九日

一、左之覺書今日御用番助甲斐守主附藏人江演述。

定番御歩次第人多に相成候付、被召仕方之儀被仰出之趣有之、僉議之趣奉伺候處左之通被仰出。

一、六組御歩御人不足之節、定番御歩之內恰好相應之者六組御歩に可被仰付候。右者當人之望不望に不拘、相應之者は御上より可被仰付候事。

付札

本文之趣に被仰付候時は、六組御歩は御定之寸幷恰好宜者、水練も相嗜不申而相成不申、寸不足之者は軍螺も相嗜候者是迄被召抱候。依而定番御歩より六組に被仰付候時は、前段之藝等之處御檢無御座、寸不足候而も被仰付候儀に相成候はゞ指支申間敷候。

一、享保十六年御目見不仕者共之列をも御僉議之節、御鷹師・御歩・御算用者之儀は同列之旨被仰出有之候。依之御算用者は人不足之節も、定番御歩之內書算相心得候者御算用場御用被仰付、御算用者同事爲相勤候筈に候。自然組劣之御用被仰付候之樣に相心得候而は、心服宜ヶ間敷候間、先年同列被仰付置候趣を以申渡、御算用場奉行へも可申渡、此段は爲御承知申達候事。

一、定番御歩より六組御歩被仰付候得者、御充行も御引足被下候故、相望申筈に候得共、六組御歩之者は病死跡せがれ等御歩御人不足に而御撰之節、恰好等により被召抱候事故、數年無祿に罷在候者も有之躰。定番御歩は御人足与申事も無之故に候哉、爲名跡被召抱、家藝等申立も不及、數年無祿に罷在候事も無之故、世祿同様に相心得、外を相望不申哉も相聞候。ヶ様之處も以後被仰付方僉議候事。

付札

本文以後被仰付方之儀僉議仕候處、定番御歩之内相應之者六組御歩に被指加、其者病死仕候はゞ跡はやはり定番御歩に被召抱、六組之方へ繰々に被指加候はゞ可然哉候事。

一、是迄足輕小頭等格別勤功之者御取立之節、先は定番御歩被仰付候得共、是以後格別之勤功に而御取立之者有之候はゞ、御歩並之者之次列に可被仰付候。定番御歩之跡被召抱候者も、御歩並之次列に被仰付候はゞ可宜哉之事。

付札

本文足輕小頭等勤功之者御取立候者、以後御歩並之者次列に被仰付候儀御僉議次第に候。定番御歩之跡被召抱候者も御歩並之次列に被仰付候はゞ、定番御歩と申名目無之様に相成可申候。且定番御歩を御歩並之次列に相成候はゞ、只今迄より組列も下り、不心服之處へ

至可申候。猶更御僉議之事。

右之趣各へも可申談旨被仰出候條、御僉議之品有之候分は猶更可有御申聞候事。

巳六月

六月廿四日。諸士の收納米賣拂方に就いて注意を與ふ。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通、定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

六月廿四日　　前田土佐守

奧村伊豫守殿

定番頭ゟ

別紙寫之通被得其意、組・支配之人々へ被申渡、組等之内裁許有之面々は、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之通一統可被申談候事。

六月

近年收納拂米切手に算用違之人々有之、收納高に過候拂米仕置、渡り方指支、或は銀子調達之方へ右切手質入に相成居申分、數年譯立不申、先々數度及催促候而も埓明不申時は、私共

へ及斷候付、爲賣拂買留人より藏宿へ請取に向ひ候而も、在米無之由に而相渡不申故、私共より毎度及懸合候而も、爾々譯立兼申分多く御座候付、近頃は銀主共相泥み、憚成切手に而も容易に調達方出來不申、甚融通之支に相成申候。元來人々收納高は失念も有間敷品に付、稀に不斗算違仕儀有之候共、連年算違なと申儀は有間敷筈と奉存候間、以後拂米之節入念相しらべ、算違無之樣仕度奉存候。

一、拂米藏縮有之分は、解き之譯立置可申處、近年御召米切手を初、春中にも譯立不申分有之、出船升廻に指支、其外用米幷旅人買米船積にも差支、甚及難儀候付、買人相泥み、一統拂米之障に相成申候間、以後其心得有之樣仕度奉存候。

一、收納米拂申節、代銀全く請取不申以前、中買任申分切手相渡遣、右中買出奔等仕候節、私共へ及斷候人々御座候得共、皆代銀請取不申而は、切手相渡申間敷筈に付、雖及貴着段申達候而も、何廉申聞候人々も有之、米方格合にも障申候間、以後皆代銀受取不申以前、切手相渡不申樣仕度奉存候。

一、米中買等へ銀子調達候引當に相渡置候切手、或は中買等之手廻し貸渡置候切手、先々に而賣拂出奔等仕候節、引當切手又は貸渡置候切手と申立、爾々譯立不申人々も御座候。都而拂切手指出申節、故障有之候得者相辨申覺悟無之而は差出申間敷處、引當切手抔と別物に心

得、通用不仕切手に候へば、調達之引當にも相成不申、買人之泥みに相成、畢竟融通之妨にも相成申候間、以後其心得有之候樣仕度奉存候。

一、遠所米飯米不足之方へ引米いたし候節は、切手藏宿へ指遣引寄申儀に御座候處、中には引米切手に而批屋等へ賣拂申人々も有之。若故障有之候而も、中買奧書も無之品々に而、不縮に御座候間、以來引米切手賣拂不申樣仕度奉存候。

一、米中買共取次切手に、在米高之無構、數通不致奧書樣嚴重可申渡旨、去寅の年被仰渡一統申渡置。元來取次不致切手に奧書は不仕筈に候へども、給人より切手相渡、集所場印請可指越、其儀難成候はゞ銀子貸呉候樣にと申懸、調達仕兼候節は無是非致奧書、場印請遣候族も有之躰に而、御締方立兼申候間、加樣之儀無之樣仕度奉存候。尤中買共へも、猶更改而此度嚴重申渡置候。

右之趣ども前々より之儀に而、今更相改め候仕法には無御座候得共、米方不案內故、人々心得違も出來申躰に御座候間、以後右之通心得違無之樣仕度、追付牛納之時節に相成候間、一統へ被仰渡置候樣仕度奉存候、以上。

巳　六　月

山崎頼母

高畠木工

前田土佐守樣

六月廿四日。越中高岡の城下大に燒亡す。

〔又新齋日錄〕

一、文政四年六月二十四日晝九つ時頃、檜物屋町四十物師立野屋善四郞・安川屋太兵衞兩人之間より燃出候處、其節西風烈敷、往來笠も難用程吹立候而、煙眼江入目口茂不明。火勢盛にして難消留、東江指而燒行候處、其火の粉四方江飛散候哉、河原町邊燒候砌には、源平・板屋町・小馬出町・坂の下も同時に燒行、御城江も火移、御長屋燃上候得共、寄人多、大勢打寄消留候處、何時之間に歟早其上御門に移り、御門一時に燒失、其火御長屋移候砌に者、中川村・野村江も火移、燒失家も有之砌又間之風に吹替り、火先西江なびき、夫より御城御長屋不殘燒、御米藏・御塩藏にも火移、夫より本町通燒通、白銀町邊迄燒拔候節、又西風に移、夫より風に隨而高岡中燒通、夜中五つ時頃に至、風靜り候に隨ひ火勢も所々同時に鎭り候由也。都而四時半計之間に、横七・八町計に長十八町程之家屋一塵の灰と成候事、此日いか成凶日に而如此天災有之哉可憐事。如此之急火に付而は、諸道具等勿論、土藏迄も燒失も又夥敷事也。

一、右出火に而火勢强、急に火鎭り候体無之旨、同日八半時頃早飛脚を以、町役人より町奉

行半田左門迄申越候。飛脚夜中五つ半時頃左門宅江告來候付、卽刻乘馬に飼料させ、自分火事裝束に而、同役大橋作之進江申遣。如此之譯に而只今致出馬候。右告來趣、幷兵糧之手當先千石之事、御用番幷御算用場奉行中江も可相達、且自分頭江も遠方之儀申送。其身一人竹橋迄馬上に駈付、夫より馬捕与自分兩人に而坂之上口を牽、坂を越、息合之藥赤龍丹を用水を爲吞、馬杓も自分之腰にさし、夫より馬上に而明方高岡迄乘付候處、馬殊之外疲候付、橋田町へ捨言葉を以、馬之儀何茂宜敷賴入候由申入置、自分一人に而東西江馳廻り候へども、役人一人も不見受。彼是巡見之所、其內役人を見付候而樣子承り候處、御貸家も燒、町會所も燒候樣子に付、妻子之片付承り候間も無之內、御城之儀無心許罷越候處、其砌は御長屋燒殘り之火御林松江移候付、致指圖三本爲伐倒候。夫より燒跡火氣も鎮り、燒死之骸を見申處、痛々敷事悲之淚難忍、不斗道路に座し、支配之者非業之死を致歎息。其後心を鎮罷立致見分候處、家を燒道路に叫、親は子を尋子は親を尋、一類互に顏を見合共に悲。且兵糧に事を欠候体を見受、先兵糧手當千石之事を申渡候付、少は人心落付候体を見受、夫より役所を一向宗超願寺に立候而、日々御用取捌候由、左門申聞候事。

一、御米二十五石餘、御塩一萬二千俵斗燒立相成候事。

一、火勢盛之節燒死人多有之儀者、初之火勢强、飛散候火之粉風下所々江燃付候節、手早逃

延候者は命助り逃去候へ共、後れ候者は前後之煙に逃道を失ひ、無是非死亡に到り候由也。
死人多き內に、七十有餘之女火を遁れ度、苦之餘りに木に登り候處、其木燃折燒死するも有。
或は池に入死するもあり。子供を兩手に抱へ死するも有。半田跡見分之節、燒死之死骸を娘
体之者懷付泣悲む体を見て、其身も其所に座し落淚之由承申候事。

一、三十一町　　町　數
一、二軒　　火　元
一、二千二百六十九軒　　類燒家
　內十八ヶ寺　寺庵　八十六　土藏。
一、六軒　　潰　家
一、三十一人　　燒死人
外男二人　　無宿者
　女一人　　右同斷
又男一人　　袋町正覺寺
〆三十五人
右火事之內、片原町廣就寺与申寺庵一ヶ所燒殘り候由之事。

右村井又兵衛殿焼跡御見分等之爲御越被成、執筆木村彌十郎も罷越、彌十郎半田より承候趣調置候を、借用記之。

〔横山氏日記〕

六月廿五日　天氣吉、少々曇、風立

一、昨廿四日晝九半時頃高岡町出火、今曉六時頃火鎭り候由。焼失家等大概左之通之由に候事。

一、二千二百七十軒	類焼家
一、四十八軒	潰　家
一、六軒	損　家
一、八十五	土　藏
一、二百九十八	納　屋
一、三十四ヶ寺	寺
一、四ヶ所	町　藏
一、二筋	御　藏
一、一筋	御塩藏

一、二軒　　　　　　町奉行御貸小屋
一、町會所　燒失
一、十八軒　　　　　淚分村三ヶ村
一、三十四人許　　　燒死人

六月廿八日。御郡奉行をして改作奉行を兼帶せしめ、十村の百姓を支配することを止む。

本年六月の條參照

〔横山氏日記〕
六月廿八日
一、今般御郡方御仕法御改被仰付、十村裁許被指除、御郡奉行直支配被仰付候段等、今日表方に而、於瀧之間、年寄中・御家老中列座、御郡奉行等江夫々申渡有之候事。

〔官私隨筆〕
今般御郡方御仕法御改被仰付候付、十村裁許被指除、御郡奉行直支配被仰付候。依之諸向より懸合候儀、都而御郡奉行へ可申達候。御郡において出役所相建、主付奉行致出役御用取捌、且御郡根役所之儀は、是迄之通御算用場内に相建、三州御郡支配方・改作方諸事御用向、御郡奉行一統打込相勤候條、諸向懸合之内是迄と致相違候品は、其先々より右根役所示合、御用

不指支様相辨可申候。此度御仕法手初之儀に付、諸事致習熟候迄、不辨之筋多可有之候へども、諸手合共仕來に不拘、全く御仕法通り相整候儀專要に相心得可申候事。

一、右御仕法就被仰付候、是迄之御郡奉行・改作奉行、都而御郡奉行に被仰付、改作方兼帯被仰付候。三州御郡支配方幷御收納方、右奉行相勤候へども、追々御仕法相整候迄は、前々兩役に預り候先是迄之振を以、先々可及懸合候事。

右之通可被申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配へも相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

六月二十八日　前田土佐守

小堀八十太夫
千羽彦太夫
廣瀬欣左衞門
有賀甚六郎

〔諸事要用雜記〕

六月廿八日

溝口舍人

金谷佐太夫

改作御法微妙院様御草創以來、百數十年を經、時勢も移替、古今之たがひ有之に付、此度御修補被仰付、御領國中百姓支配并御收納取納方之儀、十村役取差止、御郡奉行・改作奉行打込、百姓直支配被仰付候。依而是以後役名、御郡奉行改作方兼帯ニ御改、各儀は棟取被仰付候條、御算用場において根役所相勤、諸事可被申談候。淺加伊織等は一郡兩人充繰々主付、石川・河北兩御郡之外、一郡一ヶ所充出役所相建、一人充交代相詰、尤詰番之外は根役所に罷出可申候。且又百姓分代官之儀も引揚、各取捌可被仰付候。其外諸事、先達而御内々御僉議被仰付候通被相心得、猶更御算用場奉行被示談、御趣意通至相整候樣、精誠可被心懸候事。

辛巳六月

〔御改作御修補被仰付一巻〕

六月廿八日

左之御定書瀧之間において年寄中・御家老中列座、御郡奉行へ月番被渡之。

一、御郡奉行・改作奉行兩役打込、今般百姓直支配就被仰付候、役名は夫々相改候得共、本文御定之御趣意彌相違有間敷候。

一、今般被仰付候御仕法暨以來之儀、都而御任被成候條、役先諸役人末々迄、對棟取等實意を以存寄申達候儀者勿論に候。他意を以無謂異存有之指障候族は、速に可相達御聽候。

一、御收納方之儀は勿論、百姓跡式幷金銀差引方等、都而人支配にあづかり候百姓申分出入之儀、外手筋より一切爲致手指申間敷候。

一、今般御仕法に付、諸郡とも出役所之儀は、是迄十村支配方を引□取捌被仰付候御趣意に付、出役所請奉行之儀、棟取役たり共都而一存を以取捌申間敷候。就中御收納方之儀、細事たり共御物成に響候品々は、御算用場於根役所示談之上相決可申候。百姓風俗之儀、田畠勢子方專要相心得可申事。

右被仰出候趣相違有間敷者也。

辛巳六月

前田土佐守
前田權佐
前田內記
前田修理
前田中務
前田織江

横山藏人
今枝民部
村井靱負
奥村內膳
横山求馬
村井又兵衞
前田伊勢守
長甲斐守　各判

御郡奉行中

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

六月二十八日御郡所御仕法御改正、加越能共所々出役所被仰付、御郡奉行數十人被仰付、二ヶ月廻り交代被仰付。唯今迄は加州に兩人、能州に兩人、新川は岩瀨に兩人、礪波・射水は小杉に兩人、何茂家引越、以上御郡奉行八人之定役なり。此頃追々被仰付、都合三十人計被仰付なり。

六月廿九日。馬市に牽出す駒の飼料代給與の法を改む。

〔留帳抜書〕

馬市ゟ牽出候駒之内、博労共下買有之分は、賣残候共於市場商有之候趣に手を打引渡可申定之所、當年能・越二歳駒多く賣残候に付、御馬奉行手合に而吟調理有之候處、多分下買も有之躰に候得共、博労共之内心得方悪敷者も有之候哉、商方不進に相聞え候由。右之通成行候而は、往々御仕法之障りに相成、不埒之趣に候。依而遂詮議、實に下買有之分は飼料代相渡申間敷筈に候得共、詮議之趣有之、今度は態と不及其儀、飼料代も全く可相渡候。併當年二歳駒賣殘候分都合四十九疋有之、市場運上に引合候而は飼料代も過分之御渡方に相成、以後右之趣に而は不埒之族も可致出來儀に付、來年より仕法相改、飼料代之儀は相渡申間敷候。乍去駒主自身牽登り、實に下買も無之、無據迷惑に相聞え候分は、其時宜により遂詮議申渡筋も可有之候之條、兼而此段相心得置可申候事。

右之趣得其意夫々可申渡候、以上。

巳六月廿九日

水越縫殿太郎

有賀甚六郎

能州四郡十村中

六月。従來の御扶持人十村及び十村を惣年寄及び年寄並と改稱し、その

組を有するものは當分舊の如く事務を執らしむ。

〔内密僉議留〕

口達之覺

今般御郡方御仕法に付、是迄之御扶持人・十村等、惣年寄役等に被仰付候得共、組持之人々者、當分是迄之振を以御用相勤可申候事。

六月

惣年寄役等は惣年寄及び年寄並の意

七月朔日。惣年寄・年寄並の待遇を從前の御扶持人十村・十村よりも稍優等ならしむ。

〔内密僉議留〕

七月朔日

一、左之通御用番甲斐守殿より、小堀八十太夫御渡被成候事。

今般被仰付候御郡惣年寄幷年寄並之者之儀、是迄御郡奉行・改作奉行より十村共江會釋与は少し品能樣にいたし、程能可取扱旨御噂に候。依之與力・御歩等江は、下足いたし候にも及間敷候條、以來之儀其心得有之、就而者・猶更諸事無禮緩怠之儀無之樣、惣年寄等江嚴重可

被中渡候事。

七月二日。惣年寄に勤役中苗字を用ふるを得しむ。

〔内密僉議留〕

今般御郡方御仕法に付、是迄十村役の内より惣年寄役並年寄並被仰付、惣年寄役之分者、以後役中苗字相名乘候間、此段御算用場内諸役所へ被仰談成候様仕度候、以上。

七月二日　廣瀨欣左衛門

有賀甚六郎

御算用場

七月三日。前田利常夫人天德院の一百回忌法會を天德院に執行す。

〔横山氏日記〕

七月三日

一、今日於天德院、天德院様二百回御忌御法事御執行に付、御用番助務負、御家老方主付内記、若老市三郎之外、何茂御寺詰に罷越候事。

〔諸事覺書〕

七月三日

一、今日天德院樣二百回御忌御法事御執行に付、年寄中御用番幷御家老方等主附之外、六時頃より天德院に相詰。

一、九時過御法事相濟、中將樣御名代之御燒香求馬、勝千代樣御名代之御燒香甲斐守相勤。畢而直姬樣初方々樣・貞琳院樣御代拜、御廣式頭代々勤之。御香奠御濟、御代香は無之。夫々相濟、年寄中等拜禮有之事。

七月八日。一ノ丸殿內に御符合役所を設け藩財政の收支均衡を議せしむることを告ぐ。

〔官私隨筆〕

別紙之通諸役人へ申渡候付、爲御承知進之候、以上。

七月八日　　　　　村井又兵衛

奧村伊豫守殿

御勝手向御難澁に而、江戶・大坂等御借財莫大至極之儀は、去年八月御用番より一統に申談、何も承知之通に候。根元御取簡ゟ定式御入用御符合無之故、如此被爲至御難澁に付、御符合之御僉議可被仰付候間、諸向共御仕法立替候而成共、何分御符合之筋相立候樣可遂詮議旨被仰出候。依而於虎御間御符合方役所相立、寄日に御算用場奉行幷笠間源太左衞門・一木逸角

致出座候間、諸奉行・諸役人等右役所へ罷出委曲承、其役向暨役所々々等之儀、心付候趣申合、御地盤出入御符合相整候様、何も精誠を盡し可申出候。假令未熟之儀に而も、存付候趣無泥申出可遂熟談候。拙者儀も折々致出席可承候事。

右之趣格別御趣意被仰出候付申談候條、可被得其意候事。

辛巳七月

七月八日。鞍を製するに適當なる堅木を有するものに屆出を命ず。

〔御郡方御仕法一件〕

桑　柊　つげ　槐　樫　櫻　いつ木　はなの木　いた木　やどめ　ゑんぢう　はん木　木わた　楓

御領國中町・在に有之候堅木、幷所持之木之内に而も右堅木之類之内曲木有之候はゞ、鞍木御用に相立申度候間、自分勝手に伐取不申、御鞍方役人見分申度候間、御厩ゟ其手前々々より案内におよび候様、御算用場幷町御奉行中被仰渡御座候様仕度奉存候、以上。

四月二十一日　神尾昌左衛門

丹羽八郎左衛門

伊藤平左衛門様

關屋中務樣
人見吉左衞門樣
右寫之趣御奉行より御次江相達、伊藤平左衞門等より當場江指出候に付、相越之候條、夫々可被申渡候、以上。
七月八日　御算用場
御郡奉行中

七月十一日。犀川・淺野川の川除工事を荒廢せしむるなかるべきを告ぐ。

〔官私隨筆〕
七月十一日
別紙寫之通定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。
七月十一日　長甲斐守
奧村伊豫守樣

定番頭江
犀川・淺野川々除御普請有之場所へ、殺生人幷水游人等罷越、竹籠等踏あらし、不時成損所出來に付、前々より一統申渡候へ共、今以猥之儀有之躰に候。近年川除御普請手厚に被仰付

置候處、其詮無之に付、以來盜賊改方廻之者へ見咎方兼帶申渡、若身柄之人々たり共、時宜に寄名前等承糺、輕き者は當座に召捕候樣可申渡旨、宮崎信次郎申渡候條、向後心得違無之樣急度相心得可申候。

右之通可被得其意候事。尤家來末々迄不相洩樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

七　月

七月十三日。金澤及び石川・河北二郡内に於いて金澤製以外の蠟燭を賣捌くべからざることを告ぐ。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

七月十三日　　　長　甲　斐　守

奥村伊豫守殿

定番頭ゟ

當町蠟燭座に而出來之蠟燭、御城下幷石川・河北兩御郡へ賣捌申極に而、往古より過分運上銀指上來。依而他國遠所蠟燭は入不申筈に付、町方へは前々町奉行より申渡有之候へども、

一統へ申渡無之故、侍中寺庵へは勝手に遠所蠟燭取寄申躰に而、當町・在蠟燭賣捌薄く不引合故、自ら蠟燭出來不宜所へ至り、彌增遠所蠟燭入込申樣子に付、近年出來方入念に申渡置、猶更一兩年蠟直段下直相成申候故、今般右奉行手前重々遂僉議、直段引下げ爲賣出候間、以來遠所等より蠟燭堅く取寄不申樣、一統申渡有之樣致度旨、右奉行申聞候條、被得其意、組・支配之人々へ――

右之趣一統可被申談候事。

七　月

前書と日附を異にす

七月十八日。越中高岡火災後の人氣鎭靜を謀る爲年寄村井又兵衛を派す。

〔諸事覺書〕

七月十五日

一、今度高岡表町燒失に付、爲巡見又兵衛罷越候樣被仰出候段、同人演述。

七月十八日

一、又兵衛儀今曉高岡發足。

〔横山氏日記〕

七月十九日

一、今度高岡火災後未人氣茂落付不申躰に付、年寄中之中可被遣思召に候。産物方成立之儀茂有之に付、旁乍大儀又兵衛儀罷越、萬事宜取計旨、當十六日伊藤平右衛門・關屋中務を以被仰出候由に候。依之又兵衛儀今曉發足被罷越候事。

文政二年閏四月四日の條參照

七月廿二日。御郡方に出役する者の止宿に關する件を告ぐ。

〔官私隨筆〕

別紙之通一統相觸候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

七月廿二日

就御用御郡方へ出役之人々、百姓方止宿之分、道程一里内外に十村罷在候ヶ所は、右十村方に可致止宿旨等、去々年一統申渡、則其趣に相成來候へども、今度御仕法に而十村被指止候付、以來止宿方之儀先年之通心得可申候。尤止宿之節所方雜費相懸り不申樣、去々年一統へ申渡置候通可相心得候。

右之通被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月廿二日　　長　甲斐守

太仲に作るものは非なるべし

七月廿六日。越中城端の西村太冲天文學に通ずるを以て御醫師格に召出さる。

〔横山氏日記〕

七月廿六日

一、左之通今日表方に而申渡有之候事。

一、十五人扶持　西村太冲

太冲儀、天文學等宜出に付、御醫者格に被召出、如斯御扶持被下之、青山將監等支配被仰付。

〔諸事留牒〕

一、城端町醫者西村太仲儀、天文學宜に付、十五人扶持被召出、御醫者格被仰付、寺社奉行支配被仰付候事。

七月廿八日。幕府より綿羊を拜領す。

〔金龍公記史料〕

七月廿八日幕府允請賜綿羊牝牡各二。以欲試製毛織物也。文政四年綿羊拜領書類。

〔江戸狀留書拔〕

文政四年八月　御在國

一、今般綿羊牝二疋・牡二疋御拜領に付、近々人足持に而御國江可指上處、御定之人足に而は指支、餘計繼立之儀御聞濟之旨申來る。

七月。御郡奉行等御郡方にのそ出役所を設くべきことを告ぐ。

〔御郡方御仕法一件〕

今般思召被爲在、十村役御指止、拙者ども百姓直支配就被仰付候、尤改作方法之儀は、都而可爲在來之通候。右に付御郡々出役所相建、拙者共曁惣年寄等致出役候之條、是迄十村手前において取捌候品々、右役所江可申出候。且出役所より手遠之村方指急儀、其外爲指儀に而も無之品々は、向寄之御用取次所江可申出候。役所相建候迄は、先是迄之振に相心得可申候。此段御郡方不相洩樣可申渡候、以上。

辛巳七月

小堀八十太夫　印
千羽彦太夫　印
廣瀨欣左衞門　印
有賀甚六郎　印

溝口藏人 不在合
金谷佐太夫 印
淺加伊織 印
土肥三左衛門 煩
水越縫殿太郎 印
內藤十兵衛 印
在大坂 賀古八郎太夫
永原貢 不在合
在大坂 小竹茂右衛門
山森雄次郎 印
林久太夫 印
大村友右衛門 印
寺尾喜左衛門 印
原田又右衛門 印

物年寄中・年寄並中

追而諸郡新田裁許・山廻り等ニも、其元中より演述可有之候、以上。

能美郡主附、但松任兼　淺加伊織・千羽彦太夫兼帯

石川・河北郡主附　溝口藏人・永原貢・大村友右衛門

口郡主附　寺尾喜左衛門・廣瀬欣左衛門・長谷川三右衛門

奥郡主附　水越縫殿太郎・有賀甚六郎兼帯

礪波郡主附　山森雄次郎・金谷佐太夫兼帯

射水郡主附　内藤十兵衛・小堀八十太夫・原田又右衛門

新川郡主附　林久太夫・土肥三左衛門兼帯

右諸郡主附御奉行之儀、覺書を以被仰渡候事。

七月。御郡方仕法を定む。

〔御郡方御仕法一件〕

御郡方御仕法ヶ條書

御郡根役所取捌并惣年寄等勤方大綱

一、御郡奉行改作方兼帯、但代官方之儀相勤。

但、出役所六ヶ所より申來候儀を引続遂僉議、御算用場相談を以夫々取捌、改作方御法等

之儀是迄之振に而相勤候。石川・河北兩御郡之外、遠郡六ヶ所へ二人宛主附、内一人宛詰切、二・三ヶ月宛に而交代、主附之儀は千日計に而繰替候筈之事。

一、御算用者　代官鐙筒番定役

但、出役所一ヶ所ゟ二人、内一人宛詰切、交代暨繰替之儀は奉行同様、根役所に而は免附しらべ方等只今迄之通。且貯用銀指引幷誓詞人しらべ方相勤候。且又是迄御郡相談所相廻り候得共、以來は不及其儀候事。

附、代官鐙筒番・御藏納米入拂、都而出役所同樣に相勤候事。

一、惣年寄役　常に苗字相名乘、他國者懸合之節帶刀可仕事。

右石川・河北より一人、遠郡より一人、都合詰番二人とも詰切可申候。不時御用有之節は、何時に而も寄合可申候。遠郡之者極月詰番指除、爲代自郡之者相加可申候。

但、御收納勢子方一・二組も主附、御收納方・人支配方等都而詮議方相勤可申候。自郡之儀は勿論、出役所より申來候詮議方等相勤可申候。其他出役所振合之通可相心得候。御藏御米改方、出役所之ヶ條同樣之事。

一、年寄並　他國者掛合之節、是迄之通り苗字帶刀可仕候事。

右詰番之儀前條同樣。

但、御收納勢子方一組或は一・二組宛主附相勤、人支配方取次、其餘奉行より詮議方申付候儀、惣年寄准じ可相勤候事。

一、諸郡手附頭取六人　脇指爲帶候。役所中は相扣可申候。

但、御米納方幷書算方、諸郡より申來候品々しらべ方、是迄番代之勤向に相准可申事。

一、石川・河北手附何人、內何人計詰切　脇指爲帶候。役所中相扣可申候。

右寄合日不殘相揃可申候。御用之節は幾人に而も召仕可申候。詰番之外村々駈廻り爲相勤可申候。

但、御米納方幷書算役・使役品々召仕可申候事。

一、留書足輕

右根役所幷出役所詰等、繰廻爲相勤候事。

但、勤方之儀は過書・津出切手・藏宿根縮裏書等表向一通御用狀、幷檢使方しらべ召捕者、幷使役等相勤候筈に候。御收納方・人支配方取次など爲致候儀無之事。

出役所一ヶ所に當る人數幷勤方大綱

一、奉行二人、內一人宛詰切、二・三ヶ月に而交代。

但、全躰之勤方は是迄無組御扶持人相勤候程之儀、年寄役等詮議之上取捌可申。都而指定

候儀、幷指懸事に而時日難相待筋は取捌可申。其他是迄改作所において聞届候品、暨何品によらず指懸に而無之品は、根役所同役詮議之上取捌申筈に候事。

一、御算用者二人、内一人宛詰切、二・三ヶ月に而交代。

但、代官算筒番として御藏納米入拂等、幷誓詞人しらべ方、此外勤向追々詮議之事。

附、御藏之内御米改方之儀は、六月より十二月まで六ヶ月之間主附可申候。且代官書算方之儀手附之者相用可申事。

一、惣年寄役何人、内一人詰切。

右一ヶ月与歟詰番可致候。寄合日相立可申事。

但、農事勢子方一・二組宛主附、御收納方・人支配方等、奉行役前之品何に不寄、詮議方相勤可申候。且又不指懸儀は、都而寄合日相談之上相極可申候。諸願等に付百姓罷出る儀も、不指急儀は寄合日罷出候様兼而可申觸置候事。

附、御藏之内御米改方之儀は、十二月より五月まで六ヶ月の間主附可申候。且御米改方書算方等之儀、手付者之内相用可申事。

一、年寄並何人、内二人宛詰切。

右一ヶ月与歟詰番可致候。寄合日相立可申事。

但、御收納方幷農事勢子方一・二組宛主附、支配方取次等相勤可申候。新田吟味方幷蔭開役兼帶之者可申付候間、一人宛詰番に繰合可申候事。

一、手附何人、內何人宛詰切。脇指爲帶候。役所中は相扣可申候。

右一ヶ月計与歟可致詰番候。寄合日不殘相揃可申、且書算方等御用繁之砌は、村方駈廻り之御用可相勤事。

但、御米納方幷書算方・使役品々、出役所に而召仕可申候。猶巨細之儀は、追々詮議可申渡候。且人數之儀、先一組兩人宛之圖りを以、成限爲相勤可申候。御用繁之時分は雇之者指加可申事。

一、足輕四人計　ヶ所により交代に而詰切。

但、勤方之趣根役所之ヶ條同樣之事。

一、諸郡組付場印物、一郡切出役所ゟ不殘相集、詰番年寄預り、奉行封印いたし置可申事。

一、秋縮之儀、其組々主附之者遂詮議、御請取立可申事。

一、諸郡新開免圖り之儀、是迄之振を以可取極事。

一、皆濟引合之儀、都而根役所において取捌候事。

一、作難之節見立免切之儀、根役所より他郡主附奉行一人罷越、詰奉行相同じ免切可致、惣

年寄召連方之儀は、是迄御扶持人十村之振に候事。

附、免切代御貸米取図り之儀は、根役所奉行詮議之上願方聞揚可申事。

一、検地有之定検地奉行出役之節は、奉行人惣年寄召連出役いたし、定検地奉行相同じ、畑打等之儀可遂僉議候事。

但、本文諸書物認方追而遂詮議可申候事。

一、諸郡是迄之組々其儘に而、郷庄之廣き名をとり、其組之唱相改候に付、別冊帳面に組名認相渡候事。

一、新田裁許・山廻り役代官指除候に付、是迄之代官口米代与して、右口米に應じ御米可相渡候事。

一、年頭御禮幷御料理頂戴之儀、是迄之振に被仰付候筈之事。

一、御休泊御宿方幷人參畑等之儀に付、代官口米を以辨來候分、以來御金渡之事。

一、一郡一ヶ所之出役所に而、百姓共手前不辨に付、一兩組切程能所に御用取次所相建、向寄主附之惣年寄等致取次、村走等を以出役所江可申通。事軽き儀は取次所にて辨遣、追而出役所江可相達。尤不指急儀暫聞届を請申品は、都而出役所江直に斷出候様百姓共江、爲心得置可申事。

一、御藏米納方不宜欠米相しらべは、是迄代官相辨候得ども、役納に相成候上は、彌右等之儀無之様、御縮方追々遂詮議、嚴重法則相立可申候。若不正之族、曁納方煩敷、百姓難儀におよび候儀有之候得ば、手懸候納手附嚴重之御咎可被仰付候事。

附、御米中入札、其百姓と納手付名前書記入置可申候。且又一郡切入米高村數等割合、手附之內請取村相極置可申候。納方手張候節は、雇之者指加可申候。尤手附同樣人縮可致、奥郡濱方代官糶納、以來直納に相成候而も、塩士手前取扱方在來通之事。

一、百姓分之儀に付、是迄十村共より諸向懸合候儀共、向後根役所幷出役所より可及懸合候事。

一、立毛見分・變地見分等、都而見分之儀相願候とも、根役所同役相同じ不申而は一圓に罷出間敷候事。

一、御郡奉行廻之儀、是迄春秋兩度罷出候得ども、以後改作方廻り共年中三度廻村之事。

一、廻村之節、惣年寄役・年寄並主附之組々江罷出可申候。新田裁許・山廻り等も其向々江可罷出候。御用辨に隨ひ召連可申事。

一、御參勤等御通御用、是迄御手合々々御出迎等先例之通り相心得、驛所馬寄等年寄並幷山廻り役江申付、猶其向々委敷儀は追而可申渡候事。

一、人別方之儀、御仕法相改候上は、一村切人別相しらべ、帳面取立縮可申付候。他支配江人別切遣候儀、是迄之振を以可承屆候事。

但、中郡は是迄容易に人別切不申候得ども、以來は御郡之振之通、耕作方間に合不申者は人別可切遣候事。

一、毎歳相改候宗門帳之儀は、出役所等手附に爲調、校合等相濟候上、出役所より根役所江引送、夫より宗門所江相達筈に候事。

但、是迄十村手前江取立置候寺證文は、出役所へ取置可申候事。

一、宗門方御徒相廻候節、於泊所等村々肝煎印形見屆候節、手付指出可致指引候。且又惣年寄・年寄並之印形見屆之儀、遠郡は是迄之通り向寄々々江罷出、石川・河北兩郡之分は、於御算用場印形見屆有之筈に候事。

一、公事出入或は盜賊等糺方之砌、吟味所江手附之內罷出、口書も相認候。尤詮議者江指添之儀、村役人可罷出候事。

但、詮議之品により、惣年寄等之內も相詰可申候事。

一、七木取締之儀、御郡々相違之趣有之に付、先是迄之振を以可取捌候事。

一、檢使方之儀は、以後三州共年寄並之內一人、山廻り等之內より一人指出爲見屆、尤手附

も指出、是迄之振を以口書取立可申候。出役所相建候上は、下々より斷之儀出役所江相達可申候事。

但、能州支配之内他國江罷越候者、所口町奉行より過書相渡候得ども、出役所相建候上は、都而出役所奉行より可相渡候事。

一、火事有之節、火之元人詮議之儀は、出役所向寄之村方は役所江呼出、奉行直に可相糺候。手遠成村方は、主附之惣年寄等之内聞糺、口書取立役所江指出可申事。

但、出火之躰疑敷品有之候歟、或は人損、又は一村皆燒失与歟申類は、出役所江呼出可相糺事。

一、竹木・床物等津出之儀、是迄十村共手前に而取捌候品は、兼而御用取次所江、役所より印章相渡置可申候間、取次所向寄之年寄役等之内預り置、時々見屆可指遣候。勿論津出押切迄、他事に相用申間敷候事。

一、村々諸上納、向寄取次所江取立、幾組与歟仕分、出役所江指出、出役所奉行切手に而、諸方御土藏江直上納之事。

但、諸上納銀之儀、座封之表惣年寄等可致名印候事。

一、御塩方に付御塩奉行江之懸合諸書物、都而出役所より直に可申達候事。

一、藏宿縮方に付、下女・下男迄も誓詞爲致候得ども、手合により藏方手懸不申者は、其儀に不及ヶ所も有之候間、以後二樣に藏方携申者迄見屆可申候。尤五人組等縮方之儀是迄之通之事。

一、金澤初遠所町役人應對方、是迄先は町方肝煎与十村与懸合來候得ども、以來は町役人之應對方之儀、御郡町立・宿立之ヶ所は勿論、其餘村々に而も、辨方次第村肝煎等應對いたすべく候事。

一、浦方難破船有之節は、是迄裁許之十村勤來候御用向、都而惣年寄・年寄並之內罷出可相勤候。尤手附之內指出可申候事。

一、惣年寄等他國懸合之儀は、是迄之振を以、何國何方裁許与相唱可申候事。

一、定散小物成役裁許之儀、惣年寄役に申付候條、村々役人共より取立指出候分引請、口々銀高書算致し、出役所奉行江可相達候事。

右今般御郡方御仕法之大概、拙者共取捌之品、曁其元中勤方之趣等有增申渡候條、得其意、尙又一郡々々種々取捌之品、追々遂詮議可申談候。且又御仕法初之儀に付、未致純熟ヶ條も有之、難致貫通品は、御趣意に相戾り不申樣取扱相改候儀も可有之候。尤右ヶ條之內、組々村役人江も可爲致承知品々は、其許中より申談、夫々不相洩申渡候樣、急度可有演述候、以

辛巳七月

上。

小堀八十太夫
千羽彥太夫
廣瀨欣左衛門
有賀甚六郎
溝口藏人
金谷佐太夫
淺加伊織
長谷川三右衛門
土肥三左衛門
水越縫殿太郎
內藤十兵衛
在大坂
賀古八郎太夫
永原貢
小竹茂右衛門

山森雄次郎
林　久太夫
大村友右衛門
寺尾喜左衛門
原田又右衛門

惣年寄中・年寄並中

右今般御郡方御仕法之儀、御ヶ條書を以被仰渡、奉得其意、私共勤向等委曲承知仕候。尤右御ヶ條之內、村々役人共承知可仕品々取しらべ、先達而御伺申上、御見屆御座候通り、村々暫宿方等役人共ゟ先私共より申渡、末々まで不相洩會得爲仕候樣演述仕、何れも奉畏申儀に御座候。依而私共御請上之申候、以上。

文政四年巳七月

諸郡惣年寄
年寄並
連名

御郡御奉行所

八月四日。能登縮の製產者に仕入銀を貸附することを告ぐ。

〔留帳拔書〕

當巳年より能州出來縮嶋等御仕入銀相渡候に付仕法左之通

一、今般於產物方遂詮議、德丸村甚助等四人之者共江縮嶋等御仕入銀相渡、出來次第追々取揚、□□疋出來候者御仕入銀無滯可相渡候條、織元職人無泥出情、數多出來候之樣相心得可申候。且其內手馴上品出來候得者、其品吟味之上直段宜買上可申事。

一、御仕入銀請取候織元職人共、仕入主付甚助等江縮可指出。內外商人に隱賣之儀相顯候者、右縮取揚、縮代之內半銀可被下候。自然も他國者江隱賣之儀追而相顯候得ば、賣拂之代銀取揚、見咎人江被下方前條同樣之事。

但、見咎人者縮取扱候者に不限、何れ之者に而も不苦候條、本文洩縮に相極候者取揚置、早々御仕入主付甚助等四人之內江可及斷事。

一、御仕入主附織元より取立候縮之內、產物方へ不指出、御領內之者江隱賣之儀相顯候得者、右縮取揚咎申付、右主付指除可申、見咎人被下方右同樣之事。

但、前條同樣之事。

一、自分仕入を以織立候縮勝手に賣拂に付、右は布御定之通一疋に一分宛印押賃取立候間、縮出來次第印押人德丸村權右衛門方迄指出、改印請候樣可被申渡候。若隱賣相顯候得者縮取揚、見咎人江被下方等前條同樣之事。

但、前條同樣之事。

右之趣嚴重に可被申渡候、以上。

巳八月四日　村井又兵衞

能州御郡奉行中

八月六日。河毛安太夫先に醉に乘じて人を傷つけたるを以て斬に處せらる。

〔官私隨筆〕

覺

御家來小將組河毛久太夫三男

河毛安太夫

不及赦之御沙汰、斬罪

但、安太夫儀白山へ致參詣、戻りに鶴來村に而酒を給、石川郡窪村邊へ罷越候處、及暮地黃煎町請酒商賣人方へ立入、酒肴爲出給、貯候鳥目無之に付、跡より可遣与申入立出、往來之者へ行當り申分仕懸、及打擲刀を拔、或は百姓家へ土足に而踏込候へども、醉中故覺無之、糺候上は共通と申。且拔身を持往來に立留り罷在、老人罷通候を右刀に而打懸候樣に覺候へども、酒狂之事故、共節者首尾はきと覺不申旨申聞候處、同夜野田寺町願行寺門前に而、割場

附足輕高倉久太夫と申者不意に被切掛疵付候旨斷有之に付、安太夫申顯候右老人与申は、右久太夫に相當り候付、此儀如何と相糺候處、糺候上は久太夫に而可有之、迷惑いたし候旨申。此外町家等之蔀二ヶ所刀に而突破り、又蔀を蹈やぶり候儀、薄々覺罷在候旨等申候事。右之者先達而盜賊改奉行より公事場へ引渡、禁牢申付置遂吟味、委曲致言上候へば、落着如此就被仰出、今日其通申付候條、左樣御心得可被成候、以上。

巳八月六日

小幡式部判

辻平之丞煩

石野雅樂助判

就外御用不在合　青山將監

奥村伊豫守殿

八月十八日。大聖寺侯前田利之使者を金澤に遣はしてその表高を十萬石に改むることを請はしむ。

〔留帳鈔錄〕

一、八月十八日備後守樣より御見舞之御使者清水八郎左衞門、聞番出淵新五兵衞、外に村井長八郎爲御見舞被遣、御内用之趣も御次へ被仰上、且年寄中江御書被下、淡路守樣よりも御

傳附之御書被遣、翌日各へ拜見申談有之。右は兼々備後守樣御暇之節上使被爲請度御願之趣、水野出羽守殿へも御内分被仰込候所、十萬石之御高に而無之ては上使之儀は被爲成不申趣に付、何分御高直之趣御心願に御座候趣に御座候段、宜御取計之樣賴入候段之御文面也。夫に付出淵より之書取も有之、各披見。夫に付御請下物も年寄中被出之、右之通可伺哉之趣示談。右下物には不容易御願、此迄不被爲達候儀に候間、何分恐入候得共、此儀は御請難申上との文面也。

一、右に付年寄中彼是存寄も人々區々之樣子に相考候內、廿一日に被申聞候は、右御心願之趣に付御書被下候。御請下物入御覽可申に付而は、各了簡は如何と定而御尋も可有之に付、下物調候よしにて被出之。披見致候所、甲斐守儀は御本高に被爲障不申趣に候はゞ、とくと御僉議之上御許容被進候にても可有之哉。土佐守は、追付勝千代樣御出府にも向候間、何かとあなた御世話にも被成候事故、御許容被進候儀に候はゞ新開等に而可被遣哉之存寄。又兵衞儀は、無御據被仰越候事に候間、畢竟御許容不被成は成まじくとの存寄。月番求馬・靱負儀は、誠に此儀は品重き事と段々了簡有之、幾重にも御斷被仰進候方にて可在之との了簡書に御座候。此儀に付年寄中・隱居之面々へも尋可申との事候歟、伊豫守は除之、則近江守・伊勢守へも各內被參被及示談候所、近江守は備後守樣御領分之內踏出しにても有之哉、夫を以

御許容にても可有之哉。猶何も御僉議次第之樣之了簡。伊勢守は何分御斷被仰進方にて可有之との了簡也。右に付御家老中了簡被尋調上候間承度よしに付、御家老方にては御本高に被爲障不申とも、御代々成し被進候御儀に付、今更御許容は不可然御儀と各申述、其通りに下物調、廿四日に上り候躰也。

一、右之趣に付、御家老方に而何も存付候は、ヶ樣之御大事は御家老方よりも可申上置事哉与存付、下書調、各へ廿四日に示談いたし候所、修理被申聞候も一段可然事、一足も早々上候而可然儀と被申候。各も同意に付拙者調之候。下物少々各之存寄有之所は直し候て、奥書院御下段へ關屋中務相招、口達にても段々申達、口達にては分りかね申所も可有之候間、書取にいたし上候由申述、左之通調上之。

備後守樣御暇之節、上使被爲請度等之兼而之御心願御座候に付、水野出羽守殿へも御内分被仰入候所、御高增無之ては難被爲成趣に付、此方樣へ段々右等之趣被仰立、御高增之儀御願被爲在候樣に被成度趣、先達而伊藤平右衞門等へ被仰下趣。其節年寄中迄被仰出之趣奉承知候に付、何も其節乍愚案奉存候は、御高增之儀は誠に不容易被仰進方にて、たとひ御本高に被爲障候御儀は無御座候とも、品能御斷被仰進候樣仕度ものと申合居申候。然所今度御見舞之御使者被進候に付、年寄中へ備後守樣曁淡路守樣より被成御書、右御高增之儀取計候儀宜御

賴被成候趣被爲仰下候段、右御書も拜見、申談御請之儀も年寄中及示談存寄も承度申聞候に付、先達而申達候通、御高增之儀は不容易儀に御座候間、甚如何敷何も申達候。御請下物には御斷申上候趣に調有之候故、尤存寄も無之、此通り伺被申可然段申達候。然處一昨廿二日年寄中申聞候は、右に付而年寄中了簡も御請可被遊儀と存候而、別紙調候下物私共へ見せ申候。右下物披見仕候人々了簡不同にて、畢竟御許容不被進ては相成申間敷などゝ存寄候人も有之、又は御本高に被爲障不申儀に候へば御許容等之趣存寄之人も有之。幾重にも御斷被仰進方可然と申候は、御用番幷靭負迄之樣に見請候故、私共奉存候は、ヶ樣に人々了簡不同にては、御覽被遊候ても如何之存寄哉と御不審も可有之儀。其上重職之人々、ヶ樣之重き御儀に存寄不同有之わけにては有之間敷儀。微妙院樣より御配知被進置候御事は御代々成來候御儀、今更容易に御許容被遊候御儀にては被爲有間敷樣に、乍恐私共奉存候。たとひ御本高に被爲障候御儀無之と申而も、御代々成し被進候儀を今更沿革被遊候御儀は甚奉心配候。年寄中人々不同之了簡も、誠に私共難辨奉存候得共、私共儀は加判被仰付置候御儀に付、ヶ樣之重き御政事之儀に御座候へば、重疊思慮仕申合候得共、甚不可然御儀と私式乍恐奉心勞候。何卒此處被爲聞召譯、何とか品能御斷被仰進候御思慮御下知被爲成下候樣仕度奉願候。ヶ樣之儀、不顧恩召卒忽に奉申上候儀にては無之候得共、重き加判も被仰付置候私式に御座候間、心中

に奉心配候迄にて打過申儀は、猶以奉恐怖候御儀に付、右之趣奉申上候。此段申上候も不應思召趣も御座候へば、猶以迷惑至極に奉存候得共、御家にてはヶ樣之御事は重き御事かと一概に奉存付候に付、奉恐入候得共此段奉申上候、以上。

八月廿四日

前田權佐
前田内記
前田修理
前田中務
前田織江
横山藏人
今枝民部

一、廿五日奥書院御下段にて、各へ關屋中務を以被仰出候は、昨日申上候趣御聞置御留置被遊候。夫に付昨日年寄中へ御書取を以被仰出候趣有之候。定而拜戴可有之と被思召候旨被仰出候に付、成程私共より申上候後に御親筆拜戴仕候段申述候へば、右之趣に付各にも了簡不同は無之哉と御尋之旨申聞候に付、昨日申達候通り、一人も不殘右之心底に罷在候故申上候趣に申達候へば、右之儀は御上にも十分に御好みは不被遊候事に候へ共、とかく六かしき御

事に候間、猶更委敷了簡申上候樣被仰出候に付、民部初有増口達にて申達候。此節少々人々申上方不同も有之候得ども略す。

一、あらまし御趣意。

今度備後守樣御高增之儀、外之諸侯方も近年風俗あしく、官祿を被望候而あるひは金銀をつひやし、色々手入等いたし被進候事、公邊之御明德をくらまし候事、ひそかに御歎息被遊候御事に候。今度備後心願之事も不入事と存候へ共、右之風に付備後一人不進候も殘念たるべく、此度心願之趣令許容遣候はゞ、備後も悅び家來迄も悅び可申間、本知に障り候事無之候はゞ、右之通遣し申度に付、猶更深く被了簡可申越候此段申遣候。

御文面は違ひ候ても御趣意あらまし如此也。

八月。金澤川上芝居座に隣り別に一劇場を起す。

〔犀川川上芝居座圖〕

南の芝居座、文政二年卯七月より取掛り、同八月中棟上出來。

北の芝居座は、文政四年巳六月より取掛り、八月中旬迄に出來。

九月十九日。前田齊廣更に參覲の延期を出願して許可せられたることを告ぐ。

〔横山氏日記〕

九月十九日

一、左之通、今日人見吉左衛門を以、表方ゟ被仰出候。依之明日各相伺御機嫌候旨、月番内膳演述之事。

中將樣御病氣に付、追々御願御在國被加御療養候得共、御疝邪御氣塞之御症御治し不被成、急速御快氣之躰不被爲在、長途之御旅行難被成候付、猶更來二・三月頃迄御參府御用捨之儀、當月六日御用番大久保加賀守殿ゟ御願書御指出被成候處、同十一日御付札を以御願之通被仰出候。此段被仰聞候事。

九　月

九月二十日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覚書〕

九月廿日

一、今日九半時之御供揃に而、勝千代樣兩學校ゟ御出に付、甲斐守・求馬・中務・掃部御先ゟ罷越相詰、七半時頃御戻之事。

九月廿二日。前田齊廣の子他龜次郎等卯辰觀音院に宮參を行ふ。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

九月二十二日他龜次郎殿・從姬樣・忠姬樣・次姬樣御四方樣卯辰觀音院江御宮參、同日御祝有之也。

九月廿六日。前田齊泰の生母を殿付とすべきことを告ぐ。

〔御觸拔書〕

御横目江

勝千代樣段々御成長被遊候付、御產婦之方ゐ被儀御格式御改御座候樣、從御前樣被仰進候趣有之に付、格式御改、自今殿付に唱可申旨被仰出候。此段頭・支配人等江寄々可被申談候事。

九月廿六日　村井執負

九月。晦日　前田治脩夫人の三回忌法會を江戸廣德寺に執行す。

〔御觸拔書〕

法梁院樣御三回忌御法事、當月於江戸表御執行有之候。御作事御普請、其外三御丸御射手・御異風稽古、幷諸組弓・鐵炮稽古之儀相止候に不及候事。

一、御家中普請者不及遠慮候。諸殺生・鳴物等之儀者、當廿八日より晦日迄自分に遠慮可然事。

是月は大盡なり

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

九月十八日　　奥村內膳

〔金龍公記史料〕

九月晦。修法梁太夫人三回忌法會于廣德寺。

九月。御郡奉行より百姓の心得を惣年寄等に令す。

〔岡部舊記〕

御法令

一、改作方御法之通急度相守、御納所無私相勤可申事。

一、宿方・浦方に被建置候高札之條々相背申間敷事。

一、惣而目安上げ申儀有之候はゞ、御郡奉行迄書付出可申候。右奉行之儀申上度候はゞ御算用場江可申斷候。御算用場奉行之事申上候品有之候はゞ御横目迄書付可出候。右之役人指置直訴訟仕候者、不及理非急度可被行曲事之事。

一、公儀御荷物船は不及申、諸大名衆之荷物遭難風候節、御馳走之筋彌油斷仕間敷候。其外

雖爲貢船、難風之砌は隨分介抱可仕候。惣而船破損之儀有之候はゞ、縮方仕置、早速案内可申事。

一、海上流物拾ひ候者、早速可及斷候事。

一、於浦方便船仕者請人を立可申候。當分にても請人取不申船爲乘、欠落人在之候はゞ舟貸主可爲越度事。

一、浦方寄鯨之儀、斷之上御定之通申渡候者、無相違割符可仕事。

一、嶋之内江被遣置候流刑人、舟爲乘申間敷事。

一、船澗入之品々澗役銀取立樣、從先規如御定相守可申事。

一、御預所等境塚損候はゞ、双方納得之上申斷可致修理候。勿論何事によらず、他領之者与申分無之樣常に嗜可申事。

一、他領之者致欠落罷越候を隱置候者、曲事可被仰付候事。

一、他領之者は不及申、御國之者にても他支配より引越移住仕度旨申者有之候者、慥成請人を立、其在所構無之においては、御郡奉行江申斷、指圖之上移住可爲仕事。

一、津留・津出・津入之儀、如御定彌相守可申候。且又他領境洩物御縮之儀、堅く相守可申事。

一、御郡長ヶ役之者申談候儀、肝煎・組合頭等惣而村方之者違背仕間敷候。肝煎等より申渡儀

に、百姓等違背仕間敷候。若右役人共非分申付候者、小百姓等より直に御郡奉行江可申斷事。

一、律儀成百姓等可申上儀をも、御上を恐れ不申上躰在之候者、惣年寄等見聞之通御郡奉行江可申聞事。

一、徒成百姓等、申立にも成間敷儀を、御上を掠公事之下持を仕、書付爲上申儀有之候者、本人よりは下持之者大罪に候之間、御嚴刑可被仰付候事。

一、諸百姓等奢たる儀不仕、農業かせぎ事に致、身体持立候樣常々心懸、無油斷勵可申事。

一、家作之儀結構仕間敷、其外諸事榮耀成儀堅無用之事。

一、衣類之儀、布・木綿之外着用仕間敷事。

但、扶持人等之儀男女紬御免之事。

一、百姓常之食物雜穀を用ひ、米猥に不可食事。

一、御郡方御扶持人初惣百姓男女は、乘物一切御停止之事。

一、鐵炮御締方之儀、彌嚴重可相守事。

一、小百姓等は不及申、御扶持人等長百姓たりとも、常々振舞之附合仕間敷候。神事或は嫁娶・聟取又は葬禮・年忌之節、成程輕く可仕事。

但、婚禮・葬禮・年回等之儀は、人たるものゝ大禮に候得共、少も分を過候ては、金銭費し

ながら却て人道に不叶事に候。依而春秋爲讀聽候へども、其身も不相守、人にも不教樣に成行候哉、近來右大禮等之節、別て衣服・食品等爭而花美を盡し、分限をのりこえ候よし、沙汰之限りに候。元來大切なる父母葬式等、或は一代一度之婚禮を、己が我慢輕薄にて芝居・ものまね樣に仕なし候儀は、先以實意をとり失ひ、不孝不敬之至りに候。是等之所より平生之暮方之儀も分限を打忘れ、長たるものは鍬・鎌を持候事さへ恥ヶ敷事まで押移、何分歎ヶ敷事に候。いづれ向後爭て本心にもと付、各奉預候村々末々に至迄、急度本心に立歸、萬端御敎諭通相守、安穩に渡世いたし候樣可申諭候。

一、御郡中在々は、餠・酒・小間物其外惣て榮耀之品振賣、幷道脇小屋を懸爲賣申間敷候。

但、宿方往還筋抔、店賣仕候儀は不苦事。

一、御扶持人等其外百姓共より、給人・町人江音信仕間敷事。

一、御郡之者大聖寺口留罷通候者、過書を取可申候。無斷罷通、後日相聞候者可爲越度事。

一、七木御縮方之儀、享和元年御改之通相背申間敷候事。

一、百姓・頭振他國江遣申間敷、日用に被雇參候者、他國に居留り不申樣、一類共より申付可遣事。

一、村々百姓・頭振等、男女人數一ヶ村切相調理、毎歲帳面に記置、尤如御定宗門御改堅相

洩申間敷事。

一、他國塩御領分ゟ入申間敷候。其外隱し賣塩、買申間敷儀勿論之事。

一、往還道常々請取之在々より致修理、損不申樣可仕候。打捨置及大破候者、村役人可爲越度候。勿論道端を掘廣げ、道をせばめ候者急度可爲不屆事。

一、不依誰々、御郡方ゟ罷越候刻、宿主与云共送迎仕間敷候。御用之旨斷有之候者格別之事。

一、御用に付御郡方ゟ罷越候人々、旅宿無滯可申付候。勿論音信・賄賂其外馳走ヶ間敷儀かたく仕間敷候。若其役人より非分申懸候者、御郡奉行ゟ斷可申事。

一、宿馬・宿人足隨分無滯樣可申付事。

一、往還筋は勿論、何れの道筋に而も旅人相煩候者致介抱、住國等委細相尋可及案內候。若令死去候者、死骸共儘指置、尤早速斷可申候。且又道筋或は野山等に變死人又は行倒人有之候者、死骸に番人附置、早速案內可申事。

一、諸百姓申分之儀、不依何事給人方ゟ申斷間敷事。

一、切支丹宗門末類等之者死去之儀、如御定急度相心得可申事。

一、寺替・宗門替之儀、至て無據子細有之候者及斷、指圖次第可仕事。

一、新規之佛法勸め申者有之候者、一圓聞入申間敷候。勿論早速可及斷事。

内割は打割なるべし

一、後生願候者、耕作稼手支にならず、勿論費なき様願可申事。

此御ヶ條は、恐多くも微妙院様御直書を以被爲仰出候御ヶ條にて、殊に御趣意も深く難有相覺え候。佛法之儀は各親・先祖等之冥途をも助れかしと、誦經念佛して願ひ申事には可有之候得共、御上より願ふなと被仰出とても是非も無之事に候。人々親・先祖江の孝心を御あはれみ被遊、費なき様にして願へと被仰出しは、誠に難有御趣意に候。兎角費多く候ては、畢竟御收納にも指障、不被得止事御刑法も被仰付、其果は先祖より之田畠をも取失ひ申場にも至り候を、不便に被爲思召候て、ヶ様に被仰出候事と奉恐察候事に候。ヶ様之難有御趣意をも存付候はゞ、其身其程に應じ、朝夕の看經をも耕作の透を考へ勤むべき事に候所、ヶ様之御事をも不心付、御國恩を取失ひ、佛さへ願候へばよろしき様に相心得、一類縁者の御收納未進いたすをも振捨、爭而己が寺々の堂閣を立かへ、又は百姓家においては祖師の法會をいとなみ、人よせなどいたし金錢を費し候儀は、勿躰なく恐多き事に候。中には又己れは左程佛をも信ぜず候へ共、只世のなりふりにつれて、寄進の多きを人にほこりたく、己が我慢にて金錢を費し、又は厨子を見事にして玩び物とする族も有之由。是等は重々心得違に候。殊に近年は一向宗寺庵、官位昇進いたし候様子にて、内割など頼込れ金錢を費申者共も多く、中には又旦家の者よりすゝめ込、爲致昇進候向も有之由相聞、

沙汰之限りに候。是等之儀に付而は、先達て申觸置候趣も有之候得共、畢竟拙者共春秋廻村中渡候御法令之趣を、通例之事与相心得、右等之儀深き御趣意をも不奉恐察、安閑与暮し候故、右之所にも至り申儀与被存候間、今度譯て申渡候。其方共においては、長たる者どもに候へば、せめて是等之御趣意をも奉會得、寄々申諭候樣可相心得候。尤此ケ條のみにも限らず、萬事右に準じ嚴重可相心得候事。

一、新寺幷同心寺爲造申間敷事。

一、新規之祭禮堅御停止、勿論在來る祭禮無懈怠、彌輕く可執行事。

一、枡・秤之儀彌如御定相守可申事。

一、新規之酒屋彌御停止之事。

一、博奕がましき儀、惣てかけの勝負、不依何事堅く仕間敷事。

一、船乘幷商人他國江罷越、借銀等仕置、其所より及斷、惣て御上江之御邪魔に相成申儀、堅く仕間敷事。

一、火之用心、跡々如申渡互に令吟味、灰置所等別而念を入可申候。若無沙汰に仕、火事出來おいては可爲曲事候。勿論村々火之番人無油斷爲廻可申事。

一、火事出來、御藏近く候者、兼て肝煎等江申渡置候定之通、早速罷出火を防可申事。

一、御塩燒立念を入、枡目等無私可仕事。
一、御郡中出生之駒撰相濟不申內、他國ゟ洩し不申樣、急度縮可仕事。
一、九十歲以上之者は勿論、惣て老人之儀子孫親切に介抱可仕事。
一、たば粉本田畑ゟ植申儀堅御停止、勿論たば粉畑步數相增申間敷事。
一、村々新に家造申儀、村役人相談之上及斷、指圖次第可仕事。
一、御用之品にても、書狀等村送り之儀、惣年寄・年寄並御創指之外は一圓送り申間敷事。
一、矢篦竹藪隨分育候樣可仕事。
一、諸物買しめ、高直に賣申儀堅く御停止之事。
一、給人藏宿在之所々、其藏宿請人幷拾人組は勿論、村役人其外惣て同宿中常々心を付、少しにても疑敷躰有之候はゞ、早速可及斷候。若隱し置、外より顯においては、如御定辨米可申付事。
一、御年貢米御藏納之節、尤念を入納可申候。且又諸代官手附等ゟ音信・賄賂堅仕間敷候。若又諸代官或は手代、非分等之族致懸候はゞ、百姓より直御郡奉行ゟ斷可申事。
一、跡々より不有來異形之諸勸進御停止、幷他國之座頭・舞々・人形廻・獅子等、ヶ樣之類無故者に宿貸申間敷事。

一、借宅人之儀、是又請人を取、村役人ゟ相斷、御法背不申樣急度申渡、家賃可申。其外一類等當分たよらせ置候共、早速相斷、御締方洩不申樣可仕事。

一、在々之儀、無筋者に一夜宿も貸申間敷候。宿所たりとも、二夜泊り候者には請人取可申候。勿論一夜にても無心元者には心を付、不屆在之候者押置、早速相斷可申事。

一、金銀錢・衣類・諸道具、何によらず拾ひ申歟、又は土中より掘出申儀在之候はゞ、早速可及案內候。隱し置、後日相知候者可爲不屆事。

右御定之品々急度相守可申候。此外惣て跡々より御法度之趣、少も背申間敷候。古來より段々被仰渡候御法之儀は、都て御國之人民彌安穩に可莽ため被仰付候事に候條、村々末々迄此處存附、常々難有奉存、全く相守可申也。

文政四年九月　　　　御郡奉行

十月十三日。篠田安平その收納米中御召米となりたるものを引渡さゞるを以て逼塞を命ぜらる。

〔橫山氏日記〕

十月十三日

一、左之通表方に而頭ゟ申渡有之。

渡邊多宮江

篠田安平

右安平儀、去收納地米御召米に相成候分等渡り方指支、中買に而中積いたし候上、代米相渡候樣、町奉行より頭江申達候上も不相渡由に付、早速相渡候樣御用番より申渡候處、全く指引相濟不申儀を差引相立候旨相達、重而申渡候節に至り相濟し候旨追々被指出候紙面之趣、達御聽候處、勝手難澁いたし候共、收納米拂切手渡り方指支候樣之儀は仕間敷儀。其上御召米に相成候者猶以無滯樣可仕處、彼是不埒之至に被思召候。依之逼塞被仰付候段被仰出候條、可被申渡候事。

御召米とは藩の買上ぐる米穀をいふ

巳十月

十月十九日。堂形米廩の園中に落雷す。

〔御親翰御加筆物寫〕

十月二十日

一、昨夕堂形御園之內江雷流、杉之木一本折碎申候。御藏所等損處も無御座候旨、堂形奉行相屆申候。右之外御別條も無御座旨、御近習頭有澤才右衛門江與力を以申含口上に而申上候事。

十月廿三日。前田齊廣の生母貞琳院歿す。

〔官私隨筆〕

十月廿一日

一、御廣式へ罷出、佐久間武太夫を以相窺御容躰、御樣子相尋候所、去年以來御滯之內、次第に御快方に被成御座、先頃御庭抔へも御出被成候程に候處、一昨日ふと御食御すゝみ不被成、丸山了悅相窺、寒に御閉られ被成候故と申上、御藥轉方調上候處、昨朝餘程御快御食もかさまし上り、今朝も又々昨日よりは御快樣に被成御座候之處、四時過頃御次之間に被成御座、俄に御手足御不叶に相成、御意も承受にくゝ有之、早速了悅相伺、卒中風之御症之由申上候。其餘追々診察被仰付候處、同案に而替る存寄も無之、示談之上御藥指上候へども、御藥水御通じ無之。其後は只御熟睡之樣成御樣子に而、尤何等之御意も無之、何とやらん次第に御疲勞相增候樣に相診候由。乍去御脈狀は御惣躰に比し候へばよく應じ候旨也。右より直に二御丸へ罷出、以伊藤平右衞門相伺御機嫌候處、御機嫌御指障も不被爲在候。併御心勞被遊候旨御意之由、人見吉左衞門演述。追付退出。

〔官私隨筆〕

十月廿一日

一、左之紙面今夕七時過到來、返書遣之、追付罷出。
貞琳院樣御滯、御卒中風之御症之由御醫者中申上候旨に付、何も追付御廣式へ罷出、相窺御容躰、中將樣御機嫌も相伺申候間、御自分樣にも御出御窺可被成候。若御當病等に候はゞ以御紙面御窺可被成候、以上。

十月廿一日　　村井靱負

奥村伊豫守樣

〔官私隨筆〕
十月廿三日
一、左之紙面八半時過到來、返書遣之。
貞琳院樣御容躰、今朝各出席切御廣式へ罷出相伺候處、次第に御疲勞被爲見候由に御座候。依之今日御自分樣にも御容躰御伺可然と存候。御當病等に候はゞ以御紙面御伺可被成候、以上。

十月廿三日　　村井靱負

奥村伊豫守樣

一、追付罷出以佐久間武太夫相伺御機嫌、御容子相尋候處、一昨日より御食事等一向不被召

上、次第に御疲相增、最早御指重之御樣子に付、其趣今少以前御表へも言上仕候由也。依而三之御丸迄罷越候處。御用番登城之所に而出合、直に二御丸へ罷出候樣にと被申聞、即御用番之跡より罷越。右御差重りに付、御用番一所於席以中務相伺御機嫌候處、御差障も不被爲在旨御診之由演述。引續御大切之由も案內有之、御機嫌伺等之沙汰無之。其後御死去之由小森源左衞門より御用番へ紙面到來。依而又兩人一所以松尾縫殿相伺御機嫌候所、指而御指障も不被成御座候由御意。且又勝千代樣御容躰以武田杢左衞門相伺候處、御愁傷被遊候へども、指而御指障も不被爲在旨御意之由演述也。

但、各にも紙面を以被申遣候へども、いまだ登城無之內御死去也。

〔官私隨筆〕

一、左之紙面等到來、返書遣之。

別紙之通一統相觸候付、爲御承知進之候條、早速御組へも御觸可被成候、以上。

十月廿三日　　村井靱負

奥村伊豫守樣

貞琳院樣御氣色御滯被成候所、段々御指重不被爲叶御療養、今廿三日御死去被成候。依之諸殺生・普請・鳴物等可有遠慮候。日數之儀者追而可申渡候。

一、右に付頭分以上之面々者、明廿四日九時過登城可被相伺御機嫌候。幼少病氣等之人々は御用番宅へ以使者可申越候。

右之通被得其意、組・支配――事。

右之趣可被得其意候、以上。

十月廿三日　　村井靱負

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

十月二十三日御生母貞琳院樣御卒去、御年御六十なり。御法號は貞琳院殿乾岳正秀大姉と申なり。十一月三日御葬式於寶圓寺御導師之上、野田山御墓地御收有之なり。御宿元は靑山大膳亮殿家臣山脇次右衛門某之妹なり。初之名於喜機之方と申なり。

〔橫山氏日記〕

十月廿三日

一、貞琳院樣御氣色御指重り被成候段、伊藤平右衛門より及案內候に付、拙者儀追付御廣式ゟ罷出、相伺御容躰、夫より中將樣御機嫌茂相伺申候間、罷出相伺可申旨、若當病等に候者以紙面相伺可申旨、月番靱負より御家老中・若年寄中・龍山・誠齋ゟも各通を以申來候事。

一、右に付追付御廣式ゟ追々罷出、貞琳院樣御容躰、御廣式頭を以相伺候處、不被爲叶御療

養、申之中刻御死去被成候段、松田五郎兵衛申聞候に付、直に致出席候事。

十月廿五日

一、貞琳院樣御法號、御廣式頭佐久間武太夫出之。左之通に候事。

新掩粧　貞琳院殿乾岳正秀大姉淑靈

十月廿五日。前田治脩の十三回忌法會の豫定を變更延期すべきことを告ぐ。

〔官私隨筆〕

太梁院樣十三回御忌御法事、來月九日へ御取越、於寶圓寺御執行被仰付候旨、先達而被仰出置候處、今般御凶事に付右御法事御差延、御忌明之上當十二月十六日に可被仰付旨被仰出候。此段爲御承知申進候、以上。

十月二十五日　　村井又兵衛

十一月三日。前田齊廣の生母貞琳院の葬儀を行ふ。

〔諸事覺書〕

十一月三日

一、貞琳院樣今曉子上刻御出棺、御行列押中務。御葬式奉行權佐、九時前御廣式へ罷出。御寺詰御名代相勤候人々も右同刻過より寶圓寺へ罷越。權佐儀御出棺御見立申、御先に寶圓寺ゟ罷越、御寺に而御供養相濟、野田山ゟ罷越。御名代之人々も御寺相濟直に野田山へ罷越、九半時頃何茂野田山より罷歸候事。

十一月十一日。幕府の貞琳院逝去を弔したる奉書金澤に達す。

〔諸事覺書〕

十一月十二日

一、當三日於江戸表御廉中御尋之由に而、御老中方御連名之御奉書、水野出羽守殿より御渡之木地箱、不時立町飛脚を以昨夕到來。今日年寄等拜見被仰付。

〔金龍公記史料〕

十一月十一日。弔喪奉書自江戸至。

十一月十一日。租米を納入する藏の下敷を麁略にすべからざることを諭す。

〔內密僉議留〕

三州御藏之下敷、前々より定有之、ぬか・俵等之厚薄者無之筈に候處、次第に猥に相成、古ぬか相用ひ、虫明・痛米等致出來候付、去々年新ぬか入替等之儀申渡、爲致吟味候之樣申渡候

代官は租米の納入を掌りその取扱石數に應じて手數料を受くるもの

通、尤麁略無之様に猶又可被申渡候。右下敷之儀者、斗下村々百姓共入念を以可致筈之處、諸郡共其ヶ所々々之者請負にいたし罷在候躰に而、代米石に付五合或は七・八合迄も取請、剩年々吉ぬか等を相用ひ、麁抹之下敷いたし置、痛米等致出來候儀者、等閑之致方沙汰之限りに候。今度御郡方御仕法に付、都而百姓分費用者急度指省可申儀に候間、三州共綿密僉議有之、無用雜費無之様嚴重可被申渡置候、以上。

十一月十一日　　御算用場

御郡奉行中

十一月十五日。新田裁許・山廻等の代官勤務を除き、代ふるに役料を以てす。

〔内密僉議留〕

今般御郡方御仕法に付、其方中代官指除候に付、以來爲役料拾三石五斗宛御米相渡候條、可得其意候、以上。

巳十一月十五日

諸郡新田裁許・山廻・御旅屋守中

十二月二日。省略勵行の爲炭薪所を廢して御算用場に併合す。

〔官私隨筆〕

定番頭ゟ

當時格別御省略に付、炭薪所被指止、御算用場へ打込に被仰付候。來月二日より右役所引渡筈に候條、炭・油等請取候向々、請取方等右場承合候樣一統可被申談候事。

巳十一月

十二月六日。前田齊廣病むを以て明年年頭の拜賀を請けざるべきことを告ぐ。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通一統申談候樣御横目へ申渡候付、爲御承知進之候、以上。

十二月六日　長甲斐守

奥村伊豫守樣

御横目ゟ

中將樣御痐邪等、今以御同篇被成御座候。依之來年頭御家中等一統御禮被爲請間敷旨被仰出

候條、可被得其意候。且又一統年頭御祝儀献上之御太刀等目錄青銅目六共、當年中に取立候。元日不殘指上候筈に候條、正月朔日之日附に而自分並組・支配之人々、且江戸表等暨遠所へ罷在候人々目六、當月二十一日より二十五日迄之內、御奏者番へ相達可申候。御太刀・馬代等は、日限之內御進物所迄直々可指出候。

但、在江戸等之人々目六等は、代判人より取計可申候。

一、御家中子共御禮不被爲請候間、尤献上物に不及候。

一、元日は頭分以上登城刻限等、前々御留守年之通可相心得候。尤八日・十五日・閏正月朔日も、平月之通出仕可有之候。

右之趣夫々可被申談候事。

十　二　月

〔官私隨筆〕

十二月十五日

一、左之紙面等到來、返書遣之。

來年頭御禮不被爲請候付、別紙二通爲御承知進之候、以上。

十二月十五日　　長　甲斐守

奥村伊豫守様

一、三ヶ日熨斗目・上下に而、元日五つ時過、其外常刻出席之事。
一、四日御射初御規式有之候間、熨斗目・上下に而五時過登城之事。
一、人日・十五日熨斗目・上下、十五日は例月出仕之通に登城之事。
一、十九日御具足之御燒餅頂戴に付、熨斗目に而常刻登城之事。
一、閏正月朔日は例月出仕之通之事。
一、元日鶴之庖丁者不被仰付、於御膳所御料理被仰付候事。
一、同日年寄中等へ御雜煮等は不被下、御熨斗迄頂戴被仰付候事。
一、同日鶴之御吸物御下不被下候事。
一、二日御謠初之御規式は、御留守年之振に被仰付候事。
但、御射初御大廣間に而被仰付候。且御雜煮等は不被下候事。
一、御郡方惣年寄初山廻等へ御料理被下候事。
一、十九日御鏡餅頂戴之儀、御鏡餅に熨斗を添、於御臺所一統頂戴之事。
右之通被仰出候事。

十二月

備後守は大聖寺侯前田利之

十二月十五日。前田齊廣、大聖寺侯前田利之を十萬石格たらしめんことを幕府に出願す。

〔留帳鈔錄〕

備後守樣へ

寒氣之節御座候所、愈御堅固被成御座珍重思召候。誠先達而は遠路爲御見舞御使者被進、殊に御目錄之通被進、御厚情之至御大慶思召候。隨分時候御自愛可被成候。右御挨拶旁以御使者被仰遣候。

十　二　月

別段被仰進候。兼々備後守樣御內願筋之儀に付、先般御內々御使者を以御願被仰進候。御口上之趣委細被成御承知、則其刻御答被仰遣置候通に御座候。然處公邊向夫々御問合も相濟候に付、甲斐守等へも被仰聞、御請申上候。因之此度御高增等之儀、御願書可被指出と思召候。此段宜可申上旨被仰出候。

右申述候上、此度被指出候御願書御草案兩通入御覽置候樣、被仰付候段可申述候。

十　二　月

御草案寫

同姓備後守家初代飛驒守利治儀は、先祖肥前守利常之三男、天德院樣御所生にて、利常隱居之節二男淡路守利次へ十萬石、三男利治へ七萬石分知仕、代々相續仕候。利治二代飛驒守利明末期に奉願、遺領七萬石嫡子內記へ被下、新田壹萬石二男釆女へ分知被仰付候處、寶永六年釆女儀不慮之儀に而家斷絕、右一萬石は飛驒守へ御進被下候。此度右新田一萬石備後守本高御直被下、其上私藏米を以二萬俵足加、都合十萬石之高に而、幾久敷御奉公爲相勤度奉存候。此段奉願候、以上。

十二月十五日　　御　　名

〔官私隨筆〕

今般同姓備後守高直之儀奉願候趣意は、初代飛驒守代中は在所へ御暇被下置候節、每度上使被成下候處、其後は上使不被成下候。雖然代々被敍爵四品、大廣間席へ出仕仕候處、同席之內に而御暇之節上使不被成下候は、備後守一人に限、外見にも拘り、先代より是而已相歎罷在候。此度高直之儀如願被仰付候者、同姓淡路守家に被準、御暇之節上使被成下候樣奉願候。此段御內意申上度候間、宜御含御取扱被成候樣奉願候、以上。

月　　御　　名

十二月十六日。前田治脩の十三回忌法會を寶圓寺に行ふ。

〔横山氏日記〕

十二月十六日

一、今日於寶圓寺、太梁院様十三回御忌御法事御執行に付、御用番土佐守・御家老方土付藏人・若年寄土附掃部之外、何茂御寺詰に罷越候事。

〔官私隨筆〕

十二月十六日

一、今朝六半時頃寶圓寺へ罷越、五時前頃御法事初り、三座ともに無御滞相濟。御名代求馬・勝千代様御名代甲斐守夫々被相勤、其外御姫様方御代香相濟。畢而御施物渡之、退座之上御法事相濟恐悦之旨御法事奉行へ申達。

十二月廿七日。大聖寺侯前田利之十萬石格を以て待遇せらるべき命を受く。

〔留帳鈔錄〕

一、備後守様御高直之儀、先達而此方様より御願之所、舊臘廿六日御老中御奉書にて、廿七日御登城被成候様申來。此方様御名代出雲守様御登城、御願之通新田一萬石外に貳萬俵御引足、拾萬石高に被仰付、御暇之節上使も被成下候旨被仰渡候旨。右之趣御用番青山下野守殿

舊臘は文政四年
出雲守は富山侯世嗣前田利保

被仰渡候旨、出雲守樣こなた樣へ御出內藏助へ御演述。右之趣早飛脚を以申越、備後守樣にも御出被成、內藏助へ御逢、段々之御禮被仰上候事。

十二月廿七日爲御名代出雲守樣御登城被成候節、青山下野守殿被仰渡之趣、卽日御出內藏助へ被仰述候趣。

御名は加賀守

出雲守樣御演述之趣

今日爲御名代致登城候所、備後守領分之內新田一萬石高に結、並御名より藏米貳萬俵足加、向後十萬石高に而御奉公爲相勤度旨御願之通被仰付候旨、御老中御列座、青山下野守殿被仰渡候。此段宜可申上旨被仰聞候に付、御國許へ可申上旨及御請候旨。

右に付備後守樣より御禮之御書、年寄中へ一通、御家老中へ壹通御書被成下候事。右御書入御覽、御請之下書も入御覽候筈。月番示合文面調、明日入御覽候筈。

明日は文政五年正月七日

御家老中へ之御書

一翰啓達致候。嚴寒之節御座候處、中將樣益御勇健被遊御座奉恭慶候。各御嘉祥珍重存候。然ば今日御用召に依而致登城候處、今度從中將樣御願に付、御用番青山下野守殿を以拾萬石高直被仰付、且又在所へ御暇之節上使可被成下旨、重疊難有仕合奉存候。誠以代々懇願之所、全中將樣御威光を以致成就、其上段々結構被成下候儀、外聞實儀、且對先祖御厚恩之程難盡

紙上奉存候。各之御執成故と厚致大慶候。右早速御謝辭可申述、以飛札如斯候。猶此上萬端宜敷預御取計度賴入存候、不悉。

十二月廿七日　　松　備後守　判

今枝民部殿
横山藏人殿
前田織江殿
前田中務殿
前田修理殿
前田内記殿
前田權佐殿

年寄中此御文面同樣也。

〔諸事留牒〕

十二月二十七日

出雲守樣御演述之趣、今日爲御名代致登城候處、備後守領分之內新田一萬石高に結、幷加賀守より藏米二萬俵足加、向後拾萬石高に而御奉公爲相勤度旨御願之通被仰付候旨、御老中御

別座青山下野守殿被仰渡候。此段宜申上旨被仰聞候付、御國許江以急便可申上旨及御請申候、以上。

十二月二十七日　　　　津田内藏助

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

十二月二十七日大聖寺備後守利之公拾萬石格に被仰渡有之なり。此之儀は中將樣より御願出有之候ゆゑなり。被仰出之趣左之通なり。

備後守領分之内新田一萬石高に結幷加賀守より藏米二萬俵足加、向後拾萬石高に而御奉公爲相勤候旨願之通被仰付候。

一、松平備後守在所江御暇之節、以來御使番上使被成下御沙汰に候事。

右御白書院緣頰に老中列座、御月番青山下野守殿、御名代出雲守利保樣江台命を傳られるなり。

〔文政五年見聞志〕

一、舊臘大聖寺御高直しに付、備後守樣御家中等江被仰出如左。

殿樣舊臘二十六日御老中御連名之依御奉書、翌二十七日御登城被遊候處、從御本家樣御高直、亦上使御暇之依御願被成進、十萬石御高直被仰付候旨、御老中御列座にて被爲蒙仰、且御在

舊臘は文政四年

所ゟ御暇之節上使を以被仰出旨、右御願書御附札を以被仰渡、難在被思召候。右之趣は御代々樣御懇願被爲在候儀、右兼而御本家樣ゟ御願被遊候處、上使之儀は御高直無之而は難相成趣に付、今度右之趣御願被成進候處、御願之通被仰出、寔御本家樣御威光を以、御心願之通被仰出候條、此段何茂難有可奉承知旨被仰出候事。

別

今度御高直に付而、都而之御物入相增候間、人々奉恐察、彌御省略相立候相心得可申候。是迄迚も一統無油斷事に候得共、兎角御舊例或は外聞に拘り、等閑相成候儀茂間々有之候。以後は左樣成事に拘り不申、御爲第一相成候樣相心得可申候。將亦公儀御普請御手傳御用高茂相增候事故、是亦御本家樣より年々右之方ゟ三百金充御助力被成進候得共、中々左樣之儀に而は御手合可申儀にも無之、其外御軍役等初惣而之御勤向過分之御相違、迚も是迄之御作法に而は御取續難被遊候間、以後御內輪向は永久五萬石高之御暮方に被仰付候。依而猶更是迄与違、御腰物等其外御鷹樣之儀に至迄、成丈被遊御堪忍、被詰御身思召候。然共右之通之御世帶に候得ば、諸事行屆被兼候儀も可有之儀与被思召候。此儀茂兼而相心得罷在可申事。

十二月廿九日。經武館に於ける師範に門弟の武術奬勵等のことに關して告ぐ。

〔御觸拔書〕

定番頭江

於武學校師範被仰付置候人々、門弟中藝術心懸方心得之儀可申諭趣、幷師範人心得之儀被仰出之趣、別紙寫兩通之通學校頭江申渡候へ共、師範人より申諭方急に行屆申間敷、其迄於武學校師範不被仰付人々之門弟に而茂、稽古心得方之儀は右被仰出之趣急度可相守事故、別紙寫兩通相渡之候條、被得其意、組・支配之人々江被申渡、組等之內裁許有之面々者、其支配江茂相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

十二月廿九日　前田土佐守

學校頭江

兩學校共近く出座人多、一段之儀に可被思召事に候所、一旦者人々出情有之、其程過候而者怠り之躰に茂相聞候間、猶更人々出情相勵候樣、師範人より門弟中江申談、五箇年目には人々出情之樣子無怠しらべ出、無息抔右五箇年中少も懈怠無之人々茂可有之事に候間、左樣之儀者別段に書出有之樣、分而師範人江被申談候而可然。武士たる者武藝に志薄候而者、侍之不本意は不及申、油斷は有間敷候へ共、武學校被建置候も偏に武藝出情之御趣意に候得者、

此所人々志相立不申而者不叶儀与會得有之、無息之子弟抔者武術勵方を、勤仕或は身之堅め且者慰に心得候はゞ、自然に難怠事に候。右五箇年充之しらべは、誠に武藝心懸之厚薄をしらべ申事に候條、此旨師範人より門弟中江申示有之樣可被申談候。

一、右五箇年目に書出有之節、傳受事相濟候分茂尤可書出候。

一、師家江一旦入門いたし候迄に而、稽古之志無之人々茂可有之、何とか指支有之怠りに相成候人々は格別、無息之人々抔無謂稽古等閑に相成候はゞ、是又師範人より五箇年目に可書出候。尤五箇年目にも不限、門弟中志之厚薄、師範人より臨時に書出度儀者存寄次第に候。且又師弟之間若不和等に而、及破門候人々有之節者、學校御横目江師範人より其趣意及届、其弟子より茂御横目江相達候樣に有之可然候。

右之趣被得其意、御横目江茂被申談、師範人一統江可被申聞候事。

巳十二月

學校頭江

武藝心懸之儀に付、別紙を以申渡候上は、定而御國之風俗に而、格別一時に騷立、人情いたし候樣に茂可有之哉。武學校之御定にも、治に亂を不忘者武士之本意と被仰出置候儀、人々承知之上は、今更改而人情方被仰渡候に茂およびに不申。殊に御治世之折柄、御大家之御家中

儀に武藝御せり立之様に有之候而は、公邊江被對候而茂御不敬之事故、改而被仰渡候に而は無之、惣而遊樂に者移易無息之人々等成立之ため、武藝心懸之様子を茂御しらべ有之事に候。乍去右之仰渡に而、一旦騷立候程に進候者は、又怠りもはやき道理に候。只無益之慰をば相愼、夫に引替常々武藝之執行を慰与心得入情いたし、自然に鍛錬之所江も到、其身之ため者不及申、父兄においても安堵之基に候。年若き有祿之人々茂是に同事故、此度別紙之通被仰渡候間、此御趣意を會得無之、騷立候様入情有之、無程怠り候而者御心外之事に候間、誠に武士之本意を守り、いかにもひそかに武藝心懸候儀肝要に思召候。此段人々會得いたし候様、各を初師範人相心得候而可申示旨、分而被仰出候條、師範人江得与右御趣意通りを可被申談候。尤師範人において、人々心懸之儀を强而可示筋に茂有間敷、門弟之志に可有儀に候へ共、又師弟之間柄に而者、門弟之心得格別に敎諭有之も師之道に付、右等之趣師範人江被仰渡事に候條、被得其意、此段も可被申談候事。

巳十二月

文政五年

正月朔日。前田齊廣病に依て年頭の禮を廢す。

〔横山氏日記〕

正月元日

一、御前御痳邪等御難儀被遊候に付、御禮不被爲請旨、舊臘書立之通に付、年寄中等五時過より段々登城之事。

〔官私隨筆〕

正月元日

一、今朝五時過登城。

一、献上御太刀・馬代目錄、席入口假緣頰之所に而、各（御家老中等は列座なし）御奏者番奥野主水へ渡之。但一人充也。磐松殿・豐之介殿・九郎左衞門殿も列之通被相渡之。右三人溜は芙蓉之間也。

但、今日勢州は登城無之也。

一、各列座（此時も前段三人、且又御家中・老年寄中も列座也。）於席以神尾孫九郎年始御祝詞申上候處、追付以遠藤數馬御喜悅之旨被仰出。

〔文政五年見聞志〕

元日

御兩殿樣益御機嫌能御迎春、蓬萊・屠蘇暨御祝御膳被召上候事。

一、公御痳邪に而年頭御禮不被爲請、頭分已上登城、年寄中等江謁御祝詞申上退出之事。

正月四日。前田齊廣の子他龜次郎疱瘡に罹る。

〔官私隨筆〕

一、左之紙面到來、返書遣之。

他龜次郎殿此間中御不例被爲在候所、昨日御醫者中診之上、御疱瘡御治定御座候。尤御順症に被爲在候旨、高田彌左衛門申聞候間、此段爲御承知申進候。右に付今日各御廣式へ罷出、相伺御機嫌申候。若御當病等に而御出難被成候者、以御紙面御伺被成候樣にと存候、以上。

正月五日　前田土佐守

奧村伊豫守樣

〔官私隨筆〕

正月十七日

一、左之紙面到來、返書遣之。

他龜次郎殿御疱瘡御順症御肥立被遊、明日御酒湯被爲引候段、吾地淸左衛門申聞候。依之明日退出に各御廣式へ罷出、他龜次郎殿へ御祝詞申上候間、爲御承知申進候。若御當病等に而御出難被成候はゞ、以御紙面御祝詞御申上可被成候、以上。

正月十七日　　　　前田土佐守

奥村伊豫守様

正月七日。老臣等、先に大聖寺侯前田利之の十萬石格となりたるを以て前田齊廣に祝詞を呈す。

〔横山氏日記〕

正月七日

一、備後守様舊臘拾萬石御高直之儀御願之通被蒙仰候に付、右御祝詞各今日中將様江申上候旨、主附權佐江月番演述有之。若年寄江も可申談旨被申聞候に付、則夫々申談候事。

〔官私隨筆〕

一、備後守様三萬石御高增之儀、此方様より御願之處、前月二十七日御願之通備後守様へ被仰渡候由、江戸表津田内藏助より御用番へ申來候。紙面寫御用番被爲見之。依之各列座、以澤田義門恐悅之旨申上候處、追付以同人御喜悅之旨被仰出、追付退出。

正月七日。加賀藩の老臣等、大聖寺侯の十萬石格となりたるを以て前田利之に祝詞を呈す。

本文は御家老のものなりといへども年寄中も亦同樣なるべし

〔諸事留牒〕

被成下御書拜戴仕候。嚴寒之砌益御機嫌能被成御座、奉恐悅候。然者舊臘廿七日御用召に依而、御登城被遊候處、今度從中將樣御願に付、御用番靑山下野守殿を以、十萬石御高直之儀被蒙仰、且御在所江御暇之節上使可被下旨、重疊難有御仕合思召候旨等、先以段々結構之御樣子、恐悅之至奉存候。私共段々蒙御懇命、忝仕合奉存候。右御請上之申候。御印御上包返上仕候。恐惶謹言。

正月七日

前田權佐

前田內記

前田修理

前田中務

前田織江

横山藏人

各實名判

備後守樣御近習衆中

別紙

今枝民部儀舊臘死去仕候付、御請名前相調不申候、以上。

正月七日　　　　横山藏人

備後守樣御近習衆中

正月二十日。東本願寺門主加賀藩内を通行の風聞あるを以て末寺役僧に拒絶の意を告ぐ。

〔文政五年見聞志〕

一、東本願寺御領國通行之儀申來候に付、御斷之趣末寺役僧江寺社奉行被相添書立左之通。

今般東本願寺殿、越後國從御門末依賴、宮中奏達之上彼地江御下向被成候。依而中仙道御往通御座候處、越前國從御門末茂同國御通行之儀相願候に付、無據御歸路之節當領之内御通行、掛所江茂御休泊御申付被成旨等被仰越、被致承知候。乍去當領之内御通行之儀、國政に指障之筋御座候故、於京都使者を以被及御斷、尤其節公邊江茂被及御屆候。

右之趣爲御承知申達候旨、御使僧に可申談候事。

正月

右當月廿日東末寺役僧中寺社所江御呼立に付、琛得寺罷出候處、如斯御書立を以被仰渡候

末寺は別院の義

事。

正月廿四日。前田齊泰疱瘡に罹る。

〔横山氏日記〕

正月廿六日

一、勝千代様一昨廿四日より御熱氣被爲在候處、御疱瘡に而御順症被成御座候旨、御附方甲斐守等より表方江被相達候に付、各追付相伺御機嫌、中將様江も御順症被成御座候恐悦申上候旨。當病等之人々は以紙面申上候筈。且出席無之人々幷隱居之面々江は主付より可申遣旨、月番演述に付則夫々申遣候事。

是月は大盡なり

正月晦日。學校を再び堂形前に移轉すべきことを告げらる。

文政二年二月廿七日の條參照

〔諸事覺書〕

正月晦日

一、蓮池上之御屋舖段々御造營有之候處、御廣式向御家作學校御閣与程近く、人聲も聞え、其上火之元之爲にも不可然候間、學校御毀、仙石町堂形前へ御移可被仰付候旨被仰出候段、此間學校方より表方へ達有之候事。

閏正月朔日。加賀藩の人持及び頭分に大聖寺侯前田利之の先に十萬石格となれることを告ぐ。

〔横山氏日記〕

閏正月朔日

九時頃御大廣間江年寄中・御家老中列座、左之通御弘之趣、人持・頭分一統江左之通月番求馬申聞有之候事。

備後守様拾萬石御高直之儀、從此方様御願置被成候處、舊臘廿七日御用番青山下野守殿を以、御願之通被蒙仰候。此段何茂江可申聞旨御意に候。

閏正月十日。前田齊泰の疱瘡順調なるを以て酒湯に浴す。

〔横山氏日記〕

閏正月十日

一、今日勝千代様御酒湯被爲引候に付、年寄中等熨斗目・上下着用例刻登城之事。

一、御殿向當番之頭分以上熨斗目・布上下、御歩並以上服紗小袖・布上下着用之事。

一、今日之爲御祝儀、中將様・勝千代様江、年寄中等より献上物御肴一種宛、使者平士服紗

小袖・上下着用、五半時過より二御丸江持參、執筆に爲請取候事。

〔金龍公記史料〕

正月廿四日世子罹疱。閏正月十日浴酒湯、十三日第二浴。十五日第三浴。

閏正月二十日。前田齊廣學校移轉の位置に就いて議す。

〔御親翰留〕

午閏正月二十日土佐守江被成下候御親翰

兩學校移替場所之儀に付被指越候書取、並豐後守幷左兵衞存寄之趣も夫々致承知、何れも心付之處は尤之事に候。此時節不時に費懸り候儀曾而望不申事に候へ共、堂形江新に移候而惣圍等餘程之儀に付、何分にも事輕に相濟候儀望み申事に候。乍併當時之處に而は餘り建物に近く、火用心等甚以心掛り之事に候へば、是非移替不申而者難相成事に候。右に付金谷は甚御樣子も有之事に而、何分暫に而も學校代に者難致場所に候。其上次・三男茂急には難手放し儀、追々無程住所も無之而者難相成、彼是以當分たりとも、金谷之儀者難相成事に候。丹後屋敷之儀も中々手狹に而、末永く學校之場所には相成申間敷与存候。依之何分にも惣圍有之場所相考候得共、心當りも無之候。其上段々相しらべ候處、太梁院殿學校被仰付候節之御發端之御場所、只今申付候處之思召に候。然者當時之所に相成候得者、思召には叶ひ可申与

存候。しかし當時之時節柄故、惣閙に而も有之、事輕に相濟候場所何も心付有之候はゞ、又々可被申越候。此段豐後守与も能々示談可被致候事。

右御親翰に應御請差上候事。

閏正月。東本願寺門主を迎へんが爲に盡力したる町人等追込の罰に處せらる。

〔文政五年見聞志〕

堅　町　安江屋理右衛門
下堤町　紙屋庄右衛門
十間町　千代屋久丞

今度東本願寺殿御當地江御下向被成候旨申來候一件、末寺講中之内磯部屋五郎兵衛儀頭取致世話候躰に付、五郎兵衛手前相糺方之儀御用番被仰渡、相糺候處、其方共申合候趣申顯候。右宗門之儀は、第一御郡之者共甚致歸依候儀に付、若御下向有之候而は甚騷に相成候處、私之信仰御國政に障候儀茂不存付致取持候事、沙汰之限り不屆に付追込申付候事。

右之趣御用番內膳殿御差圖に付申渡候條、急度相愼可罷在候事。

二月二日。幕府前田齊泰の本年八・九月の交を以て出府せんとの請を許す。

〔諸事留牒〕

二月十日

一、左之通伊藤平右衛門を以被仰出、主付中務請取、藏人江演述。藏人御使相勤る。

勝千代樣江

勝千代樣當八・九月頃御出府之儀、當月二日御先手奥山主稅助殿を以、御用番阿部備中守殿江御伺書御差出之處、同日夕御伺之通御付札を以被仰出、難有御仕合目出度被思召候。此段以御使者被仰進。

二月十日　御使御家老

二月二日。德川家齊の前田齊廣に贈りたる鶴金澤に着す。

〔横山氏日記〕

二月二日

一、爲御寺宿繼御奉書を以鶴御拜領、今朝六時到來に付、今日年寄中・御家老中表方席にお

いて御奉書拜戴。相濟、若年寄中於同間拜見。畢而年寄中・御家老中一列、有恐悦且拜戴被仰付候御禮以人見吉左衛門申上。若年寄中は月番迄申述候事。

二月十八日。前田齊廣病むを以て七・八月の交まで參覲延期の請を許されたることを告ぐ。

〔横山氏日記〕

二月十八日

一、左之通今日人見吉左衛門を以被仰出候に付、於表方席各拜見。相濟、若年寄揃部被呼立、拜見有之候。依而各明日相伺御機嫌候旨、月番演述有之候事。

中將樣御病氣に付、追々御願御在國被加御療養候得共、御疝邪御氣塞之方倍御募被成、急速御快氣之躰不被爲在、長途之御旅行難被成に付、猶又七・八月頃迄御參府御用捨之儀、當月五日御用番阿部備中守殿江御願書御指出被成候處、同九日御付札を以御願之通被仰出候。此段被仰聞候事。

二月廿四日。前田利長夫人玉泉院の二百回忌法會を金澤玉泉寺に執行す。

〔官私隨筆〕

二月三日

玉泉院様二百回御忌御法事、當月廿四日於玉泉寺就御執行、御法事中三御丸御射手・御異風稽古、幷諸組弓・鐵炮稽古之儀相止候に不及候事。

但、玉泉寺近所角場に而鐵炮稽古之儀、御法事中可有遠慮候事。

一、鷹野其外諸殺生・鳴物之儀、當月廿二日より廿四日迄三日可有遠慮候事。

但、鳴物之儀藝人等稽古之儀者、御當日迄遠慮可仕事。

一、普請・作事之儀、廿二日より廿四日迄三日相止可申事。

但、指急候普請等之儀者不及遠慮候事。

右之通被得其意、組・支配へ可被申渡候。組等之内裁許有之而々は、其支配へ茂相達、尤同役中傳達有之候様、夫々可被申談候事。

二月三日　　村井又兵衛

御横目中

〔横山氏日記〕

二月廿四日

一、今日於玉泉寺、玉泉院様二百回御忌御法事御執行に付、御用番求馬・御家老方主付助中

務・若老掃部之外、御寺詰に罷越候事。

一、御前御參詣不被遊候に付御名代內膳相勤、勝千代樣御參詣無之に付御名代甲斐守相勤候事。

二月。當年藩費の支出過多なるを以て諸向の節減を告ぐ。

〔留帳拔書〕

當年御平常御用過分御不足之上、勝千代樣御出府等追々御物入相重候故、莫大之御調達高に相成、不一形御手繰に而、全く御辨用之處甚無覺束趣に候。併御出府等御入用之儀は、是非御辨無御座而は難相成儀に付、種々御詮議被仰付、依之御公務に拘候御儀は格別、其餘御內輪向之儀者、御先例に不拘、萬端成限り御事輕に可被仰付旨被仰出候條、可被得其意候。右之通當年定・不時御入用折合過分之御不足高に而、是迄無之御調達多之年柄に候間、御手繰方之模樣に寄、諸向渡り方繰延等之儀茂可有之候。且亦諸役等是迄御仕切銀に相成候ヶ所、除銀有之向々は、少分たりとも御平常方江當分御借入に致候得者、御調達方之足りに相成、御益之筋も有之候間、夫々遂詮議可被申聞。將又諸向當年不時渡し曁御修覆方等、都而大躰之分は成限り難承屆候條、右等之趣得与遂穿鑿、何分御入用渡方格別相減之候樣、前段被仰出之趣相含、精誠可被遂詮議候事。

午　二　月

右御書立今日御郡御奉行所より御渡に付、爲御承知寫相廻申候、以上。

二月晦日　　田邊次郎吉

諸郡惣年寄中樣・年寄並中樣

二月。矢を製するが爲鵠等の落羽を藩に提出すべきことを稟議す。

〔留帳拔書〕

寶曆九年御類燒後、御郡方幷遠所町方江諸落羽拾上げ指出候樣被仰渡御座候處、新川郡迄拾羽少々宛每歲指出候得共、其外御郡方等より一切指出不申候に付、先年より每度御家老衆江御達申上置候通御座候。文化五年矢天井御用御矢被仰付候砌も前條之趣に而、鵠羽等甚拂底至極に御座候付、格別御詮議御座候而、以來之儀も前々被仰渡在之、御郡方等嚴重に相心得指出候樣御達申候處、則被仰渡候由に候得共、新川郡迄は今以少々宛拾羽指出申候。其外御郡方よりは指出不申候に付、鵠羽等甚拂底至極に御座候而、御用支に相成申候。其上近年は鵠丸羽肉附之儘に而所々江指出、賣買仕候躰に相聞申候。加樣之儀御座候而は、彌御用支に相成申候間、以來相對賣不仕、當所魚問屋江指出候樣嚴重に被仰渡候樣仕度奉存候。尤魚問屋江指出候分は、於弓御土藏矢之羽買方御主附申付置候故、右之者買請私共役所江指出候間、

御縮方も相立、尤町會所において茂夫々縮方申渡も有之候得共、遠所町方等より相對賣買仕候鶴羽等之分は、私共手前においても如何とも縮方可仕手段無御座候。ヶ様之儀次第に増長仕候而は、往々必至与御用支相成候間、右肉付之分抔は、別而當所魚問屋江急度指出候様仕度奉存候。自然右相對賣買之分、私共見分仕候者御達申候間、實否相糺嚴重被仰渡御座候様仕度奉存候。鶴羽等甚だ拂底に而御用支に至り候間、鶴羽不限、都而落羽之分不寄何羽指出候様仕度奉存候。

右等之趣格別御詮議御座候様、御家老衆江御達可被下候、以上。

午　二　月

津田五左衛門

山森順左衛門

島田源太夫

八島貞右衛門

松平九郎左衛門様

石黒九左衛門様

二月。能美郡今江古城附近の行人塚より土器を發掘す。

［文政五年見聞志］

二　月

一、加州能美郡今江村古城之南蛇淵之邊に、(行人塚・首塚・胴塚与高さ三尺許之塚三有之候。)行人塚与申所に大成杉木有之。二・三年先雷落枯申候。今年御拂に相成、當月廿日頃右枯木を切根を穿候處、四尺計下に左に記し候繪圖如きもの掘出し申候。(繪圖略。)

右者皆土物也。素焼躰に見ゆる。

右之外茶碗之様成物多く有之候得共皆々損じ、此繪圖之物どもゝ多く損じ、無疵之物者一つ・二つならで無之。

三月朔日。前田齊廣療病の爲能を演じ家老等に觀覽を許す。

〔御家老方御隱密之留〕

御前御病氣色々御療養被爲在候得共、元來御痱症に而御全快不被爲在、御醫者共御僉議被仰付候處、御動作被遊候儀第一御保養に御宜旨申上候得共、强御動作も被遊兼候に付、是迄御覺被爲在候御能御保養之ため被遊候。右之御様子に付、近年御公務も不被遊、御寺御參詣等も不被遊候而、御能被遊候而爲御見被遊候儀、御不都合にて如何敷被思召候。前段之御様子に候所、年寄中も拜見相願候に付、右之御趣意被仰聞候へば、其儀者聊御指支有御座間敷、久々御目通不被仰付、御容躰茂奉見上度候間、拜見被仰付候様仕度旨段々事を譯申上候付、

年御不都合爲御見被遊候。併右之御様子故、御能半ばより御止被遊候儀も有之候。右之通御癪症に而、御近習之人々當に御前に出馴たる者に而も、時に寄御泥、御氣色に被爲障候程之儀も有之。御家臣ながら重職之人々は、別而御泥被遊候。追々御願御在國被遊、御保養被爲在候得共、御快氣被遊候儀共不被思召候付、此上は御心願通り御願可被遊与被思召候。猶更委細は歩に承可申候。前條之御趣意會得之上は、相望候者は可爲見に而可有御座旨等之事。右は當三月朔日久々に而御家老中等御能拜見被仰付候前日、奥取次御能方九里歩を以御親翰拜戴被仰付候。織江・市三郎共節當病に而出席無之、今日御能拜見前、右同人を以拜戴被仰付、至而御内々之儀故、平右衛門等ゟ御渡無御座、歩を以拜見被仰付候譯に而、拜寫爲仕候儀難仕由に付、右御書取大意之趣私に綴り記候事。

〔諸事覺書〕

三月朔日

一、今日御能拜見被仰付候旨、九里歩を以被仰出、其段藏人へ申述候付、難有奉存候、猶更同役中可申談旨御請申述候事。

但、今日右之御様子に付五時頃罷出宜候旨、昨日歩より内々申聞。

養老　權兵衛　箙　二源太　藤　彌三郎

望月　御　融　佐七郎　猩々　若殿樣

三本柱　井杭　清水　素袍落　釣針

一、御能七半時前相濟、表方席に而年寄中・御家老・若年寄一列九里步を以御禮申上、勝千代樣江御附頭を以御禮申上候事。

以下は幕令なり

三月十一日。旅行の節先觸等に關する幕令を頒つ。

〔官私隨筆〕

旅行之節先觸等之儀に付、道中御奉行御兼帶大御目付岩瀨伊豫守殿より御渡之覺書寫一通相越之候條、被得其意、組・支配幷與力且又家來末々迄可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

三月十一日　　長　甲斐守

覺

一、旅行之節若泊附無之先觸被差出候向有之候而は、於宿驛人馬觸當は勿論、旅宿手當等も

指掛り取計甚及混雜候趣に付、泊附無之先觸は指出無之樣可被致事。
一、於宿驛相對を以人馬不被相雇、爲繼送候荷物に而も貫目改所において一同相改候事。
一、都而宿繼荷物之儀、貫目に應人馬賃錢請取候間、二人前或は三人前にも向候程之人足相撰爲持送候節は、賃錢拂立之人數より相減じ、又は弱人足に候へば人數相增候儀も可有之、賃錢は貫目次第之儀に而、人數之多少には不拘筋に付、爲心得申達置候事。

午 二 月

三月十二日。學校を移築するを以て本日より授業を停止す。

〔觸 留〕

付札、定番頭江

今般兩學校仙石町筋御普請所御用地江御移替就被仰付候、當十二日より、右御普請中兩學校稽古相止候事。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談事。

三 月 横 山 求 馬

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

三月、兩學校共仙石町大槻屋敷跡江移替之儀被仰出、同十三日より御普請中學校諸稽古相止み、七月十八日より右學校諸稽古相初るなり。以前之學校は本多房州之屋敷向竹澤御園之内に有之なり。

三月十六日。德川家齊等先に陞官するを以て物を前田齊廣に贈る。

〔諸事覺書〕

三月廿四日

一、今度公方樣・右大將樣御轉任・御任槐被爲濟候付、當月十六日公方樣より上使御奏者番土屋相模守殿を以御時服二十御拜領、內府樣より上使御奏者番西尾隱岐守殿を以縮緬十卷御拜領有之、御名代出雲守樣御勤之由に候事。

三月十八日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕

三月十八日

一、今日各御能拜見被仰付候に付、年寄中等上下着用、五時頃迄に出席。

一、五半時前御能初候に付、各拜見所へ罷出候樣御近習頭誘引、何茂罷出。

一、御能七時過相濟、各表方席において九里歩を以御禮申上候事。

御番組

竹生嶋　若殿様　田村　權兵衛　杜若　御

自然居士　往來　黑塚　彌三郎　熊坂　佐七郎

祝言　弓八幡　釆女吉

鍋八撥　鼻取相撲　釣狐　泣尼　千切木

三月十九日。前田齊泰石川郡鶴來附近に行歩を行ふ。

〔横山氏日記〕

三月十九日

一、今朝六半時之御供揃に而、勝千代様鶴來邊ゟ御行歩に御出被遊、夕七半時頃御戻り被遊候事。

御道書

奥之口より松坂通、金谷御門、石浦町、香林坊橋、片町、川南町、才川橋、妙慶寺坂、泉寺町、玉泉寺前、六斗林、地黃煎町々端より、四十萬村善性寺に御休。夫より鶴來屋與兵衛方

に御休、白山社幷金劒宮江御立寄、其外鶴來城跡等も御覽被遊、御戻り御道筋最前之通候事。

三月十九日。前田齊廣の子他龜次郎等金谷御殿に移る。

〔官私隨筆〕

三月十六日

一、左之紙面到來返書遣之。

他龜次郎殿・從姫様・延之助殿

右御三方様當十九日金谷へ御引移被遊候。此段無急度被仰聞候旨、關屋中務を以被仰出候。年寄中等都而御祝詞御機嫌伺等之儀は、二御丸御廣式に而可申上旨も同人演述に候。此段爲御承知申進候、以上。

三月十六日　　村井又兵衞

奥村伊豫守様

三月廿九日。諸士の定紋繪形を提出することを命ず。

〔官私隨筆〕

御家中御歩並以上之人々定紋、曲尺一寸三分四方計中折紙に、紋繪形一寸に相調、唱方茂相

記、二枚充御次へ指出候様、關屋中務申聞候條、御自分様御定紋幷御組之分共、夫々御取立、揃次第席へ御指出可被成候、以上。

三月二十九日　　村井又兵衛

奥村伊豫守様

三月。能登口郡の宿驛に於ける飼馬料等の補助を出願す。

〔眞館覺書〕

覺

一、八十五疋　　口郡九ヶ宿之內、百姓持馬等少しに而も取續候分指除、極困窮馬御救奉願上候。

御定馬二百五十五疋

此御救四貫二百五十目　但飼料代与して一疋五十目充

惣家數千二百拾八軒

一、百九十軒　　九ヶ宿極困窮者右同斷

此救米六十六石五斗　但一軒三斗五升宛

右口郡九ヶ驛之儀、先年より御貸米或者銀子願繼、宿役相勤來候處、次第商荷物等薄、潤澤

之筋無御座、御用傳馬繁敷相成、馬借難澁に落入、連々驛馬無數に相成、當時在馬も老馬等に而、押立候御用にも相立兼候爲体に付、驛所切償合、漸宿役も相勤候處、諸色高直に相成、日用取續方難儀仕、暨馬飼葉等買請方之方便も無御座、彌増困窮に指迫り候旨に而、御貸米願上異候樣每度願出候得共、文化年中被仰付候御貸米返上相濟不申內願上候儀不相當趣等、種々申諭、何分相働宿役不指支樣可仕旨申談、取扱申族に御座候。然處右御貸米返上去暮迄に相濟申故、御貸米願書指出申に付、御達申上候處、御時節柄に而御詮議難被成下旨等被仰渡御指返、奉得共意候得共、前段申上候通、追々諸色高貴至極、是迄不覺年柄に而、取續之方便も無御座、私共幷驛所役人に於而も、取計之示談盡果、及飢申族に而宿役も勤兼、不便至極歎ヶ敷心痛仕儀に御座候。依而私共重々詮議之上、少に而も手懸御座候馬借指除、極貧窮之馬借相撰、右之通御救奉願上候間、御當節奉恐入候得共、前條之趣御賢慮被成下、御慈悲之上格別之御詮議を以、願之通被仰付被下候樣仕度、私共引請奉願候、以上。

午　三　月

高　橋　由　五　郎

岡　部　七　左　衛　門

北　村　爲　次　郎

組主付四人連名

四月朔日。先に德川家齊より贈られたる鶴の吸物を老臣等に頒つ。

〔官私隨筆〕

四月朔日

一、當春宿次を以御拜領之鶴、不押立御頂戴に付御下被下候由、御膳奉行田邊千之助演述。於席各列座拜聽候。九時過於御小書院頂戴、鶴御吸物二返、御酒三返、御取肴被下候。かよひ坊主。畢而於同所、右同人迄御禮之趣申述候。

四月四日。前田齊泰石川郡粟ヶ崎御旅屋に入り、次いで宮腰に遊ぶ。

〔横山氏日記〕

四月三日

一、勝千代樣明四日五時之御供揃に而、御鷹野之振に而爲御行歩御出。七つ屋口より粟ケ崎御旅屋江被爲入、夫より御船小屋邊迄御船に被爲召、宮腰濱御陣所に被爲入、夫より同所往還通御戻可被遊旨被仰出候段、御附頭森權太夫及届候事。

同月四日

一、勝千代樣今朝五時御行歩に御出、夕七半時過御戻り被遊候事。

四月五日。前田齊廣武器調達の費用に限り餘剰を他に流用せざるべきことを指令す。

〔諸事留牒〕

四月五日

一、左之通昨日主付より伺之處、今日伺之通被仰出。

當時定・不時御入用折合過分之御不足に付、諸役所等是迄御仕切銀に相成候ヶ所、除銀有之向々者、少分たり共御平生方ゟ當分御借り入にいたし候得ば、御調達方之足に相成、御益之筋も有之候間、夫々遂詮議可申旨、御勝手方より演述仕候。依而御武具方御入用之分は、文化七年にも被仰出之趣有之、以來堂形米三百石に二拾貫目御渡御仕切に被仰付、其後少々宛餘り銀も出來仕候に付、右銀子を以無據御修覆物等、追々詮議仕出來申渡候得共、元來御武器御手薄之內、近年御入用過分に相減候故出來高少く、此上右餘り銀も御借入に相成候而は、誠に御手薄至極に相成可申候。御武具方御入用減方之儀も、文化十年御省略等之儀格別被仰出候節、同十三年二割減被仰付候節も、段々詮議之趣伺之上、是迄之通に相成候。御武器之儀は要用之御品にも候得ば、右餘銀之內を以、年々少し宛御修覆物等、追々出來申渡度奉存候間、旁以只今迄之通に被成置候樣仕度儀に奉存候。此段一往奉伺候。被仰出次第御勝手方

江も可申達与奉存候事。

四月四日　　前田織江

四月十五日。伏見宮の使者金澤城に登りて内用の旨を告ぐ。

〔横山氏日記〕

四月十五日

一、伏見宮様御使者九半時前登城に付、御玄關階下江御大小將兩人罷出、同所より御大小將誘引に而、虎之御間江相通、追付御奏者番奥野主水罷出、御口上承り以御近習申上由之事。

御口上左之通り

加賀中將様江

薄暑之節御座候へ共、彌御安全被成珍重思召候。今般御使被差向候に付、時節御見舞被仰入候。幷上野宮御方・蓮花心院御方・御息所御方より茂、御同様被仰進候事。

四月　　伏見殿御使　本間勘解由

中將様江御進物

禁中より御到來之御中啓

壽

御讃もの　二
勝千代様𛀁之御口上無之候事。
右御口上畢而、瀧之御間𛀁御大小將誘引仕り、追付年寄中及挨拶、且其節御內用之御口上茂承り、相濟、御奏者番罷出、御大廣間上之間𛀁誘引、御茶・たば粉盆出之。追付御家老中罷出及挨拶、退候上年寄中𛀁御命之趣有之、重而罷出候事。
〔金龍公記史料〕
四月十五日。伏見宮使者本間勘解由來登城。事係親王王子締姻。

四月十六日。前田齊廣・齊泰稽古能を催す。

〔横山氏日記〕
四月十六日
一、內藏助儀今日御稽古御能拜見被仰付候に付、例刻致出席、暫有之拜見所𛀁相廻り候處、九里步申聞候に付追付年寄中与一集に罷越候事。
但、御能今朝五時過より相始り巴迄相濟、班女より拜見所は御居間續に付、脇指も帶し不申、御居間入口に殘し置候事。
白　鬚　二　源　太　巴　平　馬　班　女　御

盛久 往來　善知鳥 釆女吉　皇帝 長十郎
弓八幡 若殿樣　陀羅尼落葉 往來　船辨慶 矢十郎
野守 若殿樣　忠信 年萬

一、暮合前船辨慶濟寄之節、九里歩拜見所江罷越、御前今日融被遊筈に候處、少々御勝も不被遊候に付、融は不被遊御樣子に候。依而此次に勝千代樣野守被遊候間、夫拜見仕候はゞ、勝手に退出有之候而可然旨申聞候付、其所に而今日御能拜見被仰付候御禮、年寄中・內藏助一集に申上候事。

四月十九日。町會所より銀子を借用するものに改めて返辨の法を講ぜしむ。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

四月十九日　村井豐後守

奥村伊豫守殿

付札、定番頭江

諸役所貯用銀等之内、町會所へ預置、右利足を以、夫々役所向御入用相辨申儀に付、町會所においては諸方預り銀引集め、無據預り銀等之名目を以御家中へ貸付置候之處、追々年賦繰延、利足跡付、跡々申込次第に返納高相減、或は無縮相成、久々返納滯、毎度及催促候へども一圓返納無之向々も有之に付、諸役所へ利足渡り方にも不行屆故、不足之所は無據是迄於町會所調達を以、無滯先々へ相渡來候處、右調達銀年々利足相嵩、當時に而は過分之借財高に相成、最早昨年之所に而者如何とも取計之手段盡果、且諸役所に而は右預銀利足を以、御入用方等相辨候事故、渡り方相滯候而は、品に寄御用支にも相成候付、無是非御逼迫中、去暮右利足渡り之內從御上御償被仰付候。今般僉議之上、是迄利足は致用捨、當時殘元高改而今年より十五ヶ年賦、利足も相減六朱之圖りを以、以來取立候樣町奉行へ申渡候條、右銀子借用之人々、以後返納方嚴重に相心得可申候。尤此度頭・支配人奥書之證文に相改、引當藏縮等も取立申筈に候。當返納期月等委細之儀は町奉行可承合候。

右之趣被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之通一統可被申談候事。

壬午四月

四月廿八日。江戸詰の者の往復に餞別又は土産の持參を禁ずる前令を勵行せしむ。

〔御觸拔書〕

御横目江

前々より江戸御供等に而罷越候人々江致餞別、又は罷歸候節土產物無用可仕旨被仰出、別而去々年八月風俗等之儀一統江被仰渡候御箇條之內、餞別幷土產物一切差止可申旨、分而被仰出候儀に候得者、尤違失有之間敷儀に候得共、今般勝千代樣御出府に付猶更申渡候條、彌以右樣之儀無之樣嚴重相守可申候。

右之通一統可被申談候事。

四月廿八日　　長　甲斐守

五月五日。大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤城に登る。

〔官私隨筆〕

五月三日

備後守樣明後五日此表へ御着に付、同日御登城之儀被仰進候趣に御座候。依而御殿諸役人五時過揃に付、各々は五半時過より登城候筈に御座候間、御自分樣にも其御心得にて御登城可

被成候。且又御旅宿ゟ爲伺御機嫌各罷越申候間、御出難被成候はゞ、以御紙面御申上可被成候。右御登城に付先例之趣申上、端午之出仕無之筈に御座候。此段爲御承知申上候、以上。

五月三日　　　　　　　　前田土佐守

奥村伊豫守様

五月五日

一、夕七時頃御登城、如例御玄關へ年寄中等罷出、御通御口上被仰上相濟、甲斐守初被召候付、甲斐守・土佐守・伊豫守・求馬・内膳一所罷出候處、久敷と仰有之。引續、中將様・勝千代様益御機嫌能恐悦奉存候。次に御手前方御無事目出度存候と被仰。甲斐守御請、益御機嫌能御旅行恐悦奉存候。私共御懇之蒙仰忝仕合奉存候旨被申上。其次、舊臘は段々結構被仰出難有奉存候。其節毎度何廉御取成忝存候旨仰。段々結構之御様子恐悦奉存候。其節は毎度御書被下、其上拜領物仕、重疊忝仕合奉存趣御請。其節自分も平伏。畢而末座より退出。其次彈番殿、其次御家老中・若年寄中被罷出。

一、御居間書院代御奥書院において勝千代様御對顔。其節各・自分にも一列、并御家老中も御小書院横廊下に伺公。

但、伺公所よりは御奥書院之御様子不見、入口喰違屏風につかへ見えず候也。

一、御居間之方へ御通之御様子に付、各一先席へ罷越。

但、勝千代様御對顔之節、甲斐守殿其御席へ被罷出、御取合被申上、御居間へ御通之上甲州退座此方へ被相越。依而各も退出候也。

一、御退出程も有之間敷御様子之旨甲州被申聞。依而各虎之間御板緣迄罷出居候也。御横目往來いたし、御次宜旨申上候段申聞、折廻り之邊迄罷越居、御先立御奏者番瀧之間より出候所を見請、階下へ下り罷在。御家老中も向側へ被罷出候事。

一、御立戻之御勤相濟候上、各退出。甲州幷自分・彈番殿・內膳殿・修理殿・內記殿御旅宿へ參上。御家老不在合に付、大野才記へ逢御機嫌伺候。一先入候而、尤可被召處、只今御湯に付其儀無之旨演述、退出。

一、御迯之節も甲州御取合之品有之に付、御玄關へは不被罷出也。

〔横山氏日記〕

五月五日

一、備後守様前月廿三日江戸表御發駕、夜前津幡御泊に而、今日此表ゟ御着、御登城被遊候に付、各五半時過より追々登城。掃部儀は御飾御用有之に付、少し早目に致出席候事。

六月廿二日。能美郡安宅に火災あり。

〔文政五年見聞志〕
六月廿二日朝四時頃より安宅出火。三拾軒計殘り候事。
〔横山氏日記〕
六月廿三日
一、昨日四時頃安宅町出火、過半燒失仕候段及屆候。依而小松町奉行富田九内、追付彼方へ爲見分罷越旨、同人及屆候事。
〔諸事覺書〕
六月廿三日
一、昨日小松安宅町百軒餘燒失仕候付、小松町奉行富田九内今日罷越候段及屆候事。

六月。魚類の仲荷持等の心得に關して告ぐ。

〔觸留〕
仲荷持共諸魚荷宿江可指出候。併諸浦より魚多到來之節は、雜魚等問屋前に而可賣捌候事。
一、口錢之儀者日々可指出、若時刻遲く難指出儀も候者、問屋江相斷翌日可指出事。
一、魚代端書問屋割印を受、獵師共江可相渡事。
一、賣立帳面日々番徒共江可指出候事。

一、於浦方漁魚等有之候者、見付次第問屋江可斷事。

右天明四年申渡置候得共、近年甚等閑に相成躰に付、改而申渡候條、以來心得違無之樣仲荷持共江可申渡事。

文政五年六月

七月朔日。前田齊廣老臣等に朝顏を觀覽せしむ。

〔横山氏日記〕

七月朔日

一、今朝五時過、以坂田往來年寄中等江槿拜見被仰付候段被仰出候旨、月番演述。且出席次第、追々御奧書院於御緣頰拜見可仕旨茂同人申聞候旨に付、御家老中・若年寄中追々拜見仕。畢而御同間において右同人を以御禮申上候事。

七月五日。石動山天平寺の僧禁裏御所の撫物を守護して歸國するを以て金澤下口に於ける刑法者の取除を請求す。

〔御刑法〕

今般禁裏御所御撫物守護仕致歸國候。然所下口において御刑法者有之、通行難仕御座候間、

前々之通早速御取除御座候樣仕度、此段夫々御達可被下候、以上。

天平寺總代

文政五年午七月五日　　隨觀坊

寺社御奉行所

禁裏御撫物守護仕、石動山衆徒之內京都より御當地江到着歸國仕候處、下口に御刑法者有之、不敬に而通行指支申候付、取除之儀別紙之通申聞候間、早速取除有之候樣、公事場奉行江被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

七月六日　　富田

村井又兵衞樣

七月十八日。學校の移築成れるを以て本日より授業を開始す。

〔觸留〕

付札、定番頭江

今般御移替の兩學校出來に付、當十八日より夫々稽古相始候事。

右之通被得其意、組・支配の人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可申談事。

七月三日　　　　横山求馬

七月廿四日。前田齊廣退隱後の待遇に關する希望を告ぐ。

〔御親翰留〕

此方退隱之儀無程成就之上は、身分幕方等之儀、泰雲院殿・太梁院殿御隱居後之先振も有之候得共、是は御格別之事、此方事は左様之儀甚以憚り申次第に付、兼而內存之趣共土佐守迄申出置候通りに致度候に付、各承知無之而は難相成候に付、左に申遣候。致退隱候とも、勝千代相應之年頃に相成候迄は、國方政事之事者心添可申段は、先達而も薄々申聞置候通りに候。乍併是は此方人臣に下り輔佐之心得に候。古語にも天に二つ之日なく國に二尊なしとやら承候得者、國に二尊有之儀者、四民之心一様に難相成筋も可有之哉との恐有之道理かと存候得者、退隱之身分之者を諸人敬ひ尊ひ候事は、必不可然事に存候。此理を深く被思召候哉、水戶黃門公御退隱之後、城外程遠き所に被成御座、國中御往來之節も下座等呼候儀被禁候与承候。况此方如き不德愚昧之者、深右黃門公之御德義を奉慕、下座等呼候儀は必無用にいたし度候。其譯は國中通行之人々は、貴賤となく男女となく、皆々有用之事に而致通行候事共に候へば、夫を此方無用之身分に出合、下座蹲踞等いたし候而は、何程輕き者たり共先々用

事夫程遲り、就中親等急病等に而差急候者、不時に足を留間に合不申等之儀有之候而者、誠に國民之憂とも相成候事に候へば、隱居之身分として人之迷惑に存候儀有之候而は、實以天之恐れも有之事に候間、退隱之上者城中其外行歩等何方を致通行候とも、下座爲呼候儀は無用に致度候。人々存寄に而躊躇いたし候儀は格別、都而下々輕き者に至る迄、無貨着罷通り候事に致度候。其外萬端右に准じ、泰雲院殿・太梁院殿振に不拘、隱居附之人々は都而足輕・小者に至る迄、表之組・支配を離、悉皆手前切に而萬端相濟候事に致度候。右之次第に付門方も、城外之事に候間城方之手を放し、閑居切に而取極めいたし度、無左而は晝夜往來之人々煩敷儀を去候儀出來兼候。且又侍番所等堅固之儀も、家督中は其法も有之事、退隱之身分に而は何之堅固も入ざる事に候。其身人望を得候へば、垣一重に而も危き事は無之もの。たとへ如何程之堅固を構へ候とも、不得人望ば危き事は相知れ候事に候。然者堅固之處も手薄に罷在候とも不苦事に候。萬一不堅固に而何とか有之候とも、夫は此方之不德と申ものに而、運の極め与存候得者宜事に候。右等之趣者大凡之處爲申聞候事に候。內意者段々土佐守迄申出置候故、各々江も及示談可申与存候故、大凡之處を各承知に申聞候。何分にも許容之程希存候。其上甲斐守・內膳・又兵衛は無程江戶表へ罷越候儀。ヶ樣之儀筆談に而江戶表へ示談におよび候ても難相分事故、各出府前に此主意申出置候。何分にも此方望通各承知給候上

は、事々江戸表へ不及示談取極候儀も可有之候間、此段兼而承り置可給候。尤此儀は此方計之事に而、後々之振合にも不相成、たとひ勝千代及老年致隱居候はゞ、其節は又如元泰雲院殿・太梁院殿御振に返し候へば宜事に候。是等者全く此方一分生涯之大望に候間、何分にも望通承知有之樣いたし度候。是等之趣申遣度如此に候、以上。

七月二十四日

猶以退隱之上、此主意之趣家老共ゟも被申入置宜筋に候はゞ、演述有之樣致度候。且又土佐守事退隱之上者附之要に相成候事、各者先達而承知に候へ共、いまだ家老共は承知無之樣に存候間、是又被申入置候而宜筋に候はゞ可被申入置候、以上。

八月二日。前田齊泰金澤を發して江戸に向かふ。

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

八月二日初而勝千代樣江戸表ゟ御參府、同日金澤表御發駕、御供之年寄中は長甲斐守殿なり。

同十六日江戸表ゟ御着府なり。

〔橫山氏日記〕

八月二日

一、今日勝千代樣御發駕に付、年寄中等六半時過より段々登城之事。

一、四半時過、益御機嫌能御發駕被遊、御先立掃部相勤候事。

〔官私隨筆〕

八月二日

一、勝千代樣四半時御發駕、各幷御家老中御式臺階下へ罷出居候處、追付御出。他龜次郎殿階上迄御送り御挨拶被遊。何も罷出居候前に而御中座、天氣も宜と御意。益御機嫌能被遊御發駕恐悅之旨土州御請被申上。畢而御家老中へ御意有之、御馬上に而被爲遊御發駕候事。

八月四日。前田齊廣幼少の者に習字を奬勵すべきことを命ず。

〔文政五年見聞志〕

八月四日

一、學校江被仰出。

素讀人日々出座有之候に付、幼少人抔手跡稽古怠り勝に相成候而者、人々要用之事故、幼少之內より心懸不申而者公私共難辨筈。且業藝等には片寄申物に候間、幼少之人々江者、各より手跡稽古茂心懸候樣に敎諭有之、一ヶ月壹度宛淸書指出候樣申談候者、幼少人手習之勵にも可相成被仰出候。土佐守殿被仰渡候條、被得其意、取立方之儀茂以來各手前江被取集、每月晦日迄拙者共江可被指出候事。

松平伊豆守は吉田侯

八月十四日。大田錦城加賀藩の祿する所となる。

〔諸事留牒〕

八月十四日

一、大田才佐儀、松平伊豆守殿より御貰、二百石に被召抱、外役料百石、頭並被仰付、江戸居住被仰付。且江戸町醫者松島瑞雄百五十石被下之、御鍼立に被召抱、江戸居住被仰付候旨、今日出申遣す。

八月十六日。前田齊泰江戸に着す。

〔官私隨筆〕

八月八日

一、左之紙面到來、返書遣之。

勝千代樣益御機嫌能御旅行被遊候。當六日能生驛へ可被爲入候處、山之下親不知・駒返高波に付、同日泊驛に御逗留被遊、同夕波も静り御通行御指支無御座に付、翌七日曉泊驛御發駕可被遊旨被仰出候由。且右御逗留に付、蕨御泊被差止、上尾より直に十六日御着可被遊段被仰出候由。猶又御逗留も御座候へども何之御障も不被爲在、益御機嫌能被遊御座之旨、當六

日泊驛發足之飛脚に傳附、甲斐守殿等より申來候。先以恐悅御同意御座候、以上。

八月八日　　村井又兵衛

奥村伊豫守樣

〔横山氏日記〕

八月廿四日

一、勝千代樣御途中益御機嫌能、當十六日申の上刻御着府被遊候段、同日發足之飛脚今日到着、甲斐守等より之紙面到來に付、於表方席各致披見。相濟掃部儀も被呼出、致披見候事。右に付追付中將樣ゟ御祝詞申上、退出より御廣式ゟ罷出、方々樣ゟ御祝詞申上候筈。且今日出勝千代樣ゟ御祝詞申上、御前樣・鈔姫樣曁淡路守樣・備後守樣ゟも申上候筈。且出席無之人々ゟは、月番より直に右之趣申遣候旨演述有之候事。

八月十六日。大坂登せ米に痛米を生じたるを以て自今納方を嚴にせしむ。

〔留帳拔書〕

去年大坂御登米追々御拂米有之候所、當春に至り痛米致出來、切手相向候而も難相渡分有之、惣躰御拂米之直段に拘り、濱方氣請惡敷、御不益之趣に候間、痛米之分撰出、別段御拂可申付哉之旨、大坂詰人より申越、爲撰出候處、三千五百石餘有之、纔之直段を以夫々御拂相濟、

切手之分は立替等有之候。近年濱方仕法茂相改、右樣痛米も無之處、畢竟納方等閑に相成候故、惣躰御拂米直段にも指障り申程之儀。殊に乍少分茂別段御拂等申付候而は、御不益之至りに候間、以後納方入念相心得、右樣之儀無之樣に可被申付候。則右痛米中入札茂爲取寄候處、三州御藏々同樣に而、名前等も相知れ居候得共、先今度は別段不申渡候條、手附幷藏宿共一統嚴密相心得候樣可被申付候。勿論年々作躰にも寄可申儀に候間、作躰劣り候年柄者別而納方入念可有之候。尤以後右躰之儀有之候はゞ、中入札相改候上申渡方も可有之に付、此段も兼而可被申渡置候、以上。

午八月十六日　　　　御算用場

御郡奉行中

追而右之內中入札無之分有之、甚不審敷趣に候間、是等之儀も可被申渡置候、以上。

八月十八日。前田齊廣更に來年一・二月まで參覲延期の請を許されたることを告ぐ。

〔橫山氏日記〕

八月十八日

一、左之通今日以伊藤平右衛門表方ゟ被仰出候に付、各披見相濟、若年寄掃部被呼立披見有

之候。依而各明日相伺御機嫌候旨、月番演述有之候事。
中將樣御病氣に付、追々御願御在國、種々被加御療養候得共、御惣躰御不出來勝に而、御氣塞之方相募御難儀に付、迚長途之御旅行難被成候に付、猶又來正月・二月頃迄御參府御用捨之儀、御用番阿部備中守殿江御願書御指出被成候處、去八日御願之通御付札を以被仰出候。此段被仰聞候事。

八　月

淡路守は富山侯前田利幹

八月廿九日。前田齊泰名を又左衞門利候と稱し初めて老中を歷訪す。

〔横山氏日記〕

九月九日

一、勝千代樣御名御吉例に付、前月廿八日朝勝丸樣与御改、同日夕御代々之御名に付犬千代丸樣与御改、同廿九日又左衞門樣与被稱、同日御目見前初而、御老中阿部備中守殿・水野出羽守殿江淡路守樣御同道に而被爲入候處、御首尾能被爲濟候。將又御實名茂先達被進候由に而、利候樣与被稱候旨茂、江戸表甲斐守等より之紙面、前月廿九日出町飛脚、翌日江相延候早飛脚歩今日到着に付、於表方席各致披見、相濟掃部儀も被呼立致披見候事。

九月十一日。鬪雞を弄する者を改方に咎めしむべきことを命ず。

〔御親翰帳之内書抜〕

一、鬪雞弄候者之儀、名前等相知御達申上候はゞ何与歟御僉議も可有御座哉、其程は難計儀に候へ共、雞は身分輕き者致所持居候之處、其所江立入、其座に而買上等いたし、勝負事仕候躰に相聞え申候。役所より咎申樣に御座候はゞ自ら遠り行可申。又名前等慥に相知、御次江言上仕候樣之儀も可有御座候得共、右鬪雞御法度与申儀も無御座事故、相咎申儀も難仕、夫故名前未慥に相知れ申事も無御座候間、別紙覺書を以御達申上候。右咎候樣被仰渡儀に候へば、其通相心得可申候間、御指圖御座候樣仕度旨、神尾孫九郎九月五日申聞候に付、各示談之上、改方より相咎候樣有之可然与、其段十一日孫九郎江及差圖候事。

近く鬪雞弄候者有之躰に付、ヶ處之儀は何れ相定候儀無之躰。私手先役人共相廻候節、右樣之儀見聞も仕候はゞ、名前等内分承受候樣申渡、御達可申旨先達而被仰渡置候。右之通内分承受候迄に而は、慥成儀相知兼申儀に御座候間、取扱候者有之候はゞ爲相調理、品により咎方可申付哉与奉存候。此節又々弄候者有之樣子に付御達申上候事。

九月五日　　　神尾孫九郎

九月十二日。前田齊廣蓮池上の御殿へ移轉の後使役すべき頭分の嫡子を選拔錄進せしむ。

〔官私隨筆〕

別紙覺書兩通指進之申候、以上。

九月十二日　　前田土佐守

奥村伊豫守樣

蓮池上之御居住へ御引移之上、頭分之嫡子御用に候條、御組等御先手物頭嫡子、人品等能被相撰、歲付有之可有御書出候事。

別紙に

此度被仰出候人撰之儀、別段之思召有之儀に而、右被撰出候人々之內、其役被仰付候共御風儀に叶不申者は、暫被召仕、御取替被仰付候儀每度可有之候條、兼而頭・支配人此儀承知罷在候樣にと被思召候。且右に付御取替被仰付候とて、其人之不正不調法等には不相成事に候間、此段も頭・支配人兼而相心得罷在候樣被仰出候。尤不埒は勿論、不心得或は不調法等に而、夫々御指除御咎等被仰付候儀別段之事に候。是等之趣申聞候樣被仰出候。

九月十五日。前田齊泰初めて登營して德川家齊に謁す。

〔溫敬公記史料〕

九月十五日。初登營謁將軍。献太刀白銀綿紗良馬。

〔横山氏日記〕

九月廿四日　快晴

一、左之通今日表方ゟ伊藤平右衛門を以被仰出。

當十五日又左衛門樣御登城初而御目見被仰上、重而御前ゟ被爲召、御懇之被蒙上意、中將樣に茂御名代淡路守樣を以御禮被仰上、忝御仕合思召候。此段被仰聞候間、江戸表甲斐守等ゟも被申達、頭分以上ゟ茂可被申聞旨被仰出候。

淡路守は富山侯前田利幹

九　月

〔續德川實紀〕

九月十五日、松平加賀守子又左衛門・松平周防守子左近初見したてまつる。

九月十五日。世嗣の諱に觸るゝものに改名すべきことを命ず。

〔御觸拔書〕

定番頭ゟ

又左衛門樣御名乘字利候樣と奉稱候。御家中之人々實名、御名乘与同字有之候はゞ相改可申候。文字は違候而も唱同事に候はゞ唱替可申事。

壬午九月十五日　　前田土佐守

九月廿八日、金澤上材木町の組合頭等、切支丹類族酒屋幸右衛門の取扱に付き上申す。

〔國事雜抄〕

文政五年古切支丹宮腰町酒屋孫兵衛末類縮帳

古切支丹宮腰町酒屋孫兵衛せがれ、本人同前道休玄孫、市兵衛曾孫、七兵衛孫、與三兵衛せがれ。

一、幸右衛門 生國加州、宗旨眞言、同所卯辰寶泉坊旦那 當年七十歳

但、金澤材木町自宅居住仕候。

右之者御支配御縮之古切支丹宮腰町酒屋孫兵衛末類にて御座候。就夫私共組合に居住仕罷在候に付、私共へ御預置被成候。右之者死去仕候ば、死骸其儘置、早速御案内可申上候。尤爲私他國他領に指遣申間敷候。勿論緣組並子出生仕時分、是又卽刻御斷申上、御指圖次第に可仕候。爲其帳面上之申候、以上。

文政五年九月廿八日

上材木町 組合連名 印

組 合 頭 印

土肥權六郎殿

右之通急度縮申付置候。尤印形見屆上之申候、以上。

肝煎　甚左衞門

九月。家中の士に替紋の繪形を提出すべきことを命ず。

〔國事雜抄〕

御家中御歩並以上之人々、先達て定紋繪形は夫々指出候。且替紋有之人々は、替紋繪形も先達て之寸法通之紙に相調、替紋何と唱方相記し、二枚充可指出候。此段頭・支配人一統へ重て寄々被申談、夫々右手前へ取立、直に御次へ指出候樣可被申聞候事。

但、替紋幾通も有之人々は、上包に幾通と相記可差出候。尤替紋無之人々、其段も書出候樣可被申聞候事。

午　九　月

十月四日。前田齊泰登營して左近衞權少將に任ぜられ若狹守齊泰と稱す。

本年三月廿九日の條參照

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

十月四日將軍家於御前又左衞門樣御元服、正四位下左近衞權少將兼若狹守樣御任叙、御一字御拜領、御名若狹守樣と御改、御實名も齊泰卿と御改有之なり。

〔溫敬公記史料〕

十月四日。登營加元服于將軍前。叙正四位下。任左近衞權少將兼若狹守。賜偏諱改齊泰。有懇旨。屬杯手進肴。賜刀備前國利光。世子献裝刀卷物十馬一。遣使贈夫人銀二十枚。干鯛一筐。金龍公献裝刀銀二十枚綿三十把。贈夫人卷物十干鯛一筐。

名齊泰

文選七。啓超隆平於殷周踵義皇而齊泰。

〔袖裏見聞錄〕

文政五年十月四日

又左衞門樣御元服之節、於殿中之御作法等左之如し。

十月四日

松平又左衞門殿

御黑書院巳上刻公方樣・內府樣出御。

右元服依被仰付、於御緣頰御目見、御奏者番披露、御下段御敷居之內御右之方着座。此時御字之折紙御硯蓋に載之、御側衆持出之、御右之方に置之、下野守殿に被渡、御一字被下旨被相達。又左衞門殿中座有而頂戴之、御次之間へ持退。于時可任叙正四位下少將旨上意之趣、下野守殿被演達之、御老中方列座、其後御禮有之。

又左衛門事

松平若狹守齊泰（ナリヤス）

作御太刀・金五枚・卷物十・御馬裸脊一疋

右之通献上之、於御緣頰御禮、御奏者番披露。御馬一疋与言上之。上意有之。御一字幷官位之御禮被申上旨、御老中言上之。御次之間へ退去、進物引之、重而若狹守殿出座、御下段御敷居之內御右之着座。御盃・御引渡・御肴・御捨土器。若狹守殿ゟ茂引渡足打に而出之。御酌・御加御前へ被召上、御加有而、其御盃御銚子に載之、御下段中央御酌扣有之時、若狹守殿御次へ被退、小サ刀取之出座、頂戴之。御肴被下復座、加有之時、御刀備前國利光、代金二十枚。御側衆持出、御右之方御上段御緣頰置之。此節御老中被取渡、頂戴而刀持之、御次之間へ退座。刀帶之出座。於御緣頰御禮、御道具被下難有由御老中言上之。退座、刀置之、小サ刀帶之罷出、一獻加、御盃を持退座、御銚子入。此節獻上之御刀肥前國忠廣、代金十五枚。御奏者番持出、御太刀・目錄披露之席に置之。御老中方被罷在候方へ退く。若狹守殿出座、御刀差上旨、御老中言上之。若狹守殿最前之席へ着座之時、御刀御奏者番引之、御引渡等引之、御禮之儀御老中言上之、退座。

作御太刀・白銀二十枚・綿三十把　松平加賀守殿

名代　松平淡路守殿

右之通獻上之、於御緣頰御禮、御奏者番披露。

若狹守殿元服之御禮申上旨、御老中言上之、御老中方御取合被申上之、退座。

〔甲子夜話〕

行智は加賀の支族に出入する者なり。誰より傳へ聞けん、加州の世子幼年にて殿上元服の時この世子といへば、故の加州の嫡子又左衞門と稱し、過し文政五年九月十五日初て御目見、翌十月四日元服被仰付、御一字被下齊泰と名のり、正四位の少將に敍し若狹守と稱す。御前にて御盃被下、御拜領せらる。備前國利光代金二十枚。例この拜領の御刀は、御前を下り御次にてこれを帶び、再び御前に出で御禮申上る事なるよし。因て此時拜領の後、某取計ひの人其役名を忘る。に御刀を持ち下り、又左衞門へ渡さんとするに、又左衞門何のいらへもなく、兩手を袖と共に上へ揚て待ち居る體ゆゑ、某止むを得ず御刀を又左衞門に帶させたれば、迺再び御前へ出で、御禮申上畢れりとぞ。皆人大家の優長なるを歎美せりと。

〔横山氏日記〕

十月八日

一木逸角へ

十月八日。一色源右衞門等多數の士不行狀を以て處罰せらる。

本年十月廿三日の條參照

一色源右衛門

右源右衛門儀不行狀至極之趣に付、御咎被仰付置候所、其以來御咎中不愼之趣に相聞え候付、越中五ヶ山之內流刑被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候。

但、配所江被遣候迄之內、一類共江御預被成候條、急度縮仕置候樣一類共江可被申渡候。尤一類共交名可被申聞候事。

壬午十月八日

湯原主馬江

堀　與一右衛門

右與一右衛門儀、不行狀至極之趣に付、御咎被仰付置候所、其以來御咎中不愼之趣に相聞え候付、越中五ヶ山之內流刑被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候。

但、配所江被遣候迄之內一類共江御預被成候條、急度縮仕置候樣一類共江可被申渡候。尤一類共交名可被申聞候事。

壬午十月八日

定番頭江

定番御步　大脇六右衛門

右六右衞門儀、先年御咎も被仰付候處、今以不埒至極之心得沙汰之限りに付、能州嶋之內流刑可被仰付旨被仰出候條、此段可被申渡候。

但、配所ゟ被遣候迄之內、一類どもゟ御預被成候條、急度縮仕置候樣一類共ゟ可被申渡候。

尤一類共交名可被申聞候事。

〔橫山氏日記〕

十月九日

一木逸角ゟ

一色源右衞門嫡子

一色源三郞

右源右衞門儀、越中五ヶ山之內流刑就被仰付、父依罪源三郞儀能州嶋之內ゟ流刑被仰付。

但、配所ゟ被遣候迄之內、一類共ゟ御預被成候條、急度縮仕置候樣一類共ゟ可被申渡候。

尤一類共交名可被申聞候事。

右之通被仰出候條、可被申渡候事。

壬午十月九日

湯原主馬ゟ

堀與一右衛門せがれ
堀　鉄八郎

右與一右衛門儀、越中五ヶ山之內𛀁流刑就被仰付候、父依罪鉄八郎儀能州嶋之內𛀁流刑被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候。

但、配所𛀁被遣候迄之內、一類共𛀁御預被成候條、急度縮仕置候樣一類共𛀁可被申渡候。

尤一類共交名可被申聞候事。

壬午十月九日

〔文化より弘化まで日記〕

十八日は八日の誤

文政五年十月十八日閉門被仰付人々御馬廻組馬淵長太夫五百石。後斷絶堀爲平四百五十石。百石御減少片岡左膳二百石平松庸之助二百石小篠善四郎百五十石。十石御減少三原順左衛門百五十石。三十石減少奥村喜兵衛百五十石定番御馬廻岡山森江百三十石福田余所助百石。十石御減少河合得馬百石。後斷絶篠田余太夫百石。後斷絶矢部七郎兵衛百三十石今村宇兵衛百三十石長屋仙次郎百石御異風分部十左衛門百八十石今村吉平百五十石與力石原伊太郎・植松七兵衛二百石德田仙助・服部新左衛門・坂井松三郎・生熊與三兵衛・永井助進・澤崎元右衛門二百石中村和作・杉野覺左衛門・豊島平三郎・定番御歩小石彌八郎・御細工者金子武右衛門せがれ金子甚左衛門親武右衛門へ急度御預御馬廻組頭一色源右衛門千五十石堀與一右衛門二百石。此人越中五箇山流刑定番御步大脇六右衛門能州島之內流刑御弓師岡源左衛門閉門御

醫師大石三益一類に急度御預

其後茂追々御咎有之、町人等茂大勢御咎被仰付。

十月十三日。金澤に於いて諸士に前田齊泰元服任官のことを告ぐ。

〔横山氏日記〕

十月十二日

一、左之通紙面江戸表より到來に付、於表方席各致披見、相濟掃部儀呼立有之、披見いたし候事。

猶以共趣伊豫守殿等、幷若年寄中江も御傳達可被成候、以上。

又左衞門樣御元服被仰付候條、今四日御登城可被成旨、御老中方御連名之御奉書、昨日又左衞門樣江御到來。且亦右に付中將樣より御名代を以御禮被仰上候樣、御用番青山下野守殿江聞番御呼立御書付御渡に付、御名代淡路守樣御勤之儀、先日之通聞番御使相勤申候。今朝六時過淡路守樣被爲入、又左衞門樣御同道御登城被成候處、於御黑書院御目見被仰上、御一字御頂戴、被任少將、御名茂若狹守樣与御改、御懇之被爲蒙上意、御盃・御肴御頂戴、御腰物御拜領被遊。中將樣にも御名代淡路守樣を以御禮被仰上、重疊難有御仕合被思召候。此段被仰聞候。諸合頭分以上江甲斐守より可申聞置候。追而一統從中將樣被仰聞候筈之旨、拙者ど

も御前江被召出、御意御座候に付、則頭分以上江申聞候。此段被達御聽、直姫様初御申上可被成候。先以段々結構成御様子、恐悦御同意御座候。且又於殿中之御作法書拜見被仰付候付、寫一紙爲御承知指進申候。御次よりも御用有之、旁早飛脚申渡、右之趣申進候、以上。

甲斐守

修理

土佐守等十人様

〔横山氏日記〕

十月十三日

一、四半時過御大廣間江年寄中・御家老中罷出、左之通御弘之趣、頭分以上之人々江月番求馬申聞有之候事。

當四日又左衞門様御登城、於御黒書院御目見、御元服被仰付、御一字御拜領、被任少將、御名茂若狹守様与御改、御懇之被爲蒙上意、御盃・御肴御頂戴、御腰物御拜領被遊。中將様にも御名代淡路守様を以御禮被仰上、難有思召候。此段何茂へ可申聞旨被仰出。御實名齊泰様与被稱候事。

十月十三日。前田齊泰の諱に觸るゝものに改名すべきことを命ず。

〔官私隨筆〕
別紙寫之通定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候條、御組等へ茂御觸可被成候、以上。
十月十三日　　　　　　　　　横山求馬
奥村伊豫守樣
定番頭江
若狹守樣御名乘御一字御拜領、齊泰樣と奉稱候。御家中之人々實名同字有之候者、相改可申候。文字は違候而も、唱同事に候者唱替可申事。
壬午十月
十月十四日。前田權佐の家老を罷めしむ。
〔金龍公記史料〕
九月廿九日有旨返權佐于國。
〔官私隨筆〕
十月十四日
一、前田權佐殿江戶詰中候處、早速罷歸候樣被仰出、昨日歸着之處、不應思召趣有之、役儀被指除、遠慮被仰付段、組頭於豐後守殿宅今日申渡由承之。

〔横山氏日記〕
十月十四日
一、權佐儀思召有之に付本役・兼役とも被指除候段、組頭豐後守於宅申渡有之候段月番演述に付、支配之人々ゟ夫々爲承知申聞候事。諸向ゟ之承知は月番より御横目ゟ申渡有之由。
〔金龍公記史料〕
十月十四日罷前田權佐恒固家老。以在江戶邸外有不德之行也。處遠慮。

十月二十日。前田齊廣蓮池上の御殿に移轉の日を以て家老等に物を献るべきことを告ぐ。

〔御獻上方留帳〕
今般新御殿御造營御出來に付、御肴一種充、外に御屛風一双充御献上に候。依而右御殿竹澤御殿与奉唱、十二月十六日に中將樣御引移被爲在候節、御同所ゟ表向以使者御献上に付御廻狀、幷御屛風御繪等左之通。繪略。
御居住所ゟ御引移之上、何茂より御祝詞献上物之儀相窺候處、御肴一種充獻上可有之、且又御用立候品茂窺之通可指上旨被仰出候條、左樣御承知可被成候。就夫御用立候品物之儀、大地縫殿左衞門等ゟ及示談候處、御屛風品數御用に候間何茂より御屛風一双充献上仕可然候。

則其段申上置候旨申聞候。依之出來方之儀猶又遂示談、別紙之通に候條、是又左樣御承知可被成候、以上。

十月二十日　　　　前田土佐守

津田内藏助樣

橫山藏人樣

前田中務樣

前田掃部樣

追而織江殿・修理殿・內記殿・市三郎殿も本文之通献上に候間、左樣御承知、夫々御申遣候樣に奉存候、以上。

十月廿三日。諸士に先祖由緒一類附帳を提出すべきことを命ず。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通定番頭へ──────以上。

十月二十三日　　　　橫山求馬

奥村伊豫守樣

定番頭へ

年寄中席へ、御家中之人々先祖由緒一類附帳、先達而指出置候處、年月を經候間、此度增減等相改、當十二月中迄に可指出候。帳面口張等に不及候。本組與力且御步等之內、御知行被下候人々之分も、最前之通可差出候。當時舊宅幷御咎被仰付置候人々者、代判人より可指出候事。

右之趣組・支配有之面々へ可被申談候事。

十　月

本年十月八日の條參照

十月廿三日。前田齊廣先に多數の士を處罰したる理由を發表す。

〔御親翰帳之内書抜〕

十月廿三日

寺社奉行等・定番頭等

家中之人々不心得之者共、今般人多に咎申付候儀、甚不便之事に而難忍存候得共、右之人々其品顯し不申候得共、實は博奕之趣も相聞候。不及申事ながら、右は何茂承知之通、於公邊嚴重之御制禁に候處、右之風俗家中に多相成候而は、奉對公邊候而も恐入候次第に付、乍心外今般は人多に咎申付候事に候。是迄も壹兩人右博奕之躰相聞候得共、加不便其品顯不申咎申附候事に候得ば、其所を存付別而人々相愼可申處、却而致增長候族不屆之事に候。其上下

に而人多にも咎も難申付ものなどゝ致推察候而、彌黨を多く引入候樣に相成候而は、次第に不埒之者多く相成、後には家中一躰に相成候而は、彌難手指相成候條、以後は頭々共心得に而、人多に相成不申內、不心得之者は可及言上候。可相成丈けは致異見、教諭を加へ、其上にも相嗜み不申者は速に可達聽候。暫与相扣罷在候內、いつしか人多に相成り候事に候間、一殺多生之理を存付、以後は一人に而も見出次第可及言上候。頭々も忍兼候而、先々相扣罷在候內に人多に相成候而は、却而不仁に相成り、一人に而も見出次第嚴重に申付候儀は、却而仁惠に候之條、其所能々存辨、油斷無之組・支配之人々を可致世話候。是等之趣申聞度、側近く呼爲申聞候條、急度致會得、右等之趣相心得可申事。

別紙之趣爲申聞候に付而は、何れも定而每度達聽度儀可有之候。然其此方多用中面倒にも可有之哉与、其處を恐れ相扣候樣成心得之者も可有之与存候。其儀は聊相厭申間敷候。追々世話も行屆、少しに而も士風宜相成候へば、此上之大慶は無之事に候間、於此方は何程事多に相成候共、聊面倒に存候筋は無之候條、此段も爲心得申聞置候。

十月廿三日。前田齊廣、先に閉門を命ぜられたる者と嚴に交通することなかるべきを命ず。

〔御親翰帳之內書拔〕

十月廿三日

一、左之御親翰縫殿左衛門を以被渡下、何もゟ為承知拜見被仰付置候旨被仰出由演述之事。

寺社奉行等・定番頭等

家中之人々咎申付候上、懇意之人之通路等之儀、以前とは何となくゆるかせに相成候様にも相聞候。其上心得違之人々は、格別懇意之者ゟ、咎中にもひそかに罷越候様なる趣粗相聞候。たとひ輕く差扣申付候者たり共、上より咎申付候者に候得ば、如何程懇意たりとも、ひそかに罷越語り合等は相憚り可申儀に候處、左樣之處存附薄き人々も有之哉に相聞候條、右等之趣も人々相心得可申、組・支配等之人々も、右樣之儀ゆるかせに相心得不申樣常々致教諭可申事。

十　月

十月廿四日。浦方の者にあらざるも渡海船を所有し得べきことを告ぐ。

〔御郡典〕

御領國中於諸浦、船稼之儀相勵、渡海船多致所持候得ば、商方手續に而、船持は勿論、出津・入津共多く、輕き者迄も潤、所方繁榮之基に候處、諸浦に相成、往々小船多候而大船・中船之分數少く候。右は元來浦方之外は渡海船致所持候儀難相成候与聞得候に付、此度詮議之

上、向後何方之者に而も渡海船所持之儀指解候條、此段一統江可被申渡候。尤御領國中は何れ之浦に而船致所持候与も、人々可爲勝手次第候。然上は以後他國之名代を立、船致所持候者於有之には、吟味之上船幷往來札取揚、被雇候船頭・水主共急度可申付候。依之以來金澤町を始、遠所・町在共渡海船致所持候者は、何れ之浦に而も名代相立、譬ば船主住居金澤町、或は何郡何村何方浦何屋誰、名代何浦何屋誰与相認、船往來札指出候ケ所之町奉行等江可願出候。勿論船方に付候儀は、其浦居住之船持之通相心得、船往來札出候町奉行等申渡候趣致違背間敷候。自然是迄他國者名前に而密々船致所持候者有之候はゞ、何れ之者に而も右之通速に相改、地船之內江加り、御用等仝可相勤候。則所々往來札指出候町奉行等江、相願候節之名書、幷船往來札調方、別紙草案之通に候。右之通遂詮議、御用番年寄中江相達候處被承屆、夫々可申渡旨に候條、被得其意、御自分支配所一統可被申渡候。且亦是迄地舟銘々乘組人數、他國船与は人少に付、難風之節働方不行屆躰に相聞得、人命にも拘り候儀。殊に積高に應じ人數定も有之候處、無謂相減じ、或は便船之趣に書出、年分爲致乘船候者も有之躰、甚不埒之儀に候間、以後人數不相減、渡海丈夫に爲致候樣、船主共江嚴重可被申渡候、以上。

壬午十月廿四日　　御算用場

御郡奉行中

野村隼人殿

十月廿五日。先に命ぜられたる風俗に關する制限を恪守すべきことを告ぐ。

〔官私隨筆〕

別紙之通一統申渡候に付――御組等も――以上。

十月二十五日　　横山求馬

奥村伊豫守殿

去々年風俗等之儀に付段々被仰出候御趣意通り、一統申渡候通に候處、是迄も度々風俗等之儀被仰出有之候へども、其所へ至不申候處、去々年被仰出に付而は會得有之人々も有之躰。併御主意通之被仰渡方、一端之樣に相心得候者も多有之躰。中には心得違之人々も有之候へば、不被得止事被加嚴制候所へも至り申儀。左候而は是迄分而被仰出候御主意も相立不申、誠難被爲忍御儀と奉恐察候。前段被仰出候御主意通、一統日夜無違失心意に存込、相守可申儀肝要に候。拙者共へ毎度被仰出有之候付、改而此段申渡候事。

右之趣被得其意――――事。

文政三年九月晦日の條參照

横山求馬

十月廿六日。武學校に出席するもの少きを以て之が督促を命ず。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通一統申談候樣、學校頭へ申渡候付、爲御承知進之候、以上。

十月二十六日　　前田土佐守

奥村伊豫守殿

學校頭ゟ

武藝心懸之儀に付、舊臘被仰出之趣有之、當春頃者格別武學校出座人茂多有之內、兩學校御移替に付餘程稽古被指止置、夫々稽古方自由に相成候樣被仰付候上は、一入出座人も多可有之處、却而春よりは相減、師範人宅に出座も薄躰に相聞え、加樣に有之候而は、一旦騷立候樣に入情いたし、又怠りもはやき事に而、御心外に被思召候与、舊臘被仰出置候御趣意に可相當人々可有之、一々御聞糺有之上、諸藝之事に候へば、一方は怠り候共、又一方入情いたし罷在候人々は、道理可相分候へども、無謂怠り申譯難立人々有之候而は、右御心外被仰出置候御趣意を以、如何思召被爲在候茂難計候。既に有祿之人々等不心得之趣有之、大勢御咎被仰付候儀は、一統承知之通候。無息之人々、或は年若成有祿之人々成立惡敷、畢竟侍之本

意を取失候而は、先祖へ之不幸、本より御國民を大切に被思召候御趣意を以、兩學校も被建置候へ者、其御趣意を不相守ては、忠孝忘却之基とも可申哉。近く出座人も薄く相成候付、何等被仰出無之以前、人々心得に右等之趣各へ申聞候條、被得其意、一統可被申談候事。

午　十　月

十月廿七日。前田齊廣將に隱居を請はんとする內意を老臣に告ぐ。

〔藤懸賴善手記〕

十月廿七日

一、中將樣御儀御持病之御疝邪、其上御氣塞之御症に而御難儀被爲成、追々御願御在國被遂御療養候得共、御快氣之期も無御座、依之御隱居被遊、若狹守樣ゑ御家督御相續被仰付候樣、來月中旬頃御願可被遊思召御座候。此段以御使者御內證被仰進候段、御口上神戶嘉平を以申上候之處、同人を以應じ御返答被仰出候。

十月廿七日。二朱判及び眞鍮錢の通用を圓滑にすべきことを告ぐ。

〔官私隨筆〕

二朱判通用方之儀に付、安永元年・同二年從公儀相渡候御書付之趣、一統相觸置候通に候所、今以取扱不申向も有之由相聞え、以來は御貸渡幷上納方等、無泥取扱候樣、於御勝手方夫々

申渡候條、彌無指支可致通用候。

一、眞鍮錢一文に而並錢四文代に通用方之儀も、明和五年從公儀相渡候御書付之趣一統相觸、曁吹增被仰付候趣等、當春相觸候通候條、是又同樣可致通用候。

右之通被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。

右之趣可被得其意候、以上。

十月二十七日　　村井豐後守

〔留帳拔書〕

付札、御算用場奉行江

於小拂所貳朱銀幷四文錢是迄取扱不申由に付、以來者取扱可然趣各遂詮議候所、是迄御算用場において貳朱銀之儀は上納方取扱來候得共、簡所に寄取扱不申向も有之、不相當儀に候間、以來右兩品共御貸渡米上納方江入交取扱候樣、諸向被申渡可然旨詮議之趣被申聞候。依之右詮議之通一統不差支樣申渡候條、可被得其意、且又兩品とも御用之儀稀に候間、小拂所御貯用方之儀は、各示合候樣申渡候間、程能可被相計候事。

壬午十月

右紙面之趣、御算用場より申談候に付、寫相越之候條得其意、夫々可申渡置候、以上。

淺加伊織

午十一月五日

羽咋・鹿島郡惣年寄中・年寄並中

十月廿八日。保田安左衞門等不行狀を以て流刑に處せらる。

〔橫山氏日記〕

十月廿八日

保田安左衞門

同人弟七郎

進士源兵衞・竹田彥六郎江

右兩人共愼中甚不屆至極之儀有之に付、兩人共越中五ケ山之內流刑被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候。

但、配所江被遣候迄之內一類共江御預被成候條、急度縮仕置候樣一類共江可被申渡候。尤一類共交名可被申聞候事。

壬午十月廿八日

十月。前田齊廣、頭役たる者の心得を諭す。

〔御親翰寫〕

本年十月廿三日の條參照

馬廻頭・小將頭

今般人多に咎申付候事に付、此間中何れも相招心得申聞候に付、其方共より申聞候趣に付、此間藏人を以申聞候口述書之通に候。依之猶主意之趣共左に申聞候。

一、是迄頭々之心得之樣子相考候處、組等之內不心得不行狀有之候とも、先づは不達聽、何分にも加異見、其上不嗜者も有之候而も、達聽候事を甚相厭、可成丈けは口を閉居候事与存候。其子細者、組等之內不心得不行狀等之儀、少しに而も達聽候得者、速かにも咎申付候ものゝ樣に恐れ、且は右樣之儀達聽候はゞ、其頭も不仁之樣に覺え候より、段々与達聽候事を相扣候內、君臣之間隔り言路塞り、夫より自然と不宜儀致增長候事に候。一旦相厭、達聽候事を扣罷在候は、仁愛に相達は無之候得共、却而惣樣之仁惠には不相成、惣躰之仁惠に不相成候得ば、則國政之仁惠に不相成候。依之偏に君臣之間隔り不申、言路相開き、萬端小惡之內に相正し不申而者、主意通り士風も相改不申事に候。依之以後は頭々得与相心得、組等之內不行狀不心得、或不正不義不作法、何事に不依不宜風評承り候はゞ、たしかに承り候事は差付加異見可申、たしか不成儀承り差付難申儀は、直に達聽可申。左候へば此方に而承糺、其趣を委細其頭江內分可申聞候間、夫を以加異見可申、異見及四五度不改者は、又々速に可達聽候。たとへ頭々より、組等之內不心得等之儀達聽候とて、容易に咎申付候譯に而も無之、

重々加憐愍候て、無是非次第に至り不申而者、重き咎等は不申付事に候間、左様之所無泥、風評たりとも見聞次第可達聽、ヶ樣に細かに世話行届不申而者、追々風俗立直り、見事之士風に至り申所ゟ者至り不申候。是迄之所は、頭々より組之人々之儀に付、人別封じ物を以申越候樣成儀は至て稀に而、夫も多分指定り候分迄に而、不時に心を用ひ申越候樣成事は一圓無之候。何程何れも下ゟは致世話候とも、此方ゟは致世話哉、致世話不申哉一向相知れ不申、常々無心許存る事に候。以後は何れも心を用ひ、前段に調候趣を、人々器量次第每度可申越候。左候へ者頭々之心得も此方ゟ相知れ、人々出情之便りにも可相成候條、以後右之通り取りつくろひなく、有躰之所を人々見聞次第可達聽候。是等之趣其方兩役ゟ申聞外、相招不申聞候間、其方共より諸頭其外支配有之、申聞候而も可然人々ゟは、得与可致演述候。主意相違無之樣、克々會得之參り安き樣其方共申解き、中には才知も薄く、會得も急に難致人々も相見え候間、得与此書面に其方共註解を添へ、深く會得成り安き樣に可申談候。尤不申聞候とも、何れも是程之儀は會得之事に可有之候得共、於此方家中士列は不及申、國民子之如く存る事候得ば、今般之樣に嚴重人多に咎申付候。妻子之なげき、一族之かなしみ、察入候而者寢食も不安不便之儀に存候得共、禮を尊み義を重くし、不正をいましめ正敷を賞する國政之第一に候得者、此方一己之愛情には不替ゐ儀故、加嚴令候事に候得ば、加樣に此方も存罷在

候儀を存付、人々組・支配之儀成立致世話可申候。今般咎之内にも、咎中不心得之者などは誠驚入事共に而、ヶ樣に恥を忘れ不法不埒出來之儀、實になげかしき事に候。只々人々心中より侍に不似合所行は恥入候樣に成り、義を重んじ禮を專らと相心得、正敷を專らと致候樣に相互に相成候はゞ、自然と不輕事正敷に至り可申候。頭々も只理不盡に押へ付、惡事を爲致不申樣にては、却而陰惡致增長候道理に候間、かりそめの教諭方も、心中より恥を知り候處ゑ至り候樣に致辯解相示し候はゞ、自然に宜に可至候條、是等之所得与其方共より諸頭等へ可申談候。

十　月

十月。寺庵の勸化に隨ひ身分不相應の寄進を行ふべからざることを令す。

〔御郡典〕

付札、惣年寄ゑ

寺庵勸化之儀に付、前々被仰渡之趣も有之、心得違無之樣申渡置候處、近來身分不相應之寄附いたし候者も有之、別而一向宗寺庵は寺格昇進之儀甚多、專勸化を以父祖を越昇進之寺庵も有之躰。曁始祖等遠忌執行等之節は、本堂或は門等修覆或は建直し等、彼是門徒之費不少躰。中には門徒之內前々申渡置候趣會得いたし罷在候者も有之候得共、且那寺より無餘儀相

勸め候得ば、無味に斷候儀も致兼候族も有之躰相聞得候。百姓手前衰候得ば、第一御收納に拘り、不容易儀申迄も無之候條、以後聊心得違無之様、急度可申渡候。如此申渡候上、心得違之族於承及には、無用捨嚴重遂穿鑿咎可申付候。此段末々迄不相洩樣、綿密可申渡候事。

午十月　御郡奉行

能州羽咋・鹿島兩御郡村々役人

十月。能登に於いて祭禮に際し踊・物眞似を催す者あるを戒む。

〔留帳拔書〕

附札、惣年寄等江

能州奥・口とも町立之箇所等、家數相應に有之所は、神事祭禮等を申立、子共踊等相催、中には松任・富山等より右樣之所業之者を呼寄、子供等に爲習申樣之族有之躰に候。於御郡方右樣かぶき惣而御停止之儀、何れも承知之事に候處、不屆至極之儀に候。祭禮等之時分、在方相應之賑之儀は格別、右樣之踊・物眞似等一圓相催間鋪、此上にも心得違之族於有之者、嚴重に相糺、急度咎可申付候。此段村中一統申談、以來右樣之儀相愼、質素之風俗肝要に心得可申者也。

壬午十月　御郡奉行

能州四郡村々役人江

十一月四日。磔刑に處せらるゝ者の子を斬するの法を改む。

〔金龍公記史料〕

十一月四日。除受磔以上刑者子處斬律。先是有被磔以上刑者。其子不問幼壯一切斬之。太梁公屢議欲除此律。老臣及獄官長曰。祖宗之法不得革。固執不聽。公繼太梁公之志。亦欲除之久矣。至是斷然下諭曰。國初所定受磔以上刑者子一切處斬之法。懾服一時之權道。非所以治浴至治之澤民。詔曰悼與耄有罪不加刑。况至以親罪施刑無知之幼稚。甚無謂也。今後不問年長幼。一切除此律。

〔永井不陳覺書〕

一、自今已後親之科輕重に無御構、足輕以上名字を持候者死刑に被仰付候はゞ、其者之せがれ男子之分は殺害可被仰付候。乍然せがれ・孫共に大勢有之者之儀は、到其時親手前被仰付品可有之旨被仰出候由、寛文五年公事場帳に有之。

右之通に候處、文政五年從金龍院樣被仰出之趣有之、身柄之者父死刑之せがれは流刑、父流刑之せがれは無御貪着預御免之事に被仰渡、公事場帳に有之。

十一月六日。御步橫目石黑門馬等町方の饗應を受け、且つ茶屋町に遊ぶ

を以て蟄居を命ぜらる。

〔横山氏日記〕

十一月六日

一、左之通表方に而申渡有之。

里見七左衛門江

御膳所御歩横目　石黒門馬

右門馬儀、御膳所御料理人共伴ひ、於町方預振舞、其上直に茶屋町へも罷越候段相聞え、役儀も有之儀、御縮方第一に候處、不屆至極之心得沙汰之限りに付、急度可被仰付處、其儀御用捨、役儀被指除、蟄居被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

午十一月六日

山口左次馬江

御膳所御歩横目　杉本瀬左衛門

右同斷。

十一月六日。奥村伊豫守その臣河毛次郎兵衛の處罰を命ぜられたるも該當の者なきことを上申す。

伊豫守殿江

御家來河毛久太夫せがれ　河毛次郎兵衛

右次郎兵衛儀不埒至極之趣相聞、御家中之風俗之妨にも相成候條、主人了簡次第急度咎可申付旨被仰出候條、可被得共意候事。

午十一月六日

私家來河毛久太夫せがれ次郎兵衛儀に付、被仰出之趣御覺書之通委曲奉畏、先以於私迷惑之至奉存候。然處久太夫せがれ共之内次郎兵衛と申者無御座、嫡子者五郎兵衛与申候而私召仕申候。二男孫兵衛者當時岡田十郎兵衛家來に御座候。四男彌八郎儀は當時久太夫手前に罷在申候。依而猶又久太夫へも相尋候處、次郎兵衛と申者は無御座候。若孫兵衛儀改名茂仕候哉。併左様之儀も承不申旨申聞候。右之通に御座候條、如何相心得可申候哉、御指圖可被下候。五郎兵衛儀先爲指扣、彌八郎儀は不縮無之様親久太夫へ申渡置候、以上。

十一月六日

御家來河毛久太夫せがれ次郎兵衛儀に付被仰出之趣、當六日覺書を以申達候處、右せがれ共之内次郎兵衛と申者無之に付、嫡子五郎兵衛先指扣、四男彌八郎不縮無之様御申渡置、二男

孫兵衞儀は當時岡田十郎兵衞家來之由等、御紙面等之趣致承知、則其段相達御聽置候所、次郎兵衞と被仰出候は右孫兵衞之事に而、今日於盜賊改方入牢被仰付候。五郎兵衞等は御貪着無之候條、御指宥可被成候、以上。

十一月十三日　　村井豐後守

奥村伊豫守樣

十一月八日。前田齊泰五節句及び月次の登營を許さる。

〔御年表〕

十一月七日、向後五節句幷月次御禮御登城之儀、御願書被差出候處、同八日御用番水野出羽守殿より、以御付札御願之通被仰渡。

本文は前田齊泰の事に係る

十一月八日。前田齊廣の退隱したる後に在りては前田土佐守を以て專屬の老臣とすべきことを告ぐ。

土佐守は前田直時

〔官私隨筆〕

兼而被仰聞置候通り、近々御退隱御願書被差出候。御願之通被仰出候上は、土佐守殿御身附之儀今日被仰渡候。依之月番幷學校方御用者御免除被成候旨、今日同人へ被仰渡候。此段御

内々爲御承知申進候、以上。

十一月八日

十一月十日。前田齊泰本郷邸に能を演ず。

〔諸事覺書〕

十一月十日

一、今日御能有之付、各五時頃出席、同刻過御能初拜見に罷出。

御番組

雨月　彌一郞　通盛　淡路守樣　龍田　若狹守樣

藤戸　出雲守樣　歌占　往來　土蜘　若狹守樣

昭君　寶生大夫　附祝言

水懸聟　飛越　武惡　蝸牛　右近左近

一、御能六半時頃相濟、何茂御附頭を以御禮。

但、織江儀風氣に而御中入に而御禮申上退出之事。

十一月十三日。德川家齊放鷹によつて得たる雁を前田齊泰に贈る。

〔諸事覺書〕

十一月十三日

一、八時過御城下り之附人來に付、甲斐守等三人服紗小袖・上下御式臺へ出懸罷在候處、本郷三丁目之附人來、御門外へ罷出、御拜領之雁持來、御作法書之通無程上使御使番伊藤監物殿御越、若狹守樣御式臺鏡板へ御出迎、御先立大書院へ御着座、上意御拜聽、雁御頂戴。御盃事は御斷、御取持衆之內米田平太郎殿御相伴に而御菓子等出之。夫々相濟、御請被仰述、御退出之節最前之通之事。

一、今日以上使初而御鷹之雁御拜領被遊候恐悅、御附頭を以申上候事。

一、中將樣ゟ今日之日附に而紙面を以御祝詞申上候事。

一、上使御退出之上、追付之御供揃に而御出、御老中方等御勤之事。

〔官私隨筆〕

去十三日若狹守樣へ上使御使番伊藤監物殿を以、御鷹之雁初而御拜領被遊候段、同十四日出町飛脚早飛脚に傳附、甲斐守殿等より昨夜申來候。且又御同所樣向後五節句幷月次御禮御登城之儀御願書、去七日被指出候處、同八日御願通被仰出候付、同十五日初而御登城、御首尾能御禮被仰上候段、同十六日不時立町飛脚早飛脚步に傳附、甲斐守殿等より只今申來候。先

以恐悦御同意御座候。右に付各明日中將樣へ右兩樣之御祝詞申上候筈に御座候間、御自分樣にも御登城御申上可被成候。若御當病等に而御出難被成候はゞ以御紙面御申上可被成候。若狹守樣へも明日之日附に而、同日出町飛脚に傳附、以紙面御祝詞申上候筈に御座候。御前樣初へは御祝詞不申上候。此段爲御承知申進候、以上。

十一月廿三日　　　村井又兵衞

奥村伊豫守樣

十一月十五日。前田齊廣の隱棲許可せられたる時は蓮池上の御殿に移り之を竹澤御殿と稱すべきことを告ぐ。

〔文政五年見聞志〕

十一月十五日

付札、御横目ゟ

御隱居御家督之儀、兼而之思召立に被爲在候處、此節御願書可被指出御內意に而被仰出候。

一、右御願通被仰出候上者、中將樣無程蓮池上之御居住所ゟ御引移被遊思召に候。右御居住所之儀、以來者竹澤御殿与奉唱候樣被仰出候。

右之趣諸役人に寄々可被申談候事。

十一月十五日。前田齊泰初めて月並の登營を行ふ。

〔溫敬公記史料〕

十一月十五日。始參月次式日。

〔諸事覺書〕

十一月十五日

一、今朝若狹守樣御登城に付、各六半時前出席。御出之節中之口御式臺へ罷出、御式臺内より左之方に列座。御出相濟各退出、重而例刻出席。

但、頭分以上蔦之間入口御廊下へ列座。

十一月十五日。江戸に於いて諸士に風俗等に關する前田齊廣の諭旨を告ぐ。

〔諸事覺書〕

十一月十五日

一、去々年風俗等之儀に付一統被仰出候趣、組頭を初此度重而申渡有之候付、此表に而も可申渡旨、月番より申來候付、左之通寫相渡。

寫

去々年風俗等之儀に付段々被仰出候御主意通り、一統申渡候通に候所、是迄も度々風俗等之儀被仰出有之候へ共、其所へ至り不申候處、去々年被仰出候に付而は會得有之人々も有之躰。併御主意通之被仰渡方、一端之様に相心得候者も多有之躰。中には心得違之人々も有之候得ば、不被得止事被加嚴制候所へも至申儀。左候而は是迄分而被仰出候御主意も相立不申、誠難被爲忍御儀与奉恐察候。前段被仰出候御主意を、一統日夜無違失心意に存込相守可申儀肝要に候。拙者共へ毎度被仰出有之候付、改而此段申渡候事。

右之趣被得其意、諸頭申談、一統不相洩様可被申渡候事。

午十一月

十一月二十日。江戸に於いて前田齊廣隱居の後尚政務を監すべきことを告ぐ。

〔諸事覺書〕

十一月二十日

一、左之通被仰出候旨御國より申來、夫々申渡。

若狹守様御幼年之御儀候間、御政務を初萬端窺事等之儀、只今迄之通中將様に相伺被仰出候

趣、若狹守様奉達御聽度拙者共より相願候處、御保養中故別而萬事不被行屆儀とは被思召候得共、先被聞召屆候段被仰出候條、其趣相心得、萬端伺事諸言上等是迄之通中將様江可奉申上候。乍去誠に指懸候儀は若狹守様江相伺、其段中將様江可及言上候。たとへ前例有之儀たり共、諸事是迄之通中將様江相伺可申候。

右之趣寄々可被申談候。

十一月廿一日。幕府前田齊廣の隱居と齊泰の家督相續とを許す。

〔三守御譜〕

十一月十六日御隱居被遊度旨御願書被指出、同廿一日御名代淡路守利幹幷若狹守様齊泰公御登城被成候處、於御座之間御願之通御隱居、若狹守様へ御家督被仰出、御懇之上意あり。公於御國御隱居被遊事、諸侯稀なる例也。于時御年四十一歳に被爲成。表向四十三歳。此時、若狹守様御若年之內、御國中御仕置等御心を被爲附御取計候様、御名代淡路守利幹君へ御用番水野出羽守演述。若狹守様御若年といへども、右被仰渡に付此時御國目付等不來。晦日此表へ御隱居被仰出候儀申來。

〔齊廣様御傳略等之內書抜〕

十一月二十一日御座之御間に於て御望之如く致仕を免され、嗣君齊泰公へ御相續之儀御直に被仰出なり。御名代淡路守利幹公曁齊泰公を召て仰出され、御懇之仰有り。次に齊泰公御若

年之内は國中仕置等之儀御心を添らるべく台命有り。此儀は於御白書院緣頰老中列座、御月番水野出羽守殿富山利幹公ゟ台命を傳らるなり。此の日肥前守樣と御改、若狹守樣には加賀守樣と御改なり。右等之趣金澤に於て十二月朔日御弘有之なり。

〔又新齋日錄〕

十一月廿一日御家督に付上意書

御座間　松平若狹守

松平加賀守

名代　松平淡路守

右一同罷出、年寄共披露、上意有之、御下段御敷居之內迄罷出。其時加賀守願之通隱居被仰付、若狹守ゟ家督無相違被下候旨被仰出之、年寄共及御取合。重而國中廣き儀に付、政事向猶更無油斷心を付候樣上意有之。重々難有仕合旨御禮申上、年寄共及御取合。此時加賀守心靜に保養を加へ候而、無事に可罷在段上意有之。年寄共御取合候上退去。

御別紙

松平加賀守願之通隱居被仰付候得共、若狹守年若之內、國中仕置等加賀守心を付取計候樣被仰出也。

十一月廿三日。儒者大島忠藏の勤務前田齊廣の意に適せざるを以て遠慮を命ぜらる。

〔諸事覺書〕

十一月四日

一、左之通可申渡旨被仰出候旨申來候。且又以後校正方被指止候趣等も申來候事。

松原牛兵衞・岡田太郎右衞門〻

大嶋忠藏

右忠藏儀思召被爲在候處、早速御國へ罷歸候樣可申渡旨被仰出候條、可被申渡候。

一、公邊等より御借用之御書物有之候者、今村藤九郎等へ引渡候樣可被申渡候事。

一、忠藏儀外向懸合等之儀有之、急に難罷歸などゝ申儀有之候とも、御樣子有之候條、藤九郎等へ申送早速罷歸候樣可被申渡候。且右引受之儀藤九郎等へも可被申渡候事。

〔横山氏日記〕

十一月廿三日

一、左之通表方に而申渡有之候事。

青山將監等〻

御儒者　大嶋忠藏

右忠藏儀、御書物校正方爲御用、江戸表ゟ相詰罷在候處、勤方等甚不應思召儀ども有之候付、急度御咎も可被仰付處、其儀は御用捨被成、遠慮被仰付候條、此段可被申渡候事。

午十一月

十一月廿七日。前田齊泰襲封を謝する習禮を行ふ。

〔諸事覺書〕

十一月廿七日

一、今日御家督御禮之御習禮被遊候付、九時過より御奏者番松平伯耆守殿・本多豐後守殿・堀大和守殿御越、淡路守樣にも御出。追付御前大書院へ御出、坊衆も罷越御習禮有之。相濟、甲斐守等七人一人充罷出習禮仕、相濟候上御前被爲入。各席に罷越定服に改、御奏者番衆御溜御小書院溜へ甲斐守等七人罷出、御挨拶申述候事。

但、今日御習禮以前、御奏者番衆被揃候上、御溜へ御前御出御挨拶有之、被爲入御料理出之。畢而御長袴被召、淡路守樣御同道に而御出、御習禮有之。甲斐守等御大書院へ御出前、服紗小袖・長袴に改、大書院二之間御緣頰御杉戸際より列座、其所へ御奏者番衆御通候節坊主取合候付御挨拶有之。御前御習禮相濟、大書院後。御勝手方より相廻り、御廣式見物所

〻相廻り伺公。此所へ御太刀等飾付有之、一人充罷出習禮有之。相濟、各引退候事。各服相改、御奏者番衆へ御挨拶申述候節も、坊衆取合有之事。

一、右相濟於席今日御禮之習禮仕候御禮、藤田平兵衛を以申上候事。

十一月廿九日。前田齊廣の隱居を許されたる報金澤に達す。

〔横山氏日記〕

十一月廿九日

一、當廿一日御隱居御家督に付、中將樣御名代淡路守樣御勤、直に此方樣被爲入、甲斐守被召、今日於御座間、中將樣御願之通御隱居、若狹守樣〻御家督之儀被仰渡、段々御懇之被爲蒙上意候。右御次第等委細は御書取被仰上候旨被仰述、御封物甲斐守〻御渡。且又段々結構成御樣子目出度御儀、嘸御安氣可被遊被思召候。右御祝詞も被仰上候。是等之趣宜申上旨被仰に付、早速御國許〻可申上旨甲斐守及御請申候由。則右御封物足輕小頭添、早飛脚今日到來いたし候事。

是月は大盡なり

十一月晦日。金澤に於いて年寄中に前田齊廣その子齊泰に家督を讓るの請を許されたることを告ぐ。

〔横山氏日記〕

十一月晦日

一、左之通於大廣間年寄中等一列、月番豐後守頭分以上被爲申聞候事。

中將樣御持病之御疝邪、其上御氣塞之御症に而、近年彌增御難儀被遊、押而も御參府難被遊候に付御隱居、若狹守樣江御家督御相續之儀御願被成候處、依御奉書當月廿一日、中將樣御名代淡路守樣幷若狹守樣御登城被成候處、於御座間中將樣御願之通御隱居、若狹守樣江御家督被仰出、段々御懇之被爲蒙上意候旨、年寄中等より早飛脚を以申來候。先以恐悅之御事に候。此段先爲承知申達候。御祝詞被申上儀は、追而委細之御樣子被仰下候上に而可申達候事。

一、中將樣御名肥前守樣与御改、若狹守樣御名加賀守樣与御改被成候。中將樣御儀、御內輪は勿論、御外邊に而も、可成程は中將樣与相唱可申、加賀守樣御儀加賀守樣与相唱申筈月番演述。

一、加賀守樣御幼年之御儀に候間、御政務を初萬端伺事等之儀、只今迄通り中將樣江相伺被仰出候趣、加賀守樣奉達御聽度旨、年寄中より仍願被爲聞召屆候段被仰出候旨、月番演述。

十一月晦日。前田齊廣に屬する諸吏の職名を定む。

〔官私隨筆〕

十一月晦日

御横目江

御隱居之上は萬端御手前切に而被爲濟候。依之左之通役名・組名等被爲極候旨被仰出候。

御側御用人　御表に而定番頭次、定番頭並之上。

御側組頭　御表に而御馬廻頭次、御小將頭上。

御側物頭　御表に而御先手物頭次、物頭並之上。

御側組頭之組

御側御番頭　御表に而組外御番頭次、御大小將御番頭上。

御側頭並　御表に而御細工奉行次、頭並之上。

御側組頭之組

御側組　平士。御表に而御奥小將次、御表小將上。

御側組頭支配

中奥組　御表に而御表小將次、御大小將上。

同斷

御書院組　御表に而三品に相當り、御馬廻組之上に列す。

同断

御書院組並　　御表に而三品に引續之列、組外之次。

此並に被仰付候人々は、頭分之嫡子並平士之嫡子、無息に而被下方を以被仰付候。併頭分之嫡子には、是迄年頭御禮被仰付候人々可有之、以後御禮之節は是迄之通、父之別を以被仰付候。於竹澤御殿は御書院組並之一列与被仰出候。

御側物頭支配

新　組　　御表に而新番組御歩に當り、新番組御歩之上。

同断

寄　組　　御表に而御歩組に當り、御歩之上。

竹澤御殿に而割場奉行に當り候者之支配被仰付。

大遣組　　御表に而足輕坊主に相當り候。

同断

小　者

右之通先大凡之所被仰出候事。

右之趣一統可被申談候事。

十一月。前田齊廣綿衣の着用を止めんとするの趣旨を告ぐ。

〔覺　書〕

文政五年十一月

一、左之御親翰以縫殿左衞門被渡下、猶更御意之趣茂申述候事。

一昨年より段々家中風俗質朴節儉を相しめし、麁服專ら之儀申候付、其砌より時之權によつて、一統目當之ため此方其砌より木綿着用、肩衣・袴も木綿布裏のみ相用候。然處何与なく各初茂見聞に候哉、其砌より各にも綿衣を多分着用之躰に相聞候。然ば此儘に打捨置候而は自然と相ゆるみ、此方幷に萬石以上之各は、生るゝより綿衣而已も着用いたさゞるものゆゑ甚重く存、各はいかゞ候哉、此方は及年來候故か、綿衣而已にては甚動作致難儀、其上調筆等多き節は肩を押し難儀に付、木綿類は指止度候得ども、只今迄着仕來候處、何事茂不申出只今絹類着用いたし候ては、早上よりゆるみ候形にて、其實を失ひ申事に候。又各とても生るゝより絹類まで着用之身分、年たけ綿衣にては甚動作等難儀より、いつしか絹類に立戻り候。是も唯何となく立歸候ては、各之心得之ゆるみに諸人相見候事に候。依之一昨年より時之權によつて、此方・各も一端綿衣而已着用いたし、諸人之目を改候事にて、畢竟は身上

分限相應之處は可有之事に存候に付、今般此方は輕き絹類に改候事に候間、各幷萬石以上之輩は、綿衣も分限に不相應に候間、輕き絹類を專らに相用候樣にと存候。且又諸頭も六十以上之人々は、もはや歩行も不自由候年來に候得ば、是又綿衣而已にては可爲難儀候條、時節柄に不憚、輕き絹類着用之儀可申出与存。尤其他は專ら諸士質朴を猶々相守り、綿衣にて甲斐々々敷姿可相守事に候。行成にてゆるみ候ては無詮事に付、以後却而縮方のため、右之趣心付候に付申出候。各同存之上は、右主意一統ゟ爲申聞、各にも專ら絹類に相改可然存候。別紙之通り申出候得共、書面にては堅々敷も相聞え、其上萬石以上はなみ有之候得共、其所急度相定り候樣にも相聞候間、猶委細之主意は縫殿左衞門ゟ得与申含候間、口演にて承り可被申候。別紙之趣には候得ども、各とても壯年之面々は、綿衣之方却而動作にも和らかに無之宜与被存面々は、尤綿衣も可然事に候。其上先達而他國使者有之節、各之內綿衣着用之面々も有之由。組頭ども之內にも此儀はあまり抔と申者も有之候得ども、於此方は是は却而面白く存候。既に江戶表にては安藝守殿ゟ參り見受候處、家老初綿衣も着用いたし罷在、甚質朴に相見え候事にて、是等は隨分面々心々、他國使者之節なども平生に不替品、却而面白き事に候。ケ樣之主意候間、隨分致着用度面々は着用可然候。唯此方之主意は、何となく各絹に立歸り候よりは、一往解きを付絹類に相成候得ば、ゆるみと申所無之可然与之主意候。既

に寛政年中嚴重省略被仰出候節、太梁院殿甚御麁服を被爲召、各にも其砌一端何れも綿衣がちに着用之處、其後解茂なくいつしか近年之通り絹類のみに相成候。如此にてはゆるみ与申す者に候間、今度は自然之ゆるみを待不申、先に解き申候得ば、却而一統各を目當に相成候事に候。是又別紙に分限相應と申儀茂調置候得ども、各分限相應と申時は紗綾抔も不指支程之分限に候得ども、其處は重く候故、輕き絹類に替候と申程之事に被相心得可然候。猶又其味は書解がたく候間、縫殿左衞門より承り可被申候。

但、右被仰出之趣に付重而相伺候上、去々年頭々より申渡候處、多分綿類着用いたし申樣子、一段之事に思召候。中將樣にも是迄綿類御用被成候得共、御動作御不自由と被思召之儀も有之に付、以來絹類御用被遊候。此儀不被仰聞置候而は、却而諸人之目當等相違可仕哉与、此段被仰出候。拙者ども幷萬石以上之人々は、輕き絹類專ら用候而も可然被思召候。

乍去綿衣着用之儀も勝手次第之旨一統江申觸候事。

十一月。竹澤御殿の造營全く成就す。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

十一月竹澤御殿御造營全御成就有之なり。同所辰巳御門續き御堀之所は、其先札之木と云て諸木繁茂して日之色を覆ひ、地も茂たる藪たゝみにて、今之山崎山之通なり。又竹澤下場先

下場は下馬なるべし

は野村七兵衛屋敷なり。

十一月。御郡奉行より郡方の風俗に關して戒む。

〔留帳拔書〕

御家中風俗等之儀に付去々年被仰出候趣、愈相弛不申樣重而被仰渡之趣此間申渡候通、彌無油斷相心得可申候。今度人多御咎被仰付候に付被仰出儀有之、於御上茂御家中を始御咎被仰付候儀、甚御厭被遊候御樣子に候得共、御政務方誠に無御據御儀与奉恐察事に候。何れも不埒之族致增長候而は難相成儀。畢竟前段御嚴制被仰出儀も、衆人御示敎之御儀奉至極儀に候。尤御郡方も愈古來質素之風俗に立戻り、不埒之族等無之樣可相心得儀に、いづれも油斷有之間敷候。

一、博奕之儀御停止之趣時々申渡候得共、示方不行屆、下々輕き者に至而は、右躰不埒之所行致增長候躰承及候。仍而去年夫々御達申、村々人多集候處江、博奕制方張紙等に相記急度申渡置候得共、示方輕々敷相心得候哉之儀相聞え、不屆至極之事に候。當時御郡方百姓擔者共直支配に付、右樣之不埒見聞有之候而茂、中には具に申聞方相泥候人々も可有之哉。申迄も無之候得共、曾而相泥儀共無之事に候。直支配に付、組主より直樣手當等申付候儀は勿論不相成候得共、右樣不埒之者見分有之候はゞ、速に擔者共江申聞有之候得ば、夫々手當方等

不相後様、前條之趣昨年も嚴重觸置候之處、不埒之者手當方等閑に相成候而は、次第其咎過多押移、畢竟末々御收納取縮にも甚差障り、不輕儀に候。且又身元相應之者等、碁・將棊かけもの致候族、是又不少躰。元來賭物を以勝負を爭申儀、御制禁之儀者不及申に儀。假令聊たりとも右様不埒之筋に携候者は、承り次第夫々相糺、嚴重可申付候。面々にも急度相心得、少に而も見聞之品有之候はゞ、無猶豫可申聞候。

一、當時於金澤有之芝居幷茶屋町等ゟ不罷越様、每度示方申渡置、心得違無之筈に候得共、年若き人々抔は不斗通懸け等に被誘、立寄候様之儀有之候而は難相成候條、急度相心得可申候。其外遠所町奉行等支配において、歌舞伎躰之儀有之候而も堅く參申間敷候。勿論家内妻子等も堅相示可申候。

一、御郡方風俗之儀、每度申渡候得共、宿立・町立之箇所抔、別而町方之風儀見習、家内妻子等奢侈之費不少躰。諸郡とも前々より身元相應之百姓共、近年次第及難澁、持高をも追々致切高、手前衰候儀何れも承知之通に候。是皆百姓之所業を怠り、家内妻子迄も惰弱僭上之風儀に押移候儀、沙汰之限り歎敷事に候次第、惣年寄中等初御郡方において長ヶ役之儀は、一統之目當にも相成事に候間、專質素之風儀を相守、尤村々役人等聊心得違無之、末々迄古來之風俗に立戻り候様急度相改可申事。

右等之趣、此度改而申渡候條、無違失相心得、請書可指出候。尤諸郡共下々江は、追々拙者共より可申渡候、以上。

午十一月

御郡奉行

惣年寄中・年寄並中・無役年寄列中

御旅屋守　戸出村茅太郎

岡島新村　甚右衛門

十二月朔日。前田齊泰登營して襲封を謝す。

〔諸事覺書〕

十一月晦日

一、明日御献上之品々

公方様江

一、御太刀　一腰

一、御馬　裸背鹿毛二疋

一、白銀　百枚

一、綿紗　二十卷

一、綿　五十把

一、御刀　一腰

包御のし・御目錄

内府様江
一、御太刀　一腰　　一、御　馬　裸背栗毛一疋
一、白　銀　百　枚　　一、綿　　五十把
一、御　刀　一　腰
包御のし・御目録
御臺様・御簾中様
一、白　銀　　三十枚
包御のし・御目録
中將様より公方様江
一、御太刀　一　腰　　一、御馬代銀　三十枚
一、紗　綾　五　卷
包御のし・御目録
內府様江
一、御太刀　一　腰　　一、御馬代銀　三十枚
包御のし・御目録

御臺様・御簾中様

一、白　銀　十　枚

包御のし・御目録

以　上

御家來より獻上物

公方様

一、御太刀　一　腰

一、紗　綾　五　卷

一、御馬代銀　一枚充

包御のし・御目録　甲斐守・內膳・又兵衛

一、御太刀　一　腰

一、紗　綾　三　卷

一、御馬代銀　一枚充

包御のし・御目録　織江・修理・內記・市三郎

內府様江

一、御太刀　一腰
一、御馬代銀　一枚宛
　包御のし・御目録　　　　甲斐守等七人同斷

〔諸事覺書〕
十二月朔日
一、今日御家督之御禮被仰上候付、六時不遲之御供揃に而御登城に付、甲斐守等七人長袴着
用、六時前御殿へ相揃、六打に而暫有之罷出候而可宜旨、聞番申聞候付、聞番同道に而何茂
御城ゟ罷出。
　但、甲斐守・内膳・又兵衛ゟ聞番助前田銀右衛門指添、御作事御門外より同道。織江・修理・
　内記・市三郎ゟ同助福嶋數馬指添、是又右同樣之事。
一、中將樣御隱居之御禮、御名代淡路守樣御登城之事。
一、今日御登城御黒書院において御家督之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自御熨斗蚫
頂戴。相濟、御白書院ゟ出御、甲斐守等七人一人宛御目見被仰付、御奏者番衆代々御披露。
一、中將樣御名代御禮、御黒書院において加賀守樣御禮後淡路守樣被仰上。相濟、夫より西
丸へも御登城、御戻に諏訪部文九郎殿へ御立寄、御裝束被召替。夫より御老中方・若年寄中

御廻勤被遊、九半時過御歸殿之事。
但、甲斐守等御本丸御禮相濟、夫より西の丸江登城御奏者番謁、退出より諏訪部被立寄服相改、夫より御老中・若年寄中廻勤、七時過罷歸、何茂直に御殿へ罷出。
一、内記儀は今日西の丸に而氣色致難儀、謁も難罷出候付、其段聞番より取計を以申達、直に下城、御老中等廻勤難相成止候。快氣候上相勤候趣と相成、今日は不相勤御小屋江罷歸候事。
一、甲斐守等今日御家督之御禮首尾能被仰上、中將樣江茂御名代淡路守樣御禮被仰上候御祝詞、藤田平兵衞を以申上。將又私共被召連、御威光を以御目見被仰付、難有奉存候旨御禮申上候事。
一、暮頃御居間書院へ御出、甲斐守等三人被召、今日之御樣子御意有之。御請申上、退候上織江・修理被召、右同樣御意有之。御請申上退候上、市三郎被召御意有之、退去之事。
一、御弘之趣頭分以上へ追々甲斐守席において演述、今朔日御家督之御禮被仰上候樣、昨日御老中方御連名之御奉書、幷御家來七人可被召連旨御別紙到來、卽御登城被成候處、於御黑書院御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自御熨斗鮑御頂戴、其上御家來御目見被仰付、忝御仕合被思召候。此段可申聞旨御意有之。右申達候以後、中將樣御隱居之御禮、淡路守樣を以

御首尾能被仰上候旨申達候事。
一、左之通御横目ゟ渡。
御横目ゟ
今日御家督御禮被仰上候御祝詞、頭分以上御帳に附可申候。
一、右爲御祝詞、頭分以上今・明日中年寄中・御家老中御貸長屋へ罷出可申事。
右之趣夫々可被申談候事。
一、甲斐守等六人一列御料理之間へ罷出、御吸物等頂戴。御給事御大小將、差引津田平左衛門。
畢而同席に而平左衛門へ御禮申述候事。
一、內膳等六半時前退出、御本宅へ罷出、御前樣・謬姬樣ゟ今日之御祝詞神戸加平を以申上事。
　但、甲斐守儀御用有之、退出暫遲く、跡より罷出候事。

十二月朔日。竹澤御殿に屬すべき諸士等を命ず。

〔金龍公記史料〕
十二月朔。土佐守直時爲公附。側用人以下爲公附者數十百人。
〔横山氏日記〕

十二月朔日

一、新知百石　高木學純

學純儀、竹澤御殿御詰醫者に被召出、新知如此被下之、御書院組並次列に而、御側組頭支配被仰付。

一、新知七拾石　石黑玄丈

玄丈儀、竹澤御殿附御詰醫者に被召出、新知如此被下之、御書院組並次列に而、御側組頭支配被仰付。

一、新知八拾石　太田喜左衛門

喜左衛門儀、竹澤御殿附寄組頭取被仰付、新知如此被下之、御步小頭次列に被仰付。只今迄之御宛行は被指除之。

一、新知八拾石　岸七郎

七郎儀、竹澤御殿附寄組頭取被仰付、新知如此被下之、御步小頭次列に被仰付。

一、御加增拾俵宛　金岩宗藏

石黒與平

先御切米都合五拾俵宛。

右兩人如斯御加増被仰付。

山口清太夫嫡子　山口數馬

武田判太夫嫡子　武田和吉

高田彌左衛門嫡子　高田彌右衛門

小幡甚助養子　小幡左太夫

長屋平馬養子　長屋忠三郎

不破治部左衛門養子　不破五郎左衛門

山田万作嫡子　山田半六

伊藤五左衛門嫡子　伊藤三郎太夫

和田權五郎嫡子　和田采女

村上九左衛門養子　村上三右衛門

大橋市右衛門嫡子　大橋九左衛門

加須屋兵左衛門養子　加須屋百二郎

山崎茂兵衞養子　山崎嶋之助
高嶺左兵衞嫡子　高嶺源太左衞門
中村彌五兵衞嫡子　中村彌兵衞
野坂安之丞嫡子　野坂兵九郎
橋爪八百記養子　橋爪鐵之助
加古津右衞門嫡子　加古友男
竹內十郎右衞門嫡子　竹內岩次郎
曾田清太夫養子　曾田庄太夫

右人々竹澤御殿附御書院組並被召出、同所辰巳御門御番被仰付。依而年中白銀貳拾枚宛被下候事。

大地縫殿左衞門
神戸藏人
一木逸角

一、左之通土佐守席に而申渡有之候事。

各儀御側御用人就被仰付候、役料三百石被下候事。先役料は被指除之、拙者支配に被仰付。

晉地清左衛門
九　里　　歩
名越三左衛門

各儀御側組頭就被仰付候、役料二百石被下之、先役料は被指除之、拙者支配に被仰付。

遠　藤　數　馬
中村宅左衛門

各儀御側物頭就被仰付候、役料百五拾石被下之、先役料は被指除之、拙者支配に被仰付。

淺　加　九之丞
坂井庄太郎

各儀御側御番頭就被仰付候、役料百五拾石被下之、先役料は被指除之、拙者支配に被仰付。

兼　松　甚　助
栂　　杉　　松
津田佐七郎
永　原　　貢

各儀御側頭並就被仰付候、役料百石被下之、先役料は被指除之、拙者支配に被仰付。

角尾孫兵衛

介儀御側頭並就被仰付候、役料百石被下之、拙者支配に被仰付。

山森權太郎　田邊群吾　吉川昌九郎

千田五太夫

右中奥組被仰付。

永原傳七郎　本保孫三　山崎守衛

堀田十左衛門　鈴木五兵衛　山本元吉

神保釆男　寸崎室二郎　金岩大次郎

松本金八郎　長井平吉　青木吉他郎

武田秀平　渡邊新藏　石橋庸藏

廣瀨良左衛門　今川能順

右人々御書院組に被仰付。

內藤元鑑

右御詰醫者に被仰付。

後藤徹丞

右寄組頭取被仰付。

冨田矢十郎　土師保百　湯淺彌左衞門
松本年万　加藤久太郎　神田三五六

右人々新組に被仰付。

大田喜左衞門　岸七郎　山本與右衞門
中村彌五郎　高橋戶左衞門　五十嵐丈七
杉本兼助　木村平兵衞　岸金藏
北嶋牛之助　中嶋莊兵衞　高木丈右衞門
今川可平　森辰之助　金岩宗藏
早川彌平次　石黑與平　持田幸左衞門
瀧川新平　廣岡亭吉　吉田兵作
杉本吉左衞門　葭澤彥左衞門　若林吉郞左衞門
岩井傳藏　山本作平　武部長水
松本梅慶　石橋桊畔　中井彌藤次
永岡喜三太　黑川平兵衞　山本庄兵衞

澤阜知左衛門　村田鉄平　北嶋佐六郎
富坂甚右衛門　吉田猪八郎　柴原眞之丞
天野與三太郎

右寄組被仰付。

三田村柳燕　中島喜齋　山室清可

右人々竹澤御殿付大遣組坊主方御側勤被仰付、三人とも髪はやし、袴着、名改可申候。

辻宗朴　竹內淸務　山原林策

右之者共竹澤御殿附大遣組坊主方に而、御道具裁許幷御側組頭席書役兼帶可相勤候。三人とも髪はやし、袴着、名改可申候。

宮田湖舟　鈴木善澤　小嶋閑齋
八里長彌　青野春齋　石橋理全
小嶋秋湖　高村正佐　宮北長信
大場久務　山本久益　大場林悦
大場善益　小野簡丈

右之者共竹澤御殿付大遣組に而、坊主方相勤可申候。何茂髪はやし、都而御風儀に合不申者

は、御表ゟ被指出候節は、髮剃り、如元名相改相返可申候。

一、御切米
四拾俵　　　山本與右衛門嫡子
山本要左衛門

右之通御宛行被下之、竹澤御殿付寄組に被召抱、御側物頭支配被仰付。

一、御切米
四拾俵　　　中村源五郎嫡子
中村正三郎

右之通御宛行被下之、竹澤御殿付寄組に被召抱、御側物頭支配被仰付。

一、御切米
四拾俵　　　高木丈右衛門嫡子
高木伊一郎

右之通御宛行被下之、竹澤御殿付寄組に被召抱、御側物頭支配被仰付。

一、御切米
四拾俵　　　奥附御横目足輕
田邊仁右衛門

右之通御宛行被下之、竹澤御殿付寄組に被召抱、御側物頭支配被仰付。只今迄之御宛行は被指除之。

一、御切米
四拾俵　　　大組足輕
磯野權左衛門

右之通御宛行被下之、竹澤御殿付寄組に被召抱、御側物頭支配被仰付。只今迄之御宛行は被

指除之。
一、四拾俵宛
御切米
小野丈雪
山岸祐順
右兩人竹澤御殿付大遣組坊主方頭取、御側組頭等席執筆兼帯可相勤候。兩人とも髪はやし、袴着、名改可申候。
一、四拾俵
御切米
表方坊主 高村久爲
表方坊主 市川洞元
只今迄之御宛行は被指除之。
右兩人竹澤御殿付寄組に被仰付、御側物頭支配被仰付、髪はやし、袴着用、名相改可申候。

十二月四日。前田齊廣に年頭その他に献上すべき金品の額を定む。

〔御觸抜書〕
中將様江年頭等獻上物之儀に付別紙相越之候條、被得其意、組・支配之面々江被申渡、組等之内裁許有之人々は、其支配江茂相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。
右之趣可被得其意候、以上。

十二月四日

中將様江爲年頭御祝儀獻上物、加賀守様御同事に指上可申事。

但、無息人よりは獻上に不及候事。

一、跡目幷新知等・御役儀被仰付候面々、當時御省略に而加賀守様江都而年頭之通獻上物仕候筈付、中將様江獻上物左之通。

加賀守様江御省略以前、御太刀・銀馬代、紗綾三卷又者貳卷献上仕候。

中將様江都而御太刀・銀馬代献上仕候。

右之外加賀守様江年頭之通御太刀・銀馬代献上仕候分は、何御禮に而茂中將様江、

御肴代　百疋

同鳥目百疋献上仕候分は、何御禮に而茂、

鳥目　五拾疋

同五拾疋者鳥目三拾疋、同三拾疋以下者都而貳拾疋。

一、右品之献上物に目錄相添可指出候事。

右献上物諸方御土藏江上納可仕候。献上目錄者御奏者番より遂披露候筈に候事。

一、婚禮之爲御禮献上之御肴代は、加賀守様江茂御省略中献上無之候旨。中將様江茂不及献

上物候事。

以　上

壬午十二月

十二月六日。前田齊廣金澤に於いて諸士に家督をその子齊泰に讓るの請を許されたることを公示す。

〔横山氏日記〕

十二月六日

一、夜六時過御大廣間において、年寄中・御家老中列座、左之通御弘之趣、頭分以上ゟ月番求馬申聞有之候事。

中將樣御意被成候。前月廿一日御名代淡路守樣幷加賀守樣御登城被成候處、於御座間中將樣御願之通り御隱居被仰出、御家督加賀守樣ゟ被仰下、段々御懇之上意、其上不被爲思召寄、加賀守樣御若年之內は、御國中御仕置等之儀は、中將樣御心を可被爲添旨、別段被爲蒙上意、重疊難有御仕合被思召候。此段可申聞旨被仰出候事。

前月二十日依御老中方御奉書、翌廿一日中將樣御名代淡路守樣幷加賀守樣御登城被成候處、於御座間中將樣御願之通り御隱居被仰出、御家督加賀守樣ゟ被仰付候旨段々御懇之上意、重

疊難有御仕合被思召候。右之趣何茂召寄可申聞旨、今般御使者蓑輪知太夫を以、從加賀守樣被仰下、御書も被成下候。先以御願之通被仰出、目出度御儀恐悦之至に候事。

一、六半時過於御小書院、重而右之通列座、頭分以上之人々一役々々切に罷出、御意之趣月番求馬左之通申聞有之候事。

中將樣御隱居加賀守樣御家督被仰出候段、只今申達候通に候。此上は不相替加賀守樣ゑ急度御奉公仕候樣可申聞旨、從中將樣分而御意候間、可被得其意候事。

十二月八日。前田齊泰に婚約せる秋田侯佐竹義和の女利瑳姫歿す。

〔官私隨筆〕

十二月十七日

利瑳姫樣御病氣之所、御療養不被成御叶、去八日午之上刻御死去之段申來候旨、同日不時立早飛脚歩を以、甲斐守殿等より申來候付、爲御承知申進候。右に付今日之日付に而、當十九日出以紙面加賀守樣御機嫌相伺申筈に御座候、以上。

十二月十七日

追而於此表鳴物遠慮之御沙汰無之候。此段も爲御承知申進候、以上。

〔諸事留牒〕

十二月十七日

一、利瑳姫樣去八日御逝去に付、今日之日付に而、當十九日加賀守樣御機嫌相伺候段月番より申來。且江戸表に而は律姫・銈姫樣之節御七歲未滿に候へども、御緣女之儀に付遠慮有之候へども、此表に而は遠慮之沙汰無之事。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

十二月十七日加賀守樣御緣女佐竹右京大夫義和公御二女利瑳姫樣御卒去有之なり。

十二月九日。諸事伺及び言上は前田齊廣のみに上申すべきを命ず。

〔官私隨筆〕

十二月九日

御橫目江

萬端窺事諸言上等、是迄之通中將樣へ奉申上、其段追而加賀守樣へ可奉達御聽旨、先達而申渡候へども、今般上意之趣に付、當分都而是迄之通相心得可申候。言上之儀二重に相成候而は、諸向繁雜にも有之に付、旁以加賀守樣へは不及言上旨、從中將樣被仰出候。

右之趣諸役人へ夫々可被申談候事。

十　二　月

十二月十日。金澤に於いて諸士前田齊泰の襲封を賀す。

〔官私隨筆〕

當朔日加賀守樣御家督之御禮可被仰上旨、御老中方御連名之御奉書、幷御家來七人御目見可被仰付候間可被召連之旨御別紙、前日到來、則同日御登城被成候處、於御黑書院御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自御熨斗鮑御頂戴。中將樣御隱居之御禮、御名代淡路守樣御登城御首尾能御禮被仰上候旨、同日發足早飛脚を以甲斐守殿等より申來候。且右之趣中將樣よりも被仰出候付、爲御承知申進候。先以恐悅御同意に御座候。右に付明日各中將樣へ御祝詞申上、直姬樣初へも申上候筈に御座候。御自分樣にも明日御登城御申上可被成候。若御當病等に而御出難被成候はゞ、以御紙面御申上可被成候。

十二月九日

御前樣・加賀守樣・鈖姬樣へは、明日之日附に而、當十四日出町飛脚に傳附御祝詞申上、淡路守樣・備後守樣へも申上候筈に御座候。此段爲御承知申上候、以上。

十二月十日。前田齊廣の側室於登佐の方歿す。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

十二月十日鈖姬樣御生母於登佐之方死去なり。法號は貞心院法道妙眼大姉、春秋不詳。下谷

貞心院は貞正院の誤

廣德寺境内に葬。宿元は御書院番加藤傳左衛門なり。

十二月十二日。前田齊泰、德川家齊の女との婚儀に就いて議せしむ。

〔諸事留牒〕

十二月十二日

一、御前御縁組之儀に付、田中殿聞番に申聞有之。

此方樣ゟ御縁も餘程遠相成、上樣にも殊之外御望被爲在候段等、出羽殿被申聞之旨段々申聞。且此方樣より先年より御斷之趣は、御難澁之御時節、御物入多に相成候儀にも有之。當時は以前とも違、公邊何に而も萬事御手輕御取扱有之、會津樣などに而も、姫君樣ゟ三千兩被爲付、夫に六千兩之御足に而事濟候段等被申聞。此度之儀も押而御斷被仰立候へば夫に相成可申候へども、此度之御首尾誠に宜敷所、此度御斷に而は公邊向御首尾合も如何に候間、御請被仰上可然旨聞番より申上候に付、右紙面被渡下、詮議有之樣被仰出。

十二月十三日。竹澤御殿諸門の名とその格式を定む。

〔官私隨筆〕

十二月十三日

一、左之觸狀寫以御用番添紙面到來、返書遣之。

御横目江

竹澤御殿御長屋御門等唱方左之通。

一、辰巳御門

一、裏　御　門

右兩御門は御長屋に附有之、是より内は二御丸橋爪御門内之御格同事に候。

一、小立野口柵御門を辰巳外御門と相唱、右御門より辰巳御門迄は三御丸兩御門内之御格同事に候。

一、右辰巳外御門前に而下馬下乘之筈に候事。

右之通一統可被申談候事。

十　二　月

〔官私隨筆〕

十二月二十一日

一、左之覺書寫御用番より以添狀到來、及返書。

御横目江

竹澤御殿外と下馬之方御堀横之御門を堀脇御門と相唱、晝夜往來不差支、右御門内より辰巳

御門迄は三御丸格に候。且又辰巳外御門は夜中締切、日之內迄之往來、夜中御用に付罷出候人々は堀脇御門へ相向可申候。尤非常之節は辰巳外御門往來不差支候。

一、御城中三御丸橋爪迄召連候從者、三御丸腰掛に溜候分、竹澤御殿に而は右腰掛無之に付辰巳御門前に而落し、從者之分は出入共供外に相成、御式臺前腰掛に溜候儀は不差支候。

右之通一統可被申談候事。

十二月十四日。今明兩日前田齊泰の家督相續を祝して金澤の市民盆月正月を行ふ。

〔似寄留〕

十二月十四日・五日、御家督御祝町中盆正月。

十二月十六日。前田齊泰左近衞權中將に任ぜらる。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

十二月十六日加賀守樣御登城、左中將被任候段御白書院緣頰御老中列座、御月番阿部備中守正精上意を傳らるなり。

〔官私隨筆〕

十二月二十五日

一、左之御書到來之由に而、御用番より以早崎新助被越之。

御老中方連名之奉書到來付而、今日令登城候處、手前儀中將被仰付候由、御老中列座阿部備中守殿被仰渡、難有仕合候。右爲可申聞以飛札申達候、謹言。

十二月十六日　　御　名　御　字　御判

奥村伊豫守殿

十二月十六日　前田齊廣竹澤御殿に移る。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

十二月十六日二之御丸より小立野之新御殿ゟ御移徙有之、同日より竹澤御殿と相唱候樣被仰出有之なり。同日御引移り爲御祝詞頭分以上登城、御兩殿樣ゟ御祝詞申上候なり。竹澤御附之人々、思召を以て新御役名被仰付なり。御附年寄中は前田土佐守殿、御用部屋を御側御用人と申御役名、神戸藏人・大地縫殿左衛門・九里歩等三人被命なり。御側組頭池田保左衛門等、御側物頭等御附人數多被命なり。平士役御書院組足輕は大遣と呼び、小者方は小遣と呼び、惣而足輕・小者之名目無之なり。委きは別記に有之なり。同日忠姫樣・次姫樣竹澤御殿ゟ御二方樣御引移り有之なり。

〔官私隨筆〕

竹澤御殿へ御移徙之節御作法

一、二御丸奥之口御式臺より御出、橋爪御門、石川御門新道通、辰巳外御門より御入、辰巳御門より表御式臺へ被爲入候事。

一、年寄中・御家老・若年寄裏御式臺へ罷出可申候。且請合御奏者番等裏御式臺前へ罷出可申候。將又御普請方主付相勤候御普請奉行・御作事奉行も、裏御式臺へ召出可申候。

但、土佐守儀は御先へ御待受に可罷出候事。

一、御移之上、年寄中・御家老・若年寄、幷伊豫守・磐松・彈番、暨近江守・伊勢守・龍山、爲恐悅竹澤御殿へ可罷出事。

但、御當日年寄中等御肴等獻上之事。

一、加賀守樣奉初御附使者、奥之口御式臺邊へ罷出可申候事。

但、竹澤御殿へは御待受之御使者無之事。

一、竹澤御殿へ左之通可罷出候。

土佐守

御側御用人

同　組　頭
同　物　頭
同　御番頭
同　頭　並

但、御側御用人等御移徙前御用有之人々は、尤振分罷出可申事。

一、御式臺鏡板御右之方へ土佐守罷出、御左之方へ御側御用人之内一人罷出、御先立仕、其外御側頭並に至迄、敷付へ罷出居御供可仕候。

但、御近習平士之人々可罷出者、前々之通に候事。

一、御當日爲恐悅罷出候年寄中等、幷御普請掛り之人々御歩並以上、二御丸において白粥・御吸物・御酒頂戴、且土佐守を初御身附之人々は、竹澤御殿に而頂戴之事。

但、大遣組以下大豆入强飯可被下事。

一、二御丸へ罷出候御目見以上之人々、右御當日熨斗目・布上下、御歩以下は布上下着用可仕事。

但、服紗小袖等着用之儀は勝手次第之事。

一、御通筋橋爪御門等御番人服之儀も、前段之通之事。

今とは明治廿四年文政元年新初の事は誤なるべし同二年六月五日の條參照

一、頭分以上之人々、御引移之上御兩殿樣へ爲御祝詞熨斗目・布上下着、二御丸へ罷出御帳に付可申事。

以　上

〔橫山氏日記〕

十二月十六日

一、今日中將樣竹澤御殿へ御移徙に付、年寄中等熨斗目・上下着用、常刻より登城之事。

一、御意之趣有之旨に付、表方於席年寄中・御家老中・若年寄中一列之處へ、以永原貢、今日之爲御祝、白粥・御酒・御吸物頂戴被仰付候段被仰出候旨申述候に付、及御請候事。

一、御移徙に付、右一列、以同人中將樣へ御機嫌相伺候處、追付同人を以御意有之候事。

一、九半時中將樣御機嫌能、竹澤御殿へ御引移被爲遊事。

〔金澤古蹟志〕

竹澤館跡

此館址は今博物館の地邊にて、舊藩十二世權中將齊廣君此地を養老所と定められ、その先此地にありし學校及び藩士の第宅共を移轉せしめ、蓮池の亭地をも取込一園の地となし、竹澤の境內とせられたり。さて其殿閣は、文政元年六月廿八日に新初の規式ありて廣大の殿閣を

爰に經營せらる。玉殿の結構美麗を盡されたる事誠に至れりといふべし。其年間五ヶ年にして經營の功を遂げ、五年冬十一月廿一日四十一歳にて領國を世子に讓り、十二月十六日新殿へ移徙ありて、翌六年の春三月上旬殿閣盡く落成し、同月十八日・十九日の兩日新殿舞臺開の名目を以て猿樂を命ぜられ、新殿移徙の祝賀ありて諸士に見物せしめ、酒饌を賜り、館名を竹澤殿と稱す。同年八月新に時鐘をも鑄造せしめ、藩士富田景周をして鐘銘を作らしめ、遠藤高璟をして知時用器修造の事を主裁せしめ、正時版及び測晷盤を以て時刻をなさしめ、城內の時鐘と時刻を異にす。中略。庭園の結構、殿閣の廣大、時鐘に至るまで備へられしは時世の變遷とやいふべし。然るに殿閣落成の翌年なる文政七年四月より病痾に結ばれ給ひ、同年七月十日四十三にて、金殿玉閣も邯鄲の夢の如く、遂に空しく成給ひ、金龍公と謚を呼び奉りける。其後追々殿閣を毀たれ、竹澤の殿號のみ殘れり。按に彼富田景周の鐘銘の序言に營別殿離館於城東竹澤之地と記し、金龍公の墓誌に退隱於城東竹澤矣とも載せたれども、竹澤は昔より此地の地名なるを聞かず。友人湯淺祇庸に此事を質問せしに、竹澤は地名に非ず、此時初て殿號に定められたる名也。此地園內に金洗澤の舊蹟あるを以て、金澤殿と稱すべき內命ありといへども、金澤府城の名と混ずるを以て、更に竹澤殿と命ぜられたり。金龍公幼少部屋住の頃、御物の驗を竹じるしと稱し來れり。故に驗名の竹と金洗澤の澤とを取合せ、

更に竹澤の號を定められしといへり。

十二月廿二日。前田齊泰登營して陞任を謝す。

〔官私隨筆〕

去二十一日御老中方御連名之依御奉書、翌二十二日御登城被成候所、於御黑書院御轉任之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、難有御仕合被思召候。此段可申聞旨御意之由、同日發足不時立早飛脚歩を以、甲斐守殿等より申來候付、此段爲御承知申進候。先以恐悅御同意御座候。右に付各中將様初御祝詞申上候儀は無之候。此段も申進候、以上。

十二月晦日

十二月廿三日。前田齊泰の生母を樣付にすべきことを告ぐ。

〔御觸拔書〕

御横目江

今般御家督に付、おゐな殿御儀向後御格式御改、樣付に唱候樣被成度旨、加賀守様幷御前様より中將様江御願之處、御許容被遊候に付、以來御內證様与可奉唱旨、從加賀守様被仰出候條、右之趣頭・支配人等江寄々可被申談候事。

十二月廿三日　　　　横山求馬

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

十二月十六日直姬樣御產婦之方於屋尾殿、竹澤御廣式𛀁被引越候。十二月二十二日御格式御改、向後御內證樣と相唱候樣被仰出有之なり。

十二月廿四日。政務に關する上申は自今齊泰と雙方に之を爲さしむ。

〔諸事留牒〕

十二月十四日

一、諸言上之儀二重に相成候付、加賀守樣𛀁は不及言上候段申談に候へども、尙又月番方においで詮議之上、右之趣は諸役人等𛀁相當、兩席之儀は又譯合も違候間、矢張摠而之儀加賀守樣𛀁も申上候趣に相極候旨演述之事。

十二月廿六日。前田齊泰を從來の如く加賀守と唱へ、齊廣を中將と呼ばしむ。

〔官私隨筆〕

十二月二十六日

一、左之覺書寫御用番より以添紙而到來。

本年十二月九日の條參照

御横目へ

今般中將御轉任に付、御官名相唱候儀、被仰出之趣有之、只今迄之通加賀守様与相唱、肥前守様に者是迄之通中將様と相唱申筈に候條、此段寄々可被申談候事。

十　二　月

伊豫守殿へ

十二月二十七日

〔官私隨筆〕

十二月廿七日。前田齊廣人持組の士岡島帶刀等の不行狀を罰す。

岡　嶋　帶　刀

右帶刀儀不行狀至極、重き組柄、別而不埒千萬に付、蟄居被仰付。右之通從中將様被仰出候條、可有御申渡候事。

午　十　二　月

甲斐守殿へ

三田村紋左衞門

右紋左衞門儀、先年御咎被仰付候處、當時も甚不行狀至極、重組柄には別而不埒千萬沙汰之

限に付、知行高四千石内千石與力知、自分三千石之内七百石御減少、知行高與力知共三千三百石に被仰付、蟄居被仰付。

右之通從中將樣被仰出候條、可有御申渡候事。

午十二月

十二月。前田齊廣無期參覲を缺くことを請ふ。

〔三守御譜〕

十二月、公御隱居後、溫泉御入湯の御願あつて御參勤不被遊。是迄御入湯御願二十箇月每に前にある通御屆あり。然所此度は右期月不定、當分御入湯の御願にて御參勤不被遊。

右之趣共節聞番長瀨善左衞門に被仰出、種々の申込等にて思召通りに相成。

十二月。經費多端なるを以て御郡方に調達銀を命ず。

〔留帳拔書〕

諸郡惣年寄・年寄並ㇸ

御仕法御調達銀之儀に付、御算用場より申談之別紙寫兩通相渡之候。右者當時御勝手向御引當に相成候樣之譯にても無之、先達而被仰付候御仕法銀全相續のため被仰付儀に候。元來當年物入多之儀に候處、御領國に而は御借銀も不被仰付趣等、格別思召被爲在候御樣子、誠に

文政六年二月廿八日の條參照

以難有事に候。且又是以後御仕法銀出來方、八ヶ年之間連々指出候儀に候得共、御領國中に而三冊之割合に候得者過分之儀に而も無之、別而前段御仁惠之御主意奉信服、いづれも相勵可申候。併此節に至り候而は指懸行當候者も可有之哉ニ、當暮之分は金澤併粟ヶ崎藤右衛門曁嶋崎徳兵衛等より指上候に付、當暮は指上候におよび不申、來年より身元に應じ夫々可差上筈に候事。

右之趣得其意、一統會得違無之樣重々可申談者也。

午十二月　　　廣瀬欣左衛門

　　　　　　　長谷川三右衛門

能美郡

礪波郡

射水郡

新川郡

羽咋郡

鹿島郡

鳳至郡

珠洲郡
村々役人

文政元年御仕法御調達銀被仰付候節者、五ヶ年濟に而數十冊出來に付、濟口御返銀も一時に相成申儀故、一昨年御詮議之上年限繰延、來る子・丑兩年に全相濟申圖りに可相成候得ども、是迚も銀高不少儀、貸附銀も一時に取立候而は、融通方にも指障可申、其上御地盤御逼迫之御勝手振、殊更當年御慶事を初、追々御物入茂指湊申事に候處、右子・丑兩年御返銀相混候而者、彌增御手繰方も可六ケ敷儀に付、猶又重々御詮議之上、當年より八ヶ年之間重而右御調達銀、十ヶ年濟口に而年に三冊宛被仰付候旨被仰出候。且又當年御慶事に付而は、不一形御物入被爲在候樣之折柄は、必御領內御用銀等を以御辨用可被仰付儀に候得共、町・在等成立に付深思召被爲在、今度は大坂を初他國御調達を以御辨用有之、御領內江不被仰付候條、是等之所も相含、右當年より三冊あて御仕法御調達之儀、品能可被申談候。右之趣當場より可申渡旨、御勝手方村井豐後守殿被申聞候條、可被得其意候。一統申渡方等之儀は、御仕法主付木梨左兵衛等得与被示合、夫々可被申渡候事。

覺

一、今般被仰付候御仕法銀は、拾ヶ年濟に被仰付候。依而壹冊六拾人組之內、四拾人は會每

二人宛鬮當を以被返下、殘貳拾人は未年一時に元利被返下候事。
一、壹冊第壹番六拾人組を以、壹人一貫目宛指上候圖り、二ばんより壹貫目に付五拾目宛減少可指上事。
一、第一番より會毎二人宛鬮取當り之事。
一、第一番鬮取當り之者江、三ヶ月五朱之先利相添元利迄被返下、外に被下銀無之。貳番より上銀高に八朱利足相添被返下、外に被下銀無之事。
一、閏月有之候得者、閏月分利足被下候事。
一、指上人交名銀高共委曲帳に記可指出事。
一、第壹ばんより會毎指上銀之內、半銀宛其支配人江御貸附、殘半銀上納之事。
附、指上銀不少上納いたし度儀は勝手次第之事。

文政六年

正月朔日。前田齊泰登營し、齊廣は賀を廢す。

〔溫敬公記史料〕

元日登城。

〔金龍公記史料〕

正月不受朝賀。

正月朔日。前田齊泰使者を齊廣に遣はして年頭を賀せしむ。

〔諸事留牒〕

癸未元日朝雪、四時頃より晴。

一、五時過出席、今日竹澤御殿江加賀守様より之御使相勤候に付、其段月番内膳江相達、追付退出、直に竹澤御殿江罷出る。服二ノ丸において長上下に相改候事。

一、竹澤御殿江罷出候處、神戸藏人罷出、御太刀・馬代等夫々相渡候に付、一木逸角江左之通申述、右御品物は御側組頭名越三左衛門江相渡、遂披露候様申談候事。

御太刀　一腰

御　馬　一匹　　代黄金十兩

御目錄

益御機嫌能被遊御超歲、目出度御儀恐悅思召候。年頭御祝詞被仰上候。依之御目錄之通被上之候。此段宜可申上旨被仰付候。

御　使

出席は横山藏人

正月朔日　　横山藏人

一、追付御禮人列立罷越候處、右之疎圖之通御太刀御目錄九里歩披露。神戸藏人儀、加賀守樣御使者横山藏人と相唱節、無障被致加年目出度、太刀・馬等被相贈大慶存候。此段江戸表ゟ宜と御意に付、奉畏可申上旨御請申上退座。夫より土佐守等御禮追々有之御樣子也。

一、右相濟、最前之御書院ゟ退候上に而、以大地縫殿左衛門綿二把拜領被仰付候に付、難有仕合奉存候段申述、追付退出候事。

正月八日。奧村內膳學校惣奉行を命ぜらる。

〔官私隨筆〕

一、左之紙面到來、返書遣之。

村井又兵衛

奧村伊豫守樣

今日內膳儀、以御親翰學校惣御奉行被仰付候。此段爲御承知申進候、以上。

正月八日

内膳は奧村惇敍

正月十二日。前田齊廣、越前萬歲を夜に入りて演ぜしむることを禁ず。

〔諸事留牒〕

一、左之御親翰月番より相廻候事。

例年越前より罷越候まんざい、此節於宮寺夜中爲舞候儀も有之躰相聞え、御家中にも其躰有之間敷とも難申候。右は見物事之儀に候へば、輕き男女入込候儀甚猥り成事に候。以後は日之內祝儀計に暫爲立入、假令夕方より相初め候とも、及暮不申內差止候樣、寺社奉行等へ嚴重被仰渡候。依之人持中にも左樣之者爲立入、夜中におよび候儀有之候而は、一統之御縮に難相成候間、急度心得に可申渡旨被仰出候條、可被得其意候事。

正月十二日

年　寄　中

正月十三日。前田齊廣、齊泰の夫人として德川家齊の女を迎ふるが爲幕府に希望する所を述ぶ。

〔諸事留牒〕

正月十三日

一、御守殿之儀に付、聞番長瀨善左衞門に被仰聞候趣。

御守殿之儀に付、段々御懇之御內命之趣、謹而御拜聽被成、誠に以難有御仕合、冥加至極に思召候。然る上は何分御事輕に而、御名目も御守殿と無之、肥後守樣御同樣御住居与被仰出、

萬端格別之御事輕に被仰渡候事に候はゞ、速に御受可被仰上思召に候事。

一、右に付加賀守樣、來申三月御暇被仰出、御入國之上其表御殿向御しつらへ被仰付、酉三月御參勤之上御入輿に相成候へば甚難有儀に思召候。夫より相延候儀は、此方樣御都合は別而宜御事に候旨被仰出候。

一、御守殿之儀は、於御家中久敷無之儀に付、何とか末代迄御規模に相成候程之儀被爲在候へば、御一段之儀と申人々も有之候へども、中將樣には其御望は一圓不被爲在候。只何とか御國民之爲に相成候儀は、不一方御大望に候間、中將樣兼々之思召には、御大國御仕置之儀に候へば、隔年一年之御在國に而は何程も御政事不被爲行屆候。子細は、御歸國之上二月餘りも彼是御落付不被遊、又御參府二・三月計前より其御用意に而、入組候御政事御世話も不被爲成。左候へば纔に御靜に御政事御取捌之間は、五・六ヶ月に過不申。此趣に而は、甚御國民末々迄御政事不被爲行屆、既に御家督被仰渡候節、御國中も廣き儀、御政事別而御心を被爲附候樣上意も有之候所、每年之御往來に而は其處甚不被爲行屆候間、三ヶ國之御領地之事にも候間、御參勤は五ヶ年とか、せめて三ヶ年目とか、以來被仰出も御座候はゞ、此儀兼而之御大願、末代御家之御爲、御國民之ためと申時は、是より外御座有間敷思召候に付、此外に御望は不被爲在、或は御官位之御昇進、又は御家格之御宜相成候儀、或は御下乘等之上

り候儀などは、都而僣上之一條に相當り候儀に候間、一圓是より被仰込候思召は不被爲在候。右御參勤之一條は、公儀に御規定も有之事に而、品重き事に而候得ども、ヶ樣之被仰込御儀、御過當成る御儀に相當り申事にも候はゞ相扣可申、其他は前條之通御望之筋は不被爲在候。是等之趣相含罷歸候樣被仰出候事。

正月十六日。前田齊廣、竹澤御殿の境內に時鐘を置かしむべきことを告ぐ。

〔諸事留牒〕

正月十七日

一、左之通被仰出候由、土州より紙面を以演述之事。

前々より時鐘一ヶ所故、風に寄御城下聞え渡兼候儀可有之旨之御內意も被爲在候內、竹澤御殿江御引移之所時鐘聞えかね候に付、幸御園中にも時鐘被仰付候はゞ、諸人之ために可相成与之思召に付、以聞番江戶表之樣子も被爲承合候處、御指支無之、依而彌御園中可被仰付之旨被仰出候。此段爲御承知申達候、以上。

正月十六日　　土佐守

內膳樣

正月十八日。前田齊泰、襲封を謝するが爲使者を京師に派す。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

正月十八日京都江之御使人持組葛卷隼人昌吉被命る。右は昨年御隱居・御家督之御禮使なり。御献上物等御例之通なり。

正月廿二日。前田齊廣、菊池大學の參會を好むを以て警告を與へしむ。

〔官私隨筆〕

正月廿二日

一、左之覺書添紙面を以御用番より被差越之、返書遣す。

付札、伊豫守殿江

菊池大學

右大學儀、今以參會を好、無用之振廻等有之躰相聞え候。先達而風俗等之儀、御家中へ段々被仰出、諸頭等追々心得も相改、急度御教諭被爲在、少風俗も取直り候端にも赴候處、右樣之儀有之候而は、惣躰之御取縮り不被爲行屆事に候間、御咎も可被仰付候へども、其儀は御用捨被成候條、頭手前に而急度教諭爲申聞、叱置候樣可申談旨、從中將樣被仰出候條、可被得其意候事。

右に付大學呼寄、右覺書寫相渡、左之趣も申談覺書渡之。

被仰出候趣、御用番内膳覺書寫之通候條、可被奉得其意候。御家中風俗等之儀に付而は、近年段々被仰出之趣有之、時々申渡置候通に而、とかく奢侈柔弱之風に押移候儀、深く御心痛に被思召候御樣子。依而段々被仰出候趣共、何もへ取候而も難有御事は不及申候へども、各之儀は組柄も重く、結構に被召仕候事に候へば、猶以急度心得も可有之、常々家内幕方等奢侈僭上之儀を被相省、萬端質素眞實に相心得不被申候而は、子弟を初家來中教諭方もおのづから忽諸に相成可申も不計之事候條、内外に付而御奉公之筋に違不申樣被相心得、段々被仰出之趣共、聊忘失有之間敷候。此度段々被仰出候御趣意通、誠に難有御事に候之條、急度承伏被仕、是以後させる所用も無之人々被相集候儀等堅く被差止、幷無據儀有之親類中等へ被相越候節とも、用事相濟次第退出有之、無用之雜談時移り不申樣可被相心得候。尤常々家内幕方等精誠質朴に被相心得、其外萬端に付油斷無之樣にと存候。被仰出之趣に付而、猶又心付候通相達候事。

右之通申渡候處、奉畏旨等御請あり。翌日左之紙面出之。

右私組大學儀、今以參會を好、無用之振廻等有之躰相聞え候。先達而風俗等之儀御家中へ段々被仰出、諸頭等追々心得も相改、急度御敎諭被爲在、少し風俗茂取直り候端に茂赴候處、右樣之儀有之候而は、惣躰之御取締不被爲行屆事に候間、御咎も可被仰付候へども、其儀は御用捨被成候條、頭手前にて急度敎諭爲申聞、叱置候樣御申談可被成旨、從中將樣被仰出之趣、御覺書之通奉得其意、大學召寄、御覺書之趣を以申談候處、委曲奉畏奉迷惑至極候。然處御咎も無御座、結構に被仰出難有仕合奉存候。以來急度相愼可申旨申聞候。先以結構に被仰出、於私難有仕合奉存候、以上。

未正月廿二日　　奥村伊豫守

奥村內膳樣

正月廿二日。藩の收納米に欠米ある際代銀上納の件に關して告ぐ。

〔留帳拔書〕

御收納米等出船欠米・升廻欠米幷古米斗立欠米有之候得者、不申渡候而も代銀上納致筈候處、近年上納延引に相成候故當場より申渡候儀も有之、都而心得違も致出來候に付、是以後は當場より不申渡候間、欠米直段相極次第、其年十月迄之內可致上納。若し期月上納延引相成候へば、御定之利足取立候段等、寬政七年夫々申渡置候處、其後又候區々相成候儀も有之候。

依之改而申渡候條、先達而申渡置候通、以來は當場より不申渡候條、其年十月中迄之內急度可被致上納候。若去々年御詰米被引請候以後上納遲滯に相成候分有之候はゞ、早速當場江相達、指圖之上可致上納候、以上。

正月廿二日　　御算用場

追而町藏追詰米之內にも、右欠米代上納遲滯之分も有之候はゞ、是又早速當場江相達候樣可被申渡候、以上。

御郡奉行中

正月廿四日。江戶に於いて家老の見屆くる誓詞は前田齊泰之を一覽したる後齊廣に報告すべきことを定む。

〔諸事留牒〕

正月二十二日

一、加賀守樣御近習誓詞は加賀守樣江入御覽、其趣中將樣江言上仕候譯に相極候處、外御廣式物頭等御家老方に而見屆候誓詞、此表に而中將樣江入御覽、其趣江戶表江言上之譯に相成候へども、江戶表に而右等之誓詞は、江戶表において加賀守樣入御覽、其段此表江言上に相成可然儀に候へども、其儀未だ相極不申に付、江戶表に而見屆候御廣式物頭等之誓詞、於江

戸表加賀守樣江入御覽、其段此表江及言上可申哉、又は右誓詞江戸表より指越、此表に而中將樣江入御覽可申哉奉伺候。江戸表江指越候而は日間往返も有之、何か不辨理に御座候間、前段之伺之通に而も可有之哉、猶更奉伺候旨覺書相認、去年新誓詞出來之節之伺書と一集に、堀鐵三郎に爲持竹澤御殿江相伺置候事。

〔諸事留牒〕

正月二十四日

一、誓詞之儀奉伺置候處、御近習之外も、御家老方において見屆候誓詞、加賀守樣江入御覽、此表江は右之趣言上に而宜段被仰出候事。

正月廿六日。竹澤御殿の辰巳外御門は平日通行を許さゞるべきことを告ぐ。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通一統申談候樣、御橫目へ申渡候付、爲御承知進之候、以上。

正月二十六日

御橫目江

辰巳外御門夜中は縮切、日之內迄之往來不指支樣被仰付、去春申渡置候へども、以後者晝夜共縮切被仰付候條、爲御用罷出候人々、都而堀脇御門へ相向可申候。勿論右御門外に而下馬下乘之筈に候。佳節・朔望等辰巳表御門開き候節は、辰巳外御門爲開申筈に候。尤其節は往來不苦候。且非常之節茂、右御門往來晝夜共不指支儀は、是迄之通に可相心得候。

右之通一統可被申談候事。

正　月

正月廿七日。前田齊泰、陞任を謝する爲使者を京都に派す。

〔齊廣樣御傳略等之內書抜〕

正月十七日京都江人持組玉井勘解由貞矩を御使加賀守樣より被仰付。是は御轉任之御禮使なり。

十七日は廿七日なるべし

正月。他國に使する者の行裝を簡易にしその費用を節減すべきことを命ず。

〔觸留〕

付札、定番頭江

他國御使人行粧省略等之儀、文政三年一統被仰渡置候通に候。然所定式御貸渡金に而は用意方不足仕候旨申立、彼是不時願方、或町會所より借用致度抔与町奉行江申込候族も有之候段、粗被聞召候。畢竟是迄之振合を以旅中之器財不心服等、萬事相應に粧ひ不申而は難相成与申よりして入用多、自ら不時願之處江も至り申儀に候間、是等之儀堅く禁止、以來は都而用意方等御貸渡金限りにいたし、人數等格別減少、旅粧いかにも致省略、不時願方は勿論、他借一圓不仕樣可相心得候。京都江之御使之儀は、於彼地之行粧等是迄之振も有之に付、於江戸表從者召連方之相增申分は、御貸人等夫々御貸渡も有之儀に候間、旅中行粧成丈可致省略候。假令不時願等不致、自分に粧ひ候儀出來可申共、其儀も堅く指止、少も是迄之形ちに不拘、萬端格別手輕にいたし、御貸渡金限りを以相辨可申事に候。

右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之通一統可被申渡候事。

癸未正月

二月十三日。竹澤御殿鎭守天滿宮の祭日を定む。

〔官私隨筆〕

御宮は東照宮
本文の天満宮は舊學校に屬したるものなり文政七年二月の條參照

二月十三日

一、左之寫御用番より到來。

御横目江

竹澤御殿御鎮守天満宮、毎歳二月廿四日・廿五日御祭禮被仰付候。依而是以後、四月十七日御宮御祭禮之通、御家中曁町方等男女、幷拾五歳以下之男子參詣之儀勝手次第之旨被仰出候。併今年も御鎮守廻りいまだ仝御成就無之に付、三月廿四日・廿五日御祭禮被仰付、來年より前段之通に候。

二月十四日。本浦・散浦共に渡海船所持の者は藩の廻米を積み請くべきことを告ぐ。

〔留帳抜書〕

町・在之者何方浦に而も渡海船致所持候儀、去十一月指解以後、御用方仝く相勤候様申渡候通に候。然處是迄本浦之外於散浦渡海船所持之者、御用荷物等不積請不同に付、已來大坂等爲御登米之分、御領國中本浦・散浦とも惣様打込、無不同積請、御用仝く相勤候様可被申渡候。勿論散浦之分は御廻米迄に而、御用荷物之分は是迄之振を以相省き候。近年船稼相進候に付、御廻米高割符之上相對を以譲合候節、過分之余荷銀指出候躰にも相聞え候。御廻米運賃之儀

は、大坂御雇船之振を以相極置候事に候得者、過分之余荷銀取遣候儀等不相當儀に候條、此段相心得候樣、一統不相洩樣可被申渡候、以上。

未二月十四日　　御算用場

小堀八十太夫殿

井上與兵衛殿

二月十五日。德川家齊放鷹に依りて獲たる鴨を前田齊泰に贈る。

〔官私隨筆〕

去十五日上使御使番伊丹七之助殿を以、御拳之鴨一つ御拜領被遊候。御料理御盃事は御斷に而、御菓子・御吸物等出、萬端御首尾能相濟、上使御退出後爲御禮御老中方御廻勤被遊候旨、同日發足町飛脚中飛脚歩に傳附、甲斐守殿等より申來候。此段爲御承知申進候。先以恐悅御同意御座候、以上。

二月廿四日

二月十五日。前田齊廣、人持組及び頭分の士に努めて明倫堂の講書定日に出座すべきことを命ず。

〔觸　留〕

近頃は文學校において若年之人々入情之躰、追々素讀人も多く出座有之候。然處人持・頭分講書定日出座甚薄く相聞候。右は何れ茂在勤之事候得ば、繁勤之輩は毎度難罷出儀も可有之、其上壯年之人々与は違、萬端熟練之趣に候得ば、今更講書等不承候共心得有之事に候得共、又重役之人々不絶出座有之候得ば、別而年若之人々進みに茂相成候間、人持・頭分聽聞之定日には不絶罷出候樣有之度思召候。人持等行粧に而罷出候而は、手重に而難罷出筋も可有之哉、學校幷稽古所等𛀁罷出候節は可相成丈け人少に召出、人々存寄次第同列同役とても供數不同之儀不苦事に候。嫡子父同樣之行粧に而罷出候躰にも相聞候。右等は別而事輕人少に召連可然事に候。況次・三男に至り候而は、人持其外大身之人々とても、二・三人歟人々心得次第、夫より減少に而も不苦事に候。右樣之處に拘り、自然に懈怠にも至り候樣にも思召候間、此段夫々可申渡候。且又人持之子弟を初御家中之子弟、講日にも限り不申、常々文武可爲出情候。文學校素讀人多く与申內、多分陪臣之躰に相聞候間、何かにも御昵近之人々幷子弟多く相成候樣有之度思召候。將又行粧之儀は、其分限に應じ、其身之堅固に召連候事に候得ば、會而外見を飾り申譯に而者無之候得共、他國等は相應之堅固も可有之事、於御領國は其身々々之堅固は不入事候。文武之稽古は如何にも甲斐々々敷可致出情儀肝要に思召候。右

等之趣夫々可申渡旨、從中將樣被仰候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中傳達可有之候事。

二月十五日　　村井又兵衛

〔官私隨筆〕

今般人持中等學校講日出座之儀、從中將樣被仰出之趣有之に付、別紙之通筆頭相招可申談と、各致示談候故、則進之候條、御組等へも被仰談候樣にと存候、以上。

二月十六日

人持・頭分學校講書聽聞定日出座甚薄く相聞え候付、今般一統被仰渡候通に候。然處當月三日之定日には、人持・頭分近頃無之多く罷出候躰被聞召候。右はいかゞ之心得に候哉。當春萬歲之儀に付被仰出之趣茂有之、且は御馬廻頭等每度被爲召候儀等彼是考合、其模樣に而何れ茂存付き、俄に近頃よりは多く出候事に而も可有之と被思召候。先以何茂薄情成心得に候。畢竟ヶ樣之心得故、何事も一端切に而後々之守り薄く相成候。此一條にも限り不申、是迄之樣子何事も右之通之人氣故、一器量之人品も出來兼候旨、從中將樣被仰出候間、右等之御主意得与被相心得、子弟者勿論、各に茂御用無之節は心懸被罷出可然存候條、此段申達候。

同組中へ者御手前より可有演述候事。

二月十八日。幕府德川家齊の女溶姫を前田齊泰に嫁せしむるの意を告ぐ。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

二月十八日、江戶表御老中水野出羽守殿御役宅ゟ富山淡路守利幹樣御呼立にて、加賀守樣ゟ將軍家第二十一之御女溶姬君樣御緣組之御內意被仰出有之なり。

二月廿二日。老臣の越後屋敷式日を廢し隔日出席とす。

〔諸事覺書〕

二月廿二日

一、只今迄式日每年寄中等越後屋敷出席御用取捌候得共、御用も有之候間、是以後各寄日每に出席、九半時迄相詰、式日は指止候旨被仰出候。依之以來左之通出席可有之樣心得之旨、土州より廻狀有之事。

每月越後屋敷ゟ出席日

朔日　三日　五日　七日　九日　十一日　十三日　十五日　十七日　十九日　廿一日　廿三日　廿五日　廿七日　廿九日

但、九半時退出、佳節朔望是迄之通ニ御丸ゟ登城候事。

右之通に付日並之廻り物は相止事。

二月廿三日。前田齊廣、城下を通行の際警固掃除等の繁雜を除かしむ。

〔御觸抜書〕

御横目江

中將樣御寺御參詣曁御行歩、其外何方へ御出被爲在候而も、下々事多成儀を御厭、町役人等御先へ立候儀、幷横道等へ警固指出候に不及旨、舊臘被仰出、其段町奉行等へ申渡置候。依而武士町御通り之砌も前段之通故、指懸り御通前簾足輕觸廻り候儀も無之而は、人々門戸を〆中儀相おくれ候而も一圓御構無之、御通りに付而は掃除にも不及段被仰出候。右之通警固等は御趣意に叶不申、依而躊躇等相おくれ候而も御貪着無之候。誠鰥寡孤獨之者迄も實意之程を御見聞之上、思召も可被爲在御內存に付、御身分を諸事御事輕に被遊候御趣意に候。

一、武士町御通りに付而之掃除には不及旨、前段被仰出候通に候へども、所に寄ては明き地曁往來筋人通り薄き所へは、勝手次第塵芥を捨、往來甚見苦敷所も有之躰に候。加樣之儀は有間敷儀に候條、常々居屋敷廻り掃除之儀は不及申、明き地等へむざと塵芥捨不申樣、家來末々へ嚴重可申渡候。此儀は常々之儀に而、御通りに拘り候儀に而者無之候。

右之趣被仰出候條、一統可被申談候事。

二月廿三日　　　　　　　　前田土佐守

二月廿五日。前田齊廣の命ずる所は單に被仰出と書すべき例に定む。

〔諸事留牒〕

二月二十五日

一、是迄申渡方に、中將樣より被仰出候段申渡來候へども、以後中將樣与申儀相省き、唯被仰出候段申渡候段、今日夫々申渡候間、以後御家老方に而も、其段相心得候樣月番より演述之事。

二月廿七日。金澤に於いて德川家齊の女を前田齊泰に嫁せしむべき命を得たることを告ぐ。

〔官私隨筆〕

二月廿七日

一、左之紙面封印に而到來、致下書遣之。

當十八日水野出羽守殿へ淡路守樣御呼立に而、加賀守樣へ溶姫君樣御緣組之儀御內意被仰

出、難有御仕合思召候。此段拙者共へも可申達旨、以市三郎被仰出候段、甲斐守殿等より申來候に付爲御承知此段申進候、以上。

二月廿七日　　　　村井又兵衛

奥村伊豫守樣

二月廿七日。郡奉行等博奕を爲す者あるときは一村を連坐せしめんことを請ふ。

〔金龍公記史料〕

二月廿七日。郡奉行小堀政安等連署。請置一人爲博奕一村連坐之法。於是始定博奕連坐律。

二月廿八日。幕府、前田齊廣が在國して病を養ふの請を許す。

本年六月の條參照

〔溫敬公記史料〕

二月廿八日太公在國養病之請見許。

文政五年十二月の條參照

〔諸事覺書〕

三月十三日

一、中將樣御痛邪今以爾々不被爲在候付、長途之御旅行難被遊候。依之今暫御在國之儀加賀

前書廿八日とあるは是とすべきが如し

奥口は奥郡口郡なり

守様より御願被成候處、前月廿一日御用番松平和泉守殿御付札を以、御願之通被仰渡候段被仰聞之旨、土佐守より表方へ被達候事。

右に付伺御機嫌之儀、兼而詮議有之、伺之儀無之事。

二月廿八日。前田齊廣が行歩等の爲外出の際に於ける作法を告ぐ。

〔留帳拔書〕

中將様御行歩等御出之節平伏方等之儀に付、土佐守殿より別紙之通り御渡に付、相越之候條、夫々可申渡置候、以上。

二月廿八日　　淺加伊織

奥・口村々役人

付札、御郡奉行江

前々御鷹野等御出之節は、各之内被罷出候得共、中將様御行歩等御出候者各被罷出に不及、勿論村役人等茂罷出間敷候。都而御通筋警固足輕等被指止、下々迄も事多無之様被思召候。尤農人等之者仕業を止平伏いたすに不及、在り之儘可相心得候。下々之者共至迄實意程を御見聞可被爲在ため、右之通御身分御事輕被遊候御趣意に候。道橋等茂御出に付修覆に者不及候。乍去農業人之ために候得者、常々手入怠間敷候事に候。

右之趣被仰出候條、夫々被申渡、類役中江茂可被及演述候事。

二月廿九日　金子通用の手續を定む。

加賀藩は銀貨を本位とするが故にいふ

〔觸　留〕

付札、定番頭江

御當地金通用方未委候故、是迄は諸切手小判・一歩等共名目に應じ相渡來候得共、元來一歩判已下二朱迄は小判之小割に而、爲辨別被仰付置候儀に候得ば、以來は都而一株に相立置、金子之分は文字金与申名目、諸切手に何百何十何兩何歩二朱与書記指出候得ば、其節任御在合小判・二歩判・一歩判・二朱判之内を以、其金高割合相渡可申上、納方も右に准じ歩判之内上げ人勝手に指上可申。且遠路江御使渡り金之分は、旅用之儀に候間、受取人任斷歩判之内入交相渡可申候。

一、御進物幷被下方は、都而御目錄之表之名目に而金子請取申躰に候へ共、以來は御公界向幷他國者江被下方之外、御內輪曁御家中等へ被下方之儀は、前段之通歩判之內其節々御在合次第相渡可申候。併一人江百疋与歟申類引束請取申分、二歩金以上相渡候而は割符方指支可申候間、ケ様之類見計、一歩幷二朱判之内相渡可申候。

一、是迄御貸渡金返上之內、或百目に付何十目宛与申類には、銀に而返上之分茂有之、區々

無數は少數の意

に相成居申躰に候間、以來は金借用之分は都而金返上可仕候。是迄右躰銀に而上來候分茂、已來は金上納に可相改候。乃至返上高十匁与歟申分は、二朱与銀二匁五分与申図りを以指上可申候。

一、銀に而被下方之儀、是迄は都而其員數に包替相渡候得共、是亦御公界向幷他國者被下方之外は、百目以上乃至銀三枚与申分は、通用封銀百目・小玉銀二十九匁懸合銀添相渡候へば、包替銀茂無數に相成、請取人に而茂通用封にて受取候得ば辨利に可有之に付、以來右之通相改候。

右之通被得其意、組・支配之人々江被申渡、組等之內裁許有之人々は、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之通一統可被申談候事。

癸未二月廿九日　　　　村井豐後守

二月。諸郡手附等の腰明ある羽織を着用すべからざることを告ぐ。

〔留帳拔書〕

諸郡手附共途中相用羽織之儀、腰明有之分相用申間敷旨、去三月申渡置候處、中には以今不相改者茂有之躰に候條、心得違無之樣、尙更可申渡候。是以後若右躰及見聞候得ば、急度相咎

可申事。

未二月　　御郡奉行

惣年寄中・年寄並中

二月。芝居の衣裳に華麗のものを用ふべからざることを告ぐ。

〔川上芝居一件〕

芝居懸り

肝煎江

近頃は芝居衣裳、次第に宜敷相成躰に相聞え、甚奢侈之至に候。畢竟其方ども穿鑿等閑故と存候條、此度より急度相改、是迄用ひ來候分たりとも結構に相見え候分は指省、成限り古衣裳を以相辨、是非新に拵候分は、隨分麁品を用ひさせ可申事。

未二月

三月十六日。芝居役者・茶屋女の徘徊を禁じ、及び一般婦人の服裝の取締方を定む。

〔官私隨筆〕

三月十六日

御横目江

別紙覺書寫之通、町奉行等へ申談候條、被得其意、一統へも爲心得可被申談候事。

三　月

町奉行江

近年無急度芝居幷茶屋町之儀被申付候處、次第に結構を飾衣裳を飾り、兩所とも人々耳目を悅ばし候形に致增長候躰に候。剩芝居役者幷茶屋女、右郭外へも出致往來候躰相聞え候。右之通に而は惣躰之風俗に拘り、御家中下々之女自ら髮・衣服等其姿に似寄申所へ至り候儀、畢竟右芝居役者幷茶屋女郭外を致徘徊候故に候。以來右兩所之者共、曲輪外へ罷出候儀、堅く禁足可申付候。此上萬一曲輪外に而見請候においては、召捕可申、假令他之者とても、芝居役者・茶屋女に似寄候髮形・衣服之者は、急度召捕可申候。其上にも手拔等閑於有之は、御次よりも夫々改めに可被指出旨被仰出候條、可被得其意候事。

未三月十六日　　村井豐後守

朱書。右十六日御用番豐後守殿御渡候。但御文中に、他之者とても召捕可申との儀は、町方之者に不限、都而之他之者之儀に候哉与、爲念御尋申候處、此通に而町人に不限、都而

之事に而、右兩曲輪外之者とても芝居役者並茶屋女に似寄候髮形・衣裳之者共、町奉行並改方、右於兩手合可召捕与之儀与御申聞に候事。

〔觸留〕

今度芝居役者幷兩所茶屋女共、郭之外致徘徊候者等見咎心得方覺

一、他國芝居役者當町江罷越候節等、町役人より右日限爲斷出、一遍之往來迄見通可申候。其餘茶屋女等郭外江出候得ば、裝束花麗之有無に不拘爲捕可申事。

一、町方之儀は先達而被仰渡候之趣茂御座候付、一通品柄宜着類相用候共、花奢榮耀ヶ間敷粧無之分は、爲相咎申間敷候。

但、紗綾・縮緬着類、幷天鵞絨等奢侈成帶相用候はゞ爲捕可申候。此ケ條縮緬類等十歳以下之女子など辨利のため相用、榮耀ケ間敷筋無之分は、其程見計、相告不申樣申渡置候事。

一、品柄格別不宜衣裳に而も、芝居役者・賣女躰之風俗を拵居申者、曁榮耀専に相見得申分爲捕可申事。

一、武士家內与見請候而も、右樣不宜風俗有之分、名前爲相尋可申事。

一、子共肩掛は不相成品に而、先年被仰渡も御座候處、當時甚相ゆるみ、二・三歳之小兒迄に而も無御座、十二・三歳之女子繻子・天鵞絨・金紗等之切交之肩懸相用候者も有之躰御座候。

此分も爲咎可申事。

一、女照り傘淺黃紙に而張、芝居役者・女形等を爲繪書相用申候。是等近く仕出に而風俗不宜品に付、爲咎可申与奉存候事。

三　月

此分伺之通り与被仰出候。

三月十八日。前田齊廣、竹澤御殿に移るを祝し今明日能を演ず。

〔諸事覺書〕

三月十八日

一、今日竹澤御殿に而御能被遊、右拜見被仰付候付、上下着用朝六半時前罷出、御側御用人を以御禮申上事。

一、五時前拜見所へ相廻候樣御側頭申聞候付、各罷越候處、奥御書院御下段へ年寄中一列、其次御家老中一列並居、御上段へ御前御着座、御襖大地縫殿左衛門等披之、御目見御意有之、土佐守御取合被申上、御襖たて、夫より直に見物所へ相廻り御能初り之事。

一、九時過御中入之内、御膳方良左衛門溜ゟ罷越、御吸物等被下候段申述、追付溜において御吸物・御酒・御取肴頂戴。給事席坊主　畢而良左衛門相招御禮申上候事。

一、七時過御能相濟、各神戸藏人を以御禮申上退出之事。

奥之御舞臺御開御番組

翁 高砂 權兵衞 田村 二源太 熊野 御

張良 千左衞門 祝言金札 佐七郎

末廣 ゐくひ

〔諸事覺書〕

三月十九日

一、今日も御能有之候付、各上下に而六半時前竹澤御殿ゐ罷出。

一、五時前各見物所ゐ廻候樣御側頭申聞に付、見物に罷出。

但、右兩日共御用番豐後守之外は指懸御用も無之に付、例刻越後屋敷へは出席無之。

一、御膳方良左衞門溜ゐ罷出、御內々御菓子被下候段申述。追付各御菓子頂戴。給事席坊主畢而以

同人御禮申上候事。

一、八半時頃御能相濟、昨朝之通年寄中等御襖際へ列居、御前御上段に御着座、御襖披之。

御目見御上意有之。土佐守御取合申上退候事。

一、溜において玉川二源太を以各御禮申上退出之事。

御番組

翁 白樂天 千左衛門 箙 佐七郎 羽衣 權兵衛

國栖 御祝言弓八幡 鐵次郎

三本柱 千鳥

三月廿一日。明倫堂の講書に出席すべき者の日割を定む。

〔觸留〕

毎月講日等之日割

二日朝講日五半時より人持・頭分子弟共、八つ時より御大小將六組・同御用番支配、右之人々子弟共。

但、當番等に而指支候人々は、七日朝夕之內不時に可罷出事。

七日朝講日五半時より、御馬廻六組、子弟共。

但、朝番等之人々は夕に出可申事。

夕八時より御馬廻六組・同御用番支配等、右人々子弟共。

但、書番等之人々は朝に出可申事。
十二日朝講日五半時より定番御馬廻子弟共八組、組外四組、同御用番支配、右人々子弟共。
但、當番等に而指支候はゞ、十七日朝不時に可罷出事。
夕八時より人持子弟共。
十七日朝講日五半時より頭分子弟共、夕八つ時より寺社奉行支配、平士、御射手、御異風、町同心、火矢御用、御厩方、新番組御歩小頭、三十人頭、御醫者、御茶堂頭、坊主頭竪諸小頭、同並、新番組御歩、右人々子弟共。
但、當番等に而指支候はゞ、二十二日朝へ不時に可罷出事。
二十二日朝講日五半時より與力、御大工頭、御鷹匠六組、御歩、定番御歩、御鷹役等御歩並、右人々子弟共。
但、當番等に而指支候はゞ、二十七日朝ゟ不時に可罷出事。
夕八時より人持子弟共。
二十七日朝講日五半時より御算用者、御料理人、御細工者、町奉行支配町下代・御細工人等、右人々子弟共。夕八時より足輕・坊主・小者子弟共、町・在之者。
五日・十六日・二十五日夕八時より人持之子弟會讀。

四・九晝九時より書生會讀。

素讀毎朝。但節・朔望・二七除之。

一、御近習之面々は、毎月二十七日夕之外講日出座勝手次第之事。

一、厄介人學校𛀁出座不指支人々は、毎月二十二日朝講日不時出座之事。

一、陪臣之分毎月二十七日朝講日不時出座之事。

以　上

人持幷子弟會讀に罷出候人々名書、早速學校𛀁差出可申候。且右之人々、若氣滯等に而會讀缺座之節は、其時々學校𛀁可及屆候事。

一、書生四・九之會讀に平士之面々等心懸罷出候人々は、前方學校承合罷出可申事。

一、講日組當りに其頭・支配人罷出候儀勝手次第之事。

一、都而學校𛀁罷出候人々召連候家來、辨門內外腰掛等に而高聲等不仕、作法能罷在、下馬縮足輕差圖之通相心得候樣、主人々々より嚴重可申渡事。

一、人持幷子弟共、毎月講日聽聞定日之外、二日宛講釋聽聞被仰付候事。

一、頭分右同樣一日宛被仰付候事。

一、人持之子弟爲勤學、一ヶ月三日會讀被仰付候事。

辨門は便門

但、有緣人も年若之人々抔心懸次第可罷出事。

一、書生四・九之會讀之日、平士之面々、并頭分之子弟、平士子弟共罷出、勤學仕候儀勝手次第之事。

但、是迄も本文之通に候得共、此度猶又被仰出候。

右之通被仰出候付、是以後每月講書定日幷會讀等之日割等、別紙兩通之通相心得可申候。來四月十六日より相改候。十四日迄は是迄之通に候事。

右之通被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配にも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

三月二十一日　　横山求馬

三月廿三日。大聖寺侯前田利之參覲の途金澤に着す。

〔官私隨筆〕

備後守樣今廿二日御發出、松任御旅宿、明日此表へ御着、廿四日竹澤御殿へ御出、廿五日御發出被成候筈に御座候。且又御旅宿へ爲窺御機嫌、各明日退出後罷越申候。御出難被成候はゞ、以御紙面御窺可被成候、以上。

〔温敬公記史料〕
三月廿三日。備後守東覲之次過金澤。參竹澤殿觀能。

三月廿四日。竹澤御殿鎭守天滿宮の祭禮を延期す。

〔觸　留〕
付札、御横目ゟ
竹澤御殿御鎭守天滿宮御祭禮、今年は當廿四日・廿五日に被仰付、參詣方被仰出候趣先達而申渡置候處、廿四日は備後守樣竹澤御殿ゟ御出に付、右祭禮廿五日・廿六日右兩日被仰付候。尤參詣方は先達而申渡置候通に候。

三　月

付札、御横目ゟ
竹澤御殿御鎭守天滿宮御祭禮、當月廿五日・廿六日被仰付候段、先達而申渡置候得共、被指延、來月廿四日・廿五日兩日被仰付候段重而被仰出候。尤參詣方之儀者、先達而申渡置候通に候。
右之趣重而一統可被申談候事。

三　　月

付札、御横目〻

竹澤御殿御鎮守天滿宮御祭禮、當月廿四日・廿五日被仰付候段、先達而申渡置候處、御指支有之被指延、來月廿四日・廿五日兩日被仰付候。尤參詣方之儀者、先達而申渡置通に候。

右之趣一統可被申談候事。

四　　月

付札、御横目〻

竹澤御殿御鎮守天滿宮御祭禮、當月廿四日・廿五日可被仰付旨被仰出置候得共、當年は右祭禮御延引之段重而被仰出候。尤來年よりは毎歳二月廿四日・廿五日御祭禮、參詣方之儀は先達而申渡置候通に候。

右之趣一統可被申談候、以上。

五　　月

〔諸事留牒〕

三月廿八日。富山侯前田利幹幕府より公役を命ぜられたるを以て加賀藩に助成を求む。

三月廿八日

一、淡路守様より御使蟹江監物罷越、年寄中等御口上有之に付、月番豊後守宅ゟ右御使者相勤候節、此方罷越、御家老ゟ之仰之趣承、年寄中ゟの仰は又兵衞承候事。仰之趣右之通。

御家老中ゟ御意

暖氣之砌、加賀守様・中將様益御勇健被成御座、何茂様御安泰被成御座、珍重御儀思召候。各にも御無異に候や、被成御尋候。然ば今般御公務被蒙仰候に付而、御拜借被成御願候。各宜被遂示談候様被成度、被成御願候。委細之儀蟹江監物より可申述候。此段宜申述候様從江戸表被仰付候。

三　月

一、右仰之内蟹江監物より可申述と有之儀、事長故書取を以申聞候由に而左之通。

演述之覺

今般淡路守様、關東筋川々御普請御用被蒙仰、御金納に而御割合高御座候處、過分之御出金高御座候。元來御逼迫至極之御勝手振に御座候。年々打續無御據御物入相嵩み、彜与御指支被成方も無御座候。然處此度御公務御用被蒙仰、如何可被成哉、御當惑御心勞至極思召候。是迄御公務毎々御助成被成進候。且御家中御借免打、御郡ゟは右御用金割符被仰付、其餘御才

覺被仰付候故、是以彝与難澁至極之族御座候得共、御公務之儀に御座候へば不被得止事、御家中御借知幷町・在共上納金被仰付候。然し御引足に成候事に茂無之、此上は一向出金之御手段無御座、御心勞至極被成候。且又於其御元樣茂御難澁、殊に去年以來莫大之御物入御座候御中、御願被成候儀御意外思召候へども、外に被成方無御座候に付、無御據金子八千兩拜借被成御願候。御返上之儀は、年三百兩充追々可被成御返上候。猶又此末嚴重御省略被仰付、御勝手振少成とも御手繰宜相成候はゞ、其節は御伺候而、增金に而年限を縮め可被成御返上候間、何に而も無相違可被成御皆濟候間、幾重に茂御汲分御聞屆被成下候樣仕度、偏に御憐察之上、何分にも御願通り御許容被成下候樣、吳々被成御願候。

三月　　　　　　　　　　　　　　盤江監物

三月。百姓作得米は皆濟後といへども年内は組主付の指紙を添ふるにあらざれば賣拂ふべからざることを告ぐ。

〔留帳拔書〕

百姓作德米皆濟以前指紙相添賣出來候得共、以來は皆濟後に而も年内之分は、組主付より指紙相添賣拂候樣被仰渡候。

一、糀米之儀は屑米に付、是迄無指紙に而相辨來候得共、改方に指支候に付、以來は皆濟前

後共組主附指紙相添候樣被仰渡候。
右之趣盜賊改方御役所江被仰遣候間、爲承知諸郡江私より可申談旨、今日廣瀨欣左衞門樣より就被仰渡候、爲御承知如斯に御座候、以上。

三　月　　石崎彥三郞

諸郡惣年寄中樣・年寄並中樣

四月五日。二ノ丸御殿以下御廣式の下女にして綿服以外を着用する者は之を逮捕すべきことを令す。

〔官私隨筆〕

四月五日

一、二御丸・竹澤・金谷三御廣式、年寄女中等召仕候下女着服木綿之外着用爲致申間敷旨等、且又芝居見物幷茶屋町へも見物に罷越候躰相聞候付、以來は右場所において召捕候樣被仰出候旨等、覺書一通、於竹澤御殿被仰渡候旨に而、土佐守殿被出之候付、組等へも可申聞置旨、御用番より以添紙而到來、返書出之。

〔御觸拔書〕

二御丸・竹澤・金谷三御廣式年寄女中等召仕候下女着服之儀、木綿之外着用爲致申間敷候。帶

之儀は輕き絹類用候共其通、尤織物類堅く用申間敷候。近年御家中女向服之儀、質朴之儀段々被仰出、就中當春以來御馬廻頭等ゟ分而被仰出候趣も有之候。然處三御廣式下女共之中には、宜着服之者茂見當り候之旨相聞候。江戸表より罷越居候下女共、別而服茂宜様に茂相聞候。右等之者を見習候様に相成候而者、御締方に茂差障り、殊に御家中ゟ段々被仰出候上、御廣式向下女着服宜候而者、御不都合之御政事に相成候事に而、年寄女中等急度心得も可有之事に被思召候。依之以後御法に背き候服之者は、御廣式下女に而も召取り禁牢たるべく候。且又芝居見物幷茶屋町ゟ茂見物に罷越候者茂有之由。左様之族堅く不相成筈に候處、中に者罷越候躰茂相聞候に付、以來者右於場所召取り候様被仰出候條、此段主人々々より可申渡候。

未四月

右之通被仰出、夫々申渡候條、以來若右躰之者有之候者、無泥召捕候様可被申渡候事。

四月十一日。前田齊泰登營して徳川家齊の女溶姫と婚すべき命を得。

〔諸事留牒〕

四月廿五日

一、加賀守様ゟ溶姫君様御縁組被仰出候に付、御書被成下候に付、出席之上各上下に相改、

年寄中等一列於席拜戴。

一、右之通今日加賀守樣より中將樣江被仰上候御使、內記相勤候。御口上左之通神戸藏人を以申上候處、以同人應じ御答之由。

中將樣江

當十日御老中方御連名之依御奉書、翌十一日御登城被成候處、御座之間於御次之間、御老中方御列座、溶姬君樣御事御緣組被仰出候段、御用番水野出羽守殿被仰渡、夫より於御座之間御目見、御懇之被蒙上意、御手自御熨斗御頂戴被遊、難有御仕合思召候。右御普爲聽被仰上候。此段宜可申上旨被仰付候。

四月二十五日　　　　御使　前田內記

一、今般御緣組被仰出候に付、中將樣江も上意有之、難有仕合に被思召候。可申聞旨被仰出。

上意左之通。

幾久敷目出度い。熨斗を。肥前守江も心得。

〔官私隨筆〕

依御老中方奉書今日令登城候處、溶姬君樣御事手前へ御緣組被仰出、於御座之間御目見被仰付、御懇之蒙上意、御手自御熨斗頂戴之、重疊難有仕合候。此段爲可申聞如此候、謹言。

加賀守御實名　御判

四月十一日

奥村伊豫守殿

〔續德川實紀〕

四月十一日、溶姬君のかた松平加賀守へ婚嫁の事仰出さるゝによて、けさ松平和泉守水戶宰相に、大久保加賀守紀伊宰相に御使す。やがて松平加賀守めされて、その事仰出され、御手づから熨斗蚫をおくらせらる。水・紀兩卿祗してまうのぼられ、御對面あり。又上直布衣以上のともがらへは、芙蓉間にして宿老列座して、水野出羽守これを傳ふ。

四月十一日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕

四月十一日

一、今日御能被遊候に付、年寄中等拜見被仰付候間、朝六半時頃常服に而竹澤御殿江罷出候樣、昨日土佐守より以廻狀申來候付、各六半時頃より罷出候。

但、御用番求馬・御家老方主附內記・若年寄方掃部儀は、四時より越後屋敷へ罷越、御用濟次第九時過重而竹澤御殿へ罷出。

一、御能七半時過相濟、前後共一木逸角を以御禮申上退出候事。

御番組

養老　吉之助　八島　佐七郎　大原御幸　御

邯鄲　權兵衛　放下僧　二源太　阿漕　御

羅生門　三五六　祝言呉船　鐵次郎

蚊相撲　仁王

四月十三日。富山侯前田利幹公役の助成を求めたるを以て使者に答ふ。

本年三月廿八日の條參照

〔諸事覺書〕

四月十三日

一、淡路守様御使者盤江監物ゟ今日御答可申述候に付、九半時過御川番求馬宅へ罷越候筈に付、御家老方主附一人罷越、先達而御意之御請申述候様、今日月番より演述に付、豐後守幷内記・求馬宅へ罷越、御請監物ゟ申述候事。

手扣

暖和之砌御座候處、淡路守様倍御機嫌能被遊御座、恐悦之至奉存候。加賀守様・中將様倍御

勇健被成御座、何茂様御安泰被成御座、珍重御儀思召候。猶更御安否被遊御承知度思召候旨奉承知候。中將様奉始益御機嫌能被成御座候。然者今般御公務被爲蒙仰候付、御拜借金御願被遊候。委細之儀御手前被申述候樣、從江戶表被仰付越候旨、則中將樣江奉申上候處、宜僉議可仕由就被仰出候、委細横山求馬申述候。將又私共御懇之蒙仰、忝次第奉存候。御請之儀御序を以宜御執成賴入存候。

四　月

四月十六日。前田齊廣の女次姬歿す。

〔官私隨筆〕

次姬樣御儀、先日以來御勝不被遊候處、今晝過より御指重り、不被成御叶御療養、今十六日申中刻御卒去之旨、從中將樣被仰出候段、藤田平兵衞より申越候。先以奉絕言語候。右に付中將樣相伺御機嫌、二御丸御廣式へも罷出、直姬樣初御子樣方御內證樣へ相伺御機嫌候筈に候間、御自分樣にも御出御伺可被成候。御出難被成候はゞ、夫々御紙面を以御伺可被成候、以上。

四月十六日　　　　横　山　求　馬

奧村伊豫守樣

〔官私隨筆〕

四月十七日

一、左之觸狀御用番より以添紙面到來、返書遣之。

次姫樣御氣色御滯被成候所、段々御指重不被爲叶御療養、昨十六日申中之刻御卒去被成候。

依之普請は昨十六日より今日迄二日、諸殺生・鳴物等は當二十日迄五日遠慮可仕候。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

四月十六日次姫樣御卒去。同二十一日御葬式、天德院江御移り、同寺境內江御收りなり。御年御五つ。御法號は立華院殿圓智微笑大姉と奉申なり。御生母は直姫樣御産婦之方なり。

四月十七日。金澤田町新町に火災あり。

〔諸事留牒〕

四月十七日

一、九半時頃田町新町出火に付、月番江相達歸宅いたし候處、餘程之大火に而、七時過鎮火いたし候事、百三十九軒燒失。田町新町より出火、天神町・金浦町燒失也。

四月廿三日。藩侯の紋服を拜領したるものゝ着用制限に關して令す。

〔官私隨筆〕

是迄御目見以下輕き組柄之人々へ茂、格別之者は規模之ため御紋之品頂戴被仰付候。然處近年猥に寫等もいたし、致着用候族も多有之、別而御目見以下之人々は、外人見入ため猥に致着用候躰有之に付、以來御目見以上之人々と而も、三品以上之外は御紋之御品は被下間敷、御上下等被下候節は、品替り候御紋に而可被下候。尤御表・竹澤御殿一同御同樣に候。依之以後是迄致拜領罷在候共、御目見以上に而も、三品以上之外は御定紋之品着用仕間敷候。

但、御近邊之人々に而も、三品以上之外は御定紋之品着用仕間敷候。

一、三品以上御紋付拜領被仰付候其子弟、曁其家代々着用仕來候三品以上に而も、無息之人々嫡子たり共都而着用仕間敷候。父跡目相續仕、其家に拜領有之候得者尤着用不苦候。

右之通夫々嚴重可申渡旨、中將樣より被仰出候條、被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

四月二十三日　　　　　　　　　　横山求馬

四月廿六日。金澤に於いて諸士等前田齊泰の婚約を祝す。

〔諸事覺書〕

四月廿六日

一、今日頭分以上江御弘之趣可申述候間、五時過上下着用二御丸江登城之筈之旨、昨日月番より演述。

一、四時過頭分以上列居、年寄中等謁、左之通月番求馬被申述。

但、頭分以上年寄中等宅へ廻勤、年寄中・御家老中・若年寄も月番求馬宅へ爲御祝詞相勤候事。

當十日御老中方御連名之依御奉書、翌十一日御登城被成候處、御座之間於御次間御老中方御列居、溶姫君樣御事御縁組被仰出候段、御用番水野出羽守殿被仰渡、夫より於御座之間御目見、御懇之被爲蒙上意、御手自御熨斗御頂戴被遊、中將樣も御懇之被爲蒙上意、重疊難有御仕合被思召候。此段可申聞旨、拙者共迄以御書被仰下候事。

四月。能役者及び町人にして藩侯の紋服を受けたる者あるも之が着用を禁ず。

〔於江府御親翰帳之内書抜〕

町奉行江

竹田權兵衞を始他國御手役者、且御當地諸橋權之進等、其外役者之内御紋付被下置候者可有之候間、以來御紋付着用仕間敷候。

但、於江戸表等にも勿論着用仕間敷候。
一、江戸・京都等町人に被下置候分者、御貪着無之候。
一、町年寄を始、御用聞町人等御紋付被下置候者も有之候者、着用仕間敷候。
右之通從中將樣被仰出候條、被得其意、夫々嚴重可被申渡候事。

未四月

御算用場奉行に

御郡方役人曁遠處町人等、御紋付被下置候者も有之候者、着用仕間敷候。
右之通從中將樣被仰出候條、被得其意、夫々嚴重被申渡候樣、御郡奉行・遠所町奉行等に可被申談事。

未四月

四月。家中に使役する下女の服裝を規定す。

〔觸留〕

御廣式女中召仕候下女着服之儀、今般被仰出候趣に付、都而御家中召仕候下女等衣類も一統同樣に相調理可申心得方覺

一、上着は木綿・同糸入島・布幷下料成縮之外は爲見咎可申事。

一、片重紬・岸島迄下着相用候分は見咎申間敷候事。

但、本文古び居申品たり共、上着に相用候へば、勿論爲見咎可申、且肌着に長袖縁相懸居申分見咎可申事。

一、帶之儀絹・紬・縮緬之外は爲見咎可申事。

一、下女之內にも、御家中年寄中を初大身之人々に奥向重立召仕候者、是迄禮服も相用、間着に絹類相用來候得共、以後內輪において禮服之儀は格別、途中徘徊之節は前ヶ條之外絹類等致着用候はゞ、一統同樣に爲見咎可申事。

一、年寄中等家來之內、給人之妻子等、途中又者召連候分は格別候得共、若從者も不召連致往來候節、前條に相拘候族於有之者、一圓爲見咎可申候事。

右之通相心得夫々可申渡哉奉伺候事。

未　四　月

其通与被仰出候。

四月。石川郡宮腰の醫毛利東後齋篤行を以て賞賜せらる。

〔見聞袋群斗記〕

四月、宮腰醫者毛利東後齋へ御賞あり。東後齋は人となり誠懸慈愛、邑人及び近村之貧者に

調薬を施すこと數十年間なり。奇特者に付布三疋被下る。

五月四日。前田齊廣、諸士の動靜を報告せしむ。

〔親翰留〕

此節組々庶士の体無替候哉承度候。巷說たりとも可申越候。此段侍支配の頭々江は其方中より令通達、請書は一役連名に可指越候、已上。

五月四日　　　　御朱印

馬廻頭中

小將頭中

五月九日。昨今兩日天德院に於いて前田綱紀の百年忌法會を執行す。

〔官私隨筆〕

今般天德院において就御法事、明後七日御寺惣見分有之候間、九時御出宅御越可被成候。尤布上下御着用之筈に候。且又別紙請割一通差進申候條、御請可被成候、以上。

五月五日　　　　横山求馬

奧村伊豫守樣

〔諸事留帳〕

御内證様は前田斉泰の生母

五月八日

一、今日松雲院様百回御忌に付、天徳院江六時過提灯に而罷越。中将様御參詣六半時、御供揃五時頃也。御内證様も六時御供揃に而、六半時御參詣、尤御表江かゝはり申儀無之、御簾内に而諷經等御聽聞也。

一、御法事差定左之通、二百五拾僧也。

松雲院殿百回御忌御法事差定

八日

卯刻　轉讀般若

辰刻　献粥諷經　三刹諷經

巳刻　法華頓寫

午刻　拈香佛事　献供諷經

九日

卯刻　轉讀般若

辰刻　献粥諷經

巳刻　薦拔上堂

午刻　甘露施食　献供諷經　立塔佛事
救濟大赦　大施行會

〔官私隨筆〕

五月九日

一、六半時過にも候哉、竹澤御殿中將樣奥之口御出之附人來、追付各罷出、御法事奉行幷土佐守は階下へ被罷出、伊豫守・又兵衞・内藏助・織江・内記は、階上内より右之方中敷居之下に列居、内より左之方は如例寺社奉行初列居也。無程被爲入、御間之内御先立大地縫殿左衞門、直に御裝束之間へ被爲入、御法事初可申哉之旨御法事奉行より伺之、被仰出之上初。

〔溫敬公記史料〕

五月九日行赦。

五月九日。前田綱紀の百回忌茶湯を江戸廣德寺に修す。

〔溫敬公記史料〕

五月九日。當松雲公百回忌。供茶湯詣廣德寺。

五月九日。辰巳上水江筋の取締方を定む。

〔御觸拔書〕

辰巳上水江筋江塵芥等捨申間敷旨等之儀に付、別紙御普請奉行出候に付、寫相越之條、被得其意、組・支配之人々江嚴重可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

五月九日　奥村内膳

覺

一、辰巳上水江筋江塵芥捨申間敷事。

一、穢敷品等洗流暨洗足抔堅く仕間敷、幷草履・草鞋等捨申間敷候事。

一、猥水汲取申間敷事。

但、若火事之節は格別之事。

一、小立野石引町通り江筋玉縁之上を往來いたし、踏荒申間敷事。

一、江筋通り御普請會所石垣上石等取はづし申間敷事。

右辰巳上水江筋江、爲御締方水道裁許足輕等爲見廻、右之族於有之は、嚴重に見咎候得共、中には心得違之者も多有之躰。當時は竹澤御殿御園中江御水入、無程御泉水有之所江塵芥等流込候而は、甚不敬之儀に御座候間、以來急度心得違無之樣、御家中末々幷寺社門前町・町近

き百姓等迄、急度相守候樣一統被仰渡可被下候。且又右江筋御普請會所之內石垣上石取はづし、每度不時成損所出來、第一御不益之筋に御座候。都而右樣之心得違之者見請次第爲召捕候筈に御座候間、此段茂被仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

未四月十三日

横山義六郎
村田九郎右衞門
大久保覺兵衞
津田木工

横山求馬樣

五月九日。御郡方惣年寄以下に麁服を着用すべきことを命ず。

〔留帳拔書〕

百姓分衣服之儀、木綿・布之外堅く着用不相成、惣年寄・年寄並之者は紬御免被成置候得共、近年格別被仰出候趣茂有之候間、成限麁服可仕候。猶又今度御廣式女中等召仕候下女着服之儀に付譯而被仰出之趣、且右に付當町奉行幷盜賊方より見咎方之儀に付相伺候覺書共都合三通御渡に付、爲心得寫相越之條、得其意、家內末々迄急度相心得候樣可申談候。若此上心得違之人々も有之、他之手合より見咎候而は、於拙者共申譯茂無之儀に候條、是等之處能々可

有心得候、以上。

五月九日

竹内作左衛門

惣年寄中・年寄並中・新田裁許中

山廻り中・無役御扶持人中

本年五月の條參照

五月十三日。金澤町奉行、新に町名を命じたる理由を前田齊泰に上申す。

〔於江府御親翰帳之内書拔〕

粗承り候處、町奉行より申渡、當城下町之町名唱替之儀申渡候躰に而、殊に數箇處之樣子に相聞え候。右者何等之主意に而相改候事に候哉、下々數年來唱來り候町名多く相替り候事故、甚混雜に而、下々迷惑之趣も可有之、其上右等之儀者前廉聽にも達可申儀に候處、何等之趣も不申聞候。各には前廉相達候哉承度候。各にも不相達儀に候はゞ、町奉行如何之存寄に候哉、町奉行手前相尋可被申越候、以上。

五月十一日

奥村內膳殿

御城下町之町名唱替之儀申渡候躰御聞及に付、右は何等之儀によつて相改候哉、委曲御達可申旨、御急書を以被仰渡候趣承知仕候。右町名之儀、往古与は段々町數相増申候處、新に町名

付申儀も無御座候付、下々に而其近處之町名を以唱來り申故、數町一名に而唱來候處多御座候付、公事場において吟味方之者有之候同類等申顯、又は何町何屋誰与申者重而召出候迄、私共に差預申段申越候節、町役人ゟ申渡相糺候得者、一町名之内に同名［　］二人も三人も罷在申儀有之、何れ共難相分［　］不殘縮申付置、其段公事場ゟ申遣、申顯候本人手前与得糺、重而何与歟相分り候儀申越候迄は、縮仕置候付、如才も無之者においては誠災難に逢ひ、如何計心勞仕儀に付、隨分同名之者無之樣に申付置、組合頭一手合之儀はしらべ方出來申候へ共、他之組合に相成候而は何分行屆不申。其上致改名候而も、輕き者に而者兎角前々より之名前を呼來申故、共詮無御座。此儀は畢竟町名細に無御座、數町一名唱來申故、自分同名之者も罷在申儀。且又一町名之内に而、肝煎兩三人之裁許ゟ分れ居申箇處も御座候付、壹人之儀に付肝煎兩三人も呼立僉議不仕而は、誰裁許之者と申儀相知不申。彼是私共手前においては甚煩敷儀に御座候へ共、是迄折も無御座哉共儘に相成來申に付、何卒折も有之候はゞ町名細に付け、肝煎・裁許交り居申［　］申樣に町名改め申度心付罷在候內、去春於御場人見吉左衛門より御城下繪圖改正被仰付候由にて、町方之分分間を以下繪圖出來差上候樣申談候付、前條之趣共申達、幸ひ序に御座候間、此度相改指上申繪圖には町名無之箇處等、新に町名付け上申度旨相達置、町役人之內主付申付、丁間等巨細相改、所割繪圖に爲認、前々より有之

町名は畧書に仕、新に付申町名は付札に朱書仕、一往御普請奉行江差遣、彼方にて一扁しらべ有之、承知之上吉左衛門を以差上申節、朱書付札に仕置候町名、新に付可申分に御座候段申達置、其後追々出來之分も右之通仕差上、漸く前月皆出來仕、不殘差上申候付、此間町名改め候町々江申渡、先達而御郡地町支配に被仰付候箇處之通當分□家々柱に町名書記爲出置申候。右□有之中比より中絶いたし居申箇處は、古名に爲立歸、或は唯今迄下々に而唱來表立不申分、直に其町名に申渡候箇所茂御座候。都而町人共は町名を以分ち申儀に而候間、武士之組抔を糺し申同樣に御座候。此儀各樣江、去年七月枯木橋番人之儀に付、別紙通御達申置候付、分而は御達不申。此度彌相改候上、一通り書面に御達申候而は、粗分り不申に付、一枚繪圖認上置可申与、當時爲取懸置申候へ共、未出來不仕候。右町名相改候趣意御尋に付、委曲御達申候事。

五月十三日　　町奉行

五月十七日。江戸等へ使人として派遣せられたる者がその周旋者に贈物をなすの慣習あるを戒む。

〔御觸拔書〕

定番頭江

江戸表等江御使人、此表發足前幷於江戸表等御使相勤候付、取持等いたし候者共江、是迄贈物有之、雜費茂相懸り候樣子相聞え候。甚風俗不宜事に候間、以來指定候公儀御役人之外、御內輪向之儀者堅指止候樣、御使人等江可申渡旨被仰出。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江茂相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

五月十七日　　村井又兵衞

五月十七日。諸士の轉役・組替若しくは處罰せられたる者ある時は之を竹澤御殿に屆出づべきことを命ず。

〔御觸拔書〕

御横目江

御家中之人々御步並以上、是以後轉役・組替・御咎被仰付候節等、都而竹澤御殿措者席江可及屆候。尤頭分以上者直に相達、平士以下は其頭・支配人より可相達候。

右之趣一統可被申談候事。

五月十七日　　前田土佐守

五月廿一日。前田齊泰登營して德川家齊の女溶姫と婚約の成れるを謝す。

〔溫敬公記史料〕

五月二十一日登城謝許婚。大將軍賜刀一備前國吉岡一文字代金五十枚。

〔續德川實紀〕

五月廿一日、松平加賀守御許嫁を謝してまうのぼり、白銀・卷物をさゝげて見えたてまつる。御盃に吉岡一文字の御刀を下さる。

〔諸事留牒〕

五月二十八日

中將樣江

當二十日御老中方御連名之依御奉書、翌二十一日御登城、於御黒書院御緣組御禮被仰上、御懇之被蒙上意、御盃・御肴御頂戴、其上御腰物御拜領之。且又西御丸江も御登城、於御座之間內府樣江御禮被仰上、御懇之被蒙上意、御手自御熨斗御頂戴、重疊難有御仕合思召候。右御普爲聽被仰上候之段、御口上宜申述候。

五月二十八日　　　　御使　御　家　老

中將は前田齊廣

五月廿五日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕

五月廿五日

一、今日御能被遊候付各拜見被仰付候。依之六半時不遲上下着用竹澤御殿へ可罷出樣、廿三日夕土佐守より廻狀有之。仍而今朝右刻限より各竹澤御殿へ罷出、揃候上一木逸角を以御禮申上。御能七時過相濟、神戸藏人を以御禮申上退出之事。

但、月番內膳は四時より九半時迄越後屋敷へ相詰、主附內藏助・若年寄掃部儀も越後屋敷へ可罷出候得共、今日は御用も無之に付初終竹澤御殿に罷在候事。

御番組

翁　竹生嶋　千左衞門　忠則　佐七郎　誓願寺　權兵衞

三　笑　御　祝言弓八幡　二源太

唐相撲　小傘

以上

五月廿八日。竹澤御殿に時鐘を揭げ、次いで之を改鑄す。

〔官私隨筆〕

本文は奥村伊豫守の手記に係る

八月四日の條參照

五月廿八日

竹澤御殿に時鐘堂出來、鐘も出來、今日釣り候由に而、今朝四時頃尻垂坂之方賑敷候付、庭へ出見候處、坂上り、御殿へ參り候跡之躰也。右に付祭獅子抔も御殿へ入候躰也。右鐘兩三度も鑄直し候由沙汰有。

〔歲々略曆〕

未五月廿八日竹澤御殿釣鐘改而懸る。油木山吹屋吹申事。鳴り不申故中居に而吹直り、是も鳴り不申。夫より野町釜屋吹直す。

〔歲々略曆〕

當五月竹澤之鐘油木山釜屋にて吹上候へども、一向鳴り不申に付、能州中居にて吹直り、七月廿八日より海づたひにて八月朔日大野浦へ上り、夫より金澤地車に引凡目形七百貫目なり。是も鳴不申。

五月。金澤の一部町名を改む。

〔又新齋日錄〕

一、文政六年五月金澤町中町名紛敷、數町も同名之所有、小名不相分所々有之に付、此度唱替等相改候ヶ所左之通。

只今迄森下町上の方卯辰町　森下町
只今迄木倉町後町与申所　大藪小路
只今迄安江町上の方　上安江町
同下の方　下安江町
只今迄乘善寺上地町与申所　元乘善寺町
只今迄材木町与申所　材木町一丁目より三丁目迄
但一丁目は天神町境木戸に御座候。三丁目備中町入口迄に御座候。
只今迄下材木町与申處　材木町四丁目より七丁目迄
但四丁目は備中町境に御座候。七丁目は橋場町境木戸迄に御座候。
只今迄上今町之内　山崎町
只今迄常福寺上地町　元常福寺町
只今迄塩屋町の内山根町入口より坂の高迄　清水町
只今迄河原町之内竪町筋三宅良雄前橋より片町出口木戸迄　龜澤町
只今迄上荒町与申所　木新保荒町

只今迄木新保町之内　木新保厩町
只今迄木新保町之内　木新保次田町
只今迄上荒町木新保町之内に仁随寺前通　木新保仁随寺前
只今迄安江木町の内安江町木戸より安江木町上の木戸迄
舛形
是迄安江木町上の木戸より専光寺辻迄　白銀町
同専光寺辻下の木戸迄　爽町
是迄六枚町　南六枚町
是迄折違町之内圖書町入口小路　原町
只今迄經王寺前之内小名七軒町与申處　經王寺前横町
是迄土取場之内小名立丁与申所　土取場永町
小名永順寺の小路与申所　同一の小路
同穴町与申所　同二の小路
同中町与申所　同三の小路
同奥小路与申所　同城端町

同左京殿町与申所　同　屏風小路
同こんか町与申所　土取場間の小路
同川縁与申所　同　しもく町
是迄百々女木町後町に而小名安藤町与申所　裏百々女木町
同安藤町魚谷の所　わらや谷
是迄仰西寺横小路　三所町
是迄田町新町与申所　田町新道
是迄笠舞新町事　長柄町
石浦新町一丁目二丁目
芝居座圍の内　川上末吉町
是迄長門町　北長門町
是迄後傳馬町　南長門町
是迄後傳馬町　裏傳馬町
是迄下傳馬町　俵町
同斷　七寶小路

同断

茶木町	
笠舞一番町	笠舞中組入口の小路
同二番町	次の小路を
同三番町	又次の小路を
裏石引町	只今迄石引町後町
一本松	只今迄欠原町小名一本松
田町藪の下	是迄柿木町と唱候田町西光寺邊
吹屋うら小路	是迄吹屋町与一名に唱候同所うら町
山伏町	是迄田井新町与唱候内山伏乾貞寺邊
	是迄田井新町与唱候内鈴見橋邊より下横山又五郎下屋敷邊
川端町	
淺野川々除町	上は横山求馬馬場先上の高町家より下火矢所前橋迄
	是迄淺の川々除町と唱候内上は火矢所前橋より下は橋場町地境迄
並木町	
木町一番町	只今迄四丁一番丁

同二番丁　同二番町
同三番丁　同三番町
観音町入口木戸より飴屋彌三郎横入込迄兩側　観音町
同愛宕鳥居小路より観音院門前迄兩側　観音坂下
同飴屋横入込より愛宕鳥居小路迄　観音大工町
野町一丁目下立町大蓮寺後口通　助九郎町
針屋町より大蓮寺後立町　元哲町
桂岩寺向小路より　上野田寺町
融山院上小路より　下野田寺町
妙法寺上の小路　堀込町
本因寺横小路　石伐町
上舟渡邊　長良町
法照寺前　吹上げ
惣名三社町之内
只今迄三社五十人町二番町目　五十人町

珉徳寺町

福留町

三社中町

三社河岸

三社九折

垣根町

山田町

只今迄折違町
中橋町

右同断
中橋横小路

廣岡町

長田町

只今迄古道町
古道

右同断
木揚場

野町三丁目小路是迄石坂町
小柳町

同四丁目小路右同断
金戸町

是迄後泉町　上芦中町
　下芦中町
是迄本光寺上地町　本光寺町
小名三つ屋　沼田町
是迄六斗林町　林町
同町之内開禪寺町　三七町
是迄木の新保新町の内　糸倉町
只今迄下荒町　豐嶋町
只今迄木新保新町の内　木新保竹町
東西山上町相改　森山町
南北山上町相改　上田町
是迄大衆免町　大衆免中通
同　大衆免片原町
同　大衆免穴町
同　大衆免西町

同	大衆免井波町、
同	大衆免横町
同	大衆免淨光寺町
同	大衆免龜淵町
是迄大衆免龜淵町	大衆免七曲り
	大衆免竪町
	西養寺町
是迄元如來寺町	西養寺一の小路
是迄四町三番町	西養寺二の小路
是迄四町二番町	西養寺三の小路
	卯辰西養寺前
	卯辰誓願寺前
是迄法船寺町之内下傳馬町境より廣小路迄	法船寺町
同廣小路の間鍔屋迄	廣小路
同鍔屋小路より帶刀町行當り迄	富本町

是迄公儀町・大豆田町建込	高儀町
同公儀町善照坊前通	元町
同油車町山伏延命院下より帯刀町江出口の間	犀川馬場先
是迄馬場先江入口小路より竹田市三郎請地後邊迄	元車町
是迄神谷町之内帯刀町より神谷町江之横町之間	穴町
高儀町入口立町より谷町之横町の間	神谷町
是迄神谷町等之内善照坊横町うら通り	谷町
是迄繭田町小堀牛右衛門請地道より織田主膳請地入口邊迄	
	大豆田町
織田主膳請地入口より下の方	繭田町
是迄馬場片原町	犀川馬場先
大衆免町の内	平折町
	上町
	中町
	下町

立川町	
淺野吹屋町	
若松町	吹屋町裏通り
淺野町	
水車町	
中嶋町	
下淺野町	
堀川淵上町	只今迄堀川々除町の内
堀川間の町	右同所之内
堀川笠市	只今迄堀川片原町
堀川知覺寺前	只今迄新堀川の内
	新竪町一丁目より四丁目迄
小鳥屋小路	新竪町之内
丸太町	只今迄牛右衛門橋町
惣構四つ屋	是迄高岡町の内四軒

是迄長殿向土橋与申處　高岡町橋
是迄東末寺橋与申所　極樂橋
是迄塩屋町土橋与申所　塩屋橋
是迄下材木町橋与申所　玄蕃橋
是迄袋町橋与申所　問屋橋
是迄下近江町橋与申所　せつたい橋
川上新町一丁目二丁目
川上藤棚　川上富山町
川上松本町　川上梅枝町
川上舟場町　川上菊川町
川上井嶋町　川上角場河岸
川上屋町　川上中の町
川上平野町
是迄御門前町之內御厩御門下より不明御門迄　松原町
不明御門より十間町石橋迄　西町

十間町石橋よりせつたい橋まで

六月朔日。前田齊廣、竹澤御殿に能を催し家中をして觀覽せしむ。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

六月朔日、竹澤御殿於御舞臺御能被仰付、御家中一統拜見被仰付候なり。

六月上旬。遠藤高璟測晷盤を竹澤御殿に献る。

〔金澤時鐘記〕

測晷盤記

臣高璟謹按。時刻者惟定於太陽。故測日行。則時刻自明矣。文政三年夏四月。臣創製測晷盤。副之正時版。而正其鍾行焉。此器也。太陽自既出至已沒。雖霖雨雪霽之間。苟視太陽直可得時刻。其置之也。從北極高度斜絡其盤。使安之而仰俯方向不失其正矣。其秋視授時解。有澁川春海所說百刻環之圖。臣之所製。雖與其圖形象少異。而其用則如合符節。今玆有命城鐘時法之改正。使臣主製測刻之器。因造此器。恭進呈。臣誠惶誠恐頓首頓首。

文政癸未夏六月上澣日　　中謝長臣遠藤高璟謹誌

六月廿七日。兩替商發行の銀預り手形を改造し御算用場に於いて引替を

保證すべきことを告ぐ。

〔御觸拔書〕

付札、定番頭ゟ

近年御當地兩替御用聞之者共、銀預り手形遣候儀承屆置候處、右手形印紙手馴候に付、相改相渡候樣致度旨願出候。依之此度重々遂詮議、彌手堅取扱候仕法に取極、萬一兩替に而引替指支候節者、於御算用場可相渡旨申渡候條、以來御家中幷町・在より、都而上納方等右手形指上候儀不指支候間、無滯受取候樣、會所等都而上納取立候向に被申渡候條、可被得其意候、以上。

右之趣一統可被申談候事。

癸未六月廿七日　　　　村井豐後守

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

六月より御領國中銀札通用之儀被仰渡なり。百目札は長け七寸四分計、幅三寸七分計、紙はあいたけ紙之樣之物なり。文之字すかしすきたる紙なり。右銀札裏にくゝりと云を押なり。是れは取遣之時各名印を記候事なり。御銀裁許は香林坊下升屋次右衞門・酒屋宗左衞門兩人なり。右銀札地之内にも右兩人之名前調有之なり。寶暦年中重敎公御代通用之銀札も如此物

なり。此度之百目札も右に准じ申よし、予承祖之祖父之物語承るなり。

六月。河川に於ける砂利採取等のことに關して令す。

〔御觸拔書〕

定

一、御家中等幷町方より砂利取候儀、川除御普請際より五間計除取可申候。勿論御普請會所ゟ無斷取申間敷事。

但、夫石・栗石・砂之儀は、前々之通御用之外取申儀不相成事。

一、川除際ゟ塵芥等すて申間敷、川中ゟ出捨ながし可申事。

一、川除馬行・簍・竹籠等之中詰石、拔取申においては、急度咎可申付事。

一、川除籠等之上、殺生人・水游人踏荒し申間敷事。

一、川除御普請之節、繩張之内ゟ入込申間敷事。

右之條々堅く可相守者也。

文政六年六月　　御普請會所

六月。難破船の救助に關して告ぐ。

〔留帳拔書〕

公儀御城米等積船難破船暨諸商船難船等之儀は、其時々波浪風雨等之樣子によつて破船方不一樣事候得共、其內甚危難に迫り上陸之者は、先不取敢助命之手當厚取扱可申事に候。其時宜に寄御賄・病用等之儀、御上より被仰付儀も可有之候。併難船之始末、自然船頭等手前奸曲之儀も難計候間、此所入念承糺、始終之樣子も得与相考可申出候。尤御米幷積物之儀は大切成儀に候條、取揚方等綿密に取扱、御縮方嚴重に可相心得候。且又難船方に付所方雜費も多相懸候樣子候條、是等は幾重にも令省略、萬端易簡相心得可申。御郡奉行等出役之上は、猶更可有指圖候得共、指懸急切之心得方、右之趣兼而浦方等役人共江可申渡置候。右之趣被得其意、各以後取扱方之儀本文之通可相心得候、以上。

六　月　　　　　　　　　　　　御算用場

金谷佐太夫殿

闕屋平馬殿

本年二月廿七日の條參照

六月。博奕を行ふ者ある時一村に過怠免を課する舊制を復すべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

付札、惣年寄・年寄並江

博奕かけ之勝負は、民之產業を破り、家を失ひ身を亡す基に候。依而古來御制禁に付、御郡方之者共不埒之參會、博奕に似寄候事たり共、都而賭之諸勝負に携り不申樣、前々嚴重申渡候得共、心得違之輩密々致參會候儀相顯れ、咎申付候者不少候。別而近年被仰出も有之、其時々格別に申渡候處、右躰之族於拙者共に無申譯次第に候。右に付先年一作過怠申付候儀有之候へ共、及中絕に候間、以來爲懲過怠免申付可然趣相伺候處、可爲伺之通旨被仰出候段、今般御算用場より申談に付、改而左之通申渡候條、可得其意候。

一、博奕宿いたし候者有之節、一村之者より斷出候得ば、宿元・同類之者相糺、曲事に可申付、過怠免之沙汰に不及候事。

一、博奕宿等いたし候儀一村之內より不申出、後日外より相顯れ候においては、詮議之上本人は牢舍申付、其上一作過怠免可申付候。無高處は右に準じ過怠錢爲指出可申事。

右之通申談候上は、年若之者抔毛頭心得違無之樣、村役人共急度懇に可申諭候。畢竟是迄村役人共之內、示方不行屆儀も有之哉与相聞得、等閑之至に候。向後急度相心得、悪敷風俗に爲携不申樣、常々厚く可申談。若其上にも隨ひ不申者於有之には、速に斷可申。自然油斷いたし、過怠免之沙汰に至候時は、其事に不交者共甚心外之事に候間、人々相互に致吟味、少に而も博奕躰之所行及見聞に候はゞ、早速村役人ゟ申斷、村役人より夫々可申達候。

右之趣末々迄不相洩樣、急度可申渡者也。

癸未六月　　御郡奉行

諸郡村々役人

七月四日。新番森順之助他出し日を經て還るを以て祿を褫はる。

〔金龍公記史料〕

七月四日新番森順之助。爲岩丈出行。至十六日歸。因病淹滯者。乃責其違令。褫俸米。更給七口俸。閉居後許外出。而嘉永五年十一月出奔。六年四月歸。五月入之檻。六月瘦死。

七月五日。家中居屋敷周圍の道路修理を命ず。

〔觸留〕

付札、定番頭へ

御家中之人々居屋敷廻近年道惡敷相成、火事等之時分馬上之人々指支申躰に候。其上御道筋茂雜計、都而往來道惡所々修覆可申付候。就夫近く道造候ヶ所も有之候所、申談無之候故高低有之、別而火事等之節馬上人々甚指障に相成候條、一樣に相成候樣相心得、修覆可申付候。

一、侍屋敷植木、往還之道筋へ枝葉茂り、持鑓等障り申所有之由に候間、枝葉伐可申事。

右之趣前々より申渡候處、近年猥に相成候條、急度相心得可申事。

右之通一統可被申渡候事。

七　月

別紙之通夫々可申談旨、御用番求馬殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之内裁許有之面々は、其支配ゟも不相洩相達候樣御申談可被成候、以上。

七月五日　　御横目

七月八日。犀川及び淺野川の川除地取締に關して令す。

〔觸　留〕

一、犀川・淺野川々除際ゟ塵芥捨、且竹籠等之上殺生人等致往來、別而夏中は水游人多、御普請所を踏荒、甚猥成儀共に御座候に付、是迄御達申上、一統被仰渡御座候得共、末々心得違之者も御座候躰に而、中には川除土居之土を掘取、石垣等之石を拔取申者も有之、不埒至極成儀に御座候。且又殺生之品により瀬違仕、川形に相障、塵芥も多く捨、後には張出之如くに相成、御普請所水當り惡敷相成、不時成損所も出來、第一御不益之筋に御座候。其上今度掃除等之儀も被仰渡候處、右等之趣に而制方行屆不申候間、古來之通り所々に別紙寫之通札を爲建申候間、此上若心得違之者有之においては、不得止事爲召捕候。川廻り之者に而行

届不申候間、盗賊改方役人爲相廻候筈等、兼而申談置候。猶更心得違之者無之樣一統被仰渡御座候樣仕度と存候、以上。

癸未五月二十四日

津田木工 判

村田九郎右衞門 判

遠所御用 横山藤六郎

遠所御用 大久保覺兵衞

奥村內膳殿

一、犀川・淺野川々除方之儀に付、古來之通札相建候旨等別紙之通御普請奉行申聞候に付、寫相越之候條、被得其意、組・支配之人々江嚴重可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月八日 横山求馬

七月廿九日。江戶邸內に藩米精製所を設け、諸士に之を用ひしむべきことを稟議す。

〔諸事留〕

文政四年より不時御廻米被仰付、御屋敷內に揚場被仰付、詰人之內御米相望候者ゟ爲入立來候處、今度夫々仕法も相立御達申置候趣有之候付、別紙之通一統ゟ相觸申度奉存候間、夫々被仰渡之樣仕度奉存候、以上。

七月廿九日

山口清太夫

岡田太兵衛

前田源兵衛

大嶋三郎左衛門

大村友右衛門

長甲斐守樣

前田修理樣

此表近年諸色高直に付詰人高飯米、文政四年より不時御廻米被仰付、御屋敷內に揚場被仰付、諸色屋拾二人ゟ右御用申渡候間、御國米望之人々者相用ひ可申候。尤不望人々者、町米勝手次第に相用ひ可申候。是迄御國米相望來候人々は只今迄之通に候得ども、是以後御米相望度人々者、左之通小紙に調、諸色屋ゟ直に申談候得ば、諸色屋より御省略御內用方ゟ申達筈に候。

精成は精製なるべし

一、米精成悪き儀有之、給人より諸色屋江申渡、其上にも不宜候者、其段御内用方江及斷、諸色屋立替可申事。

一、米直段之儀は、御扶持方代渡月之前月、年行司相場平均に増升加相渡可申候。右取極候直段は、御扶持方代渡月五日前に、諸色屋より一統江觸廻り候樣可申渡候事。

一、米代取立方は、乃至六月朔日より八月中迄入立之分、九月十日迄に諸色屋江相渡、同十五日迄に諸色屋より上納可致候事。

一、御米相用罷在、交代等に而御國江罷歸候人々、發足迄之米代勘定相立、諸色屋江相渡可申事。

一、米代取立候節、しらべ方爲入用、米通帳取立可申候間、諸色屋より申達候はゞ相渡可申候。披見之上相返可申候事。

當時相勤候諸色屋名前

米屋伊兵衛　伊勢屋彌兵衛　近江屋勘四郎　川越屋久五郎

伊勢屋善兵衛　伊勢屋六兵衛　上總屋茂兵衛　越後屋長吉

米屋六兵衛　三河屋助右衛門　近江屋清七　柴田屋四郎右衛門

〆十二人

右之通相極候事。

未　七　月

七月。閉門中の士の町會所貸附銀返納方に關して告ぐ。

〔觸　留〕

付札、定番頭江

文政元年御家中五百石以下之人々江町會所より貸附銀、翌年より五ヶ年賦を以取立來、當年に而皆返上之趣。右之內閉門被仰付置候分、上納方一類より返上之筈に候得共、何茂可爲迷惑に付、今般僉議之上、當時閉門中之人々は今年分上納に不及候條、追而御免之御沙汰有之候上早速上納可有之候。且又是迄退轉人たりとも、一類より返上仕來候得共、退轉人之分は被下切に申渡候。勿論御咎被仰付置候共、御知行等被下候人々は上納可有之候。

右之趣被得其意、夫々可被申談候事。

癸未七月

八月朔日。前田齊廣の女忠姬名を壽々姬と改む。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

八月朔日、忠姬樣御名壽々姬樣と御改之儀、肥前守樣より被仰進なり。

〔官私隨筆〕

八月五日

一、忠姬樣御名御樣子有之、壽々姬樣と御改被成候旨、從中將樣被仰出候段、藤田平兵衛演述之由。御用番より以紙面申來。

八月四日。金澤城内の時鐘を竹澤御殿に移し今日より十二割の法に因りて之を撞かしむ。

〔官私隨筆〕

八月四日

一、今度於能州鑄直候竹澤御殿之鐘出來之由に而、昨日釣撞候處、叉々音不宜、依而今日甚右衛門坂之鐘御引寄、八時より撞候也。是迄之時刻と違、七半より六迄之間打餘り無之、日出日入之時刻に而十二時當分に撞候旨也。

〔鐘銘〕

銘略。

文政六年癸未十月六日拈筆於黃金澤水之上。

七十八齡臣富田景周頓首謹識

本年五月廿八日の條參照

當分は等分なるべし

銘文は本年十月廿七日に擧ぐるものに同じ

この鐘今天徳院にあり日附は下記の通り

御作手
左方總管
鑄物師
能州鳳至郡中居
天明苗裔
北村重兵衛藤原朝臣國重
下職人　福光清五郎藤原國次
同　北村藤八郎藤原家次
維時文政六癸未歳九月

〔金澤時鐘記〕

今般御時鐘所御時法御定之儀被仰出、測刻之御道具新に被仰付候に付、私共江被仰出候趣幷同之品等、以後右御用筋に拘候人々心得にも可相成哉与調置申候。
御城時鐘所に是迄御時法御定無之、鐘撞足輕前々申傳候はからひの法を以時刻相極候に付、御時鐘折々不順成儀有之、御殿向初諸向時刻を量候惑ひに相成、其上六時之時刻以前とは餘程之差も有之躰相聞え候。如此年々時刻差ひ多く、勝手に任せ候貌に相成候而は、萬端指障候に付、今般御時法御定之儀被仰出候。是迄一晝夜之初刻相極らず候に付、以來子之中刻与

定香は定香盤なり

相定、朝夕六時之時刻相極らず候に付、以來冬至晝夜同刻、則晨昏限度十三度有奇に相定、晝夜時割之儀相極らず候に付、以來一時に不同無之樣六時宛に相定、晝夜長短之刻數幷日限等不相極候に付、以來二十四氣及其中都合四十八氣之刻數を相定、年中四十八度日時を定め相改。其外是迄定刻之法日分量を以相極、御定香・御自鳴鐘を以時刻を量候得共、日分量に而時刻を定候儀は粗法に而、其上定香・自鳴鐘は遲速有之品に付、以來時刻を極候には晷を測り相定め、時割を量候には垂球・正時版相用ひ可申旨被仰出候。右之通夫々被仰付候に付、以來御時法之趣相心得候而時刻を量候へば、慥成心圖りに相成、其上時規等相用候人々は、假令御時鐘聞不申候共、面々之時刻おのづから御時鐘与致符合候譯にて、世上一統之爲難有儀に御座候。尙亦今度御定之御時法与、是迄鐘撞足輕仕來之時法与差之樣子、其外寬政十年以來御時鐘を聞候而時刻之不同を量置候品、幷晷を量り時刻之不順を記置候圖等、末々相認申候。

右諸事御用、於御次私共ゟ被仰付、殊に愚製測晷盤・正時版御取用に相成、冥加至極難有次第に奉存候。御用向彼是多端之儀に御座候處、一同役等茂無之に付、去春以來金澤分間御繪圖御用に而私宅ゟ相詰、御用相勤候西村太冲・河野久太郞・日下理兵衞・早川理兵衞等へ、右御用向伺之上申談、御時規等夫々出來、竹澤御殿御時鐘所御用之分共、都合二通指上申候、以

上。

文政六癸未年　遠藤數馬高璟

八月六日。町會所仕送り銀の貸附に關して告ぐ。

〔觸留〕

付札、定番頭ゟ

一、町會所仕送り之人々暮方いかにも艱難に相暮し、圖帳之表相守、不時入用等成限り受取不申樣可相心得旨等、先達而嚴重被仰出候趣も有之候處、今以心得方不宜者も有之躰に而、色々無據趣等申立不時願多、中には身上不相應之貸附高に相成、一圓勝手取直し候期も不相見得、仕送被仰付置候詮も無之候。元來勝手之厚薄を以見計、右躰過分之貸附高と可相成人々ゟは、何程無據儀有之候とも容易に不時願承屆申間敷所、左樣之見圖りも無之貸渡候故、不相應之貸附高に相成候儀、第一町會所詮議方甚不行屆之趣に付、以來貸渡方嚴重可相心得旨、此度改而町奉行ゟ申渡候趣も有之候之條、頭々手前においても猶綿密に可有僉議候。

右之趣爲心得申聞候條、頭・支配人ゟ寄々可被申渡候事。

未八月六日

八月十一日。貯藏の鐵炮及び彈丸に就いて調査すべきことを命ず。

〔諸事留牒〕

八月十一日

一、左之通伺之處、伺之通被仰出。

當時御鐵炮奉行手合御貯用之御鐵炮は、寶暦九年御類燒之砌之燒筒を御修覆之御筒に付、假令最前玉目四匁三分之燒筒を御修覆仕候へば、四匁五・六分に相成申候而、御類燒以前之御筒とは玉目たかく相成居申候。然處御玉藏は御類燒無之故、往古より御貯之玉に而、當時之御筒に合申間敷、御筒に應じ不申而者御貯之詮も相立兼申儀に候間、御鐵炮奉行之内一人、玉藥奉行之内御異風組より一人主付被仰付、兩人ゟ御内々御しらべ方被仰付候樣仕度旨、中島誠左衞門申聞候。右誠左衞門心付之趣尤に相聞申候間、兩人主付被仰付に而可有御座哉。御鐵炮奉行之内に而は、今村源助右等之趣能會得仕居申候間、主付被仰付可然旨も誠左衞門申聞候。玉藥奉行之内御異風組者、今村源左衞門迄に御座候。彌被仰付候趣に御座候はゞ、源助・源左衞門可申渡哉与僉議仕奉伺候。猶更被仰出次第奉心得候、已上。

八月九日　內記

八月十三日。前田齊泰の夫人入輿の後幕府より贈らるゝ金品に就いて議す。

〔諸事留牒〕

八月十三日

一、御守殿御引移之上、公方様より三千兩に五千俵被爲附候筈之所、其砌に相成右は御斷被仰出、其替り御預地より之金納御免之儀御願可然之旨、江戸表僉議之趣申聞候通与被仰出。御預所金納、是迄一年三萬七千兩計也。右之通相成候へば二千兩計之御益之由申候。却而不宜、御不益之儀出來之儀も可有之哉之由也。尙聞番方に而僉議之上、宜時分申込候様子之事。

八月十五日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕

八月十五日

一、出仕之人々列居、年寄中等謁、退出候事。

一、今日御能被遊各拜見被仰付候條、二御丸出仕相濟候上、竹澤御殿ゟ罷出候様一昨日土佐守より廻狀有之。各四時過罷出、大地縫殿左衛門を以御禮申上候事。

一、御能暮六時過相濟、一木逸角を以御禮申上、他龜次郎様御能初而拜見被仰付候付、以同人右御禮申上、各四時過退出候事。

浦嶋　吉之助　女郎花　二源太　雨月　權兵衛
小督　三五六　土蜘　他亀次郎様　通小町　佐七郎
望月　御　融　權兵衛　附祝言
歌仙　鳴子　吹取

八月十八日。江戸邸大風の爲に毀損せらる。

〔諸事覺書〕

九月三日

一、前月十八日曉江戸表大風に而所々損所夥敷、御屋舗内も所々風損有之、五十年來之大風与申沙汰也。右に付甲斐守等相伺御機嫌候由之事。

八月廿三日。時鐘を正時刻割としたるを以て大工等の就業時間を改む。

〔御觸拔書〕

定番頭江

時鐘之儀、今般正時刻割に御改に付、御作事向等大工・日用夕七時に相仕廻候而者、輕き者共難儀之筋茂可有之与御厭被爲在、仍而是以後八半時仕廻に被仰付候。併是迄八時之休有之

八月四日の條參照

由に候得共、右之通八半時に相仕舞申事に候條、右休は指止、九時食休より八半時迄直に仕事相働可申。勿論八半時前より手を明仕廻致用意罷在候歟、曁諸丁場仕事初之儀油斷之筋於有之者、嚴重見咎可申候。
右之通被仰出、御作事奉行等江申渡候付、爲承知申達候條、被得其意、組・支配之人々江被申聞、組等之內裁許有之面々は、其支配江茂相達候樣可被申聞候事。
右之趣一統可被申談候事。

八月廿三日　　村井豐後守

九月六日。竹澤御殿水道脇御門の開閉に就いて告ぐ。

〔御觸拔書〕

竹澤御殿水道脇御門、〆切に相成有之候處、右御門內に御用水水枡有之、御作事奉行支配に而、右手合之者時々御城中江之水懸引罷越候節指支候に付、右御門日之內爲開置、右御用之者可致出入候。然上は年寄中等茂致往來候樣被仰出候。依而明七日より各往來不指支候。右御門は三御丸格に候條、都而從者方共心得可有之候。併主人不召連、從者まで罷通候儀者不相成候。
但、若火事之節夜中御門明居候はゞ、平日往來不指支人々、罷通候儀不苦候事。

右之趣爲御承知申達候事。
九月六日

九月十三日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕
九月十三日
一、今日竹澤御殿に而御能被遊候付、右拜見被仰付候。仍而今朝五時前定服に而罷出候樣、
一昨日土佐守より廻狀有之に付、各右刻限に罷出、御側頭を以御禮申上事。
一、今日伺御機嫌候日に付、相揃候上御側御用人を以相伺候事。
一、御能暮六半時頃相濟、御側頭を以御禮申上、各退出。

御番組

伏見　二源太　敦盛　吉之助　熊野　權兵衛
弱法師　御　鐘馗　他龜次郎樣　盛久　權兵衛
船辨慶　御　亂　佐七郎
瓜盜人　苞山伏　狐塚

九月廿四日。前田掃部若年寄の職を褫はる。

〔金龍公記史料〕

九月廿四日。罷前田掃部孝亮若年寄。以有違旨之事也。

〔溫敬公記史料〕

十月廿五日。前田掃部以不副旨免若年寄。織江兼之。

前書と日附を異にす

十月八日。盜賊改方に陪臣等を召喚する際の帶刀に關して議す。

〔官私隨筆〕

十月八日

一、左之紙面封印付に而到來。

但、今夕近江守殿病氣之見廻として、彼方へ罷越候所、歸候途中に而請取之。

改方へ陪臣・給人たり共呼出之節は、勿論一通り尋之品に而も、刀・脇刺差添候者へ引渡、無刀之儘呼出可申候へ共、身に不拘品相尋候節は脇刺爲帶可申旨、有賀甚六郎申上候付、其通り可被仰渡与思召候。猶更了簡も無之候哉被聞召度候。第一御縮方之爲に候間、罷出候者共其所會得仕候者、身分之階級にも拘不申との思召候旨被仰出候。先年公事場檢使前に而、同席家來帶刀之儀に付僉議候趣、其節右場奉行へ申渡、其後帶刀いたし候。此度之儀は檢使前

之儀とも達候付、何も了簡無御座旨可申上と致示談候付、此段爲御承知申進候條、思召も有之者可被仰越候、以上。

十月八日　　　　村井豐後守

奥村伊豫守様御紙面之趣致承知、尤存寄無御座候、以上。

十月十一日。諸士の配下に不行狀の者ありとの風聞あるも確實ならざる時は前田齊廣の內聽に達して指揮を受くべきを告ぐ。

〔觸留〕

組・支配之內不行狀等之儀、風聞承り候而已に而、不慥候故指付難加異見品有之候者、其段達御內聽候与御指圖可被遊候。此段同役共江申含、組・支配有之諸頭等江可致演述旨被仰出候事。

十月

右十一日神戸藏人江被仰出候。組・支配有之面々者、御用番等之內申談、御請之趣引請申上候事。

十月十二日。前田齊泰初めて擐甲す。

〔溫敬公記史料〕

十月十二日始着甲胄。有澤才右衛門相之。

文政四年四月十八日の條參照

十月十五日。前田齊廣幕府より鶴拜領の特典を與へられたることを老臣に告ぐ。

〔諸事留牒〕

十月十五日

一、月番豐後守申聞候は、中將様御儀御隱居之後公邊御機嫌御伺之儀も無之、餘り御疎遠之儀に付、著寒御機嫌御伺被遊度之段、水野出羽守殿迄被仰込候處、著寒御伺之儀は、至而重き御儀に而御聞屆難被成。依之鶴御拜領之儀は、紀州大眞様にも御例御座候間御拜領可被仰付。左候へば右御奉書之內に、公方様御機嫌克被爲入候儀も有之候間、公邊之御様子も御承知被遊候段、出羽守殿被仰。則當三日淡路守様御呼立に而、御書取水野殿御渡被成候。右之趣何もへ御吹爲聽被遊候由に而、年寄中へ之御眞翰被成。右御親翰月番より拜戴申談に而拜見仕、恐悅月番迄先申述、縫殿左衛門へも御禮且恐悅も申述候事。

吹爲聽は吹聽

一、右に付今日退出より直に竹澤御殿へ罷出、以神戶藏人恐悅申上候處、以同人御意有之候事。

一、右御親翰左之通。

家督中は著寒以宿次蒙御尋、其節公邊御機嫌之御容躰も近々敷奉承知候儀、當時之身分に而は左様之儀も無之に付、何卒公邊御機嫌之御容躰も近々敷奉伺度、左候得者此上之御奉公と奉存候旨內意之趣、水野出羽守殿迄申達置候處、被達上聞候哉、前月三日出羽守殿方ゟ淡路守殿被召呼、內意之趣に付格段之以思召、以來國許ゟ鶴可被下儀も可有之旨、御書取を以被仰渡、誠に以無存懸仕合、冥加に相叶難有仕合に候。是迄當家に無之規模之儀、外々ゟ之面目不過之、重疊難有仕合に候。右之次第各ゟ吹爲聽申入度如此候、謹言。

十月十五日　　　　　　　　肥　前　守

長　甲　斐　守殿
前田土佐守殿
村井豐後守殿
横　山　求　馬殿
奥　村　內　膳殿
村井又兵衞殿

十月廿四日。諸奉行の職務を行ふに誠實を專らとすべきことを告ぐ。

〔觸　留〕

諸奉行人等正路に無之品茂有之候故、下役人之內奸曲成者、依怙贔負に依而、色々不筋成品共有之段被聞召候。奉行人等不正候得者、下々邪智之者其風に應候樣、種々謀計を巧候而、身分々々之利を而已事といたし候故、正直成生質之者茂自然与其風に押移、富者は彌富、貧者は彌貧に相成候。支配之人々之諸願、或下民之爲与申立、或上之益抔与申出候事にも、右樣之品有之、却而風俗を害候段、其奉行・下役人等不心得之至に候。依而急度御糺可被成候得共、是迄之儀者御宥免被成候條、以來諸奉行人等曁其下役人も、萬端正路に相心得、少茂依怙贔負仕間敷候。是以後若不心得之者有之候ば、曲事可被仰付旨寬政元年被仰出、其節諸奉行等江申渡候通に候。然所近來諸役所向を始、下役共申分に任せ置、御用取捌方不行屆、其上囑託賄賂之儀も有之躰粗相聞え候。右樣之儀有之候得者、下々不正之糺方可行屆樣無之事に候條、先達而被仰出置候趣達失無之、嚴重に相守候樣可申渡旨、重而被仰出候事。

癸未十月

別紙寫之通、當廿四日御用番豐後守殿御覺書御渡、御請上之候樣被仰付候條、被得其意、同役中傳達有之、御步中江も被申渡、夫々御請被取立、追而拙者共迄可被指出候事。

癸未十月廿六日

十月廿七日。竹澤御殿の新時鐘成る。

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

十月廿七日竹澤御殿時鐘被仰付、今日出來、野町釜屋四郎兵衛方にて出來なり。右竹澤御園之内時鐘被仰付、正時刻割に御改、澤田義門・遠藤數馬兩人ゟ右刻割主付被仰付。夕七時は是迄之七つ半前に打、何歟心圖り違ひ世上之人こまり候由。御作事抔是迄七時には仕廻候得共、正時刻割より八半時に相仕廻候事に相成候なり。

〔鐘銘〕

粤稽古漏刻。肇軒轅氏而宣夏商云。周禮有挈壺之制。並悠邈措而不盭焉。蓋本朝時鐘之彰。孝德天皇大化爲濫觴。歲躔彊圉協洽。尋灼然令式。如自鳴鐘以測。自慶長而取捷便者也。在我金城。則以承應改元爲置鐘之起原。然後一百有七十餘甲子。緜々不斷矣。伏惟。贒太公嘗爲世次不可闕。雖享統莅位。而天資鳴謙。不躬自以德處。在其大任也。辭耻于内非但一日。故至痾亦從生。客冬爲之遂發撝挹之隱志。讓提封三圍國於冢嗣今侯。營別殿離館於城東竹澤之地而遷之。永養痾不顧藩鎮之責也。然侯貴庚未滿志學。故大君以睠々台命。要攝侯而秉治柄。國卿大夫亦切勸之。太公猶尚欲辭之。而仁情之不忍。愍國民之失父母。不得已而從之。擧擢忠良。貶黜悖惡。遍布名教於方内。殫扇仁風於芻蕘。於是乎苛刻澆漓之俗遠絕。而迄雖犬馬

原文十二月に作る

蒙帷蓋之恩。懽心之所結。百姓謳歌。仰萬壽於南山。盛也矣至矣。丁斯時太公以爲。城鐘所眞帆一口。單音不洎通都。而朝儀之於遲速。衞士更直之於上下。或農商之於出入。凡國事百期。動輙易愆。是以乃蔵命鳧氏。新鑄洪鐘。別選金澤金水相生之地而眞之。且陶汰前來運算之推差。分天之睽錯。垂正範於萬世不窮。使號信人人不惑也。猗不亦慈渥之恩擧哉。臣景周恭承嚴旨爲之銘。其辭曰。

龍臺正尾。金墉直東。列嶽鍾秀。流泉玲瓏。遐襟湖瀛。邇枕疇田。翼軫可摘。嘘吸通天。名苑嘉樹。瑞英珠聯。奇禽鶴鶴。維翥維翾。玄寰丹闕。亶神僊居。爰命鳧氏。側撤鏄虡。仰弗觀象。坐俾時明。鏗鎗瀏湸。蒲牢吼聲。奚翅雊雉。響徹周聽。四民百爾。出入罔惑。惇仁之設。永定遺則。剏揆圭臬。革從前忒。忽絲以詳。盈縮歸匡。龔勅昭德。錫恩無疆。

文政六年癸未冬十二月初吉拈筆於黃金澤水之上。

七十八翁臣富田景周頓首謹識

文政六年癸未十月

御鑄物師　村山四郎兵衞正久

十月廿八日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕

十月廿八日

一、今日竹澤御殿において御能有之、又兵衛・內藏助御能被仰付候段、此間御側御用人より申聞候付、兩人共今朝六時過御殿ゟ罷出、又兵衛熊野、內藏助國栖被仰付、相濟御意有之、兩人より御禮等之上暮六時過退出。

但、首尾書委細略。

十月晦日。竹澤御殿の新時鐘を今日より撞かしむ。

是月は小盡なり

〔官私隨筆〕

十一月朔日

一、竹澤御殿時鐘、先達而被仰付候處、聲音惡敷重而被仰付（能州中居にて鑄候由）候處、又不宜、再往被仰付、同所に而其後數を不定折々つき候也。いまだ時は不撞、其鐘之銘富田痴龍翁に被仰付、當時彫刻にかゝり居候由。且又於野町も鐘被仰付、前月十九日鑄之。其日自分上口札場へ行步に罷越居候處、高煙火事之ごとくに見え候也。炭火之由也。右之鐘前月二十七日に釣候而、夜前九つより時を撞候也。鐘樓は最前辰巳外御門之脇塀之內へ有之候處、今度は藤田平兵衛向御鎮守之邊に出來候。時刻も七半以後之打餘り無之、晝夜ともに六時平等に打候也。

十月。遠藤高璟正時版を前田齊廣に獻る。

〔金澤時鐘記〕

正時版記

夫察時刻者。爲人世之要務。故國家置時鼓設時鐘。使之知也。蓋爲測刻之器也。古有漏刻。後世有尺時規自鳴鐘。而愈精且便也。然觀其用法。當晨昏之時窺日光之微白。以定晝夜之刻。或香篆以佐之。是皆以目意而涉臆度者也。加之自晨至晨。或自昏至昏之刻。日有長短。得百刻者鮮矣。豈不以算測而有得其正哉。是以不揣愚陋。造斯器改定刻之法。號曰正時版也。其製。臣積年量城鐘。冬至晝夜之刻無有長短、以爲昏明之界。乃使西村篤行算二十四氣暨其中之晝夜長短刻。篤行因嘗所測之金澤府北極高度。推之最詳矣。是以纖悉界畫于版面。而副十二辰一百刻之圖。其用法。則當太陽南中之時測其晷。以定午正之刻也。晨昏自餘之諸刻。自可得其正。蓋午正者。其晷易測而無游氣之碍。且其一周恆無長短而得百刻之正。故定時以午正。此務要簡便而不失其正也。若其錘行与日行不得密合者。宜升降垂球以正焉。添餘刻於百刻之上下者。爲便歸錘也。今茲有命城鐘時法之改正。又新設時鐘於竹澤殿。使臣主治知時用器修造之事。且命曰。從前城鐘之報時也。旦夕自七鐘至六鐘之一時。比諸他時各有餘殆半時許。不可有如此不同。但晝夜昏明之界。則宜取舊式之宜而定矣。臣謹奉命。上之以嘗

所造之正時版墅測晷盤也。其製作不容易。臣以在劇職不遑他。故令所關於嘗有命製金澤府地圖之事者。西村篤行。河野通義。日下自明。早川正身等。姑寢事而戮力。參訂以成業於此者也。臣誠惶誠恐頓首頓首。

文政癸未冬十月□澣日　　中謝長臣遠藤高璟謹識

十一月朔日。前田齊廣、幕府より鶴拜領の特典を與へられたることを諸士に告ぐ。

〔諸事覺書〕

十一月朔日

一、今日御弘之趣。

中將樣御家督中は著寒宿繼御奉書を以被爲蒙御尋、公邊御機嫌之御容躰も被爲聞召候。當時に而は左樣之儀も不被爲在候故、何卒公邊御機嫌之御容躰御近敷御窺被遊度御內意之趣、水野出羽守殿江被仰達置候處、御格段之以思召、以來御國許江鶴御拜領可被爲在旨被仰渡、是迄御家に不被爲在御規模之御儀、難有御仕合被思召候。且右鶴御拜領之節は、御奉書以文段公方樣御容躰之御儀も有之、著寒宿繼御奉書御同樣之趣に付、御趣意通にも御叶被遊、別而難有被思召候。此段先一統江可申聞旨被仰出候。

十一月五日。前田齊廣、頭分以上の士の鳥構を行ふことを禁止せしむ。

〔覺書〕

一、鳥構殺生之儀、無役平士之人々誠に身堅に仕る儀は格別、頭役に被仰付候人々は、鳥構堅可爲御停止候。山々に人々構場を定候事を御停止被仰付候旨被仰出、一統申渡。

右被仰出之趣御親翰左之通。

元來近年風俗等之儀申出候節、鳥構之儀は、頭分以上は不似合所行に付指留可申とも存候得ども、是まで有來候事故先其儘に致し置候得共、相考候處、品は違候得共、於公邊騎射抔は無役之面々計にて、當家にては頭役に相當り候身分に被仰付候上は、御用之外は自分には決而不仕事に相成居候。是は若輩之業ゆゑの儀与存候。然ば鳥構なとは別して卑賤之業にて、無役平士之若き人々誠に身固に仕候は格別、頭分にては甚可恥所行に候間、以來頭役に申付候人々は鳥構堅く可爲停止候。右業を好候人々は甚張込、得物の數を爭ひ、春秋共時節には其事のみ事といたし、實に奉公よりも勝りたる張込、若輩なる振舞不心得之至に候。元來君乘之爲に候處、自分に不罷越節は家來抔も遣候儀茂有之躰。然ば實に無用之事に候。依之以後頭分以上は堅く指止可申候。右等之趣夫々可被申渡候。右に付是迄山々に人々構場を定名札有之躰、數年成來り之事に候得ば、是等は甚難心得趣候間、以來構場を定候事を令停止可

申候條、名札有之場所々々取拂之儀可被申渡候。且又川殺生・網殺生ともに、右に准じ心得も急度可有之事に候。畢竟殺生に張込申儀は、奉公等閑之心得与存候條、此段夫々可被申渡候、以上。

十一月五日

村井又兵衞殿

猶以右之業家老共などにも有之躰候間、各より急度指止候樣可被申渡候。名札之儀有之候はゞ、先各家老共より早々取拂ひ可被申候。

右被仰出之趣に付、鳥構場之儀は是迄之通り被成置、鳥構之儀は以來增長不仕樣、尤家來など遣候儀、嚴重不相成趣被仰出候段申渡候而は、如何可有之哉之旨等詮議之趣相伺候得共、前段被仰出候通り指止候儀可申渡旨等被仰出候。

十一月六日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕

十一月六日

一、今日竹澤御殿に而御能被遊候付、各拜見被仰付候條、服紗小袖・上下着用朝六時罷出候樣、一昨日土佐守より廻狀有之、各六時過罷出。

一、各相揃候上神戸藏人を以御禮申上、五時頃御能初前一統御目見被仰付、御意有之、土佐守御取合申上、御襖たて、夫より直に見物所ゟ列座。追付御能初り、御中入之節御膳奉行席ゟ能出、今日御祝之御吸物等被下候段演述、御吸物・御酒・御取肴頂戴、大地縫殿左衞門を以御意有之。七時頃御能相濟、一木逸角を以御禮申上、御吸物等頂戴候御禮御膳奉行を以申上、同刻過何茂退出之事。

御番組

翁　弓八幡　權兵衞　箙　吉之助　吉野静　佐七郎

鷺　御　祝言岩船　鐵次郎

末廣　財寶

十一月十六日。德川家齊、前田齊泰に鶴を贈る。

〔溫敬公記史料〕

十一月十六日。大將軍遣使。賜放鷹所獲鶴。

十一月十七日。小松の陶工粟生屋源右衞門を九谷より呼戻さしむ。

〔加賀陶磁考草〕

申は文政七年

小松中町　あは屋源右衛門

右之者、若杉陶器所始め候節より罷越、竈焚藥懸等見習、相應に用立候處、前月上旬より、大聖寺御領九谷与歟申所に而陶器竈取立候に付、其方に罷越居申由承及候。彌罷越居候哉被相糺、罷越居申候得者、沙汰之限に候條、早々呼戻し、右職指構、他行可被指留候。右風抑移候而者、若杉陶器方手薄相成候間、早速可被相糺候、以上。

十一月十七日　御算用場

富田九内殿

〔加賀陶磁考草〕

小松中町　栗生屋源右衛門

右之者、若杉陶器所始候節より罷越、職方手習相應に用立候處、大聖寺御領九谷与歟申處江無斷罷越居、不屆之儀に付呼戻、右職指構、他行留御申渡置候得共、今度御指解候條、此段申渡、尤以來心得違之儀無之樣、嚴重に可申渡旨、當廿二日御紙面之趣承知いたし、則申渡候、以上。

申八月朔日　富田九内

御算用場

十一月廿二日。東本願寺燒失したるを以て郡方の者の上京し又は寄進することを禁ず。

〔留帳拔書〕

付札、御算用場奉行ゟ

今度東本願寺燒失致候に付、御郡方等之者共致上京、或は寄進等いたし候儀堅無之樣、急度可相心得旨申渡候樣、御郡奉行ゟ可被申談候。且遠所町奉行等ゟ茂、此段夫々急速可被申談候事。

未十一月

別紙寫之通可申談旨、御用番年寄中被申聞候條、被得其意、急速夫々可被申渡候、以上。

未十一月廿二日　　御算用場

木梨左兵衛殿

井上與兵衛殿

追而急速先々ゟ可被相廻候、以上。

今度東本願寺燒失に付、勸化方之儀堅無之樣、別紙之通被仰渡候。此節一向宗寺庵追々致上京候躰相聞え候。右に付指懸り旅用等門徒共に無心申出候儀も可有之、先以本山ゟ之勸化、

非常之事に付無餘儀追々相勸候儀可有之、假令且那寺より不相勸とも、門徒之內本山火災之儀格別に存込、寄進銀張込候族も可有之哉。既に先年本願寺類燒に付、諸郡之內身元不相應之寄進いたし候者も有之。且一時には勸化銀相增候故、申談勸化年割に相極、近く迄年々指出候向も有之躰。是等は別而百姓之憂不少儀、畢竟申談棟取候者も有之故之儀与相聞え候。信心に事寄、身元相應之者は不及申に、難澁之百姓等を相勸、沙汰之限りに候。近來寺庵勸化銀之儀に付急度示方申渡置候通に候條、別而今度之儀は末々迄堅心得違無之樣、綿密に可申渡候。若密々寄進之沙汰於承及には、夫々相糺無用捨手當可申付者也。

癸未十一月　　　　御　郡　奉　行

鹿島郡村々役人

十一月廿四日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕

十一月廿五日

一、昨廿四日內藏助儀竹澤御殿に而能被仰付、拜見も被仰付候旨に付、朝五時過より右御殿に罷出、乘而望月被仰付候旨御內意被仰出、今日望月相勸、御意有之、暮六時過退出候事。

内藏助は津田氏

十二月十七日。前田齊廣風俗の改善に關する要項を老臣に示す。

〔官私隨筆〕

十二月十七日

一、大地縫殿左衞門・一木逸角越後屋敷へ罷出、於奥之間申述候は、近年御家中風俗等之儀、追々被仰出之趣各樣御承知之通に候。就右近頃組頭御前近く被爲召、組之人々教諭方之儀等段々御僉議被仰付候御趣意は、近年風俗等之儀段々被仰出も有之候故、少々充心得方も取直り候樣に被思召候。乍去下々輕き者共に至迄、御上御實意之所を奉會得、一統思召之程難有奉存候處へ至不申而は、全御趣意には難相叶儀に候。其故は上下一體之理に候へば、御家中諸士等之內心得違之人々有之候へば、手足之滯有之と同理之儀に被思召候。依而御家中諸士・陪臣之輩に至迄、御上御趣意通り全く會得仕候樣被遊度思召に付、此度御ヶ條書を以組頭へ被仰出候趣有之、尙又存寄之趣も御尋被遊、思召通りに相違之品々は別段被仰出も有之候而、諸頭之人々御趣意通り全會得仕候樣教諭之儀組頭へ被仰付候。依而各樣にも御組・御支配等も有之、且御人々家中等御示方御心得も有之儀に付、右御箇條書等拜見被仰付候。委細は口達を以申上候樣被仰出候。御不審之趣等も候はゞ一々御尋可有之、其上に而右被仰出之御趣意通り、御實意之所御組・支配等之人々全く會得仕候樣寄々御教諭有之、思召通り全く被爲行屆候樣可申談旨被仰出候由。右御ヶ條書之大略左之通に候。

一、近年風俗等之儀、段々被仰出候儀も有之故、諸頭初童部敷風儀少は取直候樣にも思召候。猶又油斷無之、御趣意通り全く會得仕候樣可申談事。

一、萬歲之儀に付當春被仰出候儀有之候。是等は誠に不用之品に而、好み候而見物仕候儀抔は、心有者は可耻之儀に被思召候。追付其折にも相成候儀、猶更違失無之樣可申談事。

一、賭之諸勝負は、元來御停止に候へば、必不可然儀に候間、急度心得も可有儀に候。猶又相弛み不申樣可相心得事。

一、鳥構之儀、近頃嚴敷被仰出候。不限此儀、諸殺生之儀は誠に卑俗無益之儀に而、可耻所業に被思召候事。

一、能・囃子之儀は、禁裡・將軍家等押立候御作法之節抔必被仰付候品に而、琴・三味線抔と一樣に相心得候儀に而は有之間敷と被思召候。中には存違候輩も有之樣に聞召候事。

一、琴・三味線之儀は甚不面白品に而、御家中諸士家內之者抔稽古等之儀は不可然被思召候。何れにも右段々被仰出候品々は、御上之御好み不被遊儀に候へば、下として不仕候儀に思召候。是等之所得与會得仕候へば、必可仕筈は無之儀と被思召候事。

右組頭へ被仰出候御ケ條書之大要に候間、各にも被奉承知、御趣意之通會得可有之候。尤不審之品も候はゞ可被申聞候事。

十二月廿六日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕

十二月廿六日

一、今日竹澤御殿に而御能被遊候付、各拜見被仰付候間、常服に而朝五時前より罷出候樣、昨日土佐守より申來候付、各同刻罷出、相揃候上神戸藏人を以御禮申上。

一、五時過御能初候付、拜見所へ相廻候樣御側頭堀久左衛門申聞候付、各拜見所へ罷出、御能暮六時相濟候付、大地縫殿左衛門を以御禮申上、退出之事。

御番組

竹生島　權兵衛　箙　二源太　羽衣　佐七郎

枕慈童　吉之助　盛久　千左衛門　小鍛冶　他龜次郎樣

融　御　附祝言

寶之槌　木六駄　釣針

十二月廿六日。本多勘解由政事を議するを以て減知逼塞を命ぜらる。

〔官私隨筆〕

勘解由は本多政養

十二月二十六日

一、今夜六半時頃、内膳殿より自筆之紙面を以、於土州宅申渡之者有之候間、立會として追付土州より被申越次第可罷越之旨被申越、五半時頃重而以紙面、如右にては相後れ可申候條、追付罷越候樣にと被申越、兩通とも竹澤御殿より被指越候。落手之旨申遣之、追付土州方へ罷越候處、本多勘解由へ申渡之品有之、呼出紙面遣被置候旨也。御横目莊左衛門・奥村新左衛門罷越。

一、九半時過勘解由參出、土州・自分列座、御横目兩人指引にて申渡之。被仰出之趣左之通。

本多勘解由

右勘解由儀、自分之才力に誇り、辯舌を以理を非に申なし、彼是御政事之害に相成候儀有之、沙汰之限に被思召候。御大恩を忘、不忠之振廻に候。陽廣院樣仰にも、命亡事有共大恩に換候へば私之非身体、生死君に可任与被仰置候。然ば幾重共可被仰付儀に候へども、其段は御宥免、本知高之内三千石減知、逼塞可被仰付旨被仰出候。

十二月二十六日

右覺書被相渡候處、拜見之上段々嚴重成被仰渡、謹而奉畏、奉迷惑至極旨御請有。

一、右畢而八時頃歸宅。

一、右は此程鳥構之儀は下輩之所作之旨被仰出有之候處、左候はゞ先達而以來學校出座幷稽古等之節、供數減少之儀被仰出、其通意得候へども、是以下輩にあたり可申に付、せがれ供數抔以來減申間敷。左候へば稽古等にも出し申間敷候樣に、同席四・五輩へ申入候と之趣達御聽候故、如此被仰付候由、土州話也。

十二月廿九日。前田齊廣風俗の漸く改まれるを喜び、更に明春を待ちて人持組にその意を傳ふべきを命ず。

〔官私隨筆〕

十二月廿九日

一、先達而以來、御家中風俗等之儀段々被仰出之儀有之候處、風俗改り候品も有之、一段之儀被思召候。猶此上人々信實に會得仕、自分之思召通之心得に相成候樣被遊度。依之頭分等へも先日以來段々被仰渡之次第有之。人持中へも夫々可申聞旨被仰出候處、今年は月迫に相成候付、來春へ掛可被申談旨被及御請候。依而近日御箇條書寫相渡可申候條、先爲心得被申聞由、御用番内膳演述。

十二月。鳳至郡新崎の肝煎次郎右衞門等孝行を以て賞せらる。

〔温敬公記史料〕

十二月。賜孝子鳳至郡新崎肝煎次郎右衛門終身一人口。越中高岡蓮花寺屋傳右衛門米三苞。

十二月。諸郡に用水の打銀を減額すべきことを命ず。

〔留帳拔書〕

諸郡打銀之儀詮議之趣有之、當春已來申渡候通に付、先用水入用方自郡打銀等遂指引詮議候處、郡々草高懸り過分高下有之候。尤右高懸り諸郡一樣に可有筈者無之候ども、大躰平均之姿無之而は、不心服之郡も可有之。是等之所より諸郡打銀願莫大に至り候儀も有之哉。畢竟用水普請等詮議方不綿密、入用高先年より与は過分之増方成來り儀与被存候。依之用水入用之儀、已來は諸郡共自郡打銀高、草高百石に付三十五貫計に而相辨候樣詮議方有之べく。乍併其時々之見圖、無據右に相增候謂有之候者、諸郡打銀を以加銀可相渡。用水方之儀は、其元中に而可有詮議、先達而申渡候通りに候條、右普請見圖銀精誠相減、高懸り下方迷惑之筋無之樣穿鑿可有之候。道橋普請等之儀茂右に準じ、追々可遂詮議候、以上。

癸未十二月　　小堀八十太夫

　　　　　　　山森雄次郎

諸郡惣年寄中・年寄並中

正月元日。前田齊廣年頭の賀を廢し、齊泰は在府中に屬す。

〔金龍公記史料〕

正月。不受朝賀。

〔溫敬公記史料〕

正月元日。頭分以上登城謁年寄中。

正月四日。射初・乘馬初の儀を行ふ。

〔諸事覺書〕

正月四日

一、今日御射初に付、年寄中等熨斗目・上下に而五半時頃登城。

一、四時過柳之御間に而御射初、年寄中等列座、同半時過相濟。

御弓初之次第

吉田左門　原佐右衛門　中西松之助　石黑平九郎　小西秀之丞　大窪藤右衛門　坂倉善兵衛　矢嶋誠八　松崎市右衛門　八嶋貞右衛門　古澤又右衛門　石丸八郎　片岡彌三郎　松

原彌一右衛門　奥村六三郎　毛利判平　根來勘藏　平田淺之助　矢嶋善右衛門

〆十九人

正月四日　三輪仙太夫

丹羽澤右衛門

〔諸事覺書〕

正月四日

今日御馬乘初。毛附左之通。御馬奉行指遣之。

御乘初御馬毛附

鵜川鹿毛　絹川源太郎

鳳至瓦毛　星野九右衛門

南保黑　保田仙次郎

以上

正月六日。風俗に關する前田齊廣の意を人持組の士に傳ふ。

〔官私隨筆〕

正月六日

一、前月二十九日御用番演述之趣、其所に記置候通に候處、今夕齋藤源之丞罷越、舊臘は春に成候ても差急ぎ人持中へ可申渡樣之趣に而も無之處、昨日御側御用人より演述之趣有之、早速組中申渡可然旨に候間、其心得可仕旨。依而御側御用人舊臘演述之趣書取、一紙被差越候間、此趣を以組中幷甲斐守殿組中へ可申談旨。

組中は奥村伊豫守の事なり

右御ヶ條書之大略左之通に候。

御ヶ條の大略は文政六年十二月十七日の條に揭ぐ

正月六日。藩侯の入國に供奉する者の服裝等に就いて令す。

〔御觸拔書〕

今般御入國に付御供之人々等、旅中之器財・着服等粧候儀堅可致禁止候。見苦敷儀御貪着無之候條、有來之品相用ひ可申候。都而享和二年御入國之節之振合に相心得、猶又文政三年格別御省略之儀等段々被仰出置候間、諸事令省略、聊費用之筋無之樣相心得、餞別を含參會を企、或者品物送候儀堅可指止儀等、尤無違失相守可申事。

右之通嚴敷可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配ゟ茂可申渡旨可被申談候事。

右之趣可被得其意候、以上。

正月六日　　長　甲斐守

前田修理

正月七日。前田齊廣盲人救濟の爲に銀子を下附し、及びその生業に關して教諭す。

〔諸事留牒〕

正月七日

一、左之通御親翰、以神戸藏人月番ゟ被成下。

舊冬馬廻頭初相招き、心得之儀追々及教諭候。今般は念頃に申示候故、何れも尤に承り請け候躰にて、組・支配之平士に至る迄も格別會得之様子に候。然ば右教諭之趣實心に會得候上、町家之外はごぜ・座頭を爲立入候者は無之事に候。右に付而は是迄琴・三味線を以すぎはひといたし罷在候者共、必至と可及難儀候條、今般格別之存寄を以、右之者共救之ため銀二百枚相渡、且近年右之者共困窮に依而、貸米申付候返上米二口有之由に候條、右二口之分とらせ切に可申付候條、此段算用場奉行・町奉行ゟ可被申渡候。萬一彼等より救之儀願出候樣に相成候上に而は不可然候條、早々此趣可被申渡候。且又右之序に付申出候。琴・三味線を以すぎはひといたし罷在候盲目は、他國を相望み申者も有之候はゞ、勝手次第差遣可申。將又郡方よりも盲目多く城下ゟ出、琴・三味線之業を以すぎはひいたし候者不少躰に候間、已後は

郡方之分は於在所々々琴・三味線之外、盲目相應之産業を相勵ませ、城下ゟ出候儀は可爲無用候。近頃は別而座頭官に進み候儀多く有之躰にも候間、以後猥に不相成樣嚴重可申渡、左樣之望有之者は、他國ゟ出官に進み候儀は勝手次第、重而御國ゟ不入樣可有之事に候。
右之趣町奉行ゟ嚴重可被申渡候、以上。

正月七日

村井又兵衞殿

本文之趣追而加賀守可達聽候。
右之趣に付、前條は今日申渡有之、後之御ヶ條は指續一兩日中申渡有之候筈之事。

正月十四日。金澤に地震あり。

〔官私隨筆〕

正月十四日

一、今朝四時前地震尋常よりは强くゆり候付、卽刻竹澤御殿へ罷出、一木逸角相招相伺御機嫌、御樣子相尋候處、益御機嫌能被爲入候由也。御序に可申上由に付退出。
右之後今日中夜へかけて三・四度もゆり候由。十五日夕も一度有之、其夜もゆり候由也。

正月十九日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕

正月十九日

一、今日竹澤御殿に而御能被遊、各拜見被仰付候條、常服に而五時前罷出候樣、一昨日土佐守より廻狀有之。各同刻より罷出、堀久左衞門を以御禮申上。同半時頃見物所に相廻候樣同人申聞候付、何茂罷出拜見、暮頃御能相濟候付、大地縫殿左衞門を以御禮申上、退出之事。

御番組

鵜祭 權兵衞　知章 半之助　卒都婆小町 御

鵺 他龜次郎樣　羅生門 二源太　春日龍神 御

樋酒　盤山伏

正月廿一日。今日以後前田齊廣人持組の士を召して教諭を加ふ。

〔諸事覺書〕

正月廿一日

一、今度諸頭一統に被仰出候御趣意之趣、猶又組頭へ被仰出候筋も有之。依之人持之人々追々竹澤御殿に被召、兩組頭立會、御趣意之趣申述、猶又以來人々之心得方をも承り、とくと

教諭を加候樣被仰付。當月廿一日より相始、其節年寄中・御家老之內一人充繰々相詰候樣被仰出候間、其心得に而可罷出候。何日々々と申儀は御側御用人より可申來候。刻限は九時より可罷出候。越後屋敷出席日には定刻退出より可罷出筈に候旨、土佐守より內藏助江演述有之候事。

右に付今日は又兵衛罷出候筈に候。併若年寄方に而は役支配之者江爲申聞候筋も有之候付、先右御趣意通申述方も承度ものと遂示談候付、其段土佐守へも申達、今日又兵衛罷出候節織江儀も罷出承り申度段、大地縫殿左衛門迄以執筆申遣候處、卽申出候處被聞召屆候。勝手に罷出候樣被仰出候付、織江儀も又兵衛一集に竹澤御殿江罷出、委細承り七半時頃相濟候付、席において一木逸角を以御禮申上候處、御尋之品も有之、夫々御請申上退出候事。

但、以後先二日置に有之由候事。

正月廿三日。幕府、前田齊泰に本年三月を以て就封の暇を賜ふべき意を告ぐ。

〔諸事留牒〕

二月七日

一、當七日御弘左之通。

二月七日の御弘は金澤に於てなり

御住居は前田齊廣のなり

今般御住居向御普請茂被仰付度、其上彼是無御據趣御座候に付、御格別之趣を以一先御暇之儀御願之處、前月二十三日松平和泉守殿江間番被召出、御願之通當三月中御暇可被下候旨被仰渡、重き御願之筋早速被仰渡、難有御仕合思召候。此段何茂江可申聞旨、拙者共迄以御書被仰下候事。

正月廿七日。前田齊泰入國の際努めて費用を節すべきことを告ぐ。

〔諸事留〕

正月廿七日

一、左之通一統觸有之。

付札、組頭江

當春御入國之儀、享和二年之御振に者候へども、御勝手向御急迫至極之上、去々年以來不時御物入打續、彌增御急迫候條、御行列立之外者、御先例に不拘、成限り御省略之儀遂僉議、少も御費之筋無之樣可相心得候事。

右之趣被得其意、諸頭申談、一統不相洩樣申渡候事。

正　月

正月。前田齊泰の入國に供奉する諸士以下に特に金子を貸附することを

告ぐ。

〔諸事留〕

付札、組頭江

當春御入國御供之人々難澁之躰粗相聞え候。行粧等省略之儀も被仰渡候へども、御在府中御慶事も打續、格別御用多烈敷相勤、失脚茂相懸り、且御供道中之儀者何廉入用茂相增、彼是可爲難澁儀に候。御上御勝手向御逼迫至極之上、去々年以來不時御物入相續、別而當時御急迫に而、御貸渡等之御沙汰難被及御時節に候へども、一統難澁之儀も無據事故、格別之趣を以御供人一人扶持に金一兩宛御貸渡、足輕以下江者、一人に一兩二朱宛御貸渡被成候。御急迫中右之通被仰付候儀候間、致勘辨、旅用不指支樣相心得御供可仕儀肝要候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。諸頭中江演述、組等之面々江も申聞候樣可被申談候事。

正　　月

正月。大小將横目等の江戸往來の際持鑓を一筋に限ることを定む。

〔御親翰帳之書拔〕

文政七年正月

一、御大小將横目江戸御供之節、自分知八百石以上は道中鑓二本爲持、右以下は鎗一本爲持、且交代等に而罷越候節は、知行高に不拘都而二本爲持申候。頭役之儀は知行高に不拘、其役向に寄、道中鑓二本或は三本爲持候御定も御座候所、御大小將横目御供道中に限り、知行高に寄鑓數相違仕候儀は、先年より被仰出等も見當り不申由。且鑓一本に而は、若故障等有之加修覆罷在候而は、指支之筋等申立、以來知行高に不拘二本爲持申度旨等、竹澤御殿におゐて相伺候に付、被仰出之趣爲承加、寫御渡之旨被仰出候事。

但、萬端僭上等之儀も追々御改被遊候儀に付、道中行粧等之儀もいかにも事輕く相心得可申事に候。御横目之儀は、諸向之目當にも相成候儀に候間、以來御供道中幷交代等之節も、知行之高下に不拘、鎗一本爲持可申。於道中損候節指支之儀申立候へ共、左様之儀申立候時は、二本・三本に而も同様成事。畢竟右様之申聞はいまだ習俗之殘餘に被思召候旨等、段々被仰出候事。

一、右に付御使番等鑓一本爲持候儀可申渡趣伺之上、知行高に不拘鑓一本爲持候儀、左之人々江申渡。

御使番　御臺所奉行　御細工奉行　頭並　御表小將横目　御大小將横目

一、右夫々支配頭へ爲承知寫相渡。

一、御横目幷御奥小將横目は當時缺役に候間、追而被仰付次第可申渡。

御馬廻頭・御小將頭・組御番頭江

右は八百石以上之平士に而も、交代等之節鎗一本爲持可申旨被仰出候條、夫々可申渡旨申渡候事。

〔典制彙纂〕

御使番　御臺所奉行　御細工奉行
頭　並　御表小將横目　御大小將横目　江各通

近年風俗等之儀段々被仰出、萬端僣上等之儀も追々御改被遊候儀に付、道中行粧等之儀も事輕く可相心得事候。依之以來各御供交代等之節も、知行之高下に不拘鎗一本爲持可申候。此段可申渡旨被仰出候條、可被得其意候事。

正　月

正月。兩茶屋町及び川上芝居に武士を立入らしむべからざることを告ぐ。

〔兩茶屋町一件〕

付紙、茶屋方・芝居方主附肝煎江

兩茶屋町並川上芝居圍内へ、武士家之男女立入申候は難相成趣之處、是迄心得違之者不少躰

に候。尤先々之者町家躰に仕成立入申儀は、其人之不埒に候得者、茶屋商賣人等之如才は無之譯に候得共、兼而知合之族、當時慥に奉公人与申儀、園內之者も承知いたしながら、遊樂等進込爲立入候儀は有間敷致方に候條、會得違不致樣急度可申渡置候。若以後奉公人等致合躰、名目を替、園內へ爲立入、其品於相顯は、園內之者共も可爲越度候。此段嚴重可申渡事。

文政七年申正月

正月。金澤に於ける座頭・瞽女の人數を上申す。

〔國事雜抄〕

覺

一、撿　校　　九　人

一、勾　當　　十　四　人

一、衆分より無官迄　　百四十人

〆百六十三人

一、ご　ぜ　　二十一人

惣〆百八十四人

右金澤中之座頭等人高如此御座候事。

正月。金澤の士民萬歳を舞はしむることを廢す。

〔齊廣様御傳略等之内書拔〕

是の年正月、例年之通越前より萬歳罷越候處、萬歳爲舞候儀御停止与申に而は無之候へ共、御家中一統舞し不申。其故は去年嚴重儉約之儀被仰出有之ゆゑ、人々世上におされ相止候。其頃何者之作やらん興歌に、

萬歳はみなそふとめとなりにけり春駒までもやらん目出たし

二月二日。金澤の本町肝煎等、前田齊泰の入國に際し迎馬を出さんことを請ふ。

〔國事雜抄〕

今般殿様被爲遊御入國御儀、末々之者に至迄、奉恐悦御儀に御座候。依之御迎馬之儀、享保九年御吉例之通、爲冥加右御用員數、金澤町當り之馬數本町より慥成馬指出、御迎御用爲相勤申度奉存候間、乍恐駄賃被下候儀は御用捨被下候様奉願候、以上。

文政七年二月二日　　金澤本町肝煎　　二十人連印

二月六日。徳川家齊、前田齊泰に鶴を贈る。

〔溫敬公記史料〕

二月六日。大將軍遣使久留十左衞門賜鶴。

〔續徳川實紀〕

二月六日、松平加賀守に上使して御鷹の鶴たまふ。

二月十四日。非人小屋に收容する者の調査を嚴にすべきことを告ぐ。

〔御觸留拔書〕

病身者に而、村方等に親類之者無之、外稼可致族無之者、御助小屋入相願候者之內、中には壯健者願出候族有之、甚不詮議之至に候。以來御助小屋入相願候者有之節は、得と遂詮議相願候樣被仰渡、尤御郡御奉行所においても御詮議可被成旨、御間番樣より被仰談に付、爲御承知如斯に御座候、以上。

二月十四日　　林　喜兵衞

諸郡惣年寄中樣・年寄並中樣

二月廿一日。江戸詰人が歸國の際旅用不足するを以てその扶持方の支給方法を改む。

〔典制彙纂〕

別紙を以申達候。近年御逼迫至極之内不時願方多、其時に無據御調達を以御貸渡も有之に付、彌以御借財過分至極に相成候事に候。元來江戸御扶持方一日一升之御定者、諸雜用之爲一人に二日分被下趣に候。直段之儀者、以前者江戸詰人御供等に而罷歸候節、旅用等指支候得者、自ら組用金抔借用願も多き譯に而、元來御扶持方代多分遣切候故、畢竟旅用之貯も手薄に相成可申候間、以來者於御當地發足前に渡遣候百日分中勘御扶持方代之分は、本勘指引相立、是迄之通末三ヶ月分中勘銀相渡、重而之御扶持方渡月より一人當り末三ヶ月分百二十目、乘馬は七十五匁中勘銀迄を相渡置、罷歸候節惣樣之本勘一時に致指引相渡候者、旅用程者人々相應に仕切御扶持方代有之、一統詰人之爲に可宜与詮議仕候。乍然足輕・小者等一人扶持被下候者、都而只今迄之通無御座而者指支可申候。右之趣被仰渡候者、當三月渡より相改候樣江戸會所ゟ可申遣候條、早速御詮議之上御治定に御座候はゞ、其段一統ゟも被仰渡候之樣に与奉存候、以上。

申二月七日　　　山崎頼母

村井豐後守樣

別紙之通御算用場奉行申聞候に付、承屆、寫相越之候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

二月廿一日　村井豐後守

二月廿三日。諸士の使役する男女の宗門改屆方に就いて令す。

〔御觸抜書〕

定番頭江

別紙寫之趣被得其意、組・支配之人々江被申渡、組等之內裁許有之面々者、其支配江茂相達候樣可被申聞候事。

右之通夫々可被申談候事。

二月廿三日　村井豐後守

人持・頭分・平侍・隱居渡仰付候面々召仕候家來男女等、宗門相改帳面に記、宗門所江指出可申候。居成に召仕候節者、其段書付差出可申事。

但、平侍・隱居之人々は、頭・支配人江取立指出可申事。

一、隱居之人々、別に家來不仕面々者、其段屆書付指出可申事。

一、御知行被召放、御扶持被下罷在候者家來等宗門帳、頭・支配人ゟ取立差出可申候。併書上可申者無之候者、其段屆書付指出可申候事。

右之通隱居等之面々召仕候家來、宗門相改書出可申筈に御座候處、屆方區々相心得候人々茂有之躰に御座候。宗門御改相洩候而者、不輕儀に御座候間、以來每歲四月一統之通書上候樣、夫々嚴重に被仰渡御座候樣に与奉存候、以上。

申二月十七日

多賀豫一右衛門

富田外記

湯原久左衛門

武田判太夫

辻市右衛門

中村宗兵衛

長甲斐守殿

村井豊後守殿

二月廿四日。前田齊廣、家老等に對し在來の舊慣に拘泥すべからざるこ

去年十二月、青山將監・山崎庄兵衞・山人家老なが命ぜられしの或はそにの花押を大なるに過ぐるの非難すありも是の本文を以てなふと言

とを諭す。

〔御親翰帳拔書〕

各職分にヶ樣之儀申聞候も甚如何成る事に候得共、各承知之通追々心得方敎諭も申付け、是迄之習俗相改候儀、諸頭等格別に存込候事に候。各職分之儀、席向などに習俗樣之儀は必無之事と存罷在候處、此節追々承り候得ば、各席にも新古之差別も有之躰。且は諸方より差出候書付け等に振合違候儀は、彼是拶當も有之躰。且は此方へ被差越候判・印鑑抔も、古役之見屆けを受け、彼是調方等振合之吟味も有之躰。ヶ樣之類不少樣にも粗相聞え、尤各に而者、是式之儀は何れも會得之上之事に者可有之候得共、又仕來に而心付き無之事も有る者に候得者、事々ヶ樣之處爲差事にて無之事を、振合仕來りを被申立候而は、甚童部敷相聞、いかゞに候間、小事は振合仕來りを離れ、大業活用之處を專一に可被相心得候はゞ、諸頭・諸役人之存込も格別改り早く可有之与存候間、是等之趣申遣候。何れにも銘々器量次第、振合仕來りをすきと被相改可然存候。先是等之趣申遣候、以上。

二月廿四日

家　老　中

被成下御親翰奉拜戴候。私共職分にヶ樣之儀被仰出候茂、甚如何成事に思召候得共、私共奉

承知仕候通、追々心得方教諭も被仰付、是迄之習俗相改茂、諸頭等格別に存込候事に御座候。私共は職分之儀、席向などに習俗樣之儀者必無御座事と思召候處、此節追々被聞召候得者、私共席にも新古之差別も御座候躰。且は諸方より指出候書付け等に、振合違候儀者彼是拶當も仕候躰。且は奉指上候判・印鑑抔も古役之見屆けを受け、彼是調方等振合之吟味等も仕候躰。ヶ樣之類不少樣にも粗被聞召候。尤私共にても是式之儀者何れも會得之上之事に者可有御座候得共、又仕來に而心付き無御座事も有ものに而御座候得者、事々ヶ樣之處爲指事に而無御座事を振合仕來りを申立候而者、甚童部敷相聞いかゞに御座候間、小事は振合仕來りを離れ、大業活用之處を專一に相心得候はゞ、諸頭・諸役人之存込も格別改り早く可有御座と思召候間、是等之趣被仰出候。何れにも銘々器量次第振合仕來りをすきと相改可然思召候。先是等之趣被仰出之趣奉畏候。新古之差別も不仕樣に奉存候得共、以後尙更可奉心得。且諸頭等より指出候書付等振合違候儀者、時々申聞爲調替申儀も御座候。此儀も被仰出候通相心得、小事之儀者振合仕來を離れ、其儘に受取置可申候。將又判・印鑑抔指上候節調方等之儀、猶更以後相心得可申に而可有御座候。右は指上候品故入念に申談承儀も御座候。尤以來席向之儀習俗何分相改可申と奉存候。

一、御親翰并御指札・御封印奉返上之候、以上。

二月二十五日

内藏助
庄兵衛
內記
將監
織江
藏人

二月廿五日。江戸詰の諸士は登營等の外凡べて綿服を用ふべきことを告ぐ。

〔御觸拔書〕

先達而着服等之儀被仰出候處、追々御前近被爲召、諸頭等夫々心得之儀御教諭被爲在候付、江戸表詰人服之儀茂、內外無差別麁服相用候儀、一統格別に奉會得候。依之殿中之外者、都而綿衣相用ひ候儀可爲勝手次第、其品々之儀者人々之心得に可有之事に候。殿中幷右に準じ候箇處之儀は、公邊之御振に奉隨着服可仕候。

右等之趣可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

殿中は柳營を指す

芝は柴なるべし

右之趣可被得其意候、以上。

二月廿五日　　村井豊後守

二月廿五日。領内道路の修理に就いて告ぐ。

〔御觸留拔書〕

付札、三州惣年寄・年寄並ゟ

往還道筋所々損所多、石高に相成、人馬通行難儀之躰相聞ぇ候。元來道橋之儀は常々手入を加可申處、請取之組々においても、右手入方近年は名目迄之様に成行、甚等閑に相成、領付村々よりも道脇草生之箇所芝おき、或は新規之用水抔掘穿候様之族茂有之、沙汰之限りに候。如斯成行候而は、畢竟道普請之節、手入方多く之人夫も相懸り、却而迷惑之筋たるべく候條、常々手入方等閑無之様嚴重可相心得候。今般御通行前道手入方、道請取之組々領付村々相伺、早速遂見分候而、御通行前手入方無油斷可相心得候。先達申渡置候通、無用之傍等いたし候儀は指止可申候。道宜相成候様可仕候。出來之上は早速可申斷候。元來前段之趣者、第一道番人共見廻等閑に罷在、油斷之至に而沙汰之限りに候。以來等閑之儀は早速取除可申候條、嚴重相心得候様可申渡置候。

右之通夫々可相心得者也。

申二月廿五日　　　　　　　　　　御郡奉行

三州道請取組々役人

往還道筋村々役人

二月。竹澤御殿內に新たに天滿宮を勸請し、その祭日を四月廿四・五日と定む。

〔觸留〕

付札、御横目江

竹澤御殿御鎭守天滿宮、學校御地面內江就御遷座、於當御殿別段天滿宮御勸請被遊候。依而御祭禮之儀者、當年より毎歳四月二十四日・二十五日に被仰付候條、御家中竝町方等女幷十五歳以下之男子參詣之儀等、都而去年申渡置候通に候。

一、右兩日爲御用罷出候人々、辰巳外御門より往來之儀勝手次第に候。

右之趣一統可被申談候事。

二　月

二月。歸國御供人に道中荷物貫目改の件に關して告ぐ。

〔諸事留〕

近年公邊より被仰渡候趣に付、御發駕御當日、御荷物を始御供之人々荷物等貫目、都而於板橋宿御改有之筈に候。乍併御發駕御當日者人馬數多之事故、一々御改有之候而者混雜も可致儀に付、出役之者見切を以相通申儀も有之。或者拾駄・貳拾駄之內壹高成荷物等有之候得者、時宜に寄改可申儀も可有之候。其節心得違之者有之、役場之者江對し彼是申張り候樣之儀有之候而は不可然候條、自然誰々に不寄可改旨申聞候はゞ、尤改を請、何れ板橋宿出役之者可任指圖候。此旨末々迄嚴重に申渡置候樣被仰出候段、甲斐守殿等被仰聞候事。

申二月

〔諸事留〕

付札、御道中奉行江

道中荷物貫目改等之儀、從公邊被仰渡之趣有之候に付、御道中御荷物を始、御供人荷物貫目木札に記、荷物一つ宛に無違失付可申旨等、去々年申渡候處、中には心得違之者も有之躰相聞え、不埒之儀に候。依之今般御發駕之節、追分口御門江御横目足輕指出貫目札相改、若札無之分は不相通筈に候條、一統嚴重相心得候樣夫々可被申渡候事。

二月

右覺書甲斐守殿御渡被成候事。

二月。道中に於いて藩侯放鷹の際に於ける行列の進退に就いて定む。

〔諸事留〕

於御道中御鷹御遊被遊候節御行列進退

一、御行列之內御先三品之御馬より、御跡三人之御步横目迄者、宿々に而見合、御樣子次第御先へ可罷越候。

一、御醫師幷御用可有之人々は、尤見合可申事。

一、御先三品之御行列脇惣而行拔候者、御行列に障不申樣道をも除、作法宜相心得罷通可申候。路次惡敷道幅等狹き所に而者、御行列に支不申樣相心得、罷通候節三品之押足輕江可申斷候。主人々々にも右之通に而、三品騎馬之人々江者相通候段申屆候而可然候。勿論馬上駕籠に而罷通候者は、下り立申に者及不申候事。

一、御行列御跡より罷越候人々者、御行列見合罷在候所に而も無構罷通、馬上駕籠に而罷通候者下り候而可罷通候。勿論末々迄笠ぬがせ可申事。

一、御鷹御遊被遊候時分、末々まで騷々敷無之樣、作法宜罷通候儀專一に候間、其心得可被成候、以上。

二月。藩侯の入國を迎ふる爲諸郡より信州牟禮に迎馬を出すを止め、之に代ふるに冥加銀を上納せしむ。

〔御親翰帳之書抜〕

文政七年二月

一、御入國之節信州牟禮驛迄御迎通馬之儀、前々諸郡より爲冥加指出候所、享和二年御入國之節、牟禮宿高野九右衛門等へ請負被仰付候に付、今般も其趣御郡奉行より夫々申渡候所、夫に付爲冥加銀三百枚諸郡より指上度旨相願、相達御聽爲上候事。

二月。金澤に痲疹大に流行す。

〔官私隨筆〕

二月廿九日

一、頃日金澤痲疹流行、長龍之助抔も痲疹之旨。江戸表抔も流行、前田修理痲疹之由也。右之咒、片倉元周之靑裏瓚探に紫根二・三錢常之如く煎じ服用之事有之。同席等二・三軒申遣候處、頃日は右之咒殊之外發行、紫根之價も高貴に相成候由也。

二月。女髮結をして結髮せしむることを禁ず。

〔觸　留〕

一、女之髮結之儀先年より無之處、近くは右髮結呼寄候に付、風俗も不宜。依而髮結呼寄候儀堅く不相成候。尤下女たり共髮爲結候儀不罷成候間、隨分互に申合候樣一統可相心得候。

此儀町奉行ゟも被仰渡候事。

右之趣一統申談候樣、林十左衞門殿口達に而御申聞候間、御承知被成、早速御廻達、落着より御返可被成候、以上。

此惣廻狀二月二十七日窪田源兵衞より落着受取。

二月。盜賊改方奉行にて逮捕せる罪人にして公事場奉行に引渡すべきものに關して議す。

〔御親翰帳〕

盜賊改方へ召捕候賊等不屆之者、往古は聊之賊に而も公事場へ引渡來候へ共、いつ頃よりか舊惡度々盜人に而も、容易に引渡不申。公事場において之御刑法方と、改方之取捌方、當時に而は寬猛之違甚敷奉存候間、以來は大綱左之通成不屆者は、公事場へ引渡候樣改奉行ゟ被

仰渡候はゞ活用仕、諸人疑惑無御座、彌御縮方可有哉と奉存候。

一、小賊又は品物取掠候与申名目に而も入牢及三度候者。

但、右舊惡は他國等にて之入牢に而も尤無差別。且又御國に而之惡事に而、入牢之時々御赦に而出牢いたし入墨無之者、或は取掠候と申名目に而、入墨不申付惡事に而も、都而入牢三度目に引渡可申候。

一、一ヶ所において賊たり共、土藏又は納戸之壁等切破り忍入、品之不依多少致賊候者。

一、一ヶ所に而米一石以上、金・銀・錢二百目計以上、着類等に候はゞ十五品以上盜取候者。

一、盜物之不依多少、五ヶ所以上賊に入候者。

一、苗字有之者、侍方ニ忍入賊いたし候者。

一、巧を以人ニ品重き儀を申懸、ねだり候而銀・錢等可謀取仕形有之、たとへ品物不得取共右族之者。

一、主人之金銀・品物取逃候者。

一、火付・人殺の疑、其外難船一卷。

一、右之外前々引渡來候大罪者等、尤可引渡候事。

二　月　　　　　　　　公　事　場　奉　行

右之通就被仰出、何も存寄無御座候。但何も申合候趣は如此と、一木逸角三月十日越後屋敷へ相招、段々申入候趣有之候所、猶更各存寄之趣、公事場奉行等手前得と遂僉議、相伺候樣被仰出候事。

右之趣に付公事場奉行へも遂僉議候上、相伺候趣も有之候へ共、いづれにも前段之通と被仰出、則公事場奉行へも申渡候。委細は公事場帳に記有之事。

右改方より引渡方之ヶ條、小寺雅右衛門在役之節、少相違之趣公事場より雅右衛門ゟ懸合之趣、雅右衛門より言上之趣も有之候へ共、公事場僉議之通相心得候樣、雅右衛門へ可申渡旨被仰出候事。

三月六日。前田齊廣藩政を監するの眞意を告ぐ。

〔御親翰帳之内書拔〕

三月六日

一、左之通土佐守ゟ大地縫殿左衛門を以被仰出候付、何もゟ土佐守儀同九日演述之事。

當時何れも御側近被爲召、段々習俗等之儀御教諭被遊候。右は何とやらん御當主樣之御所業を成り被爲替被遊候樣に而、御至當にも被思召候。當時は御樂而已被遊、尤御別儀無之儀に候へども、先達而公邊より重き上意も被爲蒙候故、加賀守樣未御幼少にも被爲入、且は追而

被思召は不
被思召歟

御成長之上御苦勞無之御國風に相成り、且は人才も出來、一廉之御用相勤候者も被成進度思召故、當時之乍御身分御世話被遊候事に候。且又御國政之儀、御在職之內に候へば全年寄中之手は不離譯に而は候へ共、誠に御隱居後之御所業に而、半ば御慰に御側近被爲召候族に而、御戲言抔も折々被仰出候程之儀故、御側廻りに而被遊候。微妙院樣にも御夜話之儀共、末々御教諭之一要に相成居候へば、是等之姿を以當時御趣意之程一統ゟ被仰含候族に而候。是等之處一統之見察相違有之候而は、不入事を御世話有之樣に奉存者可有筈故、追々定番頭初ゟ被仰入候處奉會得候。依之同席之者共ゟも不急度相述置候樣、縫殿左衞門を以土佐守迄被仰出候事。

三月十三日。前田齊泰就封の暇を受く。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

三月十三日、加賀守樣初而御國許ゟ之御暇上使御老中水野出羽守忠成殿を以て被仰出、白銀百枚・縐紗三十卷、西御丸幷御臺樣等御拜領物有之。

〔溫敬公記史料〕

三月十三日。遣老中水野出羽守忠成。賜暇始就封。遣白銀百枚卷物三十。世子遣酒井若狹守忠進。遣紗綾二十。將軍夫人遣中條內匠頭遣白縮緬五卷。

三月十三日。前田齊泰着城の際に於ける奉迎の作法を令す。

〔御觸抜書〕

覺

一、御着城之節人持幷頭分以上、何茂三御丸ゟ罷出申筈に候。常々御歸城之節、虎之御門等幷二御丸・三御丸・河北御門外ゟ罷出候平士、是又前々之通其所々ゟ罷出可申候。猶更御横目ゟ可被相尋候事。

一、人持・頭分以上者、御着城以前何茂二御丸ゟ集有之、御着近寄候はゞ三御丸ゟ罷出可被申候。二御丸ゟ罷出溜處之儀其外茂、萬端御横目致指引申筈に候。

但、御着被遊候者、躑躅所より直に二御丸ゟ被罷出、御帳に付可被申候。尤込居不申樣、段々に可被罷出候事。

一、右人々御城ゟ被罷出候節者、河北御門手寄宜候へ共、右御門者指支候條、何茂石川御門より罷出申筈に候事。

一、右之通石川御門より罷出候得ば、馬・乘物、供腰懸之所込合可申候間、坂下御門幷紺屋坂御門・新坂柵御門、右三御門之外に而下馬・下乘有之、尤馬・乘物等之分其所に殘置、往來不指支樣可被相心得候事。

一、不及申候へ共、登城幷退出之節茂騷敷無之樣、人々相心得、尤家來共江茂作法宜樣に急度可被申付候事。

一、石川御門より內者、若黨壹人・草履取壹人、雨天に候はゞ傘持壹人召連可被申候。三御丸に而蹲踞之節、召連候者は御馬廻番所之後之邊に遣申筈に候事。

一、家來共惣而罷在候所江は、御步橫目幷御橫目足輕、其外下馬緖之足輕指出差引致申筈に候。萬端御步橫目・御橫目足輕等指圖次第可仕旨、此儀は家來共江別而嚴重に可被申付候事。

一、御着城之御刻限未相知不申候間、其砌は橫目江可被承合候事。

右之趣被得其意、組等之內罷出候者に茂可被申聞候。且又同役中可有傳達候事。

三月十三日　　横山求馬

三月十三日。廻米積受の爲入港する船舶は潤役人の嚴に臨檢すべきことを告ぐ。

〔御觸留拔書〕

付札、口郡惣年寄・年寄並江

大坂御廻米等積請可申御雇舟々、諸郡潤入致候節、潤役人船中見屆可申所、近年浦方より潤役人見屆不申箇所茂有之躰、粗相聞え候。右船に賣物少し宛積來、其所々舟宿或者外船に取

組、賣物洩に相成候樣之儀有之候而は、御縮方難相立儀に候。因茲已來諸浦とも嚴重相改候樣、御算用場より今度譯而申談に候條、此旨淵役人共ゟ夫々不相洩樣嚴重可申談置者也。

申三月十三日　　　　　　　　　　山森雄次郎

口郡浦々役人

追而先々相廻、從落着可相返候、以上。

三月十五日。前田齊泰登營して就封の辭見す。

〔官私隨筆〕

三月廿二日

一、去十三日上使水野出羽守殿を以、御國許へ之御暇被進、白銀・御卷物御拜領。從内府樣酒井若狹守殿を以御卷物御拜領。從御臺樣も中條内匠頭殿を以御卷物御拜受。同十五日御登城被成候樣、前日御老中方御連名之御奉書到來、則御登城被遊候處、於御黑書院御禮被仰上、御懇之上意、御手自御熨斗鮑御頂戴、幷御腰物・御鷹・御馬御拜領。且又甲斐守殿・修理御供被召連候處、於御白書院御目見被仰付、其上御卷物拜領仕候旨、同日發足早飛脚歩を以、甲斐守殿等より申來候。此段爲御承知申進候由、御用番より紙面來。

〔溫敬公記史料〕

三月十五日。登城謝之。謁將軍于黑書院。有懇欵之言。賜備前清光刀鷹二馬二匹。老臣長甲斐守連愛・前田修理知周謁將軍。賜卷物各五。

〔續徳川實紀〕

三月十五日、月次の賀例のごとし。松平加賀守はじめて就封のいとまたまひ、備前國清光の御刀・御鷹・御馬を下さる。

三月十七日。前田齊泰入國の後藩の政務を齊廣に禀請申告することを止めしむ。

〔御觸拔書〕

御横目江

萬端窺事・諸言上等、中將様江可奉申上旨、先達而申渡置候得共、御入國之上者都而伺事等加賀守様江可奉申上旨被仰出候事。

右之趣諸役人江夫々可被申談候事。

三月十七日　　　　横　山　求　馬

三月十八日。前田齊泰江戸を發す。

〔官私隨筆〕

三月廿六日

一、加賀守樣益御機嫌能、去十八日巳の刻過御發駕被遊候段申來候由、御用番より紙面到來。

〔御道中諸事留〕

道中供之定

一、道中供之次第、行列書付之通相違有之間敷候事。

一、供之砌脇道幷引離れ、獨立參間敷候。草臥候はゞ惣供之跡に下り、馬にて可參候。町通り家之際左右を明可罷通候事。

一、騎馬・乘懸馬共に沓打候砌、道之脇ゟ引寄、跡之馬無滯通、沓打仕廻本之所ゟ引入可申事。

一、船渡之儀奉行人可任指圖、若奉行人背下知猥入込候はゞ、主人及屆討捨可仕候事。

一、自然喧嘩等有之候共、其場在合申者は格別、其外は本陣ゟ相詰、頭中可請指圖事。

附、若火事等有之砌、風下之者は自分之道具をかたづけ仕廻候はゞ本陣ゟ相詰、是又頭中可及指圖、一切火元ゟ參間敷候。尤自分宿々之火之用心堅可申付事。

一、横目之者幷押之足輕申渡候之儀、違背不仕樣に、主人々々より下々迄堅可申付事。

一、宿札はぎ取候儀停止之事。

附、明宿候とも組頭ゟ無斷はひり申間敷事。

一、下々茶や并町やに而不作法成躰仕間敷候事。

一、他境之者に對し非義申懸間敷候。むざと打擲抔仕事有間敷候。勿論駄賃無相違可相渡候。此段堅相閙候樣、主人々々より下々迄急度可申付事。

一、馬請取候儀、馬渡奉行ゟ指紙を遣可請取。馬渡奉行指圖無之、相對に而むざと馬請取申間敷事。

一、諸事買物代・宿賃無滯急度可相濟。自然宿之道具損じ候はゞ、代銀を以辨じ可遣候。發足之跡に宿々横目廻候條、此通下々迄可申附事。

附、宿賃無滯請取、其外申分無之通亭主證文を取置、頭ゟ追而可相渡事。

一、自然於路次他所之者より申分仕候か、又は家中之者として申分仕出候とも、其所を守猥馳參申間敷候。其近所に參候騎馬供之面々裁許可仕候。難澁之儀候はゞ、其次之騎馬と申談可相濟候。但其時之首尾に寄可申事。

一、着以後本陣之前、家中末々に至迄乘通申間敷候事。

一、先騎馬之面々、組下之行列正敷候樣に兼而急度可申付候。若行列雜亂之儀あらば、假令

組下に而無之候共、其段堅申付、跡先江も可相斷事。
一、騎馬之面々乘物より跡を正敷可申付事。
一、行列之中において高聲不仕樣に、下々迄可申付事。
一、騎馬之面々、城下幷宿々に而手綱を放し申間敷事。
一、於城下町中雨ふり出し候はゞ、不作法に無之樣雨具着可申候事。
一、持筒所騎馬、鑓一本、乘馬一疋、若黨或二人或三人其分限に應じ、挾箱持一人、沓籠持一人、合羽持一人、草履取一人、幷惣供之手替一人可召連之。其外之供之者共、勝手次第先江可遣之事。
但、其儀近年道中之可隨樣子事。
一、持弓所騎馬、右同斷。
一、持長柄所騎馬、右同斷。
附、惣御供之組頭鎗三筋・弓、旅宿において幕打可申候。惣頭は鎗二筋・弓・幕、番頭は鎗二筋爲持、弓・幕可遠慮候。横目身代之多少に不拘、鎗一筋爲持可申事。
一、步供仕面々草履取一人、但雨天之節は笠・合羽持一人、乘物之跡押足輕之次可遣。持鎗一筋、若黨一人、挾箱持一人騎馬供之次、笠・合羽持一人押之者跡に可參。乘馬沓籠持は、使

馬与押歩横目との間爲牽可申。乘馬無之人々は、乘懸馬惣供之跡押足輕之先に可遣之。此外之從者勝手次第可遣之事。

一、行列作法之儀、行列奉行幷用人可請指圖候事。

一、船場において不作法無之樣、奉行之面々別而精を出し可申付事。

一、若川々水出候はゞ、勿論水多少之樣子見屆、其段何度も飛脚を以可及注進候。假令水無之候とも、是又其旨可有言上事。

一、惣而何れ之川々にても、其所之船奉行馳走人又は足輕人足等相改、書休より泊迄右馳走人交名幷知行高・人數等念を入相改、委細書付可指越事。

一、船渡所奉行之儀、可相通前日之晝船場迄參着、其夜四つ時分迄有之、先ゟ罷越人々致裁許、無滯樣渡可申。若供中多少つどひ、其節迄船濟不申候はゞ、夜四つ時分迄も渡可申候。翌朝七時分船場ゟ罷出可有裁許候。勿論足輕等其節罷出候樣可申付事。

一、姫川又筑摩川・犀川村山之渡し、天氣相により供中早速先へ參候樣にと申渡刻は、其段飛脚を以可申達候條、夜中によらず渡可申候。左樣之節は、所之渡船人足等別而骨折可申候條書附可出事。

一、夜中は何れ之船渡所に而も、兩方之川端に大提灯二宛爲燈置可申候。且又小提灯も二十

計爲持、渡船之內に而も小提灯一宛一艘々々に爲燈可申事。

但、所々により相伺、篝爲燈可申事。

一、船渡所入用之道具品々、跡々之通割場奉行致裁許爲持可參事。

一、先江不罷越候而、先之番に迄逢兼申由人々及斷候はゞ、役儀之樣子承屆、斷之品尤においては、何れ之船渡所に而も早速渡し可申事。

一、訴狀抔上申者於有之者、手あらに不仕、先足輕樣子承、脇に召連參り、其趣小將橫目或騎馬之面々江可相達。又は樣子により目通罷出候はゞ、足輕又は步抔に而も出向、其者之側につき有之、小將橫目參樣子承屆、騎馬之組頭可申談。程遠書付抔有之者は、騎馬之橫目江組頭可申談事。

一、右之條々先規之通定置候條、其旨を得、聊相違有之間敷もの也。

文政七年

〔諸事覺書〕

御道中十二御泊

江戶 四里廿八町 浦和御中休 三里十町 上尾御泊 〆八里二町

上尾 七里二町 熊谷御中休 五里十九町 本庄御泊 〆十二里廿一町

本庄	六里廿三町	板端御中休	五里十三町	坂本御泊	〆十二里
坂本	四里三十町	追分御中休	三里十八町	小諸御泊	〆八里十二町
小諸	五里	上田御中休	六里	矢代御泊	〆十一里
矢代	四里十町	善光寺御中休	六里十八町	野尻御泊	〆十里廿八町
野尻	四里	關山御中休	五里十六町	高田御泊	〆九里十六町
高田	四里	有間川御中休	五里	能生御泊	〆九里
能生	四里三十四町	青海御中休	五里十八町	泊御泊	〆十里十六町
泊	四里十町	浦山御中休	三里三十町	魚津御泊	〆八里四町
魚津	四里廿六町	東岩瀨御中休	七里三町	高岡御泊	〆十里廿九町
高岡	四里	今石動御中休	三里十七町	津幡御泊	〆七里七町
津幡	三里十八町	金澤			

三月十八日。家中收納米拂切手は金澤中買の外之を取扱ふを禁ず。

〔御觸留拔書〕

御家中諸給人收納米拂切手賣買之儀は、當町中買共之外難相成候處、近來遠所町方等之者、中買より切手買請候上、於所方陰商種々取組致、御當地米商方に相響、畢竟御家中取續方暨

金銀融通に指障、米方縮も相立兼候。且又所方に而も損分に相成、終に産業も失ひ申者も有之由に而、風俗にも相障、不埒之至りに候。依之已來所方用米或は船積米等切分け取遣之外は、都而御家中拂米切手を以陰商取組申儀堅指止候之様、嚴重可被申渡候。此上心得違之者も有之候はゞ急度咎可申付候事。

申　三　月

口郡惣年寄・年寄並江

右寫之通申來候に付、相渡之候條、可得其意候。且又所方用米或は船積米等切分け取遣之外は、於所方陰商等種々取組致候儀堅く相止め、此段嚴敷可申渡者也。

申三月十八日　　山　森　雄　次　郎

口郡村々役人

追而先々江相廻、落着より可相返者也。

三月廿五日。前田齊泰就封の途越後高田に於いて病に罹る。

〔官私隨筆〕

三月廿七日

一、加賀守樣益御機嫌能御旅行、當十八日上尾驛御着御止宿、十九日本庄驛、廿日坂本驛御

止宿、廿一日碓氷峠無御滯御越、小諸御止宿。廿二日矢代驛御止宿。同日晝迄は打續天氣相茂宜、御供人末々迄無異儀罷越候處、同晝後より雨天に相成、筑摩川・犀川水增、舟附場等普請出來之分押流、御通行御差支に付、矢代驛に御逗留被遊候處、右兩川追々減水いたし候付、同廿四日四時頃同驛御發駕、右兩川無御滯御越、同夜野尻驛御着御止宿被遊、來月二日御着可被遊旨被仰出候段、同驛發足早飛脚を以、甲斐守殿等より申來候旨、御用番より紙面到來。

〔官私隨筆〕

三月廿九日

一、加賀守樣益御機嫌能御旅行、當廿五日夜高田御着御止宿被遊候。然處御風氣被爲在、同廿六日御發駕御見合、御保養被遊候處、續而御發汗被爲在、次第に御快被遊御座。麻疹も一統流行之事故、甲斐守殿より丸山了悅へ被相尋候處、御麻疹之御樣子には不奉診、併流行之事に候間其處へ被爲移間敷とも治定難仕旨申聞。廿七日同所に御逗留被仰出候。多分御風氣一通に而御全快可被爲在、廿八日朝は多分同所御發駕可被遊旨、廿六日高田發足早飛脚を以甲斐守殿より申來候旨、御用番より紙面來。

三月廿八日。前田齊廣の病麻疹に決す。

〔官私隨筆〕

三月廿八日

一、中將樣當廿二・三日頃より御風氣之處、今朝より御麻疹に御治定、御順症に被遊御座候段土佐守殿より演述。依而今日竹澤御殿へ罷出、御機嫌相窺候筈に御座候。自分には麻疹に付、以紙面相伺可申、尤麻疹相煩候人々に而も相伺候儀不差支候。是又同人演述之旨、御用番より紙面來、則以紙面相伺御機嫌候也。

三月廿九日。前田齊廣の女勇姫の病麻疹と決定す。

〔官私隨筆〕

三月廿九日

一、勇姫樣當廿四・五日より御熱氣被爲在候處、今日御麻疹に御治定、御順症之旨。依而明日以紙面御機嫌相窺可申旨、御用番より紙面到來。卽翌日紙面出之。

春。前田齊廣教諭局を竹澤御殿に設く。

〔金龍公記史料〕

春置教諭局于竹澤。選群臣中十有二人爲之。時有三老三才之目。三老曰杉野盟岩田盛照笠間定懋。三才曰山本守令寺島競太田盛一。其他六人津田居方笠間以信堀善勝坂井克任松原在之

神田保益也。乃示所自著小册子三篇于十二人。其初篇題曰赤袋。其要云。余已誓安百姓。故披赤心示卿等。卿等亦體余斯心。披赤心從事勿憚盡言。爾後退朝之暇。老臣及此十二人議政事得失施設先後。詢興士氣正民風。使封內被至治之澤。公每臨席嘆惜曰。使坂井克昌山森弘二人在今日。謀議之間必多所發明裨益。一日某應其聲曰、二人者在地下。得君斯德音其悅可知也。公曰。不使二人者生時遭今日之擧。而使地下悅之余甚憾之。

四月朔日。前田齊廣の女寬姬の病痲疹と決定す。

〔官私隨筆〕

四月朔日

一、寬姬様此間中御熱氣被爲在候處、今日御痲疹に御治定、御順症に被成御座候由。依而明日以紙面相伺御機嫌候様にと、御用番助士佐守殿より紙面到來。則翌日紙面出之。

四月四日。前田齊泰金澤城に着す。

〔官私隨筆〕

四月二日

一、加賀守様少々御風氣に付、前月廿六日・廿七日高田に御逗留、御保養被爲在候處、追々御快、被召上方も御相應に而、廿八日高田御發駕、能生驛御止宿。廿九日姬川幷山之下難所

も無御滯御越、七半時過泊驛へ御着、御止宿被遊、御供人末々迄無異儀罷越。御着後奉伺御容躰候處、段々御快御平常躰被遊御座候。明後四日曉七半時之御供揃に而、津幡御發駕、森下御小休と被仰出候旨、甲斐守殿等より追々申來候旨、御用番助士州より紙面來。

〔横山氏日記〕

四月四日

一、五つ半時前森下御發駕之付人來り、同刻過大樋ゟ御出之付人來候付、年寄中三之御丸ゟ罷越、御城代豐後守氣滯に付土佐守・伊勢守、御家老中は表御式臺ゟ罷出。追付淺野川橋場町之付人罷越、四時前益御機嫌能御着城、鳫木坂ゟ被爲入候時分内記儀板端ゟ進出罷在、土佐守御表之方鏡板之端ゟ罷出有之。御意有之節、内記致中座、御裏式臺之方ゟ伊勢守・藏人等罷出有之所に而御意有之。階段下ゟ他龜次郎殿御出向に付、御挨拶有之。夫より階上御廣縁通り致御先立、實檢之御間之前、備後守樣御使者大井司馬允罷出、御奏者番披露、御中座被遊候付、御先立内記儀も致中座。夫より大廣間御緣側通り芙蓉之間、御小書院横御廊下より御奥書院御緣頰、連雀之御杉戸より入。同所に中將樣・御前樣より之御附使者罷出候處に而御意有之。夫より蔦之間後。御廊下より御居間書院三之間迄致御先立、其處より藤田平兵衛致御先立、被爲入候事。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

三月十八日江戸表御發駕、四月四日金澤表江御着城有之。是れ初て之御入國なり。同日御謝使として國老前田彈番孝敬を江戸表被遣なり。

〔溫敬公記史料〕

四月四日。到金澤。扈從老臣長甲斐守連愛前田修理。

〔金龍公記史料〕

四月四日。溫敬公始就國途疾。遣側番頭玉川二源太問之。而溫敬公疾癒發高田。故二源太候于魚津傳旨。又使書院組山本元吉于津幡。候途中起居。

四月六日。前田齊廣の痲疹順調なるを以て酒湯に浴す。

〔横山氏日記〕

四月五日

一、中將様御痲疹御酒湯、明六日被爲引候旨、月番より演述。出席無之人々且龍山江も可申遣旨も演述に付、則主付より申遣候事。

四月六日

一、中將様今日御酒湯被爲引候付、各竹澤御殿江罷出御祝詞申上。且加賀守様・御姫様方初

ニも右御祝詞申上候筈。

四月十七日

一、中將樣御痲疹之處御順快、御酒湯茂先達而被爲濟候。明日御床拂に付、各御祝詞之儀、表方より御側御用人迄聞合有之候處、明日御能拜見に罷出候人々は御祝詞申上可然、別に罷出御祝詞申上候に者不及旨申來候由、月番より演述有之事。

〔金龍公記史料〕

三月廿八日公羅痲疹。四月六日癒。此時幕府寄遞信問之。

四月六日。今明日前田齊泰初めて入國するを以て金澤の市民盆正月を行ふ。

〔似寄留〕

四月六日曇天、七日天氣能。兩日盆正月賑々敷、所々作物等有之。此節はしかはやる。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

四月四日加賀守樣御國入に付、町中奉祝盆正月、所々作り物出來迚も繁昌なり。堤町一つ水溜に高さ十間計之二見の浦作り物出來、日は石浦町二つ水溜に有之なり。其外所々に作り物出來數十ヶ所ゆゑ不記。

四月十六日。前田齊泰の病痲疹と診せらる。

〔宮私隨筆〕

四月十四日

一、加賀守樣一昨夕於竹澤御殿御能被遊候後、少々御外感之御氣味に被爲入候處、昨朝より御熱氣被爲在、御膳も被召上兼候。丸山了悦御藥差上、昨今先御同樣に被爲在候、若御痲疹にも可被爲成哉と申上候由。竹田氏はなし也。

〔宮私隨筆〕

四月十六日

一、加賀守樣先日以來御風邪之所、今朝より御痲疹に御治定、御順症に被爲在候旨、御醫者中申上候段、竹田市三郎を以被仰出候付、今日各相伺御機嫌、退出より竹澤御殿へ罷出、右恐悦申上候。

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

四月十六日より加賀守樣御痲疹御滯なり。大將軍より右爲御尋宿繼御奉書到來するなり。翌月御酒湯之御祝有之なり。

四月十六日。前田齊廣の女恒姬の病痲疹と決定す。

〔官私隨筆〕

四月十六日

一、恒姫樣當五日頃より御熱氣被爲在、昨今御發物有之候處、今日御痲疹に御治定、御順症之旨高田彌左衛門申聞候付、明日御廣式へ罷出、相伺御機嫌可申旨、御用番より昨日以紙面被申越候付、今朝四時過御廣式へ罷出、以古屋甚兵衛相窺御機嫌、御樣子相尋候所、御順症に被成御座、御發しも少く相見え、御膳も御相應に被召上、御通じも程能被成御座之由。

四月十八日。老臣等前田齊泰の襲封入國を祝して物を献る。

〔諸事覺書〕

四月十八日

一、今度御家督・御轉任・御入國候爲御祝儀、各より左之通獻上、年寄中は組共直に御奏者番に被達上候。御家老中等は以使者二御丸江指出、其組々役人相詰、夫々江相達指上之。

一、年寄中　御太刀馬代・紗綾三卷・銀七兩二分 銀一枚 臺居　干鯛昆布代金三百疋臺居　御樽代三百疋臺居　包のし・目錄

一、御家老・若年寄　御太刀馬代・紗綾二卷 右同斷 臺居　干鯛昆布代金三百疋臺居　御樽代二百疋臺居　包のし・目錄

一、龍山　御太刀馬代右同断　一種代金二百疋臺居　包のし・目録

一、中將樣江御隱居之爲御祝儀献上物左之通。

一、年寄中　御太刀馬代前同断　二種代御樽代三百疋臺居　包のし・目録

一、御家老中・若年寄・龍山　御太刀馬代右同断　一種代二百疋臺居　包のし・目録

以上

四月十八日。前田齊廣能を演ず。

〔留帳〕

四月十八日

一、十六日今枝氏より廻狀に而、今日竹澤御殿御能拜見被仰付候間、上下着用に而可罷出旨申來候に付、今日六時出宅に而罷出申候事。

御用附

翁　千歳 三番三　養老　權兵衛　箙　千左衛門

吉野靜　御　國栖　佐七郎　祝言岩船　年萬

藥水　萩大名　千鳥

以上

一、御能初り候前年寄中御目見、其節何れ茂御上段方向御目見、相濟御舞臺之方ゟ向。

一、御能相濟、年寄中御目見初之通り。右相濟退候節、御廊下之内に中將樣御近習頭・加賀守樣方御近習頭兩人並居候處に而、御兩殿樣ゟ之御禮申上直に退出之事。

四月廿六日。東本願寺使者を遣はして前田齊泰の就封を賀す。

〔諸事覺書〕

四月廿六日

一、四時過本願寺殿御使者野崎加次馬登城、大廣間二之間に着座、寺社奉行挨拶罷出、組頭辻市右衛門・多羅尾左一郎罷出挨拶。畢而御奏者番上坂主鈴罷出、御兩殿樣ゟ之御口上承り、御進物受も相濟、追付年寄中一切・御家老中一切罷出及挨拶。

本願寺殿より

加賀守樣ゟ

今般始而御入國、萬端首尾能被爲濟、幾久敷目出度被存候。依之爲御祝儀目錄之通被致進覽候。委細書中に而被申入候。此段宜可申上旨御口上に御座候。

光養君樣より御口上同斷。

御狀一通　御太刀一腰　紗綾十卷　昆布一箱　干鯛一箱　御樽代金千疋一荷　御馬代黃金十兩

光養君樣より

御太刀一腰　長綿十把　干鯛一箱　御樽代金五百疋一荷　御馬代銀五枚

中將樣𛀁

昆布一箱　干鯛一箱　御樽代金千疋一荷

御使者自分献上物

御太刀御馬代銀一枚

右畢而湯原又左衞門相伴に而二汁六菜之御料理出之、內藏助罷出御意之趣申述、相濟年寄中一度挨拶に罷出。御酒之內藏人罷出御意申述。

四月廿六日。風邪流行するを以て諸士の長髮出勤を許す。

〔諸事覺書〕

四月廿六日

一、表方より演述。

御橫目𛀁

別紙は明らかならず

頃日風邪等專流行いたし、諸御番所等引人多、御人指支候條、病氣之樣子次第長髮に而出勤之儀御免被成候事。

右之通一統可被申談候事。

四　月

四月廿八日。遠所御用の爲出役する者の食事は一汁又は一菜に限るべきことを告ぐ。

〔御觸留拔書〕

遠所爲御用出役之御人々旅宿において食事之儀に付御別紙御渡被成、毎度被仰渡之趣も有之候間、一汁歟一菜歟之外堅指出不申樣相心得可申旨、尙更私より申談候樣被仰渡候に付、爲御承知御別紙相添相廻候間、先々御順達落着より御返可被成候、以上。

四月廿八日　廣瀬又八郎

諸郡仲間宛所

四月。御馬廻頭が他國に使する際の行裝に鎗又は矢籠を減ずべきことを上申す。

〔御親翰帳之書拔〕

私共他國御使罷越候節、道中武器爲持方、御供御道中御定を以鎗三本・矢籠爲持來候。是迄御儉約被仰出候砌、御供御道中鎗二本爲持可然旨被仰出、共通爲持申儀も御座候。當時萬端事輕之儀被仰出候砌にも御座候間、當分鎗一本減歟、又は矢籠相止候歟、兩樣之内一品相減爲持申儀も可有御座候間、此段無急度御達申上候事。

申四月　　　　　　　　　　　　御馬廻頭

四月。御郡方の者の木綿及び布以外を着用するを禁ず。

〔御觸留拔書〕

近年度々被仰出候趣も有之、着類等專麁服を相用、一統共通相守候所、百姓之内には今以心得違之者も有之躰に相聞え候條、急度相改可申候。宿立等之ヶ所は、金澤等之町方之風俗を見習樣之者茂有之哉に相聞、不屆至極に候條、家内末々迄無油斷申諭、いか樣之儀有之候而茂木綿・布之外一圓着用致させ申間敷候。若此上心得違之者有之候得者、無泥召捕候筈に候條、人々相心得、家内之者共ニ茂嚴重可申談候。別而宿立等之箇所等は、心得違之者見請候はゞ直樣相斷可申候。

右之趣嚴重に申談、役人共無油斷可相心得者也。

四月　御郡奉行

諸郡村々役人

五月朔日。前田齊泰の麻疹癒ゆ。

〔横山氏日記〕

五月朔日

一、加賀守様御麻疹、段々御順快、今日三番目御酒湯被爲引候付、年寄中等熨斗目・上下着用に而登城之事。

〔官私隨筆〕

五月朔日

一、御酒湯等被爲濟候付、御祝之赤飯・御吸物被下旨、以丹羽七郎左衛門被仰出、各列座於松之間二之間御意之趣拜聽之。

一、御酒湯等被爲濟候付、爲御祝儀各御肴一折充献上之、於右同所同人を以上之。

五月朔日。前田齊廣の女直姫の病麻疹と決定す。

〔官私隨筆〕

五月朔日

直姫様此間御不例之處、御麻疹に御治定に付、御機嫌相窺之、御様子相尋候所、少多く御發し被遊候へども、御筋合宜敷、御順症に被成御座候。御食・御通じも御相應之由。

五月二日。能州口郡に產する四ヶ縞の判押人を改む。

〔御觸留拔書〕

能州口郡に而出來之四ヶ嶋、是迄同所に而出來之四ヶ晒判押人相改、印押候得共、德丸縮与入交紛敷候に付、已來德丸縮吟味人德丸村權右衞門ゟ右四ヶ嶋改方申渡、印爲押可申候條、此段被申渡、嚴重相改候様可被申渡候。依而印相渡候條、權右衞門ゟ可被相渡候。當年之儀者春已來買入候者可有之候間、此分は是迄之四ヶ晒之印に而可見通候。尤四ヶ晒之分者、是迄之判押人手前に而嚴重相改候様可被申渡候。都而印洩之品取扱候者見咎於相斷者、品物取揚見咎候ものゟ品物代半分可被下候條、此段夫々可申渡候、以上。

五月二日　　　　御算用場

御郡奉行中

追而右判賃之儀、四ヶ晒同様壹疋に付壹分取立、其內貳厘宛判押人ゟ被下候條、都而四ヶ晒同様散役裁許に相渡令上納候様、權右衞門ゟ被申渡、散役裁許ゟも可被申渡候、以上。

〔御觸留拔書〕

能州口郡に而出來之四ヶ嶋、是迄同所判押人於手前印押相渡候。然處近年於同所四ヶ嶋出來に付、此分右判押人於手前印爲押候得共、德丸縮与入交紛敷候に付、今般遂詮議、德丸縮吟味人德丸村權右衞門江右四ヶ嶋改方申渡、別に印相渡候條、四ヶ嶋出來之村江、不相洩權右衞門方江指出、印請候樣嚴重可被申渡候。依而印鑑五拾枚相渡候條、右品取扱候者江被相渡、印洩之品堅不取扱樣可被申渡候。尤無印之品於取扱候、斷次第品物取揚、見咎候者江物代半分可被下候。且又當年之儀は春已來買入候分可有之候間、此分は是迄之四ヶ嶋之印に而可見通候。勿論四ヶ嶋之分は是迄之通に候條、都而印洩之品不取扱樣嚴重可被申渡候、以上。

五月四日　　御算用場

御郡奉行中

五月三日。前田齊泰竹澤御殿に齊廣を訪ふ。

〔溫敬公記史料〕

五月三日。以麻疹癒始參竹澤。

五月四日。前田齊廣の子他龜次郎の病麻疹と決定す。

〔官私隨筆〕

五月五日

一、他龜次郎殿此間中御熱氣有之候處、昨日より御痲疹に御治定之由。依而今日退出直に御廣式へ罷出相伺御機嫌可申旨御用番演述。則罷出以進士源兵衛相窺之、御樣子相尋候處御順症被成御座候。乍去御熱勢は餘程强、御發しも多き方に被爲在、御譫語も多く候。召上り方も少く候へども、外御替被成儀も無之御順症之由。

五月五日。前田齊廣の子延之助の病痲疹と決定す。

〔官私隨筆〕

五月五日

一、延之助殿此間中御熱氣有之候處、今日御痲疹に御治定、御順症に被成御座候。依而明日各被罷出候旨、御用番より以紙面被申越。

五月六日。公事場に於いて禁牢に處する者の期間を改む。

〔御親翰帳之抜書〕

文政七年五月六日

一、公事場御刑法方之儀に付、大地縫殿左衛門等江、執筆之內竹澤御殿へ罷出候樣申來、罷出候所、被仰出之趣申聞候趣有之候事。

公事場奉行江

公事場禁牢者御刑法之儀、思召被爲在、今般左之通御改被成候。

是迄二・三ヶ月禁牢之者　三十日

四・五・六ヶ月禁牢之者　五十日

七・八・九ヶ月禁牢之者　百日

御領國追放代刑　十ヶ月

三ヶ所御構追放代刑　十五ヶ月

右之通被仰付候。百日以下禁牢者は、言上以前又は言上中に而も、日數滿候者出牢可被申付候。大飛者一卷に小飛者有之候はゞ、一件吟味落着之上、右之振に可被相心得候。

一、天明五年以來者、賊に入墨被仰付、右入墨及三度候上惡事いたし候へば、死刑被仰付候へ共、是以後入墨及兩度候上、重而惡事いたし候へば死刑可被仰付候。依而出牢之節、重而惡事いたし候へば罪之輕重に不依、死刑可被仰付旨急度爲申聞可被置候。

右之通被仰出候條、可被得其意候事。

甲申五月

〔刑法例書〕

今般御刑法方相改候に付、左之品々御指圖御座候之樣仕度奉存候。

一、十ヶ月・十五ヶ月禁牢之上出牢被仰出、其段申渡牢屋に指置候者は、右月數滿候上、翌月二日出牢可申付。
一、百日以下之禁牢者、右日數滿候共、式日を待出牢可申付候。
一、小罪に而下濟、出牢申付候者共之内にも、各御聞届下濟与、御聞届無之下濟与、兩樣御座候。然處今般百日以下之禁牢者は、言上以前に而も、日數滿候はゞ出牢可申付与被仰出候儀に候得者、右御聞届下濟に可相成分は、各御聞届、公事場へ御出座之御序有之時者是迄之通、其儀無之節者、前々御聞届下濟者出牢之日數相しらべ、其日數に向候はゞ尤出牢申付、年中一度右下濟者罪之大綱を帳に仕立、御達可申哉奉存候。尚更御指圖御座候樣仕度奉存候、以上。

五月廿九日　　辻　平之丞
遠田誠摩
津田兵庫

村井豐後守樣

付札
本文之通可被相心得候事。

五月七日。前田齊廣の女從姬の病麻疹と決定す。

〔官私隨筆〕

五月七日

一、從姬樣二・三日前より御熱氣被爲在候處、今日御麻疹に御治定、尤御順症被爲在候旨に付、明日各御廣式へ罷出候由、昨日御用番より紙面到來。依而今朝四時過御廣式へ罷出、以佐久間武太夫相窺御機嫌、御容子相尋候處、御順症に而第一御輕く、御通じも宜、召上り方御相應に而、何之被爲替御儀も不被爲在之旨演述。

麻疹は前田利之

五月十日。大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤に着す。

〔横山氏日記〕

五月十日

一、備後守樣夕七時前御旅宿ゟ御着に付、御使御近習頭坂井與右衞門被遣候由之事。

一、今日御着後御登城之筈に候處、御麻疹後御勝れ茂不被成候付、今日御登城御斷申來候旨、表方より演述有之候事。

五月十二日

一、備後守様夜前九時前、此表御發駕之由之事。

〔温敬公記史料〕

五月十日。備後守自東覲來至。以兩公疾不登城。

五月十四日。前田齊廣二ノ丸殿廣式に臨み能を演ず。

〔三守御譜〕

五月十四日御入國後、初て二御丸御廣式ゟ御出被遊、御居間於御舞臺鉢木御能被遊。於御奥御料理被進。

是前四月十一日御病後初て於竹澤御殿御能被遊。其時三笑被遊。尤御次廻り等拜見被仰付、其後も度々御能被遊。

五月十六日。紫野芳春院及び高野山天德院前田齊泰の就封を賀す。

〔諸事覺書〕

五月十六日

一、紫野芳春院今般御入國候御祝儀として出府、并高野山天德院當病に付代僧五明院出府に而今日登城、年寄中等上下着用四時前出席。

一、四時過芳春院等登城候間、二之間に着座、同役僧兩人次之方屛風圍へ屯、年寄中一切・

御入國は前田齊泰の事に係り、初て以下は齊廣の事に係る

御家老中一切挨拶に罷出る。五明院は實檢之間に屯。

五月十八日。家中諸士にして寺坊の女子と緣組することを禁ず。

〔觸留〕

付札、定番頭江

一、御家中諸侍、御坊方之娘等致緣組候儀者不可然候。娘等御坊方江遣候儀は、是迄振合之通不苦候。

右之通被仰出候條、頭々其趣相心得罷在可申候事。

右之趣被得其意、諸頭中江寄々可被申談候事。

五　月

別紙村井豐後守殿御渡候覺書寫一通相越之候條、被得其意、先々被相廻、落着可被相返候、以上。

五月十八日　杉野善三郎

〔御親翰帳之書拔〕

文政七年三月被仰出、五月觸出。

一、御家中三品之人々、御坊方より致緣組候儀不可然、娘等御坊へ遣候儀は是迄之通と被仰

出、其段一統相觸候事。

五月廿四日。前田齊泰入國御禮の際に於ける御禮人の服裝等を令す。

〔御觸拔書〕

御横目江

御入國御禮人服之儀、年頭之通着用之筈に候。五箇年御省略中年頭半袴着用に候得共、今般之儀者長袴に而御禮被爲請候。

一、六月二日より御禮被爲受候節、御城江罷出候者服之儀、二日・四日・六日三箇日、御歩並以上布上下着用、御門方之儀者二日より十八日迄御禮被爲請候日、年頭之趣に相心得可申事。

右之趣夫々可被申談候事。

五月廿四日　　　村井豐後守

五月廿六日。前田齊泰特に諸士の罪あるものを宥す。

〔溫敬公記史料〕

五月廿六日。因就國宥前田權佐遠慮。減祿三百石。三田村紋左衞門蟄居。多賀典膳蟄居。減祿三百石。岡島帶刀蟄居。減祿二百石。永井舍人蟄居。減祿百五十石。其他頭分平士與力新番徒士料理人等若干人見宥。

〔横山氏日記〕

五月廿六日

伊豫守殿江

岡嶋帯刀

右帯刀儀、不行狀至極、重き組柄別而不埒千萬に付、蟄居被仰付置候得共、御免被成候。知行高二千五百石內三百石與力知、自分知二千二百石之內貳百石御減少、知行高・與力知とも二千三百石に被仰付候。此段被仰出候條、可有御申渡候事。

申五月

求馬殿江

故安房守跡組

多賀典膳

右典膳儀、不行狀至極、重き組柄別而不埒千萬に付、蟄居被仰付置候得共、御免被成候。知行高三千石之內三百石御減少、二千七百石に被仰付。

同

永井舍人

右倉人儀、不行狀至極、重き組柄別而不埒千萬に付、蟄居被仰付置候得共、御免被成候。知行高二千石內五十石故松村茶湯料、本高千九百五十石之內百五十石御減少、知行高千八百石に被仰付。

右之通被仰出候條夫々可有御申渡候事。

申　五　月

前田權佐

豐後守殿江

右權佐儀、江戶詰中御門外に而不心得之趣有之段被聞召、近年段々御家中心得等之儀被仰出候處、重き職分も被仰付置候處、右等之趣甚以不應思召に付、遠慮被仰付置候得共、御免被成候。知行高三千七百石內二百石與力知、自分知三千五百石之內三百石御減少、知行高・與力知共三千四百石に被仰付候。此段被仰出候條、可有御申渡候事。

申　五　月

五月。諸士の子弟にして刑に處せられたるものを給人の養子として遣はすことを禁ず。

〔御親翰帳之拔書〕

文化七年に脇本乙次郎嫡子長次郎とあるものなり

文政七年五月

一、脇本定右衛門嫡子舟助儀、文化七年六月於學校大村武次郎四男乙四郎与、字突取遣之儀に付戯長じ、互に彼是爭之內、乙四郎脇指鞘離れ、同人疵付相果候に付、舟助儀同年遠嶋被仰付、同十四年六月遠嶋御赦免被仰付候。舟助儀重き御咎も被仰付候者に候へば、名跡奉願候儀尤奉恐入候に付、二男兵吉儀追而嫡子に相立、名跡相續奉願度了簡に罷在候。舟助儀御赦免被仰付候儀に御座候間、可相成儀に御座候はゞ、御歩組等之內養子に指遣申度內存之旨申聞候に付、及內談候旨等、頭渡邊多宮より紙面を以申聞候へ共、御歩組等に而も、御家人之養子に指遣候儀は難成儀と奉存候。しかし町醫者・神主・陪臣などへ養子に遣候儀は苦ヶ間敷哉と伺之所、共通与被仰出候事。

五月。前田齊泰諸士以下に仕法調達銀の內を貸附す。

〔觸留〕

今般御家中勝手難澁之人々江、御仕法銀之內を以御貸附就被仰付候、御組・御支配之人々知行高・名前、且若借用無之人々等も有之候者書分け方別紙草案之通御書記、當月中に御仕法方役所江御差出可被成候。

一、他國詰人幷江戶・京・遠所在住之人々借用有無之儀、急速御聞糺、相知次第御書出可被成

候。

一、足輕・坊主幷小者人數高帳面に記、當月中に御書出可被成候。

一、御組・支配有之頭分之御面々者、御組等帳面之內ゟ御自分知行高等書加、御指出可被成候事。

五　月

別紙兩通幷案帳之趣御承知被成、御同役・御同席御傳達、御組・御支配御申渡可被成候。且御組等之內裁許有之人々者、其支配ゟも不相洩樣、是又御申渡可被成候、以上。

五月廿三日　　木梨左兵衛

澤田義門

今般御貸渡之儀、組・支配之人々一統呼立被仰出候趣、且兩組頭ゟ御渡之覺書之趣具に申聞、如此御趣意に候間、拜借之上不束成遣方有之候而は無申譯次第に候條、人々當時運び方精密に書立、御貸渡之分拜借仕、此處ゟ振向、以來之運び方如此取極、何分取續可申覺悟之旨、銘々より承之、猶又頭々存寄も急度及助言、何分御格別之思召を以過分之御貸附方共詮相立候樣、人々勝手向之厚薄に隨ひ成限綿密に存寄通り及指圖可申。尤勝手向之厚薄、且者共人々勝手始抹之致方、兼而心付罷在候趣を以、人々により指圖方も可有之儀に候。

一、町會所仕送り人之儀者、於町會所當半納直段近年之相場を二・三年平均中勘圖りを以遂指引、急々指引書頭々江相達候筈に候間、頭々よりも町奉行江右之趣を以申達、指引書取請候上本人江渡之、引取以來之取續可相成哉否を重而遂詮議、引取難成分は其段頭々より直に町奉行江可申達候。引取可相成分は、以來之取續引請之町人承立候分も可有之、又者手捌出來之分も可有之、夫等之趣見計与得承糺、引請申町人有之分は、右町人を頭々江呼寄与得承糺、品に寄又人に寄、町人仕送り方時々頭々江承届申様に仕候分も可有之候。右勝手引取相成申分は、取調理相極候上、名書を以御勝手方江頭々より共旨御達可申候。右組・支配之人々勝手向之様子細か成儀は、人々手前承調理申上ならでは難取極品に候間、何れに茂頭・支配人此度之御趣意与得會得仕、組・支配之人々勝手向之厚薄に隨ひ、人々取續之爲に相成候樣精誠を盡し及指圖可申候事。

五月

〔雜事日記〕

御家中之人々勝手難澁に付、外に御救方之御手段一圓無之候得共、格別之思召を以御仕法御調達銀一統江御貸渡被成候條、此段可申渡旨被仰出候。割合等之儀別紙之通に候。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之而々は、其支配江茂相達

候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

申　五　月

御貸渡之割合

一、十三貫宛　自分知一萬石當り

但、一萬石以上都而一萬石當り

一、十貫目宛　自分知五千石當り

但、五千石以上都而五千石當り

一、七貫目宛　自分知三千石當り

但、三千石以上都而三千石當り

一、五貫目宛　自分知二千石當り

但、二千石以上都而二千石當り

一、四貫目宛　自分知千石當り

但、千石以上都而千石當り

一、千石に不滿知行百石以下半知行迄都而百石に付五百目宛之割。

但、八百石以上千石に不滿知行者都而八百石當り

一、御扶持方・御切米之分者、知行に直し百石に付五百目宛之割。
右之割を以御貸渡之事。
但、江戸・京幷遠所在住之人々も、右之割合を以御貸渡之事。
一、町會所仕迯之人々茂、右割合を以致借用、勝手引取之儀可相成人々は御貸渡可有之候。
右を以引取之儀難相成人々江者、來年に至り御詮議之筋有之に付、此度御貸渡無之候事。
一、隱居之人々江は御貸渡無之候事。
一、當時舊宅之人々は、跡目之御沙汰有之候上、御貸渡可有之候事。
附、御扶持方等之人々も右に准じ可申候事。
一、御知行御取上御扶持方被下置候者、幷御咎被仰付置候人々者、御貸渡無之候事。
一、右御貸渡銀渡方、千石に不滿知行之分は、當七月朔日より十一日迄に可相渡、千石以上之分は、同月廿一日より廿九日迄都而奇日可相渡候事。
但、御扶持方御切米之人々者、七月朔日より十一日迄に可相渡候事。
一、二十目宛　足輕坊主
一、十三匁宛　小者類
右足輕以下は被下切之事。

一、右御貸付銀御仕法、御調達銀之内を以御貸渡に付、八朱之利付を以、來酉の年より十ヶ年賦を以可致返納候。依而右爲引當、元銀一貫目に付草高十一石二斗宛致除知、村付帳御仕法方役所江可指出候。御扶持方・御切米之人々も、右同様年賦を以可致返納候。除米之分は、元銀一貫目に付現米五石宛之圖りを以、御醫者以上之分は春渡之節、御算用場に而右米高引去切手可相渡候。新番以下之分は、頭々於手前右割合を以米高引去切手可指出候。除米之分は別切手に認め、御算用場江指出可申候。猶委曲之儀は、右主付木梨左兵衛等江直に承合可申候。足輕以下被下銀之分も、左兵衛等手に而可相渡候條、夫々直に承合可申候事。

申五月

御馬廻頭・御小將頭江

今般御仕法御調達銀御貸附之儀被仰出候趣、一統申渡候通に候。右御仕法銀者、初發被仰渡置候通、未年迄に追々元利全可被返下御議定有之候故、無據十ヶ年賦利足を茂御取立被成候。左すれば、小身之人々抔は全爲にも相成間敷哉に思召候得共、御勝手御逼迫、其上追々莫大之御物入も被爲在候儀者、何茂承知之通に而、外に被成方も無之、不被得止事右之通被仰付候條、此處頭々等手前において心得有之、人々精實を勵、萬端遂儉約、いか樣にも勝手取續之儀專要可相心得旨申渡。今般御貸付之御主意相立、其詮有之候樣取扱可申儀肝要之事に候。是

等之趣頭・支配人江譯而可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配有之人々江各より夫々可被申談候事。

五　月

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

五月、昨年被仰付候銀札を以、御家中一統御知行百石に付五百目充御貸付、足輕江は銀二十目充、小者江は十三匁充被下切に被仰付、御入國之御祝之御含、肥前守樣御心添、深き被爲在思召候御儀、誠に難有御仁惠と奉感稱るなり。

五月。藤内頭より藤内・非人頭・癘癩・穢多・舞々等の勤務に關し上申す。

〔國事雜抄〕

覺

藤内　陰坊　駕籠屋

非人頭　乞食

右藤内与申は身分之本名に御座候。陰坊与申儀は、町家等之死去人を葬候時之名目に御座候。但藤内に而不限、惣而死人を葬候者を陰坊与唱申候由。駕籠屋と申候は、御武士家・町方等に御吉事有之、御祝に罷出候砌、幷五節句等嘉日に勸進方仕候砌は、駕籠屋与相唱候事。

右非人頭与申は、御當所に七人罷在、身分本名非人に而、御當地門下・橋下等に乞食病死仕候へば、死骸取またじ仕候。依而右助力に御武士家・町方等御吉事有之砌は非人頭与相唱御祝に罷出、鳥目等申請候。乞食と申は、本名非人にて、町家等ゟ乞食に罷出候時之名目に御座候。但非人頭御郡方ゟ勸進方に罷越候砌は、よかれ左衞門与相唱候事。

右藤内・非人者藤内頭裁許仕候事。

瘍癩　物吉

右かつたい与申は身分本名に御座候。但無宿類之者癩病相煩、乞食に罷成候得ば、藤内頭より乞食札相渡、かつたいども方ゟ相渡候へば、彼等垣内に指置申候。且門下・橋下等に癩者相果候へ者、死骸加州かつたい共方ゟ引取候儀、前々より之所作に而御座候。依而右助力に御武士家・町方等御吉事之砌、物吉与唱御祝に罷出、鳥目等申請、其外嘉日にも、右名目を以手之内勸進仕候事。

穢多　皮太

右兩名は同事に御座候。所作は牛馬等之皮はぎ仕候。但し町方等ゟ罷出、勸進は不仕候事。

舞々

右者三太夫与申而、御武士家・町方等にて舞をいたし、手之内勸進仕候。以前は折違町池小

またじは處分の意

路に罷在候得共、當時者何方江罷越候哉、舞々之所作相止候故、住所相知れ不申候。右代り石川郡藤江村百姓中之內、舞々与唱町家等江罷出、手之內勸進仕候由に相聞え候へ共、右は藤內頭裁許不仕候事故、實否相知兼候事。

右癘癩・穢多・舞々は藤內頭裁許等仕候事。

右御尋に付申上候、以上。

文政七年申五月

藤內頭　三右衞門

同　仁　藏

六月朔日。日蝕あり。

〔官私隨筆〕

五月廿七日

一、來月朔日卯之五刻より日蝕に而、八分半に候間、出仕之面々蝕終次第、五半時過相揃可申趣、御横目觸之寫御用番より到來。

六月朔日

一、今朝日食八分半、卯之五刻初めにて、辰之一刻甚、同五刻復也。一昨日頃より尺時計正時刻にかけ置、初甚復之印を付試候處、初は當時之鐘之正五ッ頃、甚は半前、復は四時前也。

正時刻は文政六年八月四日の條參照

今日者曇天に而、分明には見えがたく候へども、大方三日月の少太き程に相成候なり。夕七時過の明るさ也。

六月朔日。前田齊泰、齊廣を竹澤御殿に訪ふ。

〔三守御譜〕

六月朔、今公御入國初て於竹澤御殿御招請可被遊旨被仰出置候處、五月晦日より御不例に付御延引被仰出。依て今公爲御機嫌御伺竹澤御殿へ被爲入。兼て其日御能も被遊御圖に付、公は不被遊候得共矢張御能は被仰付、則今公項羽被遊。

六月二日。本日より諸士等前田齊泰の家督を續ぎたる後初めて入國せるを祝す。

〔官私隨筆〕

六月二日

一、今日御入國御禮初日、御用番六時前登城之筈之所、少遲參、其餘同刻過頃迄に登城、自分は六打卽出座。

一、一番座御禮人揃候而、列居之儀被申談、人持中列立ち、頭分にかゝり候旨坊主申候頃、甲

斐守殿・土佐守殿・伊豫守・豐後守殿、各檜垣御間溜等之內圍有之所に而、裝束大紋直垂に改之。自分家來宇野半左衞門・林彌五兵衞・岩崎武右衞門召連候。右家來三人名前、一昨日御用番幷御横目へ以紙面達之。

一、右裝束改相待居候間に五半御時計承之。

一、御奏者番上坂主鈴・奥村主馬佐素袍に改、檜垣之間緣頰着座所へ罷越候案內承之、各同所へ罷出。

一、御家老中兩人（藏人・庄兵衞）布衣に而伺公、御表小將三人（大野藏人・佐藤隼人・小谷義一郎）素袍に而着座、各如繪圖、御奥小將横目（淺香五兵衞）是又如圖罷出。御表小將御番頭高田善右衞門は御奥書院御緣頰之隅に罷在、是は間違歟。（繪圖之所に而は御意拜聽仕兼候故如此之由。）

一、追付御出、御次第如御席附甲斐守（引役大野藏人、奏者主鈴）、土佐守（引役佐藤隼人・主馬佐）、伊豫守（引役藏人・主鈴）、豐後守（引役佐藤隼人・主馬佐）四人御禮濟、庄兵衞會釋有之、甲斐守等重而罷出御禮仕、御敷居を入候之處、藏人出懸り、諸大夫之面々御入國初而御禮被爲請、目出度御儀奉存段被申上、目出度と御意、甲斐守御請被申上。（此時御のしの御意無之故見合いづれも少頭をあぐ。此間暫有之、御番頭も見合罷在候樣子に而、其內御のし出候也。）御熨斗三方御表小將（小谷義一郎）持參之、各頂戴（切のし之箸之所、今日は結びのしなり。是又間違歟。俄に成間違候由。）懷中、藏人重而罷出、御のし頂戴仕難有仕合奉存旨申上、萬端都合能と御意有之。此御意拜聽不仕得、難有奉存旨甲斐守重而被申上、（御次第書に平伏と有之候へども

餘り御塩なき故如此申上候と甲斐守被申。末座より退出。

一、此間に一先被爲入、御裝束御改被遊。

一、各長上下に改之。

一、追付重而御出、於御奥書院竹田彦六郎御使歸御目見被仰付、御用番求馬等は御小書院に而列居故、彦六郎誘引土佐守也。伺公は甲斐守・伊豫守・豐後守也。畢而於御小書院、求馬を初若年寄迄之御禮相濟、於御廣間人持・頭分御禮被爲受之。御禮人指引御用番求馬及內膳、扣は土佐守也。五千石人持御禮之時四つ打、新番頭之上に而御入、御裝束之間御閑所へ被成御座候御樣子也。然所各御居間へ被爲入候となし、芙蓉之間之邊迄罷越右一先御入之事、兼而藤田平兵衛等より申聞有之、各席へ罷越候而も可相成との事故、右之通心得候也。候處、御裝束之間に被成御座御樣子故猶豫之所、改田主馬罷在、不苦候席へ參候樣にとの事也。依之罷越、追付又伺公所へ參る。

一、無程御出、新番頭より寄合迄御禮被爲受、相濟被爲入。九時大分前也。

定番御馬廻御番頭御禮之時四つ半承之。

一、二番座御禮人列居宜、追付御出、於矢天井間獨禮雜仕人持・頭分御禮、伺公豐後守。畢而於御大廣間御表小將・御大小將等御禮、御射手相濟候所に而暫被爲入、追付又御出、相濟被爲入。

九半不聞之、席へ罷越候上八つ之鐘承之。

六月四日。前田齊泰復入國の賀を受く。

〔官私隨筆〕

六月四日

一、今朝五時前登城。

一、一番座御禮人御大廣間、二日當番之頭分・御表小將・御大小將并御馬廻三組御禮、御用番求馬并內膳指引、扣は土佐守也。五半時過相濟。

一、二番座御禮人御出以前伺公所に着座之內四つ承之。獨禮相願候平士、於矢天井間御通掛御目見。伺公豐後守。夫より於御大廣間、御馬廻三組并遠所在住之平士、二日相殘候新番御禮。指引右同斷。被爲入候節、於柳之間御役者共御通掛御目見。伺公伊豫守、披露は奧野主水也。町奉行宮崎信次郞、御橫目今井舍人。

但、御禮人濟寄之節、舍人より案內に付而柳之間へ罷越也。此儀前廉示合置候也。

一、四半時歸宅。

六月六日。前田齊泰復入國の賀を受く。

〔官私隨筆〕

六月六日

一、今朝も五時前登城。
一、御禮人相揃候處、列見合候樣被仰出有之由也。五時過列居宜敷、追付御出、於御大廣間御馬廻三組御禮、扣豐後守殿也。五半前相濟被爲入。
一、重而御出之節、於矢天井間獨禮難仕人々御通掛一通御禮、伺公豐後守殿。夫より御大廣間へ御出、御馬廻三組御用番支配共御禮、扣甲斐守也。無程相濟。
一、四時前歸宅。

六月六日。西本願寺使僧を遣はして前田齊泰の就封を賀せしむ。

〔諸事覺書〕

六月六日

一、九半時頃西本願寺殿より之御使者嶋田帶刀登城、御大小將誘引御大廣間下之間に着座、御口上御奏者番承り、御進物夫々御勝手江引之、年寄中一切・御家老中一切挨拶罷出候處、御門主より之御命之趣申述。退候上組頭挨拶に而二汁五菜之御料理、組頭岡田太郎右衞門相伴に而出之。修理罷出挨拶、御酒之內御使織江罷出申述候事。
一、右相濟御使者御目見不被仰付候旨被仰出。
一、加賀守樣より御答應候而可申述旨武田喜左衞門を以被仰出、御口上書被渡下候。中將樣

より玉川二源太を以御口上書被渡下、御答應候而可申述旨被仰出。

一、御使者江御答申述候而宜旨組頭申聞に付、庄兵衛罷出御兩殿樣御答申述、退候上年寄中一切・御家老中一切罷出及挨拶。且又御命之御請申述、直に虎之間御緣頰に年寄中等一列罷出、御使者退出迄候事。

六月六日。前田齊廣の病再び痲疹と診せらる。

〔官私隨筆〕

六月六日

一、中將樣御痲疹御餘毒之御發物被爲在候處、御痲疹御治定之由江間篁齋等申上候。公邊向幷御一門樣方へは不被爲及御沙汰候。御內輪向御內々御痲疹之御取扱御座候樣、加賀守樣へ被仰進候由、神戶藏人を以被仰出候。依之今日竹澤御殿へ罷出、相伺御機嫌候由、御用番紙面到來、八半時過罷出候所、各二御丸より直に被罷出候退出に出合候也。

御樣子相尋候處、月初より御熱氣有之、御發汗も被爲在候へども、御發汗切、御熱被爲醒候のみに而、御解し不被遊候而、御膳も被召上兼候內、昨日より御發し物被爲見、今に而は御面部抔明きたる所も無之樣に御發し被遊候。昨今御不食、昨日は御飯漸八匁計被召上、今日は梨子少々、或は枇杷之しゆかき抔少々被召上候迄に候。御藥は犀角消毒散に凉膈散御兼

しゆかき本のまゝ

用に被召上候。御通じは御滑便度々御通じ被遊候。多く御發被遊候へども、御順症に被爲在候由也。

〔三守御譜〕

御痲疹の御様子にて、先達ては御輕候所、此度は多く御發被遊。此年痲疹流行、先年と違一統輕き方。中には幼少者抔遊び遊び肥立申様のこと也。夫故か最前御滯は至て御輕き御痲疹と御醫師中診候所、全診違と沙汰する。此度は多く御發被遊、夫にて又痲疹の事に成る。

六月七日。前田齊泰復入國の賀を受く。

〔官私隨筆〕

六月七日

一、今朝五時前登城。

一、御表宜旨申上、御出、於御居間書院彈番儀御用番誘引被爲召、年寄中席御用見習被仰付候由。其節は自分は尤不致伺公也。畢而於御小書院、同人御入國御禮被爲請候。是去二日いまだ歸着無之故也。畢而於御廣間、小松御城番等等幷四日・六日當番之御馬廻、聟定番御馬廻六組御禮。一先被爲入。

一、重而列立宜段申上、御出、於御大廣間組外四組御禮。但御出之節、於矢天井間御通掛り

座付御禮有、土州伺公。

六月九日。前田齊廣の病狀稍安靜を保つ。

〔官私隨筆〕

六月九日

一、中將樣御痲疹に付、御樣子相しれ申候はゞ承知仕度之旨、三上錄郎を以原篠喜兵衞迄申入候處、御容子相知不申候由也。依而今日求馬殿方へ内々以紙面尋遣候處、卽今朝竹澤御殿へ罷出被相伺候由。段々御安らかに被爲在候。昨日も廿八匁御膳被召上、鱵片身被召上、今朝十三匁被召上候由。只今之處段々御かせに御迎被遊、御兩便御快通被爲在、其外御替不被爲在旨被申越。

六月十日。前田齊泰復入國の賀を受く。

〔諸事覺書〕

六月十日

一、今日御禮人有之候に付、各五時迄に出席。

一、五半時前列立宜段申上、追付御出、御先立市三郞。御大廣間御下段へ御着座。定番御馬廻二組・組外・寺社奉行支配之平士・町同心・火矢方・御廐方・御鷹匠小頭・御步小頭・定番小頭・

御算用者小頭・御料理頭・御細工者小頭等御禮被爲請、相濟被爲入。

一、四時重而列立宜段申上、追付御出、御先立市三郎。矢天井之間に而不行步等に而獨禮難仕相願候者共座付之御禮御通懸り。夫より最前之通御着座、與力半分遠所附共・御大工頭御禮被爲請、御入之節柳之間上之間二圍に仕並居町人・檢校御通懸之御禮申上、直に被爲入、御先立市三郎之事。

六月十一日。前田齊泰復入國の賀を受く。

〔諸事覺書〕

六月十一日

一、今日御禮人有之候に付各五時迄に出席。

一、五半時前列立宜段申上、追付御出、御先立市三郎。御小書院に御着座、隱居之人々伊藤適等御禮、相濟人持之嫡子・年寄中弟・頭分之嫡子、相濟初而御目見之子共御禮被爲請、相濟被爲入、御先立同前。

一、四時前重而列立宜段申上、追付御出、御先立市三郎。矢天井之間に而人持・頭分行步難儀いたし相願座付之御禮。夫より御大廣間御下段に御着座、頭分幷平士當病に而二日以來不罷出人々、暨與力半分・平士隱居・今津甚右衛門・中村鐐太郎・大森三郎兵衛御禮被爲請、御入

之節矢天井之間に而御用承候町醫者座付之御禮被爲請、被爲入候事。

六月十一日。前田齊廣の病狀一進一退す。

〔官私隨筆〕

六月十一日

一、中將樣御容躰求馬殿方へ尋遣候處、此間より不御宜、されども昨日より少々御宜方。昨日は一向に御絶食、今朝は十八匁被召上、此間無之召上方之旨。且此間御血便被爲在、篁齋初何も奉案候處、今日は御色も薄く相成候由。此間は度々御便に御出被遊候處、昨日は漸九度計御出、御間遠に被爲在候由被申越。

〔官私隨筆〕

六月十二日

一、今日中將樣御機嫌伺之儀、御用番より被申越、九半時過罷出候處、甲斐守殿・豐後守殿・內膳殿・彈番殿・內藏助殿・織江殿・庄兵衞殿も被罷出、一所に大地縫殿左衞門を以相伺御機嫌、御容躰相尋候處、此間中御熱氣强被爲在に付、御通之劑等指上、少々御解被遊候處、夜前より又々御熱强、御難儀被爲在、何も奉案事。御食事も廿日より以後不被召上、此通にて御元氣御衰弱被爲成候而は難成に付、段々御僉議之上、半夏瀉心湯に御轉方是迄錢氏白朮散差上候由。可指

上趣に治定之處、今少以前御米飯惣じて三十目許被召上、夫より餘程御惣躰御宜被爲在候付、右御藥差上候儀先相見合申候由演述也。御醫者大方同案之内、梁田耕雲・石黒玄丈儀は、いまだ御熱不被解候間、御下痢之劑差上申了簡之由。其外は同案に而有之、御藥は高木學張へ調合被仰付候由也。

御痔をも御痛み御難儀被爲在、御心下も御痞被爲在候由。御大便も度々御通被遊候處、此頃は少御間遠に被爲成候旨也。

六月十三日、前田齊泰復入國の賀を受く。

〔官私隨筆〕

六月十三日

一、五時前登城。

一、今日は正月六日被罷出候寺庵方也。其内惣持寺・天德院寶圓寺は此間方丈遷化、瑞龍寺は惣持寺輪番中に而、則今日被罷出候付、本寺之方に而は御禮無之。溜實檢之間へ各罷越及挨拶。如來寺・玉泉寺・勝興寺幷息寂靜院は、竹之間・虎之間と之境御廊下之内へ連越置、則右之歸り立寄挨拶。但如來寺・玉泉寺は虎之間之方を後にし、御勝手御廊下之方を上にして列居也。勝興寺等兩人は御勝手御廊下之方を後にして列居。御禮之列は如來寺・玉泉寺引離れ勝興寺之處、右之節勝興寺へ先に挨拶。筆頭に甲州也。其次土佐守・伊豫守・豊後守・求馬・

内膳也。其次御家老中も被罷出、見習彈番に不被罷出先例也。

一、御禮相濟、四つ時頃退出。

六月十四日。前田齊泰復入國の賀を受く。

〔官私隨筆〕

六月十四日

一、今朝五時前登城。

一、今日は正月十五日御禮之寺庵也。其内國泰寺へ御大廣間と虎之間境御廊下に而逢候也。如昨日妙成寺は逢不申分に候へども、入院初而に付而同所に逢候事。

一、御禮相濟、追付御居間書院へ御出、甲斐守・豐後守・求馬・內膳一切被召出、其次伊豫守罷出御禮仕、御敷居之內へ入候處、御自分無事と御意。益御機嫌能被遊御座恐悅之至奉存旨申上候之所へ、御表小將御廣蓋持參指置候上、今度於江戶御拜領之品被下候旨御意。御廣蓋頂戴之上、御拜領之品御取分拜領被仰付難有仕合奉存旨申上候。御表小將御廣蓋引候上退去。其次磐松・彈番一切、龍之助一切、其次御家老中等被召出。

一、各列座於松之間二之間、右初而拜領之御禮申上之。御取次有澤才右衛門。

一、四時過退出。

六月十六日。前田齊泰復入國の賀を受く。

〔諸事覺書〕

六月十六日

一、今日御禮人有之候に付、各五時迄に出席。

一、五時過列立宜段申上、追付御出、御先立市三郎。御大廣間御上段に御着座、御側御用人を初同頭並迄御禮被爲請、相濟被爲入。御先立同前。

一、同半時過重而列立宜段申上、追付御出、御先立同前。矢天井之間に而座付之御禮被爲請。夫より御大廣間御下段へ御着座、中奥組より新組迄御禮被爲請、相濟被爲入。御先立同前。披露之御奏者番等長袴着用也。

六月十六日。前田齊廣の病異狀なし。

〔官私隨筆〕

六月十六日

一、中將樣御樣子、求馬殿方へ尋遣候處、此間は段々御宜方に被爲在、十四日御快寢。されども御痔疾御痛に而曉方御目覺被遊候へども、格別之御痛に而も無之。其節素麪被召上、少々充兩度御替り、又一度は少御盛方も多く、是又被召上。其後又御休、十五日朝御目覺、隨

分御宜方に被爲在候由。御飯は昨日四十目餘被召上候由。今日之所九時頃にも候哉、丸山了悅診相濟、二御丸へ罷出、御惣躰昨日と御同樣、今朝御飯三十一匁五分計被召上候。此間半夏瀉心湯指上置候へども、長くは指上申間敷と申上置候故、今朝江間篁齋初御僉議之上、大蓮甆散に御轉方被仰付候。昨日朝之內は御宜方に被爲在候へども、暑氣强き故にも候哉、夕方より夜中へかけ御氣重に被思召、召上り方も夕方は少く被爲在候。御痔も少御痛被遊候へども、格別成御樣子には不被爲在、御餘熱御解し被遊候迄は、暫御同樣に可被爲在哉と申聞候由、被申越候。

六月十八日。前田齊泰復入國の賀を受く。

〔諸事覺書〕

六月十八日

一、今日御禮人有之に付、年寄中等五時迄に出席。

一、五半時御表列立宜段申上、追付御出、御先立市三郞。御奧書院江御着座。辻市右衞門儀御用番誘引御使歸之御目見、年寄中等伺公。例之通罷出相濟。夫より御小書院へ御出、前田內記御入國之御禮相濟、御側御用人之せがれ一人御禮相濟。夫より御大廣間御下段へ御着座、十六日當番之御側御用人を初、新組迄御禮被爲請、相濟被爲入。

一、同刻過重而列立宜段申上、追付御出、御先立同前。御小書院江御着座、前田伊勢守名代之使者大嶋新左衛門御禮相濟。夫より御大廣間御下段へ御着座、小松・魚津等遠所在住之平士、四日不罷出人々、十日相殘候遠所附與力御禮被爲請、被爲入候事。

六月十八日。前田齊廣の女壽々姫の病麻疹と決定す。

〔宮私隨筆〕

六月十九日

一、壽々姫樣御麻疹昨夕御治定に付、御機嫌伺之儀是又今日御用番より被申越候付、紙面を以申上候。

六月十九日。前田齊廣一番酒湯に浴す。

〔宮私隨筆〕

六月十九日

一、今日中將樣一番御湯被爲引候に付、恐悦罷出候儀、昨日御用番より被申越候之處、痛邪不宜難罷出候に付、以紙面申上候。

一、中將樣御樣子、今日も求馬殿方へ尋遣候處、先此間御同樣、昨日は召上り方七十目餘、今朝は少々被召上候。御通じ方も兩三度御出之旨。著さも強く候故、朝之内は御宜方、晝後は左程に

痛邪は奧村助右衛門

不被爲入旨、御痔疾は御宜方之由。只今に而は御案事申上候儀は無之と被存候旨被申越候。

文政四年二月十四日及四月參照

六月廿三日。前田齊廣の病異狀なし。

〔官私隨筆〕

六月廿三日

一、中將樣御樣子、一兩日不御宜樣に承候付、今日求馬殿方へ尋遣候處、此間御樣子御十分に不御宜、御食少々も不被召上、山の芋少々被召上候處、昨日夕方御膳十四匁計、薯蕷四十目計被召上、今朝之御樣子大に御宜、御膳も廿七匁計被召上、御兩便も程能御通、御藥は加減、順氣和中湯に御轉方、丸山了悅差上候旨被申越。

六月。町會所の銀子を借用したる諸士は公用以外從來外出を遠慮せしめられたる法を撤去す。

〔御觸拔書〕

付札、定番頭江

町會所仕送之人々、御用之外外出遠慮可仕旨等、先達而被仰渡置候得共、以來外出指解可申旨被仰出候。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣一統可被申談候事。

甲申六月

六月。町方の者の川殺生を行ふを禁ず。

〔國事雜抄〕

町方之內渡世にても無之者共、近く川殺生等に罷越候族數多有之躰相聞え候。元來町家之儀、右樣之業を慰にいたし候譯にては無之筈之處、其辨別も不致儀不心得之事に候。ヶ樣之品致增長候ては、畢竟家職に怠る基に候條、一統心得違不致樣、末々迄不相洩急度可申渡置候事。

右之趣夫々可被申渡候、以上。

申六月

七月朔日。前田齊廣の病異狀なし。

〔官私隨筆〕

七月朔日

御樣子相尋候處、御同篇之内惡敷方には不被爲入。此間御通方不御宜之處、昨日は三合餘御通じ、御大便も昨朝御快通、御飯六十目餘被召上、其外くしこ・山之いも幷饅頭も被召上、彼是百目計にも相成候由。昨日より御醫者も篁齋へ被仰付、御藥大蓮甍散指上候由。

七月二日。幕府本日より壹朱判の通用を令す。

〔御觸留拔書〕

大目附ゟ

水野出羽守殿御渡候御書附寫壹通相達候間、被得其意、答之儀織田信濃守方ゟ可被申聞候、以上。

七月朔日　　大目附

御名内留守居中

此度世上通用之ため吹立被仰付候壹朱判之儀、七月二日より可致通用候。尤先達而相觸候通、小判・貳歩判・壹歩判・貳朱等取交無差別取引爲致候條、通用指滯申間敷候事。

一、壹朱判通用之ため、江戸・京・大坂其外在々に而是迄吹直金銀引替御用勤居候者共ゟ申付、引替方爲取計候間、壹朱判望之者は右引替御用勤居候者共之内ゟ申込、古金又者吹直金貳歩判・貳朱判を以勝手次第引替、遠國先々迄も通用方指支無之樣取計可申事。

一、壹朱判兩替に付切賃之儀、貳歩判・壹歩判・貳朱同樣相心得取遣可致事。

右之趣可被相觸候、以上。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

七月二日より一朱の歩判金初而通用之儀公儀觸出、世上通用方便利之品なり。

七月五日。前田齊廣の病狀佳ならざるを以て老臣等竹澤御殿に奉伺す。

〔官私隨筆〕

七月五日

一、中將樣御容躰いまだ爾々不被遊に付、今日竹澤御殿へ罷出候樣、昨日御用番より以紙面被申越候付、五半時過罷出、神戶藏人に御樣子相尋候處、此間は又々不御宜、一昨日迄薯蕷杯被召上候處、昨日は夕方羨返し御飯之上澄に砂糖を入、八分目許被召上候迄に而、今朝に至いまだ何等も不被召上、御通じは昨日三合餘、今朝八勺御通被遊候。御惣躰御疲勞之御樣子に而、事々御物忘之御樣子も被爲在候。昨日求馬手醫師津田隨分齋、其外土佐守・彈番手醫師伺も被仰付候。御醫師大方同案、補劑を指上申度旨申聞候者多有之。依而昨日より春澤湯單𠓿三分充丸山了悅調上仕候。今朝之所全昨日御同樣之由、卽御機嫌伺候御序に可申上旨也。

〔官私隨筆〕

七月六日

一、今朝五半時過竹澤御殿へ罷出候處、甲斐守殿・内膳殿被罷出居、大地縫殿左衛門呼寄、御樣子被尋居候に付、一集に承候處、先御同篇之内、昨日は一昨日と違、御熱氣强く、御氣先御張有之、御脈も高大に被爲在候付、御藥□蘇散加減大方吉侍中方同事候由。指上、先御替も不被爲在。昨日御小水二合八勺計、今朝一時に八勺計御通じ、御大用も小さきが一通御通じ被遊候由。いづれも罷出居候内、さゝげの實御猪口に八分目計被召上候由也。則以同人相伺御機嫌。

七月六日。是日以後前田齊廣京醫竹中文輔をして病を診せしむ。

〔官私隨筆〕

七月七日

一、退出より各直に竹澤御殿へ罷出。

但、京都町醫師竹中文輔被爲召、昨日到着、卽夜前拜診、只今も罷出候躰、いつも各之溜候御間に居候也。依而役者溜に各之溜假に出來、其所に何も罷在也。

一、昨日以來先御同篇、昨日晝後さん餅三被召上候由。昨日之御通じ一合八勺、今朝晝頃迄に兩度に壹合程御通じ、奥州干飯御茶碗に八分目計被召上候由。昨夕より御乾燥被遊、水樣之物御吐被遊御儀も有之旨。夜前文輔相伺、混雜成御症、いづれにも不輕御儀と奉存由。此

上何とぞ御餘症も御發し可被遊樣に相伺候。御藥は生姜瀉心湯に而も可上之哉之由申上候。則今日相伺、差而御替も不被遊候。醒熱治水之御藥、越脾湯・紫雪御兼用に指上可然候哉。是以全是に而可御宜と申儀は難申上候へども、先右之通奉存由。右に付而、御療養方之儀いまだ御治定無之內、各退出。

〔官私隨筆〕

七月八日

一、昨夕文輔相伺、御同樣之內御脈狀御穩に而、御宜敷奉伺旨申上候由。昨夕干飯又六分目計被召上候由。夫より今朝迄御食事は無之。御通じは二合二勺計之由。今朝七勺程御通じ被爲在候旨也。昨日より文輔御藥被召上、御本法越脾湯一帖半計御用、紫雪も被召上候由。然處夜前より御乾燥も有之、水を御好被遊、紫雪被召上候節抔、冷水を御茶碗に二度被召上候由。夜前より御惣躰御陽脫之氣味之樣に何も奉見上候處、今夕文輔伺、昨夕之通指而御替も不被爲在候。御陽脫之樣に被爲見候は、則御本症之顯れ申所に而、御病躰御相應之儀と奉存候。此儘に而御藥よく被召上候而、日を御立て被遊候はゞ、自然に御藥効行屆申所へ參可申段申候由。

〔官私隨筆〕

七月九日

一、昨夕方文輔相伺、御脈狀御浮弱、御惣躰御疲勞恐入申御樣子、只今にては御難治之御症と相伺申候。御飲水等御胸膈之間に御滯留被遊、一切御下行無之、御通じも無之故、沈香降氣湯・豁胸湯合方に仕、夜前より指上候處、夜半に至御胸膈之邊御煩熱を御覺被遊御樣子故、紫雪を指上候由。昨日御通じは一向不被爲在、御藥夜前御匕に而少々充、今朝迄に右之御藥一帖半計も被召上候哉と之事なり。然處曉天煮返御飯七匙計被召上、六時頃に至小豆飯煮返御粥三十目八分計被召上、御通じ九勺五才被爲在候由。其後少御穩に被爲在、今朝文輔相伺、先昨夕御同樣に被爲在候。御通じ有之、御粥も被召上候段先奉恐悅候。乍然御脈狀は昨夕より不御宜方之由申候旨也。

七月十日。前田齊廣卒去す。

〔官私隨筆〕

七月十日

一、御容躰昨夕九半過葛素麪四十目計被召上、其節迄はさして御替も不被爲在候處、其以後御煩悶被遊、御床歸抔每度被遊、不御宜、文輔も相伺恐入居申候旨。夜中に至彌御煩悶强、御藥も不被召上、御通じも無之。今曉に至御困睡之樣に被爲在、水を指上被召上候以後、少

御復陽之御樣子、御藥も通。脈還散調合有之候へども不被召上、次第に御疲勞被爲在候旨也。

一、九半時過、土州より以紙面、中將樣强御指引有之候條、早速可罷出之旨被申越、追付罷出御樣子承候處、段々御指迫り、實は四半時過御逝去之由。

〔横山氏日記〕

七月十日

一、今朝出席前各竹澤御殿罷出、中將樣相伺御機嫌候處、夜前より餘程御指引も被爲在候御樣子に付、各暫相詰罷在、四半時頃內藏助・織江之外致出席候事。

右に付今日より年寄中幷御家老中兩人宛、竹澤御殿に相詰可申旨、右御殿において月番甲斐守演述有之に付、左之通替合相詰候事。

但、市三郎儀詰之儀如何有之哉と、表方え及示談候處、兼役方に而時々罷出候儀付、分而詰割え加り候には及申間敷旨演述之事。

四時より八時迄　　內藏助　織江

八時より暮合迄　　內記　庄兵衛

暮合より夜九時迄　　織江　內藏助

曇海とあるは希運曇開

夜九時より六半時迄　　藏人内記

一、右に付執筆幷坊主も爲詰候事。

〔三守御譜〕

今公十日朝六つ時過急御供揃にて竹澤御殿へ被爲入。然所公四つ時過薨ぜられ、四半時過御戻り被遊。御前樣へ公御病躰、尤時々早飛脚を以被仰進、御前樣より此時江戸御抱御醫師吉田長淑被遣候處、於道中死す。實は御逝去被遊候御事も申上候樣、指急御使御表小將鈴木清左衞門へ被仰渡、早打御使御省略中に付不被仰付候へ共、早打同樣と被仰渡候て、御渡方早打同樣。夜五半時發足。

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

肥前守樣御滯之處、段々御重症に被爲至、追々御指重、終に七月十日御逝去なり。御都合に付同十二日御逝去之儀に御發なり。御內實は十日なり。依而御領國中遠慮、浦々獵魚止、御國中ひつそり、武士屋敷夜廻り・町方自身番等嚴重なり。同月二十八日丑の上刻竹澤御殿御出棺天德院江御移り、於同寺御葬禮之式有之なり。御法號は金龍院殿正四位下前左近衞權中將兼肥前守文古雲遊大居士と奉申なり。御年四十三歲なり。表向は御四十五なり。御治國は二十一ヶ年なり。二十八日導師は天德院十八世曇海和尚なり。導師畢て野田山に御收なり。右御逝去遙か先より市左衞門と云通語流行、世之人何ぞ之折には市左衞門でこはれたと云。

譬へば茶碗を割せばそりや市左衛門にした、或は物を教るに呑込之悪しき人をばでかい市左衛門、又は雨が降れば今日は市左衛門氣色抔と無謂申はやせしが、金龍院様御墓地御納り之山は野田村市左衛門之持山にて、山之上切平均御墓地と相成由。されば天人を以て云はしむるか。又當春昔より之御吉例之萬歳、御家中一統舞ざる事も前評かと歎息する人有之由承るなり。

前田齊廣行狀

〔金龍公御親筆寫〕

大將常の心持の事

一、大將は天命をしり、むくいをしり、人をしる事肝要なり。天命をしれば、國家長久にして萬民よろこびしたがふ。むくいをしれば、子孫はんじやうにして一身安樂なり。人をしれば、物にあやまちなく後悔すくなし。

一、常に軍の道をわすれず、はかりごとにおこたる事なかれ。

一、したしきにまどひ、佞奸多欲のせいどうのさゝはりになるべきものを、いましめざる事なかれ。

一、少のあしきを以て、大なる用に立ものをすつる事なかれ。

事にも本のまゝ

一、學文におこたる事なかれ。行にみだるゝ事なかれ。

一、上下を遠くして、諸事家老に任せて、みづからしらざる事はあしきなり。

一、みづから道にたがはざれば、家の風もしぜんに能なるもの也。吟味なくして賞罰をくはふる事なかれ。

一、我身のおごりをやめて、郎等の奢をいましむべし。

一、罰は十、賞十二三におこなへ。罰すべきをゆるすべからず。賞すべきを時をうつすべからず。賞も過ぬれば、いやしきものはちうせつにおこたり、おごりいづるものなり。

一、訴はかたことを誠と思はざれ。又そらごとゝ思はざれ。理の中の非と、非の中の理をこまかに吟味して、家老・奉行のひはんを聞、日數を以てさいきよすべし。但戰の時の、十死一生の謀をおほくの人にもらし、長せんぎして圖をはづすべからず。

一、人のあしき事を、名をあらはし言ふべからず。人はほめそしるをも誠とおもはず、又いつはりと思はず、我眼力を以て人の詞と見合べし。人の詞をまゝにすれば、議と虚とおほきもの也。事にもたゝぬ他人の非をかたる事なかれ。

一、座敷の興とかうし、いぎをみだり、詞おほに、高ぞうたんをこのまざれ。

一、一人たのしまんとて、あまたの人をなやます事なかれ。

一、家居に善つくし美つくし、食に珍物をもとめ、美女をあいし、大酒をこのむべからず。
一、いかつて罰をおこなふ時はすぐる事あり。內心にいかりあらば罰をのぶべし。
一、わたくしのために新法を置ざれ。法度多ければやぶるゝもの也。はうによこしまあれば、智惠あるものはあざけり、國中みだりがはしく、かまびすしきものなり。法度破れぬれば、主の威かろくなるものなり。後に大なるわざはひ出來るもの也。
一、國のために德なきうつわものを用る事なかれ。小德あるを大に用る事なかれ。むやくの事にたからをちらす事なかれ。又むさぼる事なかれ。
一、諸奉行にせん人はかならずよく吟味すべし。能人にあらずして、佞なる奸なる私欲なる邪欲なるものつかさにあれば、一切は惡事出來て萬民くるしみ、國家ほろぶるものなり。
右大將の常の心持に入事のよし、古來より申ならはし候間、あらまし書付候也。

〔金龍院樣被仰出之留〕

御敎諭之御書物、猩鵡卑言与御名付被遊御示し之趣、大概左之通り。
一、權現樣御治世以來二百餘年相立太平に而、諸士之風儀衰、勇氣義氣も失はて、孟子に所謂今國家間暇及此時般樂怠敖是自求禍也とは、只今之時と被思召候。壽を守る士は病に先達而療す。今衰世を御救無御座而は不相成時節に候。士風次第に懦弱に相成、御國家之爲に力

を盡し、義に臨ては死を以奉報有志之士出來不申、是は全く時世おし移り、風流華奢に流候費と被思召候。松雲院樣御時代は戰國を去事不遠、諸士餘り武骨過候に付、寶永・元祿之頃畫師など被召、茶之會なども被仰付、少し風流に相成候樣被仰付候哉と被思召候。然所享保之末頃より段々風流に相成、只今に而は風流之費相懸り候。依之以前之如く武骨に相返り候樣有之度、男子は憤發して文武を相勵み、勇氣義氣を勵し可申、女子は木綿機に而も織り、其暇には藁をも打、わらんず・馬の沓をも作り、且小身之妻女などは少し武藝をも心がけ、夫之大事出來候はゞ助をも可致事に候。女子はわらんず作り候樣被仰出候得者、御譬喩之御事と承り候族も在之、一向左樣に而は無之、實に可仕事に候。御譬喩などゝ心付申より、憤發して勇氣を起し申事も出來不申候。是等之儀は泰山をわきばさんで北海をこゆるの類に非ず、長者之爲に枝を折よりも易き事に候間、今日より心懸行可申。右之ごとく士風御改被遊候節は、琴・三味線・高構・萬歳・かけ之諸勝負・歌道、是等誠に小事に候得共、義氣勇氣を憤發する妨に相成候に付、先達而之通り被仰出候。從今互に赤心を打出し、是非を論じ志を研究可仕候。

○先達而無役平士年若なる者は、岩乘之爲に殺生いたし候事も不差支段被仰出候。是は譬ば好言令色鮮矣仁と聖人の仰られし如くなり。鮮仁とは無仁と言程之處、鮮と仰あり。夫は註

に而も可見候。如其少しくつろぎ被付被仰出候御事に候。

○凡人より禽獸蟲魚に至る迄、其天年を全くするは天之心に候得者、慰に殺可申儀背天理候。しかし父母孝之爲に殺申は如何可有之哉。卑賤之者求得申力無之者は、親之たべ度と申節殺可然哉。又は夫をゆるし候へば、夫を名にして殺生仕者出來候而は御趣意に相違候間、矢張り堅く戒置可申哉与申上仁有之。御上にも不益之殺生を御戒之儀、已に御鷹も居申事、是は禮の爲其儘被成置候事。苟も天地之間に生候者は人間より禽獸鳥魚も同様には候得共、小を以大に替申儀に候間、夫は渠に任置可然旨。且男子は小鳥抔かひ、或は諷などうたひ慰も候得共、女子は琴・三味線相止候而は、是にかへ申慰は如何可有之哉。機抔織候儀は皆女子の手ずさみに而、男子の文武を心懸、それのみ樂に仕候と同様之譯に而、男子も誠に英明之士になくてはこゝには難至、常人に而は先少々慰に而も仕、夫にて邪念起り不申様相心得申方宜様に候段申上候。是も小鳥或は諷ひは、慰之爲に有之に而は無之、慰にいたし候而も無害品に候と心得可申。女子と而も慰者隨分可致、男子に而も細工ものなぐさみにいたし申者も可有之候得者、女子とても如其に候。小鳥に而も何に而も慰に可致。已に以前政所様に御能被遊、御大奥に而打方等も盡くそろひ申居候儀も有之候間、害なき儀は何に而も慰に可仕旨。

○勝負は爭之本に而、幼少より男子は象戯等、女子は雙六或は歌がるたなど、皆勝負を是と

し、己の手前に利し申事に而不宜事。

○歌道之儀先達而被仰出は無之候得共、頭分被爲召候內、私儀は琴・三味線は一圓相止め、家之者ゟは萬葉集爲讀候と申上者在之。其節被仰出候は、小身之者雲之上人の業を爲習候儀は一向不可然候。歌を讀候得者やわらかなるものに候得者、はや戀の歌も讀度相成、夫より色情に志淫亂に可相成、男女の媒に相成候は歌に候。古今歌より色情を通候ためしまゝ多く、御前にも百萬石之士と被思召候に付、御廣敷向にすら歌道は爲御學無之、まして御家中之家內に可弄事は心得違の至りに被思召候。

○後水尾帝は明君にわたられ給しに、攝家等に宜人品出來不申儀は歌道盛なる故に候條、向後歌道と源氏物語禁止可致旨勅定也。

○此琴・三味線・高構・かけの諸勝負・歌道は小事に候得共、たとへば大病人に藥劑相用候節、毒だち爲致候ごとくに而、是等仕候而者人情之費直り兼候に付如斯被仰出候。

○是迄は同役之外は相かまひ不申、組々も一組々々に申談候得共、向後他役等之差別無之、心附之趣は申合論可申候。且是まで下之事は上ゟうつくしく申なし、上下の言路相塞り、人撰いたし候而も年功に泥懸り、心易きに泥かゝり、實躰篤實に泥かゝり、ケ樣之處に而人撰いたし候に付、全く御用に相立人撰擧不仕、ケ樣之處辨別可仕。君を元首と言、臣を股肱と

言、君臣は一體之如く、上下相和不申而は相成不申事に候。然處下の事美敷申上、下之情上𛀁通じ不申而は、是下より言路を塞ぎ候と申者。又上より嚴敷御咎被仰付候而は、下より申上候儀相泥み申處𛀁至り申候。是は上より言路を塞ぎ申と申者に候。兎角上下言路塞り候而は不相成事に候。上下同は榮、上下離は亡と有之。元來君臣懸隔に相成、夫より不屆も出來仕候と被思召候。其譯は御近習之人々子弟に至るまで、是まで格別之不埒は出來不申。是は御上に近きゆゑ恐れ愼申ゆゑと被思召候。御近習・外樣と申は治世之名目に而、亂世には其差別も無之、御起臥も共に被遊候御事。依而御上には御近習・外樣之御差別無之、みな御近習と被思召候。此處能く〳〵存付可申旨。且綿衣等之儀も先達而被仰出候通りに候。

○服之儀、中には麁品は損じやすくして却て不宜、上品は甚つよく候に付省略に相成候抔と申族も在之躰。一向左樣之省略之所に而は無之、其元を存付可申事。

是迄惰弱に生立候人々之事に候ゆゑ、五十以上は絹服御免被成候。且非帛不煖と申事も候得ば右之通り被仰出候。

六十にして帛をきると候得共、惰弱に生立候者共ゆゑ五十より御免之事。

大夫以上は絹より上之服も着用可致儀に候。下として上之服など着用候儀は是を僭上と言、上として下の服など着用等いたし候は是を偪下と言。偪下も僭上も同事にて不可なる事に候

得共、大夫以上は折には綿衣類之麁服いたし、下にしめし申儀は可然事に候。然を下より大夫以上絹服着用いたし候得者、はやゆるみ申様に相心得候て、下々も服用之事に相成候。是は是まで大夫等器量無之、綿服に而も着て見せ申が一色之事に相成候に付、早ゆるみ候と被思召。たとへば諸大夫之人々白むく着用候而も、誰有て着用仕者も無之。是は天下之御定ゆゑ、着用仕度と申心も起り不申候。絹服之儀も如斯相心得申候得者、着用仕度事者無之事に候。

○人持抔は幼少より家來に貴まれ成立候に付、自ら緩怠に相成、家來迄も其風押移り、式臺取次方など無禮之儀等出來、或は家格などゝ申立候族有之躰粗被聞召候。ケ樣之儀常々申付、無禮之儀等出來不申樣可相心得。己之手前に而禮義を相守り、其程を存付罷在候得者、人之無禮緩怠は目も付不申事に候。

○家來ゑ堅く申付置候ても、自分方ゑ參り候信友に傘而賴置、式臺向之取次方少しに而も無禮之儀在之候はゞ、申聞候樣申入置可然事。

○無益之參會は前々被仰出も有之候得共、身分之儀抔も申合、有益之參會は不苦事に候。時刻も移り候はゞ、常飯を以飢をふせがせ候は尤に候。態々とゝのへ候儀は不可然事に候。只實意に有之度事。

年來は年ごろなるべし

○北條時賴・平宣時之事。

○到來物之事。

○學問も聖賢之書物讀候が學問に而も無之。當時年來にも相成候族は、本朝に而以前有志之士之調置候假名書本に而も心懸讀、身に行ひ候得ば志も立可申。老子之大道すたれて仁義興ると申も又其理なきにも無之、惡事をいたし候にも仁義をかりて行候事に相成候得ば可尊、又可然は學問と被思召候。ヶ樣之處能々辨別いたし學問いたし、わき路ゑ不參樣可心得事肝要に候。易學などは聖人すらかたんじられ候。まして當時之常人學び占を覺、或は失物など占、夫より吉凶等も占ひ筮を弄び、或は佛學などに信起り、或は法華坊主など近付、不可然儀なども出來候所ゑも可至。當時出家多分智識は無之、皆利慾而已を心とし、或は女などに打込、己が利を貪る事を心懸罷在候間、ヶ樣之處も相辨へ居可申。

江戸表相詰候御大小將被爲召候節被仰出候趣之御大意。

御大小將十六七より被仰付候得共、古役之者に手をおろし、何之やくにも相立不申、手帳を以相勤、是より上もなき物之樣に存。且其敎と申而は、上下の着用はヶ樣、着服之仕立樣はヶ樣、髮之結樣はヶ樣などゝ申事のみにて、江戸表に而御使抔相勤候節は、絹服不致而は御恥之樣に心得、其先にて如何樣之不都合之儀在之候ても、夫は御はぢとも存不申儀は如何之心底

に候や。何之やくにも立不申手帳にて教申ゆゑ、ヶ樣に文盲至極に相成候。志有之者は古手帳破却仕可然候。江戸詰中も、以前はあわびからに火を入、火入之代りに相用ひ、詰中夫に而仕舞候由。只今は家具迄も取持有之、以前此表之住居よりも事自由に相成候は、誠に奢侈之至に候。以前は陣屋之如くに在之候樣子、如其心得可申事。

〔金龍公記史料〕

公爲人穎秀勤敏。明恕而嚴肅。弱冠抱有爲之志。故及襲封求治太急。於是非與同位者献慮矣。躁進之徒欲竊一時之榮進。功利之說乘機投好。亂聽明者亦出其際。然試用之而責以實効。以故幸進者不能久其職。晚益老于世事。悟所嘗行未得其道。自更始建治安策。著一書示大綱。命曰猩鸚鄙言。乃與老臣及所擢用三老三才等。不辭霄旰之勞勵精詢治。由是一事未及有施設。一時受風臣民革觀。而其餘音流風及後者不少。但所惜者天奪之年。使有爲之志不得遂。使一時有用之才歸淪沒。噫。

〔金龍公墓誌〕

顯祖大納言。菅原朝臣高德公。十二世正裔。加越能國王。公諱齊廣。初名利厚。幼字龜萬千。泰雲公次子也。以天明壬寅七月廿八日。生於金谷殿。其母側室山脇氏也。逮國儲佐渡守齊敬公薨。寬政丙辰十一月十四日。參議太梁公養爲世子。十二月望朝謁大君。明年丁巳二月九日。

加首服於殿上。賜大君偏名。更名齊廣。從而字世功。居堂號大信。居齋號清靜。叙任正四位下左近衛權少將。稱筑前守。享和壬戌。參議公以義可讓封於少將公之夙志退隱。三月九日少將公嗣封。十一日改稱加賀守。六月十三日轉陞中將。左近衛如故。蓋皆我門地恒例也。文化丁卯十二月十八日。娶關白鷹司政熙公女。文政壬午告疾。十二月十六日退隱於城東竹澤矣。雖然。以今公之貴庚未滿志學。大君下台命俾隱公攝之。居一年有半。甲申七月十二日。薨於竹澤殿小寢焉。春秋四十有三。葬於野端山先塋之地矣。伏惟公天量韜世。才亞生知。上究敬大君。下垂仁群臣。特知人之明鑒。擧措不失宜。雖有不次超擢。善適其器。顯推赤心於人腹中。而廸溫儉愨實。又交引見衆長。虛懷博納讜論。躬親開通之。彼不至感動自得之地則不寘。而其寬簡有餘裕也。獻可者恰如坐春風中。育士之厚。雖古賢王所未聞也。外官猶然。矧近侍輩。聿不仰見微慍之色云。若夫繩以法。則斷流連盤游之奢。除鄭衛哇淫之聲。或黜苛刻利賄之猾吏姦邑長。而亨民情壅隔。或禁無故之殺忮。而恩洎禽魚。內則房惟嚴乂。無豔孌牝雞之擅權。左右愿謹。無狐媚人猫之佞倖。外則勸聖訓於學校。厲百武於講場。永闡忠孝道源。而百年來澆漓之積習。朞月掃地。於是乎。藩風復敦朴。雖有司權官。事溫柔遜讓。而不峻厓岸。人人口詩書。身節儉。崇有本之務。而卑文飾之末。今也無其一不涵化於盛德治中。可謂殆一變至於道之會。惜夫。彼蒼奈何不做萬壽於南山。一朝忽倏升遐於中途。偉三州四民號泣如失父母

焉。嗚呼人命靡常。哀矣哉。銘曰。

懿兮明辟。符德皇天。匪石匪鼎。人碑勒堅。仁蓋三州。儉悛百弊。事不轉圜。群臣服制。

功業之偉。山高水洌。

文政七年甲申秋七月　　　　　臣富田景周稽首謹拜撰

七月十一日。前田齊廣の侍醫等その危篤を齊泰に告ぐ。

〔官私隨筆〕

七月十一日

一、左之御様子書縫殿左衛門持參、依御機嫌伺之。

中將様御様躰、昨日申上候以後、孰れも時々奉診候處、只今に而は御疲勞段々御加り、最早

御指重りに被爲在候、以上。

七月十一日辰刻　　　　　江間篁齋等

〔横山氏日記〕

七月十一日

一、中將様御所勞御指重被遊候旨、只今以藤田平兵衛從加賀守様被仰出候間、追付竹澤御殿

江罷出、御機嫌相伺、夫より登城加賀守様江相伺、且御廣式江も罷出、直姫様初方々様江も

相伺、江戸表御前様・鈔姫様江も以紙面相伺候筈之旨、月番甲斐守より以紙面五時頃申來に付、藏人・織江・修理・內記追々竹澤御殿江罷出、以大地縫殿左衞門御機嫌相伺。且內藏助・庄兵衞儀竹澤御殿江詰中、右御樣子月番より申來候に付、以縫殿左衞門各一集に相伺。夫より庄兵衞之外不殘右御殿退出、直に登城、加賀守樣江以藤田平兵衞相伺御機嫌候處、追付以同人御意有之。

七月十二日。前田齊廣の喪を發す。

〔宮私隨筆〕

七月十二日

一、左之覺書六時過藏人持參之由。

中將樣御容躰、只今に至候而は最早御大切に被爲及候。

七月十二日卯刻

一、中將樣御所勞御療養不被爲叶、今朝辰下刻御逝去被遊候旨覺書、五半時前軟神戸藏人持參。

〔横山氏日記〕

七月十二日

中將樣御所勞段々御指重、最早被爲及御大切候旨、只今以藤田平兵衞被仰出候に付、追付竹澤御殿に罷出相伺御機嫌、夫より登城加賀守樣相伺御機嫌、若當病等に候者以紙面可相伺旨、御家老中・若老幷龍山、今朝六半時頃甲斐守より各通に而申來り候事。

一、中將樣御氣色不被爲叶御療養、辰下刻御逝去被遊候段、月番演述之事。

七月十二日。前田齊廣の卒去を幕府に報ずる使者金澤を發す。

〔溫敬公記史料〕

七月十二日巳牌前太公屬纊。報大漸于江戶之急使大小將澤田幸作。報薨使使番原行馬副脇田哲兀郞發。

七月十二日。前田齊廣卒せしを以て諸士及び庶民の心得を令す。

〔橫山氏日記〕

七月十二日

覺

一、今般御凶事に付而、頭分以上爲伺御機嫌、明十三日五時より可有登城候。病氣等之人々は、御川番宅に使者可申越候。且今日登城無之人々に者、演述之趣夫々向寄可有傳達候事。

一、平士は御機嫌相伺候におよび不申事。

一、御先祖樣方御忌日御寺江參詣、且又自分先祖之寺江參詣之儀も、當分指扣可申事。
一、頭分以上之人々は、此砌之儀に候間、居屋敷之大門遠慮、小門より出入、小門無之者は大門をたて寄置候而可然候。年寄中も右之通に候事。
右之趣夫々可被申談候、以上。
七月十二日　長甲斐守
御横目中
一、左之通表方に而申渡有之候由之事。
御算用場奉行江
覺
一、普請・鳴物幷高聲等遠慮之事。
一、諸殺生無用之事。
一、御家中さかやき可爲遠慮候。又者は及其儀間敷事。
一、不及申候得共、此砌之儀に候條、火之元之儀別而入念可申事。
一、浦方獵業之儀指留可申事。
右日數者追而可申聞候事。

町奉行江

覺

一、普請・鳴物幷高聲等遠慮之事。

一、諸殺生無用之事。

一、町中見世に簾おろさせ可被申候。肴商賣仕もの指留可被申候事。

右日數追而可申聞候事。

七月十三日

〔横山氏日記〕

覺

一、今般御家中普請、御三十五日過候はゞ不苦候事。

一、諸殺生・鳴物五十日過候者不苦候事。

一、御家中精進五十日たるべき事。

一、年寄中且又御近習相勤候人々月代五十日、其外は御三十五日過候はゞ月代剃可申事。

一、頭分以上之人々居屋敷之大門をたて候儀、御葬式相濟候翌日より可爲常之通候事。

七月十三日

御算用場奉行へ
浦方漁獵之儀、十二日より一七日過候はゞ爲致獵業可申事。
町奉行へ
町見世に簾おろし申儀、十二日より十日過候はゞ簾上させ可申事。
但、肴商賣之儀茂右日數相濟候はゞ爲致商賣可申事。

七月十四日。前田齊廣の法諡を發表す。

〔横山氏日記〕
七月十四日
一、中將様御法號月番へ御渡之由に而、月番より寫指越、左之通に候事。
新掩舘　金龍院殿文古雲遊大居士　尊儀

七月十八日。德川家齊老中の奉書を以て前田齊廣の病を問はしむ。

〔三守新譜〕
七月十八日老中奉書を以御尋問あり。
〔横山氏日記〕
八月十一日

一、中將樣ゟ先達而御尋之御奉書到來仕候處、御逝去後に付右御奉書御返上之御使、去廿三日此許發足罷越、彼地當三日發足今日歸着之事。

御馬廻
北川傳九郎

〔溫敬公記史料〕

八月十一日。曩大將軍問太公疾奉書至。以太公薨使還之。更請而受之。

七月十九日。前田齊泰の生母榮操院と稱す。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

七月十三日竹澤御內證樣も薙髮有て、御諱號龍操院殿慈雲月海大姉と御唱なり。然處御願有て同月十五日遊操院殿周天月海大姉と御改、再同月十九日榮操院殿文明月海大姉と御改有之。是の年御年御三十六なり。

〔官私隨筆〕

七月廿一日

一、御內證樣御儀、榮操院樣と御改被成候旨被仰出候。此段寄々可被申談候事。

申七月

七月二十日。幕府前田齊廣の病を問ふ爲使者を發し途より歸る。

〔續德川實紀〕

七月十九日、松平加賀守齊泰父致仕肥前守齊廣、その子の封地にありて病臥のよし聞し召し、使番勝田將監に命じて問はせらる。よて暇たまふ。

〔三守御譜〕

御使番勝田將監をして御肴粕漬鯛を賜ひ、御醫師橘宗仙院を被進。廿日曉江戶を發し、然所熊谷にて訃を聞歸府あり。

七月廿二日。德川家齊使者を本鄉邸に遣はして前田齊廣の卒去を弔せしむ。

〔諸事覺書〕

八月九日

一、前月廿二日於江戶表、上使御奏者番土岐山城守殿を以、御香奠白銀五十枚御拜領有之由申來。

〔續德川實紀〕

七月廿二日、松平肥前守齊廣卒せしかば、松平宮内少輔上使として、その子加賀守齊泰のもとに、香銀五十枚をおくらせらる。

使者前書と異なり恐らくは非

七月廿八日。前田齊廣の葬儀を天徳院に行ふ。

〔横山氏日記〕

七月十六日

一、左之通御葬式方より演述之事。

覺

一、今般御葬送之刻竹澤御殿より天德院、夫より野田迄御供之人々、且又右之節曁御中陰御法事之節御寺江罷越候役人・御番人等御步並以上、其外都而上下着用之人々、白帷子・石餠無地淺黃布上下着用之事。

但、御寺江相詰候頭分之面々は長袴着用。

一、御法事之內拜禮罷出候面々、頭分以上白帷子・長袴、平士は白帷子・半上下之事。

但、上下は何色に而茂可爲勝手次第事。

一、御三十五日・御四十九日・御百ヶ日御法事之刻は、染帷子・布上下之事。

但、何色に而茂勝手次第之事。

七月十六日　　　　　　　　　　　前田土佐守

御横目中

〔富田氏心覺〕

七月廿八日御葬式御作法

一、加賀守樣竹澤御殿江御出被遊、夫より天德院江被爲入候に付、附人參候はゞ寺社奉行一人山門江罷出る。

但、喪服之儘なり。

一、追付竹澤御殿御出棺之御樣子承合、大鐘突打上る。

一、御門御出被遊候を承又大鐘突、都合三度打上。（跡は小鐘を突打上る。）數百八に而僧中上殿仕候事。

一、波着寺前江被爲入候旨附人參候上、僧拾人山門江御迎に罷出。

但、此時御法事奉行江追付御着棺之御樣子申上る。諸役人何茂繪圖之通罷出る。惣門內一部也。

一、御棺內陣江被爲入候節、寺社奉行左之廻廊通八尺之間伺公所江罷出る。

但、左之廻廊は御前御往來に候得共、御縮には不相成候故往來は不指支候旨、御橫目申聞候事。御棺之後ゟ通候儀茂不指支候段御入有之事。

一、御棺御居り之上、座見より式相始可申哉之旨寺社奉行御用番之者に申聞候に付、其段御法事奉行に相達候得者、被相伺候上式相初可申段被仰出候段、御法事奉行より被申聞候得者、其段座見に申談候事。

一、內陣之式相濟候上、座見より寺社奉行に申聞候得者、其段御法事奉行に相達申上る。

一、追付御巡堂之式相初候儀は、御横目より御巡堂御役人不指支段座見に申聞有之候得者、其處に而御巡堂式相初可申哉之旨座見より寺社奉行に申聞候に付、其段御法事奉行に相達、被相伺候上座見に申達候事。

一、御巡堂相濟、御火屋に被爲入式相濟候上、御燒香宜敷時分役者より寺社奉行に申聞候得者、其段御法事奉行に相達可申事。

一、御代香等夫々相濟候上、方式相濟候段座見より寺社奉行に申聞候得者、其段御法事奉行に可申達候事。

一、加賀守樣天德院御戾之節、寺社奉行山門に罷出る。

一、夫より桃雲寺に被爲入候に付、多賀豫一右衞門御先に罷越、例之通御待請申上る。

但、染帷子・常半上下。

一、追付天德院御出棺。惣門外に御見送に罷出候者は兩刀之事。

一、桃雲寺江被爲入候內、御棺祇陀寺邊江被爲入候附人參候節、御廟假御泊迄江被爲入。
　但、此所何茂溜之前江罷出致蹲踞候事。何茂一刀也。
一、御廟江御棺被爲入候節土方等繪圖之通。
一、野田御火屋に御棺奉置候上、式相初可申哉之旨天德院役者より寺社奉行江申聞、御法事奉行江相達、被仰出之上其段役者江申達、方丈幷桃雲寺諷經相濟、其上に而御香爐宜敷旨役者より寺社奉行江申聞、其段御法事奉行江可相達候事。
一、御棺御穴江御納り之旨、御葬式御奉行見屆之上、御香爐用意之儀被仰聞候得者、其段申談御香爐爲飾付、御火宜敷旨役者より寺社奉行江申聞次第、御法事奉行江相達可申事。
一、野田御廟前御法式相濟候段、役者より寺社奉行江申聞次第、御法事奉行江相達候事。

〔横山氏日記〕

七月廿八日
一、金龍院樣今晚八時過竹澤御殿御出棺、七半時頃天德院御着棺、夫々式相濟、五半時御寺御出棺、野田山江八半時御移之事。
一、御出棺之節、御居間より御表通、表御式臺迄、大地縫殿左衛門等萬事取捌。右人々初御側勤之面々御式臺迄御見送仕。御葬式奉行土佐守儀は表御式臺鏡板に伺公、御見立仕。御名

代甲斐守儀者御出棺之御様子承り、御先ゟ立場迄罷出、御供求馬儀右同様立場迄罷出候事。

一、天德院ゟ御着棺之節、年寄中磐松・彈番・九郎左衞門、御家老中は惣門之內、右之方ゟ御迎に罷出、御棺被爲入候而、御法事御奉行土佐守御先立仕、御棺內陣御棺臺に被爲入、御法事奉行幷外年寄中等式臺之上左之方に伺公、寺社奉行は其後ろ之方に列居之事。

一、加賀守樣夜前九つ時之御供揃に而、竹澤御殿御出棺後七半時、昨日被仰出候通、直に奥の口より御出、小立野石引町通御跡より被爲入、天德院山門下緣取敷有之所に而御下乘。山門下ゟ市三郎罷出御先立、左之廻廊より被爲入候節、年寄中等階上之內より左之方、階之方上座に各列居、御裝束之間ゟ被爲入。

但、御先立之儀文化七年太梁院樣御葬式之節は、階上より若年寄相勤候。前々も右之通に而、山門下より右階上までは御近習頭相勤候筈に候。然處本多勘解由在役之時分以後、山門下より若年寄御先立いたし候樣、勘解由ゟ御直に御意被遊、其通相成候に付、今般市三郎儀も本之通に候。且右之通山門下より御先立いたし候儀、前日御葬式方へも一往申達置候事。

一、內陣に而式相濟、龕前堂御通り、夫より御巡道之節、御前御座之間御簾之所より御出被遊、御天蓋之跡に被爲入、御火屋之前迄暫御供被遊、夫より御巡道之間は、假御溜之前に御蹲踞被遊、御棺御火屋へ御移之上に而、假御溜へ被爲入、式相濟候而御法事奉行より御案內

申上、御焼香相濟、衆寮之方廻廊より御入被遊、御裝束之間へ被爲入。

但、右御籠之所より御出之節、市三郎御先立仕、玄關階上に扣、夫より改田主馬御先立、市三郎儀も御供仕罷出、御刀持等迄一集に御後ろに相扣罷在、式相濟候少前見計退き、廻廊より入候而御上り口に扣罷在、御入之節御先立仕、御裝束之間へ被爲入、御下向之節も御先立同樣之事。

一、夫より御直垂等御直被遊、御下向之節も最前之廻廊より山門御出、桃雲寺迄御先へ被爲入候事。

但、犀川上御參詣坂より御先に御出被遊候事。

一、市三郎儀御寺より桃雲寺へ御先へ拔罷越候事。

但、布衣着用之事。

一、御棺桃雲寺門前御通之節、御前門外迄御出被遊、御棺暫御居り、其處に而御焼香被遊候。右之節御座之間より階下迄、市三郎御先立仕、夫より門外迄、御近習頭有澤才右衛門相勤候事。

一、御前御登山不被遊候に付、御廟に而御名代甲斐守相勤候。且又御廟迄藤田平兵衛も被遣置、御棺御納、御石蓋茂相濟候上、平兵衛より御案内申上、九時頃御戻り被遊候事。

〔溫敬公記史料〕

七月廿一日定葬送日爲廿八日。丑刻出棺。又中陰爲八月四日至六日。三十五日爲十四日。四十九日爲廿一日。百ヶ日爲廿八日。

八月二日。德川家齊及び家慶の慰問狀を披露す。

〔横山氏日記〕

八月二日

一、御奉書兩通就到來、今日於表方席、年寄中・御家老中拜見相濟、若年寄中表方席江被呼立拜見。右御禮月番引請被申上候に付、各月番江申述候事。

青山下野守

水野出羽守

大久保加賀守

松平和泉守

松平右京大夫

折懸包之上

松平加賀守殿

同氏肥前守卒去之段及上聞候處、可爲愁傷与被思召候。上に茂御殘念被思召候。此由可申達旨、依御意如此に候、恐々謹言。

松平右京大夫輝延　判
松平和泉守乘寛　判
大久保加賀守忠眞　判
水野出羽守忠成　判
青山下野守忠裕　判

七月廿二日

松平加賀守殿

酒井若狹守
松平能登守

折懸包之上

松平加賀守殿

同氏肥前守卒去之段及言上候處、可爲愁傷与被思召候。上に茂御殘念被思召候。此由可相達旨、依御諚如此候、恐々謹言。

松平能登守乘保　判
酒井若狹守忠進　判

七月二十二日

松平加賀守殿

八月四日。本日より天德院に於いて前田齊廣の中陰法會を執行す。

〔横山氏日記〕

八月四日

一、今日より二夜三日、於天德院金龍院樣御中陰御法事御執行に付、月番又兵衞、御家老主附庄兵衞、若年寄市三郎之外、何茂今曉七半時より御寺江相詰候事。

一、右御法事に付、御前四時御供揃、喪之御直垂に而四半時御參詣、九半時前御歸城被遊候事。

〔金龍公記史料〕

八月四日至六日。於天德院修中陰法事。造靈屋於天德院内。稱聖陽殿。安位牌於此。置畫像。畫像則細工者村田良助所寫云。

〔溫敬公記史料〕

八月四日至六日二夜三日。修中陰法事於天德院。毎日參詣讀經僧三百五十人。

八月七日。前田齊廣の江戸・京より召したる能役者に暇を與ふ。

〔諸事覺書〕

八月七日

一、金龍院樣爲御用、先達而被召寄置候江戸・京等之御役者御用無之候條、不殘御暇申渡候樣、今日改田主馬を以若年寄方へ被仰出、夫々申渡候事。

八月十四日。天德院に於いて前田齊廣三十五日忌の法會を行ふ。

〔横山氏日記〕

八月十四日

一、今日於天德院、金龍院樣御三十五日御法事御執行に付、月番又兵衞御家老主付庄兵衞若老市三郎外何茂御寺ゟ相詰候事。

一、今日四半時之御供揃に而九時頃より御出、天德院ゟ御參詣、八時前御還城之事。

八月十四日。前田齊廣の後室名を眞龍院と稱すべきを告ぐ。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

七月江戶表御前樣隆子君御事、公御逝去に付御飾を下させ玉ふ。御年御三十八なり。八月二日御壽號眞龍院殿瑞圓慈光大禪定尼と御改有之なり。

〔官私隨筆〕

八月十四日

一、御前樣御儀、眞龍院樣と御名御改被遊候旨被仰出候。此段寄々可被申談旨、御横目へ之覺書寫、御用番より以添紙面來る。

八月十八日。家老等今後の施政方針に關する意見を前田齊泰に上申す。

〔御親翰幷寫幷御請寫〕

今般之御凶事奉絕言語候御儀に御座候。依而近年金龍院様より、御政事向之儀段々被仰出候御主意通りに相違不仕樣有御座度、第一之御儀与奉存候。以後は轉役等も不被仰付而難叶分は被仰付、其餘は都而被成置候通に有御座度儀、年寄中初和順に而、熟談之上相伺可申儀に而、末々迄も心服仕候儀專一に奉存候。若一事に而も、被仰出等に依而人々不心服之儀出來仕候而は、甚以御大事之儀に而、乍恐私共此所深く奉案事儀に御座候。尤御賢慮も可被爲在御儀には候得共、先御成長被爲在候迄は、何事も當御時節相應之處を以、轉役等も被仰付方可御宜与奉存候。乍恐私共心付申儀故、奉申上置候、以上。

八月十八日

山崎庄兵衛
前田内記
前田修理
前田織江
横山藏人
津田内藏助

八月廿一日。前田齊廣四十九日忌の法會を天德院に執行す。

〔諸事覺書〕

八月廿一日

一、金龍院樣御四十九日御法事に付、御用番又兵衞・御家老方主附內記之外は、六時頃天德院ゟ相詰、染帷子長袴豐後守は當病不罷出。

一、六半時頃御法事初、羅漢講式後之式濟寄々御案內、四時之御供揃に而御參詣、山門より御先立市三郞、御燒香被遊、追付御戾候事。御作法前々之通。

一、右相濟眞龍院樣始御銘々樣御代香、畢而二條樣御使者鈴木歌守御代香、續而安藝守樣御使者塚本喜和米御代香相勤、夫々相濟各九半時頃退出候事。

八月廿六日。前田齊泰入國に就き郡方に被下米の戶數調査を命ず。

〔御觸留拔書〕

御入國被下米之儀に付、家數等品々しらべ方御相談之趣內存左之通。

一、御かね裁許・御鳥見・御郡手附之儀御評議之趣色々御申越。此內御鳥見之儀は先振可有之候得共、御かね裁許・手附之兩品者先年之振無之筈。左候得者高持候者ゟは三升、高不持ゟは壹升五合宛之御取圖り御尤に候得共、右三役は御藏番抔と品違可申候間、持高之有無に不

拘都而三升宛之御取圖可然。且譬百姓等之せがれ二・三男之内右役儀相勤罷在共、親共ゟ當り之被下米有之候とも、前段に準じ別段被下米之御詮議可然。

一、棟取等金澤居住之手附、是者町支配に相成居候得共、被下米有之事に候間、御郡方手附之振之通り、三升宛之被下米御書上可然候。

一、瞽女・座頭ゟ別段被下米与申は先振見當り不申候得共、右之類は盲目抔と之譯書顯不申、指高有之に隨ひ、百姓・頭振之せがれ・娘等に而、一名相立不申者之部者勿論御指省可然。付札、此分御郡方に而も、檢校支配之者ゟは別段被下方有之候間指省、其餘は本文之通たるべき事。

一、寺社幷町人之儀は、御支配違候儀に候得者、御指省勿論に御座候。併御郡支配之者は、町家之業を營み罷在候而も、高之有無に隨ひ、百姓と頭振之部に御振分御書上可然。

一、穢多・藤內等之人非ゟ被下米之先振無之候間、勿論御指省可然。

一、百姓・頭振等之內不家持者有之候与も、一名相立居候分と而茂、都而御指省有之間敷、百姓・頭振にしたがひ夫々之被下米御詮議可然。

一、年寄等之內一家に而兩人役儀被仰付置候分、又者兩人之內一人は役前有之、一人は何列与歟役前無之候とも、都而被下米可有之儀に御座候。尤一人は役前有之、一人は別に被仰付

置候分、先年右列之分は指省候儀も有之由に候得共、元來役前に就候而之被下米に而無之、御入國に付被下候御米之儀に候得ば、平人と品違列抔之御取扱有之人々御米頂戴仕間敷樣無之。左候得共一家之內役儀被仰付置候一人ゟ被下米有之候と而、別に被仰付置候人ゟ御米御指省者有之間敷儀に御座候。尤別家に被下候御米抔一通り聞え候樣にも御座候得ば、右に就而は御米頂戴可仕与も相願不申、何分列等之謂有之分は一家兩人にも限り不申、三人・四人に相成候而も都而被下米之御詮議可然。

申七月

右之通諸郡ゟ返答可申遣奉存候に付、覺書之儘奉窺候、已上。

御入用被下米之儀に付、家數等御しらべ方頃日覺書を以申進通に候間、帳面出來無油斷早速御達可被成候。就夫公事場牢舍人等、都而御咎者之儀は被下米御指省可被成、此分先達而如斯に御座候。尤御役所御談に御座候、以上。

八月廿六日　　神保助左衛門

諸郡惣年寄中樣

八月廿七日。鳳至郡中居にて鑄造せる竹澤御殿の鐘を天德院に寄進し撞初を行ふ。

〔官私隨筆〕

八月廿八日

一、竹澤御殿之鐘能州中居に而鑄候鐘也。此間天德院ゑ被遣、昨日撞初有之候由。本堂へ向右之方廻廊下之前に假鐘樓出來、今日もつき候也。一派に而扶桑一番之大鐘に而可有之由和尙被申候。

八月廿八日。前田齊廣百日忌の法會を天德院に執行す。

〔官私隨筆〕

八月廿八日

一、今日御百ヶ日御法事に付、六時過天德院へ拜參。

閏八月三日。前田齊泰政務に關し前代の施設を恪守すべく老臣の輔弼を求む。

〔御親翰留〕

今般之不幸誠に殘念之儀に候。各に茂嘸無力可被存候。此方若年之儀、政事向之儀無覺束存事に候。各萬端綿密に穿鑿有之度候。夫に付前々より之家格、近くは金龍院殿御在世中段々御世話被成置候品々之儀、彌以無忘失可被相守候。此等之趣各より程能一統ゑ可被申渡候。

甲斐守・土佐守・豐後守事は老練出頭之儀、猶以無油斷樣賴存候。

右御親翰閏八月三日於御居間書院、年寄中・彈番被爲召、荒增御意之上御渡、御請申上退去。

其次御家老被爲召、御意之趣有之事。

〔諸事覺書〕

閏八月五日

一、左之書取表方より被相越候付、御家老支配御臺所奉行へ寫織江渡之、御請指出候樣申談、若年寄方も支配之人々江内記申渡。

前々より之御家格、近く者金龍院樣御在世中段々被仰出置候品々之儀、彌以無忘失可相守候。

此段一統江可申渡旨、拙者共御前へ被召御意に候。

右之趣被得其意、各被申談、組・支配之人々江茂無違失嚴重相守候樣可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配江茂申渡候樣可被申談候事。

閏八月四日。前田齊泰を加賀守と呼ぶことを止め中將と稱せしむ。

〔官私隨筆〕

閏八月四日

一、只今迄加賀守樣と相唱候得共、是以後は前々之通御官名相唱申筈に候。此段寄々可被申

談候事と之御横目へ之覺書、御用番より添紙面に而來る。

閏八月十五日。寺島藏人施政の要領に就いて藩の老臣に進言す。

〔靜齋翁遺文〕

口達書

今夏金龍院樣御逝去の砌、潜に承候處、町・在と申內、別して御郡方には、御逝去在らせられ候儀を傳聞て何れも安堵仕、先づ是にて宜きなどゝ、口々に唱候旨承知仕、何とも恐入、言語に絕し殘念至極奉存候。凡て民の父母たる御身分御逝去の儀は、萬民の悲歎し追慕し奉るべき處に、前段の如く申唱候儀は誠に以輕からざる儀、人君の御身に取候ては、民心相背き疎じ奉る御不德御恥辱、是より甚しき者無御座候。亦奉疎奉背候臣下、不忠の罪是より大なるは御座なく候と奉存候。夫に就て、當時民心の斯の如く上を奉疎奉背罷在候儀、私に於ては尤も御座あるべき儀と奉存候。其譯は太梁公樣御代引替り、金龍院樣御代と相成候てより已來、御代初め御領國に御用金を仰付られ、其後御居城御燒失に付、冥加指上方、人々身代を見計、何某には如何程指上させ候樣にと無理至極の取扱を以、押て過分之銀子指上させ候に付、不心服至極に相成り、愁訴・張文等仕族あるに至り、初め人民御上を大切に奉存候神妙之志よりして冥加存付候處、右取扱を以て悉く萬民之心服を取失ひ、夫よりして年々歲々

之御調達銀連綿と仰付られ、殊に御議定も悉く相違有之、御郡之取扱儀、太梁公様御代は難澁之村々へ仕置仰付られ候に付、追々引免等仰付られ候處、金龍院様御代に相成候ては、左様の御詮議は無御座、ひたすらに手上高・手上免立歸の詮議のみ嚴重に仰付られ、其他跡々返上米過分至極之增方、或は冥加存付も仕ざる者へ、上より押て冥加米と名付て指上させ、其外不筋至極之取扱を以て、增年貢せさせ、或は役々運上之詮議、種々様々仔細の儀共有之。且又作損の御償米、幷夫食取扱定め、檢地方御普請等を初として、惣様御郡方の取扱、全く聚斂至極之御政事と相成、細民の憂誠に擧て數へがたく御座候。然上は御領國過分の隱田等有り、御益莫大の旨、誠に跡方も無之儀を申出候者有之。是が爲に無罪の御郡年寄共數人入牢仰付られ、其後流刑等之一件、誠に以て恐入候御一條。其砌の仰出されに、年寄役の者幷に百姓等に米を食し申間敷との仰、是等は別して不心服の至極に存仕候躰なり。元來百姓共の儀は、多分煎粉・目かすのみ日々入用と仕罷在候もの。さ候へば民の父母たる人君よりの仰付られには、何分米を食し候様にとこそ仰出さるべき儀然るべき處、年寄役等之可なり米をも食し罷在候者迄も、食し申間敷との被仰出には、萬民悉く不心服之至りなり。且右無罪の者入牢仕候に付、妻子眷屬の歎き申すべき様も無之、夫入牢仕候に付、眷屬之者盡く之が爲に非業の死をなしゝものも有之。其他御仕法御調達銀の儀も相加り申まじくと申者候へば、

家財を見斷し、無理に押付申候儀も有之、或は町方にも口錢を取立其日を過し、聊の元手を以て渡世仕候者迄も、日々一錢二錢づゝ指出させ候故不心服至極、是が爲に輕きもの共、種々御上の御噂を申唱罷在候也。都て御國民の御上に奉背候仕方のみ、誠に以言語道斷也。右之通連々以ての御仕向にて、何一つ御仁政と申儀は聊も無之。さ候へば民心相背奉疎、前段之申唱候儀は、尤至極と奉存候。然處私儀當春御咎御免、翌日重役被仰付、夫より追々御前近く召され、段々御意之趣奉拜聽候處、誠に以て奉恐入候思召を種々仰付られ候御趣意、容易ならざる御深慮を以て、三州萬民をして安穩にくらさしめられたしとの事、厚き御仁惠之程日々奉拜聽、心根に徹し奉感佩候儀に御座候。然處是迄御國民の御取扱御仕向は前條悉相調候通にて、思召とは雲泥の違にて驚入候儀に御座候。何故に前段の御仕向に相成罷在候哉、一圓以て相辨じがたく奉存候。夫に就て追々御深慮の程奉拜聽候處、是迄之儀は萬端御案外至極之儀にて、是迄の御仕向下々之樣子段々實事の處を聞召させられ、今更に思召付かせられ御憤發在らせられ候儀にて、彼の御大意と遊ばされ候御帳冊之内にも、上べを美しく申飾て入御聽候故、實事の政事は行はれ難しと遊ばし置かれ候通、事々物々御案外至極。就ては三州津々浦々迄も、御德澤押渡り候樣在らせられたしとの思召を建てられ、頻に御憤發在らせられ候處、御趣意を思召通りに奉請繼、御手足と相成候て押及ぼし申すべき人才一圓御見

當り在らせられず、誠に止む事を得させられず、八十歳に垂んとする杉野善三郎等、及不肖の私式共迄も御引出在らせられ候儀は、全く御歎息の餘爰に及ばせられ候儀なり。就ては此大藩中、何故かくまで人才に乏しく成らせられ候哉と御深察遊ばされ候處、畢竟二百年來の御治世、士風全く安逸に流れ、大切の御奉公も打忘れ、遊藝・殺生等に悉く身を委ね、經濟に心懸候者とては更に無之、進退言語髪の結ひぶり着服の仕立方抔の處にのみ心を置き、種々の悪習俗に染込み、心掛宜しき者も、急度御用にも相立つべき才力の者も、右悪習俗の形容の内に成立、習ひ性と成りて、何分にも經濟の御用に相立申さず、士風日に衰へて、安逸・遊藝・殺生等に全く精神をゆだね罷在候故、萬事此疲弊より事起候儀と御深慮在らせられ候て、一朝御憤發の餘り時弊御矯かた〴〵、彼の遊藝・殺生等の儀を悉く御留仰出され候へども、太平二百年來深く染入來候習俗の儀、中々以て容易に相改るやうも無之、一通の御取扱にては、やはり其間に心を置候へば、所詮思召通の人才人傑の御國家に益ある人物の出來申すべき樣無之と、此處重々深く思召つかせられ、嚴しく時弊を御矯遊ばされ、且段々格別の御思召を以て、御側近に於て御趣意の大意を仰付られ、或は議論等も仰付られ、曉天に及ぶ迄御寢食をも打忘、御心を盡させられ、各樣をも追々召させられ、御先代樣より無之厚き御取扱在らせられ候儀は、全く士風を改めて人才有爲の士を御仕立遊ばされ、此末は追々三州

へ御德澤を及ぼし、萬民安穩に罷在候樣に遊ばされ度との思召、且は有爲の士を加賀守樣へ進ぜられたしとの一方ならぬ深き思召よりして、晝夜御精神を盡させられ候儀に御座候。然處思召の通に聊も行屆申さず、各樣を御前へ召させられ御評論有之候儀も、誠に一端の事にのみ相成り、今般の時節に至り候儀につき右思召の程幾重にも奉恐察候へば、何分殘念至極之儀、乍恐御痛々しく日夜號泣止む時なく慨歎之儀に御座候。依て此處に各樣にも是非何とか御賢慮御座あるべく、何分右深き思召の處を加賀守樣を初め奉り御請繼御座候て、彼の御大意の御帳面を御本則に立てられ、此末全く御趣意通り遂げさせられ候儀に是非御座なく候ては、御神靈に對し奉りがたき儀と奉存候。當時の御政事は全く執權の御手に御座候時節なれば、各樣の御處置如何御決斷御座候哉。何れ只今の處は何分是迄仰出置かれ候通の御仕向を、彌堅く相守候儀に無御座候ては相成難く、何とか御政事の御模樣替へさせられず候ては、人氣不日に取紛れ、如何程御難題の場に至るべきも計がたく、御幼君の御儀に御座候へば、萬事御先代樣の政事御遺命通りに堅く取守り、かの父の臣・父の政を改めざるの聖敎の如く、各樣御一和を以違失なく補佐遊ばさるべき御時節と奉存候。尤當時各樣にも御一和第一に仰合され候旨承知仕候へども、共和の政と申は御承知の通り史記周本紀に御座候如く、かう樣の御時節に相用申すべき肝要の儀と奉存候。左樣に御座候へば、各樣御一和迄の儀にては御座

なく候。御家御一統是迄に仰出されし御遺命之品を堅く相守り、何分共一和仕罷在べき御時節と申儀を、何れも能く會得仕罷在るべき儀也。此處會得仕候はゞ、指當り御難題がましき儀も出來まじき儀にして、猶又御取扱上御賢慮之筋も御座あるまじく候哉。且又かやう之御時節風と心得違仕候人々は、物事相改候御時節抔と相心得、御爲に事寄せて自分一己之私を以て存寄等申出候者御座あるまじくとも申がたく候。且又町人等の内奸利を貪り候者も、御爲に事寄せ己の望を遂申べしと、手筋を以て所々申込之事相成難き様の事候へば、時の御役人を讒訴仕、甚しきに至候ては、誰在勤御座候ては此法相調はず、誰に仰付られ候はゞ御爲なるべし抔と申込仕る言語道斷之爲體、是迄見聞仕罷在候儀御座候。尤申さず共御承知の儀に御座候へども、かやうの御時節別して御心得も御座あるべき儀何れも本文に相調候。士風相改り、經濟に御用立候人材出來、萬民安穩の御政事向之儀は、金龍院様近く格別に御世話在らせられ、下々の樣子巨細に御聞記御座候處、是迄申上候通御聞請在らせられ候とは萬端事相違仕、御案外至極に付御憤發在らせられ、人民安穩の御政事に御深慮を盡させられ候處、何一つ相調候儀も御座なく、深き御仁政の思召在らせられながら、前條に相調候通り人民相唱へ、奉恐入殘念至極に奉存候。金龍院様御病中御家中の內御病氣本復之祈願白山參詣仕候人々有之體、及び町々共の內にも一兩輩參詣仕候者有之段、御側に罷在候者申上候處、聞召さ

れ、御家臣の內有志の者は參まじき者にても有之まじく候へ共、此方の爲に町人共罷越候儀は一圓無之筈。夫は必其者に宿願有て罷越候にても有之、此方に未三州の爲は致さゞる者と御意遊ばされ候に付、左樣にては御座なく、全く御前の爲に罷越候體与申上候處、自然左樣の儀に候はゞ、此方身分に取ては誠に過分至極之儀、是程辱なき儀は無之と誠實之儀御感遊ばされ、數行の御落涙に及ばさせられ、右參詣仕候者もしも名前相知れ申儀候はゞ、御喜悅遊ばさるゝ儀を申聞せたき儀与御意遊ばされ、御側に罷在候者何も涕泣仕候は、人民の奉慕候を、如斯過分至極、是程辱なき儀は在せられずと御意遊され候を以奉恐察候處、人君の御身としては萬民の心服を得させられ候程御滿足の儀は在せられざる儀。然處民心の背き前に調候通の族、深き御仁恵の在らせらるゝ思召を遂られざる御心中之程奉恐察、申上べき樣も御座なく殘念至極之儀、悲歎止めがたく奉存候。就ては御郡方を初め人民御取扱の儀、是迄の通りの御仕向にては、御國民御當君樣を奉慕候儀も御座なく、同樣に相背き罷在候はんと申者。左候へば大切至極の儀。凡御政事に取て最第一、是より重んぜられ候儀は御座なく候。尤當時は先づ新に役立、其他嚴重聚斂之筋と御座なき御調達銀も御議定打立申體に御座候へども、前段連綿と押來候種々聚斂之御取扱其儘に相成居申儀、及十村入牢等の御嚴政に聊も上の思召を念慮に相雜へず、ひたすら御怨み奉存罷在候。左候へば此末是非心服仕候儀に御座

なく候ては相成がたく、第一此末甚しき風水旱蝗の憂、或は植付出來せざる杯之事柄有とも、今日產業の元手を失ひ候ては渴命に及候儀、左様の砌數十萬の人民御上に奉縋候は必定之儀。然處當時少分の作損御取扱すら行届せられざる御勝手ぶりにては、中々以て右體非常の御取扱行屆せらるべき様も御座なく候。左候へば數十萬の人民爰に於て死を極め、兼々御不仁の御取扱等の宿怨を發し、御難題の場に至り申すべきは是亦必然の儀。既に御聞及御座あるべく、近年肥州様御領分に旱仕候て植付出來ず、大變至極之儀に至り、干戈を動かされ候場に至り申候。目前其鑒不遠儀に候。天地の氣候、何時如何様の變有之か人心を以計知がたき儀。左様の節は前段に調候通り、全く御取扱行届かせらるべき様無之ては、何分萬民の心服御座あるべきやうも御座なく候。就ては常に御誠實仁恕の御取扱を以萬民の心服を取り、君德に奉懷奉親罷在候様御座なく候ては、是非難成儀と奉存候。夫については右心服御取扱の儀、指當り倉庫を開かれ窮民御取扱と申儀にても御座なく、萬事日々の取扱に心服を取申儀にて、第一稼穡の艱難を察し、種々心を用ひ、是迄細民の憂と相成候儀を追々御取除き、民に父母たる御誠實の御心を以、萬民安穩の御取扱に御精神を盡させられ候はゞ、必心服の處に至り申すべき儀。左候へば金龍院様の思召をも繼がせられ、萬民心服の御外聞公邊にも對せられ、且御家長久此上も御座なく恐悅之儀に御座候。各様にも御補佐の御當職を盡さ

せられ、御忠誠の御功も是より大なるは御座なき儀と奉存候。夫について幾度も申上候儀は、加賀守様御治世久しく萬民安穏の御政事に御心を盡させられ、國政良法も人にありと御帳面に御座候通、如何様に御心を盡させられ候ても、百官衆吏に經濟の御用に相立候人品御座なく候ては、中々以三州之萬民安穏に御取治御座候儀は出來不仕候。依て彼御大意の御帳冊を御本則に立てられ、此末永々以て御怠慢なく、風俗心得方等の儀仰諭され候やう御心を配らせられ、御誠實を盡さるべき御儀と奉存候。尤金龍院様仰出置かれ候品之内、御憤發の餘甚しく疲弊御矯めの品も御座候哉に奉恐察候。左様の品は士風心得方一統御奉公大切に奉存べきやう、浮華薄情の風儀相改り、誠實を以經濟の御用に相立つべく心懸候風儀に手堅く相改候上は、追々時宜を以て御見計ひ、能きやうに御矯直之儀は必定御座あるべき儀に候。何れ指當り御先務の儀は、本文に相調候士風御改、萬民安穏の御政事向の儀にて、追々御徳澤三州に押移り、一統奉感服奉懐べきやう御輔佐の儀、何分以御肝要至極の儀と奉存候。

右之趣尤一々申上ず共委く御承知の儀に御座候へども、重々打返し相調候儀は、前條に相調候通り此迄三州人民御取扱御宜しからず、依て心服の程甚以不安の儀に奉存罷在候處、右様の體たらくにて、相背奉疎罷在候儀に御座候。左候へば何れ此儘に御指置候にては、何分以て御座あるまじき儀。其上金龍院様厚き思召を遂げさせられず今般の御時節に至候儀、御神

靈の程日々以忘失仕がたく、悲歎斷腸の餘り過當不遜を顧みず、底意の趣書記し御披見に入申候。自然御心得の端にも相成候はゞ辱なき儀に御座候、以上。

文政七甲申年閏八月十五日　　寺島藏人判

長甲斐守殿
前田土佐守殿
村井豐後守殿
横山求馬殿
奥村內膳殿
村井又兵衞殿

閏八月十九日。前田齊泰の生母榮操院二ノ丸御廣式に移る。

〔諸事覺書〕
閏八月十九日
一、今日榮操院樣二御丸御廣式ゟ御移之事。

閏八月廿四日。今後竹澤御殿を竹澤御屋敷と稱せしむ。

〔諸事留牒〕

閏八月廿四日

一、左之通御城代方より演述。

付札、御横目江

竹澤御殿以來竹澤御屋敷与唱可申旨被仰出候條、此段寄々可被申談候事。

閏　八　月

付札、御横目江

竹澤御殿辰巳御門內、先達而二御丸格合申渡有之候得ども、以後三の御丸に准候筈に候條、被得其意、夫々可被申談候事。

閏　八　月

閏八月廿九日。老臣横山藏人芝居及び茶屋女を停止するの議を上る。

本文は横山藏人より奥村內膳へ達したるなり

〔諸事留牒〕

閏八月廿九日

一、左之通今日月番內膳へ相達候事。

近年芝居幷茶屋女を指置候儀、御國には御先代より無之に付、先達而御僉議之節も不可然段申述候處、如何之趣に御座候哉兩樣共被仰付候。近々風俗等之儀被仰出も御座候へば、別而

釣合不申儀、風俗を傷ひ申第一に奉存候。人情次第に惰弱に相流れ、其風押移り、中には心得違之者も有之躰相聞申候。前條之儀相始り候而より、次第に風俗悪敷相成、唯今相止候而も悪風之弊急に取直り可申事とも不被存、此處甚歎ヶ敷儀に奉存候。其上三都と違ひ、他邦之者入不申事に候へば、融通之ためにも相成申間敷。遊民多く相成候而は畢竟御國家之費のみに而、一も御國益に相成申儀は無之与被存候。右兩樣共前々より御制禁にも御座候へば、御當節抔に而は別而不可然儀と何も申合候。只今之内御停止被仰付候樣仕度、何分格別之御僉議御座候而可然奉存候事。

閏八月廿九日

九月二日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕

九月二日

一、今日八時過學校に御出。年寄中彈番・又兵衛、御家老方内記・庄兵衛御出前罷越、御先立内記。於學校孟子萬章之篇講釋下村惣兵衛相勤、相濟武學校ゟ被爲入、武藤仙次郎居合御覽、相濟七時前御戻之事。

九月八日。能登輪島産の漆器取締方を改めたることを告ぐ。

〔御觸留拔書〕

付札、惣年寄・年寄並江

能州輪島出來之家具類取締方、同所町甚兵衛・伊右衛門兩人江主附申渡候得共、今般所方江引請之儀承届候に付、是迄右兩人家具種に燒印爲押候得共、以後右不及燒印段申渡候條、此段浦々測役人等江可被申渡候、以上。

申九月八日　　御算用場

御郡奉行中

九月廿二日。一向宗東派の者の宗意等の儀に付き相爭ふを禁ず。

〔御觸留拔書〕

近年東方一向宗寺庵之內、宗意等之儀に付徒黨ヶ間敷申合、或者上京本山江申込候儀等有之、俗徒之內に茂右樣之族有之躰粗相聞候。自己之了簡を以內訴諍論ヶ間敷事を猥に本山江申出候儀は、甚以有之間敷事に候。品に寄御國政にも相響、以之外之事に候條、以來心得違無之樣、御郡方一統嚴重可申渡旨、遠所町奉行并御郡奉行等江可被申談候。此上若心得違之族有之候はゞ、急度可及沙汰候條、此段も可被申談候、以上。

九月

東方一向宗寺庵之内、宗意等之儀に付別紙之通御用番年寄中被相渡候に付、寫相達候條、被得其意、各支配所不相洩樣嚴重可被申渡候、以上。

九月廿二日　　御算用場

千羽彥太夫殿

井上與兵衞殿

九月廿五日。越中魚津在住の吏にして賭碁を行ひたる者の處分に關して議す。

〔御親翰帳〕

九　月

一、魚津在役手合に而博奕いたし候者共相糺、幷かけ碁を打候者共有之。夫々相糺、博奕いたし候者共は取捌之先例も有之候へ共、かけ碁を打候者共咎方是迄無之、元來御停止之事故同く可申付哉と奉達御內聽候言上紙面御渡、ケ樣之者表方に而咎方先例も有之哉与御尋被爲在候。輕き者かけ碁を打候而咎方之儀見當り不申。去々年御手役者柳川全作かけ碁等之儀に付御咎之儀は、竹澤御殿に而町奉行ゟ御次より被仰渡候に付、右被仰渡方町奉行へ相尋候に、別紙之通之由に候間、右振を以咎方之儀彈正ゟ被仰出可然与、其段九月廿五日平兵衞へ申入、

書上紙面等返上仕候事。

町奉行より之別紙

柳川全作

右之者圍碁に賭を以勝負をいたし、其外不行狀之趣相聞候に付、追込被仰付候條、可被申渡候事。

九月廿七日。前田齊泰の輔佐教養に關し老臣等近侍の士に告ぐ。

〔御親翰帳之内書拔〕

九月廿七日

一、御前御年若に被爲在、御成立之儀御大事之御時節に候所、御近習之人々之內、御成立方之儀は御爲第一之事に候間、和順申談、不熟之儀無之樣致度儀に候。且又於御廣式之儀は、各初時々不及見聞事故、猶更御大事に候間、年寄女中被申談、追々御正敷被爲在候樣有之度儀に候。尤於各油斷無之事に候へ共、御大事之儀故猶更申談候條、御側近之人々等へ得与申聞候樣、覺書を以竹田市三郞等三人奧之間に招申渡候事。

十月三日。木梨左兵衞等處罰せらる。

〔横山氏日記〕

十月三日

一、左之通今日申渡有之候事。

甲斐守殿江

木梨左兵衛

右左兵衛儀、御勝手向何歟不正之取組茂有之、其上御政事向等彼是申觸候族も有之躰に相聞え、先以不埒千萬有之間敷儀に候。依之役儀被指除、遠慮被仰付候。右之通被仰出候條、可有御申渡候事。

十月　中

矢野所左衛門・小堀牛右衛門江

寺尾喜左衛門

右喜左衛門儀、金龍院様御在世中度々被仰出之御儀茂有之候所、其後茂不相愼、何歟不正取組茂有之躰に相聞え候。其上御隱密之儀等彼是申觸候族も有之、御縮方に差障、甚以不輕儀沙汰之限りに候。依之役儀被指除、如元御算用者に被仰付、逼塞被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

十月　中

御算用場奉行江

右甚藏儀、心得方不宜体相聞え候付、差控被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

御算用者　寺　尾　甚　藏

申　十　月

十月五日。文政三年以降五ヶ年間實行せる節略は今年を以て終るも尙當分舊に依るべきを諭す。

〔坂井留記〕

御勝手連々御難澁に而、地・他御借財も莫大に相嵩み、如何共被仰付方も無之候に付、去辰年より五ヶ年格別御省略御運方御詮議被仰付候所、當年に而年限相滿候得ども、兩三年打續莫大之御物入、此末茂打重ね種々過分之不時御物入も有之儀、一統粗承知之通に候。依之先當分是迄五ヶ年中之通御省略被仰付候條、萬端相弛み不申樣嚴重可相心得候。乍去來年頃之儀は、御入國後初而之儀に候間、格別之趣を以御省略以前之通御規式可被仰付候。夫に付、自然惣樣之弛みに相成候而者、御趣意に違申儀に候條、此所致辨別、御省略之筋急度相立候樣、嚴重可相心得候。

右之通被仰出候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其

支配え茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十月五日　　　　横山求馬

村杢右衛門殿

湯原久左衛門殿

多羅尾左一郎殿

十月七日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕

十月七日

一、八時之御供揃に而學校え御出候付、御奉行之外又兵衛・彈番・織江罷越、御先立市三郎相勤。孟子講釋金谷多門相勤、暫御聽聞、相濟夫より武學校え被爲入、星野九右衛門・小池津太夫門弟乘馬御覽被遊、七時過相濟御戻之事。

十月八日。前田齊泰瀧之間に於いて中西巴門をして書を講ぜしむ。

〔横山氏日記〕

十月八日

一、今日瀧之御間において、經書講釋御聽聞可被遊旨被仰出、五半時過芙蓉之御間ゟ御着座、御先立市三郎相勤、御襖茂開之、表方に而甲斐守初追々罷出候。御家老方に而內記罷出候。內藏助初追々出席伺公に罷出、四時過相濟被爲入、御先立同前之事。

但、講主中西巳門相勤る。且大學七章より八章まで講釋有之。市三郎儀傘役方に而今日御聽聞之御樣子相知れ候付、例刻より早く出席、御先立相勤る。指懸り候節は、御近習頭相勤候儀先例有之事。

十月廿四日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕

十月廿四日

一、今日四時前學校ゟ御出、甲斐守・內膳・彈番・內藏助相詰、若年寄方市三郎罷越、九時頃御戾候事。

十月。川上新町の常芝居は明年以降臨時興行せしむべきことを告ぐ。

〔川上芝居一件〕

川上新町芝居之儀、是迄年中不絕興行致來候得共、初發とは見物人も薄く、元來御當地之儀は、他國より之商人或は通行人等、時々多く入込候に而も無之故、見物に罷越候者も、多分

は御領内町方居住之者迄立入候儀に候得共、年中常芝居与相成居候而は、珍しからぬ様に相心得、次第に入りも相減、いづれも座本・茶屋共之損失に相成、畢竟全かるまじき事に候。依之來年よりは、年分春秋兩度、五・六十日程充興行可承届候。就而者共間に、右座内に致居住候茶屋共、無商賣に打過候而者、渡世方も無覺束相聞得候。元より癈疾之族とも違、壯健之肢體を以、假令貧窮に不迫共、常之產業を打捨、むざと日を送り候儀は、勿論賴母しからぬ事に候條、本芝居無之透に商賣稼方之儀、人々相應之取續可有之儀に候間、是等之趣一統爲申聞、其方共においても何分致勢子、渡世方油斷不致樣、爲相心得可申事。

申十月

十月。諸郡百姓・頭振を金澤に人別送りする件に關して告ぐ。

〔御觸留拔書〕

諸郡共百姓幷頭振、町方等江人別送り之儀容易に不承屆、御縮方前々申渡置候處、近來人別送り願方次第相增、際限も無之族。元來農業を疎、町方居住相望奉公稼等に罷出、年來心懸、多分町方養子・緣組申合度趣無據願出、其中に者內證に而緣附、子を持罷在候者茂間々有之躰。畢竟村役人等人別方穿鑿等閑故之儀、不埒之至りに候。右躰之類强而人送り相願候とも、不承屆筈に候得共、一圓不承屆而は尙迷惑者不及申に、親族江も難默止趣に付、格別に

承屆、人別迄り遣候得共、如是增長いたし候而は御縮方相立不申、第一御郡方及人不足、自然村方に寄手餘り高等出來候而は、甚不輕儀。因玆今般詮議之上、諸郡共百姓・頭振子弟等年久敷御當地等に罷出居、無據町方居住相願候分迄拔出願出可申、其上に而猶加詮議、格別に可承屆候條、年限等之樣子綿密に相しらべ、明春迄取頻願出可申候。尤近年已來之分は、無餘儀願之筋有之とも不承屆、以後とても尤容易に難承屆候條、此段末々迄不相洩樣申渡、一統人別御縮方嚴重可相心得者也。

甲申十月　　　　御郡奉行

諸郡村々役人

十一月四日。前田齊泰能を演ず。

〔官私隨筆〕

十一月四日

一、今朝六時前出宅登城。

一、御用番迄御能拜見之御禮申上。

一、六半時前御能初り、御中入九つ半前也。

一、八半時前頃初り六時前濟。

一、各列座、於松之間二之間以澤田一郎右衞門御禮申上。他龜次郎殿御能拜見之御禮も申上。
自分初初而拜見之人々は進み出御禮申上候。
但、此御禮申上方各指圖也。自分は中將樣・他龜次郎殿共に初而拜見に候處、筆頭甲州も
他龜次郎殿御能は初而之由に而、初而拜見被仰付難有旨被申上候。何廉混じ御不出來也。

十一月四日

翁　權進　高砂　權進　田村　他龜次郎殿
草紙洗　宮門　邯鄲　御　黒塚　鐵次郎
祝言金札　初次郎
末廣　靱猿　福之神

十一月十日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕

十一月十日

一、今日九半時過學校江被爲入候付、豊後守・又兵衞・織江・庄兵衞御先へ罷越、八時過御出、
御先立織江。論語・孟子會讀御聽聞。夫より武學校江被爲入、岸山孫作門弟馬術御覽被遊、

相濟七時過御戻之事。

十一月廿六日。郡方の座頭・瞽女にして他村に徘徊する件に關して告ぐ。

〔御觸留拔書〕

附札、口郡惣年寄・年寄並江

座頭・ごぜ琴三味線之業を以、御郡方より御城下江罷出候者不少躰に候處、先達而御救方被仰付、以後御郡方之分は於在所々々、琴三味線之外盲目相應之産業を相勵ませ、御城下江出候儀者可爲無用旨等被仰出候段、當正月御用番年寄中被申聞、則其節申渡置候通り候條、彌御郡方之分共在所々々までに而、外村方等致徘徊業作相勵候儀難相成儀与相心得、及迷惑候旨相聞候。右者琴三味線之外、盲目相應之稼方に而者不指支候條、此段重而夫々不相洩樣可被申渡候、以上。

十一月廿六日　　　御算用場

山森雄次郎殿

磯松森右衛門殿

十一月廿七日。二條齊信の使者金澤城に登る。

〔諸事覺帳〕

十一月廿七日

一、四半時過二條樣御使者大村監物登城、最初虎之間二之間へ着座、御奏者番御口上承、御進物引之、畢而御內用之趣御用人承り、重而外御用之趣は御奏者番誘引、瀧之間において年寄中承り、相濟御使者御大廣間二之間へ着座、年寄中一切・御家老中一切挨拶に罷出。畢而左府樣より御命之趣申述候付、重而年寄中一切・御家老中・若年寄罷出承之、其節被下物有之候趣も御使者演述。何茂當座之御請申述、退候上御奏者番挨拶之上、二汁五菜之御料理新番頭相伴に而出之。御給事新番之事。

一、御使者江御直答之筈之處、今日御勝不被遊候付、御答御家老之內被出相述候樣、御近習頭を以御口上書被渡下候。織江奉請取、御答御口上取計年寄扣席に而爲調御答申述候付、宜時分爲會候樣懸り之組頭へ申談置候處、右御料理等相濟宜段申聞候付、織江罷出御答之趣申述。

一、右相濟、年寄中一切・御家老中一切挨拶罷出、夫より御使者退出、御奏者番相送事。
但、御命之趣、今日當病に而不罷出年寄中等は、何茂被出候節申述候。其段人々宅へ被申遣、御請等は監物旅宿江以紙面申達。且又今日各へ拜受物有之、御禮等旅宿迄相勤候筈に候處、何茂當病申立、以紙面申達候事。

御進物
御末廣一箱　御菓子一箱
年寄中江御短冊箱　御家老中江御扇子掛　若年寄江陶製鎮一箱

十二月六日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕
十二月六日
一、今日九半時之御供揃に而、八時過より學校江御出に付、彈番・內記相詰、御先立市三郎相勤。諸禮稽古御覽。夫より武學校江被爲入、絹川・佐野馬術稽古御覽、七時前御戾之事。

十二月十六日。前田左衞門知行を召放さる。

〔諸事覺書〕
十二月十六日
玉井勘解由等江
前田左衞門
右左衞門儀、先達而不覺悟千萬、其外彼是不應思召儀有之候付、役儀被指除、知行高千五百石之內五百石御減少、仙石內匠等並被仰付、逼塞被仰付置、當五月御免被成候處、其後支配

文政四年六月十四日の條參照

人より申談之儀を不致承引候付、御用番へ相達、指圖之上申渡候處及違背、彼是存寄申出候由に候得共、猶又打返會得方爲申談候處不聞入、無筋儀を及懸合、且又年頭御禮列等御格に異候儀を願度趣紙面指出候付、支配人より相返候處、夫々相達候樣押返申出候族不穩至極、畢竟亂心之躰与被思召候。依之御知行被召放、一門江被指預候段被仰出候條、此段一門中江可被申渡候事。

十二月十八日。給人米を納むる町藏燒失の場合に於ける辨濟方に就いて告ぐ。

〔御觸留拔書〕

御領國中給人米相納候町藏、火災に而燒失之砌、當場役人指出夫々遂見分、異變之儀無之候得者、追而入札拂申渡候格に候處、自分居宅幷家財等入置候藏相殘り、米藏迄燒失之分は防方等閑に相聞、不締に付、以後自分居宅等相殘り米藏迄燒失之分は、全辨米申付候之條、此段藏宿江可被申渡置候。尤居宅等不殘致燒失候得者、辨米之沙汰に不及候條、此段可被申渡置候、以上。

十二月十八日　　御算用場

小堀八十太夫殿

淺加伊織殿

十二月十九日。前田齊泰能を演ず。

〔諸事覺書〕

十二月十九日

一、五半時前各拜見所ゟ相廻候樣、御近習頭小谷兵左衛門申聞候付、何茂拜見所ゟ相廻、御能初る。七半時過御能相濟、年寄中・御家老中松之間二之間において鈴木清左衛門を以御禮申上退出之事。

御番組

弦上　采女吉　小袖曾我　御　千手　權之進

望月　宮門　小鍛冶　御　猩々　他龜次郎樣

煎物　武惡　木六駄　節分

十二月廿三日。前田齊泰瀧之間に於いて林周輔をして大學を講ぜしむ。

〔横山氏日記〕

十二月廿三日

一、今日瀧之御間において、經書講釋御聽聞可被遊旨被仰出、四時過芙蓉之御間江御着座、御先立市三郎相勤、御襖も開之、年寄中・御家老中追々出席、何公に罷出候。四つ半時前相濟被爲入、御先立同前之事。

但、講主林周輔相勤る。且大學秦誓曰より好人之所惡之篇迄。

十二月廿五日。越中高木村藤右衞門領國分間地圖を作製したるを以て扶持を給せらる。

〔聞書眞砂袋〕

付札、御郡奉行江

高木村

藤右衞門

一、五人扶持

右藤右衞門儀、算術相達、御領國分間繪圖被仰付、數年情に入出來、御用立候に付、如斯御扶持被下候之條、可被申渡候事。

甲申十二月廿五日

十二月廿七日。先に出奔したる繪師野瀨伯英再び年寄奥村榮實に召抱へ

藤右衞門は石黑信由

此方は奥村榮實

らる。

〔官私隨筆〕

十二月廿六日

一、最前此方家來小將組繪師野瀨伯英事、先年致出奔立歸候上致禁牢、其節扶持召放候。然處右之者は常躰之者とは事替り、右出奔も、於公事場は勝手難澁いたし候付罷越候樣に申居候へども、實は繪之事に付佐々木泉景呼寄候所、ふと存じつめ致出奔候躰。畢竟此方之申付樣不宜故之事故、兼々召返可申哉と存居候へども、御法にかゝり候者故致猶豫置候。然共段々年もたけ、近く金龍院樣御前へも罷出候事に候間、此度召返申度、乍去禁牢いたし候者にも候間、一往御用番へ及內達度旨、今日木村勘六へ申含遣候所、御用番へ相達候所、存寄次第之儀に而指支無之事候段被申。依而外へも申達候處、右同樣被申旨以紙面申越候。

翌廿七日徒組に召返候也。

十二月廿八日。時鐘の正時刻を廢し舊來の法に從ふ。

〔御親翰御加筆物寫〕

甲申十二月廿六日生山佐兵衛に爲持遣、山口清太夫を以上之候處、御覽相濟、卽日以同人被返下。

正時刻割之儀、金龍院樣思召を以御改被成置候處、右之刻割に而は下々難澁之躰も有之候由相聞候付、以前之刻割に可被仰付旨被仰出候由、御用番又兵衞申聞候。依而當廿八日より以前之刻割に時鐘爲撞候樣、割場奉行江申渡候間此段奉申上候、以上。

甲申十二月廿六日　　　　村井豐後守

〔官私隨筆〕

昨日より施行なり

十二月廿九日

一、去秋以來時鐘正時刻割に成居候處、今般以前之通被仰付由觸狀來。

〔雜事日記〕

付札、定番頭江

時鐘之儀正時刻割に御改に付、御作事向始大工・日用八半時仕廻被仰付候旨等、去年八月申渡候處、今般右正時刻割之儀被指止、以前之通被仰付候。然者大工・日用仕廻方等茂最前之通可被相心得候事。

右之通被仰出、御作事奉行等江申渡候に付、爲承知申達候條、被得其意、組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

十二月

十二月晦日。萬歳・琴三味線・遊獵等に關して心得を諭す。

〔坂井留記〕

着服之儀、當二月被仰出之趣一統申渡置候所、中に者會得違も有之哉、過不及之躰も相聞候。御内輪に而者麁服着用之儀、尤段々被仰出置候通相心得可申候。江戸表初御公界向之儀は、絹等着用之儀、今度被仰出以前之通可相心得候。元來質朴を相守候儀御趣意に候條、花美榮耀に流申儀勿論有之間敷事。

一、越前より參り候萬歳之儀、御停止与被仰出候儀に而も無是候處、當春抔一切不相舞躰に候。往古より罷越、殊に年始之祝事に候得者、佳例に罷越候分、輕く爲相舞候儀は不苦候條、夕七半時限爲相仕廻可申事。

一、琴・三味線之儀近年増長いたし、座頭等晝夜稽古に寄置候躰も有之、惣而風俗之害不少相聞候付、嚴重被仰出儀に候。乍然押立候祝事等に者盲人相招、日之内琴爲彈候儀者不苦候。尤藝之外者堅可爲無用候。當時之躰に而者、盲人ども渡世も成兼、及困窮候族に付、旁右之通被仰付候。

一、諸殺生之儀、年若之人々等山河を跋渉し、身堅にも相成申儀に候得共、次第増長いたし、其時節に至り候得者、萬事を抛殺生方に而已心を盡、若輩成爲躰も有之、且諸稽古も怠り候

無息は諸士の子弟にして秩祿を受けざるもの

族故、段々被仰出候儀に候。乍然右之御趣意致會得人々、當務之餘暇に岩乗之試適罷越候儀、無息之人々も稽古之怠不相成様心得、折々罷越候儀は不苦事に候。恭・將棊抔も右同様次第增長、中に者賭をいたし、惡敷風俗にも押移り候故之儀に候へ共、是又閑暇之人々抔一向致間敷儀に而も無之事。

右之御趣意能致會得、心得違有之間敷、尤婚儀等之大禮たり共、是迄段々被仰出候通、彌無違失堅相守可申候。自然此上心得違、最前之風俗に立戻り候様之族有之候者、嚴重可被及御沙汰候事。

別紙御用番村井又兵衞殿御渡に付、寫候通相達之候條、被得其意、先々早速被相廻、留より可有御返候、以上。

十二月晦日　　山崎頼母

組・支配中殿

十二月。前田齊泰尙若年なるを以て當分前侯の如く教諭を爲さゞることを告ぐ。

〔坂井留記〕

先達而從金龍院様段々御教諭、風俗等之儀被仰出之趣各承知之通に候。夫に付中將様に茂、

惣滯に遊滯

別紙の品々は本月晦日の條に載す

御志を被爲繼御教諭可被爲在所、當時御若年に被爲在候儀に茂候間、御教諭之儀者暫く御猶豫、御年頃に茂被爲成候上者、思召茂被爲在候事。

一、右之通金龍院樣段々御世話被遊、風俗等追々行通候所、全不被爲遂御逝去被遊、人氣愁滯之躰にも至候儀に候。惣而翫事に耽り候得者志を失ひ、文武之心懸も薄相成、畢竟御用立候人物も出來兼候儀故、一旦被禁事共も有之候へ共、今般別紙之品々は御解被成候條、其旨可存候。其外先達而被仰出置候通嚴重相守、士之本意を不取失、文武之道相勵、往々御用立候樣心懸申儀專要に候。

右之趣可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々ゟ茂可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配ゟ茂相達候樣可被申聞候事。

申十二月　　　村井又兵衛

文政八年

正月朔日。前田齊泰金澤城に年頭の禮を受く。

〔官私隨筆〕

正月朔日

一、御表宜旨申上、四半時過御出、於御奥書院甲斐守・丹後守・豊後守御禮被爲受。御裝束御直垂、甲斐守も大紋之直垂に而御禮申上候。畢而重而罷出、御熨斗被下候。都而御作法如御例。伺公之御家老は織江・內記也。甲斐守御奏者本多主水、丹後守御奏者庄田監物、豊後守は主水也。引役御表小將は前田順之助・水原清五郞・加藤久之助、御熨斗は佐藤隼人勤之。

一、右濟而於桐之御間鶴之庖丁御覽。其間に甲斐守等裝束長上下に改之、御小書院之伺公に罷出候上、宜段甲斐守より申上候。

但、御家老中之內織江・內記も裝束被改候付而、其餘之同役中も列居遲く候所、御家老中列座以前に御案內被申上候。

一、追付御出、於御小書院求馬・磐松・彈番・又兵衞・九郞左衞門・御家老役・若年寄迄御禮。夫より御大廣間へ御出、人持・頭分御禮、各伺公。但御用番幷來月御用番甲斐守及求馬は、御禮人指引被仕候也。人持千石之邊に而九つ、御兒之頭邊に而九半也。御禮之內一度御中立あり。各は尤其儘罷在。右畢而御下段に御着座、御大小將初一統御禮、各伺公。求馬は舟之間之伺公に被參。

又兵衞殿御禮疊、九郞左衞門殿よりは繪圖に上り居候付、御用番へ內々尋候處、加判之後右之通に成來候由被申候也。如何無覺束、今日之所も如何成哉しらず。

一、御雜煮被下候由御用番演述。松之間二之間に而各頂戴之。磐松も同事。但役列也。若年寄中は常之席に而頂戴、かよひ坊主。御禮以小幡多門申上候。

一、如御例鶴之御吸物御下被下由、小谷兵左衛門演述。各列座拜聽之。御居間書院二之間に而頂戴之。御酒之内以山口淸太夫、綬り与給候樣にと被仰出。畢而以坂井與右衛門御禮申上候。但、前々は御近習頭御意之趣演述上、直に誘引之處、今日は無其儀、席より御居間書院取付迄は席之坊主先立いたし、夫より少之間兵左衛門誘引也。且又右御意も、御吸物出候所に而申述候事もあり。

一、七時頃退出。今日土佐守不參。

正月二日。前田齊泰年頭の賀を受く。

〔官私隨筆〕

正月二日

一、五時前登城。

一、御表宜候段申上、揃候は五時頃、列立は四時前。御出、於御大廣間昨日當番之物頭等一統御禮、各伺公。相濟於柳之間御役者共御目見、此所又兵衛伺公。被爲入候刻、御居間書院三之間に而、昨日相殘候御近習頭支配之人々等御禮、伺公無之。其次舟之間に而、昨日相殘候御表小將一統御禮、

求馬伺公。

正月二日。例により松囃子を行ふ。

〔横山氏覺書〕

正月二日

一、今晩御松囃子に付年寄中等七つ半時過より段々登城之事。

一、今晩御松囃子之節、御大廣間江他龜次郎殿にも御出之筈に候旨、月番演述有之候事。

一、御表宜候段申上、六半時前御出、御先立修理。御大廣間御下段に御着座。何茂近く寄候樣にと御意有之。追付御松囃子初。御規式前々之通年寄中伺公。此面々には御盃被下、返上。御取次内記・市三郎相勤。御家老中・若年寄御盃返上無之。前田圖書を初段々御流頂戴之人々五十四人。御肴役求馬・又兵衞相勤。猩々相濟、大夫江被下物目錄市三郎相渡。頂戴之上、御目錄頂戴難有仕合奉存候旨市三郎申上。畢而御意有之。年寄中座上之者御取合申上、五つ半時頃相濟被爲入。御先立同前。

一、御流頂戴之人々竹ノ御間御勝手において御吸物被下候事。

但、給仕御大小將相勤候事。

正月三日。前田齊泰年頭の賀を受く。

〔官私隨筆〕

正月三日

一、今日兩御寺へ御參詣、御供揃五半時也。五時過登城。

一、四時過御出、九つ前御還城。

一、其以後御表宜旨申上、九時過御出、昨二日當番之御馬廻等於御大廣間一統御禮、各伺公。被爲入候刻、於柳之間檢校及町人兩席に而御目見、伺公丹後守。

正月四日。前田齊泰年頭の賀を受く。

〔官私隨筆〕

正月四日

一、今朝五時頃登城。

一、御禮人等列居宜、四半時前御出、御奥書院に而伊勢守長上下年頭御禮被爲受、御用番内膳一人伺公也。御禮濟、檜垣之間緣頰より御先へ御小書院へ被參。畢而於御小書院、隱居幷子共御目見幷役儀之御禮被爲受候。各伺公。畢而矢天井之間に而、昨日三日當番之定番御馬廻等一統御通掛御目見。夫より御大廣間へ御出、御射初吉田家權平左門幷御射手不殘都合廿五人御覽。各伺公。相濟被爲入。

一、九郎左衛門は三之丸打場へ出座、御禮人等濟候而御殿へ被罷出。

一、御射初之内九つ鐘承之。

正月六日。前田齊泰寺社方の年頭の賀を受く。

〔官私隨筆〕

正月六日

一、五時頃登城。

一、土佐守殿・豐後守殿登城なし。

一、各（彈番殿・九郎左衛門殿之外）罷出、惣持寺・寶圓寺・天德院・瑞龍寺（闔）一、如來寺・玉泉寺（闔）一、勝興寺（闔）一へ逢候事。

一、御表宜旨申上、四時頃御出、於御居間書院長瀨善左衛門定番頭並被仰付段被仰渡、夫より御表へ御出、於御大廣間寺社方御目見、四半時前濟。

正月十二日。前田齊泰如來寺及び天德院に參詣す。

〔諸事覺書〕

正月十二日

一、四時前御出如來寺に御參詣、御先詰織江罷越。御裝束之儘天德院ゟ御參詣、御先詰修理罷越。御裝束被召替御拜被遊。御還城候砌御表式臺より被爲入、御郡方惣年寄・山廻等裏御式

臺江並居、御通懸御目見、御奏者番披露。年寄中・御家老中御式臺階下兩方江罷在、內記鏡板江罷出御先立、御作法書之通被爲入相濟。

正月十三日。前田齊泰能を演ず。

〔諸事覺書〕

正月十三日

一、今日御能拜見被仰付候付、各五半時頃出席、四時過拜見所江廻候樣小谷兵左衛門申聞候付、各罷出御能初、暮六時過相濟、年寄中等松之間において坂井與左衛門を以御禮申上退出之事。

御番組

鶴　龜　御　八　嶋　平四郎　井　筒　權兵衛

卷　絹　御　車　僧　他龜次郎樣　融　權兵衛

猩　々　御

三本柱　蜘盜人　茶鰒座頭　千　鳥

正月十五日。前田齊泰遠所在住の士及び遠所寺庵の年頭の賀を受く。

〔官私隨筆〕
正月十五日
一、今朝六半時過登城。五時前歟
一、寺社方妙成寺不被罷出候故、逢候方無之。
一、於御小書院、小松御城番等御禮、畢而於矢天井間遠所在住等之平士御禮、又兵衛伺公。畢而於御大廣間遠所寺庵方御禮、畢而被爲入、四半時前退出。

正月十九日。具足の鏡餅直を行ふ。

〔諸事覺書〕
正月十九日
一、今日御鏡直に付各熨斗目・上下に而四時出席。
一、四時過御居間書院に御出之事。
一、同半時過松之間二之間に而、年寄中等御鏡餅・御吸物・御酒等頂戴。畢而同席に而御臺所奉行溝口賴母を以御禮申上、九時過退出候事。

正月廿三日。前田齊泰瀧之間に於いて渡邊兵太夫に大學を講釋せしむ。

〔横山氏日記〕

正月廿三日

一、今日瀧之御間において、經書講釋御聽聞可被遊旨被仰出候段、御横目堀定左衛門及屆。

一、四時頃芙蓉之御間江御着座、御先立市三郎相勤。御襖茂開之、年寄中・御家老中追々出席、伺公に罷出候。四半時頃相濟、被爲入。御先立同前。

但、講主渡邊兵太夫相勤候。且大學傳十章中、是故君子有大道節より大學全講釋有之。

〔横山氏日記〕

正月廿八日。德川家齊、前田齊泰に贈る所の鶴金澤に着す。

正月廿八日

一、寒氣御尋之宿繼御奉書、且又鶴御拜領。今夕七半時過到來之由之事。

是月は大盡なり

〔御觸留抜書〕

正月晦日。蠶卵紙は努めて領國產のものを購求すべきことを告ぐ。

蠶種紙之儀、是迄他國より賣込候分与、御領國出來之分入交り相用來候樣子に候。今般詮議之上御領國出來之分、當町一丸甚六主附申渡、右種紙產物方印押相渡、種生吟味致、且直段も引下げ賣渡候樣申渡候。御領國產之儀に候條、成限り右種紙相求候樣可被申渡候。依而右種紙印鑑、千九百枚相達候條、村々肝煎共等江可被相渡候。尤右種紙不正之取扱方致候者有

之候はゞ、早速當場江可及斷候。

右之趣夫々可被申渡候、以上。

正月晦日　　御算用場

御郡奉行中

正月晦日。大坂廻米を輸送する地船船持の心得に關して告ぐ

〔御觸留拔書〕

大坂御廻米地船積之分、是迄貳百石以上之船江爲積候得共、近年不納米多、此儀は畢竟小船に付少々之透間江も無理に積込候儀とも有之躰に付、去年より小船指省、船腹も滿不申候樣可心得旨、地舟裁許を以委細申渡候通に候。乍併是迄小船不限、第一於船中水主等之內不正之趣も有之躰相聞、不屆之至に候。元來地舟之儀は、上船見競にも可相成譯之處、都而右躰之趣に而、上船与は俵形も格別損候。ヶ樣に而者惣樣之御米にも相障不輕事。既に去々年岩瀨浦より見本米箱入を以差遣候處、俵成積渡候節之通に候得者、全於船中拔取候故不納米出來之處、船主に而は不心付、無謂不納米出來之樣に心得候躰相聞候。依之船中締方急度不相改而は其詮無之。船主ども水主等雇賃銀等是迄少分之由、是等をも不相增而は正路之處に至り兼可申儀に候。既に去年右等之趣申渡候所、屆方甚宜船々有之。其內不宜分遂詮議候處、

大坂於川口俄風雨等に相成、取扱方荒、俵形等相損候之由申出候者有之。全其樣子難相分候に付、當年爲試重而積渡候船々茂有之儀に候之間、是等は別而御米大切に相心得候樣可被申渡候。畢竟船頭・水主仕癖を爲立直候儀は、船主共之指引方に寄候儀に候間、此段當年御廻米積方、順番幷不時願之船持共等江可被申渡候。尤諸浦出船ヶ所において、船頭等江尙更申渡候樣出船奉行へも可申談候、以上

正月晦日　　御算用場

廣瀨欣右衞門殿

松平織人殿

口郡惣年寄・年寄並

右之通御算用場より就中來候、相越之候條得其意、浦々船持共江夫々不相洩樣嚴重に可申渡置者也。

酉二月六日　　磯松森右衞門

口郡浦方役人

追而先々早々相送り、落着より可相返者也。

正月。小松詰の馬廻にして文武に勵精する者に賞賜することを定む。

〔御親翰帳抜書〕

正月

一、小松詰馬廻十ヶ年以來武藝格別入情仕、近年は文學も殊外入情仕候所、金澤ニ違、學校江出不申故、相勵候而も其趣御上へ通不申、中には屈し可申者も可有御座哉に付、稽古等之様子共師範人より學校頭へ相達、於學校惣稽古人同様穿鑿被仰付候様仕度旨等、御番頭より願之趣有之候得共、於學校はしらべ難出來旨申聞候。御番頭よりは段々申聞之趣も有之に付、以來文武共稽古之様子御用番へ達有之候はゞ、御賞美之御沙汰も有之可然。學校にては五ヶ年目に師範人より學校江書出候へ共、遠所之儀に御座候間隔年程に書出させ可申哉。何も僉議之趣伺之所、其通ニ被仰出候事。

但、右之趣に付追而被下方有之候事。

二月朔日。前田齊泰年頭の賀を受く。

〔諸事覺書〕

二月朔日

一、今日御禮人有之付、年寄中等熨斗目・上下に而五時頃登城。

一、四時過御表列立宜段申上、追付御出、御先立市三郎。御小書院江御着座。小松御城番一

人、幷年頭頰に而不罷出人持・頭分、暫轉役之組替候面々等御禮相濟、矢天井之間に而遠所在仕之平士等、幷頰に而不罷出人々一統御目見。夫より大廣間御下段に御着座、御襖織江・内記披之、出仕之人々一統御目見、相濟被爲入。御先立同前。

二月二日。金澤城内の時鐘を撞込む方向に付き議す。

〔御城方御親翰御加筆物寫〕

時鐘之儀、前々より西北之間西寄江撞申候處、去々年正時刻割与相成候節より、南寄江撞込申候。其頃より諸方江聞兼候間、以前之釣樣に被仰付候はゞ可然奉存候。最前之通可被仰付哉与奉存候に付、此段奉窺候、以上。

乙酉二月二日　　　　村井豐後守

二月十八日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕

二月十八日

一、八時過兩學校江御出に付、彈番・藏人御先江罷越、御先立市三郎。古易斷幷醫書輪講御聽聞。夫より武學校江被爲入、筒井喜左衛門門弟居合・鎗術御覽被遊、七時頃相濟御戻之事。

二月廿五日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕

二月廿五日

一、今日九半時過兩學校江御出、彈番・九郎左衛門・內藏助相詰、御先詰市三郎。馬淵治內方居合・鎗術稽古御覽。夫より人持子弟等會讀御聽聞、相濟夫より御家中師範人乘馬御覽被遊、七時過相濟御戾之事。

二月廿七日。高野山天德院の僧金澤城に登る。

〔橫山氏日記〕

二月廿七日

一、今日高野山天德院登城に付、年寄中・御家老中服紗小袖・布上下着用、例刻より段々登城之事。

一、四半時頃高野山天德院和尚登城に付、寺社奉行二人御式臺階之邊迄出向誘引、竹之間二之間江相通、着座之上御茶・たばこ盆新番持出之。役僧右同所下之方江相通、御茶・たばこ盆御步持出之候事。

一、伴僧者實檢之間に御屛風圍之內江相通候事。

一、和尙罷出候由寺社奉行より表方ゟ相達候上、年寄中一切、御家老中一切罷出、寺社奉行取合致挨拶事。

左之通献上物有之候由之事。

熊野白蜜　一箱

吉　野　油　一箱

一、九時御小書院御着座、御先立市三郞。和尙寺社奉行瀧之間まで誘引。和尙は敷居之外二疊目之疊中程ゟ罷出、追續き献上物敷居之内一疊目之疊ゟ御小將長瀨武十郞・多田主計指出置之。御奏者番奧野主馬佐、御左之方敷居之外二疊目に而、高野山天德院与披露。御意有之、御用番豐後守御取合申上。畢而献上物引之、和尙月番致挨拶。御同席御緣際一疊目之疊に而役僧一人御目見、御奏者番靑木新兵衞御緣際より二疊目御左之方に而披露。相濟、追付被爲入、御先立同前之事。

一、右相濟、最前被溜候竹之間二之間に而、和尙ゟ御餠菓子・御酒・御吸物等・後菓子被下。給事新番、布上下着用。役僧等ゟも同樣被下、後菓子之處御鉢菓子被下。給事御步、布上下着用之事。

但、御菓子之內、御奏者番靑木新兵衞罷出、及挨拶候事。

一、右御菓子等相濟、九半時過天徳院退出之節、御用番豊後守御廣間迄、寺社奉行・御奏者番御式臺階之邊迄送り候事。

左之通被下物有之候由之事。

白銀拾五枚　天徳院和尚

御目錄

包こんぶ

白銀二十枚宛　役僧一人

御目錄　伴僧二人

一月。金澤の魚問屋等屑魚の處分に關して稟請す。

〔文政中御用方留帳〕

近江町四十物商賣人、仕込方に浦々江罷越、不依何魚に、百筒与歟二百箇与歟善悪入交り候品、一集に買受不申而者、商事出來不申に付、先一集に買請、其上に而御當所向之魚撰出、殘り悪敷品は又々於其所商人へ賣拂來り申に付、格別賣落仕、御當所入魚高直に相成可申様に奉存候。依而以來は、善悪入交候品一集に爲買請、不殘御當所へ取寄爲賣拂申度、左候得ば入魚多、自然与直段も下直之場へ至り可申与奉存候。就夫右一集に買請罷越候鹽魚・

干魚之内、御當所に而賣捌、殘悪敷分は在方等に而可成丈爲賣捌候得共、其餘賣捌兼候品之内、左之通鮪・鱰・鮪子・きじ鮪・いか・ふぐ・すじ子・小鯖・小鰺九品之分、實に肴魚に而省兼候品は、私共見分之上他國商人江賣渡、津出相願候節は、私共切に而津出被仰付被下候樣奉願上候。元來是迄津出奉願上候節は、御算用場御印御請御渡被下候に付、彼是日數茂相懸り申事故、他國商人江致商事置候而茂、右御印物願中順風有之候へば、致置候商事相止、俄に出帆仕候事も御座候。既に文政五年三月奉願、冬烏賊五拾筒餘本吉津出被仰付候に付、早速荷物本吉へ持運候處、順風に相成前日出帆仕、無是非御消印相願、取戻し申候。右樣之儀に而四十物商人共相泥、商賣方進み不申候間、以來右九品之分は前段願之通被仰付被下候はゞ、商事仕直樣出船仕候而も指支不申事故、自ら商茂手廣に相成、仕入方も相泥不申、自然与御當地入魚多、直段茂追々下直に相成可申与奉存候。尤私共品物見分之上、御定之通三步半口錢取立津出爲仕、其時々御達可申上与奉存候。若私共切に而津出与申儀、御聞屆難被遊趣茂御座候はゞ、御用番御奉行所御印に而津出被仰付被下候樣奉願候。勿論右九品之外は、是迄之通時々書付を以奉願、御算用場御印物御渡之上津出爲仕可申候。併是迄は津出願書付に、御漆紙面を以御算用場江被爲仰遣候得共、以來は何卒御奥書御印に而私共御渡被下候はゞ、御算用場へ私共持參仕、御印奉願度奉存候間、何分右等之趣奉願上候。御聞屆之上は御算用場

へ被爲仰遣、宮腰浦等澗改役人江、夫々被仰渡置被下候樣、乍憚奉願上候、以上。

西二月　　魚問屋　半助

同　次郎助

於浦々に取揚候諸魚、不依何品に善惡入交一集に買請、金澤表江爲引登、撰殘候屑魚之分は津出相願、他國商人江賣渡度旨近江町魚問屋より願上候に付、右願書之寫御渡。因茲詮議之趣も御座候はゞ委細可申上旨、御紙面を以被仰渡、奉得其意。獵業有之浦々承糺候所、是迄取揚候諸魚、金澤商人相望申品は夫々賣渡、雜魚・屑魚等之分者獵師男女所々在々振賣に仕、且塩肴に仕、三歩半御口錢相立他國江賣出、都而小前之者共渡世之品に御座候所、雜魚迄も不殘金澤表へ爲登候樣に相成候而は、小前之男女子共に至迄、勵之品々無之樣に相成、先以渡世に差支申儀に而、甚迷惑仕候間、賣捌方是迄之通被仰付候樣奉願上度旨、獵師一統相歎申儀に御座候間、前段御賢察之上、宜御詮議被下度、小紙を以御達申上候、以上。

西四月　　高橋由五郎

北村覺右衛門

岡部七左衛門

北川尻村一三郎

相神村藤右衛門

御郡御奉行所

金澤近江町四十物商賣人、浦々において買請候魚、以後者善悪入交爲買請候而、不殘金澤ゟ引取、同所幷在方に而も賣捌兼候肴魚鰯等九品は、金澤魚問屋見分之上他國商人ゟ賣渡、右問屋切に而津出に被仰付候樣奉願候段、則右魚問屋平助等小紙之表、諸郡詮議之趣申上候樣、先達而被仰渡に御座候。諸郡之內能美郡之儀者、是迄小松ゟ賣捌來り、金澤ゟ者拘り不申、其餘御郡々詮議之趣仝相揃候而も無御座候得共、半助等願之通御聞屆御座候而、肴魚迄も金澤へ引取賣捌兼候分は、同所魚問屋より他國出津指支不申樣に相成候而は、畢竟浦々においで取揚候諸魚賣買方、金澤魚問屋主附候樣にも相成可申哉。左樣無之候共指當浦々四十物商賣人、地挆小賣人等、商賣方手狹に相成、買請來候在々においても迷惑至極仕申儀与奉存候。元來肴魚之儀者、先年より地挆に仕來候儀浦々振合に付、近年尙御詮議之上、御冥加銀・小賣札御役銀・他國出三歩半御口錢も上納仕罷在、且他國出等御縮方、是又去々年改而嚴重被仰渡置候儀に御座候間、旁以半助等願之趣御指留、魚方御定是迄之通に被仰付置可然、私共詮議仕候趣御達申上候事。

酉五月十四日

諸郡 惣年寄

本文の落着は明かならず

金澤魚問屋願之儀に付、諸郡詮議之趣別紙之通御達申に付、爲御承知相廻申候。落着より御返可被成候、以上。

五月十六日　神保助左衛門

諸郡惣年寄中樣

三月朔日。先に德川家齊の前田齊泰に贈れる鶴を披露す。

〔諸事覺書〕

三月朔日

一、今日御拜領之鶴御披に付、年寄中等熨斗目・上下に而五時過登城。

一、土佐守・丹後守・豐後守・伊勢守當病に而登城無之。

一、四半時過御表列立宜段申上、御居間書院ゟ御出、早見七左衛門・菊池九右衛門一切に御前へ被召、御家老・若年寄伺公。右相濟御奥書院ゟ藤田平兵衛御先立。御前御出前年寄中・御家老中・若年寄中同御下段御左之方二疊目之邊より二重に着座、織江儀御右之方御疊三疊目御襖際に罷在、御拜領之鶴御披被仰付。何茂御吸物被下置候旨被仰出、難有仕合奉存候旨御挨拶申上候處、御意有之、座上之者御請申上、末座より松之間之方ゟ段々退去。右相濟御小書院ゟ御出、御先立市三郎。役儀之御禮、且又初而之御目見。畢而御印物頂戴之人々相濟、御

大廣間江御出、御襖織江・修理披之。人持初惣様御目見、御拜領之鶴今日御披に付頂戴被仰付、難有仕合奉存候旨甲斐守披露。御意有之、御請求馬、重而御意有之、御襖たて被爲入。

一、追付御奥書院江各罷出候樣、御振廻奉行河村彌右衛門申聞候付、年寄中等・御家老中・若年寄御下段兩方に列座、御吸物御表小將指出し、何茂居付候上御前御出被遊、御意有之。御請甲斐守被申上、御入。御酒之內御近習頭武田喜左衛門を以御意有之、頂戴畢而同席に而御近習頭坂井與右衛門を以御禮申上候事。

一、九半時過御大廣間人持等席一番座御吸物出候上、御使御家老內藏助・藏人罷出御意申述、御酒之內甲斐守・求馬挨拶罷出候事。

一、船之間一番座御吸物出候付、御使御家老藏人御意演述、御酒之內內記挨拶申述事。

一、八時過御大廣間人持等二番座御吸物出候上、御使修理・內記罷出御意申述、御酒之內挨拶內膳・又兵衛罷出申述候事。

一、御大廣間三番座御吸物出候付、御使內藏助・庄兵衛罷出御意申述、御酒之內挨拶求馬・內膳申述候事。

御近習頭御振廻奉行

河村彌右衛門

坂井與右衛門
小谷兵左衛門
同　御横目
澤田市郎右衛門
兩人之内替々一人宛

一、七時過當番之諸番頭・御横目等御吸物頂戴相濟御禮申聞候付、織江儀御奥書院御縁頬に而謁候事。

左之通小紙に調、澤田市郎右衛門を以上之。

今日當番之諸番頭・御横目等御吸物被下之、難有仕合奉存候段、何茂御禮之趣私迄申聞候、以上。

三月朔日　　前田織江

一、御表に而頂戴候出仕之面々、頂戴相濟何茂列座、年寄中謁七時前退出。
但、明日爲御禮登城御帳に付、年寄中へ爲御禮廻勤有之事。

三月二日。前田齊泰能を演ず。

〔諸事覺書〕

三月二日
一、今日御能有之候付、各常服に而五時出席之事。
一、五半時過拜見所江相廻候樣、澤田市郎右衛門申聞候付、何茂罷越。庄兵衛儀無據儀御座候付、定刻より退出仕度旨昨日月番迄相達、八時頃右之趣御近習頭河村彌右衛門江申述致退出候事。

御番組

淡路 權兵衛　芦苅 御　弱法師 權進
枕慈童 御　鉢木 宮門　大江山 要人
船辨慶 御　祝言金札 鍋吉
八幡前　牛盜人　歌仙　子盜人

右御能暮頃相濟、各鈴木清左衛門を以御禮申上退出候事。

〔橫山氏日記〕

三月二日

三月二日。寺島藏人の役儀を除き逼塞を命ず。

一、左之通今日表方に而申渡有之。

寺嶋藏人

御手前儀不應思召儀有之に付、役儀被指除、逼塞被仰付候。此段可申渡旨被仰出。

〔溫敬公記史料〕

三月二日。禰馬廻頭寺嶋兢官屏居之。兢嘗在教諭局。謂金龍公曰。君知屋漏之說乎。非屋下人不能辨其處。譬之廟堂猶屋上。而群臣衆庶屋下之人也。其不使屋下之人言之。屋上何由得知其漏不漏乎。公稱善云。

三月十日。三條西實勳内用を以て使者を金澤に派す。

〔官私隨筆〕

三月九日

一、三條樣より御內用之御使者河村肥後守被指向、明十日拙宅へ罷越、御使者相勤候筈に候。其節何も御引出有之候旨に付、是又拙者承請。且御迄り物も有之由に候間、御目錄迄御使者拙宅へ持參。御品物者旅宿片町——迄、明日夕七時過人々より使者指遣受取申筈に候。——御品物は三幅對一箱之由に御座候旨、昨日御用番より紙面到來。今夕右御目錄幷御口上書寫、御用番より以紙面來る。御掛物三幅箱入使者請取來る。花山院前右大臣愛德公御書、同權大

本年九月十六日の條參照拙宅は奥村丹後守

納言家厚卿御書也。

〔諸事覺書〕

三月十日

一、三條樣より此度御内用之御使者河村肥後守、今十日御用番甲斐守宅江罷越御使相勤。其節何茂江も御送物有之、御目錄まで持參。御品物は旅宿片町大浦屋幸右衛門方迄、今夕七時過使者指出し爲請取候筈候旨演述。

右之通に付、各より使者指出、御品物爲請取、目錄は甲州宅江申遣請取。將監儀在江戸に付、御送物有之候御品物受取方等も、執筆より爲申遣候事。

御口上

御家老中

春暖之節彌御堅固被爲御勤達珍重被存候。然者先達而使者被指出、七ヶ年之間毎歳御助成之儀御賴被申入候處、各樣方御執成を以御領掌被爲在、辱被存候。今般爲御禮使者被指出候付、年序各樣方へも厚御挨拶可被申入旨被申付候。隨而御目錄之通御官筆御書一幅充被相贈候間、於御受納は大慶被致候事。

三條中納言殿使者

三條樣より御進物、御卷物・御菓子・行幸之圖。年寄中江御懸物二幅對一箱。御家老中江横物御懸物一箱。

三月十一日。前田齊泰家督相續の際祝儀を上りたる諸士に謝狀を與ふ。

〔官私隨筆〕

三月十一日

一、御家督・御轉任等御祝儀物献上仕候付、頭分以上一統へ御書被成下候付、今日御用番迄被渡下、於席被相渡、請取復座之上各拜戴。

但、組中へは享和之例を以、御用番より被渡候。組頭は不及貪着候也。最初組頭被渡、組頭より夫々相渡候趣に僉議治定之由。是は延享之御例之由也。夫故自分組之筆頭横山又五郎に逢候而内々心得申入、今日俄に拙宅へ相招候儀も可有之候條、相組中へ内々可被申入置旨申聞置候所、重而僉議替り右之通也。依而共趣重而又五郎へ申入。

三月十二日。前田齊泰、財政窮迫するを以て大に節約の法を講ずべきを告ぐ。

〔御親翰留〕
連々勝手向逼迫之處、當時に而は必至与運方無之旨令承知、心痛之事に候。此上者格外之省略可有之儀に候之條、取しらべ可被申候。於此方も猶諸事省略可申付候。今度在府中も其心得可有之候。夫に付家中之人々等、且又江戸詰人等、質素に相心得候樣、嚴重に可被申渡候事。

右御親翰三月十二日、甲斐守・豐後守・內膳被爲召、於御用之御間御渡、土佐守・求馬・又兵衞江茂可被申談旨御意之事。

三月十三日。前田齊泰參覲の爲に金澤を發す。

〔諸事覺書〕
三月十三日
一、今日御發駕に付年寄中五時前出席、御供之求馬・又兵衞・庄兵衞儀は、旅裝束に而五時過出席、相伺御機嫌候事。
一、四時過御居間書院江御出、但旅御裝束眞龍院樣御附使者古屋甚兵衞被召御直答。相濟甲斐守・豐後守・丹後守・內膳被召御意有之。退候上磐松・彈番・九郎左衞門被召御意有之。退候上伊勢守被召御意有之。退候上內藏助・藏人・織江・修理・內記被召御意有之。應候而御請申上退去之

事。

一、同半時前御供宜段申上御出、御先立内記。御大廣間御縁頬瀧之間を後に求馬・又兵衛・庄兵衛罷出有之。御意有之。夫より御廣縁通り、表御式臺階下内より左之方甲斐守等罷出、右之方伊勢守・御家老中罷出、御意有之。他亀次郎殿階下ゟ御送、御先立内記右之方板端ゟ相扣、御式附ゟ御近習頭幷御刀持之表小將罷出相扣、御馬に被召御發駕之事。

一、磐松・彈番・九郎左衛門三御丸橋爪例之所ゟ罷出、御意有之。役懸之人持・頭分御作法書之通罷出、御意有之事。

一、御發駕後何茂御用番ゟ恐悦申述。

一、年寄中等退出より御廣式ゟ罷出、直姫様初方々様幷榮操院様ゟ御發駕之御祝詞申上事。

十二御泊附

金澤	三里十八町	津幡御中休	三里十七町	今石動御泊	〆六里三十五町
今石動	四里			高岡御泊	〆四里
高岡	七里三町	東岩瀬御中休	四里廿六町	魚津御泊	〆十一里廿九町
魚津	三里三十町	浦山御中休	四里九町	泊御泊	〆八里三町
泊	五里十八町	青海御中休	一里十六町	糸魚川御泊	〆六里卅四町

糸魚川	六　里	名立御中休	六　里	高田御泊	〆十二里
高田	八里十六町	關川御中休	四　里	牟禮御泊	〆十二里十六町
牟禮	四　里	丹波嶋御中休	六　里	榊御泊	〆十　里
榊	五里十八町	海野御中休	六　里	追分御泊	〆十一里十八町
追分	四里三十町	坂本御中休	五里十三町	板鼻御泊	〆十里七町
板鼻	四里廿三町	落合新町御中休	七里十九町	熊谷御泊	〆十二里六町
熊谷	四里八町	鴻巣御中休	六里四町	浦和御泊	〆十里十二町
浦和	一里十八町	蕨御中休	三里十町	江戸	〆四里廿八町

以上

三月十八日。金澤桂岸寺に於いて五百羅漢の開眼を行ふ。

〔似寄留〕

三月十八日より、寺町桂岸寺五百羅漢出來に付入佛かいげん、天氣よく參詣群集仕、廿八日迄。

三月廿一日。前田齊廣の女直姫病篤し。

〔諸事覺書〕

三月廿一日

一、直姫樣去年已來御氣色御勝不被成候處、先頃より惣體不御快、御小水不利、御動搖も被成兼、御食餌不被召上候。御醫師何茂診被仰付候處同按に而、先御同遍に被成御座候。今日は御家中醫師等へも診被仰付候筈に候旨等、昨日御樣子書山口清太夫より御用番江相達候由に而、各江爲承知廻狀有之。

右に付御機嫌伺之儀は、先今日之所に而は相見合可然旨も申來事。

三月廿七日。前田齊泰江戸に着す。

〔官私隨筆〕

三月十七日

一、中將樣益御機嫌能御旅行、當十七日糸魚川御止宿被遊候。且又尾張樣、御國許へ之御暇被仰出、十五日御禮被仰上候へば、十八日江戸御發駕、廿一日追分御止宿之筈之旨聞番承合候由、御用人より御道中奉行迄及言上候付、廿一日此方樣追分御泊に差合に付、段々御僉議之上、別紙御泊附之通御旅行、當廿六日御着被遊候旨被仰付候段、當九日江戸發足町飛脚に傳附、横山求馬殿等より只今申來候由、御用番より紙面來る。別紙略

三月廿六日

一、中將樣益御機嫌能御旅行、當廿日犀川・筑摩川等無御滯御越、廿日榊驛御止宿被遊候旨、求馬殿等より早飛脚を以申來候。先以恐悅御同意御座候。且尾張樣御通行に御指合之儀等、先達而申來候通に而御指支に付、同驛に廿一日一日御逗留、翌日追分迄被爲入候儀指支候付、小諸へ被爲入、同所に御泊、廿三日追分驛御泊、夫より兼而之御泊附之通御旅行、廿七日御着可被遊旨申來候付、此段爲御承知申進候由、御用番紙面來。

四月五日

一、中將樣御途中益御機嫌能、前月廿七日午の刻御着府被遊候。御供人末々迄無滯罷越候段、同日江戶發足中飛脚を以申來候由、御用番より紙面到來。

三月廿八日。前田齊廣の女直姬逝去す。

〔官私隨筆〕

三月廿八日

一、直姬樣御病氣御指引被爲在候旨、只今小森源左衞門より申來候付、拙者儀御廣式へ罷出、相伺御機嫌申候間、御自分樣にも御出御伺可被成候、以上。

右之紙面七時過到來、追付罷出、佐久間武太夫を以御機嫌伺之、御容子相尋候處、廿五・六日以後御食事御通じ共とかく少く被爲在候內、昨晚より今朝ゟ懸殊之外御煩悶被爲成、御燥き

甚敷、犀角杯御好に而被召上候所、晝後に至少穩に被爲成、御睡眠も被成候所、其後御目覺御床返り被成、其儘に而次第に御絕息之形に被爲至、只今は最早可申上御樣子も無之旨。

〔諸事覺書〕

三月廿九日

一、直姬樣御容躰段々御疲勞御募御指重、御大切に被爲及候段、小森源左衛門申聞候。依之御廣式ゟ罷出相伺御機嫌、右に付恒姬樣奉初方々樣御機嫌も相伺候筈候旨、月番より以紙面申來、各九半時頃罷出相伺候事。

三月廿八日。古金銀通用停止に付き引替の爲新銀預手形を發行す。

〔御觸拔書〕

水野出羽守殿御渡候御書付寫一通相達候間、被得其意、答之儀者松浦伊勢守方ゟ可被申聞候、以上。

二月十七日　　　大目付

松平加賀守殿留守居中

大目付ゟ

古金銀通用之儀、當二月を限り候樣に与去申年三月相觸候處、今以古金銀引替殘り有之趣に

本文は幕令なり

この預手形は本年六月十七日の條の新銀預手形なり

候。遠國等未行屆哉に付、古金銀引替之儀當酉年七月を限り、不殘引替可申候、尤遠國之分、去申年閏八月相觸候通、引替之金銀高幷道法遠近に應じ、道中入用茂被下候事に候得者、御料者御代官、私領者領主・地頭に而彌厚世話致し、最寄引替所ゟ爲差出、不殘引替候樣可申付。當酉八月より古金銀通用彌停止たるべく候間、無油斷引替差出可申候。尤停止以後通用いたし候者於有之者、急度可申付候。

右之趣可被相觸候。

二　月

古金銀當七月を限不殘引替可申、八月より通用御停止之旨、重而從公儀被仰渡候に付、先達而一統相觸候通に候。依之石浦町俵屋銅助家引替所に申渡、御歩横目・御算用者出役、兩替酒屋宗左衞門・升屋治右衞門等爲相詰、引替方爲相勤候條、古金銀所持之人々者、來月朔日より五月晦日迄之內、右引替所ゟ指出、新金銀子引替可申候。右日限以後、古金銀所持人は自分に引替可申候。且又兩替共より京・大坂等引替所ゟ古金銀爲指遣候處、渡方乏敷指支候間、此表に而茂正銀迄に而者引替渡指支候付、右引替新銀到來迄之間、御領國通用銀子預手形を以引替可相渡候條、左樣可相心得候。京都等より引替新金銀到來次第、追々新金銀右手形与引替爲相渡候筈候間、受取日限之儀は引替所に而承合可申候。乍併無據趣有之、正銀

に而引替不申而指支候者は、其品於御算用場僉議之上、正金銀を以引替相渡筈に候。將又小玉銀并少銀高引替に出候分は、丁銀・小玉之無差別引替相渡、至而少銀之分者錢をも相交爲相渡申筈に候。

右之通被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配に茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

三月廿八日　　長甲斐守

三月廿九日。德川家齊使者を遣はして前田齊泰の參覲を勞せしむ。

〔溫敬公史料〕

三月二十九日。將軍遣大久保加賀守來勞。

三月晦日。前田齊泰登營の際に於ける下馬下乘の位置を改めらる。

〔御年表〕

同八年三月晦日於江戶被仰出候は、御登城之節御下乘所等之儀御願込之處、御本丸にては百人番所中程にて御下乘・御乘輿共御勝手次第之旨被仰渡。西御丸にては是迄之所より二・三間相進み御下乘之筈に被仰渡候段被仰出。

是月は大盡なり

直姫の逝去實は二十八日なり

三月晦日。前田齊廣の女直姫の歿したることを發表す。

〔諸事覺書〕

三月晦日

一、直姫樣御氣滯御療養不被爲叶、今曉丑之中刻御卒去之段御廣式頭申聞候付、恒姫樣始方々樣御容躰相伺候筈候旨、五時過月番より以紙面申來。且又示談之儀も有之候間、直に越後屋敷江可出席之旨も申來候付、各御廣式へ罷出相伺、夫より越後屋敷へ出席候事。

〔官私隨筆〕

三月晦日

一、直姫樣御氣色御滯被成候所、段々御指重、不被爲叶御療養、今曉丑之中刻御卒去被成候。依之普請は今日より來月二日迄三日、鳴物等は同六日迄、諸殺生は同十九日迄、御忌中日數遠慮可仕候。右に付頭分以上之面々、明朔日爲伺御機嫌御用番宅へ可有參出候。幼少・病氣等之人々は以使者可申越候。右之趣――。

右觸狀寫御用番より以添紙面到來。

〔諸事覺書〕

四月朔日

一、直姬様御法號彛香院殿文璘慧玉大姉。

三月。參覲往來の際諸士に貸與したる人馬增賃銀返納の件に關して令す。

〔御觸拔書〕

付札、定番頭江

御參勤御往來之節、御供之人々越後市振より信州牟禮迄相雇候通人馬增賃銀、御上より御取替之分、無利足貳拾箇年賦を以會所貸銀所江取立來候へ共、右者人々手前に而は少銀之儀、殊に緩かに御取立故、少々宛之上納數口に相成、取立方も繁雜に付、今般詮議之上、是迄年賦上納仕來候分は只今迄之通、當御參勤より以來は右賃銀、其時々半銀は一時に御取立、半銀は被下切に被仰付候。依而是以後於御道中方定賃銀取立候節、右增賃半銀茂取立候筈に候。且文政五年秋御出府、并去春御入國御道中兩度之分者、此度打込、當年より無利足二十箇年賦を以貸銀所江取立候樣、會所奉行江申渡候。

但、此度打込二十箇年賦之分、并是迄年賦返上殘元高之內、半銀一時上納いたし、殘銀不及上納儀茂勝手次第に候。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江茂相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

乙　酉　三　月

三月。諸郡村々組合頭の老年となりたる者の代役に關して告ぐ。

〔御觸留拔書〕

諸郡村々組合頭役之者、老年におよび駈廻御用勤兼候者之儀は、忰名代爲相勤候處、今般詮議之趣有之、前條之通駈廻御用相勤兼、外組合頭に相成候者も無之時は、以來七拾歳以上之者之儀は、親勤功を以せがれに代り組合頭役可申付候。尤讓高之儀は難承屆候。且七拾歳以下に而駈廻相勤兼候者之儀者、是迄之通忰名代を以爲相勤可申候條、可得其意候、以上。

乙　酉　三　月　　　　御　郡　奉　行

諸郡御年寄中・年寄並中

四月朔日。前田齊泰登營して參覲の禮を行ふ。

〔官私隨筆〕

一、途中無異儀去月廿七日到着候處、同廿九日以上使大久保加賀守殿蒙上意、且又今日於御黒書院參勤之御禮申上、殊御懇之上意、横山求馬・村井又兵衛御目見被仰付、重疊難有仕合候。此等之趣爲可申聞如此候、謹言。

中將　　御名　御判

四月朔日

奥村丹後守殿

〔續德川實紀〕

四月朔日、月次の賀例のごとし。松平加賀守參覲す。

四月十日。前田齊廣の女直姫の葬儀を行ふ。

〔御觸拔書〕

御横目江

當月十日桑香院樣御葬式に付、普請・鳴物等之儀、御當日御葬式相濟候迄、自分に指扣可申候。

一、御中陰御法事、當十三日一朝於天德院御執行有之候。右之節普請・鳴物等不及遠慮候。乍然天德院近邊に罷在候者は、御法事御執行之内自分に指扣可申候。此段組・支配江被申渡、組等之内裁許有之面々は、其支配江茂相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

四月六日　　村井又兵衛

〔諸事覺書〕

四月十日

一、今曉鑿香院樣御葬式に付、御供修理相勤候付、御供揃刻限四時頃より、熨斗目・淺黃上下着用御廣式江罷出相詰、御供廻之案內次第御數寄屋御門より罷出、夜八時過御出棺、天德院江被爲入、御法會曉七半時過相濟、六半時過御寺御出棺、夫より野田江被爲入、騎馬御供に候事。

四月廿二日。前田齊泰諸士の文武を勵むべきことを諭す。

〔御親翰之寫一通〕

諸士風俗之儀に付而者、先代より每度被仰出、其時々暫は相愼樣にも候得共、人氣輕薄にて無程立歸候樣子。就中金龍院殿士風御引直被成度思召に而、深御世話被成、格別に御敎諭も被成候所、其刻は志氣も可相立体にも相聞候よし之處、不幸にして早御逝去被成、我等幼年未熟ながら不得止事政を聞申事と相成、是迄領國中無異事、且公務之無指支過來候之儀者、全く先公代々之御遺德に候。何茂普代舊功之者共之事に候得者、聊麁略之心得も有之間敷候得共、金龍院樣段々被仰出置候趣自然と忘失いたし、士風次第に衰敗に至り、農工商も自ら惰弱之風俗彌增候而者、取治方も益不行屆樣に相成、我等御奉公之筋も不相立、且先代江對

し無申譯、誠不安事に候。只々士風衰候に從ひ廉恥の心薄、中には士之本分をも取失候場江も可至体、なげかはしき事に候。士風一變いたし、追々農工商までも風俗引直、各本分之業を勵、安穩にあらしめたく候。今度年寄中江も存寄申出候。何茂油斷有之間敷候得ども、儉約を以勝手取續、尙忠節を勵、治亂共其用を達し候心懸尤に候。是等之趣組・支配江も不相洩爲申聞、何茂文武之心懸、且一家之仕置等も、身を以先立申心得可爲肝要候。年若之人々者別而文武を勵可申候。

右之趣人持・諸頭江可被申聞候、以上。

四月二十二日

年寄中

四月廿四日。金澤に於いて諸士に前田齊泰の着府以後の事情を告ぐ。

〔諸事覺書〕

四月廿四日

中將樣御途中御機嫌能、前月廿七日御着府被遊候處、同廿九日以上使大久保加賀守殿被蒙上意、且又當朔日御登城被遊、於御黑書院御參勤之御禮被仰付、殊に御懇之上意、橫山求馬・村井又兵衞御目見被仰付、重疊難有被思召候。此段何茂江爲申聞旨御書を以被仰下候事。

本年三月十二日の條參照

四月廿五日。諸士に質素を專とすべき藩侯の諭示を傳達す。

四月廿五日

〔官私隨筆〕

一、別紙之通一統申渡候付、爲御承知進之候條、御組等へも御申聞可被成候以上と之添紙面を以、左之一通御用番より到來。（跡々承候へば御勝手方に而被致候由なり。）

連々御勝手向御逼迫之所、當時にては必至と御運方無之旨御承知被遊、御心痛之御事に候。此上は格外之御省略可有之儀候條、取調理可申候。於御前茂猶諸事御省略可被仰付候。今度御在府中茂共御心得可被爲在候。夫に付御家中之人々等、且又江戸詰人等質素に相心得候様嚴重可申渡候。

右之趣今度御發駕前、拙者共御前へ被爲召、御親翰之御書立を以被仰渡候。當時御若年に被爲在候處、御運方御急迫之趣等相達御聽、御身分を初格外御省略被思召立候儀、誠以恐入申事に候。依之御省略之儀追々可遂僉議候。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配之面々へ可被申渡候。組等之内裁許有之人々は、其支配へも相達候様可被申聞候事。

四月　　　奥村内膳

右之通寫、御臺所奉行へ廿八日越後屋敷に而織江申渡、若年寄方に而御細工奉行并三十人頭・

坊主頭・御鷹匠小頭へ渡之候事。

四月廿九日。省略の實行に就き各意見を上らしむ。

〔諸事覺書〕

四月廿九日

一、左之通月番より演述。

格別御省略被仰出候趣等、今般一統申渡候通に候。右に付御省略心付候趣も有之候はゞ、尤

同役遂熟談、無泥可被申聞候。拙者共よりも追々遂詮議申渡候儀も可有之候。此段譯而申渡

候事。

四月

四月。古金銀の諸上納は五月中を限るべきことを告ぐ。

〔御觸拔書〕

今般古金銀引替に付、新金銀到來迄之間、御當地引替所預手形御領國通用之分、諸上納に相

用候儀不指支候。且當六月朔日以後、古金銀諸上納に指出申間敷事。

一、諸役所御在金銀之內古金銀、當六月朔日ゟ越不申樣可相心得候事。

本年三月廿八日の條參照

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配江茂相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

四　月

別紙寫は本年七月の條に出す

五月廿二日。異國船打拂に關する幕令を遠所奉行に傳ふ。

〔諸事覺書〕

五月廿二日

一、左之通表方江申渡有之覺書

遠所町奉行等江申渡候趣

近年いぎりす之船所々江小船に而乘寄、薪水食料を乞、追々横行之振舞有之儀等に付、從公儀被仰渡之趣別紙寫之通に候。右打拂御手當之儀は、多分御郡奉行支配地に有之儀故、先御算用場奉行申談、御郡奉行遂詮議、何れの浦に而も異國船見當り候はゞ、出役所詰之御郡奉行より向寄之町奉行等在住之所は右奉行人示合、町・在之者共雜兵に仕立、在合之水旗・目印樣之物を粧ひ、容易に上陸難相成立賦いたし、急飛脚を以此表根役所江告越候得者、根役所より御郡奉行急速右ヶ所へ出張、其節は炮術等之足輕可相渡しらべに候。其上之儀は御人數

被指向候所へも可至哉、時宜次第之事に候。依之御手前支配所右船相廻候節、御郡奉行示合、手配方之儀可有詮議候。且又前々より御預之道具有之候はゞ、急時之御手當に可相成、左候得者常之手入之儀、幷玉藥等用意之儀、無怠慢樣可被致置儀に候。今般從公儀被仰渡之趣は、土地相應實用專一に可心懸、手重過不中、怠慢も無之樣示談可致、便宜を考可申旨に候條、此所會得有之、內密遂詮議可被申聞候。

但、僉議方に寄、下々之者只今事も起候樣に相心得、人氣騷敷躰も可有之哉に付、內密遂詮議申儀候條、可有其心得候。

六月九日。去年の詮議に漏れたる諸士に仕法調達銀貸附の件を告ぐ。

〔雜事日記〕

別紙村杢右衛門より到來に付、寫一通相達之候條、御承知有之、先々無遲滯被相廻、落着より可有御返候、以上。

六月九日　　篠嶋權之助

付札、定番頭江

去年七月御仕法御調達銀之內を以、御家中一統御貸附之砌、町會所仕迯之人々、右御貸銀を以引取難相成人々は、當年に至り御詮議之筋有之旨等、一統申渡置候通に候。依而右引取相

文政七年五月の條參照

殘居候仕送人江、御貸渡方之儀等僉議被仰付候處、多分知行高等不應借財高故、通例之御貸渡方に而勝手引取之處江可至分は稀少に候。併不應身上御貸附に而者、往々人々爲にも不相成儀。因茲右仕送人江、百石に銀七百五十目宛之圖りを以御貸渡、右を以當年勝手引取相成候分迄今般御貸渡可相成候。右に而難引取多借之人々は、追々借銀減少、右御貸付を以引取可相成程分に至り、御貸渡可被成候條、頭々等より町奉行示合可申候。

右御貸銀、御切米等之分は知行に直し、前段之割合を以御貸渡、返納方等者都而去七月之通に候。委曲之儀は御仕法銀主付澤田義門等江承合可申候。

御勝手御運方必至与御指支に付而者、以來右仕送之儀一圓可被差止候得共、左候而者指支之儀も可有之儀に付、二百石以下之人々家內人多等に而、格別無據子細有之分は、其譯於頭々等手前精誠遂僉議、相願候者承屆可申、其餘者堅く承屆申間敷候。

右之趣被得其意、組・支配之人々可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之通一統可被申談候事。

乙酉六月

六月十七日。新銀預手形の內小割札を發行すべきこと等を告ぐ。

次掲の文に小割五十目札あり

〔御觸拔書〕

今度金銀引替に付、新銀・小玉拂底、諸上納銀等懸分方指支可申候間、先達而引替之新銀預り手形之內、小割札に拵、壹匁より拾匁迄之通用札に、於御算用場通用方致加印、右之分諸上納等御領國一統通用可致候事。

一、上納銀端封壹匁に滿不申分者、時相場に不拘、銀壹匁代丁錢百文之圖を以、當月より當分錢上納勝手次第たるべく候。且右錢包紙之表、銀何分何厘代錢何拾何文与相調、上納人名印記、尤封じ目にも印形いたし差出可申事。

一、新銀引替手形、先達而より一統江相渡置候內、壹貫目札之分百目封等に切分け方不自由之躰に付、新銀与引替可相渡候間、當月廿六日より來る七月十日迄之內、壹貫目札所持之者、石浦町引替所江請取に罷出可申候事。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

六月十七日　　長甲斐守

〔見聞袋群斗記〕

六月より御領國銀手形小割札通用、左之通なり。
壹匁札　貳匁札　三匁札　五匁札　拾匁札　五十目札
右各百目札に准ず。長・幅は壹匁より貳匁段々大きく有之なり。

六月二十日。前田齊廣の子他龜次郎病篤し。

〔諸事覺書〕
六月廿日
一、左之通月番より申來候に付、各御廣式江罷出相伺、夫より直に越後屋敷江出席之事。
他龜次郎殿昨晝後之御容躰、朝与先御同様に候内、次第御疲勞被爲見、被召上方も御少御座候に付、野中丹室御藥差上、江間篁齋等江猶更致僉議候處、御兼用之白虎加人參湯等を御本劑に差上可申、此外聊存付無之旨何茂申聞候付、右御藥差上候旨等、昨夜山口清太夫より申越候處、漸く御疲勞御加、御重症至極之旨、今曉清太夫より申越候付、拙者儀御廣式江罷出相伺御容躰候間、御自分樣にも追付御出御伺可被成候。右に付及御示談度儀有之候間、御廣式より直に越後屋敷江御出席候樣にと存候、以上。
六月廿日　長甲斐守
前田織江樣

六月廿一日。前田齊廣の子他龜次郎歿す。

〔官私隨筆〕

六月廿一日

一、他龜次郎殿御氣滯御療養不被爲叶、今廿一日申之中刻御死去之段、只今御廣式頭申聞候付申進候。先以奉絶言語候儀御座候。右に付御廣式へ御出、恒姫樣奉初、方々樣御容躰御伺被成候樣にと存候と之趣、御用番紙面夜六時過到來。追付罷出、土肥權六郞を以相伺之、御樣子尋候處、御容子御指障も不被成御座由演述。

〔諸事覺書〕

六月廿一日

一、右に付普請は今日より廿三日迄、鳴物等は廿七日迄、殺生は來月十一日迄遠慮候筈に候旨、夫々觸有之。

一、頭分以上明日爲伺御機嫌月番宅へ相勤候。幼少・病氣之人々は以使者相伺候筈に候旨、觸付有之候事。

六月廿四日

一、他龜次郎殿御法號戒光院殿智賢定心居士。

六月廿八日。來七月行はるべき前田齊廣の一周忌法會を延期すべきことを告ぐ。

〔官私隨筆〕

六月廿八日

一、今般御凶事に付、金龍院樣御一周忌御法事御指延に相成候。御日取之儀は追而可申進之旨、且又御同所樣御廟所へ、各御切籠致獻上候趣に遂示談候由、御用番より夫々以紙面被申越候。

七月朔日。錢貨缺乏するを以て錢手形を發行す。

〔御觸拔書〕

近來錢拂底之樣子に而、相場引立不融通相成候付、當分錢手形致出來候者、一統通用方辨利可有之候。依之錢手形町會所に而出來、五拾文より百文・五百文・壹貫文迄四通りに仕立、尤御算用場致加印等、右手形來月朔日より可指出候間、正錢同樣無滯通用可致候。

一、町會所之內右手形渡所相建、町同心幷町年寄瞖懸り之町役人等爲相詰置、來月朔日より同十四日迄者、每日朝四時より夕八時迄之間、御家中幷町・在共、錢手形望次第手形所ゟ直に相向、銀子或は新銀預り手形等致持參候者、引替相渡可申候。盆後よりは偶日迄、右手形所

相建可申候。

但、百目以上丸銀迄錢手形引替可申候。

一、錢手形相場百目拾貫文指に相極候事。

一、錢手形に而銀子致兩替度分は、拾貫文已上之手形高持參次第、正銀幷銀手形之内を引替相渡。尤右兩替方、先々より錢屋等江相向相辨候儀は可爲勝手次第候。

一、前條引替候正銀等、町同心・町年寄爲致相封、町會所において始末方嚴重申付、錢手形を以兩替に相向候時々、銀子無手支引替可遣候。錢手形指止候節は、右始末いたし置候銀子を以、一時に引揚申筈に候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

六月廿四日　　　　長　甲斐守

〔御觸抜書〕

定番頭江

今般於町會所錢手形出來に付、當時上納銀壹匁に滿不申分は、時相場に不拘、銀壹匁代丁錢

百文之圖ト〻を以上納可致旨、先達而一統申渡置候間、右錢手形裏に名印相記、上納可爲勝手次第候事。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之裁許有之面々は、其支配江茂相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

七　月

〔見聞袋群斗記〕

七月朔日より錢手形通用被仰渡。

五十文　百文　五百文　壹貫文なり。

是は至極辨じ能き物なり。

七月四日。藩の收入足らざるを以て諸向入用を節減すべきことを告ぐ。

〔組用留記拔書〕

御勝手向御運方六ケ敷、地・他御借財相嵩候儀は、根元御取箇与定式御入用御符合無之故、連々御難澁に被爲至候に付、文政四年御符合之御詮議可被仰付旨被仰出、段々取調理被仰付候處、三都御入用幷諸向御借財莫大之儀に而、此方江は御收納米を以御引當に相成居候處、過

分之御不足に候へ共外に出方無之儀故、色々御手繰を以是迄漸御辨之儀に候。右之外御國方諸向御入用は、諸方御土藏上納銀等之御入箇を以御辨之所、此分定式之御入用与引合候所、年分七百貫目計之御不足に相成候。右御不足分曁臨時不時御入用之分、年々町調達を以辨來候故、御借財は次第に相嵩、御利足之出方迄も過分至極に相成、當時に而は御當用も必至与御指支、其上江戸表御住居向御普請等、追々莫大之御物入指湊居候儀は一統承知之通に候所、未其御手當も無之、誠以不容易御逼迫之御時節に付、先般格別之御省略被仰付候儀に候。是迄段々御省略被仰付、近年二割減も有之上には候得共、此上尙自・他共萬端御省略被仰付、先御國方御地盤之御運方御入箇与御符合仕候樣可被仰付候。依之前段御不足高七百貫目計之分、諸向御入用高之內減少を以辨方之儀出來候樣有之度、勿論右御不足高御埋合出來候とて、當時之御借財高に而は中々引足り申事に而は無之候へども、先御國方定式之所右之通被仰付度御主意に候條、是迄之仕來等を打欠候而成共、何分御符合之筋相立候樣、何茂精誠を盡し可遂詮議候。猶又心付之趣無泥被申聞、右減方之儀御符合方役所可被示合候事。

酉七月四日　　村井豐後守

七月六日。前田齊廣の子他龜次郎の葬儀を行ふ。

［官私隨筆］

六月廿八日

一、來月六日戒光院樣御葬式に付、普請・鳴物等之儀、御當日御葬式相濟候迄自分に指扣可申旨。且又御中陰御法事來月九日一朝於寶圓寺御執行有之候節、普請・鳴物等不及遠慮候。乍然御寺近邊に罷在候者は、御法事御執行之內自分に差扣可申旨、御横目觸之旨御用番より申來る。

〔諸事覺書〕

七月六日

一、今日戒光院樣御葬式に付、御供將監相勤候付、今曉七時（服半喪服に付淺帷子・淺黃上下。）金谷御廣式へ罷出、卯上刻御出棺、寶圓寺迄騎馬御供相勤、御廟に被爲入、式相濟九半時過罷歸候事。

一、右之節寶圓寺に詰甲斐守、御名代之御燒香內藏助相勤候に付、六時前より相詰、（服常之帷子・上下也。）御燒香相濟、四時前退出候事。

七月廿五日。本日より犀川河原に相撲を興行す。

〔歲々略曆〕

七月廿五日より大角力興行、才川々原。西大關小柳長吉、東大關稻妻平吉。右小柳と申は能州小柳村出生。

小柳長吉は後の阿武松緑之助にして七海村の産

〔似寄留〕

七月廿五日より犀川々原に於て角力有。上より下る。大關稲妻雷五郎・小柳長吉、脇高砂浦右衛門・鐵石浪五郎、其外五六十人計。

七月廿九日。徳川家齊、前田齊泰に放鷹によりて獲たる雲雀を贈る。

〔官私隨筆〕

八月八日

一、前月廿九日上使御使番堀小四郎殿を以、御鷹之雲雀御拜領被遊候。御盃事は御斷に而、御菓子・御吸物等出、萬端首尾能相濟申候。上使御退出後、爲御禮御登城、夫より御老中方御勤被遊候旨申來候由、御用番より以紙面被申越。

七月廿九日。前田齊泰に來嫁すべき夫人の爲に本郷邸に於ける居室の普請初を行ふ。

〔江戸毎日書立書拔〕

七月廿九日

一、今日御住居向御普請木作始幷御柱建御規式有之。懸り役人揃刻限朝六半時に付、求馬・

又兵衞・庄兵衞儀布上下着用、六半時過出席いたし候事。

一、五時過御規式相始可申旨、御普請方主付頭申聞候付、求馬等御普請處ゟ罷越候處、追付相始候旨御横目申聞、四時過相濟候段、重而御横目申聞候事。

一、於御普請所神酒一備祭主持參、求馬等前に指置候付頂戴之。給事席坊主之事。

一、右夫々相濟、於席求馬等三人一列、以彌右衞門御規式首尾能相濟、恐悅之至奉存候旨申上候處、追付以清右衞門御意有之。

但、金澤年寄中等より恐悅申上候儀は無之。

一、今日御規式之神酒等御下頂戴被仰付候段被仰出候旨、御勝奉行長井平吉席ゟ罷出申聞候付、夫々申談、求馬・又兵衞・庄兵衞・市三郎一列、於御席御酒・御吸物頂戴。給事坊主。畢而以同人御禮申上候事。

七月。異國船打拂に關する幕令を諸浦に傳ふ。

〔御觸留拔書〕

いぎりす船先年長崎において及狼藉、近年者食料を乞申族等有之。其上邪宗門勸入候由相聞候に付、難被捨置候。依而異國船与見請候はゞ、打拂不爲致上陸樣等之儀、從公儀被仰渡候御觸等別紙六通相渡之候條、於浦々右樣之船見請候はゞ、早々最寄之出役所幷惣年寄等向寄

之役人江も相届可申候。尤所々町奉行等他手合之役所向寄有之所は、其方江も可及注進候。
且又建札之儀、場所見計追而建札可相渡候。此趣浦々役人とも相心得、一統江も可申談置者也。

七　月　　　　　　　　　　御　郡　奉　行

口郡浦々役人

追而本文之趣、指急申譯にても無之候間、騒々敷族無之様可相心得候。且又建札之儀、詮議之上追而可相渡候間、右札建候ヶ所見計可書出事。

付札、御算用場奉行江

異國船渡來之節取計方之儀に付、従公儀相渡候御書附寫貳通相越之候條、被得其意、御縮方之儀嚴重相心得候之様、御郡奉行・遠所町奉行等江も先々可被申渡候。以來異國船見請候はゞ、早速及届候様是又可被申渡候事。

六　月

國々之廻船・漁船、海上において異國之船相親み候儀、前々より御法度之儀等に付、従公儀相渡候御書付寫壹結貳通相渡之候條、被得其意、御郡奉行等へ先々可被申談事。

二　月

大久保加賀守殿御渡候御書付寫壹通相達候間、被得其意、答之儀は岩瀬伊豫守方江可被申聞

候、以上。

二月十八日　　　　大目付

御名殿留守居中

大目付ゟ

國々之廻船・漁船、海上において異國之船に相親み候儀は、前々より御法度之事に候。今般浦々において、異國船乘寄次第可打拂旨、改而被仰出候間、船方・漁民等彌嚴重相守、可成たけ異國船に不出會樣心懸可申候。若異國人に親み候儀を隱置、後日於相顯は可被處嚴科、訴出候はゞ一旦同意之者に而も御褒美可被下候間、不相包可申出者也。

二月

右之趣浦々ゟ建札致置候樣、向々ゟ可被相觸候。

異國船渡來之節取計方前々より數度被仰出有之、おろしや舟之儀に付而者文化之度改而相觸候次第茂候處、いぎりす之舟先年長崎において及狼藉、近來者所々ゟ小船に而乘寄、薪水・食料を乞、去年に至候而は猥に致上陸、或は廻船之米穀・島方之野牛等奪取候段追々横行之振舞、其上邪宗門勸め入候致方茂相聞え、旁難被捨置事に候。一躰いぎりすに不限、南蠻西洋之儀は御制禁邪教之國に候間、以來何れ之浦方においても異國船乘寄候を見請候はゞ、所

々在合人夫を以不及有無一圖に打拂、逃延候はゞ追船等不及指出其分に差置、押而上陸致し候はゞ搦捕又者打留候而も不苦候。本船近附居候はゞ打捨候とも、是又時宜次第可取計旨、浦方末々之もの迄申含、追而其段相屆候樣改而被仰出候間、得其意、浦々備手立之儀は土地相應實用專一に心懸、手重過不申樣、又怠慢も無之、永續可致便宜を考、銘々存分に可被申付候。尤唐・朝鮮・琉球抔は船形・人物も可相分候得共、阿蘭陀船者見わけ茂相成兼可申候。右等之船萬一見損打誤候とも、御察度は有之間敷候間、無二念打拂を心掛、圖を不失樣取計候樣專要之事に候條、無油斷可被申付候。

二　月

異國船國々江渡來、或者於海上出會候節向々より之屆書、多分荒增之儀のみ申聞、內實之事情者難相分儀も有之候間、以來浦方末々迄も不相包有躰可申出旨、兼々申含置、兎角事實無相違申聞候趣專要たるべく候。今般異國船打拂候儀被仰出候も、事を好候筋には無之候得ども、近來之樣子難被捨置次第に付被仰出候事に候條、精々入念可被申付候。

二　月

七月。諸郡百姓の藩外に出づる者の取締に就いて告ぐ。

〔御觸留拔書〕

附札、諸郡組々主付惣年寄・年寄並江

近年諸郡とも作人不足之村方も有之躰に相聞え候處、商用・稼等申立、京・大坂を始他國江罷越候者共不少、中には全商用にて無之處、自分勝手にまかせ右躰無據趣に申立、罷越候族有之儀粗相聞え候。畢竟御縮方に指障候條、以來者商用等實に他國江不罷越而不相叶分者、組主付於手前得与相糺、其譯過書願書之奥書に相認可指出候。其上に而遂詮議過書可相渡候。且又伊勢參宮之儀者前々格別之趣に相成居、農隙之時節に者承届候分も有之候處、是又近年猥に相成、時節にも不拘人多に願出罷越候向茂有之候。此儀も以來者時節に寄容易に不承届候條、此段夫々不相洩樣可申渡置候事。

酉七月　　　　　　　　御郡奉行

諸郡村々役人

七月。御召米を行ふ。

この書は寺島藏人の著なり

〔ふぐ汁の咄〕

文政八年七月お召米有之、切手を銀仲江質に入れかねを借りたり。文政九年の春に至りて右米船に積み可出處、切手銀仲へ入れ有り。請出時は借置たるかね渡さねばならず。然るに可渡かねなくして手段盡たるにや、切手をたゞ取上たり。扱跡より五ヶ年して此かね可渡と約

して壹ヶ年か渡し、跡は沙汰なしとの噂さ。其只取上たる銀高三千百拾九貫目餘なりと。此切手に點檢と云印押有之とやらにて、其砌點檢の憂誰は何程々々と號たり。此憂普く押渡る事に而、醫者の六尺に迄至りし事共砌憶にきゝぬ。

八月十一日。先に延期したる前田齊廣の一周忌法會を今明兩日天德院に執行す。

〔官私隨筆〕

七月十四日

一、金龍院樣御法事御指延之處、來月十一日・十二日御執行可被仰付旨被仰出候由、御用番より申來。

八月十一日

一、今朝長袴着用六時過出宅、天德院へ罷越。但裏門より往來。今日は御法事奉行も裏門往來之由。其餘は表門歟。但彈番殿退出裏門往來也。

一、五時前頃初座之御法事初る。差定如左。

金龍院殿御一周忌御法事法用差定

十一日

卯刻　轉讀般若

辰刻　献粥諷經　如例大悲咒一遍回向

　兩刹諷經

　惣持寺・寶圓寺・瑞龍寺・如來寺・玉泉寺・玉泉寺隱居、右之六ヶ寺也。是にて一座

　畢る。

巳刻　達摩講式

此の初り四過頃。はじめ淨道場、洒水・散花・手爐之役如例三人也。その次四智讃之役、讃頭兩人左右に立、三段に讀む。一段ごとに鐃鈸をならし候也。その次和尚被出、燒香御茶菓被備、是も三段に被備。そのごとに三拜あり。畢而祭文之役祭文を讀む。今日は松山寺和尚讀候。此の間維那首唱して大衆同音の讀誦あり。その次梵唄兩人、ウン如來妙色身世といふ事をふしにかけて長く申候也。その次三人並立し、互に首唱して讀誦錫杖をふる。その次和尚和尚は是迄內陣に被居候躰也。被出、長文之訓讀あり。一段毎に維那首唱大衆同音し、偈あり。その終に南無歸命頂禮震旦初祖圓覺大師と唱へ三拜、此の如く五段あり。畢而又維那首唱の讀誦大衆同音。その次最末之維那一人、南無自他法界平等利益と唱、是にて畢。

午刻　拈香法語。本尊上供。獻供諷經。
右初りは九半頃、濟候は八つ頃なるべし。
一、和尚幷座見挨拶あり。
一、巳刻御法事濟、午刻之式初り以前御寺より齋被出之。近年御省略に而不被出筈之處、和尚存寄に而被出候旨也。
一、今日御法事奉行初、伺公所之後入口之所葭之屛風抔もなく、往來より直に見え候故、心付之趣御奉行へ申達、屛風たつ也。
一、午刻之御法事畢候而後、眞龍院様御代香木村左次馬勤之。明日も尤有之。兩日被仰付候由。其節各伺公。但御法事中之詰所よりは御法事奉行三尺計前へ被進出候付、各も進出。
一、御法事畢而後御法事奉行溜へ罷越、今日之御法事無御滯相濟恐悅之旨申達、追付退出。
歸宅之頃八半擡候也。
十二日
一、今日自分は不詰御法事如左。
卯刻　轉讀般若
辰刻　獻粥諷經　此時國泰寺勝興寺諷經あり。

巳刻　薦拔上堂
午刻　甘露施食。本尊上供。献供諷經。救濟放生。
立塔以事。救濟大赦。大施行會。
以上　天德院
一、四半時過長袴にて天德院へ拜參。但兼而九つ過罷越候了簡之處、御法事早く可相濟躰御法事奉行御手先執筆より申越候付、早く罷出候處、いまだ施餓鬼之内也。伊勢守殿・彈番殿・藏人殿・將監殿追々に罷越。
一、勝興寺今朝不被罷出、御名代御代香等幷御施物之御作法濟候以後諷經被勤候由。放生も此所に而有之候也。
一、御法事相濟各拜禮。自分御禮所は八尺間敷居之内、御立疊一疊目之頭也。
一、天德院退出今日も裏門往來。後直に寶圓寺へ拜參。歸候へば八半前也。

八月十四日。加賀・越中に大風雨あり。

〔溫敬公記史料〕
八月十四日。加賀越中大風雨洪水。民被其害者凡一萬千六百餘戶。
〔年々珍敷事留〕

一、文政八年八月十四日風雨甚敷、所々に家廻損、庭之株迄吹落、其外菓は中に不及吹落。夕景より大水出る。犀川橋之邊石垣之上へ迄水上る。櫻畑邊水切込、稻其外畑物類流る。淺野川すゞみの橋流、大橋に懸る。其時川岸之町水上る。大橋柱拔け、すゞみ之橋流通る。又小橋へ懸り、小橋共流。堀川智覺寺前七塀崩れ、智覺寺之前大水、小橋・すゞみ之橋共智覺寺之御堂へ突付、尤門は右之橋に而突流す。御堂に橋は留り、御堂之屋根右橋之上へおはれ懸り、此所に有來り之橋之樣に流留り有る。是は小橋也。右橋之上へ酒桶に水入て五つ乘り、某二人乘流來る。此二人命助り、翌十五日水引てより橋より歸也。同日見るに、七つ屋は中嶋に成り、水半分安江へ流、半分は本川へ流る。不審に七つ屋殘て、此邊町・在所に水損じ有る。

〔大ゆめ生むかし〕

文政八年八月大洪水にて、淺野川の小橋堀川智覺寺の臺所へ入るなど、見ぬ人はうたがふばかり。

極樂の弘誓の船が間違うて橋で淨土へ參る智覺寺

らく首よみ人しらず

八月廿二日。前田齊泰、女御の入內を賀し奉る爲使者を派す。

［溫敎公記史料］

八月廿二日。女御入内。遣津田君方于京師。奉賀献物。

八月廿五日。前田齊廣の女恒姬の名を厚姬と改めたることを告ぐ。

〔官私隨筆〕

八月廿五日

一、今般恒之丞樣御事、御臺樣御養被仰付、御同唱に付、恒姬樣御名厚姬樣と御改被成候樣被仰進候旨被仰出候段、山口淸太夫演述に付、爲御承知申進候旨、御用番より紙面來。

恒之丞は德川家齊の子

八月廿八日。新金銀到來するを以て新銀預手形等の引替を命ず。

〔御觸拔書〕

京・大坂より新金銀到來、追々座封致出來候間、當九月六日より同廿九日迄、石浦町引替所において、金引替手形幷銀五百目札之分、新金銀に引替相渡筈に候。

本年六月十七日の條參照

一、壹貫目手形之分、先達而一統江相觸、六月廿六日より七月十日迄引替新銀相渡候處、右日限迄引替不指出相殘り候分有之、しらべ方指支候條、是又前條日限迄に、不殘指出引替可申候。

右之通御算用場奉行等申聞候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有

之面々者、其支配江も相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

八月廿八日　　村井豐後守

八月。彗星現る。

〔官私隨筆〕

八月廿五日

一、頃日彗星出候沙汰有之に付、昨夜見候處、曇天に而見えず。今夜四時過見候處猶曇り有之、其内はれ退候付分明也。はじめは東方より次第に高く、南方へ寄候也。芒は上々へさす。其長さ身を側め手をのべて中指に而計り候に、中指たけより長く、指之頭之節一ふしたけ程長く候也。其後承れば、右は去五月頃より出候と申もの有之旨也。廿八・九日頃見候へば南へより卑く成、芒も東へなびき候也。

八月。前田齊泰、異國船打拂令に就いて領内海岸防備策の腹案を告げしむ。

〔於江府御親翰帳之内書拔〕

竹田市三郎等演說被仰出候趣

今度ヱゲレス船打拂等之儀に付、公儀より諸國江被仰渡候儀有之、御國方御手當之儀、三州海濱に拘り申面々・奉行人等手前、內々御しらべ有之候處、僉議之趣窺出候付、一結被指上、夫々御覽被遊候。右に付思召之趣御親翰を以可被仰出与思召候へ共、入組之儀に付私共江被仰含被仰出候。

一、公儀より今度被仰渡候趣に而者、不手重無怠慢永續仕候樣に与之御趣意に候得者、其所肝要に思召候。仍之段々御調理御座候處、松雲院樣御調被成置候御內存、能州に二箇處郡代被立置、所方都而御縮可被仰付思召に被爲在候へ共、深く御遠慮之趣有之、御猶豫被爲在候躰に候へ共、今度之儀に付而者、能州は道程も隔り、殊に海濱第一之地に候へば、御屆方に寄り、聊御指支有之間敷候に付、松雲院樣御趣意を被爲續、所口に一ヶ所人持組之內郡代樣之者魚津に準じ被仰付、其人江今般之儀も往々御預置、先臨時之指圖仕候儀被仰付置候者、永續之處相整可申与思召候。

一、御馬廻頭內々御手當心得之儀窺有之候得共、前段之譯に被仰付候へば、先今般之儀に付改而心得被仰付候儀にはおよび不申。就中海邊迅速進退之儀に候へ者、御手當被仰付候時は、遠路之儀、其所江出張仕罷在交代被仰付候与歟申儀に相成不申而は、難相成有之儀与思召候。

且左樣相成候而は、金澤表時々之人氣不靜、御入用方も自ら所有之、今度所口江初而引越被仰付候人持組、高知之者被仰付、身付與力幷家來も彼是有之儀に候間、外御馬廻等所々引越被仰付候にはおよび不申、畢竟右引越候人持交代、餘人被仰付候砌者、其節之御僉議次第、人持兩人に而小松御城番之如き之模樣に被仰付候与歟、其時之僉議可有之儀。如此相成候へば、先以差當り御城下之騷ぎに相成申間敷、且永續臨時之差圖相屆可申候。自然不行屆有之、手後れ之儀有之候而者、御外聞不容易儀に思召候。

一、越中向之儀は、先魚津・石動江引越候樣、原五郞右衞門・本多式部江可被申渡旨被仰出候。

一、大筒之儀中島家・小川兩家・豐島家、內々用意心得之儀被仰出候。

一、所口住居之儀、先御僉議有之、御治定之上一件竟之品々可被仰出旨に御座候事。

酉　八　月

自ら所本の儘脫字あるべし

九月九日。德川家齊、前田齊泰夫人入輿の後その居所を住居と稱すべきことを告ぐ。

〔續德川實紀〕

九月九日、重陽の御祝規のごとし。この日松平加賀守につたへらるゝは、溶姬君の移られて

後、座所を稱へて住居といふべしとなり。

九月十六日。三條西實勳加賀藩の老臣等にその染筆を贈る。

〔官私隨筆〕

九月十六日

一、三條樣へ當春金百兩御助成に付、各へ御染筆色紙五枚充、以御目錄御遂、自分も拜受、御用番より以添紙面被越候。

本年三月十日の條參照

各は年寄中

九月十六日。前田齊廣の女寬姬小倉侯世嗣小笠原忠徵と婚約す。

〔官私隨筆〕

十月朔日

一、寬姬樣御事小笠原大膳大夫樣御嫡伊豫守樣と御緣組御內約之儀、去十六日御双方御使を以被仰合相濟候由、求馬殿より之狀御用番より被爲見候。爲承知爲見被置候由也。あなたよりは小笠原應助、此方よりは求馬御使者之由。

九月廿七日。是日以後前田治脩夫人の七周忌法會を江戶廣德寺に執行す。

〔官私隨筆〕

九月十一日

一、法粱院様御七周忌御法事、當月於江戸表御執行有之候。御作事・御普請其外三御丸御射手・御異風稽古、幷諸組弓・鐵炮稽古之儀相止候に不及旨、幷御家中普請は不及遠慮、諸殺生・鳴物等之儀は當廿七日より廿九日迄自分に遠慮可致旨、一統觸之寫御用番より以添紙而來る。

十月二日。金澤に於いて前田齊泰夫人入輿の後はその居所を御住居と稱すべきを告ぐ。

〔御觸抜書〕

御横目江

溶姫君様御引移以後御座所之儀者、如先格御守殿与可被稱事に候へ共、一躰格別御手輕之思召に而、此度者御守殿之唱不被相用、御住居与可被稱旨、松平和泉守殿御演述之段被仰出候事。

右之趣一統可被申談候事。

十月二日　村井又兵衛

十月廿五日。金澤城惣構堀の内に塵芥を捨つることを禁ず。

〔御觸抜書〕

惣構御堀之内ゟ塵芥等捨申間敷旨等之儀に付、別紙之通町奉行申聞候條、右族無之様、家來末々迄急度可申渡候。則別紙寫相越之候條、被得其意、組・支配之人々ゟ嚴重可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配ゟ茂相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十月廿五日　奥村内膳

惣構御堀之内ゟ塵埃等捨申間敷筈之處、心得違之族有之躰に而、毎度塵芥等捨置、自然と御堀内埋り候に付、時々江浚等不被仰付而は難相成、畢竟御不益之筋に御座候。依之町方ゟ者、私共より嚴重申渡、右様不心得之者制止方之儀茂、手先足輕等ゟ急度申付置候間、家中末々心得違無之様、一統被仰渡御座候様仕度奉存候、以上。

十月　有賀甚六郎

宮崎信次郎

奥村内膳様

十月廿八日。收納米の一部を糯にて徵することに關して告ぐ。

〔御觸抜書〕

定番頭江

御家中收納米之内餅米爲納候儀、百姓相對之品に付、同知行之人々に茂納方不同有之。右等之儀に付、石川・河北兩郡村々より兼々願之筋有之内、當作不熟に而餅米出來別而不宜に付、百姓より諸給人江減方相願候者、品能承届け候様仕度旨、御算用場奉行申聞候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之而々者、支配江も相達候様可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

酉十月廿八日　村井豊後守

十月。小松城に貯蓄する塩辛及び塩の主管を金澤の城代に移す。

〔江戸狀留書拔〕

文政八年十月　御留守

御留守は藩侯の在江戸中なるをいふ

一、小松御城御貯用之塩辛并塩相損候付、詰替被仰付候様、御城番等申聞候。當御城御貯用之分者、御城代方に而取捌、小松御城之分者御用番取捌に候得共、當御城之分手入方仕法茂有之、次第に多相成候に付、右塩辛之内小松御城江遣、繰々にいたし候得者尚以宜由。以來損も薄、自ら御不益も無之に付、御城代方に而取捌可然与遂僉議、御城代方へ引渡候段申上る。

十月」種馬下附を希望する者減少するを以てその取扱を改むべきことを議す。

〔文政中御用方留帳〕

近年能州等種御馬望人少く御座候に付、村方様子段々承紀候之所、是迄種御馬被下、若種懸に用立不申節は、一生無益に相養、拜領仕候者難澁之様子に御座候。依而是以後大豆等御添物附に無御座分者、種懸に出來不申節は、耕作方に輕き荷物を爲負候儀指免し、且拜領仕候者無據趣に而外江相讓り申度砌は、其段願出候上承届可申事に仕候はゞ、望人も多く相成、御添物附之分も少く、御益にも相成可申与奉存候之間、御詮議之上被仰渡候はゞ、御郡奉行示合、持立方之儀得与於彼方詮議方有之候得ば、往々被下人手前にも迷惑之筋に至り申間敷与奉存候。第一當時望人も薄く、其上御添物無之而は、種馬拜領人も無御座躰に押移り可申与奉存候間、私共詮議之趣御達申上候、以上。

酉十月

丹羽八郎左衛門

北川久兵衛

前田織江様

前田修理様

前田内記様
竹田市三郎様

十一月朔日。前田齊泰登營し德川家齊が明年日光社參を延期すべきことを告げらる。

〔御年表〕

文政八年十一月朔日、御登城之節御居殘之處、來戌年四月日光山御參詣、諸國違作にて一同可爲難儀被思召に付、御延引被遊候趣水野出羽守殿御演述。其後御社參無之。

十一月九日。前田治脩の十七回忌取越法會を寶圓寺に行ふ。

〔官私隨筆〕

十月廿一日

一、左之觸狀寫幷人持・頭分拜禮之觸狀寫共、御用番より以添紙面到來。

太梁院樣十七回御忌御法事御取越、來月九日於寶圓寺就御執行、御射手・御異風稽古幷諸組弓・鐵炮稽古之儀、七日より九日迄相止可申事。

一、鷹野其外諸殺生、且又鳴物之儀、七日より九日迄三日可有遠慮候事。

一、普請・作事之儀七日より九日迄指止可申事。

前田治脩の十七回忌は明年正月に當る

但、差急候普請等之儀者不及遠慮候事。

右之通被得其意

右之趣可被得其意候、以上。

十月廿一日　　奥村内膳

〔官私随筆〕

十一月九日

一、今日御法事に付六半時前寶圓寺ゟ罷越。但一朝御法事也。諸人のしめ・半上下。

一、御法事六半時過頃始る。

一、諷經は天德院・瑞龍寺代僧・勝興寺也。

一、和尚玉岡｜前後挨拶に被出、座見も出。

（頭注）和尚は如璨玉岡

一、薄茶・干菓子被出之、齋をも可被出存寄之所、達而其儀無之樣と之儀故、任其意候由被申候。

一、御法事濟、御名代甲州長上下御代香、御施物等如例。相濟、其次各拜禮。

一、今日御寺詰は御法事奉行內膳之外、甲斐守・丹後守・磐松・彈番・九郎左衞門・內藏助・藏人・織江・修理・將監・內記也。

十一月十九日。前田齊廣の女寬姬小倉侯世嗣小笠原忠徵との緣組を許さ

當月は十一月

る。

〔官私隨筆〕

十二月朔日

一、寬姫樣御儀、大膳大夫樣御嫡伊豫守樣と御緣組之儀、御願書付御指出置被成候處、當十九日被成御登城候樣、前日御老中方御連名之御奉書到來、卽御登城被成候處、於御白書院御緣類、御老中方御列座、御願之通被仰出候段、御用番水野出羽守殿御演述被成候旨被仰出候段、十九日出相延翌日發足早飛脚步を以、求馬殿等より只今申來候。

十一月。前田齊泰明春を以て袖留等の儀を行ふことに決す。

〔御年表〕

十一月、御袖留等御比合之儀眞龍院樣へも御伺之上、來正月十八日御袖留、二月十三日御前髮被爲執候儀御治定之段仰出。

十一月。能登口郡の肝煎等閑地に漆を植うる計畫に反對の意を表す。

〔文政中御用方留帳〕

御領國出來漆不少、性も宜敷候に付、此末追々漆苗植付方相增候得者、山里一廉之稼にも可

助精は助成

惰子は勢子

相成与、明地川除等に苗植廣、生立方手入仕候はゞ、永久之御國産にも可相成儀与、金澤西御坊町北村屋與兵衛等申談、右役立御締方、暨漆木成長勢子方主附願上候に付、右願之通被仰渡候而も、指支之儀も無之哉与御尋被爲成候に付申上候。右漆苗植付方之儀、前方幾度も仕法も御座候而、無地或は川土居等に植付、折角世話仕候得共、土地に不應候哉、追々枯絶育兼申候。適々畑縁等に植付生立宜分も御座候得共、畑地味自然与瘦衰、却而不益に付、多分伐除申儀に御座候。併山地暨小畑等縁々に而、榮立候分も御座候得共、少々宛之事故、奥郡より漆かき罷越買集申迄に而、外々より漆かき入込候程之漆は無御座、尤格別之助精に相成候程、植付候村方も無之儀に候得ば、右躰之主附人被仰付、時々廻り候樣に相成候而者、甚煩敷奉存候。畢竟出精不仕樣に成行可申哉、何れ押立植場所も無御座、其内土地に寄榮立宜所には、隨分苗爲植付、村役人無油斷惰子可仕候間、矢張是迄之通に被仰付置候樣被爲下候樣、連名書付を以奉願上候、以上。

酉十一月

羽咋郡押水組總代

箕打村肝煎

忠　兵　衛

北川尻村肝煎

十　左　衛　門

千石村肝煎
三　次　郎
同郡邑知組總代
所司原村肝煎
又　五　郎
德田村肝煎
半　左　衛　門
羽咋郡土田組總代
上棚村肝煎
庄　　　助
高田村肝煎
五　郎　兵　衛
同郡富木組惣代
小室村肝煎
德　兵　衛
山戸田村肝煎
左　　　近
鹿嶋郡熊木組惣代
上町村肝煎
新　五　郎
七原村肝煎
丈　右　衛　門
同郡山三引組惣代

瀨戸村肝煎
與三右衛門
同郡崎山組惣代
殿村肝煎
太郎兵衛
澤野村肝煎
助左衛門
同郡西庄組惣代
花見月村肝煎
岩右衛門
能登部下村肝煎
忠藏
同郡東庄組惣代
井田村肝煎
與左衛門
久江村肝煎
助左衛門

御郡御奉行所

十二月九日。加賀藩の本郷邸北之居宅燒け、富山藩上屋敷全部及び大聖寺藩上屋敷の一部亦類燒す。

〔官私隨筆〕

十二月十八日

一、左之紙面八半時過到來、返書遣之。

當月九日夜、江戸表北之御居宅より出火、折節北風烈敷、右御居宅且御長屋御門迄も不殘燒失、隣之御居宅御長屋御門も燒失。其外御土藏等御貸小屋も無別條、四半時頃火鎭候由。且又淡路守樣御屋敷へ火移り、御屋形幷御下長屋御圍廻も不殘御類燒、備後守樣御下長屋之內も燒失之由。右に付御指扣之儀御用番青山下野守殿へ御伺被成候所、追而御指圖可被成旨被仰聞候由。且又中將樣奉始御機嫌伺候處、何之御指障も不被爲在旨、同十日發足早飛脚を以、求馬殿より只今申來候。此段爲御承知申進候。右に付各御廣式へ罷出、厚姬樣始御機嫌相伺候間、御自分樣にも御伺可被成候。江戸表へも今日急便を以御機嫌相伺、且淡路守樣・備後守樣へも御機嫌相伺申等に御座候、以上。

十二月十八日　　長　甲斐守

奧村丹後守樣

〔年々珍敷事留〕

一、文政八年十二月九日、江戸表御屋敷內北の御居宅より出火仕、富山樣御屋敷不殘燒る。

大聖寺様御長屋半分焼る。近き町家も少焼る。右に付中將様御指扣之段、公方様ゟ御窺被遊候に付、御家中一統暫く遠慮有之。且御指扣被爲遊候に不被爲及、重而も〻様之儀御窺に不被爲及之段、從公方様被仰出候由。且又中將様御在江戸之節之事なり。

十二月十日。前田齊泰本鄉邸火を失するを以て指扣を幕府に伺ふ。

〔見聞袋群斗記〕

十二月九日酉の刻、本鄉御邸內北の御居宅大工小屋より出火、池の端迄燒延、淡路守様御屋敷御類燒。依て翌十日朝御指扣之儀公邊ゟ御伺有之候處、其儀に不及旨晚に至て被仰渡候なり。諸家邸內より出火外邊へ火移る時は、七日指扣之格なりといへ共、當家に先例なきゆゑ五日程差扣たるべしやと御老中より伺之處、御三家に准じ格別之家柄なれば遠慮に及まじく、然れ共此儀越前家抔へ決して移らざる樣に記錄仕置べしと台命ありし由。此事御右筆衆より、內々聞番岡田十郎左衞門迄物語するなり。

〔於江府御親翰帳之內書拔〕

十二月

一、今度北之御居宅より出火に付、御指扣御窺之處、不及御指扣段御指圖有之候儀に付、上意之御樣子等田中龍之助殿極內被申聞候趣、長瀨善左衞門左之口達書內々出候付記置候事。

被考候へば
の次脱文歟

奥御右筆田中龍之助殿より、極御内々御咄被成度趣御座候間、罷出候様申來候に付、則罷出候處、此度御屋敷中より出火に付、御指扣之儀御伺書被指出候に付、何分取計方之儀御申聞被置候處、則御伺書御指出之上、龍之助殿ゟ御下げに相成候付、段々御しらべ被成候處、先年出雲守様御借地御下長屋より出火之節、類燒有之、此方様より御指扣御伺被成候處、御指扣に不及旨御指圖有之。是も御上屋敷中之事に候へば、御指扣にも可相成哉之處、其儀無御座。又外右様之例と存取しらべ候處、酒井雅樂頭殿に、先年御末家酒井縫殿頭殿御本家之御中屋敷に御住居、右縫殿頭ゟ町地御借用有之候處、右地面内より出火、類燒有之。雅樂頭殿御中屋敷に御住居之事に付、御本家より御指扣御伺有之候處、七日遠慮被仰付候。其外薩摩裝束屋敷より出火之時分も、薩州家七日遠慮被仰付候。右之處に而被考候へば、先年出雲守様より出火之時分、御指扣御伺被成候へ共、不及其儀旨被仰出候所に寄處御座候に付、右之御例共委曲御認、此度御伺之處は、御當り前に御指扣之儀にも可有之旨御伺、別段先年か様之振も御座候間、此處は思召を御伺旁にも可有御座旨、御用番ゟ御申上被成候處、則下野守殿より御窺被成候へば、上様に而も何与歟伺方に寄品能被仰出度御含被爲在候處か、誠に速に被仰出、御家之儀は御三家方にも被準候儀に付、指扣に不及儀与思召候。尤此度之振、越前抔ゟ押移候而は不相成候間、間違無之様急度書留いたし置候様に与之被仰出に御座候。誠以

厚思召入之譯に而、旁以難有可被思召儀与奉存候。其譯は、是迄御三家方に被準候儀有之趣は、一統承知仕罷在候へ共、此度か樣に廉立御家風格別之譯御沙汰御座候へば、御老中方初諸御役人暨私仲間共迄も、右樣上樣にて思召入之儀に御座候へば、此末萬端共含を以御取扱を仕候へば、御樣子も違、且御都合に相成候儀に而、誠恐悦至極に奉存候。共上重而御尋被成下候而は如何与之御沙汰に御座候得共、住居燒失に御座候はゞ兎も角も、御三家方にも無御座事に付、共儀には不被爲及御儀与被申上候。是等之趣に付何卒格別之御含を難有被思召候處、上へ響候樣何与歟工夫無之事歟与御考被成候へ共、表向御禮有之共、是は一通之事に御座候間、女使を大奥ゟ被指出、此度格別に被仰出之趣、誠以難有思召候。先御內々右之趣被仰上度、女使を御指出之趣に候はゞ、女中方之儀は早通じ可御宜与奉存候旨御申聞被成候付、共段岡田十郎左衞門を以申上、今日大奥ゟ女使御指出に相成申候事。

〔官私隨筆〕

十二月廿一日

一、左之紙面今夜八半時頃到來。

去九日夜北之御居宅より出火に付御差扣之儀、同十日御用番へ御窺被成置候處、同日夕青山下野守殿へ聞番御呼出、御窺置之御書付御付札を以、不及御差扣段被仰渡候旨、同九日出相

延十一日發足之早飛脚歩を以、求馬殿等より唯今申來候付、爲御承知申進候。先以早速右之通被仰出、恐悦御同意御座候、以上。

十二月十一日　　　　　　　　　　　　　　長甲斐守

奥村丹後守様

十二月十一日。是日以後金澤附近の一向僧等宗意の領解に關して東本願寺の取調を受く。

〔御助方頼方相論附意得寫〕

文政八年十二月十一日於學寮講堂御聞調

御助方

田町　西方寺賢疃　　安田　明達寺恵湿　　宮腰　妙覺寺法賢

割出　行雲寺恵什　　木町　卽願寺寂然　　三構　正福寺文祥

田町　西光寺文成　　木町　超願寺賢長　　野町　因徳寺法巖

易行院師曰く、其國に於て御門末の內年來御法義筋二類に分れて互に相諍ふ趣に付、去る午年十月三人擬講へ雙方和融致す様取鎭の儀を仰せ付られて、右の三人より教示に及ばれたる事成れ共、今以和合不致、御化導行屆せられ難き趣き御聽に達し、甚以御不安慮に思召され、

此度雙方共に召登され御開講仰せ付らる。誠に一昨年の御大變は、御門末の身分言語に絶してなげき悲むより外は無き事にて、三十八年前御類燒あらせられ、漸く御再建御成就あらせられて御滯なく御法義御弘通遊す處、思掛もなく又候一昨年の御大變善知識の御苦慮はいか計の事と恐察申し上げられるぞ。即御悲歎の御書にも、かゝる災禍に逢ぬる事は前業の所感とは言乍ら、上は佛祖代々の冥慮をおそれみ、下は門末の悲歎に對し、進退に付道を失へる計なりと御悲歎あらせられて、此度の御大變善知識御一人に御引受あそばし、此方の前業の所感ぢやと御歎き成され、佛祖代々の冥慮に對し給ひ、御門末の悲歎に對せられて、上に向ても下に向ても進退共に道を失ふ計りと御歎きに沈ませられ、尙倩御思惟遊して、此御大變は平生不法懈怠の輩も我身々々の後生の一大事に打驚く可き大因緣、それ御引受あらせられ、御燒失已來は御化導の御本意やるせ無くしきりに成せられ、彌增に御法義相續を肝要と思召され、則ち門末の心得ねば成らぬ事どもをば七ヶ條目を御立成され、去年正月已來惣會所に於て月々の演說日々の談合を仰付られ、猶又處々の御坊所に於て七ヶ條の演說を仰付られ、諸國に御趣意の行屆せられ候處を御本意と思召れる今御時節なり。右の通の御手厚き御化導に仍て、追々國々へ御趣意行屆せられて、地頭・領主より御示の趣きを隨喜せられて、彌々佛法の外護を致される國處も儘ありて、難有御時節になりたる處ぢや。然るに加州領分は殊更御

門末も多き處なるに、御法義筋に付諍論を起し、年を經て今日迄和熟致さぬに就ては、第一に御子の如く思召さるゝ御末寺御門徒の往生の一大事を深く御苦慮あらせられ、旁以て深く尊慮をいためさせられる事で、各々此御苦勞の程を恐察し奉られ、此度の御聞調を難有御引受申され、御尋ねに付ては腹藏なく心得の趣きを申擧て、御正意を會得致さねば成ぬ事ぢや。猶又御法義筋の御糺に付ては、是迄夫々の御例もあらせらるゝ事成れ共、此度は格別の深重の思召を以て、雙方ともに入寮仰付らるゝ。雙方共に心得の趣き聞調たる上は、御正意を篤と申し示し、速に會得せしめて一日も早く尊慮を休め奉る樣にとの御沙汰ぢや。右の通り仰せ出されたる事なれば、各深重の思召を敬承あられよ。若や若し我慢勝他の心を以て、世間にて勝負を諍ふ樣に、負けては成ぬ是非勝ねば成ぬ抔と言ふ樣な人我の情も有ならば、左樣なる思ひは此度の御燒失の火を以て燒き止捨たと思れ、さつぱりと人我の情を振り捨て、善知識の御苦慮に對し奉て御聞調を引受られ、御示の趣きを難有敬承いたし、歸國の上此度の七ヶ條の趣きをも御預の御門徒へ精々申し傳へ、佛祖善知識の廣大の御恩を報じ奉り、且國恩を報じ度と言ふ心底になられ、今日よりの御聞調をば御尋ねに付て有躰に申上、御正義を會得致さねば成ぬ事ぢや、偖此度仰出されたる御聞調は、御法義筋計の御聞調で、世間の事は申上げても御取擧げは無い。猶又他の一類の失を擧て破する事も、只今御取上はない。そ

れは追て御聞あらせらるゝであらう。先御法義筋に付ての御聞調は、第一に本願名號の聞き開れたる一念の思ひに付て諍論に及ぶ事と聞える故に、各々一人々々其本願名號の謂れの聞き開れたる一念の思ひをば、是迄自身々々の心得の通りを只今申し上る樣。

關扇房曰く、右演說の通り深重の思召を以て一人々々の安心領解の趣きを御聞調の事なれば、難有存ぜられて首座賢幢より一人々々申し上げられよ。

田町西方寺賢幢曰、私は平生心得居りまするは、本願名號の謂れを聞き開れたる一念は、かゝる助かる緣便りのなき惡人を御助下さるゝは、阿彌陀如來さま御一佛と信じ奉り、此の信ずる思ひのありだけが一心に阿彌陀如來後生助給へと賴み奉る心と平生心得居りまして、此の通り敎示を仕りまする事で御座ります。

關扇房曰、次へ〳〵。

安田明達寺惠溫曰、私に置きましては、本願名號の謂を聞き開れたる一念は、かゝる徒ら者を御助下さるゝは阿彌陀如來御一佛と信ずる、その信ずる一念は卽ち助け給へとすがり奉る思より外に無いと、此通り平生相心得て敎化仕ります。此趣きを談合仕りまする。

宮腰妙覺寺法賢曰、私は名號の謂を聞き開れたる一念は、かゝる惡人を御助けは彌陀一佛と信じ奉り、其信じ奉る一念は其儘彌陀を賴み奉る一念と心得て敎示を致しまする。

野町因徳寺法巖曰、私は名號の謂を聞き得たる一念は、かゝる徒ら者を御助下さるゝは彌陀一佛と大悲を賴むすがたは如來を賴む一念、其時往生一定と御定め下さるゝ御恩を喜びまする計りで御座ります。

割出行雲寺惠什曰、私は賴む者を助ふと言ふ御文の御教化の通りに、大願業力の御助は彌陀一佛と信じて、自力の心を振捨てゝ彼尊に乘託いたして助け給へと賴むより外は御座りませぬ。

卽願寺寂然曰、私は本願の謂を聞き開れたる一念は、助るべき緣も便りもなき者を願力の不思議で御助けと信じ奉て居りまする。其信ずる一念丸々後生助給へと賴む一念と心得て喜びまする。

三構正福寺文祥曰、私は常々心得て居まするは、本願の謂れ名號の謂れを聞き開れたる一念は、かゝる極惡深重の徒ら者を、阿彌陀如來なればこそ御助と信ずる思ひが、後生助け給へと賴み奉ると一躰にして、相變る事は無いと心得て深重の大悲を喜び居ります。

田町西光寺文成曰、私は本願名號の謂を聞き開れたる一念は、かゝる助からざる者を阿彌陀如來なればこそ御助と信じ、其信ずる一念は直に彌陀を賴む一念と落付て佛恩を喜びまする。

超願寺賢長曰、私は本願名號の聞き開れたる一念は、かゝる助るべき緣便りのなき者を、彌々阿彌陀如來なればこそ御助と信ずる心は、取も直さず頼む一念と心得て居りまする。

易行院曰、先づ一通り各々の領解の趣聞き置きまする。今日は此れで退かれよ。

關扇房曰、追々御尋等もあらう。

十二月十一日晝後賴方御聞調

橫濱　普念寺靈沼　二日市　誓入寺北山　智覺寺梵龍　誓念寺緣淳

光德寺藏俊　光德寺舍弟大壽　誓入寺新發意敎忍　中條　本福寺舍弟隆山

唯念寺顯學　法藏寺靜巖更名專信

易行院演說前の通り。

關扇房曰く、只今演說の通り深重の恩召を以て、一人々々の安心心得の趣き御聞調なし下さるゝ事なれば、首座靈沼より次第々々に、一人々々各々に申されよ。

普念寺靈沼曰、本願名號の御謂れを聞き開れたる心は、かゝる淺間布き機を頼む一念のとき御助ぞと信じて念佛稱へて居ます る。

誓入寺北山曰、私は本願名號の聞き開れたる心は、掛る助かる間敷者を助給ふ彌陀願力の不思議と信ずるが、後生助け給へと賴む心なりと存じまする。

智覺寺梵龍曰、私は本願名號の聞き開れたる心は、諸々の雜行雜修自力の心を振捨てゝ、一心に阿彌陀如來我等が後生の一大事助給へと賴む其時、我往生は如來の方より御定下され、御恩報謝の稱名を喜びまする。

誓念寺緣淳曰、私は本願名號の謂の聞き開れました心は、雜行雜修自力の心を振捨てゝ、一心に一大事の後生御助候へと賴み奉る一念のとき、往生一定御助治定と存じて御報謝の御念佛を申しまする。

光德寺藏俊曰、私は名號の謂の聞き開いた心は、雜行を捨てゝ一心に阿彌陀如來私が後生の一大事御助候へと賴み奉る一念に、往生は一定御助は治定と存じて御報謝の稱名を喜ぶなり。

光德寺舍弟大壽曰、我は本願名號の聞き開れたる心は、雜行をすてゝ一心に阿彌陀如來後生助け給へと賴み奉り、往生一定と心得て御恩報謝の爲に稱名念佛を喜びまする。

誓入寺新發意教忍曰、私に於ては本願名號の謂れの聞き開れたる處は、寔に自身に生死得脫の叶ぬものを、阿彌陀如來なればこそ本願の不思議力一つで御助下され、餘善餘菩薩に心を掛ず彌陀一佛より外に無いと心得て居まする。

本福寺舍弟隆山曰、私に於ては本願名號の聞き開れたる心は、極惡深重の私を御助は、三世に一佛恒沙に一躰と彌陀を信じて念佛を申す許りで御座ります。

唯念寺顯學曰、私は雜行を捨て彌陀を賴む一念に、往生は一定御助は治定と存じて居ります る。

法藏寺靜巖曰、私は本願名號の聞き開れた心は、諸々の雜行雜修自力の心を振すてゝ、一心に阿彌陀如來今度の我等が一大事の後生御助候へと賴み申して候。賴む一念のとき往生は一定御助は治定と存じ、此上の稱名念佛は御恩報謝と喜び申して候と心得て居ますする。

易行院の曰、今日は此れきり。

十二月廿三日。越中境關所の過書に松前の國付を省くべきことを告ぐ。

〔國事雜抄〕

境御關所通行之過書、奧州松前・蝦夷松前と兩樣に相調區々相成候間、以來之處何れ之松前と申儀相極置度旨、先達而被申聞候。右之分以來は國付相省、松前之者と相調、其外箱館等小所之分は、松前領之內何方之者と相調候樣、當町奉行へ申渡候條、可被得其意候、以上。

十二月廿三日　　長甲斐守

和田權五郎殿

十二月廿六日。銀子缺乏するを以て大晦日に至るまで金子の通用を許す。

〔御觸拔書〕

當暮格別銀支に付、金子所持之者共致兩替度分茂、銀子拂底に而金買入人無之故、金子は有之候得共融通方者指支候躰相聞候。依之大晦日諸指引相濟候迄、當暮一作金相場兩に付六拾四匁之極直段を以、諸上納幷御家中拂米代等、都而諸指引無滯爲致通用可申候。且兩替商賣人共金子賣買之節者、極直段之外定之口錢爲取請申筈に候。

右之通御算用場奉行等申聞候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江茂相達候樣申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十二月廿六日　　長　甲斐守

十二月廿九日。御郡方に本郷邸の失火指扣を要せざりしを以て正月の準備を爲すべきを告ぐ。

〔御觸留抜書〕

付札、御横目江

當月九日夜江戸表北之御居宅より出火、淡路守樣御屋形等御類燒茂有之候。右に付此方樣御指扣可被成哉之旨公邊江御伺有之候。先此段申聞候條、一統可有其心得候事。

右之趣一統可被申談事。

十一日は誤

本令は竹澤御殿営館となりしによる

當月十一日暮合、江戸表此方様北の御居宅より出火、淡路守様御屋形御類燒等之儀に付、此方様御指扣可被爲成哉之旨御公邊に御伺被爲遊候儀等御觸相渡候に付、何れも心得方之儀御伺申上候處、追而御指圖可被成旨御奉行衆より御談に付、其段添書仕相廻、御承知之通りに御座候處。御指扣に不被爲及段被仰出候旨。依而正月用意等不指支段被仰渡候間、左様被心得、急々御廻達可被成候、以上。

酉十二月廿九日　　高橋由五郎

仲間宛

追而、新田裁許・山廻ゟも各様より御申談可被成候、以上。

十二月。尻垂坂高通に死人・縄懸を通行せしめ得ざる禁令を解く。

〔御觸抜書〕

御横目ゟ

尻垂坂高通、寶幢寺坂高折曲り角迄、死人・縄懸等都而不敬之者は往來指扣可申旨、先達申渡有之候へ共、以來右往來不及指扣候事。

右之趣一統可被申談候事。

酉十二月

十二月。金澤城の門に用ふる正月の飾松を改むること等を告ぐ。

〔御觸拔書〕

御横目江

近年松木次第に無數に相成、品に寄御用不辨之儀茂有之候。就中年頭御門々々等御餝松、幷御寺方渡り眞松等、木柄撰方甚敷、少々故障も彼是与申立、受取方相難候故、自然与過分に伐取候躰に相聞え、左候へ者松木生育方茂整不申、畢竟御不益之筋に付、今般御郡奉行手前に而取締方等格別遂詮議候趣茂有之候。依之御城中御門々々等御餝松、是迄枝七蓋付に而、蓋下々長さ貳間、目廻二尺五寸之松木相渡候へ共、以來者枝五蓋付に而、蓋下々長八尺位之木柄御用ひ之事に相成、御寺方渡門松等茂右に准じ相改申渡候。就而者御家中渡り門松之分茂、是迄中に者大振成茂有之に付、根伐之節枝末相損じ伐替いたし候儀茂有之、御不益に付、已來者長五尺より六尺計迄之木柄見計相渡申筈に候。此段門松受取候人々江可被申談候事。

十二月　　長甲斐守

是歲。加賀藩歲入の物成及び定小物成・散小物成の銀高の調理翌年に至りて成る。

〔文政八年分御取箇幷御物成調理書上申帳〕

草　高

一、百三十三萬二千八百八十石五斗七升四合二勺　　御印高幷新開本田直り手上高共

同

一、四千八百八石七斗七升　　奉行所附八ヶ所新開二ヶ所共

內

十一萬八千四百四十四石五斗六升六合　　檢地引高新開共

千九十四石二斗六合六勺八才　　屋敷等引高

但奉行附之內屋敷引高共

三　石　　能州一ノ宮鶫捕領

殘而

高七千四百九石八斗四升

一、二千五百八十五石六斗三升八合　　定納口米

內

千三百二十一石二斗二升三合　　引免に當る定納口米引

殘而

千二百六十四石四斗一升五合　御藏入高

高二萬四千百九十四石五斗六升九合內三百二十五石八斗一升四合不納

一、三千三十一石二斗九升一合　新開圖免五百六十三ヶ所定納口米高

高五千百二十五石二斗七升四合內百四十六石八斗四合不納

一、五百八十一石八斗六升九合　新開請高三百四十二ヶ所定納口米高

高九千九百三十五石五斗九升七合內七百九十三石一斗不納

一、六百六十七石三升五合　文化十二年等仕法新開五百四十六ヶ所定納口米高

本高三萬八千八百四十石

一、壹萬六千三百七十三石四斗一升六合　與力明知定納口米之御藏返米幷代官口米引去申高

八口

合二十三萬二千四十七石七斗七升七合　御藏入高

內

五百五十八石二斗二升一合　米納に當る侍代官口米石に付二升充引

十三石三斗六升二合　銀納に當る侍代官口米石に付一升充引

二十三萬千四百七十六石一斗九升四合　御收納米高

內

七千五百五十二石六斗七升四合　濱方籾納高

一、三百三十貫九百目二分六厘　春秋夫銀取立高

一、三百四十三貫四百七十二匁四分六厘　惣銀納代

但皆銀納村引免に當る銀引之分引

一、三百七貫六百九十目五分三厘　定小物成銀高

一、三百二十八貫六百五十目七分七厘　金澤町等散小物成幷地子銀魚口錢等

一、四百六貫四百八十八匁七分六厘　散小物成銀高

一、二十貫八百二十五匁三分六厘　與力明知春秋夫銀役銀所江上納高

四石五升七合　能美郡御預人參畑

七石七斗八合　礪波郡御預人參畑

殘而

百二十一萬八千百三十五石八斗六合五勺二才　村高

六十四萬四千二十二石一斗七升九合　定納口米

内

七十二萬千四百七十一石八斗三升六合五勺　文政八年分給人知高

此定納口米

三十八萬六千五百六十一石八合

三千四百九十三石一升　寺社領高

此定納口米

千九百三十七石八斗八升九合

七百二十六石六斗八升二合　年寄等御扶持高

此定納口米

四百二十四石八斗八升

殘而

草高四十九萬二千四百四十四石二斗七升八合二才

一、二十五萬五千九十八石四斗二合　定納口米高

内

八石八斗七升一合　松任町稲荷屋敷等地子米引

六千二百七十石八斗一升五合　定銀納定納口米引

十石三斗一升八合　右同斷十一月堂形直段を以上納之分引

七百九十石九斗四升六合　一作依願銀納定納口米引

千百十四石二斗五升五合　御用地銀納定納口米引

二萬三百二十石五斗七升　引免に當る定納口米引

惣高一萬九千八十一石八斗八合

一萬六千二百五十八石九斗三合　右同斷に付給人知ゟ引足米引

但、惣高之內二千八百二十二石九斗五合村々より御藏納米を以可引足米不足に付、給人知ゟ百姓斗過米之分御藏米切手を以相渡候。

三百十三石五斗四升七合　奉行附ヶ所引免に當る定納口米引

百三石　奉行附ヶ所銀納に當る定納口米引

殘而

二十萬九千九百七石一斗七升七合　本田御物成

一、二百十七石七升四合　高岡等地子米高

一、五石五斗　新川郡高原野之內立林役米

高
一、七千四百五十二石五斗四升
定免等新開二百十二ヶ所
内
四十二石七斗
檢地引高
一、千九十三石七升六合
今石動城端氷見地子米町藏米を以切手に而上納
一、百五十束
石川郡市原村役中折紙翌年三月上納
〆

五ヶ山金納

草高五千八百六十四石七斗八升五合
惣村數七十ヶ村、此定納高二千六百八十五石九升五合之代金、但石に付金目一匁八分八厘六毛餘之替、此金四匁四分金一兩与定、十兩一枚与相立、金一枚に付四百六十五匁に極
一、百十五枚一兩一匁三分九厘八毛八絲
一、二十二枚二兩七分三厘二絲
明暦二年手上金幷蠟漆等役金高右同斷
〆百三十七枚三兩二匁一分二厘九毛
内

四枚一兩七分五厘四毛七絲六忽　流刑人小屋々敷并引免に當る引金高
殘而
百三十三枚二兩一匁三分七厘四毛二絲四忽　御收納高
此代
六十一貫九百五十二匁五分二厘　極直段金一枚に付四百六十五匁之割合を以上納高
江州御知行所
草高二千四百三十二石二斗六升二合
一、千二百四十五石九斗二升九合　今津弘川兩村海津之內中村町共三ヶ村分定納口米高
內
五百八十一石四斗九升二合四勺　今津御藏に而定拂方并今津弘川海津三村御貸米等品々拂方
殘而
六百六十四石四斗三升六合六勺
外四十八石一斗二升五合　今津等三ヶ村返上米
〆七百十二石五斗六升一合六勺　大津御藏入高
一、八百十七匁四分四厘　今津村等春秋夫銀并中村町山役等京都御土藏江上納高

右文政八年分加越能幷江州今津等三ヶ村御物成高幷定散小物成銀高共、相しらべ上之申候、以上。

戌十二月

石野雅樂助
笠間源太左衞門
堀孫左衞門
山崎頼母

戌は文政九年なり

文政九年

正月十七日。藤内等の夜に入りて春駒を囃すことを禁ず。

〔異部落一卷〕

一、藤内頭手下之者男女、町方ゟ罷出、夜に入候迄春駒等うたひ囃子候躰に付、今日藤内頭三右衞門呼出、以來夜に入候迄右躰之儀無之趣、一統ゟ急度可申渡候。尤以後右趣之儀有之者、召捕來候樣廻方ゟ茂申渡候間、此段も夫々不相洩樣申談置候樣申渡遣候事。

戌正月十七日

正月十八日。前田齊泰袖留の儀を行ふ。

〔官私隨筆〕

正月廿九日

一、中將樣御袖被爲留候儀、當十六日御窺書、御用番大久保加賀守殿へ御差出被成候所、同日御窺之通と被仰渡候付、同十八日御額御直御袖被爲留、備後守樣初其外御心安く御出入之御面々御客有之。御盃事之內小謠被仰付、御首尾能相濟候段、同十九日出翌二十日へ相延早飛脚步只今到着、求馬殿等より申來候。右に付拙者共明後朔日登城。

正月廿八日。西本願寺の使僧が用銀を徵集したる風聞あるを以て之が調査を命ず。

〔御郡典〕

別紙御用番內膳殿より御渡に付、寫相越之候。右に付其元中何与歟承及候儀も無之哉、內分篤与承糺、否早速小紙を以可申聞候、以上。

戌正月廿八日　　井上與兵衞

口郡惣年寄中

年寄並中

去五月、西本願寺より三州へ使僧指向、一派之諸寺庵近來心得方不宜、且先年宗意悉違亂以

來、本山江附届方も前々之條目に違及不沙汰候故、教諭方有之由之處、去秋に至り取沙汰には、本山家來之內越中筋等寺庵取組、過分之銀子取集有之躰相聞得候故、寺社奉行江再往申渡、夫々頭寺手前爲承糺候處、曾而右樣之儀は無之、使僧下向之趣意は、近年諸國門末之輩寺法條目不會得之次第等有之、猥ヶ間敷相成候故、其時々御國法江も難題相懸候筋、畢竟一寺住職之心得方不如法より事起り候儀にも相聞得、以來御國法を大切に重じ、不忘五常之道を、專ら冥慮に相叶候樣如實に相心得、且亦近年一派之寺庵、本山江年頭又は報恩講之信施等閑に相成候に付、不依多少に、壹錢・半錢なり共志相立候樣之教諭之由、夫々頭寺紙面指出候得共、門徒家別一人之割を以、二十四ヶ月之間銀子取立候樣之沙汰に付、得与寺社奉行より承糺候處、諸寺庵共是迄本山江右二季之志は不上納に付、今更一時に取立候而は可及迷惑与、二十四ヶ月之間勝手に上納いたし可然、是以是非与申儀は無之、唯其身に應じ信施成安き樣に与之教諭に而、家別に過分取立方被請候儀に而は曾而無之旨、三州之頭寺より紙面取立、右奉行より指出。右之趣に而は、御郡方之者共可及迷惑筋不相聞候。然處越中四郡右一派之門徒共、其手次寺へ呼出之、本山用金として一人分二ヶ年銀二十四匁宛与相極、一軒に三人又は五人前与相定、二十四ヶ月之間に月々可指出趣に付使僧下向之由申候得ども、不作に而諸色直段も及高直に、町・在難澁いたし、折柄殊に御上江御貸米等相願、御難題に相懸り

候時節に付、段々相斷候得共、叢數申聞承引不致躰。前段寺社奉行江取立置候紙面等は、甚相違之躰に相聞候。且亦右使僧戾り之砌、寺庵中寺柄相應に餞別之品遣し候處、致返却候上、寺柄を見立、一ヶ寺金一兩又は金二步与割符之餞別申談、此儀も門徒共江相賴候寺庵も有之、重々入用相懸り候上に而、今般之用金凡拾萬兩餘にも可相成樣之儀に而、門徒一統及難澁候事故、相斷候得共、寺庵中咎も可蒙趣に申、ひたすら門徒江相賴申樣之儀有之由。右之通に而は、本山より教諭方に事寄、一派之寺庵共門徒共江過分に金子取立候而、自分々々潤にも可致折にも候哉に相聞え、實事においては沙汰之限に候條、越中三郡右宗門之百姓共手前、早々內々得与被聞調理、可被申聞候。尤加州・能州共右樣之儀有之哉も難計候間、是等も共手筋江被申渡、樣子承り可被申聞候事。

正　月

二月二日。能登・越中の浦方より諸魚を金澤に搬送する際宿々にて不都合なかるべきを命ず。

〔御觸留拔書〕

能・越浦方より當町江指越諸魚、於宿々及遲滯、其上荷物取扱方麁抹に而、品物拔取候儀有之、駄賃も增錢取請候に付、荷主及迷惑候旨等、魚問屋小紙に宮崎信次郎紙面相添指出、遂詮議

候處、右紙面之趣に而は宿々人足共致方不埒之至に候條、夫々被遂詮議、猶更以後之儀急度可申渡候。依而信次郎紙面兩通相送候條、披見後可被相返候事。

二月二日　　御算用場

能・越浦方より當所ヘ指越候諸魚、於宿々及遲滯、別而塩物等格別相滯、其上荷物取扱方甚だ麁抹之樣子に而悉損、曁近くは右荷物之內品拔取員數致不足、且又駄賃之儀は前々御定も有之候處、近年增賃取請候由。右等之趣荷主共申聞。右宿々に而及遲滯候而は諸魚相損、御用之品に而も御用立不申、都合指支に相成、且は直段も賣落候而は、浦々商人共相泥入魚薄相成、畢竟御縮方相緩、口錢上り高も御不益之儀。依而以來於驛々不及遲々、尤取扱方も麁抹無之樣、駄賃之儀增錢等不請取樣、別紙之通魚問屋共申聞候條、夫々嚴重御申渡候樣致度候、以上。

正月廿八日　　宮崎信次郎

御算用場

二月三日。德川家齊、前田齊泰に鶴を贈る。

〔溫敬公記史料〕

二月三日。大將軍遣使番中根平十郎。來賜所獲鶴。

二月四日。前田齊廣夫人、竹澤御殿址に新建築物を營まんとするを欲せざる意を告ぐ。

〔御城方御親翰御加筆物寫〕

金龍院樣御逝去之御儀、眞龍院樣今更に御歎被爲思召候。夫に付竹澤御殿御地面に御建物被仰付、古木大木多爲御伐取、且は前々より之御鎭守も御地面替被仰付、其跡江御建物被仰付候樣被遊御聞、右等之趣御心懸り被爲思召候。依之御鎭守跡之御建物取拂、柵にても振り、御地面を清爲置候樣被爲成度、此旨豐後守江申入候。今度岡田十郎左衞門外御用に而罷歸候付、同人を以御內々眞龍院樣被仰出候段、丙戌二月四日十郎左衞門申聞候。右は永々之御繁榮之所迄も被爲思召候而之御儀と、誠以奉恐御儀に候事。

二月六日。能登・越中より堂形御藏に米穀を輸送する代官の心得を告ぐ。

〔御觸留拔書〕

三州所々藏々より堂形藏へ附寄米申付候節、堂形奉行へ引渡候上は、代官手を離れ申樣に心得候向も有之躰に相聞候。加・越・能何方より何方藏へ附寄候而も、御拂方相濟候迄は代官手を離れ申儀は無之筈。尤途中は代官指添可申儀に候。既吉久川下米所々藏より川下いたし、

吉久御請米奉行江引渡候得共、代官手を離れ申儀は無之。尤拂方之時々立會、升廻欠米も代官より相辨來候。此度能・越より堂形に引米申付候筈に付、右之趣改而申談候條、可被得其意。且又是迄能・越より船積を以相廻候節、代官上乘不致候得共、以來代官上乘いたし、馬附之分も前々之通途添申樣可被相心得候、以上。

戌二月六日　　御算用場

御郡奉行中

二月九日。途上婦女を傷害する者あるを以て發見者の之を捕ふべきことを命ず。

〔官私隨筆〕

二月九日

一、近來何れ之者に候哉、於途中刃物に而往來之女を突く者每度有之、人命にも障候程之儀も有之躰相聞え、不屆至極に候條、御家中を初家來末々迄、幷町方に而も、右樣之者見懸候はゞ無泥召捕、夫々及斷可申候。尤右所業疑敷者心付候はゞ、斷出可申候。此段一統可被申談候事と之御横目へ之覺書寫、御用番より到來。

〔見聞袋群斗記〕

是年四月頃より何之ゆゑとは不知、暮頃より往來の女の尻を突き申者街に有之、色々御穿鑿有之候得共不相知。右尻突は、何ぞ小刀之樣なるものにて突き候と相見え、唯ひやりとする而已之事にて障り候事なく、兩刄之ものか疵口ひらき申由にて、罷歸り候後發血いたし、其疵口痛申よし。改方足輕抔姿を替へ、女之衣裳を着用、暮頃市中徘徊致し、手を盡し探索致候へ共終不相知。町方廻り繁く候へば、猶更數人尻を突れ、何者之仕業やら怪しき事なり。冬に至て相止。夏向より七半時過よりは女之往來無之、誠に珍事一奇談なり。

二月十三日。前田齊泰前髪を撤す。

〔御年表〕

二月十三日、御前髪被爲執。

〔官私隨筆〕

二月廿三日

一、中將樣御前髪被爲執候儀、當十一日御伺書、御用番松平和泉守殿へ御指出被成候所、同日御伺之通と被仰出候付、同十三日御前髪御執被遊候。右に付出雲守樣、其外御心易御出入之御面々御客有之。備後守樣には御斷に而御出無之。御盃事之内小謡被仰付、御首尾能相濟候。事之外御似合被遊候段、同十四日出翌十五日へ相延早飛脚歩只今到着、求馬殿等よ

り申來候。

二月廿六日。新銀手形は三月二十日限り通用停を止すべきことを告ぐ。

〔御觸拔書〕

去年九月迄に新金銀引替相殘候手形之分、曁小割札共、都而當三月十日より同月廿五日迄、石浦町引替所において、新金銀に引替可相渡候間、手形所持之人々引替所ゟ指出可申候。右差出候手形裏に、所持人名印幷月日相記可指出候。

但、小割札百目に不滿分は、壹匁百文之圖りを以、錢に而可相渡候。

一、右引替手形當三月廿日切に而通用指止、前條引替日限後に指出候分は代り銀不相渡、都而可爲反古候。

右之通被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配ゟ茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

二月廿六日　　村井豐後守

三月七日。前田齊泰自今登營の際長柄傘を携ふ。

〔溫敬公記史料〕

三月七日。登城時携長柄傘。不問晴雨。

三月十二日。前田齊泰就封の暇を受く。

〔官私隨筆〕

三月廿四日

一、去十三日上使植村駿河守殿を以、御國許への御暇被進、白銀御卷物御拜領。從內府樣も松平能登守殿を以、御卷物御拜領。從御臺樣中島內匠頭殿を以、御卷物御拜受。夫々御料理等出、御首尾能相濟。上使御退出後、爲御禮御老中御勤被遊候段、去十四日出江戶發足町飛脚に傳附、求馬殿等より申來候。此段爲御承知申進候由、御用番より紙面到來、及返書。

三月十六日。前田齊泰發駕を本日と豫定せしも之を延期す。

〔官私隨筆〕

三月朔日

一、御歸國御暇被仰出候へ者、三月十九日御發駕可被遊旨、先達而被仰出置候。然處尾張樣御出合之儀に付、重而三月十六日御發駕、先達而御泊附之通に而、津幡御泊御指省、同廿七日高岡より直に御着可被遊旨、藤田平兵衞を以被仰出候段、去廿三日江戶發足町飛脚早飛脚歩に傳附、求馬殿等より申來候段、御用番以紙面被申越候。

〔官私隨筆〕

御歸國御暇被仰出候へば、當十六日御發駕、同廿七日御着可被遊旨、先達而被仰出置候處、御様子有之、十六日御發駕御延引被仰出候。御日限之儀は追而御治定可有御座旨、藤田平兵衞を以被仰出候段、去十二日江戸發足町飛脚早飛脚歩に傳附、求馬殿等より申來候。此段爲御承知申進候、以上。

三月十九日

三月廿五日。前田齊泰登營して就封の辭見す。

〔官私隨筆〕

四月三日

一、前月廿五日御登城被成候樣、前日御老中方御連名之御奉書到來、御登城被遊候所、於御黑書院御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御鷹・御馬御拜領。且又求馬・又兵衞御供被召連候所、於御黑書院御目見被仰付、其上御卷物拜領仕候旨、同廿四日出相延翌廿五日發足早飛脚歩を以、求馬殿等より申來候由。且又右に付明日御廣式へ罷出、厚姬樣初御祝詞可申上之旨、御用番より紙面到來、及返書。

三月廿六日。前田齊泰江戸を發す。

〔官私隨筆〕

三月廿七日

一、御發駕御日限御延引之儀、先達而被仰出置候所、當廿六日御發駕、四月八日金澤御着可被遊旨、藤田平兵衛を以被仰出候段、去廿日江戸發足町飛脚早飛脚歩に傳附、求馬殿等より申來候由、御用番より紙面來る。卽返書遣之。

〔官私隨筆〕

四月四日

一、中將樣益御機嫌能、前月廿六日巳の中刻御發駕被遊候旨、藏人より中飛脚を以申來候由、御用番以紙面被申越候。返書遣す。

〔溫敬公記史料〕

三月廿六日駕發江戸。四月十一日到于金澤。扈横山求馬・村井又兵衛・山崎庄兵衛。

四月四日。錢手形の通用は當月廿五日限り停止すべきことを告ぐ。

〔御觸抜書〕

町會所において出來之錢手形、去年七月已來通用申渡置候處、此節錢相場次第に引下候に付、右手形追々町會所ゟ銀子引替に相向候得共、尙又相殘居申分、當月廿五日切に而一先通用指

止候條、引替之儀は、當十日より同廿八日迄之內、偶日每に町會所江相向候得ば銀子可相渡候。尤手形高拾貫文に滿不申分は正錢与引替可相渡候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

四月四日　　奥村內膳

四月六日。諸郡往還筋に家屋ある箇所の端々に新家を建つるを禁ず。

〔御觸留拔書〕

諸郡共往還筋に家建有之ヶ所、端々江新家建出候儀、從前々令停止置候所、今以心得違之族有之躰に付、今度別紙之通改而村々役人共江申渡候條、得其意、夫々嚴重可申渡候。元來其元中より村々申渡方行屆候得者、右樣心得違之筋不致出來筈之處、是迄右等之穿鑿方不行屆儀に有之哉に被存候間、尙又是以後猥之儀無之樣相心得べく候、以上。

戌四月六日　　大平欣太夫

山森雄次郎

惣年寄中・年寄並中

諸郡共往還筋に家建有之ヶ所、端々に新家建出候儀不相成儀に御定も有之品に付、前々堅令停止置候之處、近年猥に相成建出候分も有之、其時々嚴重申渡爲取毀候分も有之候處、今以心得違之族有之躰に候。右之趣は其方共申談方不行屆、小前者は御定通りも不致會得故に候。是以後右樣心得違之儀無之樣、綿密に可申渡候。尤當時新家建有之分は、早速先々取毀可申候。以來心得違之者有之候はゞ、其家爲取毀候上、急度咎も可申付候條、可得其意者也。

戌四月六日　　御郡奉行

諸郡村々役人

四月十一日。前田齊泰金澤城に着す。

〔官私隨筆〕

四月七日

一、中將樣益御機嫌能御旅行、去二日高田御止宿、同三日糸魚川に御止宿被遊候處、此間中溫氣、其上三日晝より雨に而、大和川等出水に而、御通行之節無理に御越被遊候程に而、御供人之內二百人餘も鍛冶屋敷等に逗留いたし候旨、且又姬川滿水に而御通行指支候付、同四日同驛に御逗留被遊候。右に付横山求馬殿等御旅舘へ罷出、御機嫌相伺候處、益御機嫌能被成御座、右川少々充減水いたし候へども、五日朝御發駕と申所へは至不申候間、尤川明次

第急速御供揃に而御發駕之筈之旨、此表より罷越候町飛脚同驛に罷在候付、當四日早飛脚歩に申渡、求馬殿等より申來候由。且又右に付明日は御着城之御樣子に而は無之旨、御用番より紙面到來。返書遣す。

四月十日

一、姫川出水之儀前條之通之處、段々減水いたし候付、當八日朝五半時糸魚川御發駕、姫川幷山之下難所々々無御滯御越、七半時過泊驛へ御着、御止宿被遊候。將又明十一日曉八時之御供揃に而、高岡御發駕被遊、九半時頃御着城被遊候筈之旨、境奉行和田權五郎より早飛脚指出候付、求馬殿等より傳附申來候。右之御樣子に付、明日各四半時迄に致出席候。其御心得に而御登城可被成と之趣、御用番より紙面到來。返書遣す。

〔官私隨筆〕

四月十一日

一、津幡御發駕之附人、森下御發駕之附人追々來る。大樋之附人來り候上、追付丹後守・內膳・磐松・彈番役列橋爪迄罷出、此出樣少早し。人持中等橋爪之邊に居候處、此方出候付三之丸へ參り候躰。日影つよく難儀之躰也。

一、又兵衞殿は御城代方に付而御玄關に被在候。勢州も同斷。御家老中も同斷。

一、餘程間有之、御先三品來る。

一、御弓之來り候最中位に、淺野川橋へ御先三品之御弓かゝり候を見請候附人來る。割場奉行林逸左衛門指添罷越、其由御用番へ達、（御用番不在合候へば罷出候者に申聞候也。）引返し相越、見番之足輕兩人は直に二之丸へ參る。

一、八半時少過御着城。如例所々に而御意あり。各罷出居候前に而御馬留り、いづれも無事珍重と御意。益御機嫌よく御着城恐悅之旨申上候所、天氣もよろしく別而大慶と御意。（此御意丹後守難と拜謁不仕に付御請不申上。）

一、席へ罷越候上、御用番へ恐悅之段申達、各互に恐悅之旨申述候。

一、求馬殿・又兵衛殿も追付歸着被罷越。此兩人衆は御機嫌伺、御用之有無をも伺候而退出也。

一、以澤田一郎右衛門御祝詞申上候。磐松殿・伊勢守殿外いづれも列座、右兩人衆は別に被申上候。

一、追付御居間書院へ御出、豐後守・內膳一切被召、其次丹後守罷出候處、天氣もよろしく御大慶之旨御意。御意之通天氣も宜、益御機嫌能御着城被遊、恐悅之至奉存旨申上候所、無事珍重と御意。蒙御懇之御意難有仕合奉存旨申上退去。其次磐松・彈番、其次伊勢守、其次御家老中被爲召。

〔横山氏日記〕

四月十一日

一、前月廿六日巳の中刻江戸御發駕、當八日御着城之筈に候處、越後姫川滿水、御渡船指支、糸魚川驛に四日より御逗留被遊候處、川明、八日同所御發駕、夜前高岡驛御止宿、今曉八時之御供揃に而右驛御發駕、津幡御中休、同所御發駕之附人九半時過來候事。

一、八時森下御發駕之附人來、同半時前大樋江御出之附人來候に付、御年寄中三之御丸江被罷出、御城代豐後守幷伊勢守・御家老中は表御式臺江罷出、八半時少過益御機嫌能御着城、雁來坂江被爲入候時分、修理儀板端江進出罷在、豐後守御表之方鏡板之端江罷出有之、御意有之節修理致中座。御表式臺之方へ伊勢守・內藏助等罷出有之所に而御意有之、夫々御請申上。夫より階上御廣緣通り致御先立、御大廣間御緣側通り、芙蓉の間御小書院横御廊下より、御奥書院御緣頰、連雀之御杉戸より入、同所に眞龍院樣より之御附使者罷出候處に而御意有之。夫より蔦之間後御通り、御廊下より御居間書院三之間迄致御先立、其所より山口清太夫致御先立被爲入候事。

雁來坂は雁木坂

四月十二日。幕府、前田齊泰の新夫人が入輿すべき時期を告ぐ。

〔御年表〕

四月十二日、溶姫君樣御引移御時節之儀、來年十一月之御心得に可被成御座旨、松平和泉守殿より被仰渡。

四月十九日。前田齊泰學校に臨む。

〔溫敬公記史料〕

四月十九日臨學校。五月七日復臨。

四月廿三日。前田齊泰瀧之間に於いて下村宗兵衞に論語を講ぜしむ。

〔横山氏日記〕

四月廿三日

一、今日瀧之間において、經書講釋御聽聞可被遊旨被仰出、四時前芙蓉之御間ゟ御着座、御先立庄兵衞。兼役方に而勤之。尤若老出席有之候へば相勤候筈。御褉御近習頭開之。表方に而甲斐守等、御家老方に而内藏助等、外記儀も追々出席伺公に罷出。四時過相濟被爲入、御先立同前。

但講主下村宗兵衞相勤る。

論語公冶長篇、子曰臧之仲居蔡之章より、子曰甯武子邦有道則知の章まで。

四月。街道の並松を毀損すべからざることを告ぐ。

〔御觸拔書〕
定番頭〻
上下往還幷野田・宮腰往來並松、年々植付有之候得共、兎角難致盛木候。從來並松之儀は、御樣子も有之、暑往來之旅人著寒を凌ぐために茂候處、右植付之小松、何者之所爲に候哉、猥に伐捨候樣之儀も有之躰に候。尤役人共無油斷相廻り、右之族於有之者急度爲見咎可申旨、御郡奉行及斷候條、御家中之人々等右並木に相障り不申樣、家來末々迄嚴重可申渡候。
右之通被得其意、組・支配之人々〻可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配〻茂相達候樣可被申聞候事。
右之趣一統可被申談候事。
戊四月　村井豐後守

四月。犀川に於いて鑑札を有せずして漁撈すべからざることを告ぐ。
〔御觸拔書〕
御横目〻
才川魚殺生請負人、才川下川除町富木屋彌助と申者、文政六年より改而請負相願、川役銀定之通上納仕來候處、無札之殺生人多入込、渡世方指支申に付、其時々見咎候へ者、近年誰請

負与申觸渡も無之抔与申立、制方不行屆迷惑仕候段斷出候。文政二年に茂一統申渡候通、投網・小日網・流網仕者は、川師より見合札取請可申候。且又うぐゐ川抔者無札に而殺生不指支樣、心得違之族茂有之躰に候間、右等之趣一統申渡候樣仕度旨、町奉行申聞候條、前々申渡置候通、無違失急度可相心得候。

右之趣一統可被申談候事。

四　月

五月五日。大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤城に登る。

〔横山氏日記〕

五月五日

一、備後守樣前月廿三日江戸表御發駕、今石動より昨夕此表江御着、今日御登城被成候に付、各五半時過より追々登城。庄兵衛儀兼役方御用、外記儀御飾御用有之に付、少早目に致出席候事。

〔官私隨筆〕

五月五日

一、四半時過頃御登城、如例御玄關へ罷出、先芙蓉之間へ御通御口上被仰述。(青山將監御取次)其次藤

文政八年十二月十一日の條參照

田平兵衛罷出、畢而各被召加判之面々一切、相濟自分一人罷出候處、仰之趣有之、及御請。畢而先達御内々御藏板之品拜受之御禮申上候。退去、其次磐松、其次御家老中等被罷出。

一、右以後御居間書院へ御通、御對顔、御のし・御茶・御たばこ盆出、御料理不被進。追付御退出之御様子故、例之伺公所へは不罷越、御廊下中に而御様子を考、御先に虎之間邊板縁迄罷越居、御退出を見請、最前之所へ罷出、御立歸り之御勤有之御様子故、如例足早に席へ參る。

五月六日。金澤附近の一向僧等宗意の領解に關する東本願寺の取調を終へて歸國を許さる。

〔御助方賴方相論附意得寫〕

加賀之國法義諍論に付、雙方共文政八年仲冬御召、翌年四月迄に雙方御糾の上、文政九年五月二日・三日兩日於大寢殿御教諭。

初日　新門跡様

講師代　易行院

後日　當門跡様

列席
雲華院大含師
闗扇房靈雅師
亮空擬講師
兩役の事

本願名號の謂れの聞き開れたる一念の思ひに付て、双方諍ひ申す最初の書出なり。一つ一方の云、本願名號の謂の聞き開れたる一念は、掛る淺間敷機を阿彌陀佛の御助と信ずる心

なり。一方の云、本願名號の謂の開き開れたる一念は、賴む一念に御助と信ずる心なり。

先づ初の方證文一二を擧るに、一帖目七通云、何のやうもなくたゞ吾身は十惡五逆五障三從の淺間敷ものぞと思ひて、ふかく阿彌陀如來は掛る機を助けます御姿なりと心得まゐらせて二た心なく彌陀をたのみ奉て助給へと思ふ心の一念の起るとき。又五帖目十二通云、たゞ吾身はつみふかき淺間敷ものなりと思ひとりて、かゝる機までも助け給へる佛は阿彌陀如來ばかりなりとしりて、なにのやうもなくひとすぢに此阿彌陀佛の御袖にすがりたのみ申せば等。又賴む一念に御助けと信ずると言ふ證文は、御文の中に南無と賴めば阿彌陀佛の助け給ふと言ふ六字の名號の謂を述て如是心得るを信心を取るとは言ふなりと顯し給ふ處は、みなことごとく此證文となる。今其一二を擧るに、五帖目十一通曰く、初に六字の謂を述て終に、されば南無阿彌陀佛の体をかくの如く心得わけたるを信心をとるといふなり。同十三通曰、上に六字の謂を述て終に、されば安心といふも信心といふも、此の名號の六字のこゝろを能く心得たるものを他力の大信心を得たる人とは名付たり等。これらの文多し。右の通なれば、掛るものを阿彌陀佛の御助と信ずるといふも、賴む一念に御助と信ずるといふも、元より御文の御教化にして、共に名號の謂を聞き開れたる一念の相なる故に、偏に執せざるときは共に一致に歸するなり。夫はなぜなれば、元より名號の謂に法の方よりして言ふと機の方よりし

て曰ふとの差別あり。法の方よりして云ふときは、六字の名號は頼む者を助んと呼懸給ふ謂なり。機の方よりして云ふときは、六字の名號は阿彌陀佛助け給へとたのみ奉る謂なり。初に法の方よりして云ふ時の儀は、御文の中に、南無とたのめば必ず阿彌陀佛の助け給ふと云ふ道理へ約して六字の謂を述べ給ふ處は、みな法の方よりしてのたまふ御言なり。又機の方よりして云ふときの儀は、阿彌陀佛助け給へとたのむと云六字の謂にして、二帖十通曰、一念南無阿彌陀佛と歸命し奉るうちに皆こもれるが故に、おろかにおもふべからざるものなり。四帖二通曰、一向に無量壽佛に歸命して眞實報土の往生を願ひ稱名念佛せしむべきものなり。同十一通曰、抑南無阿彌陀佛の体はすなはち我等衆生の後生助給へと頼み申す心なり等。此れ皆阿彌陀佛助給へとたのむ謂としてのたまふ心なり。是はもと元祖の御言に、黒谷傳云南無阿彌陀佛と申すは別したる事には思ふべからず。阿彌陀佛我を助け給へと云ふ言葉と心得て等。又祖師正信偈に、歸命無量壽如來南無不可思議光如來とのたまふも、六字を二句に開て機の方よりのたまふ言にして、二句共に六字をば阿彌陀佛を頼む事としたまふ意なり。是を御文に相承したまへるなり。然れば法の方の阿彌陀佛はたのむ衆生を助け給ひ、機の方の南無は助け給ふ阿彌陀佛を頼む故、南無と阿彌陀佛は元より相離ぬものなり。仍て御文に南無の二字を釋し給ふには、必ず阿彌陀佛の四字を擧て釋し給ふ。其一を擧るに、三帖五通曰、南無と

云ふ二字は衆生の阿彌陀佛を一心一向にたのみ奉て助給へと思ひて餘念なきこゝろを歸命とはいふなり。又阿彌陀佛の四字を釋するには必ず南無の二字を擧て釋し給ふ。其一を擧るに、御文に、阿彌陀佛と云四の字は南無と賴む衆生を阿彌陀佛のもらさず救給ふ心なりと。此類文多し。二字と四字と離すべからざる事、是等の文にて知らるゝなり。然れば法の方より云ふ時は、賴む者を助けんとの名號にして、南無に離れぬ阿彌陀佛なり。又機の方より云ふ時は、阿彌陀佛我を助給へと云名號にして、阿彌陀佛に離れぬ南無なり。爰に於て双方諍論の儀終に一致に歸する謂を心得べき事にして、賴む一念に御助けと信ずるも、掛る者を阿彌陀佛の御助と信ずるも、共に名號の謂の聞き開れたる一念の相にして、全是一致なり。其故如何と成れば、賴む一念に御助と信ずるは法を機に受たる相にして、賴む者を必ず助んとの名號の謂れの其儘機に受たる處なり。又掛る者を阿彌陀佛の御助と信ずるは、機より法に向ふ相にして、賴む一念に御助と名號の謂を實に聞得たる處は、必ず心を彌陀に向けて、掛る淺間敷者を御助ぞと深く信じ、一心一向に阿彌陀佛助給へとたのむ思ひの起るべき事なり、若其思ひの起らざる者なれば、只名號の謂を聞分知り分たるのみの分際にして、實に聞得たるには非ず。然れば法を機に受けて賴む一念に御助と信ずる處、卽機より法に向て掛る者を阿彌陀佛の御助ぞと信じ一心にたのみ奉る思なり。此二つの相は全く一致にして、離さんとし

ても離すべからざる者なり。然るに双方の輩互に一邊を執して諍論を致すは此謂に闇きが故なり。又双方の相諍ふ處過失ある事を心得るに、先づ初にかゝる者を阿彌陀佛の御助と信ずると云一類の過失を、他の一類より種々の失を擧て破す事なれども、今略して其一二を擧るに、彼一類の者は、賴む者を助けんとの名號の謂れは善知識の御敎化なり。我等に於ては只御助を信ずる計なりと云々。若然らば大なる誤なり。是は賴む一念に御助と信ずると云義を嫌ふ故に、賴む者を助けんとの名號の謂を善知識の御敎化なりとのけおきて、只我等に於ては御助けを信ずる計なりと云ふと見えたり。是局執の甚敷處より、善知識の御敎化をも押のける樣になりたる事にして、實に以て恐るべき事なり。善知識の御敎化に仍て、名號の謂を賴む一念に御助と聞き得られたればこそ、かゝる者を阿彌陀佛の御助と疑はず、深く信じて一心に賴む思ひ起る事なり。都て善知識の御敎化を離れて別に信心を起すと云事はなき事なり。帖目故に二ノ二通曰、此外になほ信心と云事のありと云人是あらば大なる誤りなり。すべて承引すべからざるものなりとのたまへり。又彼一類の者、主客の喩を出して、亭主の言には御饗應の麁抹なる事を詫び、客の言には丁寧を謝す。何ぞ亭主の如く云はんやと喩ふ云云。此喩を用る心は、賴む者を助んとの名號の謂の聞き開れたる一念は、賴む一念に御助ぞと名號の儘を心得る思ひは一向になくして、只かゝる者を阿彌陀佛の御助と信ずる思ひ計りなりとす

る意なり。故に亭主と客との言の違へる處を取て喩とするなり。若然らば御文に、念佛の謂れを知りたる人こそ佛とはなるべけれとのたまひ、或は南無阿彌陀佛の体をかくの如く心得わけたるを信心をとるとは云なりとのたまへる御言は、如何か解す事ぞや。是らの御言より見れば、名號の謂の通りに頼む一念に御助と心得る事明也。又甚敷に至ては頼む事を嫌ふて、歸命が頼む事ならば、歸命頂禮どら如來もどら如來を頼む事なるべしと戯言を申したる者もありとなん。是は歸命は頼む事なりと云は祖師蓮師の御釋明白なるに、假染にも箇樣なる麁言を申し出すは勿体なき事なり。恐べし謹むべし。眞實報土の正因は只彌陀を頼む一念の信心なり。是に仍て蓮師御一代聞書云、前々より御相續の義は別義なり、只彌陀を頼む一念の義より外別義なく候。又云、聖人の御一流は頼む一念の處肝要なりと。然るに若し頼む一念に御助と云事を嫌ふ者あらば、御一流の肝要を廢するものにて、其過失最大なり。又頼む一念に御助と信ずると云ふ一類の過失と云ふも種々有り。其二・三を擧るに、彼一類の者よりかゝる者を阿彌陀佛の御助を信ずると云ふ一類を破して云ふ。頼む者を助んとある六字の名號を聞乍ら、阿彌陀佛の御助を信ずると云ては、只阿彌陀佛の四字計りを信じて南無の二字を信ぜざるものなり。然れば阿彌陀佛の四字安心にして六字を信じたるに非ず。若し信ずるを南無と云はゞ、阿彌陀佛南無になりて六字逆さまになる故六字の次第に非ずと云云。此破甚だ當ら

ざる事なり。其故は阿彌陀佛を信ずると云も阿彌陀佛を賴むと云ふも全く同じ事にて、阿彌陀佛の御助を信ずる心を具さに述る時は阿彌陀佛助けたまへと賴む思ひなり。然れば阿彌陀佛は所歸なり、信ずるも賴むも能歸にして南無なれば、其体卽ち南無阿彌陀佛なり。若しこれを四字安心とするならば、天親論主御自身の安心を述たまひて、歸命盡十方無碍光如來とのたまふも、阿彌陀佛の四字計りを信じ給ふとせんや。又祖師も歸命無量壽如來南無不可思議光如來とのたまふも四字安心なりとせんや。又阿彌陀佛南無になりて六字が逆さまになる故に六字の次第に非ずとは可笑俗難なり。筆に書き口に言ひ顯す時は說筆次第にして、阿彌陀佛の御助を信ずると云ひ、或は阿彌陀佛助けたまへとたのむと次第して云へども、心に顯るゝ時は法在一心前後次第は無き事なり。阿彌陀佛を信じ阿彌陀佛をたのむ思ひの其体卽ち南無阿彌陀佛の六字なる事勿論也。先づ雙方共五月六日歸國御免。

二日市誓入寺親子不會得に付、右教諭之拜聽御指除之處、十一月會得書指出候に付歸國御免。然處金澤法藏寺一件に付再往御呼歸に付、丁亥正月親子共上京、三年後歸寺致、親子共押隱居今に不開附候なり。

五月十七日。諸士に對し藩の借知を明年より五ケ年間增徵すべきことを命ず。

〔宮私隨筆〕

五月十七日

一、增御借知等被仰付候付、覺書兩通可得其意旨、御用番紙面到來。被仰出之趣奉得其意旨及返書。

來る亥年收納米より末五ヶ年之間、是迄御借知指上來候人々、知行百石に付五石宛增御借知被仰付、是迄御借知不指上人々は、百五十石以上は百石に七石充、百五十石に不滿人々、百十石迄は百石に五石充、百石以下六十石迄は百石に二石宛之圖を以、御借知被仰付、五十石以下幷御切米等夫々准候分は、御借知不被仰付由。

一、五十石以下之人々も志次第可指上旨。

一、手繰出來之人々は、當年より五ヶ年可指上旨。

一、御仕法御調達銀は被指止、銀子御借付に成居候分は、都而被下切に被仰付旨。

右兩通之大要也。

借付は貸付

五月十九日。越中魚津在住の藩吏等に命じ異國船の渡來に對し警備せしむ。

〔溫敬公記史料〕

五月十九日。命魚津在住原五郎左衛門等。警備外國船來泊。

五月廿三日。前田齊泰瀧之間に於いて林周輔に書を講ぜしむ。

〔横山氏日記〕

五月廿三日

一、今日瀧之御間において、經書講釋有之候に付、芙蓉之御間ゟ御着座御聽聞被遊、四時少過被爲入。御先立御前後共勝尾半左衛門相勤候由之事。

但、講主林周輔相勤る。

五月廿八日。町・在に用銀を命じ、從來の御仕法調達銀の徵集を廢すべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

付札、御郡奉行ゟ

御勝手振御難澁至極に被爲在候處、其以來不時御物入打續、一通之年柄に而も御行詰之場合に候處、去酉年非常御物入も打重り、當時に而は最早如何共被成方無之、加之追々御入輿御入用等被爲在候儀は、一統承知之通に候處、指當り御凌方之御手段無之に付、拙者共重々詮

御仕法御調達銀は文政元年十月廿九日の條參照

議之上相達御聽に、不被得止事、今般三州町・在身元相應取續候者江、御用銀被仰付候ニ町・在共一統御仁惠を以、各其業を安じ候樣有之度は申迄も無之儀に候處、如此御用銀被仰付候儀、御心痛被爲在候得共、莫大之御入用共相續、他國之御借財過分至極之上、大坂御廻米も御闕年故、最早如何共御手繰方無之、ヶ樣之御時節、御領國之者一統力を合奉補候樣被仰付候より外無之故、乍御心外御用銀被仰付候儀に候條、此所奉恐察、一統志を勵、御領國に而七千貫目計御用立候樣有之度。銀高も過分に而誠に不容易儀に候得共、不被得止事御時節に候條厚存込、何分心服を以、幾重にも致出情候樣重々可被申諭候。銀割等之儀追而可申渡候。

一、御仕法御調達銀之儀は、御議定有之品に候得共、右之通御用銀被仰付、且御家中江御借知も被仰付候故、御仕法御調達銀も是迄之通御取立有之候而は、二重之御取立に相當り、初發被仰渡候御趣意にも相振れ候に付、御詮議有之、外被成方も無之、今般御用銀被仰付候に付、御仕法御調達銀は御指止被成候。仍而是迄町・在江御貸付に相成居分は、都而被下切に被仰付候。何分是迄之通取立置度儀に候得共、不被得止事次第に候條、此所一統會得いたし候樣有之度候。右之通り夫々可被申渡候事。

戊五月

御勝手向必支与御指支に而、如何共御辨方無之に付、今般無據町・在身元相應取續候者江御

用銀被仰付候に付、各ゟも年寄中より先達而委曲被仰渡置候通に候。依而各支配所當銀高幷出銀限月、別紙之通可申談旨、年寄中より被申渡候に付、則別紙壹通相達候條、右限月之通當場ゟ相納候樣可被申渡候事。

五月廿八日

付札、御郡奉行ゟ

今般町・在ゟ御用銀就被仰付候に、右銀割幷限月之儀遂詮議、御算用場ゟ申渡、右奉行より夫々申談筈に候條、被得其意、銀高限月之通御用立候樣可被申渡候事。

戌五月

覺

一、三千五百八十貫目　諸郡御用銀高

内　千七百九十貫目　當六月廿日切上納

千七百九十貫目　當十月廿日切上納

〆

右之通可被申談候事。

戌五月

御用銀

一、七十四貫目　能美郡
一、七百貫目　石川郡
一、五百七十九貫目　河北郡
一、三百二十五貫目　口郡
一、四百十貫目　奥郡
一、六百五十貫目　礪波郡
一、四百四十九貫目　射水郡
一、三百十貫目　新川郡
〆三千四百九十七貫目
一、八十三貫目　松任
合三千五百八十貫目
〆
一、五百五十貫目　高岡
一、百七十貫目　宮腰

一、二百六十貫目　小松
一、百七十貫目　魚津
一、九十貫目　所口
一、二百七十貫目　石動・氷見・城端此三ヶ所
一、千五百八十貫目　金澤
〆三千九十貫目
合六千六百七十貫目

〔ふぐ汁の咄〕

文政元年の令に、此末追々莫大之御物入候得共、御貯用とてはなし。さすれば三州へ御用金にても可被仰付なれど、是迄數十度被命一統迷惑仕事故、此末最早御用金とては被仰付間敷、依而右代りに仕法御調達銀と申を被仰付候。此法や御上御益、下にも利有て、兩善之法に而候間、何れも進み加はれとの令なれども、是迄いくばくの信を失ひたりし事故、其行末を考へ歎くもの有て進み加はるものなく、銀高心定に違ひたれば、衆吏に命じて押て申付、多の銀高取集め、尙怠りなく法被行有之に、同文政九年の六月九日に、古より見聞かざりし御領國へ七千貫目の御用金被仰付、又此仕法調達同じ月日被指止たり。萬民只あきれにあきれ果

本書は寺島藏人の著すところ

て悲みぬ。民塗炭に苦むは言もさらなり。いかなればかく心強くも民に信を失ひ、民を欺き欺きをし給ふ事にや。此仕法に御調達銀与申は、調達は名にて實は取拔頼母子也。文政二卯年に初り、同じ來る子年にして十ヶ年の滿會なりしを、今二年にして破談せり。又文政七年に此銀子諸士へ御借付、および町・在へも貸付有しに、今度此法被指止に付、此分被下切与なる。被指止砌申渡に、御用金に又仕法銀指出し、二重之上納与成り可爲迷惑、依而被指止候旨也。未取當らざるものゝ迷惑不信服は、今二年にしての破談、且御用金与仕法二重之上納と有れど、是に加りたるもの此度御用金など不出小手前之者ども有り。又可也之者御用金之上へ此分を上納はするとも、重而鬮取あたれば取入るゝかねなれば、二重上納と云ふにはあらず。不取當者へ追々可相渡かねを、只被下切与はいかゞの事ぞ。憂き中より是迄出銀し來り候も、重而取當りなば一方の助にもと云心當て成しに、只水のあわとなれり、何故かゝる難儀迷惑之事御厭ひなき御政事とて、三州の雷動大方ならず。

又曰、此法破談之實は尤二重上納を厭ひしにあらず。此金當成御入用方へ遣ひ込み、引負ひとなり、滿會に可渡金無之、如何ともなすべきなし。爰を以二重上納迷惑なるべし等名をかり、實は破談したりと云ふの噂頻なりし。

御用銀高は三州へ七千貫目なり。六月九日に申渡して、同じ月の廿日に金上との事、日數漸

く十二日が間なり。いかなればかゝる大造の事、かくあわてたる早卒の申渡にやと云ふ人口々に噂也。

但遠郡の役人出府に、道中日數三日掛る也。扨夫より直に出府したりとて、仕度もあれば一日も掛るべし。夫より道中又三日、往返都合七・八日はかゝる也。扨出府の上申渡相濟、同役示談の外聞合申談等の用向有之べく、品六ヶ敷事なれば、別て急に歸村成るまじく、扨事濟み歸村に又三日の道中して、夫より何れも打寄、銀割符等の示談容易ならず、扨右銀子指出者を呼寄て、遠方の者は又彼是日間取る也。此等の事は書記すべき事にもあらねども、かゝる事すら心付ざるにやと、其砌人口々に嘲弄せし事故記しつ。

金澤町之銀割符方身上見込違ひ、商工身上之事親子之間にもかくして不云ことあり。況や他人之知る所にあらず、見込違有之は尤ない。賄賂申込、依怙贔負、且此時之御用金高大なるを以て、石持・棒かつぎ・取上ばゞに至る迄二百目・三百目之割符申付かね取上たる故、愁訴悲歎之雷動大方ならず。

金澤法船寺町に中村屋喜兵衛与云者あり。此者も六月八日御用申渡之呼出し紙面來りしかば、扨は御用銀之事、今身の上傾きいかゞともすべきなき砌、上銀之程はしらねども、所詮なすべき手段なしとて、深く心を痛め、食も咽に不下躰なりしに、其夜に入て首をくゝり死ぬ。野町二丁目茶屋徳三郎与云ものへ御用銀申渡せしかば、深く心を痛め、其夜出奔して行方し

らず跡に殘りし老母其年六十九歳なりしが、心痛のあまり、同六月十三日の夜秤のふんどうをたもとへ入、井戸江身を投じて死ぬ。

粟ヶ崎村木屋藤右衛門が上納高は四百五十貫目也。此者先きに記せし御召米切手只取上之憂深かりしとの事に而、多くの損分家之盛衰に懸ればとて、家計評する事大方ならず。然るに同じ村に居て、彼が下に口を糊するもの幾ばく成しが、藤右衛門身上の破滅に至りなば、此末いかにして口を糊せんとて、六月廿一日之朝二百人計粟ヶ崎之橋上に集り、口々に喰へぬ〳〵と高聲を揚げ、夫より廿二日朝に至りて、惣代として肝煎方へ廿人來り、藤右衛門が家の滅せざる樣にとの愁訴なり。肝煎は金澤御郡所へ訴出たりしかど、誰取上る人もなく、只能きに諭し遣せとのみ申渡して勞する事もなし。

小松町に而御用銀又仕法銀の指止らるゝとの命を聞き、輕きもの扉を卸して商賣をなさず。殊に此驛は先きの令なる小幡多門仕法調達銀也。出銀の多かりし事身のほまれにて、あく迄强ひすゝめて過分にくはゝらせ置たりしかば、悲歎愁訴の雷動別而甚し。高岡驛も同數屋を鎖し悲むもの軒をならべ、夜に入ては多く集り聲を揚げ、騷々敷立さわぎ等して、いかなる事をか仕出すべかりしかば、奉行より出銀割符之事等恐れ難申出故に、樣々取計に而漸く八月の半ば四ヶ一上げ銀を濟したり。高岡驛之銀高五百五十貫目也。小松も同じ扱に而四ヶ一を濟し、一日々々と

過し行きぬ。

越中戸出村に而御用銀に而、身本之者は相ひそみ、輕き者はかせぎなく、其頃戸出米を少しく御召米有り。彌所用米に乏敷く、くへぬ／＼与町中を百人・二百人計充所々へ集り、或は川原へ出て聲を揚る事連夜也。此砌裁許年寄之詮議に而奉行へ訴、其日過ぎ至而輕き困窮者へ、少々宛鳥目を遣被扱有之旨。木吉湊・今石動・城端・氷見之三ヶ所も同じ憂を以て、四五百人計集り立騒ぎ、貝を吹き竹の筒を吹き所々へ集りし事連夜也。七月九日・十日之頃は、別而金龍公大祥之御祭り七月十二日なりし。富山侯より御代香之御使者十日夜今石動止宿なりしに、同所以之外騒々敷、何事をか仕出さんの人氣ものすごく、一睡もなさずと物語りぬ。

能・越は所隔たりたる故、巨細の憂き事委く耳にいらず。礪波郡御郡年寄役の物語に、彼れが家に常々來りし大工の、肩につぎし尻ふくろばしたるひとへもの着し、腰に金鎚を指たるが、物思ふさまなるまゝ、いかなる憂事かあるにやと問ひたりしに、さればこそあすの烟立兼候我にも五拾目の御用銀あたりたりと云しよし。三州親敷きゝたらんには、いかなる憂事のあるやらん。

金府袋町越中屋次左衛門与云有り。片町に宮腰屋久右衛門と云ふ有り。粟ケ崎木屋藤右衛門手代に木屋次助与云有り。是等此時に當て御融通方にたづさはる。表には御益御爲与號へ、

實は全く己れを利するの奸人、時の權門へ立入密事を聞出し、世に怪者と云。此者どもは四月御召米切手只取上らるゝと云密事を聞出し、己れが手前に所持したる切手悉く人へ讓りて、黠檢之憂を免れたり。衆人彼を悪む事甚し。依而彼等が家打毀てと云風評專らに被行、毎日辻々彼等が家の前に人多く集りたる事有り。

但此御用金は六月九日申渡し、同廿日に上納との事なれ共、誰此日に上納したるものなし。金澤町に同晦日に萬分が一を出しぬ。其他は八月半ば四ヶ一を上るも有り、終に文政十年の春に至て猶全く上納は不濟。幾年懸りて上たる人も有と云噂も有り。かゝる大造の事を十二日が間に上げとはいかなる事ぞと人口々に嘲りぬ。

六月二日。前田齊泰能を演じ老臣等をして之を觀覽せしむ。

〔官私隨筆〕

六月二日

一、今朝六半時頃罷出。

一、今日御能拜見被仰付難有仕合奉存旨、御用番へ申達。

但、此間先月御用番より之紙面に、難罷出候はゞ御禮以紙面可申越、御用番より引請可被申上旨迄被申越候付、罷出候へば別に紙面出候に不及、罷越候上御禮可申上事に心得居候

處、當座之御禮はいづれも此間に申上、御用番より引請被申上候由也。依而跡ながら右之通申述候處、其由被達御聽候躰也。

一、五時前頃御能初り、四半時過御中入。

一、其後之御能八時前初り、七時過頃濟。

一、相濟候而以佐藤隼人御禮申上候。いづれも列座也。

御番組

加茂　御　田村　坂井要人　羽衣　波吉甚次郎

卷絹　諸橋權進　七騎落　波吉宮門　須磨源氏　御

祝言金札　諸橋欣之丞

麻生　禰宜山伏　米市

六月五日。藩侯の學校に臨席中その構外なる道筋に鎗を携へて通行する者の心得を告ぐ。

〔御觸拔書〕

學校江御出中、同所御圍外左右致往來人々鎗先相見え、御目障に可相成候。依之右左右鎗爲

持致往來候人々江、御出中之旨警固足輕より申聞候はゞ、蹲伏可罷通候。尤前後之儀に不及其儀候。此段爲心得申聞置候事。

右之趣一統可被申談候事。

戌六月五日　　　　前田彈番

六月八日。如來寺靈堂の普請成りて供養を行ふ。

〔御用番中雜記私錄〕

六月八日

如來寺御靈堂御普請相濟候に付、今日御遷座御供養、拙者相詰、取次瀨左衞門・七郞左衞門相詰、四つ時前御供養相終、直に登城御用番甲州殿へ御遷座相濟候段届、御用部屋へも同斷。

六月十二日。家中諸士より增徵する借知に關して細故を告ぐ。

〔御觸拔書〕

今般御家中之人々知行二百石餘以上增御借知、二百石以下夫々割合を以御借知被仰付、來亥年より指上候樣被仰渡候。仍而今般之分者、都而町藏納に候條、被得其意、人々より百姓幷藏宿江申渡候樣可被相心得候。村附・入所附等、案帳之通人別爲指出、組切に被取集、各印

形之紙面を以、當十月中當場御借知方役所江可被指出候。
但、上高割合之儀者、各承知之通に付改而不申達候。
一、他國居住之人々は、増御借知等不被仰付候。
一、三ノ一被下候人々御借知無之、本知被下候上より一統割合之通可指上候。
一、遠慮等被仰付置候人々増御借知等無之、追而御免之上者一統之通可指上候。
但、唯今迄指上來候分は是迄之通に候。
一、亂心之躰に而御知行被召放、御扶持方被下置候人々は、御借知無之候。
一、舊宅之分御借知無之、跡目被仰付候上一統之通可指上候。
一、御切米・御扶持方被下候人々者、春渡より可指上候。
右之趣被得其意、組・支配之人々江被申渡、同役中傳達可有之候。且當年より指上候人々有之者、此分は村附帳當月中當場御借知方役所江可被指出候。其外相洩候儀者、當場承合候樣是亦御申渡可有之候、以上。

六月十二日　　御算用場

六月十二日。銀子缺乏するを以て銀仲預り百目銀手形を發行することを告ぐ。

〔御觸拔書〕

當時銀支に而一統不融通に付、當町銀仲預り百目宛之銀手形、右手形裁許升屋次右衞門・酒屋宗左衞門漆印に而出來、御算用場町會所加印いたし可指出候間、此節より當十一月十日迄、御領國一統正銀同樣無滯通用可致候。且引替之儀者、右同日より同晦日迄之內、御算用場において正銀与引替可申候。

一、右手形、尤諸上納に茂取扱可申候。將又若他國指引方、正銀に而指遣不申而難叶向者、其品支配先江相斷、御算用場江可申出、其上に而遂詮議、無據分者於御算用場正銀与引替可相渡候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

六月十二日　　長　甲斐守

右之趣可被得其意候、以上。

岩田盛照は本年七月廿四日の條參照

六月廿八日。家老山崎庄兵衞等罰せらる。

〔温敬公記史料〕

六月廿八日。家老山崎範古。馬廻頭山本守令・坂井克任致仕。責故定番頭岩田盛照屛居。以

先是盛照上書言範古等三人共才可用也。

〔見聞袋群斗記〕

六月廿八日定番頭隱居岩田傳左衞門盛照、御家老山崎庄兵衞範古、御馬廻頭山本中務守令・坂井小左衞門克任御咎被仰付。先きに上書一件之由と云。

六月晦日。銀子缺乏するを以て諸上納等に金子を用ふるを得しむ。

是月は大盡なり

〔御觸留拔書〕

當時以之外銀支に付、金子所持之者共致兩替度分も、銀子拂底に而金買入人無之故、金子有之候共融通方は指支候躰に相聞候。依而金相場一兩に付六十四匁之極直段を以、諸上納幷御家中當年納拂米代等諸指引無滯爲致通用可申候。尤右極直段之儀は、七月朔日より同廿五日迄取引可致候。且兩替商賣人金子賣買之節は、極直段之外に定之口銭爲取請可申候。

右之通御算用場奉行等申聞候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之候面々は、其支配へも相達候樣申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

六月晦日　長甲斐守

六月。金澤卯辰八幡宮に駱駝を見世物とす。

〔年々珍敷事留〕

（同年は文政九年）

一、同年六月下旬、他國より唐國之羅具駄の馬と申す獸、卯辰八幡宮の門內に而大成こや懸見物出る。先せいの高さ九尺餘り、其外高さに准ず。都而形ち馬の如く、首は各別に長く、顏は馬よりやさしく、尾は牛に似たり。毛色かはらけ、背に別にたかき所あり。是を生立ちの鞍と申す。鳴聲無し。男女至而睦く、女は小形なり。二疋共至而人に穩當之者。喰物者菜・茄子類を喰ふなり。右獸、後に御大名方を引廻り申候。誠に珍敷獸なり。

〔似寄留〕

（前書には六月下旬とす）

七月月末に、關東より上候らくだと申物、卯辰八幡境內に於て見せ物有之。誠に唐の馬とか申樣にて、長け一丈計橫二間にて、首長く、茶色、馬樣之顏、足は牛に似て、尾も同斷。二疋つがいと申事。唐より子をとめて渡したると承り、茄子を食せて置。毛長く、せごこんもりと高く、誠にをらんだ國より渡りたるか珍しき物也。大當り。御上覽有、所々屋敷方へも行。

（本年五月廿八日の條參照）

六月。仕法調達銀を借用する家中の返納米指紙面は之を藏宿より給人に返附すべきことを告ぐ。

〔若年寄方諸狀留〕

去々年以來御家中江御仕法御貸附銀被仰付、右返納米先達而諸給人より藏宿江之指紙面等取

立、藏宿共ゟ相渡置候處、今般被下切に就被仰付候不及除米候。依而右指紙而藏宿共より直に諸給人ゟ可相返旨、御郡奉行并三州諸奉行等ゟ可申談哉之旨、御勝手方當月御主附求馬殿及御達候處、右之通相心得、此段爲御承知夫々可申談旨、御同人被仰聞候條、御承知被成、御同役・御同席御傳達、御支配等ゟ御申談可被成候、以上。

六　月

澤　田　義　門

竹　田　彦　六　郎

苧絈は苧がせなるべし

六月。能登口郡に產する苧がせの仕法に就いて上申す。

〔口郡絈方一件〕

能州口郡、往古より苧絈年中二百駄餘、年柄により三百駄茂出來仕、江州等に賣捌來申候得共、取扱候者共元手無之故、前銀借請候に付、いつとても直段下直に被買取申候族に付、女一人日に纔二十二文計之稼に付、文化十年に能州御奉行進士源兵衞樣・中村逸角樣御詮議に付、近江より職人女御呼立に付、縮嶋出來方習請候得共、嶋柄・地合等不向に而賣不申に付、文政四年に右嶋出來方、私心付之趣仕法帳相調奉指上候處、則同年に右仕法通被仰渡候。依而地合並嶋柄等、國々向々嶋見合差遣し出來爲致候處、年々繁昌申候。如此成行候者、永久御國產与奉存候。尤先達而も追々御達申上置候通、御仕法以前ゟ者、當時絈一つに付二十

封中は府中なるべし

文計り直上り仕候故、能州江近江より、先前段申上候駄數に准じ、不斗當時二百五十貫目計之御益に相成申候。

一、御當地呉服屋共、一統前々より夏向帷子地、越中筋八講嶋、並封中嶋類年々賣來申候。近年者下女下男迄茂、越後筋着用仕風俗に相成候故、右八講嶋之類は一端も賣不申候。尤以前は夏向越後縮賣四・五人例年罷越候得共、近年三十人計茂罷越、年中七千端計も賣申候。然所近來能州縮並戸出縮賣出し候故、越後筋三千端計茂御當地江入不足仕樣子に御座候。依而今一遍能州縮染色・白筋宜敷爲致候者、猶々御國縮繁昌可仕哉与奉存候。色々世話仕候得共、元來紿惡敷故、右染色・白筋はぜ不申候に付、猶更工夫仕候得共、紿小賣之者共數百人之事故、紿出來方申談方之手立茂無御座候處、此度紿短尺等之儀に付、別紙之通混雜仕候樣子に付、四・五年此方心付之趣年々詮議詰、此度仕法書相調奉指上候。

一、能州筋者、前々より成來に而、高岡等商人共、毎歳最上より惡敷苧取寄仕送り仕候故、惣体紿惡敷故、江州賣捌直段茂不宜、尤德丸縮致候而茂染色惡敷、白すぢはぜ不申に付、去々年最上より五駄試に宜敷苧取寄、能州江差遣し、縮出來爲致候所、次第に宜敷相成申候に付、追々取寄可差遣圖り申談置候。

能州西側紿買宿能登部下村與三兵衞。同勘右衞門。同七兵衞。同茂三郎。同上村吉三郎。

同東側高畠村惣右衞門。同甚右衞門。同與左衞門。同忠兵衞。藤村喜右衞門。小田中村清次郎。同茂十郎。德善寺村吉兵衞。二ノ宮村藤藏。久野木村文左衞門。芹川村與三兵衞。飯川村萬右衞門。大念寺新村與四兵衞。子浦村茂兵衞。同太次右衞門。〆二十軒。

一、右之者共、以來絈問屋に被仰付候事。

一、絈問屋並絈小賣者百七十人計、株被爲仰付候事。

一、絈吟味之儀往古之通丈三尺五寸、糸數八百筋に相改候樣、御郡方絈師並小賣之者共、糸數不足並短尺絈取扱不仕樣、嚴重に被仰渡可被下候事。

一、絈問屋二十軒之者共、絈仕分候而者相揃不申間、能登部・高畠兩側之內、絈見分人功者成者四人計、江州客より指圖之者可仕候。尤手間料は絈問屋より可仕事。

一、所口町御奉行御支配与、御郡方御支配今般之御仕法与者、役立も違候間、以來絈丈ヶ三尺八寸糸數四百筋に、絈師共仕立可申樣被仰渡可被下候。尤絈師於手前、損益者無之事に御座候。且御郡方出來絈、所口江指遣不申樣、嚴重に被仰渡可被下候。無左候而者、御郡方役立違可申故紛敷、御縮方相立不申候。若右之趣共心得違之者有之候はゞ、見付次第に嚴重に被仰渡可被下候事。

一、絈荷物、御郡方朱印、所口黑印押可申事。尤絈見分四人之者印押可申樣、被仰渡可被下

候事。

右之通、都合三通仕法書等奉指上候、以上。

戌六月　　　　　　　　　　　一丸甚六

御算用場

［能州絈一件］

口郡村々出來苧絈取縮方之儀に付、金澤町一丸甚六仕法帳等差上候に付、右仕法通被爲仰渡候而茂村方指支無之哉と帳面寫御渡、委曲御紙面を以被仰渡之趣奉畏候。仕法帳等得と披見仕候處、絈問屋幷絈小賣人株に仕、村方に出來之苧絈右株人之外江は賣渡候儀不相成躰に御座候。元來絈稼方之儀は、至而小前後家・孀・女子共等世業無之者共之稼に仕候品に而、何れ成共少に而茂絈直段宜敷買請候者江賣拂、渡世相送り申儀に御座候。然所右絈縮方与して、問屋・小賣人株立に被爲仰付被下候而は、小前之者必至与差支、及迷惑申儀に御座候間、何卒格別之御詮議を以、是迄之通被爲成置、何方成共勝手次第手廣賣捌、小前之者渡世相送り候樣奉願上候。爲其連印書付上之申候、以上。

文政九年十一月　　　　　　　口郡肝煎連名

御郡御奉行所

七月十二日。昨今兩日天德院に於いて前田齊廣の三回忌法會を執行す。

〔溫敬公記史料〕

七月十一日十二日。修金龍公三年忌法會於天德院。

〔横山氏日記〕

七月十二日

一、今日於天德院、金龍院樣御三回御忌御法事御執行に付、御用番內膳・主付內藏助・若老助內記之外、何茂六半時より御寺詰罷越候事。

一、五半時頃御出、天德院江御參詣、御先立外記詰之內相勤。讀經御聽聞被遊、御法事相濟候上御燒香。畢而和尚求馬誘引、於御前左之通被下之。御往來共和尚式臺江罷出、御戾り之節御意有之。求馬御取合申上る。

御時服二　白銀十枚

四半時過御還城之事。

〔溫敬公記史料〕

七月十二日赦。

七月十九日。前田齊泰金澤に於いて齊廣の女厚姬の松平肥後守容敬と緣

助は主付の補助なり

肥後守は會津侯世嗣

組を許されたることを告ぐ。

〔横山氏日記〕

七月十九日

一、四半時過御居間書院江御着座、年寄中一切、御家老中・若年寄中一切被爲召、厚姫樣御儀肥後守樣江御緣組御願之所、當月十二日御用番松平和泉守殿へ、御先手奧山主稅助殿御呼立、御緣組御願之通被仰出、難有与御意有之。織江恐悅奉存候旨御請申上、退去之事。

但、右相濟各常服に相改候事。

〔官私隨筆〕

七月十九日

一、左之紙面共到來。

今日拙者共御前へ被爲召、厚姫樣御儀松平肥後守樣へ御緣組御願被出候處、御願之通被仰出、難有被思召候。此段御自分へ拙者より可相達旨御意被成候付如此候、恐々謹言。

七月十九日　奧村內膳惇叙

奧村丹後守殿

七月廿四日。岩田傳左衞門政事を議するを以て蟄居を命ぜらる。

〔横山氏日記〕

七月廿四日

岩田傳左衛門

御手前儀當時隱居被仰付置候處、御政事向之儀に付身分不相應、過當至極之段被聞召、不愼之至不屆千萬に候。依之先指扣被仰付候付、今般遠嶋をも可被仰付候處、重き御法會に付御大赦と被仰付候儀故、其段は御用捨、蟄居被仰付候。此段可申渡旨被仰出。

傳左衛門諱は盛照

七月廿五日。前田齊泰、齊廣の女厚姫の縁組定まれるを以て能を演じて之を祝す。

〔横山氏日記〕

七月廿五日

一、今日各御能拜見被仰付候に付、五時前より上下着用追々出席之事。

一、今日御祝之御酒・御吸物・御膳下不押立頂戴被仰付候旨、以丹羽七郎左衛門月番江被仰出旨、主附助內記江月番演述。各幷若老江茂可申談旨茂申聞に付、夫々及演述候。御禮は月番引請に而申上候旨茂申聞に付、內記より月番江御禮申述置候事。

一、四半時頃餘程强き地震に付、各御次御三之間において、丹羽七郎左衛門を以相窺御機嫌

候所、以同人何之御障茂不被爲在候旨御意有之。

〔官私隨筆〕

七月廿五日

一、今朝五時登城、御能初り以前御用番へ御禮申演候。

一、無程御能初る。

高砂 要人　八嶋 權進　六浦 御

御中入

弱法師 宮門　小鍛冶 御　祝言岩船 万十郎

二人袴　樋之酒　兒流鏑馬

一、四半時頃八嶋之内餘程强き地震有之、拜見所之後御緣頰に而御機嫌伺候旨各勝尾半左衛門迄申達候處、半左衛門もいまだ御前へ不罷出旨也。追付御機嫌能被成御座旨、以同人被仰出、見物所に而演述。

一、御膳被下御吸物等被下旨、御用番迄被仰出演述有之。御中入之内頂戴之。松之間二之間 御吸物伊勢鰕・御酒・御取肴するめ也。再進あり。畢而同所にて御用番迄御禮申演候。

一、御能七半時過濟、以中村五兵御禮申上候。松之間二之間各列座也。

七月廿六日。諸士に賜與したる紋付の衣服着用に關して令す。

〔御觸拔書〕

御家中之人々江御紋附之御品被下方等之儀、幷鳥構場之儀に付、別紙兩通之通就被仰出候、相越之候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月廿六日　　　　奥村內膳

御家中之人々等江、御紋付之御品被下候は、品重儀に而、元來御目見已下之者江者不被下筈に候處、御目見以下に而も格別之者江者、規模之ため御紋之品頂戴被仰付候儀も有之候處、着用方等褻之族も有之に付、文政六年御目見以上之人々沖茂、三品以上之外者御紋之御品被下間敷、御上下等被下候節者、品替候御紋に而可被下候。依之是迄致拜領罷在候共、三品以上之外者は、御定紋之品着用仕間敷旨等被仰渡置候へ共、是以後者先規之通、御目見以上之人々格別譯有之節者、御定紋之御品被下に而可有之候。依而是迄致拜領罷在候御家中之人々、御目見以上御定紋之品着用不苦候。

但、御近邊之人々茂同様に候。

一、御紋付拜領之人々、其子等茂致着用來候へ共、三品以上に而茂無息之人々は、嫡子たり共都而着用仕間敷旨、文政六年被仰渡置候得共、以來嫡子之分は不苦候。併諸小頭等之嫡子は相扣可申候。且其家に拜領有之候へ者、跡目相續之上、御目見以上之人々は着用不指支候事。

但、小身之人々等、無僕之節御紋付致着用間敷事。

七月

前條紋付の件と同日の發令なり

七月廿六日。諸士に鳥構場使用の禁を緩くすることを告ぐ。

〔御觸拔書〕

諸殺生之儀、年若之人々等身堅に茂相成申儀に候得共、次第致增長、其時節に至候得者、萬事を拋殺生方に而已心を盡、若輩成爲躰も有之。且諸稽古茂怠候族故、段々被仰遣之趣有之、鳥構場も御取揚被成置候處、右之御趣意致會得、人々當務之餘暇に岩乘之試適罷越候儀者不苦旨等、去々年十二月一統被仰渡候。然處鳥構之儀、定場無之に付混雜之族茂相聞え、山方御取締にも差障申躰に候。仍之先達而御取揚之構場、今般可被返下候。右構場自分に讓替等いたし候故に候哉、身上に茂不應、數箇所致所持候人々茂有之躰に候得共、今般壹箇所、又

者以前數箇所有之人々は貳箇所迄は不苦候。場所之儀者、御郡奉行ゟ申達可受取候。右之通被仰付候上者、是以後構場に而無之松山に而、鳥構候儀は堅致間敷候。自然心得違之者は、役人見咎、名前承糺可申候事。

一、松木御締方之儀は、先年より度々相觸候通に而、自分に松枝等を伐おろし、生木之皮を批、或者木之根に火を多焚、小松伐荒候様之儀は尤致間敷儀。近年松山薄く相成候付、御仕立方被仰付儀も候間、彌以家來下々之者心得違無之様、主人々々より嚴重可申付候。自然心得違之族有之候得者、廻方役人見咎、主人名前承屆及斷候筈に候條、其期に至不及異議様可申付置候事。

七月

〔御親翰帳之內書拔〕

御郡奉行ゟ

石川・河北兩御郡山々御家中鳥構場、文政六年都而御取揚置候處、今般被仰出之趣有之、右構場被返下候儀、別紙之通一統相觸候付、寫相渡之候條、被得其意、山方役人共ゟも可被申渡候。且又場所受取候儀、場主より各に相達候はゞ、根帳しらべ之上札打候儀可被申談候事。

一、文政六年以前新に構場相願候人々有之候へば、各承屆、松木枝下し之儀被申渡候由に候

得共、今般之儀は以前之構場被返下候儀に候間、枝下し等之沙汰に及間敷候事。

一、以前構場所持不致人々、今般新に相願候共、先承届被申間敷候。此儀に付僉議之趣も有之候はゞ、追而可被申聞候事。

右之趣被得其意、山方御縮之儀猶更嚴重可被申渡候事。

戌七月

七月廿六日。琴三味線演奏の禁を緩くすることを告ぐ。

〔御觸抜書〕

琴・三味線之儀、金龍院様御在世中段々被仰出之趣有之、御家中一統相扣候處、其後押立候祝事に者、日之内琴等爲彈儀不苦、藝人之外は堅可爲無用旨被仰渡置候。右に付御姫様方御稽古等も、是迄御扣被成候得共、元來御家中之儀は、近年次第增長、家內縮方等之害に茂相成候故、旁嚴重被仰出候儀に候。然處今度御三回忌茂被爲濟候儀、御姫様方追々御婚禮茂被爲在候へ者、先様御模様茂有之事故、此節より御稽古御始被成候に付、此段無急度申聞候。且又押立候祝事等与被仰渡候付、內輪之祝事には座頭等不相招、今以盲人共渡世茂致兼候躰に候。以後者內輪之儀に而茂、祝事之節者苦ヶ間敷事。

右之趣諸頭等江寄々可被申談候事。

七月廿六日

七月廿六日。鳳至郡總持寺、刑法に行はるゝ罪人の門前通行を止めんことを請願す。

〔御刑法〕

能州輪嶋河井町者共之內、於右村方御刑法に被仰付候由。依之近日右罪人共、外浦通彼地ゟ御指遣之趣風聞に承および候。左候へば當山惣門下馬前並木之內往還道に御座候へば、右之者共相通り可申哉。當山之儀は勅額御祈願之道場に而、禁廷尊牌・將軍家尊牌・御當家御元祖尊像御嫡傳、御位牌安置被爲在御座候儀に御座候へば、右御尊牌前ゟ奉恐入候間、近村舘村端より清水村ゟ通行之小道御座候而、御上使御通之節役人中通行も御座候間、右小道より罪人共相通り候樣御取計被仰付可被下候、以上。

戌七月廿六日　　惣持寺役局　慶　德　寺

寺社御奉行所

能州於輪嶋御刑法被仰付候由に付、罪人通行之儀に付、惣持寺役局より別紙出候間、御達之申候。早速御詮議御座候樣仕度奉存候、以上。

七月廿八日　　多　賀

七月廿九日。石川・河北二郡に於ける藩侯の御鷹場に殺生人の入るを禁ず。

〔御觸拔書〕

別紙若年寄中紙面之寫相越之候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月廿九日　奧村內膳

石川・河北兩御郡御鷹場江、近年殺生人多入込候躰に候。是迄每度被仰出之趣一統申渡置候處、右躰之族沙汰之限に候。依之以來殺生人見請次第急度召捕方之儀、廻り之者共江改而申渡候。

右之趣猶更嚴重可申渡旨被仰出候條、御家中之面々等家來末々迄、堅心得違無之樣一統可有御申觸候事。

八月十日。諸士の使用し得べき鳥構場の數を改定す。

〔官私随筆〕

八月十日

一、鳥構場之儀に付、先達而一統相觸候通候處、請取方之儀に付御郡奉行より相達候儀有之、重而伺之上別紙之通請取候事に相成候條、組中へも可申談旨御用番紙面。其別紙之趣は、年寄中は六・七場迄請取申筈。人持中は、以前場數多所持之面々三千石以上は三・四場、五千石以上は四・五場、萬石以上は五・六場迄請取可申、尤最前場數少き面々は可爲其通旨也。

この議は行はれざりしなり

八月廿五日。年寄長甲斐守人持組の數を八組に增加せんことを議す。

〔官私随筆〕

八月廿五日

一、左之廻狀到來。

左馬助は本多致和

人持組七組有之候所、同席八家有之、其上左馬助家を初組頭不被仰付内も、其組外へ御預無之、跡組に相成居候家柄も有之に付、組頭被仰付候儀、順能相成兼候次第も前々より有之候。然所中古六組に候へども、元祿十四年七組に被仰付候節被仰出之趣等、幷其節之七組人數知行高別紙兩通之通相見え申候。右組筋を以、當時も組々知行高人數引合見候所、別紙下段に記候通に而、當時之所は人數・知行高共相增居申候。右增高二萬六千石餘に而、一組之知行高

別紙は略す

下拙は奧村
丹後守

には少く候へども、有餘之組々より引足、今一組被仰付候はゞ、往々組頭之不順も無之、組々においても組頭替り申事も無之、御都合可宜哉。中古六組之所七組に被仰付候儀有之候へば、唯今八組に被仰付候儀、敢而御差支も有之間敷哉。乍然元祿御組分之節七組に被仰付候御趣意委細之留無之、且又此儀に付故河內守殿御しらべい儀も有之樣に存候へども、其書留相見え不申候。若七組之外不被仰付御趣意も有之間敷哉。御指支無之儀に候はゞ、八組に被仰付候樣仕度段相伺可申哉と申合候。併當時御幼年之御時節如何可有御座哉。各樣に何とか委き御留も無之哉。是等之趣先及御內談申候。則別紙兩品も相廻之候、以上。

八月廿五日　　長甲斐守

奧村丹後守樣　致承知別紙遂披見申候。存寄之趣追而可申進候、以上。

村井豐後守樣

八月廿七日

人持中是迄七組之處、八組に被仰付候儀相伺可被成哉之旨、此間以御廻狀御示談之趣承知仕候。夫に付當時之人數・知行高、仰之通元祿頃に比し候へば、大分相增居申候間、新に一組可被仰付と之儀、御僉議之筋は先相聞え申候。然其愚存に而は、先此儘に被成置候而可然樣に奉存候。其子細荒增左に相調申候。豐後守殿・下拙儀は組頭をも相勤候故、御示談も有之

儀と存候所、左之條々至當之品々多候故、甚如何敷御座候へども、内々御達之申候。且又此儀に付亡父相しらべ申趣も有之候哉、其段書留等は無御座候。

一、組之人數知行高は、書立之通元祿之頃よりは當時多く相見え候へども、先は少身之人々に候へば、軍役之上において又相違之品も可有御座候哉。其外不存寄所に御趣意に違差支申筋有之間敷とも可難申候哉之事。

一、元祿十四年七組に被仰付候御趣意之儀は難奉計事、其頃とても委曲之被仰出は有之間敷候へば、各御席に委敷御留も有御座間敷樣に被存候。元來故々豐後守殿組頭被仰付候は元祿三年に而、其節名出雲と申候。貞享三年以來組頭は七人有之候處、備後殿死去之跡、故々近江守殿主稅と申候而、八歲許にも候哉、若年に而其職難成旨被仰出、新に出雲殿へ被仰付候。其節も組は六組に而、出雲殿は組頭と申迄に而、組は十四年に至初而被仰付候樣に相見え申候。十四年に至候而は、主稅殿はもはや十八・九歲に候間、加樣にのび〳〵に相成申儀に候はゞ、最初に出雲殿へ不被仰付、先御見合、出雲殿へは其頃横山筑後被相勤候通、御家老役被仰付、組頭之儀は十四年之比に至り而、主稅殿へ被仰付候はゞ、同席七軒ともに組頭相勤候事に相成可然事に候處、わざと加樣に被仰付候儀、深き御思慮被爲在間敷樣は無御座候。惣じて組分等之儀に付而は、別而段々御心を被爲用、御定被爲在候御樣子に候へば、後年に

至たとひ少々之弊は有之候とも、於御子孫樣能々其御本意を御考被遊、御會得被遊候上なら
では御改革抔之儀、容易に可被及御沙汰御事に而は有御座間敷候。殊に右等只今之所申立候
程之弊も無之、さして御急ぎにも及まじき事に御座候歟。其上御若年之御儀に被爲在候處、
右御僉議を以數十年成來候趣を、漫に御改之儀御窺被成候段、其御僉議之品々當否はまづ差
置、第一當時之御爲不可然儀候樣に奉存候事。

一、御先代樣御定置被爲成候品々之內にも、先當分之思召に而被仰付候所、後々に至終に御
定制之樣に成來候類もまゝ有之躰に御座候。左樣之類後世に至害も可有之事は、時宜に隨ひ
御改革不被爲在候而不叶儀に御座候。然共夫も先其品々本儀と、御先代樣被成置候御趣意と
をよく御研究被爲在候上に而、ともかくも可被仰付儀に而可有御座候。其上惣じて人々役儀
を被仰付候儀は、其官に付て人を被撰候事に候處、同席八人有之故組頭之數を被增候時は、
人に付て官を被制と申ものに而可有御座、且組頭或物頭抔と申は、もと組之人數有之故、其
支配之ため被仰付事に而、組頭之ために被立置候組子に而は無之段、中にも不及事に御座候。
然處組頭可相勤人々八家有之所、組は七組に而、組頭被仰付方に不順之趣有之候とて、一組
相增申儀は、其御趣意本末相違仕樣に被存候。但夫も組中人數・知行高餘分有之故之御事に
候へども、其時は又其本に付而御僉議無之而は難成儀に御座候事。

一、勢州之組等、其家代々被仰付候組々も有之候へども、是も被仰出拵有之候而相極り候事とも聞え不申、其初め成長之せがれ有之故、間もなく差續き被仰付候も有之、又は其節組頭可被仰付者外に無之故、先御見合之内其せがれ成長に付、親之組御預被成候樣之類が、終に當例之樣に成來候儀之樣被存申候。其家々においては、おのづから規模之樣にも心得申事故、於御上も容易に御改難被成樣に相成申候。然其曾而必定之儀に而は有之間敷、御政事之上においては可然儀に而有之間敷候歟。然處是以後八組に相成、組々不殘其家に付たる樣に相成候時は、組中に取組格違申事も無之、彼是目前之手廻しは可宜候へども、於道理は相濟不申儀候樣に被存候。同席八軒之人々家柄を以、是迄は世職之樣に成來候へども、至愚之者にも重き役職可被仰付子細は決而無之事に御座候。其上右之通、家に付たる組之樣に成候而は、代々必重職被仰付候事に治定之形に御座候。同席之儀は萬事結構に被仰付置候故、幼少より大名育ちに相成、とかく萬事勵みうすく成やすきは大病に御座候へば、彌以驕大に成行申す媒にも相成可申事に御座候。前文にも調候通、當時相定り居候勢州等之組さへ、うきやかには無之樣に候所、又々一統右樣に成候段不可然事。殊に當時之御儀候處、各御僉議に而御伺之段如何可有之候哉。後年ふと御後悔之御儀も被爲在候而は、大切成御事と奉存候事。

一、右之通候所、人持中之儀追々新に組入之面々も有之候而、次第に人多に相成申候間、此

儘に而は年々彌人多に成行可申候。惣じて御家人年々相增候儀は、いかゞとも致方無之もの
に御座候。平士に而は組外、御步並に而は定番組杯皆是に而、年々增行申候。治世久しく續
き候へば、何方も此通之ものと相見え、夫に付論議も有之事之由に候へども、さして當時之
受用に相成申程之儀も無御座候。極る所は只御上之思召一つによりて、まづ漫濫にいたり不
申樣に、御取締り有之より外は有御座間敷、是等は又別之事に御座候。人數相增候と而、只
頭・支配人を被增加候樣之事は可然御處置とも可難申候哉。人持組之儀も同事に可有御座候。
加樣之事は、まづ當時之御急務に而有御座間敷哉。右等甚如何敷候へども、隨御示談至當な
がら相調申候。猶能御僉議御座候而可然存候事。

八月廿七日　　　　　　　　　　　　　　　奧村丹後守

八月廿七日。昨今兩日前田齊泰城內を巡見す。

〔横山氏日記〕

八月廿六日

一、御城中爲御巡見、九つ半時少過御出所に而、御長屋等御覽被遊、八時御戻り被遊候事。

〔横山氏日記〕

八月廿七日

一、今日茂御城中爲御巡見、九半時過御出所に而御覧被遊、八半時前御戻り之事。

八月。寺方の祠堂銀・當用銀を借用したる諸士に返濟の義務を全くすべきことを告ぐ。

〔御觸抜書〕

定番頭江

別紙寫之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配江茂相達候樣可被申聞候事。

右之通一統可被申談候事。

八　月　　　　　　　　　　　　横　山　求　馬

寶圓寺を初御寄附等祠堂銀并當用銀、寺社所より貸付置候分、證文限日も有之候處、近年遅滞之人々多く有之、御寺方等渡方之指支に相成申候。既に右返納方之儀は、前々一統江被仰渡之趣茂有之候處、今以心得違之人々茂有之、日限遅滞之分多く御座候間、以後證文限日之通無間違及返納候樣、夫々嚴重被仰渡候樣仕度、此上若遅滞之人々有之節者、時々御達におよび可申候間、此段茂被仰渡置候樣仕度奉存候、以上。

七　月　　　　　　　　　　　　多賀豫一右衛門

玉井勘解由
前田式部
奥村内膳樣

本年五月六日の條參照

八月。東本願寺使僧を金澤に派して宗意の領解に關し教諭す。

［御助方賴方相論附意得寫］

猶々此廻狀無遲滯早々巡達可有之候、以上。

一筆令啓達候。先以兩御門跡樣御機嫌能被爲成御座候。然者其國御門末之內、近年御法義筋に付二類に相分不穩候趣達御聽、御不安慮に被爲思召、今般雙方之者被爲召登、篤与御聞調被爲在之候處、双方共に異安心に而者無之、只御言葉之一邊に片寄一概に申立、自ら諸人を惑し候事に而其趣左に申達候。

一、一類之者は、本願名號の聞開かれたる一念は、かゝるものを阿彌陀佛之御助と信ずるおもひにて、其處にたのむ一念に御助と信ずる義も有之候得ども、强而不及申事と申立候事。

一、又一類之者は、本願名號のいはれの聞開かるゝ一念は、たのむ一念に御助と信ずるおもひにて、其處に助たまふ彌陀を信ずる義はあれども、彌陀の御助を信ずるといふ義は決而無之事と申立候事。

右之通一概に申募候段心得違に而、御正意之趣はたのむ一念に御助と信ずるも、かゝるものを阿彌陀佛の御助と信ずるも、全く一致にして、何れを申述候ても御文の御教化に相かなひ候へば、一邊にかたよるべき義にあらず。たのむ一念に御助と信ずる義も、六字のいはれを心得分たるおもひに候得者、不及申義に而は無之候。又彌陀を信ずるも御助を信ずるも一つにて、御助を信ずるといふも嫌ふべき事にあらざる旨御教示被成下候處、双方ともに奉恐入、悔先非候而御請差上候に付、猶又深重之以御慈悲於御簾前御教誡被成下候處、雖有奉敬承、自今以後双方ともに人我の情を打捨、一味和合いたし、むつまじく法義相續仕、對御寺國法奉懸御難題間舗候段、重而以書付申上候。仍之若於其國、右等之輩ゟ同心いたし心得違之者も有之候はゞ、早々相改御正意之趣相守、一同に潤敷法義相續可仕候。

右之段厚可申達旨被仰出候間、可奉得其意候。爲其如斯候、恐々謹言。

丙戌八月

川那部帶刀宗延　印
下間大藏卿法橋賴弼　印
同　宮内卿法印賴敏　印
同　治部卿法印賴隆　印

加州飛擔衆中

惣坊主衆中
惣御門徒衆中

右は八月御使僧以願照寺、御國法御取締の上、右之御書立相下申候也。

九月五日。前田齊泰學校に臨む。

〔溫敬公記史料〕

九月五日。臨學校。

九月七日。前田齊泰老臣等の調馬を觀る。

〔溫敬公記史料〕

九月七日。觀老臣調馬。

九月九日。越前丸岡侯有馬譽純將に金澤を通過せんとするを以て注意を與ふ。

〔御觸拔書〕

有馬左兵衞佐殿、當月下旬御當地御通行之旨、江戶表より申來候。仍之見物等罷出申間敷候。若參懸候はゞ、不作法無之樣、家來末々迄可被申渡候。

有之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

九月九日　　前田彈番

九月廿八日。前田齊泰堂形馬場に於いて乘馬を試む。

〔官私隨筆〕

九月廿七日

一、左之紙面到來。

明廿八日拙者共之內持馬御覽被遊、御自分樣には栗毛之馬御覽被遊候間、裸背に而八時迄に堂形御馬場迄爲牽被差出候樣、七郞左衞門演述。しかし馬具附之儀者勝手次第。左候而も相改に不及、責馬具に而宜敷旨も申聞候に付此段申進候、以上。

九月廿七日　　前田彈番

奥村丹後守樣

〔橫山氏日記〕

九月廿八日

一、今日於堂形御馬場、御家中持馬も御覽被遊候旨、年寄中見物被仰付候御樣子に而、八時

御供廻之御樣子承り、退出、御馬場江罷越候由之事。
一、於御馬場に敷物御免被仰付候段、藤田平兵衞を以被仰出候に付、何茂右に座付居候。御前御乘馬被遊、御馬茂爾走被爲召。相濟候上、內藏助等四人一集に乘馬仕候樣、鈴木清左衞門を以被仰出、乘馬相濟、右之人々持馬御覽被遊候事。

十月二日。前田齊泰近郊に放鷹す。

〔温敬公記史料〕

十月二日。放鷹近郊。

十月二日。米穀の乾燥を充分にすべきこと等を告ぐ。

〔御觸留拔書〕

三州御收納米之儀者、御取箇之根元に候得ば、大切に可相心得段は不及申事に候得共、兎角百姓共勝手にまかせ候故、自分干方等不行屆、年々於大坂損米出來、米症不宜故御拂直段相劣り、就中去年は作躰不熟之儀は是非之外候得共、干方宜敷候得者敢而痛米に者不相成、勿論左樣之年柄に者過分之御貸米茂被仰付、夫々御取扱も有之儀に候得者、前段大切之儀を心付、干方等精誠入念に可相心得事に候之條、此段百姓江得与可被申渡候。且納手附幷藏宿之儀、百姓江不時成雜費不相懸け、正路に納させ、百姓共江可爲致會得儀。既に納人により米

症善惡有之、不埒之趣も有之躰に相聞え候に付、猶又折々當場役人可相廻候條、無油斷嚴重相心得候樣、納手附幷藏宿共に夫々可被申渡候、以上。

十月二日　御算用場

御郡奉行中

追而籾納之分も、御用に相成候品に候條、當年より綿密に可相心得旨可被申渡候、以上。

右之通相廻申に付、寫仕上げ申候間、先々御順達、落着より御返し可被下候、以上。

戌十月六日　手附棟取　長右衛門

仲間宛所

十月十三日。前田齊泰學校に臨む。

〔溫敬公記史料〕

十月十三日。臨學校。

十月十五日。領內往還の人馬賃銀を割增すべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

御領國往還筋宿々人馬賃錢、寶永五年割增被仰付候通受取來候處、近年他國路は追々割增有之、右に比べ候而は賃錢餘程取劣り、且次第人馬繼立多相成、其上先年与違錢相場下直等に

而、宿々難澁におよび候に付、公邊江御達之上、五ヶ年中是迄之賃錢四割增被仰付候。依之に、御領分小松より越中泊驛迄宿々、幷富山・大聖寺御領往還筋共、當十一月朔日より來る卯年十月晦日迄、四割增賃錢可請取旨、今般宿々江申渡候。

一、右之外三州脇道之分は、賃錢三割增被仰付、是亦右同樣五ヶ年可受取旨申渡候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十月十五日　　　　　奥村內膳

山森雄次郞殿

原篠金右衞門殿

十月廿三日。前田齊泰瀧之間に於いて大島忠藏をして書を講ぜしむ。

〔橫山氏日記〕

十月廿三日

一、今日瀧之御間において、經書講釋有之に付、芙蓉之御間江御着座、御聽聞被遊、四時少過被爲入。御先立、御出之節御入之節外記相勤候事。

但講主大嶋忠藏相勤る。

十月廿八日。嫁娶を行ふ家に石礫を投ずることを禁ず。

〔御觸拔書〕

御家中之人々并町方之者致嫁娶候節、石を打候儀堅不仕樣、前々より申渡候處、近く甚猥に相成、門戶茂爲損、怪我人も可有之躰相聞候條、以後右族堅有之間敷候。若右躰之者於有之者急度相咎、交名等相糺、又者召捕候樣、御横目足輕・盗賊改方・町附足輕江可申付旨、今般改而申渡候之條、此段家來末々迄嚴重申渡候樣、組・支配江被申渡、組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十月廿八日　　奥村內膳

十月廿八日。古手及び古金商に役銀を徵すべきことを告ぐ。

〔御觸留拔書〕

附札、惣年寄・年寄並江

覺

一、三匁　　古手商賣一人分役銀

一、四匁　　　　　古金商賣同斷

右古手・古かね商賣人是迄無役に而申付置候得共、加・越・能一統役立に而致商賣、甚不列に相成居候。其上口郡は御仕法前より、右商賣顯人數多有之候得共、致退轉印札相返候者無之、賊物似寄等しらべ方御締不相立、畢竟役銀茂不相立故、商賣相止候而茂右燒印札其儘に指置、中には爲致紛失候ものも可有之哉。爲見合役所燒印茂有之品に候處、甚等閑至極沙汰之限に候。依之今般詮議之上、右之通以來役立に申渡候條、每歲十月廿日切右銀高可指出候。依而兼而相渡置候印札引揚、改而可相渡候間、右印札來月中迄に無遲滯田鶴濱出役所江可指出候。右之趣不相洩樣、嚴重に夫々可申渡者也。

戌十月廿八日　　　　　御郡奉行

能州羽咋・鹿嶋兩郡村々役人

同年は文政九年

十月。疱瘡大に流行す。

〔年々珍敷事留〕

一、同年夏より疱瘡はやり、十月之頃に至、家並に成、疱瘡に而死す子ども誠に夥し。一軒に三・四人も死す家多し。珍敷疱瘡なり。

十一月二日。諸郡に綿羊飼育を希望する者あらば之を下附せらるべきこ

とを告ぐ。

〔御觸留拔書〕

綿羊相望候者有之候はゞ可被下旨被仰渡候條、諸郡之內相尋望候者名書可指出、尙更有無共可申聞事。

戌十一月　　御郡奉行

諸　郡

別紙覺書今日御用番山森雄次郎樣より御渡、御郡方町・在に右綿羊相望候者有之候はゞ可被下旨被仰渡、尤望人致出府御願申上候得者、飼方等之儀夫々可被仰談筈。尤慰物にいたし候譯合に而無之、綿羊之毛織物に可相成品に付、飼方は草幷香の物たくわん漬之由に御座候。望人有無共早速御達可被成、且又彌望申者有之候得者、少々飼方入用可被下哉之御沙汰も御座候由に御噂御座候。右爲御承知相廻申候。早速夫々御談、落着より射水ゟ御返可被成候、以上。

十一月二日　　御根役所詰番

諸　郡

十一月八日。銀仲預り銀手形通用の期限を延ぶべきことを告ぐ。

〔御觸拔書〕

當六月銀支に而一統不融通に付、當町銀仲預り百目宛之銀手形出來指出、引替之儀者、當十一月十日より同晦日迄之內、於御算用場正銀与引替可申旨、一統申渡置候。右者當十月納御用銀を以引替御渡之御手當に候處、御用銀未皆納無之向々多有之候故、右手形當月中全正銀に而引替相渡候儀指支候。依之右御用銀上納殘り引當を以、來年三月限り引替可申極に而、今般新手形出來、是迄之手形与引替可相渡候間、御領國一統正銀同樣無滯通用可致候。

一、右新手形、尤諸上納に茂取扱可申候。將又若他國指引方正銀に而差遣不申而難叶向者、其品支配先江相斷、御算用場江可申出、其上に而遂僉議、無據分者於御算用場正銀与引替可相渡候。

一、是迄之手形此度正銀引替殘り之分、尤當月中於御算用場新手形与取替可申候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十一月八日　　　　　　　　横　山　求　馬

十一月九日。能登口郡に富山商人の賣藥を購ふべからざることを令す。

〔御郡典〕

能州筋ゟ近來越中富山より藥種商人多入込商いたし候故、村々之內藥種株致所持、役銀指上致商賣候者共、藥種賣捌方次第薄相成、及迷惑に候間、富山商人より直買不致樣致度旨、口郡村々藥種株持共より願出候。依之に詮議之趣有之候間、右商人持來候藥種、都而藥種株持人其外直買致間敷候。若密々相求候者有之候はゞ、可爲越度候。尤口郡村々之內藥種株持居、店商等いたし候者ゟは、以來藥種吟味いたし、直安に致賣買候樣急度申渡置候條、以來御郡之內藥種株持之者より買求可申事。

右之趣致醫業候者、其外百姓等末々迄不相洩樣、急度可申渡置候、以上。

戌十一月九日　　山森雄次郞

中村新左衞門

口郡村々役人

十一月十日。前田齊泰、來春三月參覲を命ぜられたることを告ぐ。

〔橫山氏日記〕

十一月十日

一、來春御參勤御時節御伺候處、三月中御參勤可被成旨御老中御奉書、表方於席年寄中・御

家老中拜戴。相濟、若年寄・外記表方ゟ罷越拜戴。右恐悅・御禮共、引取月番より被申上候事。

十一月廿二日。年頭の禮に大紋素袍及び長上下の着用を廢すべきことを令す。

〔官私隨筆〕

十一月廿二日

一、當分五ヶ年中之通御省略之儀被仰出置、年頭之御規式等も御差略に付、諸大夫之面々大紋等着用差止、一統長袴着用之儀も相止可申候。且又年頭を初、都而御禮人幷披露役等之面々、熨斗目・上下等時々相改候に不及、在成を用可申候。

一、年頭一統御禮申上候分、上之靑銅人々前に指置候儀、當分被指止候段、先達而申渡候通り。

右之趣不相洩樣、夫々可被申談候事。

十一月

右御横目へ之覺書寫、御用番より到來。

十一月廿七日。前田齊廣の女鈴姬久留米侯世嗣有馬賴永と婚約を結ぶ。

玄蕃頭は久留米侯有馬頼徳

〔官私随筆〕

十二月九日

一、鈖姫様御儀、有馬玄蕃頭殿御嫡彌作殿へ御縁組御内約之儀、表向御双方御取遣、前月廿七日玄蕃頭殿より御使者御家老岸刑部・副使御留守居中村爲之丞を以被仰越、披候上従此方様御使藏人・副使青山四郎左衛門を以御承知之御答被仰遣、首尾能相濟候段、同廿九日江戸表發足町飛脚早飛脚歩を以申來候由、御用番より以紙面被申越候。

十一月。諸組足輕小頭等が濫に配下足輕の昇進加恩を稟請すべからざることを告ぐ。

〔御觸抜書〕

定番頭に

近年諸組足輕小頭等、立身願内存之趣申聞候儀繁く相成。右者諸向御仕法等に付、爲指勤功茂無之者立身被仰付候茂有之故、是等之儀推移候哉、格別之勤功無之者に而茂、立身等之儀願出候分多有之候。足輕等先づは五十箇年茂相勤不申而は、御加恩之御沙汰無之儀振合に相成居、尤勤向に寄格別之儀有之候得者、右年限に茂不限事に候得共、御歩並等に被仰付候儀は、彌以容易被及御沙汰無之候。且又右に茂不限、惣而近年御加恩等之儀、格別之勤功無之

者に而も、其向々先例之年功等により願方相進候分も有之。中には願紙面差出置、毎度及催促候得ば、早く御沙汰有之樣相心得候族茂有之哉に候。如斯に而次第に繁雜に相成、彼是指障候條、以來願方急度可有心得候。加樣に改而申渡候上、未熟之願方有之候へば、取揚不申。尤御家老方等茂都而同樣に候事。

右之趣被得其意、組・支配有之人々江可被申談候事。

戌十一月

十二月八日。幕府、前田齊泰新夫人の住居門前の町家引拂を命ず。

〔御年表〕

十二月八日、溶姫君樣御住居御門前本鄉五丁目・六丁目町家引拂被仰付。右地面御拜借地と申ものにて、御園込に相成に付、今日表裏御門出來之箇所、六丁目之内にて二ヶ所京間六百六十六坪餘町家引拂被仰付候段、松平和泉守殿より被仰渡。同十四日地面御引渡に相成、其餘之地面は追て御引渡有之。

十二月十八日。定番御步中村八郎右衞門不行狀を以て越中五ヶ山に流さる。

〔横山氏日記〕

定番御歩　　中村八郎右衛門

右八郎右衛門儀、常々不行狀之段相聞え候に付、先達而重御咎茂被仰付候處、今以相嗜不申、種々不屆之所行有之、諸人之害に相成。且此度妻・娘宅を立出、妻茂粟生川において溺死之躰、娘茂右川原邊に而相果候族、家内に難面故、無是非右爲躰に茂至り候躰相聞候。重々不屆至極沙汰之限に付、越中五ヶ山之内江流刑被仰付候旨、被仰出候條可申渡候。

但、配所江被遣候迄之内、一類共江御預被成候條、急度縮仕置候樣可被申渡候。尤一類共交名可被申聞候事。

丙戌十二月十八日

十二月廿二日。前田齊廣の女鈖姫の久留米侯世嗣有馬賴永と婚約を許されたることを發表す。

〔官私隨筆〕

十二月廿日

一、鈖姫樣御儀、有馬玄蕃頭殿御嫡彌作殿と御緣組御願書、從此方樣御先手細井出雲守殿、玄蕃頭殿よりは能勢市十郎殿を以、御双方御願書、當七日御用番松平和泉守殿へ御差出之所、

首尾能御請取被成候段、同十日江戸發足、町飛脚歩を以申來候由。御用番より紙面を以申來。

〔横山氏日記〕

十二月廿二日

一、九時御居間書院江御着座、年寄中一切、御家老・若年寄中一切被爲召、銈姫樣御儀、有馬玄蕃頭殿御嫡彌作殿与御緣組御願之所、當月十四日御用番青山下野守殿、御名代淡路守樣御呼立、御願之通被仰出、難有旨御意有之。內藏助恐悅に奉存候旨御請申上、退去之事。

但、右相濟各常服に相改候事。

〔官私隨筆〕

十二月廿二日

一、今朝六半時過登城、御能拜見之御禮御用番迄申述候。五時過頃御能初り候事。

一、御番組左之通。

和布刈 御 盛久 權進 半蔀 釆女吉

弱法師 御 船橋 平四郎 當摩 宮門

猩々 御

一、當十四日御名代淡路守樣御登城之處、鈖姫樣御緣組之儀御願之通被仰出候由、江戸表より昨夕申來候旨。

一、右に付而各御前へ被召御樣子之由に付上下に改。

一、半蔀之內に候哉御居間書院へ御出、甲斐守・求馬・彈番・內膳一切被罷出、其次丹後守罷出候處、鈖姫緣組之儀願之通被仰出難有存候、此段申聞と御意に付、御願之通被仰出恐悅之至奉存候旨申上、退去。其次左馬助・又兵衞一集一切、其次勢州一切、其次御家老中等被罷出。

一、右之後常服に改。

一、寒氣も强候故御內々うきふ被下旨被仰出由、御用番演述。

一、船橋之內於松之間二之間頂戴。給事坊主。畢而退座、御用番迄御禮申上候。

うきふ　御にしめ 燒ふ砂糖　　御吸物　ほうぐ かきゆ

御重引　色付たいらぎ

一、御能六過頃濟、御禮各列座以坂井與右衞門申上、退出。

十二月廿三日。錢相場高直なるを以て錢手形を發行すべきことを告ぐ。

〔御觸拔書〕

頃日錢相場追々高直に相成、不融通に付、去年六月町會所において出來之錢手形に加增印、重而通用申渡候。仍之當廿六日より於町會所可相渡候。尤手形相場幷引替方、暨縮方等之儀者、先達而通用之節申渡候通候之條、正錢同樣無滯可致通用候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十二月廿三日　長甲斐守

十二月。金澤町中の男女八十歲に達したる者を屆出づべきことを告ぐ。

〔國事雜抄〕

町中支配之男女、七十歲より裁許々々於手前しらべ置、八十歲に相成候はゞ其段以書付可及斷候。

右之趣向後不相洩心得候樣、夫々可被申渡候事。

戌十二月

十二月。老臣長甲斐守その家來に流刑を命ぜんことを稟請す。

〔國事雜抄〕

付札、御算用場奉行江
甲斐守家來之內一人、無據仔細有之、自分に遠島申付度旨にて配所之儀相願、舊例も有之に付被聞届候條、能州嶋之內不指支所被致詮議可被書出候。尤小屋出來、賄方等之儀自分に申付候筈に候事。
但、文政九年十二月也。

文政十年

正月朔日。前田齊泰金澤城に年頭の禮を受く。

〔官私隨筆〕
正月朔日
一、今朝六時過登城。半上下
一、豐後守殿・左馬助殿不參。內記殿濕瘡快、今日登城。
一、四時過御表宜旨申上、御出、於御小書院甲斐守・土佐守・丹後守・求馬・彈番・內膳・又兵衞・御家老中・若年寄御禮、一先被爲入、鶴之庖丁御覽、各も一先席へ入。
但、人持中等列居何茂宜敷上に而御出也。御造營以後、諸大夫於御小書院御禮は今日初而

河内守は奥村尚寛

故、先年之趣引合繪圖出來、御敷居内より横疊四疊目之頭に御太刀置之、三疊目之頭に而御禮之趣に伺濟、其通何も御禮申上候也。此事御用番より昨日執筆山田貞次郎を以、自分方へも相談有之、存寄無之旨申達之。右諸大夫御禮所之次年寄中は二疊目之頭、其次御用不勤年寄中は二疊目之下、其次新知之者は一疊目之上、御家老中は一疊目下、若年寄は御敷居之外一疊目と申事に近年成居候所、元來は年寄中之内に而組頭相勤候者一等、其次組頭に而無之年寄中一等、加判無之差別なし。其次新知と申階級之筈に候所、いつの頃よりか前段之通に成來候。然共組頭と平之年寄中は、御奏者番之繪圖には差別無之候へども、前々各切に而差別をたて、平之年寄中は一階下り申候由故、河内守筆記享和二年御入國御弘之所に記置候。然るに近年之所に而は、御用勤候年寄中之下は新知之御禮所に而、外に空位無之、却而其上には空位出來、享和之頃とも違候樣に候。彼是紛敷故、此度今日伺之上、組頭一等、平之年寄中御用勤候有無に不拘一等、新知一等、御家老中一等、若年寄一等と成候也。

追而繪圖借用可寫之。

一、追付御大廣間伺公に罷出、此所に而御用番より別に御案内も無之躰。無程御出人持・頭分御禮被爲受。差引は御用番御左彈番、御右求馬、控内膳也。定番頭之時九つ鐘撞之、御免之頭之時半撞之。

伺公は甲斐守・土佐守・丹後守・又兵衞也。

一、右畢而御下段に御着座、御大小將等御禮、相濟被爲入候節御居間書院三之間御禮、相濟
船之間に而御表小將御禮、伺公內膳。
一、御熨斗被下由御用番演述、於松之間二之間頂戴、給事坊主。畢而御臺所奉行小幡多門へ
御禮申達候。
一、鶴之御吸物御下御內々被下候由、御膳奉行松之間二之間に而演述。則於同所頂戴之。畢
而以同人御禮申上候。
御吸物鶴　大こん・とり　ごぼう・きくな　漬　松　竹　御取肴　巻ずるめ
再進一遍
一、右以後退出、御廣式へ罷出、又兵衛殿兩人罷出。以渡邊多宮年頭御祝詞申上、八半時過歸宅。
〔横山氏日記〕
正月元日
一、四半時前御出、御先立藤田平兵衛。於御小書院、諸大夫之面々幷年寄中・又兵衛・御家老
中・若年寄迄御禮、御奏者番披露之事。
一、右相濟被爲入、鶴庖丁御覽被遊候事。
一、重而九時前御出、御先立外記、御大廣間御上段に御着座、人持・頭分御禮。年寄中左馬助・

又兵衛伺公、披露御奏者番。相濟御下段に御着座、御大小將より坊主頭迄一統御目見。伺公等右同斷。相濟被爲入候刻、御居間書院三之御間において、御近習頭支配之人々御禮、伺公無之、披露御奏者番。相濟、御襖たて、右人々退候以後、舟之間に而御表小將一統御禮。年寄中之內一人伺公、披露御奏者番。相濟被爲入候事。

一、年寄中・御家老中御熨斗頂戴被仰付候旨、御臺所奉行小幡多門表方席〻罷出申述。御禮之儀は、各列座表方に而右同人〻申述。若年寄は常之席に而御熨斗頂戴、席坊主持出。御禮右同人〻、外記御奥書院御縁頰において申述候事。

一、八時頃松之間二之間において、年寄中・御家老中一列、若老は常之席に而鶴之御吸物・御酒・御取肴頂戴、給事席坊主。相濟年寄中・御家老中一列、松之間二之間に而御膳奉行村田定之助へ御禮申上、若年寄は御奥書院御縁頰において御禮申上候事。

一、御規式等相濟、各八半時退出之事。

正月二日。前田齊泰年頭の賀を受く。

〔官私隨筆〕

正月二日

一、六半時登城。

一、御表宜旨申上、於御大廣間昨日當番之物頭等御目見。畢而於柳之間御役者共御目見、伺公求馬、四時前濟。被爲入候時分、御居間書院三之間御禮、伺公無之。船之間表小將御禮、伺公甲斐守。

一、今日土州・豐州不參、左馬助疱瘡也。

一、今晚七半時過登城。

一、右之三人幷又兵衛、御家老中之内織江・修理・內記も不參。

一、六時過御出、御謠初如御作法書濟。但御省略中に付、年寄中等御吸物不出、御前へは尤上之。御嶋臺相止之、御三方也。終に竹田平四郎猩々きりを勤。御流之節御肴役丹後守・內膳也。內膳は初而勤候故、相濟以御近習頭御禮申上候。

正月三日。前田齊泰年頭の賀を受く。

〔官私隨筆〕

正月三日

一、今朝五半時御供揃に而、寶圓寺・天德院へ御參詣。自分儀可罷出といたし候所へ御通り之御樣子故、暫相見合、四時過登城。遲參に成候趣御用番へ申達候。

但、今日六半過頃登城之人々も有之躰也。

一、御留守之內御禮人列居宜敷、御還城之上追付御出、昨二日當番之御馬廻等於御大廣間一

統御目見。畢而於柳之御間檢校、且又町人兩席に而御目見、伺公土佐守、九時過濟。

正月四日。前田齊泰年頭の賀を受く。

〔官私隨筆〕

正月四日

一、今朝五時頃登城。

一、御禮人列立候上御出、於御小書院伊勢守其外隱居・子共并組替等之御禮被爲請。畢而於矢天井間昨日當番之定番御馬廻等御目見、伺公丹後守。夫より於御大廣間、御射初吉田家（兩人）迄御覽、其餘各見屆之、九時過濟。

一、今日三御丸打場へは又兵衞殿出座。新知御用不勤者は是迄出座之例無之候所、此度伺之上被罷出。

正月六日。前田齊泰寺社方の年頭の賀を受く。

〔官私隨筆〕

正月六日

一、今朝五時頃登城。

一、御表宜旨申上、御出、御大廣間にて寺社方御目見、指引御左は御用番彈番御右求馬、控

甲州也。伺公は土佐守・丹後守・内膳・又兵衛。四時過濟。

一、今日も豐後守不參。

一、御禮前惣持寺・寶圓寺・瑞龍寺之溜曁如來寺・玉泉寺之溜へ、各罷出逢被申。自分も一所に罷越、又兵衛殿も同事也。

正月十二日。前田齊泰如來寺及び天德院に參詣す。

[諸事覺書]

正月十二日

一、五半時過御裝束に而如來寺江御參詣、御先詰外記。夫より天德院江御參詣、御先詰將監罷越。四半時過御戾、御表御式臺階下に御家老中罷出、階上に年寄中上下着用罷出、修理鏡板江罷出御先立。御裏式臺之方惣年寄・御扶持人百姓共並居御禮、披露御奏者番相唱、虎之間御緣頰より被爲入候事。

正月十五日。前田齊泰小松城番等の年頭の賀を受く。

[官私隨筆]

正月十五日

一、今朝如例登城御表宜旨申上、御出、於御小書院小松御城番年頭御禮等被爲受、夫より矢

天井間に而遠所在住平士等御禮、伺公又兵衛。夫より御大廣間に而寺庵方御目見、伺公甲斐守・丹後守・又兵衛。御禮人差引は御用番豐求馬・內膳也。畢而被爲入。

正月十九日。具足の鏡餅直を行ふ。

〔諸事覺書〕

正月十九日

一、今日御鏡餅御祝に付、各熨斗目上下に而例刻出席。

一、四半時松之間二之間において、年寄中・御家老中列座、御鏡餅頂戴、紅白餅二切のし紙にのせ。畢而御臺所奉行へ御禮申述、追付退出候事。

但、若年寄は蔦之間に而頂戴。

正月廿二日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕

正月廿二日

一、今日兩學校江御出に付、九半時頃甲斐守・織江・外記罷越。八時前被爲入、御先立外記。金谷多門書經無逸之篇講釋御聽聞、武學校に而半井瀨太夫門弟鎗術御覽、七時前御戾之事。

是月は大盡なり

正月廿三日。前田齊泰瀧之間に於いて中西巴門をして論語を講ぜしむ。

〔諸事覺書〕

正月廿三日

一、四時前瀧之間に而論語講釋、中西巴門相勤、御出御聽聞、無程御入候事。

正月晦日。雲雀を捕獲し又は賣買すること等を禁ず。

〔御觸抜書〕

別紙若年寄中紙面寫相越之候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

正月晦日　　　　　　　前田大炊

てんの網に而雲雀取候儀、前々より御停止に候旨等、享保十四年一統申渡置候通に候處、近年右殺生いたし候者茂有之躰。中に者巣揚などいたし候者茂有之躰に相聞え、沙汰之限に候。向後右躰之者見受次第召捕候樣、今般改而廻り役人共江申渡候。

一、雲雀子幷雲雀商賣仕候儀、越中は勿論、加州・能州共向後御停止に候。依之右之品他國より爲商賣致持參候者有之候はゞ、其手先より御鷹方取次江相斷、指圖之通商賣可仕旨、享

保十四年御郡方・町方江申渡置候處、近年猥に取扱候躰に相聞え、不埒之至に候。以來右躰之族無之、先達而申渡置候通心得違無之樣、今般改而御郡方等江申渡候。

一、鷹商賣いたし候者は、町奉行聞屆之上致商賣、猥に取扱不申筈に候處、近頃於町方殞鷹拵茂取扱候躰に候。元來鷹之儀者、他國より賣鷹等に指越候共、殞候得ば御鷹部屋江指出、御鷹匠小頭見分之上、其段可申送品に候。向後賣鷹等は申に不及、假令殞鷹に候共、御鷹部屋江指出、右小頭指圖之通相心得候樣、今般改而町奉行江申渡候。

右之通可申渡旨被仰出候條、御家中之面々等、家來末々迄心得違無之樣、一統可有御申觸候事。

亥正月

正月。諸郡に命じ新開田等の免合を精査せしむ。

〔御用留〕

諸郡共新開一免下り之簡所者不及申に、定免所之儀茂極高に不相成分者、追々内檢地候而、兩樣共組高帳入之詮議可有之候。圖り免所之内にも、數十年に相成候簡所不少、尤免相年々加詮議置候儀に者候得ども、此等者格別に穿鑿候而、一免下り亦者定免に取極有之度、其許中熟談之上。新田裁許示合、都而新開增免等之儀僉議之趣可有申聞候。且又請高所等之内、

開諸年限並地元混雑之族も有之躰、畢竟不穿鑿故と存候條、何分品能取極、右に付心付之趣も候者無泥可被申聞候。前段免相等之儀も、尙役所詮議之筋可有之間、取極方油斷有之間敷、右之趣新田裁許江も申渡置候、以上。

亥正月　　林久太夫

淺加伊織

諸郡惣年寄中・年寄並中

二月朔日。前田齊泰能を興行し老臣等に酒肴を給ふ。

〔橫山氏日記〕

二月朔日

一、今日御能拜見に付、前月廿八日月番より演述之通、各服紗小袖・上下に相改候之事。

一、九時各拜見所江相廻り候樣、御近習頭不破紋左衞門申聞候に付、何茂御次之拜見所江罷越、追付御能相始り候事。

一、今日御祝御舍之御能被遊候に付、御酒・御吸物不押立頂戴被仰付候旨、月番江被仰出候段、主付圖書江演述、各幷若年寄江茂可申談旨に付、卽席御禮申述、各幷若老江茂其段及演述候事。

御祝御舍とは妹鈔姬が先に縁組の定りしことなるべしと各は年寄及び家老の意

但、不押立頂戴被仰付候段、頂戴中御意茂無之旨茂演述之事。

一、九半時前年寄中・御家老中松之間二之間、若年寄者常之席に而、御酒・御吸物・御取肴頂戴、相濟月番ゟ御禮申述候事。

一、御能六時相濟、年寄中・御家老中・若年寄一列に而、於松之間二之間、河村彌右衛門を以、御能拜見被仰付難有仕合奉存候旨申上、追付退出之事。

御番組

嵐山 御 八嶋 釆女吉 遊行柳 宮門

花筐 御 羅生門 錠之助 祝言志賀 左平次

末廣 惡太郎 子盜人

二月十四日。鶴林寺を以て祈禱寺に列す。

〔諸事覺書〕

二月十四日

一、鶴林寺御祈禱寺に被仰付、寺社奉行支配に被仰付、御供料百石被下候由也。

二月十六日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕

二月十六日

一、八時前學校江御出に付、九半時頃大炊・内藏助・外記御先江罷越、追付御出、人持子弟會讀御聽聞。夫より武學校江被爲入、矢野久左衛門門弟劍術御覽被遊、相濟七時前御戻候事。

二月十八日。前田齊泰郊外七ッ屋口に放鷹す。

〔諸事覺書〕

二月十八日

一、四半時之御供揃に而追付御出、七ッ屋口より御鷹野。御供外記四時過野裝束に而登城、御出前御先へ罷越。夕七半時過御戻之事。

二月十九日。前田齊廣の子延之助觀音院に宮參を行ふ。

〔横山氏日記〕

二月十九日

一、今日延之助殿御宮參に付、出席切中將樣奉初恐悅可申上旨等、昨日表方より演述に付、九時過各服上下に相改、表方において年寄中・御家老中・若年寄中一列、鈴木清左衛門を以中將樣江御祝詞申上候處、以同人御意有之候事。

但、出席切御祝詞申上、出席無之人々は不申上候事。

一、各退出より直に御廣式江罷出、延之助殿奉初方々様江、矢野所左衛門を以御祝詞申上候事。

一、延之助殿朝五時之御供揃に而、同刻過御出、觀音院江被爲入、無程御立、夫より蓮池江御立寄、九つ時過御戻之事。

二月廿三日。前田齊泰瀧之間に於いて新井周藏をして論語を講ぜしむ。

〔諸事覺書〕

二月廿三日

一、今日瀧之間に而論語講釋新井周藏相勤、御前御出御聽聞之事。

二月廿五日。前田齊泰石川郡宮腰に放鷹を行ふ。

〔諸事覺書〕

二月廿五日

一、今日御鷹野御出候付、外記儀六半時頃町端迄罷越。

一、今日朝より御出候付、大豆田口より所々御鷹野、宮腰町端より九半時過御戻。

御餌柄　鷹一

二月廿六日。前田齊泰能を演じ老臣等をして觀覽せしむ。

〔諸事覺書〕

二月廿六日

一、今日御能拜見被仰付候に付、各五半時頃より出席、四時前御能初、拜見所へ廻る。

御番組

養老　甚次郎　田村　御　野之宮　權進

船辨慶　御　葵上　釆女吉　猩々　御

萩大名　長光　太鼓負

一、御能暮頃相濟、松之間において各列座、御近習頭を以御禮申上退出候事。

〔横山氏日記〕

二月廿六日

一、今日御能拜見に付、各常服に而五半時頃追々登城之事。

一、四時前各拜見所ゟ相廻候樣、紋左衛門申聞候に付、何茂御次ゟ罷越拜見いたし候事。

一、御能七半時過相濟、年寄中・御家老中・若年寄一列に而、於松之間二之間に、有澤才右衛

門を以御能拜見被仰付難有仕合奉存候旨申上、追付退出いたし候事。

二月廿六日。人持組の士に能を催さゞるべく示諭することを通牒す。

〔官私隨筆〕

二月廿六日

一、御上御勝手殊之外御指詰りに付、頃日段々僉議之趣有之候由。就夫近頃同席等之內、能・囃子抔はやり申躰故、役者數よせ、能と可申程之事は先相見合候事に示談之由。依而人持中之內にも折々有之躰に候間、能・囃子仕候面々へ心得方可申達と相談有之。依而自分組能抔いたし候面々。へも可申聞旨、求馬殿被申聞候旨、津田內藏助殿於御殿共由申達、猶委敷事は年寄中より直に被承候にと申達候。

二月廿九日。一橋治濟薨去の報金澤に達す。

〔官私隨筆〕

二月廿九日

一、一橋儀同樣去廿日薨去之旨、江戶表より申來候。依之普請者今日より來月二日迄三日、諸殺生・鳴物等は同月四日迄五日遠慮之筈之旨、御用番より一統觸之寫來る。

二月。富山侯の臣富田兵作が加賀藩の原田又右衛門に就き學び得たる鎗術を他國に漏さゞるべきことに關し通牒す。

〔江戸狀留書拔〕

文政十年二月

一、淡路守樣御家中富田彌右衛門弟兵作儀、先達而原田又右衛門方へ鎗術爲稽古罷越、只今に而者弟子中稽古方指引方不指支に付、於彼地又右衛門弟子中稽古指南爲致度。就而者又右衛門流儀、御先代樣御學被遊候時分以後、流儀手弘不致樣被仰出有之由に候。然處淡路守樣御家中に者、二・三男等他國ゟ養子に被仰付候儀も有之由。右兵作儀奥儀相傳候上、若他國ゟ罷越致指南候而者、御趣意致相違候付、兵作幷彌右衛門よりも、又右衛門手前ゟ紙面等取請置候旨に付、縮相立候儀に候得共、若被仰出等に而他國ゟ養子に罷越候樣之儀も可有之哉に付、聞番よりあなた御留守居迄相達置候樣、伺之上江戸表ゟ申遣候事。

淡路守は富山侯前田利幹

三月二日。諸郡手附等の行狀に關し戒飭す。

〔御用留〕

諸郡手附共心得方、御仕法已來心得違之者共不少躰。畢竟勤向役所附に申付置候所より役威

に相慕候哉、沙汰之限に候。依之人別遂穿鑿、急度可申付筋茂有之候得共、其許中より段々申聞之趣有之に付、今度之儀者格別之詮議を以先不及其沙汰候。併兼而承及候趣共有之、別紙相渡之候條、手附共ゟ已來之儀嚴重申渡、請書取立、尙又其許中於手前茂向後締方常に可有心得候、以上。

亥三月二日

吉田兵馬

高田幸助

諸郡惣年寄中・年寄並中

申渡之覺

一、於取次所手附共勤向、定式指定候品之外者、組主附指圖を請候而御用相辨可申處、先者手附心得を以取計候者共有之。右に付組主附ゟ直に可申達儀を茂、村役人等において手附手前ゟ相泥、下方迷惑之筋有之躰相聞得候條、御用方萬端組主付ゟ申達、指圖を請候而、村々より達方少も迷惑之筋無之樣取計、定式之書物たり共何分組主付ゟ入披見候躰に心得可申。且亦手附共自宅において御用方申談、隨而村役人出入多、下方煩敷族茂有之躰、急度相改可申事。

一、取次所組付手附代り々々に詰切、御用支無之樣可相心得處、自由を構候而全詰切不申、

且馳廻方者多分雇手附指出候躰。右之趣に而者第一御用不辨之筈に候條、成限手附共相勤可申、根役所詰手附之儀、組付御用等之有無に不拘、棟取を初一統無懈怠相勤可申事。

一、手附共御用馳廻り之節、人足躰之者を召連候族も有之躰。難心得事に候。書物・雨具様之品者前々之通自身に持可申、格別荷物有之人足不召連而辨兼申儀も候者、其段相斷可申。此外手附雇方等取次所入用之品、都而組主付指圖を請、費之筋無之樣に相心得可申事。

一、御用之品取次所又者手附名前を以文通いたし候所有之躰。右者指支之筋有之候條、以後者都而組主付名前たるべく、手附棟取より申送り候御用状茂、其組之主付宛に相調、紛敷無之様可相心得事。

一、手附共身支配惣年寄に申渡置、共通に者候得共、並役之面々とても相拘不申筈者無之候條心得違致間敷。就而者手附人撰方進退共、組主付加判にて可相達候筈に候事。

一、取次所・出役所に相兼候組々之村役人等、夜分茂出役所出入いたし候族有之躰。難心得事に候。已後指懸御用之外、猥に夜中出入爲致間敷候。溜々に直に出入之儀者、尙更堅相禁候事。

右之通申渡候上も借上之風俗抔有之歟、又者役威に募申躰等見聞いたし候者、其節は不得止加嚴制候條、此段譯而可申談置候事。

三月三日。銀仲預り銀百目手形を發行す。

〔御郡典〕

御勝手向爲御融通、今般銀仲預百目宛之銀手形、別紙二千五百貫目被仰付候條、是迄之銀手形与取交、正銀同樣諸上納を始無滯可致通用候。若他國指引方に正銀入用之節は、其支配先へ相斷、町會所へ可申出、其上に而遂詮議、無據分は於同所に正銀与引替可相渡候。

右之通被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配にも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

三月三日　　前田大炊

右之趣可被得其意候、以上。

〔御定書〕

御勝手向爲御融通、今般別紙銀仲預り百目宛之手形出來指出、一統通用之儀別紙寫之通り夫々申渡筈に候。

右に付仕法方之儀左之通可被相心得候。

一、當年より御家中增借知之內正米一萬二千石宛、來子年より四ヶ年可相渡候條、右を引當にして銀手形二千五百貫町會所において引受に出來、御算用場に可被指出候。尤右一萬二千

石町會所に於て拂立、其代銀程宛年々消合、卯年に至り相渡置候根銀を以て不殘消合可申候。各手形算用場可有加印候。

但、一萬二千石拂立日限之儀は、其時々御算用場可被示合候。

一、指當り爲根銀、先只今二百貫可相渡候條、銀仲に相渡置、他國指引方等正銀に而指遣不申候而難叶向々は、斷之品入念承糺、右根銀を以て引替指遣様可被相心得候。猶又根銀之儀は追々右之通に候條、都而町會所引請取締等嚴重可被相心得候。猶又御算用場奉行示合可被申候事。

三　月

三月十一日。藩の財政窮乏するを以て節約を議す。

〔御親翰帳之内書拔〕

三月十一日

一、左之通御勝手に而伺、被仰出候旨演述之事。

表方江可申達趣

御勝手向御逼迫至極之内、別而當年御手繰方必至与御指支に付、御仕法之儀追々御僉議有之筈に候。夫に付御賞美被下方之外、定式被下方當年一切御差止之事。

下札、此一ヶ條は御家老中等にも御演述之事。
但、御賞美被下方も、先例に不拘減方之儀格別御僉議之事。
一、定番頭を初諸頭之儀、御指支無之分は成限缺役可被仰付候事。
一、頭並之人々追々人多に相成、御費に候間御僉議可有之事。
一、御算用場奉行内々申聞候は、延享年中には御射手二十八人之内弓料百石、御異風三十三人に而異風料百十石与相見え候。且其頃迄は、藝家之儀幼少に而三之一被下置候者、藝之功拙に寄十八九歳迄も本知不被下由承及候。其他右に準じ、御役料高も當時は莫大に相成候躰。幷其頃御扶持方御切米四萬七千石許に相成候處、當時に而は六萬二千石許与相立候由申聞候。如斯相増候而は、所詮御符合之筋相立不申候間、右等之處格別御僉議之事。
一、江戸御往來御供人を始他國詰人、成限り御減少之事。
一、御次幷御廣式向被下方、當年御指止之儀等に付、別紙之通御用部屋に申達筈に候事。
一、御作事所幷定檢地方定銀、當年半減相渡申儀等、是又別紙之通夫々申渡筈之事。
右之外御省略御仕向方種々可有之、猶又追々御僉議之事。

〔諸事覺書〕

三月十三日。前田齊泰金澤を發して參覲の途に上る。

三月十三日

一、今日各五時前出席、內膳・將監旅裝束に而同刻過出席、兩人一集に相伺御機嫌候事。

一、今日御發駕候付、年寄中等一列松之間に而御近習頭を以恐悅申上候處、以同人御意有之事。

一、四時過御居間書院に御出、眞龍院樣御使者淺加九之丞被召御直答。相濟年寄中一切、丹後守等一切、伊勢守一切、御家老・若年寄一切被召、夫々御意有之。應而御請申上退去。

一、四時過御供廻り申上候付、年寄中表御式臺階下內より左之方へ罷出、御家老中は右之方へ罷出有之。外記儀御居間書院より御先立、御家老列座之次に伺公。年寄中等へ御會釋有之、御白洲に而御馬に被召御發駕之事。

但、御供內膳・將監儀、矢天井之間御廣緣に罷出有之、御通り懸り御意有之事。

一、御發駕後各退出より御廣式江罷出、方々樣江御祝詞申上事。眞龍院樣江例之通以紙面申上事。

〔諸事覺書〕

三月十三日　金澤　津幡御中休　今石動御泊　六里卅五町

十二御泊附

十四日	今石動		高岡御泊	四　　里
十五日	高岡	東岩瀬御中休	魚津御泊	十一里廿九町
十六日	魚津	浦山御中休	泊　御　泊	八里六町
十七日	泊	青海御中休	糸魚川御泊	六里卅四町
十八日	糸魚川	名立御中休	高田御泊	十二里廿八町
十九日	高田	關川御中休	牟禮御泊	十二里十六町
二十日	牟禮	丹波島御中休	榊　御　泊	十里廿八町
廿一日	榊	海野御中休	追分御泊	十里十八町
廿二日	追分	坂本御中休	板鼻御泊	十里七町
廿三日	板鼻	落合新町御中休	熊谷御泊	十二里六町
廿四日	熊谷	鴻巣御中休	浦和御泊	十里十二町
廿五日	浦和	蕨御中休	江戶御着	四里廿八町

〔官私隨筆〕

三月廿二日。諸向の費用を半減すべきこと等を命ず。

三月廿二日

一、御勝手向御運方御逼迫至極之內、別而當年莫大之御物入等に而、差當御手操方必至と御差支に付、諸向御入用銀當年は都而半減相渡筈に候條、右を以精誠省略、幾重共相辨可申候。品により共分に難相成儀は、重々僉議之上、其段御勝手方捌者共席へ可申聞旨。

一、御次向初、格外御省略之御僉議被仰付候。就夫御賞美被下方之外定式被下方、當年一切御差止被成候。御賞美被下方も、先例に不拘、御減少之御僉議に有之筈に候事。

右兩樣定番頭へ之覺書之寫、御用番より來る。

三月廿三日。銀仲預り銀手形の通用期限を更に延ぶべきことを告ぐ。

〔御觸拔書〕

町・在御用銀上納殘り引當を以、當三月限通用銀手形之分、限月に相成候得共、今以御用銀皆納無之向々多有之故、引替方指支候。依之右手形高之內、精誠於御算用場に消合、相殘る手形に當十一月晦日迄月延与申增印いたし可相渡候間、是迄之通御領國一統正銀同樣無滯通用可致候。尤御用銀上納次第、追々消合可申候。

一、右月延手形、尤諸上納取扱、曁他國指引方無據分者、於御算用場正銀与引替可相渡儀等先達而之通に候。

一、是迄之手形右之通消合、相殘る分當月廿六日より來月十日迄に、於御算用場右增印之手

三月十一日の條參照

形等を以取替可相渡候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

三月廿三日　　　　前田大炊

三月廿五日。前田齊泰江戶に着す。

〔官私隨筆〕

四月二日

一、中將樣益御機嫌能、前月廿五日巳之下刻御着府被遊、御供人末々迄無滯罷越申候段、同日江戶發足早飛脚に傳附、只今甲斐守殿等より申來候由、御用番より被申越候。

三月廿九日。德川家齊使者を遣はして前田齊泰の參覲を勞せしむ。

〔溫敬公記史料〕

三月廿九日。將軍遣老中松平周防守來勞。

是月は大盡なり

三月晦日。年寄より發する御用の紙面等に今後麁紙を用ふべきことを告

ぐ。

〔官私隨筆〕

三月晦日

一、拙者共より諸向へ申渡候御用之紙面寫等、是以後麁紙相用可申候。依之中には、漉に寄墨付よごれ等分りかね候儀も可有之候條、觸紙面等右樣之儀有之候共、分而屆に不及候。

一、觸紙面上包紙、墨付等有之候而も不及貪着候事。右之趣一統――

右御横目へ之覺書寫、御用番より來。

三月。兩替御用聞の者が發行したる銀預り手形を改製し繼續通用せしむべきことを告ぐ。

〔御觸拔書〕

付札、定番頭に

御當地兩替御用聞之者共、銀預り手形遣之儀、文政六年改而仕法取極、諸上納を初當時專ら通用いたし居候。然處右手形、年數相立印中等分り兼候に付、此度調替、年號等茂相改指遣候儀承屆候條、通用方等都而是迄之通無滯取扱可申候。右古手形一時に引替候儀指支可申候

間、當四月中に全引替可申候。

右之趣一統可被申談候事。

丁亥三月　　　　　　　前田大炊

四月朔日。前田齊泰登營して參覲の禮を行ふ。

〔官私隨筆〕

四月九日

一、前月廿九日上使松平周防守殿御出被成、御懇之被爲蒙上意。且又御參勤之御禮可被仰上旨、同晦日御老中方御連名之御奉書到來に付、當朔日御登城被遊候處、於御黑書院御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意候。將又内膳・將監御供被召連候所、於御白書院御目見被仰付候旨、當朔日發足町飛脚早飛脚歩を以、甲斐守殿等より申來候之旨、御用番より以紙面被申越。

〔續德川實紀〕

四月朔日、松平加賀守・松平因幡守參覲す。

四月十四日。降霰あり。

〔年々珍敷事留〕

一、四月十四日玉霰降也。兎角雨降續く。寒さ二月頃之様なり。

本件は四月十八日にあり

四月十八日。前田齊泰登營して德川家齊陞任の祝賀能を觀る。

〔江戶狀留書拔〕

四　月

一、公方樣御昇進、內府樣御位階相濟、爲御祝儀御能被仰付、御見物被仰付御登城被遊候處、御三家樣御同席に而御見物。前紀州樣・水戶樣御一集に御目見。御中入之內紀州樣等御同席に而御料理御頂戴。御能相濟、最前之通御目見被仰上、御三家樣御同樣之御會釋に而、御格別之儀に被思召候。無急度被仰聞候旨、丹羽七郞左衞門を以被仰出候段申來候事。

四月廿二日。德川家齊その陞任を賀して物を前田齊泰に贈る。

〔官私隨筆〕

五月十日

一、公方樣御昇進、內府樣御位階被爲濟候付、前月廿二日從公方樣上使御奏者番內藤大和守殿を以御時服二十、內府樣より上使同土屋相模守殿を以縮緬十卷拜領。爲御禮御登城、御廻勤も被遊候由、同廿四日出に申來。

四月廿四日。金澤六斗林本覺寺燒失す。

〔年々珍敷事留〕

一、四月廿四日泉野寺町本覺寺出火仕。右火事相濟歸りに、御上御横目役多賀建物与申人、前田大炊樣御行列之道を切り申に付、大炊樣御家來之内八十嶋權三郎与申人、通す間敷与申候へども、多賀は無理に役を申立道を切、夫より彼是口論に成るに付、多賀鞭にて八十嶋之頭を討つ。八十嶋御横目之爲持鞭を引取申處、御横目足輕一統、八十嶋之身ぎはに寄、其儘八十嶋之同役何の黑五郎与申人飛懸り、足輕を兩人取て投、夫より足輕皆散る。然所へ大炊樣之御家老野崎安兵衞參り、多賀に向ひ申樣、何れにも此處へ与申、玉龍寺へ御横目多賀を入、段々詮議いたし候所、其内に多賀之同役兩人等罷出、内分に而相濟申候なり。

〔見聞袋群斗記〕

四月廿四日夕七時頃、六斗林日蓮宗本覺寺一宇不殘燒失する。玉泉寺に於て前田大炊殿与御大小將横目多賀建物与行逢、申分出來混雜有之。

四月廿五日。大聖寺侯前田利之參覲の途金澤に宿す。

〔宮私隨筆〕

四月廿五日

一、今日備後守樣此表御泊に付、御着之上御寺御參詣之御樣子承。追付九時過御旅宿へ罷越、

御近習頭（御省略に而御家老等御供無之由。）吉田甚助に逢候而御樣子承、相伺御容躰退出。御持病之御鬱症に而御發駕御延引之由物語也。御用番よりは何之事も不申來。

四月廿八日。前田齊泰登營して本年十一月新夫人の入輿すべき命を受く。

〔官私隨筆〕

五月十日

廿八日御登城被遊候處、大御目付松浦伊勢守殿御演述に而御居殘、於御白書院御老中方御列座、溶姫樣當十一月中御引移可被爲在旨被仰出候段、御用番青山下總守殿被仰渡、難有仕合被思召候段、同廿九日出申來候由、御用番より以紙面被申越候。

四月廿八日。新菜種は藩之を買上げ更に賣渡すべきことを告ぐ。

〔御用留〕

金澤等用油非常爲手當、新菜種出來之上、石高見計、菜種仲を以當場ゟ買揚御藏入申付置、追而御拂申付候之條、右見込を以猶更用油不指支樣、臼元共等に可被申渡置候。尤願次第御拂被申付候。依之右御買上種預り人之儀共、金澤町・松任町・御郡方油肝煎ゟ指預、出入並上封等取捌方之儀は、當場添書所等役人ゟ申談置候條、勤方之儀直々當場承合候樣可被申渡候、以上。

四月廿八日　　　　　　　　　　　　　　　　　　御算用場

御郡奉行中

五月三日。東本願寺再建に付門末の志納心得方を告ぐ。

〔御觸留抜書〕

東方一向宗安心筋教諭方、暫本山再建に付門末勸め方心得方之儀に付、別紙之通被仰渡候に付、寫相越之候。先達而本山より別紙之通譯而被相觸置候上、寺庵より不正之勸方は無之筈に候得共、若再建に事寄不筋之儀有之候はゞ、無泥可及斷候。門徒共も勿論心得可有之事に候得共、萬一末々愚昧之者共心得違いたし、農事家業等を打捨、勸化ヶ間敷取持抔いたし候歟、或は多く之金銀を抛、身躰之障に相成候樣之儀は、曾而有之間敷儀に候。是等之儀能々不相洩樣末々迄可申談候、以上。

亥五月三日　　　　　　　　　　　　　　　　　青木多門

口郡惣年寄中・年寄並中

追而分役之人々江其許中より可有演述候事。

東方一向宗安心筋教諭方等之儀に付、別紙寫之通御用番年寄中被申付候條、被得其意、夫々可被申渡候、以上。

四月廿四日

山森雄次郎殿

安田新兵衛殿

追而先々相廻落着より可被相返候、以上。

付札、御算用場奉行江

東方一向宗安心筋教諭方、曁本山再建に付門末勸方、右再建に事寄不正之筋有之間敷旨等、別紙寫之趣、本願寺使僧被差下御領國門末江教示有之筈に付、爲心得相渡置候。自然寺庵より門徒共江不正之勸め方等有之候はゞ、早速及斷候樣、先に役人共江兼而申渡置候樣、御郡奉行等江可申渡候事。

覺

東本願寺燒失は文政六年十一月十五日

一、今般御燒失に付而も、彌增に御法義相續肝要に思召候。依之僧俗一統御取持、在京中者別而無油斷御法義筋相互ひに談合可有之事。

一、御代々御本廟御相續之御本意者、一昨年御書を以御門末一同江御教化被成下候事。

一、御本山御取持之儀者、萬事に付御法義相續之上之御取持に候得者、御法義相續与御取持与一躰之儀勿論に候得者、猶更心得違無之樣可相嗜候事。

一、御燒失に付而も御化導暫も御滯無之御事者、全治世之國恩に候得者、尚更王法國法を可重候之事。

一、御末寺之面々者、兼々被仰出之通、不律不如法之振舞無之樣相愼可申儀者勿論、御取持に付而者官職之高卑を不論、學解勝劣に不拘、惣會所において日々心底之程無腹藏示談におよび、且又歸國之上者前段之御趣意御門末一同江行屆候樣、報謝之實意より無油斷可被申傳候事。

一、御門徒之面々御取持に付、我慢勝他之心を以身分之高下を論じ、一己之僻案に募申間敷候。猶更念佛之行者に不似合之振舞於有之候而者、相互に見聞次第無遠慮示合、急度爲相改可申候事。

一、當席において無益之雜談高聲之戲論禁之。猶聊之事たりとも不取留儀、荒凉に申觸間敷候事。

右之條々堅違犯在之間敷もの也。

文政七年申正月

一筆致啓達候。先以兩御門跡樣益御機嫌能被爲成御座候。然者今般御再建御催被爲在之候に付、御奉書を以御觸示之趣委曲敬承被在之候上、追々御取持可申上御事に付、左之條々堅可

被相守旨申通候樣との御事に候。

一、御再建御取持筋に付、御法義相續之實意に不相服、王法仁義有化之嘲を相招候樣之儀、假令如何樣之懇志たりとも、御化導之御指支に相成候間堅可爲無用事。

一、御再建志に付割付記帳等、堅可爲無用候。唯御法義相續之上、一分々々之報謝之實意より相運候懇志を以、御再建被爲在之候御事に候得者、不法不信之輩江强而相勸候事不可然候。尤速に御成就被爲在之度御本意に候得共、假令年月積らせられ候而も、報謝之信施を以御成就被爲在之候儀、御本意被爲思召候事。

一、御再建志之儀者共國共所之世話方御取持同行之外、他國他所より立入懇志相勸候事有之間敷候儀者勿論、假令自國之同行たりとも、自他宗を論ぜず志之有無に拘らず米錢等勸進いたし、或者大道大路旅籠屋等に而勸化ヶ間敷儀、堅可爲無用候。殊更御取持与稱し誑合紛敷輩猥に令徘徊候はゞ、急度指留可被申事。

一、御取持筋に付、御末寺僧分之面々者、兼而被仰出候通御宗意研究御門徒教化肝要之儀者勿論、別而今般被仰出候御趣意末々迄篤与行屆候樣相傳へ候を以、僧分之御取持と可被存候。且又御門徒之面々者、農事・家職無油斷被致出情、年貢所當無滯樣大切に被相心得、其上報謝之實意より御取持可被申上候。若俗人之輩所々を令徘徊、僧分を指置人を集め、教化ヶ間敷

十月は文政九年なるべし

儀有之候はゞ、假令實意より相發り候儀たりとも、身分不相應之儀候得者不可然候事。

一、御再建御用材木之儀者、夫々御遣ひ方も有之候間、銘々御寄進被申上度族有之候とも、猥に伐採被申間敷候。若御無用に相成、折角之信施も無益之費ニ相成候而者、御不本意之御事に候間、御用に可相立木品被指上度面々者、御作事江被相伺、御沙汰之上伐取可被申事。

一、惣會所より無據申遣候儀有之節者、懸り役より書狀相添可申候。其餘何方より何事を申遣候共、取敢被申間敷候。依之今般改而懸り役印鑑相添指出置候事。

右之件々可相達候樣、依御沙汰如此候。猶今般御指向之御奉書幷上件之趣寺別に寫取、末々御門徒中迄行屆候樣、早々通達可被有之候。萬一寺々御門徒江不行屆申候ヶ所有之候はゞ、急度可被及御沙汰候。

右之趣御家老中より被仰渡候條、可被得其意候。仍如此に御座候、恐々謹言。

御再建御用掛り

十月

皆演坊

專心坊

佛願寺

願照坊

長井男也
池尾因幡
川那部登
森川左仲
大石靱負
寺田內匠

何々國
御末寺衆中
惣御門徒衆中

一筆令啓上候。先以兩御門跡樣御機嫌能被爲成御座候。然者今般御再建之儀以御直命被爲仰出候御趣意、御門末一同難有可奉存候。彌御法義相續之上より、報謝之實意を以御取持可被申上候。就夫御燒失以後、御再建之儀御延引被爲在候御深考之御趣意、去冬御觸示被爲在之、猶又去る四月以來國々江講者御指向之上、委曲演說被仰付候。未御指向無之ヶ所も、追々御教示可被仰付候御事者、全以御門末一同、御一宗之御正意に歸し奉る御本廟御相續之御本意を被奉汲得候樣にと被爲思召候より、更に餘之儀者不被爲在之候。尤御無祿之御本山御

再建之御事者、御門末一同之懇志を以御成就可被爲在之儀勿論之御事に者候得共、御取持被申上候輩、我慢勝他或は人並迄之心中に任し、報謝之實を失ひ候而者、假令いか樣致出情、速に御成就被爲在之候共、徒に名聞之御再建与相成、曾而佛祖之御冥見に相服がたき御事と、如何計歎御不本意被爲思召候。依之諸國一同御趣意被爲行屆候迄は、御再建も難被爲仰出被思召候得共、志深き御門末中より懇願之趣も難被爲默止、且御再建に付被爲在御拜領候御用木も近々御着木に茂可相成、旁以先御再建之儀被仰出候。乍然前段之御趣意に候得者、御新始之儀者暫御延引被爲在之候條、篤与奉得共意候而、兼而被仰出候七ヶ條御書立之御趣意、猶更追々御觸示之趣等、彌心得違無之樣、猶更堅相守可申候。勿論御作事向は萬端質素之御事に而、聊莊嚴華美を不被爲好、御崇敬に拘らざるヶ所は可相成丈御手輕之思召に而、唯東照宮樣御取立之神慮に被爲對、御本廟御化導之御場所御成就而已之御事に候間、偏に報恩謝德之經營たる儀猶更心得違無之、彌國恩之程を難有被奉存、忠孝仁義之道を本与し、農事家業無油斷相勵み、年貢所當疏略之儀無之樣に被相心得、其上は身分に叶ひ候報謝之御取持有之候はゞ、御本意たるべく被爲思召候。猶懸り役より可申達候、恐々謹言。

十　月　　　　川那部帶刀

下間大藏卿法橋

下間宮内卿法印
下間治部卿法印
各名乗判

何々國
院家衆御中
御一家衆御中
飛擔衆中
惣坊主衆中
惣御門徒衆中

五月四日。近日火災多きを以て火の元を愼むべきことを命ず。

〔官私隨筆〕
五月二日
一、此頃火事沙汰切々有之、或は遠火、又は御府内に而も大事に不成事濟候樣成も有之躰。今日も朝より右之火事共に四・五度其沙汰有之躰也。付火も有之樣に取沙汰あり。

〔雜事日記〕

頃日所々出火有之候。一統火之元之儀油斷は有之間敷儀候得共、猶更嚴重相心得可申候。其內放火も有之哉難計候條、侍方等屋敷廻を初、町家に至迄別而入念可致候。自然疑敷者も在之候はゞ召捕置、早速及斷可申候。右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江も被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

五月四日　　　　横山求馬

五月十八日。身延山の祖師像來着するを以て拜禮者の寄進に關して告ぐ。

〔御觸拔書〕

甲州身延山久遠寺祖師、御領國通行、御當地止宿中、信心之人々江內拜爲致候儀願出、先例茂有之事故承屆候。右に付御家中之人々始、寄進ヶ間敷儀尤有之間敷筈に候得共、尙更心得違無之樣、急度相心得可申事。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

五月十八日　　　　横山求馬

五月廿八日。年寄中の道中に携ふる鑓數等を改定す。

〔諸事覺書〕

五月廿八日

一、年寄中道中鑓數等以後此通爲持候。御家老中にも同樣爲持可申旨。且矢籠之儀、年寄中には振分け一張宛にして爲持候。御家老中は振分不申爲持可申旨、今日求馬表方執筆堀學之丞ゟ申含、席執筆中村準作迄此段申談演述之趣之事。

鑓三本・矢籠・甕組具足櫃之事。

五月。火災の際に於ける心得を令す。

〔御觸拔書〕

定番頭ゟ

火事之節、無用之人々火事場ゟ不罷越筈御定茂有之候處、近來御役人之外早乘仕候族茂多、火元ゟ茂無用之者入込、御役人之障に相成候樣子相聞え候事。

一、辻々大勢相集、火消人數等致見物、往來之障に茂相成候樣子に相聞え候事。

右等之趣前々より相觸、享和二年猶又被仰出之趣有之、急度相觸置候處、又々猥に相成候躰。夜中火事之節提灯無之、馬上に而駈廻候人々茂有之躰。火事之節親類等之宅ゟ見廻候儀は、

御定茂有之儀に候間、都而心得違無之樣嚴重可相心得旨、文化三年曁其後にも相觸置候。然所近年相ゆるみ、火元ゑ無用之人々多入込、甚及混雜、御役人之外途中早乘罷越候人々茂有之、辻々には混雜をも不厭大勢集り、往來之障に相成、輕き者共往來之節がさつ成儀茂相聞え候。右躰之者於有之は、御横目より相咎、夫々名前承屆候筈に候條、被得其意、組・支配之人々ゑ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配ゑも相達、尤家來末々不相洩申渡候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

五　月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　横　山　求　馬

六月朔日。是日以後東本願寺使僧を金澤に派し宗意の領解に關して教誨せしむ。

〔御助方賴方相論附意得寫〕

今般御教示講者香樹院御指向に付左之通り申渡候。

一、來六月一日より當御坊に於て僧分御教諭相始候條、當住は勿論、隱居・新發意・二男・三男　持家伴僧・弟子に至まで參詣可有之、猶日限之儀は追而可申渡候事。

但、遠所之寺庵は二男・三男又は持家伴僧之分一人相殘し出府可有之、尤日數之儀申渡候上

文政九年八月の條參照
當御坊は東本願寺別院

致交代可有拜聽事。

一、右に付配下寺庵隱居幷に新發意迄、二男・三男・持家伴僧・弟子等名前不殘書記、一組宛帳面に認、當廿九日迄に拙寺江可被指出候事。

一、各寺方道場分之調理書認、當廿九日迄可被指出候事。

一、六月一日より御教示日限、毎日朝五つ時より出席着帳可有之事。

一、御教示拜聽之面々、參詣中都而不作法方無之儀は勿論、別而町中往來等雜々敷無之樣可被相心得候事。

一、右日限之內葬式寺役之儀は格別、其餘之寺役は不殘相延し可申事。

但、指懸り無據法要之分は、右刻限相省可被相勤事。

一、御教示日限相濟候迄、講口幷に祠堂經等相扣可申事。

一、寺庵內室之分、右御教示日限之內、別段に願有之候に付一席御教示有之筈之事。

一、若病氣等に而御教示拜聽難罷出面々は、追而御本山江被召登、御教示有之旨に御下知茂有之候條、可被得其意候事。

但、當病之分は組合より書付を以、御坊拙寺共溜り江可被相達候事。

一、御教示日限相濟候上、寺別御調理有之、御請書取立候事に候得者其心得可有之事。

一、御教示に付、惣會所詰其外在京之面々近々御返し之筈に候條、其外遠所等ゟ罷越候面々、當月中不殘歸寺候樣急速可被申渡候事。

一、日々御教示相濟候迄時々談議有之候間、三等衆は擔寺ゟ相尋、法中は首座ゟ相尋、退出可有之候事。

一、拜聽之裝束三等衆は靑袈裟、法中は墨袈裟着用之事。

一、日々辨當持參之事。

右之通可被得其意候事。

丁亥五月　　瑞泉寺

〔御助方賴方相論附意得寫〕

丁亥六月朔日御教示相始る。御書院五つ半時、御堂八つ時。御書院は朔日は御演說而已。二日より十一日迄は御一代記坊主は是大罪人なり等の章內講。裝束講者幷に三等衆は輪袈裟、法中は墨袈裟なり。

御堂は一日より十日迄、初に演說中七ヶ條拜讀、後七ヶ條法話。

御門前野仕等指止。且亦御町・御郡一統七ヶ條御觸。

御本山幷講者ゟ冥加志、三等は百疋、法中・持家等は寺號坊號は二匁・一匁、法名借分は一匁

与五分。
十二日より十六日迄御書院において配下寺庵御問調、取次役播州恵燈・江州法城寮司兩人。
十七日御書院において寺庵內室御教示。
十八日隱居・新發意同斷。
十九日御請書。

乍恐奉差上候御受書

一、今般深重之以思召御講者御指向被爲有之、七ヶ條之御趣意日々拜聽仕り、是迄心得違之處御教示被成下、難有奉敬承候。仍而自今已後心底相改、佛祖之御重恩奉荷負、寺法國法御掟大切に相守、不律不如法之振舞不仕樣相愼可申候。其上寺內は勿論、御預御門徒に前段之御趣意行屆候樣報謝之實意より教導仕、王法國法に對候而も疎略之儀無之樣急度爲相守可申候。尙又月々法中會合仕及示談、御法義相續可仕候。仍而御請書奉差上候。右之趣乍恐宜被仰上可被下候、以上。

文政十年亥六月　　國　郡　所

寺號法名　書印

下間治部卿殿

七ヶ條は本年五月三日の條參照

同　宮内卿殿
同　大藏卿殿
川那部帶刀殿

〔御助方賴方相論附意得寫〕

帳外分御敎示殘候處、直參道場・直參御門徒江者、御使僧以常德寺殿別段に御國方江御伺之上、於御坊同年十一月晦日より十二月二日迄御敎示有之候。併下道場等は皆御敎示無之候。

〔似寄留〕

五月廿八日頃東末寺へ御使僧幷に詞公御下り、六月一日より法中おもに敎化有之、御堂に於ても有之、群集仕る。遠所よりもおびたゞしく人出る。

御門跡樣難有思召に而、御燒失勸化は先指置、近年御安心之事に付心得違も有之、御自身御すゝめ方不行屆候故、加樣に燒失与存候に付、此度七ヶ條之御書立御下し、先門徒より坊主へ得与御作法たしなみ御すゝめ、末々へも無油斷御掟御安心聽聞いたし候樣被仰渡。去十一月七晝夜前、御坊樣方學問よき人々御召寄られ、御安心御尋、段々御聞之上、何分賴み方・御たすけ方など、御當地片寄にすゝめられ候よりおこりたる事故、御本山に而は左樣片よらぬやうに、兩樣とも入用同事之言ば成ば、以後片寄ぬ樣にすゝめ候樣被仰渡。春迄も不歸法

中も有之、誠に御繁昌故かゝる事も出來かと存候事。

六月七日。寺社奉行、東本願寺の教諭を各寺庵より道場に傳達すべきことを告ぐ。

〔御用留〕

今般東本願寺殿御使僧下向之節、僧分ゟ教諭有之候。右教諭相濟候上、御領内道場共に共向々之寺庵より致教示筈に候條、道場共聊無麁略教示受候樣嚴重御申渡候樣致度。尤右之趣御用番ゟ茂相達置候條、左樣御承知有之度候、以上。

六月七日　　多賀豫一右衛門

林　久太夫樣

原篠金右衛門樣

六月七日。家中諸給人の收納拂米切手の藏縮は年末までに解除せしむべきことを稟請す。

〔御觸拔書〕

御家中諸給人收納拂米切手、藏縮有之分、每歲御召米を初、旅人買米等渡り方指閊、別而當

年抔御召米川下、暨追詰米升廻之節者、右藏解遲滯之向多有之、御指支に相成候段、每度御算用場より申來候付、其時々取次中買共ゟ嚴重申渡候得共、給人手前において兎角爾々埒明不申、最早必至与御用支に相成候而者不容易儀故、米方定法之通、取次中買共ゟ申渡、無是非中積爲致、漸相辨候族に而、年々箇樣に相成候而者、甚以指支之趣に御座候。元來藏縮之儀者、借銀返辨引當之事に候得者、年暮迄には夫々指引譯立可申筈に付、年內中に藏解埒明置可申、若故障有之向には、兼而得与相しらべ、卒爾に拂米取次致間敷。自然藏解指支候族於有之者、中買等急度可申付段今般改而申渡候之間、御家中諸給人收納拂米之內、藏縮致置候面々茂、右之心得を以藏解出方及遲滯間敷旨、一統嚴重被仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

亥六月七日

有賀甚六郎

小堀八十太夫

前田大炊樣

六月十日。幕府、前田齊泰の挾箱を中之御門外なる腰懸內に入らしむることを許す。

〔江戶每日書立書拔〕

六月十日

一、左之通先達公邊江被仰達置候處、今般水野出羽守殿に而末に記候通被仰渡候付、御供江は御次において夫々申談候。爲承知相達置候旨、平兵衛等申聞。

加賀守登城之節、挾箱一人前々は御玄關前迄召連候得共、享保三戌年被仰渡以後指控、當時中之御門之外迄召連申候段、兼々大御目付樣・御目付樣迄も御達置申候通に御座候。然處近來松平越前守樣・松平因幡守樣・松平越後守樣等追々御達濟、御挾箱中之御門外腰懸內江入被指置候。依而御退出之砌甚御都合宜御座候。右御一列之內にも加賀守は最初に退出仕候に付、右腰懸內江入置候へば退出之砌繰出方混雜不仕、別而都合宜御座候。右之通前々之譯合茂御座候事に御座候間、何卒以來登城之節々挾箱越前守樣等同樣、中之御門外腰懸內江入置候樣仕度奉存候。簑箱之儀も同樣中之御門外迄爲持候へ共、享和二戌年松平田宮樣御指圖に付、右以後雨天之節計中之御門外迄爲持申候。雨天之節爲持候砌は、是又同樣右腰懸內江入置候樣仕度、何分御聞濟被成下候樣仕度、此段申進候。

松平加賀守內

三　月　　　　　長瀨善左衛門

六月十七日。錢手形の通用を停止すべきことを告ぐ。

〔御觸拔書〕

先達而於町會所出來之錢手形加增印重而通用之儀、去年十二月申渡置候通に候處、詮議之趣有之指止候條、是迄相渡來候錢手形、來月廿日迄に銀手形等を以引替可相渡候條、偶日每に町會所に指出可申事。

右之通被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配に茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

六月十七日　前田大炊

〔見聞袋群斗記〕

七月廿日錢手形通用相止、於町會所引替之事に被仰渡有之なり。

六月十八日。清水齊明薨去の報金澤に達す。

〔官私隨筆〕

六月十八日

一、德川式部卿樣去十日御逝去之由申來候。依之普請は今日一日、鳴物等は明後廿日迄三日遠慮之筈之旨、一統觸之寫御用番より到來。

六月廿九日。降雨煤色を帶ぶ。

〔年々珍敷事留〕

一、六月廿九日朝五時前雨降り、右雨之色すゝを洗たる汁之様成る雨なり。頃日秋冷之様なり。

是月は大盡なり

六月晦日。前田齊敬の三十三回忌法會を天德院に執行す。

〔官私隨筆〕

六月九日

一、觀樹院様三十三回御忌御法事、當月晦日於天德院御執行、御射手・御異風稽古等幷普請・鳴物・諸殺生三日遠慮、差急之普請等は不及遠慮旨、一統觸之寫、大炊殿より到來。

〔官私隨筆〕

六月晦日

一、今朝半上下に而六半時前天德院へ罷越。

一、御法事無御滯夫々濟。

休隱曇開は希運曇開

但、初座獻粥畢而寶圓寺・瑞龍寺及天德院休隱曇開和尚諷經、二座は上堂、三座法語なし、施餓鬼上供遠行也。

一、右濟直に御名代求馬被相勤候に付、例之伺公所へ罷越、夫より復座、御代香相濟、御施

物畢る。一先引。御法事奉行恐悅之旨申達。

一、追付拜禮如例濟。

六月。銀仲預り銀手形を貯藏する者に利子を支拂ふべきことを告ぐ。

〔御觸留拔書〕

銀仲預り手形致所持留置申度者有之候はゞ、銀仲共ゟ可申出、銀仲より御算用場へ差出候得者、百目札十枚繰見屆致封印可相渡候。相解度候はゞ、偶日御算用場相立候內何時に而茂相解渡可申。其砌留置候月數百目に付六分宛之利足可被下候。利足請取切手銀仲名前致印章指出可申候。取持人名前書出に不及候。見屆封印請取候日より廿五ヶ日內に而者利足不被下、夫より長く留置候者、何ヶ月に而も終り之月三十日之內五日御用捨、其月之利足金可被下事。

一、封印之手形所持之者、封印之儘外之者ゟ相讓候儀は貪着に不及候。相解候砌、其段初封印請候者より銀仲ゟ斷可申事。

一、續七ヶ月以上留置候者は、來春引當御米賣捌次第正銀相渡、手形取揚消合可申。封印手形多、御米代銀行屆不申候はゞ、割合を以正銀相渡可申。封印手形少く、御米代銀餘り候はゞ、七ヶ月に不滿とも月數多き者しらべ立、七ヶ月滿之內ゟ指加正銀相渡事。

亥　六　月

閏六月四日。銀仲預り銀手形に小割札を發行することを告ぐ。

〔御觸拔書〕

先達而於町會所致出來候銀手形之内を以、小割札に拵、一匁・三匁・五匁・十匁与四通りに相認、銀高に應じ札形大小之差別出來指出候條、尤諸上納等御領國一統無滯可致通用候事。

一、上納銀端封一匁に滿不申分は、時相場に不拘、銀一匁代丁錢百文之圖を以、當月より當分錢上納勝手次第たるべく候。且右錢包紙之表、銀何分何厘代錢何十何文与相調、上納人名印記、尤封じ目にも印形いたし指出可申事。

右之通被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配に茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

閏六月四日　　　　横山求馬

閏六月。節約の爲本鄕邸の下御臺所を廢す。

〔江戸狀留書拔〕

閏六月

一、御臺所向格別御省略之儀遂僉議候付、先づ指當り下御臺所被指止、諸役所上御臺所に引

揚、町方等より御買上物等、御料理頭・與力・御歩横目三役申談詮議いたし候はゞ、萬端簡易に相成、詮議方行屆可申旨申聞候付、下御臺所被指止候儀相伺候處、伺之通被仰出、則申渡候旨等申來候事。

閏六月。江州の苧綛商人能登口郡産の苧綛を一手に買入れんことを請ふ。

〔能州綛一件〕

書付を以奉願上候。

一、私共江州に而數十年苧綛等商賣仕罷在申候。然處能州羽咋・鹿島兩御郡今般苧綛方御仕法立御座候御樣子承候に付、先達右綛不殘引請度由相願候所、此度御示談之趣御座候由に而、早速罷下候樣被仰下、御趣意通得与承知仕候に付左に奉申上候。

一、苧綛丈け三尺八寸糸數八百筋、往古より定之通嚴重に被仰渡可被下候事。

一、前銀之儀者是迄之振合之通貸渡可申事。

但し、若貸付之分故障出來之節御詮議可被下候事。

一、綛直段之儀は往々加・越・能相場を以時々買入可申事。

右之通被仰渡被下候者、增役銀馬一駄に付十五匁宛上納仕、先達而御定之分十五匁、都合三十目指上可申候間、以來私共ゟ兩御郡綛不殘永久引請申度御座候間、此間宜敷御願被下候樣

何分奉願上候、以上。

江州神崎郡簗瀬村

文政十年閏六月

猪田清八

同　種村

大橋清兵衛

金澤

一丸甚六殿

七月九日。銀子缺乏するを以て金子入交ぜ通用することを許す。

〔御觸抜書〕

此節世上銀子不融通之躰相聞え候。依之金相場兩に付六十六匁之極直段を以、當月十日より同十月中、諸上納幷御家中拂米等諸指引、金子入交無滯取遣可申候。且兩替商賣人金子商賣買之節は、極直段之外定之口錢爲取申筈に候。

右之通御算用場奉行等申聞候條、被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配ゟ茂相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

八月廿四日の條參照

前田大炊

七月十日。異國船來舶の際に於ける手當方に就いて議す。

〔於江府御親翰帳之內書拔〕

七月十日以七郎左衞門上之候處、十四日以同人被返下、被仰出之趣返書之通に候事。

異國船乘寄候儀有之節之御手當方、內密御馬廻一番組・二番組心得方被仰渡置候處、右兩組之役筒持人、割場雇者を受取爲持候而は、打拂方之用を成し不申、役筒爲持候詮無之事に付、自然兩組共出立仕候時は、割場附足輕之內炮術粗心得候者御貸渡御座候樣仕度段、堀孫左衞門等より紙面差出候。右願方無據趣に相聞え候間、臨時に御貸渡可有之段申聞、割場奉行へも可申渡置候哉。

一、大筒を以打拂方之儀、豐島兩家幷坂井流御異風心得方之儀は、御異風裁許より被仰渡置候處、坂井流之筒數は中島誠左衞門より書出、豐島流之筒數者豐島康九郎等より書出候付、御家老中へ及演說候處、右書出之通には御在合無之、當時之御在合筒に而指懸り入用之節は、兩流に二十挺充御渡可有之候間、右御筒にて相辨候樣にしらべ候趣有之、其段誠左衞門・康九郎等へ申聞候處、康九郎等は右御筒見分仕度旨申聞、御家老中へ申談、則見分申付候處、流違之御筒に而、其內步薄之分も有之候間、康九郎等稽古旁右御筒拜借仕、宇津木濱におい

着東は服裝の義

て打試仕度旨、別紙寫之通申聞候付、御家老中江及僉議候處、伺之上不日可申聞旨に候。先年小川家之火矢等右濱において試被仰付候儀も有之候間、右御筒御貸渡之上は、右濱において打試之儀紙面之通可承届候哉。

一、御郡奉行手合において木炮致出來、辨利之道具に付、支配之足輕共之內江も見計傳來いたさせ置申度。夫に付宇津木濱において打放試申度旨、且又御聞届之上、八月晦日迄之內右試仕度旨、山森雄次郎等紙面之通申聞候間、承届可然哉。御郡奉行手合、八月晦日迄之內於宇津木濱打放試申儀承届候上は、豐島康九郎等右濱において稽古之儀、八月晦日迄之內に試申度旨願候はゞ承届申に而可有御座候。

一、康九郎等申聞候は、自然異國船乘寄に付、打拂方に出立仕候節は、打人足輕共割場附には豐島流無之、大組御持方足輕共は右流儀執行仕候者に付、取扱等辨事易候間、右兩組之內より御渡御座候様仕度旨、以紙面申聞候に付、大組頭江內密遂僉議申聞候様申渡置候處、臨時に申渡候へば渡申儀指支不申段、以紙面申聞候間、康九郎等江申渡、御筒數等に應じ人圖り書出候様申渡候處、別紙之通書出候條、臨時に相渡候様大組頭江可申渡候哉。

一、遠所奉行より注進次第、鐵炮方足輕共急速發足之儀、先達而割場江申渡、人數書相渡候處、其節人々着東等之儀は、割場僉議之趣箇條書に認持出候故、伺之上夫々心得方申渡置候

處、右用意方右場僉議之趣書出候故、御勝手方ゟ相達り、御省略方ゟ僉議に相渡り候處、堀孫左衛門・神田吉左衛門右御手當方心得被仰渡置候事故、割場しらべ方手重成儀と右兩人心付之趣、割場紙面に付札いたし指出候故、右付札之物割場奉行より相渡、猶更遂僉議申聞候樣申渡候處、至而手輕之趣に僉議いたし、紙面指出候付、右紙面之通相心得、自然急出立申渡候節、夫々不指支樣可相心得旨申渡置候。

右之通何茂示談之上申進候條、替思召も無之候はゞ、以御序御伺御申越可被成候。則別紙九品差進申候、以上。

閏六月廿四日　　　　求　馬　判

甲斐守等三人樣

右之趣委曲致承知、拙者共替存寄無之に付、御紙面等入御覽相伺候處、役筒持人割場雇候者を受取候而は、打拂方之用を成し不申候間、割場附足輕之內炮術相心得候者御貸渡之儀願之趣は、文化四年異國船御手當方伺之節、金龍院樣御親翰之御付札を以被仰出候趣に相心得可申候。其外は都而伺之通与被仰出、右御付札物拜見被仰付候付、要用之處致拜寫差進候條、御拜見被成、右之通御心得可被成候。右御付札は、御家中役弓筒家來、其業覺之者に爲持申儀に候へ共、業不覺者候はゞ割場ゟ差出、常用に召仕候而、割場足輕之內業覺候者を代りに

可有御渡与之御趣意与奉存候。右拜寫は其表一件之帳に有之候趣に存候間、尚更御しらべ可被成候、以上。

七月十四日　　　　　　　　　　　　　内膳等三人　判

求馬様

七月十一日。越後糸魚川侯松平直春金澤を通過せんとするを以て注意を與ふ。

〔御觸拔書〕

松平日向守殿、當月廿日比御當地御通之旨、江戸表より申來候。依之見物等罷出申間敷候。若參懸候はゞ不作法無之樣、家來末々迄急度可被申渡候。去年有馬左兵衛佐殿御通行之節、右之通申渡候處、下々之者中に者雜言抔申、不作法之族相聞候條、尚更嚴重可被申渡候。右之通被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配に茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月十一日　　　　　　　　　　　　　前田大炊

松平日向守は大坂城加番となれるなり

八月九日。石動山麓の村々に天平寺領との境塚を復舊すべきことを告ぐ。

〔御觸留抜書〕

付札、武部村彌左衛門ゟ

石動山麓山火事之節、境塚等致燒失候箇所、幷境塚印木立枯等有之に付、領境之村方と石動山役僧立會植付等之儀、寺社奉行申達之趣等に付、公事場奉行成瀨主税より別紙寫之通申來候に付、相越之候條、得其意、以來心得違無之樣嚴重可申渡者也。

亥八月九日　　井上與兵衛

石動山麓村々役人

當四月石動山麓山火事之趣、石動山斷方と村方より之斷方与相違之趣有之に付、其段石動山衆徒手前相しらべ候處、先達而衆徒之斷方間違之趣に而、村方よりの斷方之通り之旨重而衆徒より書付指出候旨、寺社奉行より申來候。依而此度境塚等燒失いたし候箇所、幷先達より境塚印之樹木立枯或は根かやり又雪折之分、麓能・越領境之村方と石動山役僧立會、樹苗植付等いたし候樣寺社奉行へ申達候條、村役人等立會、境塚等出來いたし候樣嚴重可被申渡候。

一、右燒失之節、石動山境內燒跡において、薪七抱荷擠有之に付、角間村肝煎手前衆徒より相糺候處、肝煎より村方及詮議候得者、境筋不辨、子供薪いたし候儀相違無之、申譯無之旨

遂而相訖候由衆徒より及斷候。畢竟境塚印之樹木立枯、或は堀切等も次第に埋り候故、右躰之儀も出來いたし候躰に候條、嚴重境塚等相改候之樣可被申渡、尤以來子供たり共右躰之儀有之候はゞ、公事場〻召出相糺候條、此段茂可被申渡置候、以上。

亥八月二日　　成瀬主税

山森雄次郎殿

中村新左衞門殿

八月二十日。御郡鹽稼の村々役人にその製鹽量を增加すべきことを告ぐ。

〔御觸留拔書〕

付札、惣年寄・年寄並〻

別紙寫之通申來候條、得其意、鹽燒上方出情いたし、外浦々に燒劣申間敷候。吟味人等相廻候節、每度勢子方之儀申渡筈に候處、等閑至極沙汰之限りに候。中には升目少き鹽多く有之由、鹽士共甚不埒之心得方に候。右躰心得方故、隱賣・洩鹽いたし候者有之、御縮方每度申渡候所不屆之致方。畢竟燒劣申樣に相見候得者、右躰洩鹽有之哉に被存、不輕儀に候。其方共御縮方等閑に相心得罷在候故、鹽士共は猶更心得違いたし候。是等は村々役人共一圓申譯難立儀に候條、急度相心得可申、鹽士共之內御縮方幷勢子方申談候而茂、等閑之族等有之に

おいては、其方共より無泥可申斷候。別紙にも有之通、若往々不立直ヶ所有之、重而御算用場より穿鑿之筋有之候而は不容易儀に候條、此度は一通觸縮候儀と相心得候而は品違候間、急度得其意、村々鹽士共にも嚴重可申渡候。吟味人・相見人にも譯而申渡候品有之、綿密に爲遂穿鑿候條、無油斷出情可致勢子者也。

亥八月廿日　井上與兵衞

御郡鹽稼村々役人

當年口郡御鹽出來高無數、中には相應燒上候ヶ所も有之候得共、口郡外浦抔は出來方無數、升目も少鹽多有之躰。鹽士共心得方不宜儀は不及申儀に候得共、相見人共懸日毎に致吟味、燒上方等不宜分不相納、吟味人共は時々相廻り勢子致候はゞ、ヶ樣之儀は無之筈に候。尤當春已來氣候も惡敷候得共、右役人共油斷之躰にも相見え候條、已來之儀各手前において、吟味人・相見人共に急度可被申渡候。若往々不立直ヶ所も有之候はゞ、一々可及糺筋も有之候條、此段も可被申渡置候、以上。

八月十四日　御算用場

御郡奉行中

八月廿四日。銀上納に金子を混用し得るの前令を改む。

〔御觸拔書〕

先達而金相場六十六匁之極直段を以、金銀入交諸上納を初通用之儀、一統申渡置候へ共、詮議之趣有之、右極直段等之儀指止候條、時相場を以可致通用候。尤銀上納之方ゟ、金子入交申儀も指止可申候。

右之通被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配ゟ茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

八月廿四日　　横山求馬

八月廿八日。幕府、前田齊泰の夫人たるべき溶姬に合力米を與ふ。

〔諸事覺書〕

九月廿日

一、前月廿八日於江戶、上使松平和泉守殿を以、溶姬君樣ゟ御合力米三千兩、御米五百俵被進候旨被仰出候段、鈴木一學殿より聞番迄申來候旨、當月四日出に表方ゟ申來候事。

八月。前田齊泰夫人の入輿後に於ける足輕等の勤務に就いて告ぐ。

〔雜事日記〕

七月九日の條參照

當秋溶姫君樣御引移之上者、御附御用足輕・小者增詰被仰付、其上若御近火之節御供等御用割場建人も數多相增申儀に候。御勝手向不容易御逼迫之御時節に候得共、不被得止右之通被仰付候。且又此後御獻上物等にて人多御用之儀時々可有之、左樣之節者諸向引揚出人等を以成限御辨有之度儀に候。然處是迄引揚之儀有之節、割場ゟ罷出候而は烈敷御用、且者品不宜儀を相勤候樣心得候族も有之、彼是指支申立、成限遁候樣之取計も有之哉に付、今般割場奉行より足輕・小者共改而心得方申渡候筈に候。此表之儀は、公儀御勤事に拘り候御用多く有之候得者、不時人多御用之節は何茂罷出相勤、御用支無之樣可相心得處、人々品能儀を勤度、又は指定候外役所續之事たり共不相勤樣之習俗よりして、莫大之御人に而相勤ながら、御人支にも相成候儀に候條、以來引揚等之儀有之節、手先之者より何かと願出候はゞ、能其實を察、實御用支之儀候はゞ辨方幾重にも遂詮議、引揚等指出候樣可致、申立ヶ間敷樣之儀は何分申諭爲致會得可申候。幾篇申諭候而も不會得之躰に候はゞ、速に其段相達可申、御當節之御家格に難合者は御暇可被下候條、奉行人等手前にて不致猶豫相達可申候。自然等閑に相心得候はゞ、奉行人等之越度可被仰付候事。

亥　八　月

九月六日。前田齊廣の女厚姫金澤を發して江戸に向かふ。

〔官私隨筆〕

九月五日

一、明日厚姫様金澤御發輿に付、今日御機嫌伺之儀昨日御用番より被申越候付、今朝四時過常服着用、御廣式へ罷出御機嫌伺候趣、淺加九之丞へ申達之、御容子相尋候所、益御機嫌能被成御座候由。

十月九日

一、厚姫様益御機嫌能御旅行、前月廿九日申下刻御着府之旨申來候由、御用番より被申越候。

〔見聞袋群斗記〕

九月六日厚姫様金澤表御發輿、越後山之下〻赤岩指支、十二日より十六日迄鬼伏村に御逗留。同廿九日江戸御本宅に御着輿、同所御住居なり。

九月八日。西本願寺へ密に寄進するもののあるを戒む。

〔御觸留拔書〕

付札、惣年寄・年寄並に

西方一向宗勸進方之儀に付、別紙寫之通申來候に付、相越之候條、得其意、勸進方之儀堅不相成候。萬一密々取計指出者於有之は、急度可申付候條、猶更下人末々に至迄可申渡置者也。

亥九月八日　　　　　　　　　　　　　　　　　高田幸助

口郡村々役人

東方一向宗本山燒失に付安心筋教諭方等之儀は、當四月一統相觸候通りに候處、西方一向宗本山之儀は謂も無之候處、頃日加・越・能寺庵より門徒之者共に勸進躰之儀申出、割符銀等指出候者も有之躰に相聞え候。勸進之儀は、夫々申渡方等茂有之候上指出候得者懇志にも相成候處、密々取計候由不埒之至に候條、此段夫々嚴重可被申渡候。

右之趣申渡候上指出候者有之段於承者、急度可申付候間、此段も兼而可被申渡置候、以上。

八月晦日　　　　　　　　　　　御算用場

内藤十兵衞殿

高田幸助殿

九月廿二日。江戸詰に赴く老臣等の物を藩侯一族に上るを廢せしむ。

本年十一月十一日の條參照

〔諸事覺書〕

九月廿二日

一、左之通表方に演述之旨、當月四日出江戸表より申來候事。

各此表往來之節等、御内々方々樣に心入之品被差上候得共、格別御省略中之事に候間、被指

止候様無急度可申達旨被仰出候。

十月二日。銀仲預り銀手形中、限月の増印あるものを正銀と引替ふべきことを告ぐ。

〔御觸拔書〕

町・在御用銀子納殘り引當を以、當三月限通用銀手形に、重而當十一月晦日迄月延写申增印有之分、限月に相成候間、當十二月朔日より同十五日迄之内、偶日毎に於御算用場、正銀等を以引替可相渡候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配江茂相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十月二日　横山求馬

十月五日。金澤城外なる新坂柵御門を修繕するを以て通行を禁ず。

〔宮私隨筆〕

十月二日

一、新坂柵御門御修復有之に付、當五日より十八日迄往來指留、火事等之節は不差支旨御横

日へ覺書之寫御用番より來る。

十月十六日。羽咋郡大念寺新村吉左衞門支那に難船したる始末を上申す。

〔能州羽咋郡大念寺新村吉左衞門御詮議口書寫〕

私儀、去戌三月越前國海浦船之水主に被雇罷越候處、海上難船におよび唐國ゟ被吹流、唐國より長崎表ゟ被送越候に付、今般長崎御役所より御引渡御連越被下、今日着仕候に付御召出、始末在躰可申上旨御紙に付、乘組名前等左に奉申上候。

越前國海浦蓬萊屋庄右衞門舟乘組

越前海浦	沖船頭	善右衞門
同　前	水主	庄平
同　前	同	市平
御公領道口浦	同	長三郎
同　所	同	市左衞門
同　所	同	理兵衞
同　所	同	藤藏
同　所	同	孫左衞門

羽咋郡大念寺新村　同　吉左衛門

〆九人

一、去戌三月十五日空船に而越前敦賀浦出帆、同廿四日に松前ゟ着岸仕候上、四月十五日ヱゾ地カンハセと申所ゟ着、鯡積込、六月十日に松前ゟ歸帆之上、又候七月十日松前出帆、下ヱゾ地ウラカワと申所ゟ罷越昆布類積込、十六日ウラカワ出帆松前ゟ歸着仕候。其後八月廿八日松前出帆、大坂心指長門國千浦沖迄飄登候内、九月七日より大雨風に相成、舟危御座候に付積荷多分打捨申候得共、最早難凌場に至り申に付、十日晝頃帆柱を伐り流し漂流居候内、十一日晴上り、十二日より桁を以帆に仕懸け飄登候處、又候十五日より大難風に相成、船も追々相損じ、積荷は不殘打捨、乘組一統決心仕、何も髮を切り金比羅を奉念、風に隨ひ晝夜なく被吹流申候。食物之儀は米を煎、天水を取、少々宛給居申候處、段々海色替り泥海に相成、舟方にては子の一つ星と相唱へ常々見當に仕り候北極星、此地に而見請候へば格別低く、半程のひくさに相見え申に付、限りなく南ゟ罷越候と奉存罷在候處、廿八日夜半頃瀨につきあてられ、終に乘船相開き申候に付、乘船打捨米一俵取入、艀に乘移り瀨有之候得ば、必山近く可有之と其夜を待明し申候所、廿九日海上見請候へば、四方泥海に而山相見え不申、日數十三日之間晝夜被吹流居申候へば、方角も取失ひ、最早助り候道無御座と孰茂覺悟仕候。其

戌は文政九年

内帆柱躰遙に見請申に付漕寄候處、向より獵舟一艘同じく漕來り、船中見請候へば獵師躰に而、異風成人物十人乘組、何も羅紗躰之帽子・小手縄絆様之物着居申候。船頭善右衞門初九人之者共助㒵候様呼懸候得共、何之答も不致に付手を合申所、右獵船ゟ乘込候様之含歟手招き候に付、九人之者共乘込申所、獵師共持參仕候辨當を私共に爲給申候。小豆飯に而味噌業に仕候。舟は凡積り二十石積程之舟に御座候而、右髒は舳につなぎ引參り申候。右瀨に當り候所よりは、眞水に而鹽氣無御座候。二十里計程參り候与覺候所、廿九日夜九つ頃にも候哉、家二十軒計程有之所ゟ連上り、家作り替り申儀無御座候。惣躰土間に而、屋根は茅葺・瓦屋根入交り御座候。其夜茶店様成家ゟ連行、宿主躰ゟ引渡申候。空腹に相成候に付食を乞候得共、言語不相通候に付腹を撫手まね仕候處、飯を出し爲給㒵申候。其内獵師は罷歸申候處、見物人之躰に而多勢男女寄集り、九人之者を撫申候。此所後に承り候得ば、ハリセンサン与申所之由に御座候。翌十月朔日役人躰兩人相見え、九人之者を連行、日本之道程三里計同道仕候處、高石垣に而半月形之門構之內ゟ連行申候。內外に幅二間計之堀御座候。城下与相見え、家作り不殘瓦葺、商家賑々敷事にて、三町計行申候へば門構屋敷躰有之。御役人躰に而帶刀は無御座候得共、大勢寄集り何歟被尋候得共、一圓言語相分り不申候。又候二町計行、門構之屋敷式臺構に而、二尺四方計之石疊を敷有之所ゟ連行、此所に而も役人躰より何歟被尋候

上、人なき屋敷躰ゟ連行、藁を敷何茂爲座、九人之者共其所に罷在見請申候得共、禪寺之様成所に而、中央に額を脚付候臺に懸け、前に香爐を居、朱塗之高欄付御座候。額は地色黒く、文字は金色に御座候。此所ゟ御役人躰馬上にて一人、輿に乘り一人、多勢供人被召連、先拂にドラを打、其外旗・鑓様之物、抜身之太刀を爲持御越被成、ハリセンサンより指添來り候役人、私共九人を引渡之躰にて、ハリセンサンより之役人は引行申候。尤御越之御方々より被尋申候得共、言語相分り不申。右輿に乘り候御方は花色羅紗之装束、袈裟様之物を前後へ被懸居申候。夫より御越之御方々被引取、番之者七・八人も附添申に付、始之手まね仕、食事を乞申所、油与鹽に而菜之様成品を焚賄申候。米は相替申儀無御座。其節蒲團一つ宛九人之者ゟ被下、夜分に相成候に付打臥申候所、外廻りゟ鐵炮を放し、十月朔日夜分より其所に罷在、翌二日より七日迄之間色々人替り、人相或は手之筋改に罷越。八日に相成候所、通辭躰之者罷越、九人之者應答いたし候得共、言語不相分。其内には少々相分り候事共有之、日本之者与相分り申躰に而、夫より賄方上品に相成、白米之飯・菜類、油に而揚候魚鳥獸之類賄申候。翌九日股引一足・綿入一つ・帽子一つ宛九人之者ゟ被下候。十日に通辭同道、最前に參り候式臺構之屋敷ゟ罷越申途中、男女群集を成し、門内ゟ入暫相待申所、ハリセンサンゟ助揚候猟師之内兩人御召出之上、私共九人を通辭同道に而連行申候。其間左右に抜身之鑓、其外三尺五寸計之

鉈様或は三尺五寸計之小弓を持候者、不殘細袴様之物を着、私共通り候所三尺計明堅め居、奥深く參り申所、朱塗之柱・高欄付彫物等有之所に、大將躰紫色之裝束、頭にギボウシ様成物付候帽子を被り、倚子に懸り被居、其餘は房様成物付候帽子を被り、數十人立並び被居申候。私共は頭を下げ居、萬事通辭之者より申上候躰に被見請、鉢頭二折被下候に付頂戴仕候而、其座は退き申候而、此處地名通辭之者ゟ相尋候得者、センサテン与申所に而、大將御名はセンサフウメンフタイロヲイ与申聞候。私共九人は已前之所ゟ罷歸り、十七日迄被留置、通辭之者は十一日に引取申候。然處十七日夕景に成、私共九人之者に番之者三人、其外御役人躰多勢馬上に而町端川原ゟ被送り出、此所より屋形舟に九人之者を乘せ申候。馬上之人々執茂下乘被致、手を拱目禮を被致候に付、私共も目禮仕舟に乘申候。舟は長五間計幅五尺計に而、川は碁盤之目之様に有之躰に而、流れゆるく御座候。船中番人多附居、外に役人躰兩人、是はセンサテンより之送り狀之躰に而、箱に入候物を持參仕、先々役人ゟ被渡申候。十八日朝サンヱヘイ与申所之由、泥川に而幅廣く、舟付所之様子、大船數十艘參り居申候。私共晝頃迄船中に罷在候處、番人九人交代、其日食事も船中に而肴類焚候而爲給與申候。夫より廿一日迄晝夜共舟を引行、其間四方共に山相見え不申、田地許相見え申候、廿一日にナンキン城下之山門構之大屋敷ゟ被引渡、ナンキン御役人躰指添、禪宗之寺ゟ連行、廿一日暮より廿

七日迄罷在申候。寺建物相替り申儀無御座、僧は何茂鼠色木綿之ひだなし衣着居候。九人之者共本堂様成所に罷在、夜分は一疊許之臺に棕櫚之網を張、其上にわらを敷爲臥申候。毎夜寢鎭申候得者、五十人許寢姿見請に參り候、十月廿七日迄右寺に罷在、翌廿八日ナンキン人指添、又候舟に乘り、十一月朔日チサンコウ与申城下へ引移り、此城下中程に大山御座候而、山上に寺有之。朔日より三日迄此寺に留被置候內、山より城下見請候所、北に當り候方は家居夥敷事に而、町端不被見渡、東西南方は町端相見え申候。右山ゟ上り候砌食事乞申所、麓に而茶店躰ゟ連行賄呉申候。都而茶碗に而、机様之物に居爲給申候。三日チサンコウ之舟に乘り被送出、サフ与申所ゟ十一月十三日に着仕、十二月朔日迄被留置候。家作同樣不殘土間にて、九人之者二階ゟ上げ、わらを敷夜分爲臥申候。其內廿日頃ナンキンより被下物之由に而、ふとん一つ・わた入一つ・履一足・手拭一つ相渡り申候。右サフはナンキン出張所之由与申聞候。前段に奉申上候通、所々に而賄御座候得共不殘二食、サフは三食宛賄申候。其內十一月廿八日御屋敷樣之所ゟ被召連、色々賄出申候に付、精進之由申述候所、蓮根砂糖漬・青梅砂糖漬之類數品鉢に入、猩々緋を以机様之物を包候上ゟのせ、九人之者茂イス形に猩々緋に而金之縫有之物を敷爲腰懸、竹の子・菜類油に而あげ、とうふ・しひたけ様之物を菜に而賄出し申候。十二月朔日長崎渡商舟に、唐人百人・私共九人都合百九人乘込、二日晝頃出帆、

十二月十二日薩摩御領分ハシマ与申所迄飄參り候所風合惡敷、廿日程ハシマ沖に而滯船仕、當正月三日長崎ゟ着船仕候。右舟は長二十八間餘・幅六間・深さ五間程に見請申候。

一、難風に逢海上に而唐人に被助候節、猟舟之ともに繋引候艀、其後如何いたし候哉与御尋被成候。右はハリセンサンゟ揚り候砌夫成に仕置候所、艀價之由に而センサテンにおいて銀を打延候品少々打切、舟頭善右衞門ゟ相渡し、尙樣子其後承り候處、彼の地において燒捨申由に御座候。

一、唐國に而食事之儀御尋被成候。前書奉申上候通り、ハリセンサンに而小豆飯爲給、其外白米爲給、菜類はぶた・羊之類多分油に而揚申品指出申候。且草木田地之儀御尋、柳・女松之樣之木は稀に御座候而、木少き所に相見え、田地之儀も此地同樣五・七寸計之埒に植付置候。十月廿日頃稻苅取居申候所も御座候而、稻之樣子敢而相替り申儀無御座候。畑作物麥有之、桑畑所々に御座候。鳥類は鳶・烏同樣、雀は見請不申候。鷄も同樣に御座候得共、トウマル迄飼置申躰に御座候。風俗之儀、御役人躰は多分羅紗之着物、色は花色多分黑色に御座候。男は頭之廻りを剃り、中に少々髮有之、引からげ下げ居申候。女は惣髮に而まげ形仕、三寸計之笄を指、天鵞絨樣成物に而鉢卷仕居、金之縫抔いたし候も御座候。上品成女は足至て小く、悉包居申候。晴雨共沓をはき往來仕候。道は多分石を敷御座候。傘さし候事は相替り申

儀無御座候。馬は髪を不切長く垂れ、毛色は白・黒之斑、又は白・黒・赤三毛も稀に御座候。其外相替申儀無御座候。鞍等も大躰相替無御座候。鐙は四・五寸計之板がねを曲げ、輪之様に仕候物に御座候。輿は上げ輿にて高さ六尺計、乗り申候者は腰を懸居被申候。屋根は花色羅紗に而包み、錫に而ギボウシ形御座候。柱等黒塗、前は簾を掛け、左右後三方は窓にいたし、ビイドロを張有之。屋根之四隅瓔珞を下げ御座候。金銀通用之儀は、銭は此地同様文字四字有之。銀通用之儀、丸形に而中に人形ほり付御座候得共、南方に取遣り仕候儀は見請不申候。日月之形大小相替儀無御座候得共、私共彼地に罷在候時節は冬至之頃に御座候所、日之高さは此地五月頃之高さに見請申候。最初着仕候ハリセンサンは、唐國西南之方与奉存候。月之大小通辭に承り候處、十月一ヶ月大小違居申候。其外は大小相替り不申候。寒さ不强、綿入一つにて居申候。右之外見聞之品無御座候。右奉申上候通、正月三日長崎表江着船仕候處、翌四日長崎御役所江九人之者共被召出、唐國において取組候儀無之哉与被仰渡、尤麁抹之儀無御座段申上。猶又嚴重御糺之上、九人共揚り屋江被入置、朝・昼二飯は魚類之汁に外二菜、とうふ・油上げ或は魚類種々御叮嚀に御賄被仰付候。夕飯は香之物茶漬に而御座候。揚り屋は疊を敷御座候。初之夜は鎖をおろし有之候得共、翌日より鎖も明き居申候。其内私儀大病相滞申候所、療治被仰付、六百帖計服藥仕本復仕候。月に兩度寺參詣御免、御役人差添兩度宛

參詣仕候。髮月代之儀も月に三度宛被仰付、其後綿入一つ・はだこ一枚・手拭一つ宛拜領被仰付候。只今着居申段申上候處、唐國において御國政之儀相尋、私共より爲申聞候儀も無之哉。其外何ぞ書物出候儀も無之哉与御尋候得共、於彼地何角相尋候得共、言語相分り不申に付、都而存不申旨手まね仕、何にも爲申聞候儀無御座候。且書物出候儀も無御座候。長崎御役所に而歸國仕候而も、唐國之儀他人ゟ爲申聞間敷旨口書御取立に付、血判仕上申候段申上候處、相替る宗門爲勸候樣之儀無之哉与御糺被爲成。右は長崎に而も、切支丹宗爲勸候樣之儀無之哉与重々御糺、尤爲勸候儀聊無御座に付、其段申上候所、九人之者共切支丹宗佛像踏候樣被仰渡、御奉行所御前において何も踏參り、船頭善右衞門等外八人之者共も國々より請取人御指向之躰に而、何も無事に而立別れ申候段申上候處、遠路之所御連寄被下候御儀は誠に難有儀に奉存、御國恩之程存付候樣重々被仰渡、冥加至極難有仕合奉存候。依而向後御領國之外ゟ出猥に居住仕間敷旨、長崎表より被仰遣候旨等被仰渡、急度奉畏候。於唐國貰請候品左に奉申上候。

一、一つ　羅紗帽子

一、一枚　木綿表千種小紋、裏白木綿之額蒲團

一、一枚　木綿綿入、表裏共千種色、コハゼ付居申候。

一、一足　股引、但股引は長崎に居申内切解、纔に遣捨申候。
〆四品　此分センサテンに而貰請申候。
一、一足　沓
一、一枚　木綿表千種裏白木綿之額蒲團
一、一枚　木綿表千種裏白木綿綿入
但、此綿入は長崎に而洗濯貰候砌切解、其儘に仕置申候。
一、一筋　手拭
〆四品　此分ナンキン被下物之由に而サフに而貰申候。
外にビイドロ猪口二つ貰申候得共、長崎に居申内破れ申候に付捨參り候。且又紙一梱・菓子九包貰申候得共、是又紙は長崎に而遣切り、菓子も給仕舞申候。
右唐國より貰參り候品々此外無御座候。前段品々追而御詮議之筋可被仰渡、御指留置被爲成候旨被仰渡、奉畏申候。右申上候通相違無御座候、以上。

羽咋郡大念寺新村
吉左衛門
年二十九歳
兩親妻子有之

亥十月十六日

御郡御奉行所

〔年々珍敷事留帳〕
一、先年賣舟難風に合、唐土ゟ着岸致し、唐に而其近國廻り、終に長崎ゟ着き、此内能州之產一人有之。依而從御上御算用者・其親類一人請取に行き、十月中旬連歸り御算用場へ出る。夫より暫く南町旅宿に逗留致す。

十月廿三日。前田重教の側室貞琳院の七回忌法會を寶圓寺に執行す。

〔官私隨筆〕
十月七日
一、當月廿三日貞琳院樣御七回忌御法事一朝、於寶圓寺御執行之節、普請・鳴物不及遠慮、御寺近邊に罷在候者は、御法事御執行之內自分に指扣可申之旨、一統觸之寫來る。

〔公私明忘錄〕
十月廿三日
貞琳院樣御七回忌御法事に付、寶圓寺へ相詰御法事奉行御家老前田圖書殿也。詰前田土佐守殿・津田內藏助殿、御名代前田大炊殿、御廣式物頭淺賀九之丞、御橫目多賀監物也。

十月。石川・河北兩郡米穀不熟なるを以て特に藏宿等に收納を寛大にす

べく命ぜられんことを請ふ。

〔御用留〕

御收納米之儀、前々より被仰渡之通、米拵等入念に仕御藏納仕申儀に御座候所、石川・河北兩御郡當作、夏以來不順之氣候故に御座候哉、一躰虫指にち入に相成、其上二百十日前後度々之風痛に而實入不宜、不熟之立毛薄實青米多御座候に付、米拵尚々精誠を盡候得共、藏宿等省米多、一統右之作振に御座候故、代り米致樣無御座、過分之御收納如何相辨可申哉、行當難儀至極仕候旨、百姓中一統相歎申に付、重々僉議仕候處相違無御座。依之米拵等成限吟味仕相納候樣嚴重申渡置候間、前書之趣藏宿中等ゟ格別に被仰渡御座候樣仕度、百姓中願之趣引取私共御達之申上候、以上。

亥十月　廣瀨又八郎等石川・河北惣連名十五人　判

御郡御奉行所

本文願之趣不容易儀に付難及僉議候。何に茂盡精誠相納候樣可申渡候事。

亥十月　御郡奉行

十一月四日。幕府、前田齊泰夫人入輿の期を告ぐ。

〔官私隨筆〕

十一月十七日

一、當月三日依御奉書、同四日淡路守樣御登城之處、來る廿七日就吉辰溶姬君樣御引移之段被仰出、難有思召候。此段各へ可相達旨甲斐守殿等御前へ被召出被仰聞候旨、同日出相延翌五日發足中飛脚に傳附、甲斐守殿等より申來候由。今夜御用番より被申越。

十一月五日。當年作米の損毛高を申勘上申すべきことを議す。

〔成瀨掃部留記〕

覺

一、四十七萬七千八百四十石	御損毛高
內　三萬五千四百五十石	能美郡
五萬六千八百七十石	石川郡
三萬千二百五十石	河北郡
五萬七千三百三十石	羽咋鹿嶋兩郡
三萬三千五百六十石	珠洲鳳至兩郡
十一萬五千四百三十石	礪波郡

七萬四千七百石　　射　水　郡

七萬三千二百五十石　　新　川　郡

外に五百六十石　　今津弘川海津之内中村町

右御領國御郡に蟲指・風損、且又年季引免等御償米物成、御損毛高に直し、御郡奉行大概相考候趣、前々申勘を以公儀江御書上被成候に付、其趣を以相仕立申候、以上。

亥十一月五日

笠間源太左衛門

山崎頼母

堀孫左衛門

石野雅樂助

長甲斐守等十三人殿

十一月十一日。前田齊泰夫人將に入輿せんとするを以て是の日以後道具到着す。

〔諸事覺書〕

十一月廿二日

一、溶姬君樣御引移に付御道具參り候。

御道具初日　十一月十一日　朝辰刻前夕未之刻
同　二日目　同　十五日　同　斷
同　三日目　同　十八日　同　斷
御内證御道具　同　十九日　朝　夕
女中衆道具　同　十六日　朝　夕
右之通之御由候。此外日限行列建無之、御末廻り御道具等參り候事。
右之日限室賀山城守殿より申來候由、江戸表より申來候寫也。

十一月十一日。江戸詰に赴く老臣の輕少の物品を藩侯の一族に獻ることを許す。

〔諸事覺書〕
十一月十一日
一、江戸表江參府之節方々樣江御內々土產之品指上候儀に付、重而詮議之筋有之、年寄中に而初而參府之人々は、輕く獻上物是迄之通指上候段申上、其通被仰出旨表方より演述有之事。

十一月十六日。前田齊廣夫人、寬姬・從姬及び延之助を子養することを

本年九月廿二日の條參照

告ぐ。

〔諸事覺書〕

十一月十六日

一、寛姫樣・從姫樣・延之助殿、眞龍院樣御子成被成候段被仰出、表方へ演述之事。

十一月廿四日。年功・勤功ある者は節約の際に拘らず特に加恩せんことを議す。

〔御親翰帳之内書拔〕

十一月廿四日

一、御勝手方より左之趣演述に付、何茂示談之上、右演述之通可然与遂僉議、其段御勝手方ゟ申達、御家老方・若年寄ゟも申談候事。

一、諸向より御加恩等之願しらべ方之儀、御時節によつて、當暮も先七月之通相見合候事に表方に而僉議有之候。萬端格別御省略之御時節に候へば、御勝手方に而は猶更之事に候。乍然又打返し申合候處、年功・勤功有之もの、或は當時御省略に付而は格別心懸出情相勤候人々抔、一圓御賞美方無之而は氣屈いたし、却而御省略も行屆兼可申哉。左候而は御省略之詮

も無之儀。江戶表御普請方懸り之人々は、追々御加恩等も被仰付候儀。尤右御用筋は別段之譯に可有之候へ共、數十年勤功等格別無據分、一切進方無之儀も如何に候間、右樣之分は表方幷御家老方等も御しらべ之上、當暮少し御沙汰有之候而も可然哉。御勝手方には身柄之者之類方は無之候得共、足輕等五十ヶ年以上も相勤無據分等少々有之候。右之通重而申合候間、今一篇御僉議可有之哉之事。

十一月廿七日。前田齊泰の夫人本鄕邸に入輿す。

〔官私隨筆〕

十二月七日曉

一、前月廿七日溶姬君樣御引移に付、同日朝御輿爲迎淡路守樣御登城被成候所、四時過御引移被爲在候付、右爲御屆備後守樣御登城、御婚禮御首尾能相濟申候。御輿爲御見送若御年寄堀田攝津守殿御越、其外御先詰に御留守居衆等御越有之候。且御一門樣方御招請之儀は、御省略中に付其儀無之、淡路守樣・備後守樣・出雲守樣・前田大和守殿御出、御着輿之節御住居御玄關前へ御出迎被成、前田信濃守殿幷御出入衆等被仰遣、淡路守樣始於御小書院御料理出、御盃事は御規式中御隙入被爲在候付、數々御土器出、小謠も被仰付、天氣相も宜、御規式萬端無殘所、御都合能相濟申候。公儀より御先詰之御方々へ御料理出、御供之御人々へは御料

理不被差出候。右之趣同廿八日發足早飛脚を以、甲斐守殿等より只今申來候由、十一月六日日附之御用番紙面、今曉七時過頃到來。

〔續德川實紀〕

十一月廿七日、溶姫君御入輿により、松平淡路守御使としてまうのぼり、姫君大奥より御出輿にて、松平加賀守本鄕邸へ御引移りあり。おなじ御祝に三家のかた〲使し、溜詰・譜第の大名・高家・詰衆・奏者番父子・布衣以上まうのぼり宿老に謁す。また淡路守まうのぼり、堀田豐前守に謁す。

〔於江府御親翰帳之內書拔〕

十一月廿八日晚

一、丹羽七郎右衞門申聞候は、御婚禮御首尾克被爲濟、萬端御宜敷御都合に付、委細之御樣子內々申聞置候樣御意に御座候。女中衆風儀抔、外之樣に而は權勢高き樣子も相聞え候處、左樣之躰も無之、都而御兩敬之取扱に候。眞龍院樣御盃の儀も御伺置之處、御當日御盃事御座候樣被仰渡、是等も外之樣に而者御當日御盃事と申は無之、追而不押立御盃事御座候躰之處、此方樣之儀は格別に被仰渡、右御盃事之節も御對座に被成御座、眞龍院樣御初被遊候樣再三仰御座候へ共、達而御辭退被遊候に付、姬君樣より御初被遊候。御間之內に而御上壇之

處抔者、姬君樣眞龍院樣之御手を御取被遊候御樣子に候。惣而女中衆諸事丁寧成事に而、兼而存候与者違申儀。是は萬端御家格に隨ひ可申旨、被仰渡有之故之由。諸家樣共御引移前右被仰渡は有之候得共、此方樣之儀者格別上意之趣被仰渡御座候由に候。且又眞龍院樣御始江左之御品々、公方樣より姬君樣江御拜領之趣に而御進上御座候。公方樣より御直与御座候而者押立申候故、右之御樣子に而、御懇之御儀共に御座候。是等之趣御內々被爲仰聞候趣に御座候旨、七郎右衞門申述候事。

中將樣江、公方樣より御卓・御置物・鶴唐織貳卷。御臺樣より御料紙箱・御硯箱。

眞龍院樣江、公方樣より御鼻紙臺。御臺樣より御たばこ盆。姬君樣より御硯箱。

淡路守樣江、公方樣より御文臺・御硯箱。

右之趣甲斐守等より內狀に而金澤江申遣候事。

〔官私隨筆〕

十二月十六日

一、今度御婚禮被爲濟候以後之御樣子、內々承知仕候處、御間柄も御宜敷御樣子。御婚禮之御當日、姬君樣と眞龍院樣と御盃事は追而表立不申有之御圖り之所、表立、殊に御上段に御對座に而、眞龍院樣より御始め被遊候御圖り之所、違而御辭退に而、姬君樣より御はじめ之

由。御口上も御兩敬之旨也。惣躰女中衆も存之外丁寧に而、外々樣御守殿とは大に違候よし承之。

右之外誠世間之沙汰に候へども、兼而於公儀女中衆へ、萬事此方樣之御格之通被相心得候樣に与嚴敷被仰渡、其上姬君樣御發明にも、中將樣を殊之外御敬ひに付、女中衆も一向麁略には被仕がたき首尾之由。

一、右姬君樣御敬之儀一端を申さば、御引移一兩日は中將樣御手水湯抔女中衆被上候處、三日目よりは姬君樣御自身、御腰物などをも御持被爲在、御手水被上候樣成御事候由。且又御本宅御廣式へも早速被爲入候而、眞龍院樣を御姑之御會釋に被爲成候由。

一、老女中初丁寧に而、萬事此方樣之儀を被承合候由。御普請も殊之外御丁寧之由譽被申候旨也。

一、御殿向御普請は殊之外結構に成候旨、壇・橋抔は段々天鵞絨を敷有之旨也。御住居之御門かゝり、江戶一番と沙汰いたし候旨也。

一、御道具參候節、請取方等人多に罷出候故、手都合至而よく、聊滯なく、御使人衆も感心之由也。

御長持五百指とも申、三百指とも申候。大成は二間に六尺計も有之由。ゆたんは唐織、其外

純子之類、わろき分は厚板之由。

右之外色々沙汰申候也。

別紙は之を略す

十一月廿七日。前田齊泰の成婚を祝する爲、三千石以上及び前田姓の人持に物を献上すべきことを通牒す。

〔御觸拔書〕

今般御婚禮被爲濟候上、爲御祝儀三千石以上幷前田氏之人持より、中將樣江御肴一種充献上之筈に付、今枝内記江別紙寫之通相渡、夫々申談候樣申渡候に付、爲御承知相廻之申候。御寫取、御組等御支配之内三千石以上、幷前田氏之人持、別紙名書人々より、右御肴代金一組御取立被成、諸方御土藏江御上納可被成候。日限之儀は追而可申進候、以上。

十一月廿七日　前田土佐守

奥村丹後守樣

横山求馬樣

前田大炊樣

十一月廿七日。前田齊泰、夫人附の吏の行動を戒む。

〔江戸毎日書立書抜〕

十一月廿七日

一、左之覺書之通以七郎右衞門被仰出、御附ゟ申渡候趣諸頭帳に有之。

御住居附之人々之儀は、日々公邊向御役人等ゟ御用方懸合いたし候事故、親敷無之而は御用辨も不宜儀に候へ共、自然親敷に隨ひ輕々敷相成、御附之人々噂抔申、与風心得違之儀可致出來哉。右樣之次第有之、被對公儀御失敬に相成候而は不輕儀に候。身柄之人々は其所急度料簡も可有之事に候得共、末々に至漫之爲體可有之共難計候。御家風も有之處、不心得之者出來、御外聞にもおよび候而は、誠に御心外之事に思召候。且衣服等之儀、公邊向御役人を見習候樣に相成候而者、不相應之儀に候。尤人々心得も可有之候へ共、萬端身分を取失ひ不申、當時御勝手向も御逼迫之儀に候得ば、何も質朴に而誠實を專らとし、聊御威光を以無禮緩怠之儀有之間敷、御奉公互に相勵、忠勤之儀肝要之事に候。萬一心得違之族も有之候はゞ、同役等申諭爲相改可申候。其上承引なきにおいては、御住居附御用人ゟ可相達候。其中難心得儀も有之候はゞ可及言上候。

右之趣御附之人々末々迄違失無之樣、嚴重可被申渡旨被仰出候。

亥十一月

十一月廿八日。徳川家齊、前田齊泰に皆子餅等を贈る。

〔溫敬公記史料〕

十一月廿八日。大將軍使留守居番本多主税來貽。皆子餅三百八十七臺。鹽鯛二十。鹽鯛二十。海老二十。鰑二十連。昆布二十把。樽五荷。此日使長甲斐守獻皆子餅等。

〔續徳川實紀〕

二十八日、松平加賀守御取代の皆子餅七臺・五種五荷上使しておくらせられ、加賀守また使してたてまつる。

十二月二日。徳川家齊、寒氣見舞として檜重を前田齊泰に贈る。

〔諸事覺書〕

十二月十四日

一、去二日上使御使番間部主殿頭殿を以、爲寒氣御尋御檜重御拜領被成候段、江戸表より申來候由、爲承知月番より廻狀有之候事。

十二月六日。前田齊泰登營して成婚を謝す。

〔官私隨筆〕

十二月十六日

一、今般御婚禮被爲濟候爲御祝儀、當六日朝從公方樣上使松平和泉守殿を以、白銀・御卷物御拜領、內府樣・若君樣よりも酒井若狹守殿を以、御卷物御拜領被遊、御臺樣・御簾中樣より女中衆御使に而御拜受物被遊、姬君樣へも右上使等を以御拜領物有之。眞龍院樣に茂夫々御拜領物被成候。且又同日中將樣御登城、於御黑書院御婚禮之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御盃・御肴御頂戴、御盃御給有之。其上御腰物御拜領。從內府樣も御懇之被爲蒙上意、御手自御熨斗蚫御頂戴。姬君樣事同日初而御登城、夜に入御披被遊候。將又同日朝上使を以御拜領物之節、公方樣より甲斐守殿等へも紗綾三卷拜領被仰付、且中將樣御登城御供甲斐守殿・內膳殿被召連候所、於御黑書院御目見被仰付候。姬君樣御供には將監罷出候所、從公方樣・御臺樣、御內々を以縮緬二卷充拜領被仰付候段、甲斐守殿等より只今中來候由。右に付十八日御弘等之儀共に御用番より以紙面被申越。

〔溫敬公記史料〕

十二月六日溶姬歸寧。大將軍使松平和泉守來賜公。白銀二十枚。縮緬十卷。眞龍太夫人綿三十把。長甲斐守奥村內膳青山將監卷物各三。內大臣賜公紗綾二十卷。太夫人紗綾五卷。內大臣嫡子貽公紗綾十卷。太夫人三卷。

又賜溶姬者。大將軍白銀二十枚。綿三十把。二種一荷。內大臣綿三十把。二種一荷。內大臣嫡子綿二十把。一種。

是日登城謝婚儀成。大將軍屬杯付肴賜刀。內大臣亦手賜物。皆有懇旨。甲斐守內膳拜謁。溶姬亦登城。將監扈從。夜四時歸。

〔見聞袋群斗記〕

十二月六日御婚禮濟之御嘉儀上使御老中松平和泉守殿を以て、白銀二十枚・縐紗十卷を賜る。內府樣より酒井若狹守殿を以て紗綾二十卷、若君樣より御同人を以て同十卷、御臺樣より女使を以て白銀十枚・卷物五・二種一荷、御簾中樣より紗綾十卷を賜る。上使御退出後公御登城、溶姬君樣にも大奧に御登城、御黑書院に於て兩御所樣に御禮被仰上、御懇の上意あり。公より作太刀・白銀百枚・縐紗三十卷・絹五十疋進上せらる。御盃之上、御手自御肴被下、御返盃したまふ。備前國康光代金五十枚之裴刀、大和國包貞代金五十枚小脇指を賜はる。內府樣より御手自熨斗蚫を賜る。次に老臣二人長甲斐守連愛・奧村內膳惇叙拜謁し奉る。

〔續德川實紀〕

十二月六日、溶姬君御引移りの後はじめて大奧へ入らせらる。よてけさ松平和泉守上使として、松平加賀守齊泰に銀二十枚・卷物十、姬君に銀二十枚・綿二十把・二種一荷、眞龍院尼に

綿三十把つかはさる。黑木書院にして、加賀守齊泰銀百枚・卷物二十・絹五十匹を兩御所にたてまつり、祝したてまつる。備前國康光の御刀・大和國包貞の御さしぞへをたまはる。その家の家人長甲斐守・奥村內膳見えたてまつる。

十二月七日。前田齊泰の夫人を姬君と稱すべきことを告ぐ。

〔官私隨筆〕

十二月七日

一、溶姬樣御引移之上は姬君樣と相稱可申候。且又御家中之人々名、姬君樣御名同字御唱有之候はゞ相改可申事。

右之通一統可被申談旨、御橫目へ之覺書寫御用番より到來。

十二月十一日。金澤に於いて諸士に前田齊泰の成婚を告ぐ。

〔諸事覺書〕

十二月八日

前月廿七日御婚禮御首尾能被爲濟候旨等申來候趣、昨夜申進候通に候。右に付當十一日各不時登城、頭分以上ゟ御弘申聞候筈に御座候間、五時過御登城可被成候。且又御弘相濟候上、御廣式へ罷出、勇姬樣始御祝詞申上候筈に御座候。若御當病に而御出難被成候はゞ、以御紙

而御申上可被成候。將又今般內記殿より被指出候飛脚、同日發足之筈に候間、先達而申進候江戶表ゟ之披露狀、同日之日附に而御認、目錄共十日四時迄に越後屋敷へ御指出可被成候。眞龍院樣始淡路守樣・備後守樣へ之御祝詞狀も、惣代飛脚へ傳附之筈に御座候、以上。

十二月七日　　　　　　　　　　前田大炊

土佐守樣
求馬樣
內藏助樣
藏人樣
織江樣
圖書樣
修理樣
掃部樣
內記樣

追而獻上物代金は、當十四日・十六日之內、朝四時より九時迄之內、諸方御土藏へ御上納可被成候。御組等之分も同樣御心得可被成候、以上。

〔官私隨筆〕

十二月十一日

一、今日御弘有之に付、服紗小袖・上下に而五時過登城。

但、文化五年正月御婚禮之御弘有之節は、のしめに候へども年頭故也。今日は服紗。

一、登城之人々列居之上、各罷出、御意之趣御用番演述被申談、退出可有之旨土州被申聞。退出と之儀、今日いかゞと土州被申候處、御祝詞狀に目出度と申、出之字有之候へば苦かるまじき由御用番被申、尤に付無構如右被申聞。依而記す。

一、退出より御廣式へ罷出、以高田彌左衛門御祝詞申上候。夫より御用番へ爲恐悅罷出。

但口上書持參せず。

十二月十六日。幕府、前田齊泰の老臣一人を諸大夫に任ずべきことを告ぐ。

〔諸事覺書〕

十二月廿五日

一、左之通月番より廻狀有之事。

當十六日御登城可被成旨御老中方御連名之依御奉書、御登城被成候處、兼而御願置被成候通、御家來之内一人諸大夫被仰付候旨、於御白書院御老中方御列座、青山下野守殿被仰述、先以

御願之通被仰出難有被思召候。右之趣頭分以上に可申聞旨御意に而、則申聞候。將又此表前々之通以御使者被仰出候得共、當時御省略中に而甲斐守等より申上候に被任、右使者共表在合之者を以被仰渡候筈候。御書幷御口上書共十八日不時立町飛脚早飛脚歩を以藤田平兵衛等より、勝尾半左衛門迄相達候筈御座候。於此表頭分以上へ御弘之儀は前々之振に心得候樣申來、則甲斐守等より之來狀共爲御承知相廻之申候、以上。

十二月廿五日　　　　大　炊

土佐守等連名

十二月廿一日。明年以降諸向の經費を節約すべきことを告ぐ。

〔御觸抜書〕

定番頭・御馬廻頭・御小將頭江

御勝手向御逼迫至極之內、打續不時御物入莫大之儀に而、被成方も無之候得共、漸々御借入等を以無理に御取續被爲在候處、次第に御借財相嵩、過分至極之儀に而、最早御手返如何共被成方無之に付、御家中半知に茂不被仰付而は難相成候へ共、左候而は御家中を初末々迄一統難澁之儀に付、種々六ヶ敷御操合を以、其御沙汰に不被及候。如斯御時節に付、御借銀御返濟方近年無據遲滯に相成候向々茂有之候。是等茂御出情御用立來候者共故、無味之御取扱

難被成、追々御返濟之道可爲致相續儀に候。就而は近年重々御省略被仰付候上之儀には候得共、右半知等可被仰付程之御時節を奉恐察、諸役人は申に不及、下々迄右等之御沙汰無之御趣意を厚存込、萬端押こらへ、御省略相整候樣心懸可申候。加程之御時節に候間、人々暮方之儀茂右に准じ、精誠致省略、御難題之筋不願出儀は勿論、何分御取續之御一助に相成候程に茂、急度心懸可申事に候。

一、當年諸向御入用半減、定式被下方一切御指止被成候段等、當春一統に申渡置候處、前段之趣に而、此末御運方彌增六ヶ敷に付而は、諸向共當年半高に而御入用相辨候心組を以、來年より茂成限御入用相減候樣、於向々打返精誠遂詮議、其趣御勝手方拙者共席に可申聞候。且又御賞美之外、定式被下方一切御指止之儀茂、當分今年之通に而、役料同樣等に而相當候分は前々之通被下、無左每歲被下來候与申迄之分は、御指止又は御減少等、其品に寄御僉議可有之事。

右之通被得其意、組・支配之面々に可被申渡候。組等之內裁許有之人々者、其支配に茂相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

十二月廿一日　　　　　　　　　　　　　　前　田　大　炊

十二月廿三日。前田齊泰夫人に家臣が御機嫌伺をなすべき場合を定む。

〔諸事覺書〕

十二月廿三日

姫君樣ゟ加賀守家來共より伺御機嫌等勤方伺

在府年寄

家老

若年寄

一、年頭・歳末御祝詞。

一、著寒伺御機嫌。

一、加賀守着府之節幷參勤御暇御禮申上候節、暨國許より發途仕候節恐悅。

一、初雪若御近火・强雷・强地震等之節伺御機嫌。

一、自分御當地ゟ參着、幷國許ゟ罷歸候節伺御機嫌。

右之外臨時恐悅等申上候儀も可有御座候。

在金澤年寄

家老

若年寄

一、年頭御祝詞。
一、暑寒伺御機嫌。
一、加賀守參勤御禮申上候節、幷國許江之御暇被仰出、右御禮申上候節恐悦。
右之節呈書、此外臨時呈書を以恐悦等申上候儀も可有御座候。

在府　側　用　人

一、年頭・五節句・八朔・歲末御祝詞。
一、暑寒伺御機嫌。
一、加賀守着府之節、曁參府に付上使之節、幷參勤御暇御禮申上候節之恐悅。
一、初雪若御近火・強雷・强地震等之節伺御機嫌。
右之外臨時恐悅等申上候儀も可有御座候。

在金澤　側　用　人

一、年頭御祝詞。
一、暑寒伺御機嫌。
一、加賀守着城幷國許發途之節恐悅。

一、當役儀申付候節。
一、參勤供申付候節。
右之節は呈書、此外臨時以呈書恐悦等申上候儀も可有御座候。
在府 御附用人
一、年頭・五節句・八朔・歲末御祝詞。
一、著寒伺御機嫌。
一、年越每恐悅。
一、上使を以御拜受物等被爲在候節、且加賀守に上使を以拜領物等仕候節。
一、加賀守參府幷發途、曁參勤御暇御禮申上候節恐悅。
一、初雪若御近火・强雷・强地震等之節伺御機嫌。
一、加賀守國許發途之便御座候上恐悅。
右之外臨時恐悅等申上候儀も可有御座候。
在金澤 御附用人
一、年頭御祝詞。
一、著寒伺御機嫌。

一、加賀守參勤幷着城之節恐悅。
一、上使を以御拜受物被爲在候節、曁加賀守に上使を以拜領物等仕候節恐悅。
一、當役儀申付候節。
一、交代之儀申渡有之節。
右之節に呈書、此外臨時恐悅等申上候儀も可有御座候。

在府廣式頭

一、年頭・五節句・八朔・歲末御祝詞。
一、著寒伺御機嫌。
一、上使を以御拜受物被爲在候節恐悅。
一、初雪若御近火・强雷・强地震等之節伺御機嫌。
右之外臨時恐悅申上候儀も可有御座候。

在府御附御用達
御住居番
御附醫者

一、年頭・五節句・八朔・歲末御祝詞。

一、暑寒伺御機嫌。
一、初雪并御近火・强雷・强地震等之節伺御機嫌。
右之外臨時恐悦等申上候儀も可有御座候。

在金澤　御附御用達

一、年頭御祝詞。
一、暑寒伺御機嫌。
右之節に呈書、右之外臨時以呈書恐悦等申上候儀も可有御座候。
右之通相心得可申哉、猶外紙書面へ委細之趣認相伺可申候、以上。

十　月

年寄衆・御家老衆恐悦等呈書、御用人衆宛所に可被差出候。御用部屋以下は御附御用人宛所に而差出候様、鈴木一學殿被申聞候事。

十二月廿六日。金澤に於いて幕府が諸大夫一人の叙任を許したることを告ぐ。

〔官私隨筆〕

十二月廿五日

一、當十六日諸大夫御願之通被仰出候段、御用番紙面到來。夫に付江戸表より御使者可被成下處、御省略之御時節に付、此表に罷在候御使番玉川二源太儀、江戸表より被遣之御使者之振を以、明廿六日五半時過於二御丸御使者相勤候筈に付、自分へも御意幷御書も有之御樣子候間、布上下着用可致登城旨、若當病等に而難罷出候はゞ名代可申談旨之紙面も到來。

十二月廿六日

一、五半時過上下に而登城。

一、土州・藏人不參。

一、各御小書院緣側に列座之上、御使者玉川二源太へぎに御書とも載候而罷越、御下段向候而右之方御上段下二疊目に着座。其樣子見計、丹後守より求馬へ致相圖、求馬罷出御意拜聽、御書請取退去、直に席へ被罷越。其後大炊幷御家老中同斷、其次丹後守罷出候所、御意之趣左之通演述、平伏いたし御書請取退座。其次勢州被罷出、同斷也。

自分は奧村丹後守

一、寄置候儀等御横目へ被申談候躰也。各緣頰へ罷越候上、何之相圖もなく其儘御使者御小書院へ被入。

一、御書箱　一

奧村丹後守

御意被成候者、去十五日依御奉書、翌十六日御登城被遊候所、御願之通御家來之内一人諸大

夫被仰付候旨、御老中方御列座、青山下野守殿被仰述候。早速被仰出、別而忝被思召候。則求馬諸大夫被仰付、名山城守と御改被成候。此段爲可被仰聞、御使者被成下候。將又爲御禮山城守出府之儀、來二月上旬可致發足旨、山城守へ被仰遣候。江戸表御靜謐、眞龍院樣初益御機嫌能被成御座候。御自分無異儀被在候。一段之儀思召候。

前々は從江戸表被成下御使者候へども、當時御省略之御時節に付、此表に罷在候者へ御使者被仰付候。此段も被仰出候。

十二月廿六日　　　　　　　　　　　　　　御使　玉川二源太

一、右之趣各於奥之間御書拜戴、勢州と自分は奥書院横最前御城代方に成居候所、當時は御勝手方御留守故明居候也。歟、彼所に而拜戴之。

昨十五日御老中方連名之奉書到來付而、今日四時登城候處、於白書院御老中列座、願之通家來諸大夫被仰付候旨、御用番青山下野守殿被仰渡、寔以難有仕合候。依之横山求馬儀山城守与相改申度旨、下野守殿へ申達候處、勝手次第之由被仰聞候。右之趣爲可申聞如斯候。委曲中含使者口上候、謹言。

十二月十六日　　　　　　　　　　　　　　中將御名　御判

奥村丹後守殿

一、御請之袖扣出來之上、各前段之所へ罷越、最前之順之通罷出、御請申上候。袖扣相渡す。

但、要文荒々申述候上達之、畢而御使者退去。各最前之所に罷在。

一、今日左馬助・文兵衛も登城有之、御書拜戴被申談候躰也。若年寄へも御用番より演述あり。

一、退出より直に御用番へ爲御祝詞相勤。但御留守年之例如此之由也。

十二月廿八日。前田齊廣の女從姫、鷹司政通の嫡子輔凞と婚姻を内約す。

〔官私隨筆〕

二月五日

一、從姫樣御縁組鷹司右大將樣と御内約之儀、關白樣より御使者鈴木右馬大允を以被仰進、從此方も京都詰人を以被成御承知被任仰候御答被仰遣、舊臘廿八日御使相勤候段、前月廿四日出翌廿五日發足、甲斐守殿等より申來候由、御用番より被申越。

二月五日は文政十一年

十二月廿八日。年寄等の執筆及び坊主に贈與する銀子減少の件に就いて議す。

〔官私隨筆〕

十二月廿八日

一、今年御上幷同席中・自分共に格別之御省略に候に付、例年執筆共へ遣り候所半減に仕候筈之由。依而存寄も無之哉と先達而求馬殿申聞に付、存寄無之旨答置、頃日家來より右半減にいたし候書立爲見候付、文化三年減少之例相しらべさせ候處、或は四ヶ一・三之一程充減少に成居候。半減之例は無覺束、其上此度執筆共右之沙汰をも承候躰に而、何歟つぶやき申様子も內々承候付、去廿五日求馬殿へ以紙面、右文化之例之通にも成まじき哉之旨申遣候處、彼方に而は廿二日に夫々差遣被申候處、坊主共より奥之間執筆を以願之趣有之。依而大炊殿示談之上、坊主之儀は例年之通に遣可被申哉と被存由被申越。依而執筆之儀も願無之以前增而被遣候方可宜哉と重而申遣候處、とかく只今に至何ともこまり候之由被申越。依而大炊殿方承合候處、是も坊主之儀は同事之様に家來より申越候。執筆之儀は迚も合點仕間敷候へども、求馬殿計減少、其餘いづれも增候而遣候も如何と存、自分方よりも半減にいたし遣候處、今日御用番等被申聞候は、昨日鈴木五兵衛・堀學之丞より段々申聞、兩人事は御知行も結構に被下置候付不苦候へども、中之間之者共等微祿者、いづれも心當に仕居候儀候條、何卒例之通贈り候樣仕度旨。其上寛政元年右贈り物止め候事に僉議之節も伺に相成、其節も願に依而例之通贈り來り候。將又傳承には、松雲院樣御代に候哉、執筆之儀は勤向はげしき事候條、

役料をも可被仰付哉と之御沙汰も有之候處、同席より申上、自分に迄り可申と之趣に而相始り候事之様に承傳候由など申聞候旨。依而如何仕可然哉、勢州抔も被承、迄り濟候分は其儘にいたし置、其餘未濟分增候而遣可然哉と被申旨に候へども、只今に而は當分濟居可申、左候へば一兩軒より增而遣候とも合點仕間敷候條、所詮いづれよりも相增、文化之節之通に相成可然と示談治定也。但土州方は執筆へ之遣方同席よりは少く、坊主と同樣に成候由にて、執筆へも例年之通被遣候由。

十二月廿九日。前田齊泰夫人より拜領の物を老臣等に頒つ。

〔諸事覺書〕

十二月廿九日

一、溶姫君樣より各江拜領物有之候付、江戸表より到來に付、今日越後屋敷江請取に使者可差出候。其節御禮之披露狀、鈴木一學殿等宛所に而指出可申候。且又中將樣江も右御禮申上候筈候間、是又一集に差出候樣、昨日月番より廻狀有之候付、今日四時過越後屋鋪江使者指出、御禮紙面も差出候處、拜領物御目錄等月番より以執筆被相渡。

拜領物　紗綾三卷紅白臺居

御目錄包御熨斗

年寄中・御家老中

但、臺之儀はかさ高成品に而、江戸表に而相計留置候旨、御江戸表より申來。

同　　紗綾二卷紅白

同　　　　若年寄

十二月。江戸に於ける諸士の扶持方中一部を減ず。

〔坂井留記〕

組頭江

御勝手向御逼迫至極に付、格別御省略之儀被仰出之趣等、先達而追々申渡候通に候。依之今般此表詰人御扶持方代銀、當分左之通被仰付候。

一、上下三人扶持以上之人々、御扶持方直段、只今迄一石百六十目宛に候處、十匁相減百五十目に相極候事。

但、來年二月朔日より右直段を以相渡申筈に候。

一、上下二人扶持以下之者は、只今迄之代銀を以相渡申筈に候事。

右之通被仰付候而者詰人可爲難澁、御心外之儀に候得共、御勝手向御急迫之上、當年又々御借財莫大相增、來年より御返辨方等不容易儀、其上追々地盤御入用方茂相增候に付、不被得

止事如斯被仰付候條、此處奉恐察、幾重に茂致勘辨取續、御奉公不指支樣相心得可申候。
右之趣被得其意、諸頭中に申談、一統不相洩樣可被申渡候事。

亥十二月

組頭ゟ

御扶持方代御減少之儀、以別紙申渡候。就夫餞別幷土產物等可爲無用段、前々より被仰出申渡候得ども、內々に而者全不相止族も有之哉に相聞え候。御勝手向御急迫に付、乍御心外御扶持方代をも減少被仰付候儀に候間、右樣之雜費を相省、御奉公取續申儀肝要に候。此上自然心得違有之候者、餞別幷土產物相送候者は勿論、申請候者も可爲無念候條、急度相守可申候事。

右之趣被得其意、諸頭中被申談、一統不相洩樣入念可被申渡候事。

亥十二月

文政十一年

正月四日。射初・鐵炮打初・乘馬初の儀を行ふ。

〔諸事覺書〕

正月四日

一、今日御射初に付各五半時過より登城。

一、四半時柳之御間に而御射初吉田權平等幷御射手共廿七人、年寄中等列座同刻過相濟。

一、年寄中等松之間二之間に列座御熨斗頂戴。但、卽席に而各御臺所奉行へ御禮申述事。

一、三御丸鐵炮打初、左馬助出座。

一、堂形御馬場に而御馬乘初例之通。

一、式日に付四半時過各越後屋敷ゟ出席。

一、御射初等相勤候人々例之通御目錄被下、月番申渡。

正月十八日。江戸御留守詰に赴く平士以上に無息人を伴ふことを出願せしむ。

〔官私隨筆〕

正月十八日

一、無息人江戸表へ相詰、御雇御用被仰付候へば、御大小將詰高御人配りに拘り、御益之筋も有之候條、當御留守詰罷越候平士以上無息人召連度者は、早速願紙面指出可申旨、且又以來御供人御留守詰之人々も右之通相心得可申旨、定番頭へ之覺書寫御用番より到來。

正月十九日。具足の鏡餅直を行ふ。

〔諸事覺書〕

正月十九日

一、今日御鏡餅御祝候に付、各ゟ茂被下候間、服相改候樣月番ょり演述有之。各熨斗目・上下着用、松之間二之間に列座、御餅頂戴、即席に御臺所奉行相招御禮申述候事。相濟各服相改。

正月廿五日。會津侯松平容敬、前田齊廣の女厚姫に結納を贈る。

〔諸事覺書〕

二月五日

一、前月廿五日肥後守樣より厚姫樣ゟ御結納御祝儀御使者、御家老内藤介右衛門を以被進、御規式御首尾能相濟候旨等、同日發足町飛脚、御附內膳等より申來候旨、月番より廻狀有之。

〔若年寄方諸狀留〕

前月廿五日肥後守樣より厚姫樣ゟ御結納御祝儀御使者御家老內藤介右衛門を以被進、御規式相濟、御使者ゟ御吸物・御酒等被下之、御目見被仰付、御盃・御腰物被下候。御省略に付御客者無御座、御取持衆等迄御出。御使者披候以後、肥後守樣ゟ爲御挨拶將監被遣。天氣相も宜

敷、萬端御首尾能相濟候旨。同日發足町飛脚に傳附、內膳殿等より只今申來候。先以恐悅御同意御座候、以上。

二月五日　　　　前田大炊

正月廿八日。江戸に往來の際諸士の携帶すべき武具を減少すべきことを告ぐ。

〔坂井留記〕

組頭ゐ

御勝手向次第に御逼迫相增、格外御省略茂被仰付候御時節に付、御省略中御先三品之員數も減少可被仰付候。依之御家中御供之人々も、武器別紙之通爲持可申候。常旅行之儀者右に准、尙更輕く可相心得候。

一、右之通に候處、當春者御婚禮後初而之御歸國之儀、且御供之人々茂爲持來候武器、於此表相改候而は面倒之筋も可有之に付、旁以是迄之通被成置、來春御參勤より嚴重御改被成候。交代罷歸候人々も、爲持來候武器不相改儀勝手次第に候。尤從者等成限相減可申候。金澤より出府之人々者、此度御改之通可相心得候。

右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、諸頭中ゐ申談、組・支配之人々ゐ茂可被申渡候。組

等之內裁許有之人々者、其支配ゟ茂申聞候樣可被申談候事。

子　正　月

御省略中當分左之通

一、御家老役鑓三本・矢籠簑組・具足櫃迄之事。

一、人持鑓三本・簑組・具足櫃まで之事。

但、鑓二本爲持候儀は勝手次第に候。

一、組頭以下之儀御供之御定者、組頭鑓三筋・弓爲持候筈に候得共、其內鑓一筋・弓相減荷具足櫃爲持可申事。

一、物頭鑓二筋・弓爲持候筈に候得共、其內鑓一筋・弓相減、荷具足櫃爲持可申事。

一、番頭者鑓二筋爲持候筈に候得共、一筋相減、荷具足櫃爲持可申事。

一、御横目者身代之多少に隨ひ、鑓二筋或は一筋爲持候筈に候得共、近年被仰出候通、都而御横目以下一筋・荷具足櫃爲持可申事。

一、平士之具足櫃は荷物認可致事。

一、御供人頭分を始、御表小將・御大小將・新番・御步等、衣類・菅笠等迄も在合を用可申候。見苦敷儀者御貪着無御座候事。

一、年寄中も行粧格別致減少候事。

右之通可相心得候。其外從者等茂成限致減少可然事。

別紙寫兩通之通、於江戸表一統ゟ被仰渡候に付、相越之候條、被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配ゟ茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

正月廿八日　横山山城守

二月十二日。德川家齊來月上旬を以て前田齊泰夫人を訪はんとするの內意を告ぐ。

〔諸事留牒〕

二月廿三日

一、左之通於江戸表當十三日以藤田平兵衞被仰出候段申來る。

昨十二日大久保加賀守儀ゟ御呼立、來月上旬姬君樣御住居御通拔可被遊との御沙汰之旨、御書取を以被仰渡忝思召候。此段被仰聞候。夫々御用意方之儀不指支樣可被申渡候旨被仰出候。

二月十三日

二月十三日。前田齊廣の女厚姫會津侯松平容敬に入輿す。

〔諸事留牒〕

二月五日

一、厚姫樣御婚禮御日限、重而正月廿八日初日御道具、二月十三日御入輿、同十九日皆子餅御聟入之段、以山口清太夫被仰出候段申來。

〔見聞袋群斗記〕

二月十三日御妹厚姫樣、松平肥後守容敬樣ゐ御引移り御婚禮。同日和田倉御前樣と相唱候樣被仰出る。

〔官私隨筆〕

二月廿二日

一、厚姫樣御儀、當月十三日御引移、御婚禮御首尾能相濟候段申來候由、御祝詞之儀等追而可申越旨、且又和田倉御前樣と稱可申旨被仰出候由申來候旨、御用番より被申越。

二月十五日。德川家齊等厚姫の婚嫁を祝して前田齊泰に物を贈る。

〔諸事覺書〕

三月廿三日

一、和田倉御前樣御婚禮相濟候に付、當十五日從公方樣・御臺樣、御廣式番々頭石黑平次郎殿を以、從公方樣三種二荷、從御臺樣二種一荷。從内府樣・御簾中樣、御廣式番々頭佐野織部殿を以、從内府樣二種一荷、從御簾中樣一種一荷御拜領被成候。和田倉御前樣へも、從公方樣二種一荷、從御臺樣一種一荷、御廣式番々頭右以同人御拜領被成候段、同日出に申來候事。

二月廿二日。川除普請等の藩費を減ずるを以て自普請を奬勵す。

〔郡方御用留〕

御勝手向御運方必至与御指支に付、去年定檢地方御入用半減被仰渡候。當年も右同樣之趣に付、川除御普請方無據箇所迄御手入等出來之筈に候條、成限自普請を以出情いたし相辨可申候。

右之趣夫々相心得候樣一統不相洩樣可被申渡候、以上。

二月廿二日　　　御算用場

御郡奉行中

二月廿八日。本鄕邸なる馬場及び門の名稱を改む。

〔藤懸賴善手記〕

二月廿八日　江戸

一、御庭御馬場　　坂下御馬場
一、右御馬場先御門　　坂下御門
一、御物見下二枚開　　御物見下御門
右之通以後相唱候樣申談有之。

三月四日。江州紵商賣人が能登等の紵買入に就いて冥加銀を增加上納せんとするを拒絕す。

文政十年閏六月の條參照

〔能州紵一件〕

江州紵商賣人共、能・越等紵買入方之儀に付、當年より冥加銀三十匁宛差上候分等、紵屋惣代近江神崎郡七里村猪平手代伊三郎等書付、當町手判問屋小兵衞與書に而差出候に付、添紙面を以指越、致承知候。右紵方之儀者、先達而詮議之趣有之候得共、役銀相增候而は買先に相障り候趣江州之者共申聞候段、能州紵問屋共より申出、其外指障候儀有之候に付、詮議方先日見合置、且紵賣買方者是迄在來之通致置候。然處只今に至り無謂金子差上度旨願方者不都合之儀難承屆、依而別紙書付致返進候條、此段可有御申渡候、以上。

子三月四日　　御算用場

有賀甚六郎殿

三月九日。本年五月以降に於ける異國船手當を馬廻三番組・四番組に命ず。

〔於江府御親翰帳之内書拔〕

異國船御手當之儀に付、舊臘廿九日出大炊殿御紙面等之趣致承知、拙者共替存寄無之に付、則入御覽相伺置候處、今日御親翰之御付札を以被仰出候付、右御付札物差進候條、御拜戴之上、岡田太郎右衛門等代り合之儀御申渡可被成候、以上。

三月九日　　將監判
　　　　　　內膳判
　　　　　　山城守判

甲斐守等十人樣

右御紙面等之趣致承知、御親翰何も拜戴仕、岡田太郎右衛門始去廿一日申渡候處、奉畏旨申聞候。御親翰之御札物返上之仕候、以上。

三月廿四日　　甲斐守判

山城守等三人樣

子正月十二日將監を以上之候處、三月九日御親翰之御付札被遊、七郎右衛門を以被返下、

異國船御手當方永續之儀に付、御馬廻頭組共十二番迄繰々被仰渡候様仕度旨、先達而御馬廻頭申聞候趣に付、二ヶ年目代り合候様被仰出、其段申渡置候處、當時一番組・二番組之儀者、去年五月被仰渡來四月に而二ヶ年に相成候間、五月より三番組・四番組ゟ被仰渡候様に与、則順先左之通書出、組之人々暨頭々手前にもしらべ方有之事故、前廉被申渡候様仕度、尤右之通に付是以後順先之儀も、前廉に可書出旨、別紙之通申聞候。

三番組　岡田太郎右衞門

四番組　志村平之丞

右兩人來五月より代り合之儀可被仰渡候哉。

御付札、太郎右衞門等代り合之儀可被申渡候。

御付札、此條以下七品之儀者、追而可申出候。

一、異國船乘寄候躰注進次第、御先手物頭・御横目・御使番を始、大筒役等何も御馬廻頭手ゟ被差添候付、出張之節は尤同陣にて泊宿拂方共外宿札等之儀、御馬廻頭ゟ受取候御算用者に爲取捌可申趣、先達而申聞、伺之上共通被仰渡置候。然れ共惣人數過分之事故、注進次第何も急に押出候儀都合能可相整哉。猶更遂僉議申聞候様、堀孫左衞門・神田吉左衞門ゟ申渡候處、とても組之人々等与一時に出立之儀者及遅々可申儀。先打拂方專一之事に候間、出立二段に

十二月は文政十年

相成候はゞ可然旨、以紙面申聞候故、御先手物頭并御使番存寄も相尋候處、人々存寄之趣書出候故、猶更孫左衛門等ゟ相渡、僉議之趣申聞候様申渡候處、重而右兩人僉議之趣以紙面申聞、且又御馬廻頭一統僉議之趣は、いづれ當時之處に而は火急之發足は難相整、公儀より被仰渡候趣も御座候間、今一篇事輕に急發足相成候事に御僉議有御座度、兼而手配り等相定り居不申而は、臨時混雜仕可申候間、御手當御内意被仰渡候而々之儀は、相互に何も打合、遂僉議相達申儀に相成、其上に而差圖有之候はゞ可然与心付候旨、以覺書申聞候。此儀も尤に相聞候間、先達而御手當以後被仰渡置候向々ゟ、御馬廻頭を始、何も打合遂僉議候様可申渡候哉。臨時に可致出立惣人數、大凡之處別紙之通に御座候間、出立方手配り能相成り居不申而は、指支可申候。

一、御馬廻二組之内御使役兩人、御横目兼帶可被仰付哉之旨、孫左衛門等先達而申聞、伺之上、臨時に可被仰付旨被仰出置候。右役儀之誓約御前書、兼而不被仰付置而は臨時に差支可申旨、孫左衛門等以紙面申聞候間、右御前書可被仰付置候哉。右之趣に付、孫左衛門等より指出候紙面等、別紙之品差進候條、夫々御披見之上、各替思召も無之候はゞ、御序を以御伺御申越可被成候、以上。

十二月廿九日　　大　炊　判

甲斐守等三人樣

三月十二日。前田齊廣の女從姬、鷹司政通の子輔凞に婚することを許さる。

〔諸事覺書〕

二月廿六日

一、從姬樣御緣組御願書附、當月十九日御先手細井出雲守殿を以御用番大久保加賀守殿に御指出被成候段、內膳等より申來候趣月番より廻狀有之候事。

〔官私隨筆〕

三月廿二日

一、從姬樣御儀、鷹司關白樣御嫡右大將樣と御緣組御願書付御差出被成候所、御老中方依御奉書、當十二日御登城被成候處、於御白書院御緣類御老中方御列座、御願之通被仰出候由、御用番松平和泉守殿御演述、難有御思召旨、山城守殿等御前へ被召出被仰聞候段申來候由。是又御用番より以紙面被申越。右に付當廿五日、出仕以上へ御弘之趣申聞候由等も被申越候。

三月十二日。正金銀子の取扱に就いて告ぐ。

〔郡方御用留〕

當時銀手形多致通用候に付、出津米幷御國產之品等他國ゟ賣捌代金銀、船方等商人ども持歸候而も、正金銀隱し易き形故、自然於他國相運せ候樣之儀も可有之哉。左候而者第一御領內手薄に相成、隨而身元宜者程共々可及難澁基に候條、何分御國方ゟ正金銀相廻り候樣厚心懸可申、尤金銀他國ゟ出方之儀無據品たりとも成限相省可申候。

一、出津等賣捌代銀持歸候上、暫時相運せ置、重而他國より買入物等致候節、手形に而は指支候に付、無據步合等見捨手前に貯置、不辨利之族有之候者は、銀仲共ゟ指出、銀仲より御算用場に願出候得ば、右正銀等預り置、代り銀手形幷預り紙面可渡置候之間、入用之節何時に而も申出次第、正銀与引替可相渡候。尤此儀不相望、下に而爲致融通候儀者勝手次第候。

一、商人にも不限、當時正銀爲運置、急に入用之節辨兼候者も、前條之通銀仲に附候歟、又者共向ゟ願立候とも取扱可爲同樣候。

右之趣者、當時銀手形通用に付、金銀手廻し致候者共相泥候儀も有之、正銀致所持ながら、取扱面倒に心得爲相運不申而者、御領國彌增不融通に相成、畢竟上下にも其弊不少儀に候條、幾重にも御國方手厚相成候儀、一統心掛候樣重念可被申諭候事。

付札、御郡奉行ゟ

當時銀手形多致通用候に付、正金銀隱し易、且取扱方不辨利之族も有之之躰に付、今般別紙之通に相成候はゞ取締方等可然旨、御算用場奉行・町奉行江も詮議之上相渡し候條、可被得其意候事。

子　三　月

別紙兩通之通被仰渡候に付、相渡候條得其意、夫々申渡、分役之人々江は其許中より可有演述候、以上。

子三月十二日　　內藤十兵衛
稻葉助五郎

石川・河北兩御郡
惣年寄中・年寄並中

三月十三日。德川家齊本鄕邸に臨み前田齊泰夫人を訪ふ。

〔官私隨筆〕

三月廿二日

一、公方樣去十三日五半時之御供揃にて、吹上御庭へ御成、同所四時之御供揃に而御住居御通拔之段、前日御目附衆より申來候處、則十三日四半時前御住居表御門より被爲成、御內々

御前は前田斉泰

御献上物被差上、御庭へも御出被爲在候付、御亭等に而御差上之品も御座候。於御奥御前御目見被仰上、御懇之被爲蒙上意、御肴御拜領、其上御手自御拜領物も被遊、萬端御首尾能被爲濟、益御機嫌能夜六半時過還御之段、去十四日出町飛脚早飛脚歩に傳附申來候由、御用番より以紙面被申越候。江戸表へ今日之日附に而御祝詞申上候。眞龍院樣等へも同事也。此表御廣式へは不申上候。

〔見聞袋群斗記〕

三月十三日將軍家御通抜之御沙汰にて、御住居へ被爲成る。辰の半刻御供揃にて吹上御庭に成らせられ、夫より渡御之筈之處、雨天ゆゑ吹上御止にて直に渡御ありて、夜戌之上刻還御也。公へ卓・香爐を賜ふ。眞龍院樣・鈴姫樣にも賜物あり。御臺樣よりも御同樣なり。又公を初め品々献上物あれ共、數多なれば不記載。

〔御通抜御用留〕

文政十一年三月公方樣御通抜に付御餝方御用被仰付、於御居間書院坪内金左衞門示合、御國より御取寄幷表御納戸御道具を以取しらべ、別紙伺之通被仰出、夫々御餝付いたし候事。

御通抜に付御餝付

梅の御間

御床三幅一對　中壽老人 左右龍　雪舟筆

立花　二瓶　松一色　花瓶唐銅 花臺二「御國塗」

御棚

御香爐　青磁八卦「地紋」一御盆菱形

御食籠　堆朱梅形 紅白長生殿　三十七枚入

御入側

銀網蓋御香爐　一對臺二

以上

右御成之節、先梅の御間ゟ御通、御裝束御改被遊、御奥ゟ入御之由。仍而御表よりは右梅之御間迄御飾附有之候事に、御附御用人衆等示談有之候由也。

御馬見所

御床二幅一對　梅　友雪筆

御置物鶴　銀　御臺

御棚

御香爐　唐銅柴負牛

御硯箱　平日梨地 春山水蒔絵　敷紙青白
御棚下引込御疊
盃石　春山石 臺堆墨一クリ形一
御次
銀網蓋御香爐　一對臺二
御馬見所東の方
御床一幅　山水人物　周文筆
冠棚
上に香爐青磁
下に香合堆朱
同　羽箒白鷴
御次
生花　五瓶　花器砂物鉢等取合 花臺
香爐　銀火屋網　一對紅毛氈
御臺子　一飾

新御亭

御床二幅一對　花鳥　呂紀筆

御机　螺鈿折本帝鑑圖說二册　元亨利貞四册の內、利貞は御袋棚に入置

御棚

御料紙硯箱　黑塗銀蒔繪梅に鷹御模樣　御臺樣より拜領御品

御食籠　堆朱小落雁入

御香爐　赤繪人形模樣穗屋

御盃　紅白綠葉

御緣

御釣燈籠　鐵鎖

御次

銀網蓋御香爐　一對御臺二

御小間

御床御掛物一幅　人物に驢馬　牧溪筆 居敬讚

御次

御臺子　一飾

高山下御亭

御床御掛物一幅　鶉　李安忠筆

御額　廣畔國　鷹司准后樣御筆

御次

銀網蓋御香爐　一つ御臺

以上

御通抜之節御住居御間飾

御對面所

右者御床眞之御飾御棚御附書院御入側迄も御飾可有御座哉与奉存候事。

御休足之御間御小座敷

右者表立候御間に御座候間、行之御床飾御棚御附書院御飾可有御座与奉存候事。

兩御座の間御化粧の間

右者御勝手之趣に而御取合御飾可有御座与奉存候事。

御寢所

右者輕く御飾可有御座与奉存候事。

正　月　　　　渡　邊　喜　內

右先達而相伺候處、御通拔之節は御奥御床に者惣而御拜領之御品々御飾に相成候に付、右御飾り等御設けに及不申旨示合有之候に付、前條之通梅の御間迄御飾付出來いたし候。御庭御亭等も御飾り有之可然旨御示合有之候由、御用部屋中被申談候事。

以　上

是より雜記

一、傘御亭御涼之臺毛氈敷之。

一、右御道筋金魚舟・手桶・たも等。（御下屋敷品物金魚の鉢ゟ相餝り候事に相成、板五・六寸計の置上三枚に三所ゟ入る。）

一、御本宅御堺掛屏後にして御井戸ばた迄、三段之棚十四・五間計、蠟障子鉢植數百、御井戸ばた水もの鉢杜若・石菖蒲之類、夫より御的場之かたゟ押廻し、植木類種々松・藤など、袖牆類、陶器池の胴・同つるべ等、巣鴨植木屋數十人より持付相餝り候。清水九兵衛肝煎いたし、其內御持たせに相成候御品之代料被下候へば宜敷由。棚・蠟障子は御作事所より出來。（鉢植十鉢計、外に植木類御もたせに成。植木は翌朝御本丸に植木や直に持込申由也。）

一、たいはい場矢落御馬場土居之かた、御下屋敷御品もの大根類。（不殘御持たせに相成。）

一、御せんする屋根舟ちりめん㒵交御幕、船中敷氈、櫓かい縄にてつなぐ。
一、召上りかたは御住居御鎖外に御膳所相立、御役人衆被相詰、此方様より被指上候品も、右御同所ゟ御頼に而いたし候。
一、御供人は御表に而席々御設け、御杉重出御料理出候御場所も、布衣以上・御目見以上・右以下与三席に相立、繰々出候事。
一、御茶は席々ゟ土びん・茶碗御人数に應じ被出置候事。
一、入御之節御式臺詰相勤、御玄關敷附へ端の方組頭・頭分・大小將等何も敷附へ罷出。表御門うち御小人目附四人計、御門内へ入御門立付、透間へ内より目板當てられ候事。
一、四時過御住居ゟ入御、夜中五時前還御之事。

〔諸事要用雜記〕

先年公方様御通抜之節之惣御入用書御勝手方よりしらべ被上候由に而御渡付、席にても爲留返上。

文政十一年御通抜御入用しらべ

一、金三百六十六兩一歩と二匁四分七厘　御通抜方役所渡り

一、銀二十二貫二百三十四匁一分九厘　長瀨善左衛門等手合渡り

金一兩一分二朱
錢四十四貫六百五十六文
一、銀三十五貫七百八匁一分六厘　御臺所
銀三百七十四匁四分八厘
錢二十六貫六百十六文
一、銀一貫十六匁三分　御提灯裁許手合渡り
一、同三百八十七匁二分二厘　御茶堂方
一、新錢二十五貫八百三十二文　御近所火消方渡り
一、銀八百九十四匁九分五厘　御座敷方渡り
錢七貫六百八十八文
一、金八十九兩一步二朱と一匁三分七厘　割場渡り
錢七十九貫三百四十八文
一、銀百二十三匁　三十人頭渡り
錢二貫二百六十四文
一、金四百二十一兩一步と五匁三分　御庭方御用中村小兵衛等渡り

一、同千五百五十二兩と二匁九分五厘　御通拔御入用御作事所渡り
同四十二兩三歩二朱と六匁九分五厘
一、金七百五十一兩二歩　御通拔に付御入用御勘定方拂高
一、銀三貫七百六匁四分九厘　御通拔に付御膳所御入用御勘定方拂高
一、金千二百四十四兩二歩　御通拔に付御次御入用
銀二十七貫九百四十四匁七分
一、金二百三十兩二歩二朱七匁二分八厘　御通拔之節御獻上曁女中衆被遣方等御本宅御廣式御入用
金〆四千七百兩二朱三匁八分一厘
銀〆九百二貫三百六十九匁八分九厘　六十目一兩圖り
代金千五百三十九兩一歩二朱七匁三分九厘
錢〆百八十六貫四百十六文　兩に付六貫四百文替
代金二十九兩二朱と一分六厘
惣〆六千二百六十八兩三歩三匁八分六厘
外に六百九十七兩一歩餘　御馬見所御入用

三月十四日。奉公人取持人の心得を告ぐ。

〔御用番中心覚留帳〕

三月十三日

一、奉公人取持人共明日一統呼立、夫々申渡候事に相極。依而町奉行へ右取持人呼出紙面遣候。且右に付一件書き物等夫々今日致披見置候事。

一、右觸出方前々二月之奉公人觸とは違候趣左之通り。

一、年寄衆へは連名に而順達物に候得共、今般は家來江も申渡有之様に相調候故致各通候事。

一、御家老中へは前々不遣候得ども、支配も有之事故此度は相觸候。

一、町奉行へも前々無之候得共此度は遣、且町中一統相觸候様申遣す。

一、御先手物頭へも前々不遣候得ども今般は遣候事。

〔奉公人取持人の心得〕

御家中幷又家中曁金澤町に罷在候寺社家に召仕候小者・下女、其外町方男女奉公人取持人共江申渡方之覺

一、御家中を始一季居小者幷下女奉公人、曁町方男女奉公人取持候者共へ、公事場より燒印之札を相渡置候條、右印札有之者共迄に而致取持、重而取持指止度存候者は、右札を以口入

所を讓り替候儀は勝手次第。尤望人無之候はゞ、右札は公事場に指出可申。右之通公事場より札を渡置候上は、無札之者密に奉公人致口入候儀相知候はゞ、其段公事場割符所へ可及斷候。

一、右之通取持人相極候上は、奉公に爲在付候男奉公人請人者、取持人仲間共申談、兩人請に相立可申。併御門前松原町琴屋後家ちへ・同西町白尾屋新七・今町越中屋仕兵衛儀は、前々よりしんめう等品宜き女奉公人共迄取持來候儀に候間、此三人之者共は別立に申渡候條、男奉公人取持候儀は相成不申。依而右三人小者等請人に相立候儀は指省き候事。

但、本文之通取持人共請に相立候とも、取持方定之禮錢迄に而、外に奉公人より請人に付而之札錢取請間敷候事。

一、奉公人請合狀之儀は、請人共より主人に指出候證文に候得ば、請人共手前に而相調可指出儀に候。併主人方より遮而請合狀調相渡候所も有之候はゞ、尤可爲其分候。且又孀等に而後見人有之致取持候者は、後見人に而調可申候事。

但、孀等は請人に相立候儀者相成不申候條、外仲間共に相賴可申候事。

一、奉公人男女共猥に相成、季時は何ヶ所に茂在付、俄に先約をはづし、勝手次第成族茂有之躰沙汰之限に候條、向後季時に取持人共より奉公に爲在付候はゞ、召抱候主人よりも彌召

はづみ本の儘

抱候旨取持人方へ申遣、在付候奉公人よりも誰方へ致首尾候旨取持人方ゟ及案内候はゞ、是迄之主人方へも、當時召仕候家來誰儀今般何方ゟ取極相濟候間口聞には不指出樣、取持人共より主人ゟ及屆可申候。併前段在付候主人方はづみ申儀も有之候はゞ、其段取持人共より當主ゟ申達、重而外主取いたし候迄口聞に指出有之候樣仕度趣小紙に調、取持人より右當主人ゟ相願可申候事。

但、前段之通何ヶ所ゟも取極致置、其内を撰罷越候樣に相成候儀者、人々宛行宜所を撰申故之事に而も可有之、ヶ樣之儀取持人共急度相心得、奉公人共心得方可申談候事。

一、御郡方より奉公に罷出居候者共、作業に付奉公を止、所ゟ罷歸候儀は尤勝手次第に候。若奉公を止致借家、或者家持に相成候儀は、在所役人より之送り無之者は一圓難相成候條、自然御郡方之者に而奉公を止候者有之候はゞ、樣子承、其時宜に寄公事場割符所ゟ可及斷候事。

一、大身之面々奥向たり共女奉公人一季居者は、奉公人取持之手より召抱有之筈。自然相對に而召置候者は、右取持人ゟ入相立召仕候筈に候事。

但、都而主人譜代に召仕候家來侍分等之娘等を、其主家奥向に召仕候節は、口入所之手に付申に不及候得共、他之家來娘等を召置候節は、尤口入所之手を經候而召抱候筈に候。併

給知をも取候者之娘等に而慥成者故、右口入所之手に不預召抱度存候主人は格別之旨、御家中一統相觸候事。

一、取持人より掛渡置候奉公人男女共、様子有之暇指遣候歟、又は相煩暇指出候節、最初致口入候取持人之者ゟ、其段主人より申越候はゞ、仲間申談相働き、代人相掛可申候事。

但、奉公人致欠落候はゞ、其段最初取持之方ゟ主人より可申渡候條、上下御關所邊迄得与相尋、彌行衞不相知候はゞ、其段主人ゟ可及斷。主人より公事場ゟ斷次第、兩請人分過錢一貫文公事場割符所ゟ致持參可申。尤給銀日割幷取迯辨錢之儀者、其時々割符所役人より申渡候通、公事場ゟ指出可申。欠落人に而無之様子有之歟、又は煩等に而暇遣候者之給銀日割は、主人方ゟ直に指出可申候。且又右取持人之内誰々裁許に欠落人有之共、仲間一統割符を以右過錢等可指出。右割符は奉公人取持爲在付候人高に掛け候而可致割符候事。

一、取持人共奉公人手前より年中取請候世話料、左之通相心得可申候。尤年中之取請方に候間、給銀請取候節兩度に可請取候。

一、年中一人分五百文　　御家中都而奥向に召仕候しんめう・物縫之類、幷小身に召仕候下女たり共高給銀取候分

一、同三百文　　大身奥向小女分

一、同三百文　　同次女等分

一、二百文　同次小女分

一、二百文　小身方に召仕候下女

一、百五十文　同小女

一、三百文　小もの

一、二百文　前髪有之小者幷冬奉公人

一、五百文　町方手代

一、四百文　同手代に准候分

但、町家に而は商賣方又は職柄に寄、家持之者を手代に召仕候族茂可有之。是等は取持人之手ゟ難附譯も可有之候條、左樣之者は是迄之通に候。

一、三百文　同下男

一、二百文　同前髪有之下人

一、三百文　同下女

一、二百文　同小女

右割合之通取請可申。尤右定之外過取致間敷。是迄場入錢又は首尾代と名付、取請候樣之儀茂有之躰に候得共、前段之通締方相立候上は、右樣之世話料取請候儀堅相成不申。尤最初取

持人より掛渡候奉公人、季時に居成に召仕候共、右禮錢者定之通取請可申。併高祿之面々前々より譜代に召仕候小者、幷惣様小者居成及十ヶ年候者は、最早不及請人に事に候間、取持人より在付け候上十ヶ年居成に罷在候はゞ、右禮錢取請申間敷。勿論其者致欠落候共、取持人より公事場へ之過錢等も不及上納候事。

一、火消中纒持共之儀者、前々より於公事場縮方申渡置候に付、此分は是迄之通に候事。

一、御家中馬捕、又は大身方に召仕候水汲・袋持・板前之類。

一、御家中等都而乳母奉公人。

一、大身方に召仕候中居・はした者之類。

一、金澤町馬借方に召仕候馬士。

右四ヶ條之者共者、是迄主付指配り候者共有之に付、此分は致別立、夫々縮方申渡候條、四十四人之者共より手指候儀は不相成候事。

右之通に候條、前段奉公人共口入所江罷越候はゞ、生所等得与相尋、紛敷儀茂無之候はゞ致取持可申。尤奉公口極り、其者口入所江案内に罷越候はゞ、其者宿元見屆候而、名前小紙に調、右口入所より右奉公人在付候主人方江及案内可申候。且又女奉公人宿元も、取持人手前に而相糺置、奉公に爲在付候取持人者請人同様に相心得、不奉公之筋有之主人暇申渡候節、

給銀返辨之儀主人方より最初取持之者ゟ申渡候はゞ、本人又者共親類より取立、主人方ゟ可指出候。右返辨相滯候者は、外主取指留置候而爲指出可申候。且又是迄主人方に而請縮申付候奉公人は、右請縮相濟不申內爲泊故障有之節は、主人不念に相成候得共、取持人より掛渡候奉公人は、取持人に而宿元も見屆致取持候事故、召抱定之日より爲泊、未取持人請合狀不指出內に而も、取持人に而縮方相立故障出來有之候共、主人よりは取持人ゟ申渡候間、請合狀指出置候者同事に相心得可申候。尤請合狀早速可指出候。將又年中奉公に爲在付候主人名前等帳面に仕立、每歲五月中に公事場割符所ゟ可指出候事。

文政十一年三月　日

三月十八日。御郡方に貸附したる鹽は之を他に預け置くべからざることを告ぐ。

〔御觸留拔書〕

小松において御郡方御貸鹽相渡候節、預け之名目に而買請申者有之付、前々より預り申間敷旨等嚴重申渡候。然處前月朔日八日市町大野屋忠三郎与申者、能美郡大杉村百姓太右衞門より鹽三斗七升、岩上村市兵衞より三斗一升、同村新兵衞より八升八合預り候に付、町付足輕相咎、鹽指押、忠三郎儀咎申付置候旨富田九內より及斷候。右樣預鹽拵致候儀、第一御縮方

にも差障候儀に付、有之間敷儀に候得共、御郡方に而も是迄定茂無之候得者、此度之儀は右預鹽相渡、已來ヶ樣之儀有之候はゞ、見咎次第鹽取揚、沒鹽同樣之振に相心得候樣申渡候條、都而御郡方御貸鹽請候節は、不殘引取、其所に預置申間敷候。

右等之趣嚴重可被申渡候、以上。

三月十八日　　御算用場

御郡奉行中

右之通申來候條、得其意、御縮有之趣夫々不相洩樣可申談置者也。

子三月廿三日　　青木多門

口郡村々役人

追而先々相廻從落着可被返候者也。

三月廿四日。本年に限り陶器輸入禁止の令を解くことを告ぐ。

〔御郡典〕

他國出來陶器入津之儀指留置候得共、今年一作浦口錢三增倍取立、入津指解候條、此段夫々被申渡、且着岸之浦々に而右口錢取立、當十月中產物方役所ゟ差出候樣、潤改人等ゟ可被申渡候。船積に而無之取寄候分は、浦口錢三增倍に相當り候役銀取立、是又十月中可被指出候。

船積有無之儀は取扱候ヶ所に而入念調理方可有之候、以上。

三月廿四日　　御算用場

御郡奉行中

〔御郡典〕

他國陶器入津一作指解候に付、浦口錢三割增倍取立候趣申達置、右は浦口錢三つ分之儀に而、是迄取立方も右之通成來候。仍而三增倍与相唱候而は、割合相違之譯に候間、以來三つ分与相唱候條爲念申達候、以上。

三月晦日　　御算用場

御郡奉行中

三月廿八日。諸浦出船積入の際に於ける雇人足等のことを告ぐ。

〔郡方御用留〕

諸浦出船積入候節、本船江人足相雇爲積入候由候處、右雇人足共指定候者共有之、外人足は爲相雇不申、剩右定人足ども申談不正之取扱致し候躰にて、船頭及迷惑候旨に而、是迄之處急度相糺筈に候得共、其儀は令用捨候條、以後右之通指定候者ども指省き、船頭了簡を以正路之者共相雇爲積入候樣可被申渡。且又手船之者共本船江乘込食事等いたし、船方失墜相懸り

候旨に候間、惣而本船𛀁乘込不申樣可被申添候。若無用者等本船𛀁乘移候者相知候はゞ、先役人どもに被指預、其段當場𛀁可被申越候。尙可遂詮議候。

右之通諸浦出船奉行𛀁申渡候條、各より所方之者共𛀁尙又嚴重可被申渡候、以上。

三月廿八日　　御算用場

御郡奉行中

四月朔日。前田齊泰就封の爲登營辭見す。

〔諸事覺書〕

四月八日

一、前月廿八日上使水野出羽守殿を以、御國𛀁之御暇被仰出、白銀・御卷物御拜領、從內府樣牧野備前守殿を以、御卷物御拜領、從御臺樣中島內匠頭殿を以、御卷物御拜受、當朔日御登城被成候樣、前日御老中方御連名之御奉書到來、御登城被成候處、於御黑書院御禮被仰上、御懇之被蒙上意、御鷹・御馬御拜領被成、將又奧村內膳・青山將監被召連候處、於御白書院御目見被仰付、御卷物拜領被仰付候。委細之儀者以御書被仰遣御樣子之由、月番より廻狀有之候事。

右に付當十一日各出席之上御書拜見之筈。尙又同日御廣式𛀁罷出、御祝詞申上候旨も申來候

事。但常服に而出席之筈も申來事。

〔續德川實紀〕

四月朔日、月次の賀例のごとし。松平加賀守はじめ、就封のいとまたまふもの二人。加賀守は御鷹・馬を下さる。

四月四日。金澤町奉行配下の者の越中境關所に對する過書の形式を改む。

〔國事雜抄〕

當所町奉行支配並當町之者共、江戸表等へ相越候節、共表御關所過書、是迄町奉行一名或は連名入交相調來候へ共、以來都て一名にて過書相調度旨、有賀甚六郎等申聞、承屆候條、可被得其意候、以上。

子四月四日　　前田大炊

和田權五郎殿

四月六日。前田齊泰就封の爲江戸を發す。

〔官私隨筆〕

四月十三日

一、中將樣益御機嫌能、當六日午上刻御發駕被遊候旨、圖書等より申來候由、御用番より以

紙面被申越候。

一丸甚六は金澤の町人

四月十六日。小松絹の賣捌を江戸の町人能屋七右衞門に託すべきことを告ぐ。

〔郡方御用留〕

小松等に而出來之絹を初諸產物、江戸表町人能屋七右衞門与申者方店江指出爲賣捌可然旨等僉議之趣、去秋委曲紙面等被指出候に付、町御奉行江御達之儀江戸表江申遣置候處、聞番江申渡段々遂僉議、相伺候上、則聞番名前之御聞屆書町御奉行榊原主計頭殿江及御達置候處、御聞置被成候段被仰渡候に付、彼地會所奉行江申添、七右衞門江爲申渡候旨等、委曲別紙返書等之通申來候。依之右返書等夫々相渡候條、被得其意、主付一丸甚六出府いたし七右衞門与示合、以來之仕法得与取極候儀、尙更詮議有之可被申渡候。然上は諸品仕入方精誠可致入念儀に候。自然絹布等丈尺不足、仕入方麁抹抔与初發不評に成候而者、後々賣捌も出來兼可申儀に候條、是等之處僉議專要に可被相心得候。近頃小松絹等折々丈尺致不足候樣子も粗相聞え候に付、此段譯而申談候。餘も是に可準候條、入念可有詮議候事。

戊子四月

小松等においで出來之絹を初諸產物、江戸表江指出爲賣捌候はゞ可然旨、御勝手方年寄中江

相達置候處、江戸町御奉行ゟ御達之上、大傳馬町能屋七右衞門店におゐて賣捌之儀、別紙之通被仰渡候に付、爲承知申達候。諸産物江戸表ゟ指出度ものは、當町一丸甚六ゟ引合候樣可被申渡候。尤絹布丈尺を初、諸品出來方入念相心得候樣嚴重可被申渡候。

右早速廻達落着より可被相返候、以上。

子四月十六日　　　　御算用場

御郡奉行中

四月十八日。前田齊泰金澤城に着す。

〔横山氏日記〕

四月十八日

一、當月六日午の上刻江戸御發駕、夜前津幡驛御止宿。今曉七半時之御供揃に而右驛御發駕、森下御小休、五半時頃同所御發駕之御付人來、五半時大樋ゟ御出之御附人來に付、年寄中三の御丸ゟ罷出、御城代大炊幷伊勢守・御家老中者表御式臺へ罷出、四時益御機嫌能御着城。鷹來坂ゟ被爲入候時分、外記儀板端ゟ進出罷在、大炊御表之方鏡板之端ゟ罷出有之、御意有之節外記致中座、御裏式臺之方に伊勢守・內藏助等罷出有之處に而御意有之。夫々御請申上、夫より階上御廣緣通り致御先立、御大廣間御緣側通り、芙蓉之間御小書院横御廊下より、御

鷹來坂は鷹木坂

内膳は奥村氏

奥書院御頰緣通り、蔦之間後ろ御廊下に眞龍院樣・姫君樣より之御附使者罷出候處に而御意有之。夫より御居間書院三之間迄致御先立、其所より勝尾半左衞門致御先立被爲入候事。

一、內膳儀御供より直に旅裝束之儘被罷出候事。

一、年寄中・御家老中・若年寄・外記一列、於松之間二之間、以不破紋左衞門御着城之御祝詞申上、且山城守歸着之砌御意之趣有之。右御請も同人を以申上候事。

一、四つ時過御居間書院江御着座、年寄中一切、丹後守一切、左馬助・又兵衞一切、伊勢守一切、御家老中・若年寄・外記一切、武藤四郞兵衞を以被爲召御意有之、御請申上退去之事。

一、右相濟一先被爲入、四半時過重而御出、眞龍院樣御附使者吉田孫太夫、姫君樣御附使者古屋甚兵衞被爲召、御直答。其節伺公無之。相濟、御歸國御禮御使篠原監物、月番大炊誘引御前江被召出、伺公御家老方織江・藏人、若年寄方內記・外記、御意有之。大炊御取合申上候事。

〔諸事要用雜記〕

四月十八日

一、今朝七半時之御供揃に而、同刻過津幡驛御發駕被遊、六半時前森下御小休、御備被遊、暫御間有之同處御發駕被遊、四時盆御機嫌能御着城被遊候。御城中御役人罷出候儀、且橋爪江年寄中、其外御玄關江御城代等、夫々御例之通御意有之候事。

四月十九日。前田齊泰、天德院及び寶圓寺に參詣す。

〔諸事覺書〕

四月十九日

一、四時之御供揃に而同刻過御出、天德院江御參詣、御先詰外記罷越。夫より寶圓寺江御參詣、御先詰內記罷越。御戾り後兩人共直に出席之事。

〔宮私隨筆〕

四月十九日

一、四時之御供揃に而御出、兩御寺へ御參詣。御留守中に成候故伺御機嫌候儀相見合罷在、御還城之上各松之間二間に列座、以大野隼人相伺候處、益御機嫌能被成御座候旨以同人被仰出。

四月廿二日。木實天より降る。

〔年々珍敷事留〕

一、四月廿二・三日夜、ねぶの木之實に似たる物降也。方々に拾ひ置なり。

四月廿三日。浪人河村安次郞醫王山に於いて足輕太田九右衞門を斬殺す。

〔見聞袋群斗記〕

四月廿三日醫王山しらはげと云所にて、浪人河村安次郎と云者と、人持組上坂主鈴家來足輕太田九右衛門と口論致し、右安次郎九右衛門を殺し直に出奔する。同年六月江戸表に於て右安次郎を召捕、同七月十七日金澤ヘ歸禁牢、追日刎首被仰付候。安次郎之同道人有之、是も入牢被仰付なり。

〔郡方御用留〕

前月廿三日河北郡醫王山において、鍛治町に罷在候浪人河村安次郎与申者、上坂主鈴家來足輕太田九右衛門ヘ深手を爲負逃去候處、九右衛門儀右疵に而相果候。依之別紙安次郎人相書相越之候條、右躰之者於有之、其所に召捕置、早速公事場奉行ヘ及斷候之樣、組・支配家來末々迄可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配ヘも相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

五月八日　　長甲斐守

金谷佐太夫殿等連名

覺

一、年齢二十五歳

一、せい高く、面長く、色白き方
一、目細き方
一、眉濃き方
一、口・鼻・耳常躰
一、髮厚く鬢高方
一、月代濃き方
一、齒並揃ひ、言舌靜なる方
一、其節之着類
紺・すおふ立嶋、裏千種袷
木綿生壁返小紋、袖絹萠黄小紋、肌子
淺黄白格子嶋帶
鐵納戸、紋所いおり之內木瓜殺生羽織
腰布腰帶
鼠小紋股引
一、刀　黑鞘、柄白條小倉卷、鍔無地、外拵不知

右鍛冶町越中屋𡢳いへ方同居浪人河村安次郎人相書如此候事。

御用番甲斐守殿御渡之人相書等二通寫相越之候條、得其意、夫々不相洩樣可申渡候、以上。

子五月九日　　　　　　内藤十兵衛

　　　　　　　　　　　兒島五郞右衛門

加州三部惣年寄中・年寄並中

四月廿五日。前田齊泰老臣本多左馬助に齊廣の女壽々姫を緣組すべきことを命ず。

本多左馬助諱は政和

〔横山氏日記〕

四月二十五日

一、壽々姫樣御儀、本多左馬助江御緣組之儀、御老中方江御屆相濟候に付、左馬助御前江被召被仰渡、一先披候而上下に相改、重而御前江被召御意有之、御熨斗頂戴。相濟、年寄中御前江被召、右之趣被仰渡、其段表方席において、主付藏人・若老外記江月番より爲承知演述。且右に付各服上下に相改、御祝詞申上候筈之旨も演述之事。

但、御家老中江は先達而承知有之通り、左馬助江今日被仰渡候旨、月番演述有之。且壽々姫樣江之御使は、藤田平兵衛相勤候由之事。

〔諸事覺書〕

四月廿五日

一、壽々姫様御儀本多左馬助ゟ御縁組之儀、先達而公邊ゟ御屆相濟候付、今日於御居間書院左馬助被爲召、御直に御意、御手自御熨斗被下之。

一、右に付年寄中等服上下に改、御近習頭河村彌左衛門を以御祝詞申上候處、以同人御意有之事。

四月廿八日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕

四月廿八日

一、今日九半時之御供揃に而兩學校ゟ御出之儀、昨日被仰出、土佐守・左馬助・內記・外記九半時前罷越。八時前御出、古易斷等會讀御聽聞。夫より武學校ゟ、高木庄兵衛門弟鑓稽古御覽、夫より佐野源藏等門弟乘馬御覽相濟、七時前御戻之事。

〔諸事要用雜記〕

四月廿八日

一、九半時過文學校ゟ被爲入、紅葉橋迄御歩行、夫より御往來共御馬。易學・論語・中庸之席

御聽聞被遊、無程御褉明之、御下段江も被爲入。其內鎗術御指支無之旨、山城守平兵衞を以申上り候由。無程武學校江被爲入、鎗術型幷勝負御覽被遊、過半相濟、御褉建、馬場之方に御着座。追付佐野茂兵衞方等馬術相始御覽、全く相濟、無程御戾被遊候。御戾り後佐野茂兵衞等、稽古御覽之御禮申上る。

四月。前田齊泰、二條齊敬が配偶を求めしを謝絕す。

〔御親翰帳之內書拔〕

四　月

一、京都二條中納言中將樣、未御相應之御緣組御取極も不被成御座候。此方樣には舊來格別之御由緒柄に付、御息女御方之內御緣組被仰約度思召候。若又當時御相應之御息女御方不被成御座候はゞ、御分家且御親族方之內御息女を、御實女に被成進候樣御賴越に付、段々被仰立を以御斷被仰進候事。

五月朔日。前田齊泰歸國に付き拜領の物を老臣等に頒つ。

〔官私隨筆〕

四月晦日

一、今般御歸國に付御拜領之品、明朔日被下御樣子之由、御用番より被申越之。

五月朔日
一、如例登城、出仕之面々等相揃候上御出、於御小書院役僧之御禮等幷寶圓寺・桃雲寺入院之御禮相濟、大廣間へ御出、出仕之面々一統御目見、御用番披露、暖氣之砌何も無事と御意。御意之通暖氣之砌益御機嫌能被成御座、恐悦之至奉存候。何も御目見被仰付、其上御懇之蒙御意、難有仕合奉存旨、丹後守御取合申上、被爲入。
但、御出前於御居間書院井上六左衛門等被召出。
一、無程御居間書院へ御出、甲斐守等一切、丹後守一切、左馬助等一切、伊勢守一切、御家老中等一切被爲召、御拜領之品被下候。
但、御省略に付是迄とは御減少之由被仰出旨、前廉御用番演述。

五月朔日。前田齊泰郊外七ッ屋口に放鷹す。

〔諸事覺書〕
五月朔日
一、九半時頃御鷹野へ御出、外記御供に而御城に而裝束改、直に町端迄罷越候事。
一、追付御出、七ッ屋口町端より土手通り、二ッ屋村より割出村領・直江村續御鷹野、三ッ屋村次右衛門方に而御小休。夫より三口村領より割出村領御廻り、二ッ屋村より粟ヶ崎道土

手通、七ツ屋口町端より七半時過御戻之事。

野間御往來御道程二里半計、御餌柄鶸十一御拳。

五月朔日。玉泉寺天神の畫像開帳を行ふ。

〔官私隨筆〕

五月廿三日

一、今朝玉泉寺へ拜參、開帳之天神御畫像に拜仕、五半時頃歸宅。

但、去朔日より廿五日まで開帳也。御宮に有之御木像は、開帳中本堂泉殿之横へ奉移有之故、是へも拜禮仕候也。

一、御社常には御木像三躰、中は天滿宮、内より右は菅公之北方、左は御嫡子也と出家いふ。高視朝臣か淳茂朝臣杯か。右御三躰之内中尊を移して御掛物掛る也。皆瑞龍院様御寄附之由。玉泉院様御信仰にて度々御參詣、曉天迄も被爲入候由。御掛物には玉海和尚筆之讃あり。

一、皆衣文之御像と見ゆ。

五月十一日。大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤城に登る。

〔横山氏日記〕

五月十一日

一、備後守様前月廿八日江戸表御發駕、夜前津幡御泊にて今日此表へ御着、御登城被成候付、各五半時より追々登城。外記儀者御飾御用有之に付、少早目に致出席候事。

〔官私隨筆〕

五月十日

一、備後守様明日此表御止宿之筈、御對顏之儀被仰進候趣に候。依而御殿御役人五時過揃に付、各には五半時過より登城之旨等、御用番より紙面來る。

五月十一日

一、右に付五半時過登城。

一、九半時前御旅宿御出之附人來る。何も靜に御式臺板緣迄出居、御作法呼候樣子を計ひ如例御玄關へ出。

一、追付御越御挨拶有之、瀧之間へ御通、御口上御家老取次之上、甲斐守・山城守・大炊・內膳一切、丹後守一切、左馬助一切、御家老中一切罷出、仰之趣隨而御請申上候。

一、御料理御斷之由御近習頭大野織人演述。

一、追付御居間書院へ御通、御先立最初よりすべて左京也。御料理御斷故追付御退出之心得に而、御居間書院鄉下に而御樣子を伺居候處、はや御退出之御樣子故、何も俄に最前之所御

玄關へ罷出候處、芙蓉之間に一先御溜、追付御退出也。其時早速引取可申處、少遲くなり、
雁木坂高にてはや御引返之御樣子故、何も早々引取。
一、右之趣に而御目障にも相成可申候哉、宜被申上候樣にと之趣、且又備後守樣へも、只今
御旅宿へ罷出候條右不敬之趣申上候而可有御座哉、一往奉窺由御用番より以勝尾半左衞門被
申上候處、其儀に及ぶまじき旨被仰出候由、御用番演述也。

〔諸事覺書〕

五月十一日

一、今朝五時過備後守樣御旅宿ゟ御着。
一、四半時頃備後守樣御登城、御旅宿御出之附人來候付、年寄中等御式臺鏡板左右ゟ罷出。
追付御出、階上御奏者番永原左京罷在御先立、御刀御表小將、芙蓉之間ゟ御着座。追付御口
上掃部罷出承之。眞龍院樣等ゟ之御口上御奏者番承之。掃部儀御近習頭を以申上。其內年寄
中一切、御家老中一切被召罷出、夫々御謎有之、座上より御請申上退去。追付御居間書院ゟ
御通被成候樣被仰出、其段掃部申上、左京御先立御居間書院ゟ御着座、無程御前御出御對顏、
御のし等出。
　但、前々之通御料理被進候御用意有之候得共、今日は御斷に付其儀無之。

追付御退去、御廊下迄御前御送、夫より左京御先立、御式臺ゟ年寄中等最前之通罷出。

一、雁木坂より御立戻に付、年寄中等何茂引取、左京御先立芙蓉之間に御着座、御禮之趣御口上掃部罷出承之、追而可申上旨被仰置無程御退去之事。

〔諸事覺書〕

五月十一日。前田齊泰有松口の郊外に放鷹を行ふ。

五月十一日

一、備後守樣御下城後追付御鷹野に御出、外記御供に而席に而野裝束に改、九時過町端迄罷越。

一、八時過御出、有松村端より上口往還通り御出、西泉村領御鷹野被遊、同村肝煎安右衛門方に而御小休。夫より同村領御廻り、泉村領より泉新町油屋小路より七半時御戻り。

野間往來道程一里半計、御獲物鷸・水鷄・よしごい都合十四。

一、外記町端に而御暇被下、直罷歸。且御脇鷹も被仰付、御餌柄之内拜領被仰付候事。

五月十五日。淺野川及び犀川の馬場修覆の費用を家中馬持の士等に割當すべきことを告ぐ。

〔御觸拔書〕

定番頭〻
淺野川・才川兩馬場近年及大破候付、修覆方之儀若年寄方に而遂僉議、御馬奉行〻申渡候。仍之右入用方、御家中馬持之人々、曁兩馬場〻爲稽古罷出候人々より割符銀、百石に付二匁充之圖を以、頭・支配人手前〻取立銀、一匁以下之分者鳥目に而取立、當六月十五日迄之内夫々引集、身當共御馬奉行〻指出、尤組等無之人々者、直に右奉行〻指出候樣、寄々一統可被申談候事。

五月十五日　　長甲斐守

五月十六日。前田齊泰石川郡野田山の祖廟に參詣す。

〔諸事覺書〕

五月十六日

一、今朝六半時之御供揃に而、五時前御出、野田惣御廟〻御參詣。御前後共桃雲寺〻御立寄、御先詰外記罷越。四半時頃御戻之事。

五月廿二日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕

五月廿二日

一、九半時之御供揃に而、兩學校江御出被仰出候付、同刻前大炊・左馬助・織江・外記罷越。八時頃御出、論語講釋中西巴門相勤御聽聞。夫より武學校に而、半井瀨太夫門弟鎗術稽古御覽。相濟八半時過御戻之事。

〔諸事覺書〕

五月廿三日。前田齊泰瀧之間に於いて大島忠藏をして論語を講ぜしむ。

五月廿三日

一、四時前瀧之間において論語講釋大嶋忠藏相勤、芙蓉之間へ御出御聽聞之事。

〔諸事覺書〕

五月晦日。組外齋藤兵右衛門越中五ヶ山に流罪を命ぜらる。

是月は大盡なり

〔官私隨筆〕

一、組外齋藤兵右衛門儀、去春被召出候處、私方に召仕候內より何廉心得方不宜儀ども有之躰、追々承出申候。沙汰之限之者と奉存候。依而何卒御僉議之上、急度被仰付被下候樣、內々奉願度存寄に御座候。右不埒之品は口上に御達申候通に御座候。乍然身柄も御座候事故、先及御內談申候。

御指圖次第相心得可申候、以上。

五月廿四日　奥村丹後守

長甲斐守樣

齋藤兵右衞門手前之儀に付、御內談之趣紙面被指出候付、僉議之趣奉伺候處、越中五ヶ山之內へ流刑可被仰出候付、今日頭迄申渡候。此段爲御承知申進候、以上。

五月晦日　長甲斐守

奥村丹後守殿

仲使はちゆうづかひなるべし

五月。上方中使の外私に賃持することを禁ず。

〔御觸留拔書〕

付札、御算用場奉行へ

近年當町曁遠所町方幷御郡方稼人共之內、上方通与申立、商賣人等荷物取集往來、賃持相稼候者共多有之由相聞候。甚猥成儀に而、畢竟御締方にも指障候條、以來上方仲使之外は右樣之族無之樣急度申渡候樣、御郡奉行幷遠所町奉行等へ可被申談候。若不相止においては、町附足輕等見咎候而出生等相紀候樣、町奉行へも申渡候之條、此段茂可申聞事。

五月

五月。石川・河北兩郡の浦方に產する海酸漿の一手買入を許す。

〔郡方御用留〕

石川・河北浦方に而捕揚候海ほうづき、所方に而賣捌來候得共、今般大野村次郎吉より書付指出、村々獵師手前江直々指向、直段等宜敷買集申度旨、右主付相願候に付、夫々遂詮議候所、敢而指支之筋も無之躰に候得ども、畢竟下直に買集候而は迷惑之筋も有之候間、其節爲指止申度段申聞候に付、右之含を以先當一作承届候。尚更買集方に次郎吉下役之者等、村々江相廻り候條、直段等引合、夫々賣渡候樣獵師共江可申渡候。尤此末不正之買集方いたし候はゞ、無泥可斷出者也。

子　五　月　　　　　　　　　　御　郡　奉　行

石川・河北兩御郡浦方村々役人

六月二日。前田齊泰能を演じ老臣等をして觀覽せしむ。

〔官私隨筆〕

五月廿九日

一、來月二日御能就被遊候、各拜見被仰付候旨、以不破紋左衛門被仰出候。服は布上下、刻限之儀は六半時揃之旨申聞候付、此段申進候。御禮之儀は、二日御用番より引請申上候筈に候。若御當病等に而御出難被成候はゞ、御禮之趣も可被仰越と之趣、御用番より紙面來る。

六月二日

一、今朝六半時過登城、氷室音しらべ聞え候時分也。追付拜見所へ廻り候樣にと之事に付罷越。

但、登城之上御能拜見之御禮御用番江申上候。且又少遲參に成候付、其由も申達。

一、御能五時頃初り、御中入は四半時過也。

氷　室　甚次郞　　簾　華次郞　　杜　若　御

唐　船　宮　門　　鞍馬天狗　權　進　　融　御

祝言弓八幡　甚　吉

煎　物　素袍落　福　神

一、七半時過御能相濟、各列座以不破紋左衞門御禮申上候。

〔橫山氏日記〕

六月二日

一、今日各御能拜見被仰付候旨、去月廿九日書立之通に付、六半時前より追々出席之事。

一、五時前各拜見所江相廻候樣、御近習頭申聞候に付、何茂御次之拜見所江罷越、追付御能相初り候事。

和田倉御前は前田齊廣の女厚姫

一、御能七半時過相濟、年寄中・御家老・若年寄一列に而、於松之間二之間、以不破紋左衞門御能拜見被仰付難有仕合奉存候旨申上、各退出いたし候事。

六月五日。會津侯松平容敬夫人に贈與する金額を定む。

〔諸事覺書〕

六月五日

一、左之通書取御勝手方へ遣。

和田倉御前樣御入用金之儀、追而御使切金に相成候迄、先當分三百兩充御渡、殘少に相成候へば、其時々請取度旨、先達而篠松甚助申聞候。相伺候上、右金高御渡之儀承屆申渡候條御達之事。

子　六　月

六月十八日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕

六月十八日

一、今日五半時之御供揃に而兩學校江御出に付、甲斐守・左馬助・藏人・外記同刻より相詰。同半時過御出、學校に而習學會讀御聽聞、武學校に而筒井喜左衞門門弟鎗稽古御覽。相濟四

半時前御戻之事。

六月廿三日。前田齊泰瀧之間に於いて大島忠藏をして論語を講ぜしむ。

〔諸事覺書〕

六月廿三日

一、瀧之間においで論語講釋大嶋忠藏相勤、芙蓉之間に御出御聽聞之事。

六月廿三日。加賀・能登の猪・鹿耕作を害するを以て火薬を與へて退治せしむ。

〔諸事覺書〕

一、御算用場奉行ゟ左之通申渡。

五十斤　　鐵炮筒藥

但、能美郡輕海組等山入村々ゟ。

百　斤　　同

但、羽咋郡押水組・鹿島郡崎山組等村々ゟ。

右村々猪・鹿多徘徊、作物喰荒候に付、鐵炮に而追拂度候間、筒藥相渡候樣御郡奉行願之趣、

右添紙面を以被指出。依而願高之通承屆候條、御異風裁許申談受取候様、右奉行江可被申渡候事。

六月廿四日。西本願寺先住法會執行に就き漫に上洛すべからざることを告ぐ。

〔郡方御用留〕

付札、御算用場江

京都西本願寺より能州一派之觸頭迄、當九月先住之法會に付僧俗共可致參詣旨、廻達書致到來。尤前々よりヶ様之儀有之候得ども、寺社所江相達候儀も無之、今般者僧俗とも人多に可致參詣哉茂難計、依而及內達候由にて、能州觸頭府中光德寺等より來狀指出。越中幷御當地觸頭よりは何等も不申聞に付、寺社所より相尋候處、夫々來狀有之候得共、前々より有之事故不及達、配下江致廻達候故、勝興寺江到來之分は廻達に致置候由に而寫指出。御當地觸頭よりは本紙指出、三州とも同文面に候。是迄之儀寺社所江內達抔いたし候儀無之故不及貪着候得共、能州觸頭より及內達候上者、三州とも僧分之者は大勢參詣いたし候儀無之様可申渡旨等、寺社奉行申聞候。依而本山より廻達書之寫相渡之候條、且那寺より門徒共江、右法會之節參詣之儀申進候とも、猥に致參詣候儀無之様心得方村役人共より申諭候様、御郡奉行江

可被申談候事。

西本願寺先住法會之儀に付、御算用場より別紙之通申來候條、得其意、上京之儀堅く不致樣夫々不相洩樣可申談者也。

六月廿四日

林　久太夫

原篠金右衛門

石川・河北村々役人

六月廿七日。前田齊廣の女從姫名を郁姫と改む。

〔官私隨筆〕

六月廿七日

一、從姫樣御事、鷹司准后樣御姫君賴君樣御名御同唱に付、從姫樣御名郁（アヤ）姫樣与御改被成候旨被仰出候段、高田善右衛門演述に付、爲御承知申進候旨、御用番より以紙面被申越。

一、右御名之唱今上之御名惠仁（アヤ）樣と御同稱に付、もし〳〵心附無之儀も候半と存、右紙面之返書遣候節別紙に調、紙面と一集に封じ候而遣之候處、席に而心付無之に付、卽右之趣高田善右衛門へ申達置候由、廿八日被申越候。

〔橫山氏日記〕

六月晦日

一、郁姫様御名御唱方御指支之趣有之候付、郁姫様与御唱方之儀重而被仰進候旨被仰出候段、月番演述織江方江は主付より可申遣旨に付、則申遣候事。

但、織江主付に候へ共、忌中に付主付助修理より申遣候事。

六月。家中諸給人収納拂米の藏縮は年内に解除すべきことを命ず。

〔御觸抜書〕

定番頭江

御家中諸給人収納拂米之内、御召米を始、旅人渡米等渡り方指支候向々茂有之、御用支等に茂相成候に付、去年町奉行より中買共江譯而申渡候趣茂有之、一統江茂相觸置候處、如何相心得候哉、中に者當年茂渡り方指支候人々有之躰に相聞候。甚等閑之至に候。別而川下げ米等渡り方指支候而、先懸り之役人長く致逗留、第一御用支に相成御不益之筋茂有之、暨渡り方及遅々候而は、旅人等手前雑費茂相懸り、御米直段に茂相響、且右様之故障有之候而は買人相泥、拂米直段茂劣、人々身ために茂不相成儀候條、向後右様之族無之様急度相心得、年内に藏解不指支様相心得可申候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江茂相達

候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

六　　月

六月。婚姻又は養子緣組の際檀那寺の不同意を稱ふる者あるを戒む。

〔御郡典〕

町・在之者共子弟等緣組・養子等に指遣候節、旦那寺彼是申立候儀不相成趣、先年申渡置候處、今以心得違之寺庵も有之躰に候。惣而養子等一件は、其支配人手前に而詮議之上聞屆有之儀に候得ば、先々より支配人聞屆相濟候之段及屆に候上は、旦那寺彼是申立候譯柄聊有之間敷所、離旦狀難指出与無謂儀を事々敷申立候族も有之躰。元來離旦狀拆与申儀は一圓無之儀に候條、右等之趣被得其意、夫々嚴重可被申渡置、自然是以後右樣不埒之族於有之には、咎方可申付事。

子　六　　月

右寫之通諸寺庵江申渡候旨に而、寺社奉行より申來候に付、相越之候條、得其意、夫々不相洩樣可申談候、以上。

子七月三日　　　　　　井上與兵衛

七月三日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕

七月三日

一、今日五半時之御供揃に而兩學校に御出之旨、昨夕内膳より申談有之に付、御先詰甲斐守・修理・外記同刻過罷越。學校に而近思錄會讀等御聽聞。夫より武學校に而山崎流門弟太刀稽古御覽、幷吉田權平門弟的御覽。四半時過御戻之事。

七月六日。弓・鐵炮の技に精練なる足輕に賞賜すべきことを議す。

〔諸事留牒〕

七月六日

一、足輕御褒美之儀左之通遂僉議。

大組・御持方等足輕、弓・鐵炮高歩之者御褒美、近年僉議之上繰々に可被下處、御勝手向必至与御指支之御時節に付、文政九年・同十年分先猶豫仕置候。然處段々相淀候而は進方も薄可相成、依而今般右二ヶ年分可被下哉、乍併御時節柄に候間、是迄之半減計被下候而も可然哉与、先頭々存寄相尋候處、格別之御時節候間、僉議之通相心得可申候。格別御省略年限相滿

候上は、是迄之通被下候樣何茂申聞候。依而御勝手ゟ示談仕候處、半減計被下候儀存寄無之旨演述仕候付、左之通被下に而可有御座与僉議仕候。

七月十一日。前田齊泰犀川に於いて歩士の水練を見る。

〔横山氏日記〕

七月十一日

一、今日八時之御供揃に而、同刻過御出、石川御門より石引町通り、末村領板橋際より、田の谷江淵通り、若狹山坂御下り、直に法師淵に而、御歩水練被遊御覽。御戻り右同斷、七半時過御歸城之事。

七月十三日。銀仲預り銀手形の小割札を增加發行しその番號の調方を改むべきことを告ぐ。

〔御觸拔書〕

當時銀百目宛之手形多通用之處、小割札無數故、諸上納曁取引方一統指支申躰に付、右百目札之內小割札に切替出來申付候。就夫右小割札番付字數多に相成、調筆方手間取候付、此度出來之分いの一より相初候。且又是迄五十目札無之候得共、辨利方之ため右之內五十目札出

來相加候條、諸上納等御領國一統無滯通用可致候事。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月十三日　　　　奧村內膳

七月十九日。金澤町奉行、茶屋町抱女の出奔取捌をその管轄に屬せしめんことを議す。

〔御用番中心覺留帳〕

七月廿一日御用番より御渡之町奉行紙面左之通り。

淺野川茶屋町尾山屋平兵衞抱女すへと申者、當春出奔仕、前月廿七日立歸申候付、私共於役所すへ手前一往相糺、禁牢申付置候。就夫町方亭主分等家內之者出奔立歸之儀、都而私共手合において取捌落着申渡、下人出奔之分は公事場江引渡申振に御座候得ども、茶屋共抱女之儀は外奉公人与も品違、別段仕法相定、私共手合において人縮方等申渡置候儀に付、抱女出奔取捌之儀も私共切に而落着申渡度段、公事場奉行江も遂示談候所、抱女之儀は一通り奉公人とも違、今般右場において申付有之、奉公人取持之者共手取も附不申儀に候間、抱女出奔

之分私共に而落着申渡候而も、於公事場指支之儀無之由に御座候條、以來抱女之儀は右之通取捌申趣夫々御聞屆置御座候樣仕度奉存候。尤此外町方奉公人出奔之儀は、前々之通公事場ゟ引渡可申候、以上。

子七月十九日　　有賀甚六郎

奥村內膳樣

七月廿二日。昨日落雷ありしを以て老臣等前田齊泰の動靜を奉伺す。

〔御親翰御加筆物寫〕

戊子七月廿二日

一、昨夕堂形御馬場之內雷流候躰に而、御馬見處並土居に有之候松木四本少々充相損、土居も少々相損候旨、今日三十人頭及屆申候。右之外御別條も無御座候間、此段以御序可被申上旨山城守より有澤才右衞門ゟ申含申上候事。

〔橫山氏日記〕

七月廿二日

一、昨日强雷鳴に付、各出席切相伺御機嫌候旨、月番內膳より御家老・若年寄中ゟ演述之事。

但、昨日夕八つ半時、强雷一靜に而、御細工所ゟ流候事。

一靜は一聲なるべし

〔諸事覺書〕

七月廿二日

一、昨日八半時比强雷に而堂形御馬場ゟ殞候に付、今日各出席切勝尾半左衛門を以相伺御機嫌候事。

但、翌日相伺之儀先年御細工所ゟ殞候節之振也。

七月廿五日。分銅改の爲。後藤四郎兵衛の名代金澤に來る。

〔郡方御用留〕

一、今般分銅改之儀、去る寅年於江戸被爲仰付、則諸國順國仕、此節當御領分中分銅相改申度。依之今廿五日上下四人參宿仕候。御觸流より年數も相立候事故、此節相改候儀御領分ゟ御觸流被爲成下候樣仕度、尤高岡・石動・魚津・小松四ヶ所において改場所相立、最寄分銅相改申度、夫々御觸流し被爲成下度此段奉願上候事。

後藤四郎兵衛名代

七月廿五日

松　尾　建　藏

金澤町御奉行所

八月二十日。荒木平左衛門小者に脇刺を帶せしめざりしを以て譴責せら

る。

本年十月の條參照

〔諸事覺書〕

八月廿日

一、左之通御城方より主附江被渡候に付、則平左衛門內記宅江相招、申渡之。

荒木平左衛門

右平左衛門儀、當四日御臺所江罷出候節、草履取脇刺帶不申、橋爪前於御番所右小者指留候に付、其段相達、家來若黨指添相返候。兼々急度申付置候得共脇刺帶不申儀、不念之至奉存候旨、右平左衛門紙面江御添紙面を以被出之。委曲相達御聽候處、不念之至被思召候。以後入念候樣可申渡旨被仰出候條、此段可有御申渡候事。

子八月

八月廿四日。加賀・越中に大風雨あり。

〔溫敬公記史料〕

八月九日・十日加賀・越中大風雨洪水。廿四日復大風雨洪水。民死者一百九十八。被害者一萬四千三百七十有餘家。

〔年々珍敷事留〕

一、當年八月廿四日御國大風、同日夕八つ半時頃より吹出し、家々之屋根等まくり、大木所々に吹折、宗半町淺賀伊織与申人之屋敷内松大木吹折、其下木ノ新保之町人二人通り合、木の下になり、二人とも大怪我有。大樋町端より柳橋迄に並松三十六本吹折、是に准じ山里之諸木、武士町家等風損じあるなり。且雨風也。七つ半時風止。

〔見聞袋群斗記〕

八月廿四日晝頃より大風吹、夕七時前甚强、諸方破損多く、御家老青山將監屋敷内大木之松木を吹倒し、角力取り一人右松木之下に相成死す。野町神明社内見世物小屋吹潰し、怪我人多有之。往還筋並木抔數千本吹折、迚之猛風なり。漸に暮頃靜り候なり。

〔日用雜記〕

八月廿四日

一、今夕八半時頃より俄に大風、處々やねもまくり、屋敷々々之大木、上下町端並木抔も多吹折吹倒、人損も方々有之樣子。大野路にも殺生人躰之者倒有之、死居申樣子。宮腰之濱に而岡田太郎右衞門殿家來之由、虛空江吹上げ落候處、惣身ぐなぐに相成死申候由。舟抔繫有之候處、舟与舟与打合こわれ申候由。御屋敷抔も方々御屋根まくり、御露路之垣・塀抔吹倒候。され共外廻之御園は何れも損不申候。其外には何之御異變も無御座候。上口は並松八

十本計吹折吹倒、下口は五十本餘り吹折吹倒申樣子承申候。四・五十年にも無之大風に而有之候。

八月廿九日。地震あるを以て老臣等前田齊泰の動靜を奉伺す。

〔横山氏日記〕

八月廿九日

一、今曉七時少前地震に付、年寄中之内丹後守・山城守・内膳登城有之、御機嫌被相伺候由之事。

一、右地震に付、今日出席切年寄中・御家老中・若年寄中一列、松之間二之間において、池田保左衛門を以御機嫌相伺候處、追付同人を以御意有之候事。

九月二日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕

九月二日

一、今日九半時之御供揃に而兩學校へ御出に付、内膳・藏人・外記同刻過罷越。八時頃御出、經書講釋大嶋忠藏相勤御聽聞。夫より武學校に而萩原勘太夫門弟柔術組討御覽。夫より田中門弟乘馬御覽。七時過御戻之事。

九月四日。前田齊泰千日町口の郊外に放鷹す。

〔諸事覺書〕

九月四日

一、九時之御供揃に而同刻過御出、御供外記野裴束に而出席、御先町端迄罷越。千日町之端より御出、犀川土手通り入江村領・玉鉾村・高畠村領等御廻、間明村次郎兵衛方に而御小休。夫より東力村領御供田村領等御廻、御供田道通り千日町へ御戻、七半時頃御戻候事。

九月八日。前田齊泰神護寺に參詣す。

〔諸事覺書〕

九月八日

一、今朝五半時之御供揃に而神護寺ゟ御參詣、外記相詰、四時前御戻之事。

九月十一日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕

九月十一日

一、九半時之御供揃に而武學校ゟ御出候。九半時前大炊・左馬助・內藏助・勘解由・外記罷越。

笠間儀左衛門門弟太刀稽古御覽。夫より齋藤十之助門弟乘馬御覽。相濟夕七時御戻之事。

九月十五日。前田齊泰大豆田口の郊外に放鷹す。

〔諸事覺書〕

九月十五日

一、九時過大豆田口より御出、宮腰往還通り所々御鷹野。延之助殿御同道、御先ヘ町端迄被爲入御待合。外記御供に而九時前町端迄罷越、七半時過御戻、外記御暇被下直に罷歸。

御獲柄御拳に而鷺五

延之助殿御拳同　一

九月十八日。千秋喜三右衛門等七夕の夜不法の行爲ありしを以て罰せらる。

〔横山氏日記〕

九月十八日

小堀牛右衛門・久德猪兵衛ヘ　千秋喜三右衛門

右喜三右衛門儀、當七月七日夜淺の川大橋邊群集之場所において、不埒之所業有之躰に付、先達而各を以御尋有之候所、左樣之儀無之趣に申、口上書指出候得共、野村半兵衛弟駒之助申分を以再往御尋に至、右夜於途中駒之助連に相成、短尺竹持來候者に出合候處、右竹喜三右衛門江障候に付、駒之助与兩人に而、竹を引合押倒候儀相違無之候。則口上書取立被指出候。先以右躰之場所江罷越候儀は仕間敷儀。自然用事有之罷通り候はゞ、心得も可有之儀に候處、右躰之所行、暨最初御尋之節押隱罷在候段、侍に不似合儀。且又駒之助申分とも致相違候儀有之。其上常々不埒之所業茂有之躰に付、夫々嚴重御糺茂可被仰付候得共、其段は御用捨、逼塞被仰付候段被仰出候條、可被申渡候事。

九　月

津田權五郎江

野村半兵衛弟　駒　之　助

右駒之助儀、當七月七日夜淺野川大橋邊に而、短尺竹を持來候者共与及口論候躰相聞、同人手前御尋之處、則口上書取立被指出候。及口論候与申儀は不申聞候得共、外より持來候短尺竹相障候由に而、何も打寄右竹を倒、枝等折候儀及兩度候由。群集之場所に候得者、心得も可有之儀に候所、右族は畢竟心得方不宜故之事に候。依之外出指留、愼罷在候樣可申渡旨被

仰出候條、可被申渡候事。

〔諸事留帳〕

御與力筒井清右衛門弟楪之助儀、當七月七日夜山本源次郎弟安之丞等致同道、淺野川掛作り邊にて短册竹引倒などいたし候儀等、其場之様子委曲可相尋旨、御用番長甲斐守殿被申聞、則昨三日呼立相尋口上書取立、御用番江相達、楪之助儀先不致外出様、兄清右衛門江申渡置候條、爲御承知如此御座候、以上。

九月四日　　前田式部

横山藏人様

御與力筒井清右衛門弟楪之助儀、手前可相尋旨當月三日御用番長甲斐守殿江申聞候に付、先達而得御意置候通に候所、楪之助儀口論等有之内江は不加由に候へども、町人共に相交り短尺竹を持、群集之場所江罷越候儀は不心得之儀、外之者申分与相違之儀も有之、夫々可被及御糺斷候得ども、其段は御用捨被成置候條、以後之儀急度相心得、惡敷風儀等無之様得与可申渡旨、今十八日御用番長甲斐守殿被申聞。依而楪之助呼出以後心得方急度申渡請書取立、外出指止置候得共、不及其儀之段兄清右衛門江申渡候に付、爲御承知如斯御座候、以上。

九月十八日　　前田式部

九月二十日。東本願寺、領内の末派に教示の際便宜を得たるを以て使僧を遣はし之を謝せしむ。

〔諸事覺書〕

九月廿日

一、東本願寺殿より末派之輩教示行屆候付、爲御挨拶以使僧被指下、御上ゟ御禮之御口上、曁御進物有之。依而年寄中・御家老中・若年寄・寺社奉行ゟ茂、御使者を以贈物も有之。今日は各宅ゟ御使者相勤、御贈物各受納之筈候旨、月番より演述。御使者常德寺。

御口上書

先般御國内末派之僧分教誡之節、御國法により厚御取扱之故、教示末々迄行屆、深御滿足思召候。右御會釋使僧を以被仰入候。猶時候爲御尋、目錄之通被相贈之候。

御贈物目錄年寄中に五端一箱、御家老中等ゟ三端一箱

扇子　一箱　木具居

縮緬　三端　同

一、右御禮、東末寺ゟ以使者役頭申遣事。

文政十年六月朔日の條參照

九月二十日。辰巳上水江筋の管理に就いて令す。

〔御觸抜書〕

覺

一、辰巳上水江筋ゟ塵芥捨申間敷事。

一、穢敷品等洗流、幷洗足抔堅仕間敷事。

一、猥に水汲取申間敷事。

但、若火事之節者格別之事。

一、小立野石引町通江筋玉縁之上を踏荒申間敷事。

一、江筋御普請所石垣上石等取はづし申間敷事。

右辰巳上水より御泉水ゟ塵芥等流込候付、右樣心得違之者無之樣、文政六年に茂一統嚴重申渡置候處、又候近頃者心得違之者有之哉、塵芥等流込、其上石垣上石等取はづし、每度不時成損所出來いたし候旨等、御普請奉行及斷候。依之以來心得違之者有之候はゞ、見受次第召捕候樣、夫々申渡置候條、御家中末々に至迄心得違無之、急度相守候樣可申渡候事。

右之通被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配ゟ茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

九月廿日　　長甲斐守

九月廿二日。前田齊泰堂形馬場に於いて乘馬を試む。

〔諸事覺書〕

九月廿二日

一、今日八時過堂形御馬場に而御乘馬被遊、年寄中拜見。各乘馬も被仰付候由之事。

九月廿五日。前田齊泰大豆田口の郊外に放鷹す。

〔諸事覺書〕

九月廿五日

一、九時之御供揃に而大豆田口より御鷹野へ御出、外記御先江罷越。七半時過御戻、外記町端に而御暇被下罷歸。

御拳に而靑鷺一。御脇鷹鳫一。

十月四日。宗門改の書附を幕府に提出す。

〔官私隨筆〕

十月朔日

一、宗門改書附等宗門奉行里見七左衞門出之、改帳等御横目本保平太夫出之、夫々松之間二之間に而請取。

公儀へ之書付如左。

一、切支丹宗門從前々無懈怠、今以相改申候。先年被仰出候御法度書之趣彌相守、能登國之内松平加賀守へ御預所、幷加賀守領分在々所々至迄遂穿鑿、家中之者下々迄是又致僉議候所、不審成者無御座候事。

一、古切支丹幷轉之者之類族、常々之行跡疑敷儀無御座候事。

一、御預所幷領中在々所々、家中之者下々またものに至迄、若此以後不審成者於在之者早々可申上事、以上。

文政十一戊子年十月四日　　奥村丹後守　印判

長甲斐守　印判

松浦伊勢守樣

佐野肥後守樣

十月十一日。大聖寺侯前田利之使を金澤に遣はして上野靈廟修理費を上

納し得たることを謝せしむ。

〔横山氏日記〕

十月十一日

一、備後守様御使者野口兵部、八時過登城、虎之御間に溜、備後守様より年寄中・御家老中江御口上之趣有之由、御奏者番青木新兵衛申聞候に付、只今御使者江逢候旨、表方より爲知有之、年寄中一切、御家老中一切罷出候處、御謎之趣左之通御使者申述候事。

御家老中

中將樣益御勇健被遊御座、目出度御儀思召候。次に各御無異珍重思召候。今般上野御靈屋御廟向等御修覆御用御上納金、以御威光前月廿六日御堅納首尾能相濟、忝仕合思召候。各江も御心盡之程御大慶思召候。今般爲御禮以御使者被仰上候付、右之段被仰遣候。此段宜申述旨被仰付候。

十　月

十月十一日。金澤町奉行等銀仲預り銀手形を消却すべき議を上申す。

〔諸事留牒〕

十月十一日

一、今日町奉行申聞候は、去年被仰付候銀手形之方江、當年より正米一萬二千石宛町會所江御渡拂立、其代銀を以年々手形御消込之事に御取極御座候に付、當年分右御米高代銀に而も御渡之儀、先達而より度々御達申、御算用場江も色々御僉議御座候御容子に候得ども、御手繰方御六ヶ敷哉、未だ御渡も無御座候。右御米代銀を以手形御消込之儀、去年重々御僉議御取極御座候處、其儀相違有之候ては、不斗一統相泥、手形不受に相成可申哉与、此處甚懸念に奉存、先頃以來折々御催促も仕候へども、是迄之處は先手形之請も宜、正銀与之間も格別に相立不申、且は御手繰御六ヶ敷儀も奉恐察罷在候故、强而御消合之御達も不仕相見合罷在申候所、然るに頃日米相場追々引上、地米七十三匁迄に到り、金相場抔も六十九匁餘に相成、錢相場も高貴至極、夫に準諸物も引上申候。就而は種々加僉議候處、右之通高價に相成候も、畢竟は銀手形遣故与相聞え申候。當時は正銀与手形とは、六匁餘間銀も立申候様子に而、彌增正銀貴く相成、手形は位落仕候道理に御座候。夫故米價も、正銀に直し見候へば六十七匁位に相當、相應之直段に候處、手形故前段之通に御座候。當年は諸國洪水等に而、大坂などゟ米價引上候得者、御國の直段も米價引上候得ども、御國之直段者何分大坂抔にも釣合不申、彼是考合候得者、手形而已に相成候故かと被存申候。金澤表之儀指當不受之儀も不相聞候得共、遠所向に者少右樣之萠も有之哉に而、不正之說も有之躰に被考申候。當時に而は三州共

專手形遣に相成居候儀、自然手形氣請悪敷、不通用に相成候而は不容易儀、何歟騷々敷出來可仕哉与甚以心配仕候。就而は何分先達而御取極之通、當年御渡有之御米代銀全御渡難相成候はゞ、七八分程に而も早速御渡、消合候はゞ可然与奉存候。當時に而者正金銀拂底至極に相成、此躰に而者來春御參勤御入用、曁御供人〻御渡方抔之儀も、何と歟御僉議も無御座而者相成間敷哉に奉存候。尤町奉行手前に而も、色々打碎遂僉議候へども、指當候處全右御取極之通、手形消合無御座候而相成間敷候。手形不受に相成候而者、不一形混雜に及び申儀に候間、御取仕切御僉議御座候様仕度旨、兩人共罷出及達候事。

兩人は町奉行

十月十五日。諸士の風俗に關して諭す。

〔御觸拔書〕

頭々等〻申聞候趣

諸士風俗等之儀、今般被仰出之趣以別紙申渡候通に候。組等指引方油斷有之間敷儀は勿論之儀、組·支配に而無之共、善悪之儀見聞におよび候者、其頭々〻互に心付申談候様、金龍院様より被仰出置、一統承知之筈に候得共、猶更相互に申談、御趣意通相整候様被心得候儀尤に候事。

十月十五日　　横山山城守

諸士風俗之儀、前々より被仰出之趣有之、就中文政三年從金龍院樣分而委細被仰出、一統申渡、其後追々御教諭被爲在、風俗茂次第立直り候處、全不被爲遂、御逝去被遊候に付、文政七年閏八月從中將樣、右御先代被仰出置候品々、彌以無忘失可相守旨被仰出、且又惣而翫事に耽り候得者、志を失、文武之心懸茂薄相成故、一旦被禁候事共有之候得共、御解之品茂有之、尤御解之外は彌堅可相守旨等、同年十二月被仰出、其時々一統申渡置候間、實意に相守、追々善行に押移候樣、志を勵可申處、近來何となく人氣相弛み、子弟之教育茂不行屆、諸稽古茂怠勝に而、翫事は致增長、舊染之風俗に立戾候躰粗相聞え候。右之通段々被仰出之趣、恭畏罷在ながら、無程右樣之族は、爲士者之心得には有之間敷儀に候。其內近く不行狀之者相顯れ候者は、被仰付方茂有之候。以來者急度相守、御趣意に戾不申樣、相勵可申候。若此上心得違之人々茂有之候者、不得止事嚴重に被仰付方可有之候事。

右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々ゟ入念可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配ゟ茂申渡候樣可被申聞候事。

子　十　月

御公界向相勤候着服之儀、文政七年被仰出置候處、近年漸々宜敷品を用ひ候事に相成、美に移候躰相聞え候事。

一、女衣服之儀も追々花美に立歸候躰、召仕之女共着類も右に准じ花美之躰、親・夫等幷主人々々申付方不行屆之故に候事。

一、諸殺生之儀、岩乘之爲適罷越候儀者不苦段被仰渡置候之處、近頃は致增長、中に者御停止を相背き候致方も有之躰粗相聞え、是等者沙汰之限りに候。且亂舞も甚流行いたし、右等に付諸稽古も怠候哉之事。

一、諸番所之儀、古參之者申談方行屆、風儀宜敷組々有之、又は前々風儀改り兼候向も有之哉相聞候事。

一、深笠・帽子に而面躰を隱し徘徊いたし候者有之、不宜風躰に候。以來五寸以上之深笠無用、帽子に而面躰を隱し候儀も、尤有間敷儀に候事。

一、婚禮等之節、表向者質素手輕之趣に而、內證に而者入用多之儀抔有之哉に候事。

一、琴・三味線之儀も、祝事等之譯無之而も家內翫候人々有之、被仰渡に戾、次第に流行候躰之事。

一、兩學校出座人、幷諸師範人宅々之稽古も、出座段々相減申躰に候。改而被仰出等有之砌者、連々相進み候得共、無程右之通相成候段者、人々心中恥入可申儀、子弟之儀は親・兄之心得等閑之故に候。中に者始終無怠慢、文武共心懸之人々有之儀も被聞召候へ共、怠勝之人

々多、次第に出座も薄相成候儀者、士之本意を失申儀に候。心懸神妙之人々者、時々頭・支配人幷學校主付より可申聞候事。

一、諸師範人は、弟子中指引方等無油斷儀者不及申事に候得共、自然も依怙贔負之樣成儀有之候而者、不進に成候儀も可有之候條、平等爲相勵候儀肝要に候事。

右之通、段々風俗立戻候躰に付、今般改而被仰出有之儀に候條、組・支配之人々へ得与可被申示候。此上心得違之者有之候得者、聞しらべ之儀申渡置候趣も有之候。召仕之女共衣服花美之儀、幷御停止を背躰之殺生、曁深笠等之儀は、役人共爲見咎可申候。且又常々組等指引方油斷有之間敷候へども、以來尚又右等之躰無之、被仰出通相守、文武之道相勵、往々御用立候樣可心懸趣、無油斷申諭可有指引候。其上にも心得方不改人々も有之候者、被及言上候歟、又者拙者共迄內々可被申聞候。善行之人々出來候はゞ、同樣言上等可有之候事。

子十月

覺

一、亂舞之儀段々被仰出置候所、近く甚増長之躰相聞候事。

附、年若成人々抔、右に付文武之勵薄く、學校幷諸稽古所出座も又々相減候躰之事。

一、內輪向惣躰慕方等之事。

附、今般御借知改而就被仰付候、從者召連方減少迄も被仰渡候に付而者、猶以心得可有之事。

一、內輪之祝事にも、盲人渡世之爲め、日之內相招候儀被仰渡置候所、右に相背き心得違之招方、且刻限も移り申躰之事。

一、參會、幷女子向打寄与申立、遠き續之家內迄も每度人多に打寄候儀は、心得も可有之事。

一、軍書語之者を相招候參會增長之躰之事。

一、女子向衣服又々花美に立戾り、幷銀簪・木櫛に、種々手籠り入用多懸り申品を用ひ、縮緬くゝり紐曁色々縫物有之半襟抔相用申躰之事。

一、一類を始音物取遣候儀增長之躰、且他國詰人へ進物、曁留守より取寄申儀抔、心得も可有之事。

一、御家中之人々幷家內共、旦那寺に而も無之ヶ所へ參詣增長之躰之事。

一、殺生之儀は爲岩乘程能可罷越儀に候處、近くは是又致增長、中に者甚心得違之人々も有之躰粗相聞え、おのづから文武勵方之妨にも可至哉之事。

以上

十月十六日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕

十月十六日

一、九半時之御供揃に而兩學校へ御出に付、同刻前甲斐守・左馬助・將監・內記・外記罷越。同刻過御出、武學校に而小嶋喜兵衞等軍螺御覽。夫より學校に而人持子弟等會讀御聽聞。相濟、重而武學校に而矢野久左衞門門弟劒術御覽。相濟七時頃御戾候事。

十月十八日。前田齊泰大豆田口の郊外に放鷹す。

〔諸事覺書〕

十月十八日

一、九時不遲之御供揃に而同刻過御出、大豆田口より御鷹野、將監御先へ町端迄罷越御供、所々御廻り七半時過御戾之事。

御拳に而青鷺一。

十月廿一日。銀仲預り銀手形の發行額三分の一を正銀と引替ふべきことを告ぐ。

〔諸事留牒〕

十月十一日の條參照

十月廿一日

一、先達町奉行申聞候銀手形之儀、御算用場奉行ゟ遂僉議候處、御算奉申聞候は、只今之處に而者、札不受に相成、引替不被仰付而は人氣之崩に相成候間、引替被仰付可然与遂僉議候。當時手形八千貫目出居申候。右之內小割札等相省き、百目之手形六千貫目有之。右之內三の一正銀に引替被仰付候樣遂僉議候段、且引替等之儀も申聞、右之趣表方ゟ相達、今日にも指出可然。ヶ樣之儀は少しに而も沙汰有之候而者不可然、存掛無之處ゟ觸出候はゞ、人氣も別而引立可申儀に候。早速被仰出候樣仕度旨、高田善右衛門を以相伺候處、卽刻伺之通被仰出、則月番より觸出有之樣申談候事。

〔御觸拔書〕

當時金・錢相場段々高貴に相成、不通用に而一統可爲難澁儀に候。元來正金銀拂底に而、銀手形專通用故、相場に相響き高貴に至候儀茂相聞え候。依之右通用之銀仲共手形惣高之內、先三ヶ一正銀与引替可申候。引替方委曲之儀者別紙之通に候。

右之通被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配ゟ茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十月廿一日　　　　　　　　　　　　　　横山山城守

御領國中當時通用銀仲共預り百目銀手形之分、今般惣高之三之一正銀に引直し、三之二は改而増印いたし可相渡候間、銀手形所持人來月十六日より十二月十日迄之内偶日毎に御算用場ゟ差出引替可申候。若右日限迄に引替相殘候分は、來丑の正月廿日より同二月中に引替可相渡候事。

但、二月中迄に引替等に不指出、増印無之分は、三月より通用指止可申候。

一、右三の二に當る増印手形之分は、正銀取下し次第、是又追々引替可相渡候事。

一、小割銀手形は此度不相改、是迄之分を以通用可致、依而此分は引替に不及候事。

一、右引替方之儀、尙更算用場可承合候事。

子　十　月

十月廿六日。年頭等に献上する太刀馬代又は御禮錢に銀札を用ふる場合の手續を令す。

〔御觸拔書〕

定番頭ゟ

別紙寫之趣被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配ゟ茂相

達候樣可被申聞候事。

右之通一統可被申談候。

十月廿六日　　　　　　　　横山山城守

御家中之人々、年頭を初献上之御太刀馬代、幷御禮錢代銀、御進物所ゟ上納方、中に者銀札に而上納之人々茂有之、於御進物所しらべ方相混候付、右銀札に而上納之人々、銀札壹枚充に名印記封じ候而、上書何匁何分与銀高調、是又名印記、封じ目に茂致印章、且又裏に何匁札何枚何分代錢何十文与調、右鳥目こよりにて繫ぎ、一集に封じ込致上納候樣仕度、此段頭・支配人ゟ夫々被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

九月　　　　　　　　　　上坂圭鈴

長甲斐守殿

十月廿六日。家中の人々百姓より納入せしむべき餅米の額を減少せしむべきことを告ぐ。

〔雜事日記〕

御家中之人々每歲爲納候餅米高多き方茂有之、百姓及迷惑候に付、減方之儀去年申談、則被書出候得共、中に者減方少き人々茂有之候間、今一篇減方申談候樣、御用番年寄中被申聞候。

右去年格別減方茂無之候間、猶更精誠被相減、其段百姓ゟ申入、去年納高之內何程減与申儀、去年之振に被書出、且又難減人々有之候はゞ難減趣意紙面取立、早速可被指出候、以上。

十月廿六日　　御算用場

十月廿七日。明年年頭の作法を簡易にすべきことを告ぐ。

〔諸事覺書〕

十月廿八日

一、左之通表方より被申談。

當時格別御省略之御時節に付、年頭御作法も今一篇嚴敷御省略被仰付候付、御家老・若年寄之外、人持・頭分之面々、來年頭より當分、一統御禮に被仰付候段被仰出候事。

十月廿七日　　横山山城守

十二月十三日

御横目ゟ

來年頭御禮、人持・頭分當年一統御禮に就被仰付候、御禮之節御太刀献上之分者、目錄迄人々前に指置可申候。新番頭以下是迄御禮申上候分は、青銅人々前に指置可申候。平士等献上之青銅人々前に指置候儀、被指止候段先達而申渡候通之事。

一、元日者是迄六時揃に候得共、一統御禮に相成候付、元日は五時不遲、二日より二月朔日迄五時揃相成候事。

一、御謠初に罷出候人々揃刻限は、是迄夕七時之處、御初り多分遲相成候故、人々出刻限も何となく遲刻相成候。來春よりは御始早く被仰付候條、七時不遲人々罷出可申事。

右之趣不相洩樣、夫々可被申談候事。

十二月

十月。本年八月に於ける領內風雨被害の狀を幕府に屆出づ。

〔成瀨掃部留書〕

一、御領國洪水に付御屆書

加賀國越中國洪水損失家等之覺

一、五十一軒　越中國流失家

一、五百五十六軒　潰家

內二百八十二軒　加賀國潰家

二百七十四軒　越中國潰家

一、二千三百六　潰納屋

内四百九十　加賀國潰納屋
　千八百十六　越中國潰納屋
一、二ヶ所　越中國潰社
一、二千八百五十六軒　半潰家
内千六百八十六軒　加賀國半潰家
　千百七十軒　越中國半潰家
一、三千八百軒　損　家
内三軒　加賀國損家
　三千七百九十七軒　越中國損家
一、四千七百九十軒　越中國水付家
一、九十ヶ所　越中國流失橋
一、二十一ヶ所　越中國損橋
一、百九十人　溺死人
内一人　加賀國男
　百七十七人　越中國男

十二人　越中國女

一、百二十九艘　加賀國潰船

一、牛馬怪我無御座候。

右拙者領分去八月九日・十日・同廿四日大風雨に而、川々出水流失家等右之通に御座候。此外川除押流・岸崩等數多御座候。此段御屆申達候。損毛高之儀は追而收納之上御屆可申達候、以上。

十月　御名

十一月八日。前田齊泰來年參覲の期を三月と定められたることを告ぐ。

〔諸事覺書〕

十一月八日

一、來春御參勤御時節御伺候處、三月中与被仰出候段御老中方御連名之御奉書、表方に而各拜見、恐悅御用番へ申述候。

十一月九日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕

十一月九日

一、九半時之御供揃に而兩學校ゟ御出に付、九半時前大炊・左馬助・將監・勘解由罷越。八時過御出、學校に而生徒會讀御聽聞。夫より武學校ゟ被爲入、吉田□長刀稽古御覽。相濟七時過御戻之事。

十一月廿三日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕

十一月廿三日

一、九半時之御供揃に而兩學校ゟ御出に付、同刻甲斐守・左馬助・將監・外記罷越。八時過御出、武學校へ大田鍋次郎門弟劍術・柔術等御覽。夫より學校に而易學古法等御聽聞。相濟七時過御戻之事。

十二月五日。禁牢者の死刑・拷問等の除日を廢す。

〔御用番中心覺留帳〕

十二月五日

一、四つ時過致登城候所、御用番大炊殿於御座左之覺書被相渡候事。

付札、公事場奉行ゟ

毎月七日　同廿七日　七月廿八日

右三日共公事場禁牢者死刑・拷問等相扣候様被仰出置候得共、以來者不及相扣段被仰出候事。

戊子十二月

十二月十二日。町人小松屋太助道路に於いて傷けられ銀子を奪はる。

〔御用番中心覺留帳〕

十二月十三日

一、今朝役所出前町奉行より紙面に而、野町三丁目小松屋太助儀同町於往來被疵付候而銀子等被奪取、相手迯去不相知旨等、組合頭斷書指出候旨に而、檢使乞に付追付役所へ出候間、公事場へ返事取に參候樣使へ爲申入置、役所へ出候上早速返事におよび、早速檢使番武惣右衞門へ右書付等相渡、國枝淺右衞門申談遂披見候樣と於溜檢使申渡候事。

一、晝九つ半時比盜賊改方澤田九内より、割場附新組小者久七与申者樣子有之召捕相糺候所、昨晩小松屋太助へ手を負せ、銀子奪取候旨等申顯候。右檢使公事場より申渡候樣子に候間、久七儀申達次第可引渡旨等、以紙面申越候に付、右之者引請方之儀檢使之者へも相尋候上可申達旨等及返事候事。

十二月十四日。藤内頭より乞食取締の件に付き上申す。

〔異部落一卷〕

一、惣而金澤に乞食多集候者、惡事仕候基に候故、散乞食等致吟味、出生相知候はゞ其在々江藤內送り申付、或は品に寄十村番代等にも申付候。老人・子供・女等者用捨候而も、年若達者成、惡事も可仕躰之者第一に改申儀に候。凶年抔に者、在々より大分之乞食出申候。左様之節者手茂及不申、其上及渴命候者、責而金澤江罷出乞食可仕候より他無之事故、用捨も仕候事に候事。

一、以來乞食札申請、柳原等へ入度与申者、非人頭召連候得者、仁藏・三右衛門同人手代一人宛打寄、生所等得与承り、其上に而札相渡可申旨。且又其人面躰等見知置候様に手代共並非人頭江も爲相心得可置段、昨十三日御公事場より被仰渡候に付、御屆申上候、以上。

文政十一年子十二月十四日　藤內頭

十二月十五日。前田齊泰能を演じ老臣等をして觀覽せしむ。

〔諸事覺書〕

十二月十五日

一、今日御能被遊候付、望候人々は勝手次第拜見之儀被仰出、九時過初り、內藏助・藏人・內記・外記拜見、勘解由儀は八時迄拜見。御能暮六半時頃相濟、御近習頭を以御禮申上退出候事。

〔官私随筆〕

十二月十五日

一、今日御能被遊候付、望次第拝見被仰付由、御用番演述御禮申述候。

一、九時過御能初る。

張良　六右衛門　景清　宮門　葛城　御

鍾馗　延之助殿　亂　御

墨塗　清水座頭　縄なひ

一、御能済いづれも列座、以才右衛門御禮申上候。伊勢守・丹後守・又兵衛は、延之助殿御能初而拝見に付進み出御禮申上候。

十二月廿七日。本多左馬助を叙爵し播磨守と稱すべきことを告ぐ。

〔官私随筆〕

十二月廿七日

一、何も御前へ被召候由に付、甲斐守・丹後守・大炊・又兵衛・内膳一集に御前へ罷出候所、故土佐守代諸大夫御願置被成候所、去十六日御名代淡路守様御登城、御願之通被仰出難有被思

召候。依之本多左馬助儀叙爵被仰付、名をも播磨守と被仰付候。追付可被仰渡候間誘引可仕旨、段々御意。諸大夫御願之通被仰出恐悦之至奉存候旨、甲斐守御請申上候處、山城守・初丸へも甲斐守より可申談旨御意。奉畏旨御請。且又若年寄へも可申談旨被申上、退去。其次伊勢守被爲召、其次左馬助甲斐守誘引罷出被仰渡、其次音吉被召、其次御家老中也。御意之趣は暗記を以記し相違あるべし。前帳なども不引合也。

十二月廿八日。酒・醬油等を販賣する者は樽吟味人の極印を施したる樽を用ふべきことを令す。

〔御郡典〕

能・越町・在酒造等、樽升目を以致商賣候者共、以來縮方左之通。

一、酒・醬油屋は勿論、惣而樽升目を以致商賣候者共、樽大小共買入候節、樽吟味人見屆之、燒印無之樽堅取扱申間敷事。

但、口郡は前々より所ゞ口出來之樽相用候由に候條、彼町樽吟味人ゟ改而縮方申渡、燒印見合も出役所ゟ取立置候條、以來無極印之樽取扱候者有之候はゞ、嚴重咎可申付事。

一、升は新京升相用ひ、不正之升取扱候者於有之には、急度咎可申付事。

一、酒小賣幷醬油等、都而升目を以商候品は右同樣之事。

一、所に寄、酒直段之内壹割引抔与申儀も有之由相聞え候條、以來右等之儀致間敷、尤酒屋共店先に酒定直段相調、張出可置候事。

右酒屋共等相調理候處、不正之樽等取扱候者も有之、咎申付候に付、今般改而右ヶ條書之通申渡候間、猶更以來嚴重可相心得、若不正之樽等取扱候者於有之に者、急度可申付候條、得其意、此段不相洩樣可申談者也。

文政十一年十二月廿八日　高木圭稅

口郡村々役人

十二月廿九日。町會所より勝手仕送を受くる諸士の心得を令す。

文政十二年六月七日參照

〔御觸拔書〕

於町會所勝手仕送之人々、いかにも艱難に相暮、不時入用受取申間敷旨等、是迄每度被仰出之趣茂有之候之處、人情立戾り易故に茂候哉、今以不時願不少躰。尤頭・支配人手前において、重々穿鑿之上願付有之儀与者相聞得候へ共、元來仕送り之人之儀者、最早難澁に迫、自分才覺に而者難取續、勤仕に茂指支候に付、不得止事仕送相願候譯に候得者、幾重に茂艱難に相暮、定圖り之外は一圓不時銀受取申間鋪覺悟に可有之處、中に者暮方自由之族茂有之躰。就中近年仕送人外出御指解に付而者、おのづから心得方茂相弛、不時入用に茂響候哉、兎角

實意行屆兼候故与相聞得候。殊更多借之人々は、漣々彌増之貸付に相成、此後幾年相立候共、自分收納高借銀之利足に茂不相當、畢竟勝手引取之期茂難取圖、其上町會所において茂當時追々調達銀茂相嵩、利足銀等過分之償に相成、共節之手操方も指支不容易躰に候。今度御家中風俗等之儀、重而被仰出之趣も有之、いづれ仕送人之儀者、極難澁に而御難題相願罷在候儀候へ者、尋常之人々暮方与者、猶又格別節儉を守候心得無之而は不相濟儀に候。就而は心得方之儀別紙之通可申渡旨被仰出候條、自今嚴重相守、何分御難題不相願樣可心懸儀肝要之事に候。仕送無之人々茂、省略方之儀急度可相心得候。

右之趣被得共意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得共意候、以上。

十二月廿九日　　　　　　　　　　前田大炊

町會所仕送之人々暮方等心得之事

一、仕送中惣而音信贈答者申に不及、尤無用之參會、曁內輪祝事・節句・祭禮を初、年頭諸節、都而祝事指止可申候事。

一、仕送人身近爲親類共、吉事等之節音信物一切致間敷候。勿論一類之內仕送人有之人々者、

仕迻人之方ゟ是又音物不致趣に可相心得事。

一、諸稽古に罷越候儀者不指支候。併稽古に事寄せ、猥に外出之儀者心得可有之、勿論殺生等に罷越候儀者堅指止可申事。

一、從者之儀、馬持以上之人々は、頭分たり共平日鑓爲持不申、四百石以下之人々茂小者一人召連可申事。

但、本文に准じ家來數茂相減じ可申事。

一、先祖等年忌・茶湯之儀は、至而輕く可執行事。

右之外萬端準じ、格別可遂省略候。尙更頭・支配人手前において、心得方之儀嚴重可申示候事。

十二月

定番頭ゟ

町會所仕迻人心得方之儀に付、今般一統申渡候通候。右箇條之內年頭諸飾茂指止可申与有之候處、最早歳晩に相成、夫々飾付いたし候分者、來春之處は先其儘に指置候而茂不苦候。以後之處は本文之通爲相守可申候。

右之趣爲心得申聞候條、頭・支配人ゟ可被申談候事。

子十二月廿二日　　　前田大炊

十二月。領内の櫨實・漆實を一手に買集めしむることを許す。

〔御觸留抜書〕

附札、惣年寄・年寄並ゟ

金澤小立野新町釣部屋長左衛門・石川郡鶴來村米屋傳兵衛兩人に而、御領國中櫨實幷漆實買集、生蠟製法株商賣之儀願出、御算用場において聞届有之。櫨實等出來之時右兩人相廻り、其時節之相場を以買取申筈に候條、以來右兩人之外々賣致間敷、勿論他國へ差出不申樣夫々御申渡可被成候。且先々御廻達落着より御返可被成候、以上。

子十二月　　　吉田兵馬

稲葉助五郎

青木多門樣

文政十二年

正月朔日。前田齊泰金澤城に於いて年頭の賀を受く。

〔横山氏日記〕

初丸は前田氏、音吉は長氏

正月元日

一、四つ時過御出、御先立石野雅樂助、於御小書院、諸大夫之面々、幷年寄中・初丸・音吉・御家老中・若年寄迄御禮、御奏者番披露。相濟、直に御大廣間江御出、御下段に御着座、人持・頭分一統御禮、年寄中・初丸・音吉伺公、御奏者番披露之事。

但、諸大夫之面々大紋着用無之。

一、右相濟被爲入、鶴之庖丁御覽被遊候事。

〔官私隨筆〕

正月元日

一、今朝五時前登城、半上下也。

一、四半時前にも候哉列居宜旨に付、各御小書院御禮之列に付候。瀧之間之内に段々列座、御用番は常之伺公所に被在候。追付御出之所を見請、御奏者番へ會釋して、さて列居之所へ被罷越候也。甲斐守初段々御禮濟、自分は御敷居之内三疊目之頭也。初丸御禮之節、自分共側に罷在致指引候也。御禮濟候而各伺公所へ罷越、若年寄迄畢る。

一、右より直に御大廣間へ御出、人持・頭分一統御禮、御奏者番披露。甲斐守初いづれも伺公。畢而一先被爲入、鶴之庖丁御覽。

一、二番座御禮人列立宜候上御出、最前相殘候頭分幷御大小將より坊主頭迄御禮、伺公等右同斷。被爲入候後九つ承候。

一、二番座御禮前松之間二之間に各列居、御膳奉行罷出、鶴之御吸物御下御內々被下候旨演述。初丸・音吉も一列に而拜聽候。

一、其後御臺所奉行席へ罷出、御のし被下旨御用番迄演述、御用番より其段演述あり。

一、二番座相濟候上、松之間二之間にて御熨斗頂戴、其時も一統列座也、相濟以御臺所奉行御禮申上候。若年寄は不被罷越。

一、追付於同所鶴之御吸物被下候。給事坊主。御吸物出、御盃出、御酒一獻、其次御取肴、又一獻、其次再進、又一獻、以上三獻なり。頂戴中御意も無之、相濟御膳奉行へ御禮申述候。

一、右以後退出八時前也。

正月二日。前田齊泰年頭の賀を受く。

〔官私隨筆〕

正月二日

一、御表宜旨申上、於御大廣間昨日當番之惣頭等御禮。相濟、被爲入候時分於柳之間御役者共御目見。此所內膳夫より御居間書院三之間之御目見濟候而、舟之間に而御表小將御禮、甲斐守

伺公。

正月三日。前田齊泰年頭の賀を受く。

〔諸事覺書〕

正月三日

一、四時前寶圓寺・天德院へ御參詣。御先詰外記罷越。四半時頃御戻候事。

一、九時頃御大廣間に御出、御先立外記御襖披之。定番御馬廻・組外・諸組小頭・與力等一統御目見、被爲入候事。柳之間において檢校其外町人共兩席御通懸り御目見、披露御奏者番。相濟被爲入、御先立同前。

正月四日。前田齊泰年頭の賀を受く。

〔官私随筆〕

正月四日

一、列立宜旨申上、御出、於松之間隱居幷子供御目見、甲斐守・丹後守・山城守御左に伺公、御用番播磨守・內膳・音吉御右に伺公。

一、御小書院横廊下より松之間へ入候口之杉戸立切置、御横目共內に伺公。御禮濟候上杉戸明け候付、何も御小書院之伺公所へ罷越。

一、追付於御小書院伊勢守御禮、尤獨禮也。諸大夫御禮所に而御禮被申上。畢而於御大廣間御射初御覽、吉田權平・中西□也。兩人共御覽、畢而被爲入。

正月六日。前田齊泰寺社方の年頭の賀を受く。

〔官私隨筆〕

正月六日

一、甲斐守・丹後守・山城守・播磨守・大炊・內膳賞檢之間へ罷越、總持寺・寶圓寺・天德院・瑞龍寺へ逢、夫より如來寺・玉泉寺・桃雲寺に逢候也。勝興寺は今日不參。

一、列居宜旨申上、御出、於御廣間寺社方御目見、相濟被爲入。

正月十二日。前田齊泰如來寺及び天德院に參詣す。

〔諸事覺書〕

正月十二日

一、今朝寶圓寺へ御代香勘解由相勤候事。

一、四時前御裝束に而如來寺江御參詣。夫より天德院へ被爲入、御裝束被召替、御拜相濟御戾之節、御大御式臺より被爲入、階上に年寄中伺公、階下に御家老伺公、惣年寄・御扶持人等御通掛御目見、御奏者番披露、御先立將監。直に御大廣間に御着座、鶴林寺年頭之御禮、

御奏者番披露。相濟被爲入、御先立同前。

一、如來寺御先詰平兵衛、天德院へ外記相勤。四半時頃御戻後出席。

正月十四日。前田齊泰東照宮及び神護寺に參詣す。

〔諸事覺書〕

正月十四日

一、今朝四時之御供揃に而御宮へ御參詣、御先詰平兵衛罷越。夫より神護寺御佛殿へ御參詣、御先詰將監罷越、四時過御戻之事。

正月十四日。綿羊の飼育現在數を調査す。

〔諸雜〕

正月十四日

一、御拜領綿羊數左之通。

七疋御拜領之內、牝一疋・牡二疋殪。

當時四疋。

右出生之子十一疋牝・十二疋牡。

都合廿七疋當時之高。

正月十五日。前田齊泰年頭の賀を受く。

〔諸事覺書〕

正月十五日

一、御表宜段申上、四時前追付御出、御奥書院御下段へ御着座、小松御城番一人幷御番頭等、松之間二之間に座付之御禮、御襖開之御目見。夫より御小書院へ御着座、神野文太郎御使歸之御目見。相濟、矢天井之間に而遠所在住・煩等に而不罷出平士等一統御通懸り御禮。夫より御大廣間へ御着座、寺庵方御禮。相濟被爲入、御先立同前。

一、四半時各退出之事。

正月十九日。例により鏡直しの祝儀を行ふ。

〔諸事覺書〕

正月十九日

一、今日御鏡餅御祝に付、年寄中等定刻より熨斗目・上下着用出席。

一、四時過御居間書院へ御出之事。

一、松之間二之間に而年寄中・御家老中列座、御鏡餅頂戴。相濟、御臺所奉行荒木平左衛門へ御禮申述事。但若年寄は蔦之間に而頂戴之事。

一、右相濟、四時過退出。

正月廿四日。前田齊泰の江戸に携行すべき軍書の提出を命ず。

〔諸　雜〕

正月廿四日

一、左之御軍書追々御稽古可被爲在趣、先達而申上有之候。依而右御書物南御土藏等に可有之候間取揚、江戸へ御持せに相成候樣にと、今日才右衛門申聞有之。

軍法之卷曉困抄　　末　書　通　解

結要本通解　　改正甲陽軍鑑

才右衛門は有澤貞庸

正月廿六日。能登奥郡海邊手當として御異風二人を發遣すべきことを決す。

〔覺　書〕

正月七日

一、海邊御手當方之儀に付、岡田太郎右衛門・志村平之丞より僉議之趣書出候處、太郎右衛門等に今一往相尋候趣共御座候間、右答書指出候上に而奉伺儀も可有御座候。右紙面之内、大

坂井流は酒井流

筒方御異風夏中能州輪島崎邊江一人宛遣置、足輕ども少々召連候樣有之可然旨書出。尤此儀は御馬廻頭一統僉議之趣、先達而堀孫左衛門・神田吉左衛門江被仰渡置候時分より書出。能州奥郡へ相詰候破損船裁許三人頭々書出を以申渡候内江、御手當方御用申渡置候御異風四人之内兩人、右破損船裁許申渡被遣置候へば、右船裁許向御用は難船次第取捌有之、其餘御用も無之役向に付、右御用之透に兼而被仰出置候大筒臺場等之儀内密取しらべ、および中居に有之大筒も遂見分、小道具等不足之分は夫々書出候樣申渡候はゞ可然。尤御異風兩流に而四人御手當方申渡置候內、兩人充代る〴〵右破損船裁許之內江差加候樣可被仰渡置候哉と、何も僉議仕候に付奉伺候。猶更被仰出次第奉心得候、以上。

右以保左衛門入御覽候處、二十六日以保左衛門伺之通被仰出。但兩流之處御詮議有之に付、今年は坂井流被遣候旨被仰出。

〔覺　書〕

一、左之通御親翰以兵左衛門被渡下。

去々年在府中、指懸り候趣に付、海邊手當方大筒打人之方江、持方足輕共之内當分渡置候。永續之事に候得ば、先達而も申出置候通り、割場足輕之内を以當春發途前に取替可申候。且又豊島流・酒井流兩流之儀に付申出置候得共、打返相しらべ候所、是式之儀兩流申渡候儀も

少与かさ高に候間、以來は一流之事に可申渡候。割場足輕共多分酒井流之由に候間、此度足輕共取替候序に酒井流迄に改被申渡、馬廻頭与中嶋誠左衞門遂示談、足輕數等相極候樣被申渡、各江相達候はゞ達聽有之、其上割場奉行江可申渡候、以上。

正月廿六日

年寄中

正月廿八日。御普請奉行村田九郎右衞門等配下御步の家に赴き酒宴を催したるを以て處罰せらる。

〔横山氏日記〕

正月廿八日

一、左之通り表方において申渡有之。

前田源兵衞江

村田九郎右衞門

右九郎右衞門儀、御普請方役先之者方江罷越及酒宴候族。風俗之儀前々より被仰出、近頃も被仰渡有之處、頭役被仰付置候身分に而、別而心得違甚不屆に被思召候。依之本役・兼役共被指除、遠慮被仰付候條、可被申渡候事。

丑　正　月

志村平之丞ゟ

土肥三左衞門

右三左衞門儀、役先之者方ゟ罷越、不心得之儀有之に付、役儀被指除、指扣被仰付候條、可被申渡候事。

丑　正　月

定番頭ゟ

御普請會所棟取役定番御步　岸井太助

右太助儀役頭之者相招き、不心得之儀有之候に付、役儀被指除、指扣被仰付候條、可被申渡候事。

丑　正　月

正月。降雪多きを以て士庶の年賀の禮を來月に延期す。

〔歲々略曆〕

文政十二年正月朔日より雪大吹雪に而七日迄、同廿三日より大雪に成、去雪より凡貳丈餘と申候事。武士樣・町方年賀二月中に相定り申候。

本文は老臣某氏の家來の記錄なり

〔年々珍敷事留〕

一、舊冬より雪降る。元日より三日迄雪降風烈敷、夫より餘日も毎度雪降り、同廿四・五日續て降り、御屋敷御家中一統雪卸し被仰付。併幼少者且五十歳以上之人々へ、志次第被仰付。人々木鋤板・燒飯持參、御步組より御賄被下置。惣給人より御小將組まで御稽古所へ溜り申事。御步組御步部屋、足輕組割場之事。但し廿六日・七日兩日也。廿七日御酒被下置、尤一統之事。同日御前御稽古所へ御出被爲遊候而、何茂不時成大儀与御意被爲遊候。近年無之大雪、家損じも所々有。

二月朔日。前田齊泰年頭の賀を受く。

〔官私隨筆〕

二月朔日

一、列居宜旨申上、御出、於御居間書院御使歸兩人御目見。相濟、於松之間小松御城番等一統御禮、何も伺公。相濟於御小書院、役儀之御禮等。畢而於矢天井間遠所在住平士等御禮。夫より於御大廣間、出仕之面々一統御目見、丹後守御取合申上。矢天井之間御禮人退候上被爲入。

矢天井間伺公播磨守殿也。

二月二日。前田齊泰能を演ず。

〔諸事覺書〕

二月二日

一、今日御能被遊候に付、年寄中各幷内藏助・外記拜見相願候事。

二月四日。深雪なるを以て本月中乘物を用ふることを許す。

〔御觸拔書〕

御橫目江

深雪に而馬上難成躰に候。仍之今月中乘物乘用御免許に候之條、組・支配之面々江可被申聞候。且又組等之內裁許有之人々者、夫々申渡候樣可被相達候事。

右之趣夫々可被申談候事。

二月四日　　長甲斐守

二月八日。前田齊泰瀧之間に於いて中西巴門をして書を講ぜしむ。

〔橫山氏日記〕

二月八日

一、今朝瀧之御間において經書講釋有之に付、五半時過御出、芙蓉之御間江御着座、御聽聞被遊、四つ時前被爲入。御先立御出之節外記、御入之節平兵衛相勤候事。

但、講主中西巴門。

二月十日。天德院の僧藩侯代理たる家老の燒香中着座せざりしを以て譴責を命ぜらる。

〔横山氏日記〕

二月十日

一、於天德院、近く御家老中御代香相勤候節、先立之出家御燒香相初候時不致着座。前々致着座候所如何之儀に候哉、猶更遂詮議候樣、當六日寺社奉行被申聞置候處、於彼方に不及詮議にも儀、先以御靈屋において御代香之節、不致着座儀不敬之至り候。其上對御家老中、右樣之爲躰沙汰限りに付、不及詮議にも、以來急度相心得候樣嚴重申渡候旨、前田式部より與力西川七郎右衛門を以申聞候事。

二月十三日。前田齊泰夫人登營す。

〔成瀨掃部留記〕

二月十三日

一、姬君樣今日御登城に付六時過出席、追付御供廻り之旨北川久兵衛申聞候に付、御住居江

廻り候處、直に御供に廻り候樣青山四郎左衞門申聞。中之口より御玄關前ゟ出候處、追付御出に付例之處ゟ立、御供いたし罷越。溜ゟ相控居候内神田一平罷越、御目錄相渡、公方樣・御臺樣より拜領被仰付候旨申聞。右は御留守居直に御渡之筈に候得共、御取紛に付庄三郎迄御渡に而、曲淵殿御渡之趣に取計候樣にと之由申聞。且御料理・御膳下等被下候事。右御禮は庄三郎殿より御取計申上置候旨に付、別而御禮は不申上、溜ゟ家來召連候儀西丸之時之通。

一、五時過御色めきに付相廻り、追付還御。還御之上御機嫌能御登城被遊恐悅、且御機嫌伺土田勇右衞門殿を以申上。且今日御供罷出候に付白銀二枚拜領被仰付候旨、勇右衞門殿被申聞、應じ御禮申上、四時過退出。

文政十一年十二月廿七日の條參照

二月十五日。本多播磨守その叙爵を前田齊泰に謝す。

〔諸事覺書〕

二月十五日

一、今日叙爵之御禮有之、年寄中等各熨斗目・上下登城。

一、四時過御居間書院御着座、播磨守叙爵之御禮、獻上物縐紗御表小將披露、續而御太刀御奏者番監物披露之。播磨守半袴に而御禮。首尾能官位之儀被仰出、一段之儀思召候旨御意。

山城守罷出御請申上退去。

二月十七日。年寄等財政の困窮を救ふ爲公用の料紙を自辨せんことを議す。

〔官私隨筆〕

一、御勝手御運方御逼迫至極之處、不時御物入打續、御借財莫大におよび、被成方も無之に付、近年種々御仕法等を以、漸御取續有之。就中去年以來大坂・江戸御借財御仕法も被仰付候へども、いまだ御不足過分至極に付、今一遍厚く御省略を以、右不足補方遂僉議申筈に候。然處御用番方を初席向取扱も、料紙筆墨を初何と歟格別に不被致僉議而は、諸向之心服も可難調。併是迄段々省略之上故、容易に減方も有之間敷哉。就而は拙者共之儀は格別之事候間、右料紙等當分銘々より自分に差出候事にいたし候はゞ、諸向僉議方之爲にも可宜哉に候。先達而於御符合方、右料紙等入用高、文政五年より同七年迄三ヶ年分平均相しらべ候處、別紙帳册之通、一ヶ年凡高一貫五百九十目餘に相成候。尤年々增減も可有之、尙又此後可遂省略候へども、大凡右之通候間、品物之儀は是迄之通御料紙所等より爲請取、年々勘定之上代銀を以上納いたし候はゞ可宜。代銀割符方之儀は、平均惣割に不致而は繁雜に可有之与存候。思召も無之候はゞ右之通取極可申哉。此段於御勝手甲斐守殿初申合、及御示談候、以上。

二月十七日

横山山城守

前田伊勢守様　致承知候
奥村丹後守様　致承知候
本多播磨守様
前　田　初　丸様
村井又兵衛様
長　　音　　吉様

二月二十日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事覺書〕
二月二十日
一、今日九半時之御供揃に而學校へ被爲入、同刻過山城守・播磨守・織江・外記罷越。八時前被爲入、武學校に而八嶋龍助劍術稽古御覽。夫より學校へ被爲入、讀師會讀御聽聞。夫より又武學校へ被爲入、保田仙次郎門弟木工馬稽古御覽。相濟、七時御戻之事。

二月廿三日。前田齊泰瀧之間に於いて渡邊兵太夫をして書を講ぜしむ。

〔横山氏日記〕

二月廿三日

一、今朝瀧之御間において、經書講釋有之に付、五半時過御出、芙蓉之御間ゟ御着座、御聽聞被遊、四時被爲入。御先立御出之節石野雅樂助、御入之節外記相勤候事。

但、講主渡部兵太夫。

三月二日。前田齊泰能を演ず。

〔諸事覺書〕

三月二日

一、今日御能有之に付各四時前出席。

一、四半時過御能始、各見物所へ相廻候事。

一、七半時過雲雀山御能相濟、藏人・織江・勘解由・內記・外記・平兵衞、大村肴次郎を以御禮申上致退出候事。

御番組

邯鄲 御	小督 權太郎	吉野靜 御
忠信 延之助樣	大江山 太郎兵衞	雲雀山 御

紘　上　　　櫨　進　　　祝言養老　　　左平次

三人長者　　宗　八　　禰宜山伏

三月七日。前田齊泰參覲の際供奉せしむる人馬の數を定む。

〔諸　雜〕

三月七日

一、此度御供人左之通御減少に相成候由、御道中奉行より入御覽。

但、肩書は去々年御參勤之節之人高、本文此度最初極り候高、下之朱書重而御減少之高。

千九百六十九人

千六百七十七人　　　（朱書）二百九十二人減

内

六百八十六人

五百三十六人　　雇者　　（朱書）百五十人減

三十二疋

廿七疋　　御家中乘馬　（朱書）五疋減

二百四十人
百九十七人　　宿繼人足　（朱書）四十六人減
但、宿定廿五人之外
百六十三疋
百三十九疋　　驛　馬　（朱書）廿四疋減
但、宿定廿五疋之外
右御發駕御當日御同宿之御供人高大概如此御座候、以上。
三　月　　　　久世守衞
佐藤丈五郎

三月十四日。前田齊泰參覲の爲に金澤を發す。

〔諸事覺書〕
三月十三日
一、明日御發駕に付、四時より御表之人持・頭分、伺御機嫌登城有之事。
一、年寄中等出席之上、御近習頭を以相伺御機嫌候處、以同人御意有之。
十二御泊附

十四日　金　澤　三里十八町　津　幡　御　中　休　三里十七町計　今石動御泊
十五日　今石動　四　里　高岡御泊
十六日　高　岡　七里三町　東岩瀬御中休　四里廿六町　魚津御泊
十七日　魚　津　三里三十町　浦　山　御　中　休　四里十町　泊り御泊
十八日　泊　り　五里十八町　青　海　御　中　休　四里三十四町　能生御泊
十九日　能　生　五　里　有馬川御中休　四　里　高田御泊
二十日　高　田　五里十六町　關　山　御　中　休　四　里　野尻御泊
廿一日　野　尻　六里十八町　善光寺御中休　四里十町　矢代御泊
廿二日　矢　代　六　里　上　田　御　中　休　五　里　小諸御泊
廿三日　小　諸　八里十二町　坂　本　御　中　休　五里十三町　板鼻御泊
廿四日　板　鼻　四里廿三町　落合新町御中休　七里十九町　熊谷御泊
廿五日　熊　谷　四里八町　鴻　巣　御　中　休　六里四町　浦和御泊
廿六日　浦　和　一里十八町　蕨　御　中　休　三里十町　江　戶

浦和は後に大宮に變更せり

〔諸事覺書〕

三月十四日

一、今朝五時之御供揃に而御發駕と被仰出候に付、年寄中等五時迄に出席之事。但諸役人六半時揃之由也。

一、四時過御居間書院江御着座。眞龍院様・姫君様御附使者神戸加平・石黒宇兵衛一人先、御近習頭御誘引御前江被召御直答。畢而年寄中被召御意有之。次に御家老・若年寄各一列被召御意有之。座上之者より御請申上退座。

一、右畢而追付御供廻り、押付御發駕之由に付、年寄中御式臺階下内より左之方江罷出、伊勢守幷御家老・若年寄は右之方江列座。御居間書院より御先立外記相勤。延之助様階下江御見立、御挨拶有之、夫より年寄中・御家老等江御意有之。御先立板端江罷出、御近習頭・御表小將兩方江罷出、御馬に被爲召御出之事。

但初丸・又三郎は、橋詰江罷出候。其外役懸之人持幷頭々等出方御作法書之通。四半時御發駕。

〔官私隨筆〕

三月十四日

一、今朝御供揃六半時に付、各五時迄に登城。自分儀少々遲參、尻垂坂足輕番所之邊に而五つ承之。

一、四つ半時前頃御前へ被召、甲斐守等一切被召出、其次自分と又兵衛殿一所に罷出候所、今日は天氣相も宜、堅固に發途、各無事と御意。及御請退去。畢而初丸・又三郎、其次勢州、其次御家老中等被罷出。

一、四半時益御機嫌能御發駕。各如例御玄關へ罷出居候處、追付御出、延之助殿も御出、階下迄御送り也。御會釋相濟、何もへ御意あり。甲斐守御請被申上、御馬に被爲召候節四半打。

一、初丸・又三郎は御供廻之樣子相考、橋爪へ被罷出。

一、各直に御廣式へ參上、御祝詞申上候。

三月廿六日。前田齊泰江戸に着す。

〔諸雜〕

三月廿六日

一、七つ時過大宮驛御發駕、戶田御小休、御下屋敷江被爲入、御膳被召上、御湯・御楡も被遊。御供廻り遲く候故、其間に御庭江御出、水車之所御覽。自分尤御供に出る。御先詰大野、御庭御先立御下屋敷詰與力神戶八郎太夫。

一、追付御發駕、御中屋敷邊より御馬上、自分御中屋敷此方より騎馬に而御供、追分口御門笠着なりに而乘通す。御廣式折曲り之邊に而下馬する。奧之口御式臺より上り、席へ參る。

一、益御機嫌能御着被遊、奥之口より池田氏御先立、御居間へ被爲入、御のし御祝被遊。畢而被爲召、池田氏と一集に出る。

〔諸事覺書〕

四月四日

一、中將樣御道中御機嫌能御旅行被遊候段、御止宿驛は時々大炊より申來候段、月番より廻狀有之。前月廿五日大宮御止宿。廿六日曉天之御供揃に而、江戸午刻御着被遊、御旅中天氣も打續宜敷、益御機嫌克被爲在、御供人無異儀罷越候段申來候由。今日廻狀有之事。

但、浦和御泊之筈之處、前月中旬蕨燒失之由に付、御泊附右之通大宮驛御止宿之由也。

〔溫敬公記史料〕

二十六日抵于江戸。前田大炊・靑山將監扈從。

三月廿八日。德川家齊使者を遣はして前田齊泰の參覲を勞せしむ。

〔溫敬公記史料〕

三月廿八日。將軍遣老中水野出羽守來勞。

三月廿八日。能美郡別宮口留番所備付の弓銃を充實す。

〔諸事覺書〕

別宮御貸家渡り御道具損、御用立不申に付、先達而帳面に記被相達候間、早速御取替相渡候様紙面之趣令承知候。依而今般御弓五張小道具共、御鐵炮十挺小道具等、別紙目錄之通御取替被遣候條、被得其意、御射手裁許等可被申談候、以上。

三月廿八日　　前田織江

中村甚右衛門殿

一、五張　塗木御弓　　一、十筋　同弦　　一、百筋　から矢根共

一、五甫　靫、金御紋附　　一、五つ　天鼠革　　一、五指　鞢

右御射手裁許申談可受取候。

一、十挺　御鐵炮　　一、十　革筒亂、緒共　　一、十　腰指筒藥入幷玉入巾着緒共

一、十　同藥入　　一、十本　せん拔才槌共　　一、百　早合掛緒共

一、百筋　木綿火繩

右御異風裁許申談可受取候。

一、三貫目　筒藥　　一、百目　口藥

右同斷。

一、三筋　指繩

右割場奉行申談可受取候。

三月。前田齊泰夫人の待遇を內輪向に於いて藩侯と兩敬にすべきことを定む。

〔諸事留牒〕

四月十日

一、今日御參勤之上、御內輪向に而は、姬君樣江總而御兩敬に相成候由。依而今般御參勤御祝詞より、御兩敬に申上候筈之由江戶表より申來。且於江戶表池田保左衞門左之通申聞候由之事。

姬君樣
中將樣
眞龍院樣
厚姬樣御初

右姬君樣江、是以後御內輪向御勤方之儀は御兩敬に相成、樣文字右之通り相極候事。

丑三月

四月朔日。前田齊泰登營して參覲の禮を行ふ。

申來は金澤へなり

〔諸事覺書〕

四月九日

一、御參勤に付前月廿八日上使水野出羽守殿を以被爲蒙上意、且又廿九日御老中御連名之御奉書到來、朔日御參勤之爲御禮御登城被成候樣申來、御登城被成候處、於御黑書院御禮、御懇之上意、其上御家老兩人大炊・掃部、於御白書院御目見被仰付候。右御樣子に付、御書も致到來候間、明後十一日可致拜戴候條、例刻出席いたし候樣月番より廻狀有之。

〔續德川實紀〕

四月朔日、月次の賀例のごとし。松平加賀守參覲す。

四月十日。本鄕邸內に火防の守札を貼る。

〔諸　雜〕

四月十日

一、先日以來此表大火有之、騷敷に付、從眞龍院樣於靈雲寺火防之御祈禱被仰付候。御札御屋敷內所々江張置候樣に被成度由に而、吉田孫太夫より申聞、御札指こし候に付、委曲申上、御作事奉行江相渡、御屋敷內見計御小屋等へ張置候樣申談、御橫目江も其段申聞置候事。

四月十六日。前田齊廣の女次姬の七回忌法會を天德院に執行す。

〔官私随筆〕

四月十六日

一、今日立華院様御七回忌御茶湯於天徳院御執行。御家中諸殺生御當日一日相扣、普請・鳴物等不及遠慮、御寺近邊罷在候者は御茶湯御執行之内自分に扣可申旨也。

四月十六日。駒込邸の物見・懸塀等類焼す。

〔成瀬掃部留記〕

四月十六日

一、七時過目白臺より出火、段々及大火、御中屋敷相圖打、追々注進有之。右に付堀田十左衛門御小屋江罷越、前々御中屋敷近邊出火之節御作事奉行下役等召連罷越候間、可罷越旨相達候に付、共通り及指圖。

一、夜中八時頃御中屋敷詰後藤瀬兵衛罷越、今夕目白臺より出火、次第に及大火、御中屋敷坤辻番所幷御物見燒失、懸塀相損候得共、御殿中御別條無之。猶委曲は追而可相達旨申聞引取候。

一、堀田十左衛門御小屋江罷越、御中屋敷御類燒之ヶ所、前通り三間・奥行二間之御物見一ヶ所、懸塀二十九間半類燒二間半押つぶし、板橋口辻番所二間・三間番所一ヶ所燒失、共外

懸塀等損候に付、先右損所等御幕爲打置候旨等相達。右紙面吉野善八郎被遣、前々通御屆に
および候樣申遣。

〔諸　雜〕

四月廿四日

一、江戸當十六日夕七つ時頃より目白邊より出火、烈風に而及大火、御中屋敷御物見并坤隅
辻番所暨懸塀二ヶ所に而六十二間計御類燒有之。物頭御人數并割場奉行手合暨三番火消申談
火防、御屋形御別條無之、夜九つ時頃及鎭火候よし、十七日不時立早飛脚に傳附、聞番并御
用人より言上有之。

四月廿七日。前田齊泰、富山侯前田利幹及び大聖寺侯前田利之等を招請
して能を觀覽せしむ。

〔諸　雜〕

四月廿七日

一、淡路守樣・出雲守樣・鍛太郎樣九つ半過御出、御近習頭を以御口上被仰進、追付御對顏、
御料理之御挨拶も有之。御入之節明日御獻上之御菖蒲兜舟之御間に御餝付有之、御覽被遊候
而御入之事。

一、淡路守様等御見物所ゟ被為入候上、御はやし初る。御料理御献立等御客方より伺有之、御見物所に而も御近習頭之手になり、御給事表小將。無刀に而御給事。御吸物・御酒・御肴・めん類出る。御小漬は出不申積り。御入に獨吟・一調等被仰付、六つ時頃に相成候得共、右めん類迄に而御小漬なし。

御近習頭の云々本の儘

但、彼是御退出は六つ半にも相成候。

四月晦日。前田齊廣の女郁姫金澤に歿す。

是月は大盡なり

〔見聞袋群斗記〕

四月晦日鷹司右大將様御緣女郁姫様御卒去。御年十二なり。

同五月十一日御葬式天德院ゟ御收なり。

前記之郁姫様御卒去、四月晦日は御內實なり。未だ御入輿無之御都合方にて、表向五月三日御發しなり。御法號は椿樹院殿從質成郁大姉と申なり。

〔官私隨筆〕

五月朔日

一、郁姫様御儀、先月々末より御滯不一通御様子に而、此間中各折々被罷出候由。今朝よりも御指引有之由故、各一所罷出、以渡邊多宮相伺御機嫌、江間算齊呼寄御様子承之。

但、前月半より少々御勝れ不被成候處、同廿五日より御胸少御あぐるしく、御食も御進み不被成。同廿六日御惣躰不御宜、御心下へ御迫、少急成御症御發も難計旨に付、御僉議之上梁田耕雲御藥豁胸湯差上、御穩に被成御座候所、昨日之所數日之御不食故御疲勞も被爲見得候處、御藥方御醫者中何も存付無之、其儘耕雲へ被仰付置候處、今曉御指引有之に付、是迄之御匕森元東へ被仰付、何も示談之上神武湯・熊參湯御兼用指上候而、先御靜り被成候へども、次第に御衰弱、何も恐入申候由申上候旨也。

一、同夜郁姫樣御氣色御指重被成候段、只今御廣式頭より申越候。依之追付御廣式へ御出、御機嫌御伺可被成と之趣、夜五時頃御用番より被申越候付、追付登城、近頃御廣式へ罷出候節は大手先より御宮坂通り罷出候へども、今晩は石川より罷出。高田彌左衛門相招御樣子相尋候處、八時頃又々御指引有之、少々御痡も指添候御樣子に付、彼是御藥も指上候へども次第に御疲勞、御食事も不被召上、段々御衰弱、七半頃御指重り、只今に而は可申上御樣子も無御座由演述也。依而御機嫌伺候旨申述、方々樣御機嫌之御樣子も相尋候處、何之御指障も不被爲在候由。

四月晦日。去年の不作により米價高直なるを以て貯藏・買占を行ふことを禁ず。

〔御用留〕

去年諸國共不作に而、米直段次第高直に相成、輕者一統及難澁候儀に候。金澤問屋を始出米も少く候得ば、彌以高貴相成、下々彌增困窮におよび可申候。ケ樣之年柄故、此末新穀出來迄之間、所々用米之手當肝要に候條、町・在共身元宜者共、喰料之外貯米致置間敷候。商賣方に而過分之利潤を得べきため、米買〆候儀は勿論致間敷儀に候。如斯申渡候上、餘計之米貯置候族有之候はゞ、役人指向爲致檢斷、其樣子に寄可及嚴重之沙汰候條、此段急度申渡候樣、御郡奉行・遠所町奉行等江も夫々急速可被申談事。

丑 四 月

所々用米支に付貯米等致間敷旨等、別紙之通御用番年寄中被申聞候條、被得其意、夫々不相洩樣可被申渡候、以上。

四 月 晦 日　　御 算 用 場

內藤十兵衛殿

稻葉助五郎殿

五月二日。本年に限り他國產米を領內に輸入するを許し屆出許可を受けしむ。

〔御用留〕

能州奥郡之外は、他國米入津之分買入方容易不承屆候得ども、去年作躰不宜、當時米直段高直に付、當一作他國米買入方相解候樣致度旨被申聞候之間、三州とも他國入津米買入度者有之候者、當七月中迄に願出次第可承屆候條、夫々可被申渡候、以上。

五　月　　　　　　　　御算用場

御郡奉行中

右寫之通申來候條、得其意、夫々不相洩樣可申談者也。

丑五月二日　　　　　　御郡奉行

加州三郡村々役人

五月三日。前田齊廣の女郁姫の逝去を發表す。

〔官私隨筆〕

五月三日

一、郁姫樣御氣滯御療養不被爲叶、今朝卯の上刻御卒去之段、唯今御廣式頭より申越候付申進候。

右に付各御廣式へ罷出、勇姬樣初方々樣御容躰相伺候間、御自分樣にも御伺可被成と之趣、今朝五時前御用番より申越、無程登城、［　　　　］相招御樣子尋候處、何之御指障も不被爲

在由演述、御機嫌伺候趣申述候而退出。

一、郁姫樣御法號如左之由、今日承之。

椿樹院殿從質盛郁大姉

〔諸事覺書〕

五月二日

一、郁姫樣御氣色被爲及御大切候段、御廣式頭より申越候。依之御廣式江罷出相伺御機嫌、且又勇姫樣奉始方々樣御機嫌も相伺候樣、七時頃月番より申來。依之各追々罷出、渡邊多宮を以相伺候事。

〔諸事覺書〕

五月三日

一、郁姫樣御氣色御療養不被爲叶、今朝卯上刻御卒去之段御廣式頭より申越候。依而勇姫樣始方々樣江御容躰相窺候筈に候。且又示談之儀も有之候間、直に越後屋敷へ出座いたし候樣、今朝五時過月番より申來。

一、右に付各追々御廣式江罷出相伺御機嫌、夫より直に越後屋敷江出席、四半時退出之事。

一、右御卒去に付江戸表中將樣始、今日之日附にて明便出相伺御機嫌候事。

一、右に付御家中遠慮之儀、普請は今日より五日迄、鳴物等は九日迄、諸殺生は廿一日迄相扣候樣觸有之。

人持・頭分之面々、明日爲伺御機嫌月番宅江罷出事。

五月四日。前田治脩の子利命の廿五回忌法會を延期す。

〔諸事覺書〕

三月廿二日

御横目江

香隆院樣二十五回御忌御法事、當五月廿一日於寶圓寺御執行就被仰付候、頭分以上之面々勝手次第拜禮被仰付候條、右御法事御當日罷出拜禮可仕候事。

但、前々長袴着用候得共、萬端御省略に付、御名代御代香相勤候人々之外不及長袴着用候。

一、香隆院樣御附相勤候平士等之人々、願次第拜禮被仰付候條、御法事御當日罷出可申事。

右之趣被得其意、夫々一統不相洩樣可被申談候事。

三　月

〔諸事覺書〕

五月四日

一、當廿一日香隆院様御法事御執行之段先達而觸有之通之處、御凶事に付御取延、追而日限被仰渡候等之旨、表方より演述。

五月十一日。前田齊廣の女郁姫の葬儀を天徳院に執行す。

〔官私隨筆〕

五月七日

一、當月十一日椿樹院様御葬式に付、普請・鳴物等之儀、御當日御葬式相濟候迄自分に指扣可申旨。御中陰御法事、當十六日一朝於天德院御執行有之候。右之節普請・鳴物等不及遠慮候。乍然御寺近邊に罷在候者は、御法事御執行之内自分に指扣可申旨、御横目觸之寫甲州より到來。

五月十一日

一、今朝椿樹院様御葬式無御滯相濟候御様子也。六半時頃私宅門前御通棺。警固等香隆院様等御時分之振を以出候。但其節は盛砂・水桶は廓諦院様等之節之振を以不爲飾候へども、此度播州方抔も飾候躰、門前町家には敷砂も致候様子故、表門・裏門之前に盛砂・水桶爲仕候也。

私は奥村丹後守

〔成瀨掃部留記〕

五月十一日

一、七時過淺黄上下着用、二ノ御丸御廣式例之溜に罷在候處、假御横目津田循次郎御供揃候旨相達、暫有之相廻り候而宜旨循次郎申聞候に付、御數寄屋通り松坂御門後ロにいたし相控居候處、此處家來罷越居。追付御出棺に付、草履はき御供いたし、金谷御門外に而馬に乘り、御行列より引離れ御供いたし罷越、天德院前廣みより少し阿方に而下馬いたし、夫より歩に而御供、天德院山門外に相控居、御棺客殿江御上り之上、廻廊より上り溜りに相控候事。讀經之內伺公に不罷出事。御取置相濟、御供揃之旨御横目申聞、草履股立取山門外江罷出居候處、追付御廟江被爲入候に付、御供いたし此時御廟入候柵門迄は長柄、夫より內は傘也。罷越、柵門より內は草履取迄。右草履取は番所之角に相控。御棺御居り之上、番所之横に而洗足いたし、草履に而御廟前江御名代と一集に伺公いたし罷在。讀經相濟、御名代等相濟、御納り之段御横目申聞候に付、御穴江罷越奉見屆、相退き、一先御寺江相控可申處、追付御土懸り候段申聞候に付、暫時御廟前に相控居候而、又候奉見屆、相濟候に付御寺書院先より相退、服相改退出之事。

一、始終奉見屆候儀十四日出に言上に及、御供揃は曉八半時、御出棺は卯之上刻。

五月十四日。德川家齊使を前田齊泰に遣はして郁姫の逝去を弔せしむ。

〔續德川實紀〕

五月十四日、松平加賀守妹女うせしにより、奏者番松平宮內少輔上使として弔慰せらる。

〔諸　雜〕

五月十三日

一、明日上使之御沙汰松平宮内少輔殿御越之旨、八つ時頃善朴等より之紙面開番より入御覽。

五月十四日

一、御城下り御付人に而、御表へ御出之上、昌平橋・本郷三丁目御附人來り、夫々御式臺江御出、階上御疊上に暫御見合、上使御駕籠すわり候時、敷付二枚目御右之方江御出に付、御供人御杉戸際内より左之方江相扣居、御跡したひ御供いたし、御刀持表小將扣居候後〻之御杉戸より出、大廣間御勝手に相扣居る。無程御請相濟、上使御退去に付、御供前之通り。御忌中に付御出入衆等御對顏無之、直に御入之事。

六月七日。町會所より勝手仕送を受くる諸士の心得を改む。

文政十一年十二月廿九日參照

〔御觸拔書〕

定番頭江

町會所勝手仕送之人々暮方等心得之儀、去暮一統江申渡候箇條之内、馬持以上之人々若黨一人、八百石以上者、給人之儀者多分譜代之者共に而可有之候間、是迄之通若黨は二人限り、

猶右より茂相滅辨申儀は人々可爲勝手次第候。且右之通家來數格別減少之事に候間、合力・扶持等相送り來候者之儀茂、乳母之外は仕送り中は相贈り申間敷候。

右之趣被得其意、仕送人江申渡候樣、頭・支配人江可被申談候事。

丑六月七日　　横山山城守

六月廿一日、前田治脩の子利命の廿五回忌法會を寶圓寺に執行す。

〔官私隨筆〕

五月廿二日

一、今般香隆院樣二十五回御忌御法事御指延之所、來月廿一日御執行可被仰付旨被仰出候。此段爲御承知申進候旨、御用番より被申越。

〔官私隨筆〕

六月廿一日

一、今日於寶圓寺、香隆院樣廿五回御忌御法事御取延御執行に付、六半時前出宅罷越。何も未被罷出也。御奉行甲州も未出座無之。

一、和尙被罷出挨拶あり。座見之出家も罷出。

一、御法事五時前頃初る。

一、今日之御法事は上堂也。諷經は天德院・瑞龍寺、二ケ寺とも代僧也。
一、九時過畢る。播州御名代被相勤、例之所に伺公。夫より又常之伺公所へ罷越、（播州尤長裃。）眞龍院樣初御代香之間伺公。畢而和尙等へ御施物如例。

六月廿五日。藩侯の一門より老臣に書を與へられたる時請書を呈する件に關し通牒す。

〔官私隨筆〕

六月廿五日

一、左之紙面到來、返書遣之。

是迄御兩家樣を初、御一門樣方より各へ被成御書、御請差上候節、鳴物等遠慮中に候へば、右日數相濟候迄扣候人々も有之、又無構御請差上候人々も有之、家々に而不一樣候。各一樣に無之儀如何に付、猶更席留帳相しらべ候處、御上御牘中に而も無構御請差上候例者有之候間、此度示談候而、以來は鳴物等遠慮中に而も、御請之儀は無構差上候事に相極候。此段爲御承知申進候、以上。

六月廿五日　橫山山城守

奥村丹後守樣

六月。領内の溫泉に湯治を出願する者の往返日數を定む。

〔國事雜抄〕

湯治御暇相願候節、中幾廻りと相願候處、往來日數之儀是迄極も無之に付、ヶ所に寄心得方區々之儀も有之躰に候。今般遂詮議、新川郡立山下同郡小川は片道三日、能州和倉は片道二日、其外能美郡粟津、江沼郡山代、同郡山中、石川郡湯涌は道程遠近も有之候へども、片道一日之趣相極候條、此段頭・支配人へ寄々可被申談候事。

六　月

夏。米價高直なるを以て浚塹の工を興し貧民をして食を得しむ。

〔溫敬公記史料〕

文政十二年夏饑。於是興浚塹之功。使貧民就食。且賑窮民有差。

七月九日。銀子不融通なるを以て公定相場により金子を混用するを許す。

〔御觸留拔書〕

此節世上銀不融通之躰相聞候。依之金相場兩に付六拾八匁之極直段を以、當分諸上納米・御家中拂米代等諸指引、金子入交り無滯取遣可申。且兩替商賣人金子賣買之節者、極直段之外

定之口錢爲取請申筈に候。右之通御算用場奉行等申聞候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可得其意候、以上。

七月九日　　本多播磨守

稻葉助五郎殿

七月十四日。永原求馬の家來種田權左衞門贋銀札を使用し後自害す。

〔御用番中心覺留〕

七月廿三日

一、九つ時前八十太夫被見候に付逢候所、當十四日曉天新町錢屋へ五十目之贋銀札二枚持參いたし候者有之、得与相しらべ可申旨に而爲待置候内迯去候に付、其儘手代等兩人追懸追詰候所、いづれへ罷越候哉不相知、其所には小路も無之所、武士家塀重門へ迯込候躰之所、右塀重門は野村松五郎方之由夫々及内達候に付、町附足輕へしらべ方申渡置候所、右は永原求馬家來種田伊作せがれ權左衞門与申者之躰之由相知、召捕錢屋へ引合候へば可相分候得ども、武士之家來故急に召捕方指支、若其内迯去候而は如何敷。依而及示談候間、公事場附足輕爲申談爲召捕候儀は如何可有之哉与之趣等、夫々内談に付、いづれ即答いたし兼候間、追

付留書を以可及返事旨申談遣候事。

一、右に付留書呼に遣候所、權五郎參候に付其趣相咄、町附与爲申談候儀は指支候間、公事場附足輕迄召捕に遣可申。左候而は町附足輕聞出候者手柄無に成候間、其所は明日にも御用番へ相達置可申候間、其趣に而は如何可有之哉与、則權五郎八十太夫方へ遣申談候所、左候而も一向不指支、且町附足輕へは小堀より申渡、右主附之者公事場罷出候間、其者ゟさい聞出之儀等爲承候樣等申越候事。

一、右に付算筒番へ申渡候而は遲刻に相成候に付、小頭等呼立、留書申談候樣申渡遣候。右權左衛門召捕候上錢屋へ引合、其者に相違無之与錢屋申候はゞ、直に拙宅へ召連可申、人違等に候はゞ主人指預候樣場附足輕へ申渡候樣、權五郎へ申談遣候事。

一、七つ半時過吉之助罷越、權五郎も罷越申聞候。小頭貞之丞權五郎方へ罷越申聞候は、右種田伊作方へ罷越相尋候所、晝過よりいづれへ罷越候哉不在合旨申、近隣之者に而は野村へ不參哉抔与申居候者も有之に付、則公事場足輕幷町附も野村方へ尋に參り候由。右に付如何可相心得哉之旨申聞候に付、いづれ右權左衛門儀預之儀は治定に付、直に永原求馬方へ罷越、追付預之紙面奉行より參り候間、罷歸候はゞ人締有之樣役人へ得与申談參り候樣、申付遣候旨相達候事。

一、右に付右權左衞門父は當時太郎左衞門与申由。且權左衞門組柄は中小將組之旨役人申聞候由、平兵衞相達す。

同廿四日

一、小頭貞之丞罷越、權左衞門家內檢斷いたし候所相替品も無之候得ども、篆刻いたし懸候印材及反古等、目錄を添引揚來候旨に而相達候事。

一、右之内丸印一つ、當春取揚置候贋銀札之裏印に引合見候所、似寄候分有之事。

同廿五日

一、八つ時過權五郎罷越申聞候は、種田權左衞門在所相知れ候旨吉田貞之丞罷越。右は定番御馬廻野村松五郎方に隱れ罷在候躰に而、昨日より三度和泉清右衞門与申者之方へ、銀子五百目計入用之旨に而紙面指越候躰相知。右使之者指押へ直尋候所、最初は彼是陳罷在候に付、段々相尋候處、野村松五郎方より參り候旨に而、則右紙面も松五郎より相渡候旨に付、松五郎方へ問者を以相尋候得ども一向不罷越旨申候得共、甚疑敷、右族に而召捕方六ケ敷候間如何可相心得哉之旨申聞候に付、いづれ右權左衞門父太郎左衞門より密に紙面爲遣、樣子伺候はゞ可然与存候に付、則貞之丞より紙面を以、永原求馬方役人に太郎左衞門召連、町附足輕北嶋傳右衞門方迄罷越候樣申遣、權五郎も傳右衞門方へ罷越、右太郎左衞門方より權左衞門

へ之密書、互に俳名相調、安否迄爲知呉候樣太郎左衞門に爲調爲持遣候。右返事松五郎より指越、右紙面俳名故うかと心得致披見候所、御子息へ之紙面に付相返候。披封いたし候儀は麁相之旨申越、且權左衞門儀は不罷越旨申越候得ども無心元。依而此上は太郎左衞門罷越致對面度申入可然与、權五郎より申談置候旨申聞候事。

一、太郎左衞門松五郎方へ參り候所、權左衞門かくまひ置候旨に而、遠々与對面も爲致候に付、いづれ受取度旨太郎左衞門より段々懸合候得共、かくまひ呉与申候儀に候へば容易には難渡、猶更相考へ可及返答旨松五郎申聞、相渡不申旨。依而右權左衞門儀、松五郎方に罷在候儀相違無之候間、召捕に向可申哉之旨等申聞候に付、いづれにも渡候樣申入、其上にも不相渡候はゞ踏込候而成共召捕候樣、且改方よりも召捕に向候はゞ、品能申談召捕候樣申渡遣候事。

一、場附足輕罷越申聞候は、右權左衞門儀致自害候旨、松五郎より父太郎左衞門迄爲相知、則太郎左衞門罷越見屆候所、相違無之躰之旨申聞候由相達候事。

一、右に付同役中示談之上、此上は松五郎手前御穿鑿も可有之儀に候間、早速人縮之儀之遂御詮議候樣、御用番へ之達紙面、暮合前播磨守殿へ致持參直達、六つ時頃罷歸候事。

八月六日

一、遠田氏越後屋敷に被罷居候內、松五郎手前吟味相濟候に付、前田氏相同じ越後屋敷へ罷出、內膳殿へ致別席、松五郎手前相糺候所、種田權左衛門申談、去年以來贋銀札拵候旨等申顯候旨、大綱之趣口達に而相達、仕抹方御指圖御座候樣仕度旨申述候所、右不屆に付牢揚屋へ被入置候旨之申聞之事。

七月廿五日。御郡方の者の金澤に滯在中無用の參會するを禁ず。

〔御觸留拔書〕

御郡方之者共金澤江出府中、無用之參會等いたし、中に者茶屋町抔江罷越候者有之躰に相聞え、不埒之至り候。畢竟當町方之者等無用之參會いたし候故、心得違に至申儀に候。且手附共之內、右等之心得違有之旨承り及候儀も有之に付、人別に相糺可申筈之處、今度之儀は先不及其沙汰に、令用捨候得共、甚不埒之儀に候條、夫々嚴重一統江可申渡候。勿論分役之人々聊心得違無之樣、急度可相心得候。此後心得違於有之は、急度可及穿鑿候條、嚴重可相心得候、以上。

丑七月廿五日　　　　御郡奉行

諸郡惣年寄・同並役中

七月廿六日。稻花の季節に鷹野を禁じ及び秋季用水の川緣に入りて漁撈

すべからざることを告ぐ。

〔御觸拔書〕

稲に花付實入に相成候間、石川・河北兩御郡、當月廿八日より日數六十日、御家中鷹野遠慮有之候樣致度旨、御郡奉行相達候段、御算用場奉行申聞候條、可被得其意候。是迄年々相觸候得共以來者時々不申渡候條、例年二百十日以前より日數六十日之間、鷹野遠慮可有之候。

一、石川・河北兩御郡田地用水川緣江、每歲七月より九月中迄、殺生人入込申間敷旨、文政元年に茂一統相觸置候處、近來猥に相成候躰に候條、以來急度相心得罷越申間敷候。

右之通被得其意、組・支配江被申渡、家來等江茂急度申渡候樣被相觸、尤同役中可有傳達候事。

右之趣一統可被申談候事。

七月廿六日　　本多播磨守

八月四日。前田利常の女龜鶴姫の二百回忌法會を經王寺に執行す。

〔官私隨筆〕

七月八日

一、浩妙院樣二百回御忌御茶湯、來月四日一朝於經王寺御執行に付、御家中諸殺生御當日一

日相扣可申、且又普請・鳴物等不及遠慮。同寺近邊に罷在候者は、御茶湯御執行之內自分に
指扣可申旨、一統觸之寫御用番より到來。

〔諸事覺書〕

七月廿八日

一、浩妙院樣二百回御忌御茶湯、來月四日一朝於經王寺御執行有之に付、修理相詰候段表方
へ相達、御香も今日請取。

八月四日

一、浩妙院樣御茶湯に而、六半時頃より修理經王寺ゟ相詰、御茶湯畢而御代香相勤、九時過
退出之事。

八月廿二日。兩替用聞の者發行の銀預手形を改製通用すべきことを告ぐ。

〔御觸拔書〕

定番頭ゟ

御當地兩替御用聞之者共銀預手形、文政十年相改置候處、甚手馴、印中等分兼候に付、此度
調替、年號等相改、是迄五百目札も有之候得共、都而百目札に調替指出候儀、承屆候條、通
用方等是迄之通無滯取扱可申候。右古手形一時に引替候儀、指支可申候間、當九月より十月

中迄に全引替可申候。尤十一月以後古手形通用指留候條、無油斷引替可申候。

右之趣一統可被申談候事。

己丑八月廿二日　　　　　　横山山城守

八月廿四日。能登の女の他國に出づることを許さゞりし古來の禁令を解除す。

〔御郡典〕

能州之女他國江罷出候儀難相成趣に成來候處、文化元年外御郡同樣他國江罷出候儀指解度由に而、紙面被指出候得共、右は古來より成來候儀に而、其子細不相分候間難承屆旨申渡置候。然處近年御仕法以來、三州一樣に被取捌候處、能州之女に限り他國江指出不申而は、不心服にも有之候間、指解候樣仕度旨、先達而紙面被指出候。古來より成來候儀には候得共、當時右女他國江出候而も、何等指障りも無之由、段々被申聞候趣に付、承屆候條、以來外御郡同樣可被相心得候。此段伺之上申渡候事。

丑　八　月

右之通被仰渡候に付、寫相越之候條、得其意、分役之面々江も可申談候、以上。

丑八月廿四日　　　　　　稻葉助五郎

八月廿七日。前田齊廣の女寛姫金澤を發して江戸に向かふ。

〔官私隨筆〕

八月廿五日

一、明後廿七日寛姫樣御發輿に付、明日各常服に而御廣式へ罷出、御同所樣御機嫌相伺候間、御自分樣にも御窺可被成旨、御用番より紙面到來。

〔諸事覺書〕

八月廿七日

寛姫樣五時之御供揃に而、四半時頃御發輿、今夕七時頃津幡御旅宿ゟ御着之由。

九月廿二日

一、寛姫樣長途無御滯、當月十五日中之刻御着府被成候段、江戸表より申來候旨來狀、月番より被相廻。右に付中將樣・寛姫樣ゟ御祝詞狀、廿四日出に指出候事。

八月。財政困難なるを以て更に省略を加ふべきことを告ぐ。

〔典制彙纂〕

御勝手御逼迫至極之上、近年不時御物入打續、地・他國御借財次第に相嵩、如何共御手繰難出

來、是迄度々御行詰之處ゟ至候に付、町・在過分之御用銀種々御仕法を以、指當而御急迫之處者相辨來候得共、猶更昨年に至候而者、江戶・大坂御借財莫大至極におよび、最早如何共取計方無之に付、不得止事兩所御借財御仕法も被仰付候。然處元來之御不足高過分至極、其上不時御物入打續候故、前段之通是迄種々御仕法も被仰付候得共、未だ一ヶ年出入惣御圖り方之所に而、過分之御不足に相成候。此御不足何を以御辨方之心當無之、右之通御借財御仕法故、指當御調達も出來不申、假令御調達を以相辨候共、無程元利過分之御借財に至、又々必至御行詰之處ゟ至可申候。然處前段之通是迄種々御仕法も被仰付、色々手を盡し來候上に候得者、此上御行詰に而は最早一圓被成方無之、必定御公務も御指支、御國政も難相立場合に至り可申儀に候。依而拙者共重々詮議之趣相達御聽、先地・他國御入用、今一篇厚御省略等を以、御不足補方御詮議被仰付筈に候。是迄段々御省略も有之上に候得者、中々尋常之事に而者整不申儀。依之御公務之外萬端、是迄之仕來をも打欠不申而者難相成趣も相達御聽候條、前段之御趣意何茂致會得、何分衆人一致に力を合不申而者難事整候條、此度之儀者猶更誠實を以粉骨を盡し、遂詮議候之樣有之度候。右に付追々格別に可申渡儀も可有之候。勿論心付之儀者遠慮不致可申出候事。

己丑八月

九月朔日。日蝕あり。

〔官私隨筆〕

八月十五日

一、來月朔日辰之四刻より日蝕六分に候。依之出仕之面々例より早く出座、六半時過相揃可申旨、御横目觸之寫御用番より來る。

九月六日。大聖寺侯前田利之參覲の途金澤に小憩す。

〔諸事覺書〕

九月朔日

一、備後守樣明日御在所御發途之筈之處、少々御勝不被遊候に付、御發途被爲見合候段申來候旨、月番より演述。

四　日

一、備後守樣明五日御在所御發途、六日松任より金澤御小休之筈之旨申來候由、爲承知月番より演述候事。

六　日

一、今日四時前、備後守樣當所御旅館下堤町金浦屋次郎右衛門方江御休。御供御用人山本太

郎右衛門迄以紙面伺御機嫌候處、太郎右衛門御供に無之、田中周藏より到來候事。

九月七日。金澤片町に災あり。

〔官私隨筆〕

九月七日

一、今曉片町森下屋某家より出火、數軒延燒も有之躰に付、越後やしきへ使者差出候處、可罷出旨被申越。但其内及鎭火候はゞ不及罷出旨也。いまだ鎭火之樣子無之に付追付罷出。

一、大橋危き躰之由に而播磨守殿被罷出。

一、奉書火消も追々被申渡。

右家數は七十三軒計之由也。

〔年々珍敷事留〕

一、九月七日曉天より、河原町木屋之並何屋左平与申者方より出火に而、上ゐは大橋三の一程燒、十三間町へは後河原町角迄。則ち並も右向ひ迄、下へは後河原町小路に而止り、向ひがはへは上同橋迄、五枚町ゐは兩がはとも燒、五枚町早川・水戸燒、川を越、古寺町は松井のとなりまで、向へは今井迄也。下へは古寺町へ行小路迄燒申候。

〔日用雜記〕

九月七日

一、今曉七時頃より片町失火、古寺町出口之町より兩側共橋場迄燒拔、十三間町之方は河原町之角迄燒、五枚町之方は橋を越傳馬町ゟ十軒計兩側共に燒、犀川橋は半分計燒、六半時頃鎮り申候。家數は七十二軒と申事に候。

〔毎日帳書拔〕

九月七日

一、今曉川南町出火及大火、奉書火消中渡大橋固之儀、人持中へ可申渡處、高知之面々は受取所等に而差支候付、例も有之播磨守罷越候事。

〔見聞袋群斗記〕

九月七日曉七時前川南町森下屋甚兵衛より出火、兩側幷河原町入口迄、西は五枚町・傳馬町入口迄兩側類燒。古寺町今井舍人並侍屋敷不殘燒失、額谷屋小路にて燒止なり。餘程大火なり。

〔諸事覺書〕

七日曇、折々少雨。今曉才川片町出火、家數七十軒燒失、朝六半時過鎮火。内三十四軒本町、三十五軒地子町、一軒支配違家。

本年七月九日の條參照

九月七日。金子の公定相場を廢し時價に據らしむ。

〔本多政和覺書〕

一、左之紙面御用番より來る。

一、先達て爲融通金相場六十八匁之極値段を以申渡置候得共、此節指支候儀も無之躰に相聞候條、當月十一日より右極値段指止、時相場を以可致通用候。尤銀上納方金子入交候儀も指止可申候。

右之通被得其意、組・支配之人々へも可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中傳達可有候事。

九月七日　長甲斐守

右之趣可被得其意候、以上。

九月廿四日。領内の女にして甲州信州に赴く者の從來大聖寺關所を通過せしを改め境關所によることを得しむ。

〔御郡典〕

付札、御郡奉行江

境關所は新川郡の領境にあるもの

加州三郡、能州四郡、越中礪波郡・射水郡女共之内、信州諏訪ゟ眼療、並同國善光寺或は甲州身延山等ゟ參詣致度者、是迄大聖寺御關所より上方筋ゟ罷出、夫より東山道ゟ罷越候故、長途に相成致難儀候に付、以來各過書を以境御關所通路爲致度旨、紙面被指出、承届候條、被得其意、以來各より過書可被相渡候事。

丑九月

右之通被仰渡候に付、寫相越之候條、得其意、分役之面々ゟは其元中より不相洩樣可申渡候、以上。

丑九月廿四日　稻葉助五郎

口郡惣年寄中・年寄並中

九月廿八日。城内の火防に注意し腰懸等に於いて煙草火を用ふる者を戒む。

〔官私隨筆〕

九月廿八日

一、御城中火之元之儀每度申渡候處、中には心得違之者も有之、於腰懸等たばこ火取扱候躰相聞候條、心得違無之樣、主人々々より家來末々迄急度可申渡之旨、御横目觸之寫御用番よ

り到來。

九月。川上芝居興行の仕法を改む。

〔川上芝居一件〕

芝居方年々損分に相成申に付、別紙之通仕法相改、此度芝居相催申度御座候。然上は當秋芝居より可也に成行候得ば、以來は銀主も出來可申哉与奉存候。就夫最前酒屋宗左衛門・粟ヶ崎木屋故次助兩人に而、小屋入用銀等指出候方へ、年々芝居上り錢之內より、步割を以相渡來候得共、當秋芝居之儀は仕法外に而、步割相渡候而者仕法相立兼候得共、精誠詮議仕、二厘宛相渡可申与奉存候。此段宗左衛門等へ別紙御覺書を以被仰渡被下候樣、乍憚私共より奉願候、以上。

九月　　　　　　　　　　主付肝煎

〔川上芝居一件〕

川上日數三十日分

覺

一、六十貫文　　札代・坪代・諸運上一日上り高平均圖にて
　　　　　　　　此內銀主より指出銀高天上引之事

一、百七十兩　役者惣給銀

代千百五十六貫文　六貫八百文圖りに〆

一、六十貫文　役者惣荷物駄賃百貫目計

一、六十貫文　役者乗込初日迄賄代

一、四貫文　大木戸番雇賃

一、卅一貫七百四十文　繪看板書料並枯木入用・外題書抜料等〆

〆千三百十一貫七百四十文計

此分三十日に割一日當り

四十一貫七百二十五文　前段一日上り高六十貫文之内引残十六貫二百七十五文

此分歩割一日分

一、八百十二文　御場へ上納五厘

（此下札内三厘御場へ上納、二厘酒屋宗左衛門・木屋次助等兩人へ相渡候事〻）

一、三貫二百四十六文　道具方並棟取渡紅白粉、勘定場料紙・油・蠟燭等二歩

一、四貫八百八十二文　裝束かり賃三歩

一、六貫四百九十二文　役者惣賄代四歩

一、二百四十四文　　三社渡り一厘五毛
一、五百六十八文　　小屋修理料三厘五毛
〆十六貫二百七十五文
外に四貫文計　　惣懸り者雇賃
　　　　此分茶屋共より毎日相拂申候
右之通今般仕法相改、一統承知之趣に御座候間、御聞屆御座候樣仕度奉存候。尤損益御座候共、御場へ少も御難題不奉申上候、以上。
　九　月　　　　　　　　　　　　主付肝煎
　　　　　　　　　　　　　　　　　酒屋宗左衞門
　　　　　　　　　　　　　　　　　木屋次助
〔川上芝居一件〕
右最前川上芝居小屋入用銀等指出置申に付、年々歩割を以相渡來候所、近年芝居損分相續候に付、今般茶屋格別願之趣も有之、仕法爲試爲相改候。依之是迄之通歩割難相渡候に付、先今度之儀は、是迄之半高二厘五毛宛可爲相渡候。
右之趣可被申渡候事。

十月二日。鳳至郡輪島に火災あり。

〔歳々略曆〕

十月二日、能州輪嶋家數三百軒許り燒る。

十月四日。幕府に提出すべき宗門改の屆書を調ふ。

〔官私隨筆〕

十月二日

一、能州御預所幷御領國中當年宗門相改不審成者無之旨等、辻市右衞門等書付、且右之趣公儀御奉行衆へ之證文、幷判印紙二枚、宗門奉行指出候旨に而、甲州より到來、致判印翌日遣之。

一、切支丹宗門從前々無懈怠、今以相改申候。先年被仰出候御法度書之趣彌相守、能登國之內松平加賀守へ御預所、幷加賀守領分在々所々に至まで遂穿鑿、家中之者下々迄是又致僉議候處、不審成者無御座候事。

一、古切支丹幷轉之者之類族、常々之行跡疑敷儀無御座候事。

一、御預所幷領中在々所々、家中之者下々またものに至迄、若此以後不審成者於在之者早々

可申上事、以上。

文政十二己丑年十月四日　　奥村丹後守　印判

長甲斐守　印判

松浦伊勢守樣

佐野肥後守樣

十月五日。河北郡東蚊爪に火災あり。

〔歲々略曆〕

十月五日夜東蚊爪村道場火元にして、七十八軒燒る。

十月六日。江戶聖堂の火防方辭任を幕府に請ふの不可なることを議す。

〔於江府御親翰帳之內書拔〕

十月六日

一、聖堂火防方御用捨御願立之儀、先達而金澤往反之上、尙追而僉議可仕旨申上置候付、吉野善八郞ゟ於別席申入遂僉議候處、猶更相考可申旨申聞。重而同役示談之上申聞候は、御住居火防方等之儀被仰立御願付御座候はゞ、隨分出來不申哉とも奉存候へ共、右聖堂御用捨に相成候得者、何等も御公役与申者無之事に相成候。乍𢈘是迄右聖堂火防有之故歟、外御公役

無之候處、後年に至り當時之御役人も替り候へば、御大家に少も御公役与申者不相當抔与申御僉議出申間敷ものに而も無御座候間、其所甚氣遣敷奉存候。御入用方過分之儀にも無御座候はゞ、此儘相成居候方可御宜哉にも奉存候。右之通何も僉議仕候旨申聞候事。

但、聖堂御入用方、大躰一ヶ年五十七・八貫目計之由。右火防方人數聖堂近に無之候へば、御住居向等之防方御手當にも相成居申儀。本文聞番申聞候趣も、何も懸念に罷在候儀、旁先づ此儘に被成置候方可然与猶豫いたし候事。

右之趣將監より申上置候事。

十月十六日。石動山天平寺より御撫物を携へて上洛する際相當の敬意を拂ふべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

能州石動山天平寺、往古より之勅願所に而、前々巻數指上來、就中寶暦年中依勅命に御撫物指上、毎年衆徒共右御撫物致守護通行之時分、於途中に行合之人々不敬無之樣一統觸渡候樣致度旨、其以來度々願有之候得共、寶暦年中以來相濟來候儀故不承届候處、近年禁裏御所より御會符御改被仰付、御室御所よりも格別衆徒に被仰渡之趣有之、於他國路には禁裏御撫物之段等申達候得ば、身柄之面々たりとも相應に尊敬有之候得共、於御國路には懸合多に相成、

乘打も有之、奉對御所江迷惑仕候趣、段々願之趣有之候條、右通行之節行合候はゞ、身柄之人々も程能相心得、不敬之貌無之樣可致候。

右之通被得其意、家來末々迄心得候樣、組・支配之人々江被申渡、組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統江可被申談候事。

九　月

石動山御撫物通行之儀、心得方等之儀、別紙之通一統江被仰渡候に付、御郡方之儀各江遂詮議候之處、紙面被指出、別段相達候處、別紙書取之通重而御用番年寄中被申聞候條、被得其意、夫々可被申渡候、以上。

十月十六日　　　　御算用場

御郡奉行中

石動山天平寺より禁裏御撫物指上候に付、途中行合之節不敬之貌無之樣、今般一統觸渡趣に付、各心付之趣も有之、御郡奉行等江觸渡無之、其段口達を以被申聞、先御郡奉行存寄被相尋候由に而、別紙被指出候。御郡奉行達方は、於御郡所に是迄不敬之族無之、衆徒等尊敬之儀悪敷申立候に付而は、是迄も下々迷惑之儀も有之、此上前條之通申渡候儀、衆徒致承知候

而は、一入萬端甚敷、少之儀に而も不敬抔与申立、下々甚及迷惑可申儀顯然に候間、衆徒等江は改而難申渡段申渡候樣致度旨相達候得共、右觸出願方は今更之儀に而は無之、及數年に候得共、是迄先づ其儘に致置候處、身柄之人々与は行合之節、御撫物之儀申示候得共、是迄觸渡も無之故不及貪着に抔与申者も有之躰に而、段々及斷に候儀有之候。去々年御郡奉行等江、右御撫物通行之節、行合之者如何躰之仕來に候哉与相尋候に付、同年八月惣年寄より御郡奉行江書出候內、宿役人多分は宿端より宿端迄迄迎いたし、津幡驛は不罷出由。且宿より宿迄先拂兩人指出候樣子。往來宿驛は不及申に、途中に而も步行之者笠等を取候由等書出置候。右之通成來候得ば、御郡方において不敬之貌無之、以來も右仕來之通に而宜儀に候。若今般觸渡に依而、是迄無之儀を申、下々及難儀に候儀有之候はゞ、其段斷次第、衆徒始急度可及糺に事に候。尤此度申渡候儀は、衆徒江對し候譯には無之、禁裏を不敬抔御所向江聞得候而は如何に付、心得方申渡候儀に候條、此段御郡奉行江可被申談候事。

丑十月

十月十六日。領內の漆を他國に出し及び他國の漆搔を領內に入らしむるを禁ず。

〔御觸留拔書〕

天保元年十一月六日の條參照

御領國出來之漆、前々より他國他領江指出候儀難相成趣、天明年中一統相觸候儀も有之候處、近年猥に相成、無斷他國江賣出候者も有之躰相聞候。剩他國之漆掻共入込、掻取候箇所も有之旨に候。右之通り締方猥に相成候而は、御國用相欠候之間、以來右商賣人は勿論、漆掻致渡世候者共、他國等江不相洩樣嚴密に相心得候樣可被申渡候。尤他國之漆掻入込候儀者急度指留候條、宿等いたし候儀及見聞候者有之候はゞ、早速可相斷候。

右之通夫々不相洩樣可被申渡候、以上。

十月十六日　　御算用場

高木圭稅殿

駒井丹之丞殿

十月十八日。庭木の珍奇なるものを徵す。

〔筒井舊記〕

松・櫻・楓等之類、木立珍敷、畢竟繁茂いたし可申木柄、大木に而無之御慰に可相成分、幷草木に而も、御國に而名高き ヶ所之品御用に候條、早速書出可申候。尤右に相當り候分有之候はゞ、間尺大躰之所も相記可申事。

丑十月

右御書取中村岡三郎様より御渡に付、爲御承知相廻申候。右は江戸表へ被遣候御様子に候間、持運に可相成木柄有之候はゞ、早速否御達可申上旨被仰渡候間、有無共私分迄御申越可被成候、已上。

十月十八日　　　　西川源兵衛

諸郡惣年寄中・年寄並中様

右今十八日御場相廻候に付、寫仕爲御承知上申候、以上。

十月十八日　　手附棟取　榮助

奥郡惣年寄中・御詰番中様

十月十八日。能美郡安宅川の水戸口閉塞し次いで小松町に氾濫す。

〔本多政和覺書〕

十一月一日

一、十月廿八日出小松町奉富田九内紙面左之通。

一、當廿四日御案内申上候私支配所水附家數、別紙之通――申上候旨。

〆四百七十三軒

内九軒町附足輕家　　内九軒町之内本家

百四十一軒同借家　　四軒町附足輕中明地屋敷

右當十八日より大風雨にて安宅水戸塞り、川口波多打込、段々水増、同廿二日夕より小松町之内水乘、水附家右之通御座候。御修覆所橋危ヶ所御座候へ共、役人指出人足等を以水爲防、異變之儀無御座候。其外支配人居屋敷幷小松町・安宅町人馬あやまり等無御座候。爲御斷書附を以申上候、以上。

十月廿六日。水戸侯德川齊脩薨去の報金澤に達す。

〔諸事覺書〕

十月廿六日

一、水戸中納言樣御逝去之由江戸表より申來。依之普請等今日一日、鳴物等は明後廿八日迄、遠慮之筈之旨、月番より廻狀有之。

一、右に付御殺生扣之儀遠慮日數之通、若年寄方に而申渡。

十一月二日。犀川大橋改築成る。

〔諸事覺書〕

十一月二日

一、才川橋御修覆出來、今日より往來不指支。假船橋止。

十一月四日。豐前小倉侯小笠原忠徵前田齊廣の女寛姫に結納を贈る。

〔本多政和覺書〕

十一月四日

一、今四日伊豫守様より寛姫様御結納御祝儀、御使者御家老大羽內藏助を以御規式相濟。御使者に御吸物・御酒等被下之、御目見被仰付、御盃幷御刀代・縐紗七卷被下候。御省略に付御答は無之、御取持衆迄御出御座候。御使者披候以後、大膳大夫様初へ之爲御挨拶將監被遣。天氣相も宜、萬端御首尾能相濟、恐悅御同意奉存候。則御祝儀書立寫一緘指遣、右之趣丹後守殿等・若年寄中江も御傳達可被成候、以上。

〔官私隨筆〕

十一月十六日

一、當月四日伊豫守様より寛姫様へ御結納御祝儀御使者・御品を大羽內藏助を以被進、此方様よりも青山將監被遣、萬端御首尾能相濟旨申來候由、昨日御用番より被申越。依之今朝御廣式へ參上、以角尾孫兵衛御祝詞申上候。

十一月六日。越中新川郡廣田鄕の外鶴・白鳥を除き來春彼岸まで鳥獵を許す。

〔諸事覺書〕

十一月六日

一、若年寄方に而左之通申渡。

新川郡廣田鄉之外鳥獵之儀、此節より來春彼岸迄一作鶴・白鳥之外殺生御免之儀承屆候。尤見合札相渡、無札之者は一切殺生不相成筈に候段等、前々申渡置候通に候條、被得其意、御締方之儀嚴重可被相心得候、以上。

己丑十一月　　　若年寄連名

御郡奉行中

十一月十五日。檢校の家族を伴ひて京都に赴く者の請人に就いて議す。

〔官私隨筆〕

十一月十五日

一、當地檢校京都へ引越候節、家內召連候付、前々より町人請人にて過書願出候。其書付に町同心奧書に而差出候ても、元來檢校は町奉行直支配之處、右之通に而は不相當儀に付、以來は檢校共之內請人に相立候樣可仕旨、町奉行より之紙面可被承屆と被存候。猶又別存無之哉之旨御用番より申來候由、鈴木五兵衞申候付、別存無之旨申入候。

十一月十九日。西本願寺の使僧に宗意教諭の爲の法主の書を披露することを許す。

〔本多政和覺書〕

十一月十九日

一、前田式部呼立、西本願寺使僧被指下、御書披露宗意致教諭度旨、委曲僉議之趣被申聞候。御書披露教諭之儀承屆候條、可指解候。尤さわがしき儀無之樣嚴重相心得候樣、勝興寺家司等へ可被申渡候。

前田式部は寺社奉行

十一月廿二日。公女の外出に會したる際人持以下の士の携ふる鐙を伏すべきことを定む。

〔諸事覺書〕

十一月廿二日

御横目江

御姫樣方御出之節、人持以下於下馬等鐙伏之儀區々に相成候に付、以來者如何相心得可申哉之旨、割場奉行申聞候趣有之。依而是迄者區々に有之候而も、以來者人持以下何れに不限、

方々様御出之節鑓伏候樣寄々可被申談候事。

十一月。百姓の郷里より出奔し病氣の爲江戸邸に歸りたる者の取扱に關し郡奉行より稟請す。

〔上田舊記〕

御郡方之者共出奔仕、於他國相煩、江戸表御屋敷江立歸等之者有之節、江戸表において禁牢之上御刑法被仰付候儀に付、猶又詮議仕候處、却而村方之者出奔仕立歸候節、私共取捌方之儀者、出奔人御座候旨村役人より及斷候得者、持高取揚縮高に申渡、猶又行衛尋方之儀嚴重申渡、幾年相立候而も、行衛相知候得者自・他國によらず早速爲呼歸、私共役所江召出、先々において惡事等無之哉嚴重遂穿鑿、夫々咎申付置、程能指宥申事故、出奔之節公事場江欠落斷も不仕候。尤宥之節詮議之上、持高如元相渡申分も御座候。且呼歸不申共、奔人先者小前之百姓等、作損或者病氣等に而、難澁に迫出奔仕候類不少、年々百姓相減、畢竟手餘り高出來仕候場に至り申儀も有之儀に付、奔人立歸候儀泥み相成不申樣等之取扱方、私共手前に而重々心得仕候儀に御座候。依而江戸幷京・大坂御屋敷江病氣等に而立歸之者は、村名幷名前聞糺之上、早速私共江被仰渡候得者、召連に遣し引寄、前々仕來之通取捌、縮方相立申儀に御座候間、此段御聞屆、江戸表江も被仰遣御座候樣仕度奉存候、以上。

丑十一月　　　　　　　　　　礒松森右衛門

　　　　　　　　　　　　　　馬場右近

本多播磨守様

付札

御郡方之者共致出奔、於他國煩、江戸表江立歸等之者有之節、彼地において禁牢之上御刑法被仰付候處、都而村方之者致出奔立歸候節、各手前に而、先々惡事等無之哉遂穿鑿、夫々咎申付、程能被指宥、其節持高如元被相渡候分も有之。依而江戸表江立歸之者、名前糾之上各江申渡候得者、召連に遣し引寄、御縮方被相立度旨に而紙面被指出、承屆候。右之趣江戸表江も申遣置候條、可被得其意候事。

正　月

十一月。卯辰茶屋町及び石坂新地の圍内に於ける取縮に就いて令す。

〔兩茶屋町一件〕

茶屋町並石坂新地圍内縮方之覺

一、茶屋共最初より仕法相立候後、連々花麗に押移候儀有之、不心得之至に候。依而以來諸事質素に相心得可申事。

一、御家中之子弟等紛込候共宿致間敷候段、毎度嚴重申渡置候處、今以心得違之者も有之、中には忍び躰与乍存、引込候族之者も有之哉に相聞え候。以來御家中之子弟等宿いたし、追而相顯候においては、國内追拂、急度可申付候事。

一、出家・沙門・醫者之風躰にて紛込候儀も無之哉、得と吟味いたし可申候。自然不吟味之族有之においては、前段同樣可申渡候事。

一、客身元に不拘、都而現銀に雜用等取請可申候。尤現銀と相定候上は、客方へ罷越、居催促抔いたし候族有之間敷事。

一、怪敷客与見受候はゞ、早速内々役人へ相屆可申事。

一、町方親懸り等之者、又は手代等身元相計可申候。毎度罷越、身分不相應之族有之候はゞ、其父兄又は主人等へ屆可申候。右樣之所を等閑にいたし、客身分故障等出來候而は、畢竟茶屋ども不繁昌之基に候條、此品厚く存込可申事。

一、抱女門外禁じ候儀、毎度申渡候通、急度相心得可申候事。

一、抱女衣裳之儀は、先是迄之通たるべく候。しかし中には奢侈なる染模樣等も有之躰、以後成限り麁品相用、華美成儀一切致間敷候事。

一、國内博奕に似寄候儀一切不相成旨、毎度申渡候通り、急度相心得可申事。

一、抱女召抱候節、取締人念可致候。勿論非道之仕方在間舗候儀、最初申渡候通、猶更急度相心得可申事。

一、園内諸品高直、第一抱女共外雜用等も多く相懸り候躰に聞え候。依而詮議之趣相極、左之通申渡候條、急度可相守候。勿論右に准じ、諸品取扱候品高利等不申請、實躰に商可致候。

是迄十匁之抱女八匁に引下げ、酒肴等雜用三匁、十一匁に而一座与相定候事。

是迄七匁五分之抱女、六匁五分に引下げ、酒肴等雜用二匁五分、九匁に而一座与相定候事。

是迄五匁之抱女、四匁三分に引下げ、酒肴等雜用一匁七分、六匁に而一座与相定候事。

是迄一匁之抱女は、有成に仕置可申事。

右之通晝夜三座与定候得ども、客座重候儀は格別にいたし、諸事質素に相成候樣申付候事。

一、兩園之內、惣步數〆五千四百步餘之內九百五十步計、先達而より追々爲切出候得共、猶又追々詮議、成限り小手前にいたし、不用之ヶ所追々切出し可申候事。

一、茶屋家建目立候分は、追々割家に申付、隨分以來華美ならず樣可申付候事。

一、兩所共木戸ヶ所に、町家之店一軒借置、密々廻り方役人ども爲見廻、紛敷者入込不申哉しらべさせ可申候。尤園內帽子等に而面躰を隱し不申樣、番人より可申談候事。

一、木戸番是迄夜分は三人相詰候得ども、以來は二人宛与いたし可申、別に仁藏手合之者一

入園内に指置、紛敷風躰は先彼者より可爲相尋候事。

右之通申付候條、以來無違失相心得候樣、嚴重可申付候事。

文政十二年丑十一月

十二月四日。前田齊廣の女寛姫、豐前小倉侯小笠原忠徵に入輿す。

〔諸事覺書〕

十二月十四日

一、當月五日江戶表發足之町飛脚今日到着。寛姫樣御儀當四日御引移、御婚儀御首尾能相濟候に付、別紙之通大炊等より申來候。爲承知兩通寫相廻申候。先は恐悅御同意に御座候。右に付頭分以上御弘之趣、右十五日可申聞候間、服紗小袖・上下着用、例月之通五時迄に御登城可被成候。且又此表御廣式江は、明日御弘相濟候上直に罷出、方々樣に御祝詞可申上候。江戶表中將樣初方々樣に御祝詞申上候趣は、追而可申進旨、月番より廻狀有之事。

〔見聞袋群斗記〕

十二月四日御妹寛姫樣、小笠原伊豫守忠徵樣江御引移り、同日御婚姻首尾能御整、同日下谷御前樣と相唱候樣被仰出る。

〔官私隨筆〕

十二月十五日
一、今日は今般寛姫樣御婚禮相濟候付、御意之趣有之に付、衣服心得仕罷出候也。
但、各百入或は花色上下也。服は服紗。
一、出仕之面々如例、各罷出謁し候而一先退座。
一、重而列居（頭分以上也。）宜旨申聞候上、又罷出、御用番御意之趣演述あり。

十二月十九日。銀子缺乏するを以て再び金子を混じ通用することを許しその交換比率を定む。

本年九月七日の條參照

〔御觸書〕
此節世上銀支に而融通方指支候躰に相聞得候。依之に金相場兩に付六十八匁之極直段を以、當分諸上納幷諸指引金子入交無滯取遣可致候。且兩替商賣人金子賣買之節は、極直段之外定之口錢爲取受申筈に候。
右之通御算用場奉行等申聞候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。
右之通可被得其意候、以上。
十二月十九日　　奥村內膳

十二月廿一日。米俵の製法を一定すべきことを告ぐ。

〔御觸留拔書〕

御米俵之儀、以來四寸五分に五寸五分にあませ候樣被申談、則田鶴濱御藏右之通相改、昨日見本壹俵役所江出居候條、外御藏々も右之通相改候樣手附迄嚴重被仰渡候條、村々江早速申談、本年より右之通相改可然。今不申談置而は冬仕事に仕候者之心得も有之候間、無油斷可被申談置候、以上。

十二月廿一日　　御出役所詰番

組々手附中

十二月廿二日。大島忠藏學校都講に任ぜらる。

〔諸事覺書〕

十二月廿二日

一、表方に而申渡有之。

一、五十石 役料　大嶋忠藏

都講被仰付。御大小將組に被仰付。

十二月廿八日。江戸に於いて年頭の際年寄中等の長袴着用を廢す。

〔於江府毎日書立幷日記之内書拔〕

十二月廿八日

一、是迄於此表、年頭に年寄中・御家老中長袴致着用候へ共、格別御省略中之儀に候間、金澤同樣半袴致着用可然与遂僉議、一往將監より申上、半袴致着用候事に相極、其段組頭・御横目江爲承知申聞候事。

十二月廿九日。省略に付き年寄中及び家老中の從者の數を減少す。

〔諸事覺書〕

十二月廿九日

一、今般省略之儀被仰出、依之年寄中召連候供之内相減候覺左之通、表方より申上る。

年寄中從者減方

一、先供二人　是迄之通。

一、角役一人　是迄二人之所一人相減可申候。

一、時宜役二人　是迄之通。

一、長柄傘　但天氣宜敷節は指止、若指懸り雨天に成候はゞ手傘等用ひ可申候。

一、小遣之内一人相減可申候。

一、此外道具持等是迄之通。
一、乘物乘川之儀了簡次第にいたし、馬上又は歩行に而も不苦事。
右之通御省略中相減置可申事。
御家老中從者減方
一、先供二人　是迄之通。
一、角役　但是迄一人召連候得共指止可申候。
附札、横山藏人・成瀨掃部右之外は當時角役召連不申候。
一、時宜役二人　是迄之通。
一、長柄傘　但天氣宜敷節は指止、若指懸雨天に成候はゞ手傘用ひ可申候。
一、小遣二人　是迄之通。
一、此外道具持等是迄之通。
一、乘物乘川之儀了簡次第にいたし、馬上又者歩行に而も不苦事。
右之通御省略中相減置可申事。

十二月。石川郡中奥組の村々に死者の火葬を廻り口藤內に託せしむべきことを命ず。

死去人葬方之儀に付、御郡所より藤內頭江申渡候寫

石川郡中奥組村々死去人葬方之儀、前々より廻り口藤內共葬來候所、當八月以來百姓共手燒いたし、藤內共に爲葬不申、右に付是迄貰請來候手之內勸進米抔も手薄に相成。藤內共之儀者外并之筋も無之、必至与及迷惑候に付、右死去人葬方並諸事貰物在來之通有之度旨、藤內共願之趣令承知候。依而右中奥組村々役人共手前再往遂詮議候上、死去人葬方之儀は、在來之通り藤內共に爲葬候樣申渡候。就夫是迄藤內共死去人有之節、燒賃等身分不相應に取請、其外中陰法事等迄も米錢右に准じ取請、百姓共及難儀候に付、一統手燒之儀申出候躰に候間、以來は死亡人有之節、村々役人共手前において燒賃取極申渡筈に候條、彼是貪ヶ間敷儀有之間敷候。且又此末心得違之者も有之候得ば、廻り口爲指替候條、是等之趣嚴重可相心得候。右之趣得其意、藤內頭江夫々可申渡者也。

丑十二月　　御郡奉行

增泉村役人

追而中奥組村々役人共江、別紙寫之通申渡候條、可得其意者也。

石川郡中奥組

村井村　宮丸村　平松村　坊丸村　二口村　倉光村　三浦村　橋爪新村　幸明村　町村　乾垣内村　柳町村　番匠垣内村　五歩市村　徳丸村　成村　北安田村　平木村　徳光村　村井新村　相河新村　相河村　竹松村　八田新屋村　宮永新村　福増村　宮永村　宮永市村　相木村　八田村　倉部村

右村々死去人葬方之儀、前々より廻り口藤内共葬來候所、當八月以來一統致手燒に候之躰に而、藤内共之儀は外非之筋も無之、難儀迷惑におよび候之段相歎候に付、先達而遂詮議候所、元來藤内共近年風俗悪敷相成、燒賃等右に准じ米錢取請、百姓共及難儀候に付、一統之儀申出候族に候間、以來病死人有之節、村役人共手前において燒賃取極、申渡候通相心得候樣いたし度、且此末心得違之藤内も在之候はゞ、廻り口爲指替候樣有之度旨申聞之趣、委曲令承知候。死亡人火葬之節、是迄藤内共葬來候所、百姓共了簡を以今更致手燒之儀不相當、剩村々一統申談候樣にも相聞え、是等者百姓共心得違に候。双方和談を以、往古より手燒に仕來候村々之儀者格別に候得共、新規にいたし候儀者不相當候條、葬方等在來之通、廻り口藤内共江可申付候。尤燒賃取極申渡通相心得、中陰法事等之節も米錢等貪取不申樣、且此末心得違之者は、廻り口爲指替候之儀等、心得方之儀は急度申渡候。

右之通得其意、夫々可申渡者也。

御郡奉行

丑十二月

右村々役人

右寫、藤内頭より爲内見指出候事。

附録年表

文政四年　辛巳　皇紀二四八一

正月　○朔日前田齊廣病むを以て年頭の禮を行はず。(一)
○六日市川三亥を召出して藩臣たらしむ。(一)
○十八日楮の取締と他國出の口錢に就いて令す。(二)
○十九日具足の鏡餅直を行ふ。(三)
○廿一日定火消役等に對し、消防に從ふ者の粗暴の擧動を戒め且つ手鎗の使用を禁ず。(三)

二月　○四日諸士にして江戸に勤務する者の町人より金子を借用することを禁ず。(四)
○十三日御郡を割いて金澤町支配に編入したる地の町名を定む。(五)
○十四日諸士にして町會所より仕送を受くる者の妾に外出するを戒む。(六)
○十四日火災の際に於ける諸士の心得を諭す。(七)
○十八日稻垣貞九郎その妾を殺害したるを以て知行を召放たる。(八)
○十九日前田齊廣の子他龜次郎着袴の儀を行ふ。(一〇)
○富田景周再び藩政釐革に關して建言す。(一一)

三月　○十六日前田齊廣先に參覲の延期を請ひたるにその許可せられたることを告ぐ。(二七)
○十七日前田齊廣の子延之助金澤に生まる。(二八)
○十八日御郡方出火の場合に於ける原因調査の手續を改む。(二九)
○廿七日大聖寺侯前田利之參覲の途金澤に宿す。(三〇)

四月　○朔日江戸上野本坊火災の歸路加賀藩の御鷹等町鷹の家屋を破壞す。(三〇)
○二日鷹司政熈本郷邸に臨みて前田齊廣夫人を訪ふ。(三一)
○十八日前田齊泰弓初・乘馬初及び甲冑着初の式を行ふ。(三二)
○廿二日老馬賣買に關する取締方を令す。(三七)
○廿五日前田齊廣、齊泰より竹澤御殿内部の造營を繼續せんとの申出に同意を與ふ。(三八)
○町會所より仕送を受くる諸士の文武稽古の爲にする場合に限り外出するを許す。(三九)
○前田齊廣、與力番所より足輕番人の呼び方等に關して令す。(四〇)

五月

〇四日前田齊廣の側室坂井氏を下宿せしむ。(四六)

〇十二日馬廻頭等間源太左衞門等戲場娼館を廢して風俗を肅正せんことを請ふ。議遂に行はれず。(四六)

〇十四日前田齊泰金澤野町筋に行歩を行ふ。(四七)

〇十九日遠田誠摩・堀孫左衞門等藩財政の收支に關する調査主任を命ぜらる。(四七)

〇廿一日前田利命の十七回忌法會を寶圓寺に修す。(四八)

〇廿七日御扶持人十村等前田齊廣に謁し改作仕法に關する命を受く。(五〇)

〇江戸に於いて諸向役人の町人より贈物を受くべからざること等を令す。(五七)

六月

〇三日前田齊泰學校に臨む。(五八)

〇九日老臣横山求馬等に命じ、寬文以降の令にして後世の法と爲すべきものを輯集せしむ。(五八)

〇十四日前田左衞門曩に藩侯名代として瑞龍寺參詣を命ぜられ、尋いで之を辭したるを以て減知逼塞を命ぜらる。(五九)

〇十七日御算用場奉行の產物方御用を免じ年寄村井又兵衞をして直轄せしむ。(六〇)

〇十九日定番御歩の人數增加したるを以て今後の召仕方に關して議す。(六一)

〇廿四日諸士の收納米賣拂方に就いて注意を與ふ。(六四)

〇廿四日越中高岡の城下大に燒亡す。(六七)

〇廿八日御郡奉行をして改作奉行を兼帶せしめ、十村の百姓を支配することを止めしむ。(七一)

〇廿九日馬市に牽出す駒の飼料代給與の法を改む。(七二)

〇從來の御扶持人十村及び十村を惣年寄及び年寄並と改稱し、その組を有するものは當分舊の如く事務を執らしむ。(七六)

七月

〇朔日惣年寄・年寄並の待遇を從前の御扶持人十村・十村よりも稍優等ならしむ。(七七)

〇二日惣年寄に勤役中苗字を用ふるを得しむ。(七八)

〇三日前田利常夫人天德院の二百回忌法會を天德院に執行す。(七八)

〇八日二ノ丸殿內に御符合役所を設け藩財政の收支均衡を議せしむることを告ぐ。(七九)

〇八日鞍を製するに適當なる堅木を有するものに屆出を命ず。(八〇)

〇十一日犀川・淺野川の川除工事を荒廢せしむるなかるべきを告ぐ。(八一)

〇十三日金澤及び石川・河北二郡內に於いて金澤製以外の蠟燭を賣捌くべからざることを告ぐ。(八二)

〇十八日越中高岡火災後の人氣鎭靜を謀る爲年寄村

井又兵衛を派す。(八三)
○廿二日御郡方に出役する者の止宿に關する件を告ぐ。(八四)
○廿六日越中城端の西村太冲天文學に通ずるを以て御醫師格に召出さる。(八五)
○廿八日幕府より綿羊を拜領す。(八五)
○御郡奉行等御郡方にその出役所を設くべきことを告ぐ。(八六)

八月

○御郡方仕法を定む。(八八)
○四日能登縮の製産者に仕入銀を貸附することを告ぐ。(九九)
○六日河毛安太夫先に醉に乘じて人を傷つけたるを以て斬に處せらる。(一〇一)
○十八日大聖寺侯前田利之使者を金澤に遣はしてその表高を十萬石に改むることを請はしむ。(一〇三)
○金澤川上芝居座に隣り別に一劇場を起す。(一〇七)

九月

○十九日前田齊廣更に參覲の延期を出願して許可せられたることを告ぐ。(一〇七)
○二十日前田齊泰學校に臨む。(一〇八)
○廿二日前田齊廣の子他龜次郎等卯辰觀音院に宮參を行ふ。(一〇八)
○廿六日前田齊泰の生母を殿付とすべきことを告ぐ。(一〇九)
○晦日前田治脩夫人の三回忌法會を江戸廣德寺に執行す。(一〇九)

十月

○御郡奉行より百姓の心得を惣年寄等に令す。(一一〇)
○十三日篠田安平その收納米中御召米となりたるものを引渡さゞるを以て逼塞を命ぜらる。(一一八)
○十九日堂形米廩の園中に落雷す。(一一九)
○廿三日前田齊廣の生母眞琳院歿す。(一二〇)
○廿五日前田治脩の十三回忌法會の豫定を變更延期すべきことを告ぐ。(一二四)

十一月

○三日前田齊廣の生母眞琳院の葬儀を行ふ。(一二四)
○十一日幕府の眞琳院逝去を弔したる奉書金澤に達す。(一二五)
○十一日租米を納入する藏の下數を簡略にすべからざることを諭す。(一二五)
○十五日新田裁許・山廻等の代官勤務を除き、代ふるに役料を以てす。(一二六)

十二月

○二日省略勵行の爲炭薪所を廢して御算用場に併合す。(一二七)
○六日前田齊廣病むを以て明年年頭の拜賀を請けざるべきことを告ぐ。(一二七)
○十五日前田齊廣、大聖寺侯前田利之を十萬石格たらしめんことを幕府に出願す。(一三〇)
○十六日前田治脩の十三回忌法會を寶圓寺に行ふ。

（一三一）

○廿七日大聖寺侯前田利之十萬石格を以て待遇せらるべき命を受く。（一三二）

○廿九日經武館に於ける師範に門弟の武術奬勵のことに關して告ぐ。（一三六）

文政五年　壬午　皇紀二四八二

正月

○朔日前田齊廣病に依りて年頭の禮を廢す。（一三九）

○四日前田齊廣の子他龜次郎疱瘡に罹る。（一四一）

○七日老臣等、先に大聖寺侯前田利之の十萬石格となりたるを以て前田齊廣に祝詞を呈す。（一四二）

○七日加賀藩の老臣等、大聖寺侯の十萬石格となりたるを以て前田利之に祝詞を呈す。（一四三）

○二十日東本願寺門主加賀藩内を通行の風聞あるを以て末寺役僧に拒絶の意を告ぐ。（一四四）

○廿四日前田齊泰疱瘡に罹る。（一四五）

○晦日學校を再び堂形前に移轉すべきことを告げらる。（一四五）

閏正月

○朔日加賀藩の人持及び頭分に大聖寺侯前田利之の先に十萬石格となれることを告ぐ。（一四六）

○十日前田齊泰の疱瘡順調なるを以て酒湯に浴す。（一四六）

○二十日前田齊廣學校移轉の位置に就いて議す。（一四七）

○東本願寺門主を迎へんが爲に盡力したる町人等追込の罰に處せらる。（一四八）

二月

○二日幕府前田齊泰の本年八・九月の交を以て出府せんとの請を許す。（一四九）

○二日德川家齊の前田齊廣に贈りたる鶴金澤に着す。（一四九）

○十八日前田齊廣病むを以て七・八月の交まで參覲延期の請を許されたることを告ぐ。（一五〇）

○廿四日前田利長夫人玉泉院の二百回忌法會を金澤玉泉寺に執行す。（一五〇）

○當年藩費の支出過多なるを以て諸向の節減を告ぐ。（一五二）

○矢を製するが爲鷂等の落羽を藩に提出すべきことを稟議す。（一五三）

○能美郡今江古城附近の行人塚より土器を發掘す。（一五四）

三月

○朔日前田齊廣療病の爲能を演じ家老等に觀覽を許す。（一五五）

○十一日旅行の節先觸等に關する幕令を頒つ。（一五七）

○十二日學校を移築するを以て本日より授業を停止す。（一五八）

○十六日德川家齊等先に陞官するを以て物を前田齊廣に贈る。（一五九）

○十八日前田齊廣能を演ず。(一五九)
○十九日前田齊泰石川郡鶴來附近に行歩を行ふ。(一六〇)
○十九日前田齊廣の子他龜次郎等金谷御殿に移る。(一六一)
○廿九日諸士の定紋繪形を提出することを命ず。(一六二)
○能登口郡の宿驛に於ける飼馬料等の補助を出願す。(一六三)

四月 ○朔日先に德川家齊より贈られたる鶴の吸物を老臣等に頒つ。(一六四)
○四日前田齊泰石川郡粟ヶ崎御旅屋に入り、次いで宮腰に遊ぶ。(一六四)
○五日前田齊廣武器調達の費用に限り餘剩を他に流用せざるべきことを指令す。(一六五)
○十五日伏見宮の使者金澤城に登りて內用の旨を告ぐ。(一六六)
○十六日前田齊廣・齊泰稽古能を催す。(一六七)
○十九日町會所より銀子を借用するものに改めて返辨の法を講ぜしむ。(一六八)
○廿八日江戸詰の者の往復に餞別又は土産の持參を禁ずる前令を勵行せしむ。(一七〇)

五月 ○五日大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤城に登る。(一七〇)

六月 ○廿二日能美郡安宅に火災あり。(一七二)
○魚類の仲衜持等の心得に關して告ぐ。(一七三)

七月 ○朔日前田齊廣老臣等に朝顏を觀賞せしむ。(一七四)
○五日石動山天平寺の僧衆眞闕所の遺物を守護して歸國するを以て金澤下口に於ける刑法者の取除を請求す。(一七四)
○十八日學校の移築成れるを以て本日より授業を開始す。(一七五)
○廿四日前田齊廣退隱後の待遇に關する希望を告ぐ。(一七六)

八月 ○二日前田齊泰金澤を發して江戸に向かふ。(一七八)
○四日前田齊廣幼少の者に習字を奨勵すべきことを命ず。(一七九)
○十四日大田歸城加賀藩の隷する所となる。(一八〇)
○十六日前田齊泰江戸に着す。(一八〇)
○十六日大坂登せ米に痛米を生じたるを以て自今納方を嚴にせしむ。(一八一)
○十八日前田齊廣更に來年一・二月まで參覲延期の請を許されたることを告ぐ。(一八二)
○廿九日前田齊泰名を又左衞門利候と稱し初めて老中を歷訪す。(一八三)

九月 ○十一日鬪雞を弄する者を改方に告めしむべきことを命ず。(一八五)

○十二日前田齊廣蓮池上の御殿へ移轉の後使役すべき頭分の嫡子を選拔錄進せしむ。(一八四)
○十五日前田齊泰初めて登營して德川家齊に謁す。(一八五)
○十五日世嗣の諱に觸るゝものに改名すべきことを命ず。(一八六)
○廿八日金澤上材木町の組合頭等、切支丹類族酒屋幸右衞門の取扱に付き上申す。(一八七)
○家中の士に替紋の繪形を提出すべきことを命ず。(一八八)

十月

○四日前田齊泰登營して左近衞權少將に任ぜられ若狹守齊泰と稱す。(一八九)
○八日一色源右衞門等多數の士不行狀を以て處罰せらる。(一九一)
○十三日金澤に於いて諸士に前田齊泰元服任官のことを告ぐ。(一九五)
○十三日前田齊泰の諱に觸るゝものに改名すべきことを命ず。(一九六)
○十四日前田權佐の家老を罷めしむ。(一九七)
○二十日前田齊廣蓮池上の御殿に移轉の日を以て家老等に物を獻るべきことを告ぐ。(一九八)
○廿三日諸士に先祖由緖一類附帳を提出すべきことを命ず。(一九九)
○廿三日前田齊廣先に多數の士を處罰したる理由を發表す。(二〇〇)
○廿三日前田齊廣、先に閉門を命ぜられたる者と嚴に交通することなかるべきを命ず。(二〇一)
○廿四日浦方の者にあらざるも渡海船を所有し得べきことを告ぐ。(二〇三)
○廿五日先に命ぜられたる風俗に關する制限を恪守すべきことを告ぐ。(二〇四)
○廿六日武學校に出席するもの少きを以て之が督促を命ず。(二〇五)
○廿七日前田齊廣將に隱居を請はんとする內意を老臣に告ぐ。(二〇六)
○廿七日二朱判及び眞鍮錢の通用を圓滑にすべきことを告ぐ。(二〇六)
○廿八日保田安左衞門等不行狀を以て流刑に處せらる。(二〇八)
○前田齊廣、頭役たる者の心得を諭す。(二〇八)
○寺庵の勸化に隨ひ身分不相應の寄進を行ふべからざることを令す。(二一一)
○能登に於いて祭禮に際し踊・物眞似を催す者あるを戒む。(二一二)

十一月

○四日磔刑に處せらるゝ者の子を宥するの法を改む。(二一三)

○六日御步横目石黒門馬等町方の饗應を受け、且つ茶屋町に遊ぶを以て蟄居を命ぜらる。(二二三)
○六日奥村伊豫守その臣河毛次郎兵衞の處罰を命ぜられたるも該當の者なきことを上申す。(二二四)
○八日前田齊泰五節句及び月次の登營を許さる。(二二六)
○八日前田齊廣の退隱したる後に在りては前田土佐守を以て專屬の老臣とすべきことを告ぐ。(二二六)
○十日前田齊泰本郷邸に能を演す。(二二七)
○十三日徳川家齊放鷹によつて得たる雁を前田齊泰に贈る。(二二七)
○十五日前田齊廣の隱棲許可せられたる時は蓮池上の御殿に移り之を竹澤御殿と稱すべきことを告ぐ。(二二九)
○十五日前田齊泰初めて月並の登營を行ふ。(二三〇)
○十五日江戸に於いて諸士に風俗等に關する前田齊廣の諭旨を告ぐ。(二三〇)
○二十日江戸に於いて前田齊廣隱居の後尙政務を監すべきことを告ぐ。(二三一)
○廿一日幕府前田齊廣の隱居と齊泰の家督相續とを許す。(二三二)
○廿三日儒者大島忠藏の勤務前田齊廣の意に適せざるを以て遠慮を命ぜらる。(二三四)

○廿七日前田齊泰襲封を謝する習禮を行ふ。(二三五)
○廿九日前田齊廣の隱居を許されたる報金澤に達す。(二三六)
○晦日金澤に於いて年寄中に前田齊廣その子齊泰に家督を讓るの請を許されたることを告ぐ。(二三六)
○晦日前田齊廣に屬する諸吏の職名を定む。(二三七)
○前田齊廣罷衣の着用を止めんとするの趣旨を告ぐ。(二三〇)
○竹澤御殿の造營全く成就す。(二三三)
○御郡奉行より郡方の風俗に關して戒む。(二三三)

十二月

○朔日前田齊泰登營して襲封を謝す。(二三五)
○朔日竹澤御殿に屬すべき諸士等を命ず。(二四〇)
○四日前田齊廣に年頭その他に献上すべき金品の額を定む。(二四九)
○六日前田齊廣金澤に於いて諸士に家督をその子齊泰に讓るの請を許されたることを公示す。(二五二)
○八日前田齊泰に婚約せる秋田侯佐竹義和の女利瑳姬歿す。(二五三)
○九日諸事伺及び言上は前田齊廣のみに上申すべきを命ず。(二五三)
○十日金澤に於いて諸士前田齊泰の襲封を賀す。(二五四)
○十日前田齊廣の側室於登佐の方歿す。(二五四)

○十二日前田齊泰、德川家齊の女との婚儀に就いて議せしむ。(二五五)
○十三日竹澤御殿諸門の名とその格式を定む。(二五五)
○十四日今明兩日前田齊泰の家督相續を祝して金澤の市民盆正月を行ふ。(二五七)
○十六日前田齊泰左近衞權中將に任ぜらる。(二五七)
○十六日前田齊廣竹澤御殿に移る。(二五八)
○廿二日前田齊泰登營して陞任を謝す。(二六三)
○廿三日前田齊泰の生母を樣付にすべきことを告ぐ。(二六三)
○廿四日政務に關する上申は自今齊泰と雙方に之を爲さしむ。(二六四)
○廿六日前田齊泰を從來の如く加賀守と唱へ、齊廣を中將と呼ばしむ。(二六四)
○廿七日前田齊廣人持組の士岡嶋帶刀等の不行狀を罰す。(二六五)
○前田齊廣無期參覲を缺くことを請ふ。(二六六)
○經費多端なるを以て御郡方に調達銀を命ず。(二六六)

文政六年　癸未　　皇紀二四八三

正月

○朔日前田齊泰登營し、齊廣は賀を廢す。(二六九)
○朔日前田齊泰使者を齊廣に遣はして年頭を賀せしむ。(二七〇)
○八日奧村內膳學校惣奉行を命ぜらる。(二七一)
○十二日前田齊廣、越前萬歲を夜に入りて演ぜしむることを禁ず。(二七一)
○十三日前田齊廣、齊泰の夫人として德川家齊の女を迎ふるが爲幕府に希望する所を述ぶ。(二七三)
○十六日前田齊廣、竹澤御殿の境內に時鐘を置かしむべきことを告ぐ。(二七四)
○十八日前田齊泰、襲封を謝するが爲使者を京師に派す。(二七五)
○廿二日前田齊廣、菊池大學の參會を好むを以て警告を與へしむ。(二七五)
○廿二日藩の收納米に欠米ある際代銀上納の件に關して告ぐ。(二七七)
○廿四日江戶に於いて家老の見屆くる誓詞は前田齊泰之を一覽したる後齊廣に報告すべきことを定む。(二七八)
○廿六日竹澤御殿の辰巳外御門は平日通行を許さゞるべきことを告ぐ。(二七九)
○廿七日前田齊泰、陞任を謝する爲使者を京都に派す。(二八〇)
○他國に使する者の行裝を簡易にしその費用を節減すべきことを命す。(二八〇)

二月

○十三日竹澤御殿鎮守天滿宮の祭日を定む。(二八一)
○十四日本浦・散浦共に渡海船所持の者は藩の廻米

を積み請くべきことを告ぐ。（二八二）
○十五日德川家齊放鷹に依りて獲たる鴨を前田齊泰に贈る。（二八三）
○十五日前田齊廣、人持組及び頭分の士に努めて明倫堂の講書定日に出座すべきことを命ず。（二八三）
○十八日幕府德川家齊の女溶姫を前田齊泰に嫁せしむるの意を告ぐ。（二八六）
○廿二日老臣の越後屋敷式日を廢し隔日出席とす。（二八六）
○廿三日前田齊廣、城下を通行の際警固掃除等の繁雜を除かしむ。（二八七）
○廿五日前田齊廣の命ずる所は單に被仰出と書すべき例に定む。（二八八）
○廿七日金澤に於いて德川家齊の女を前田齊泰に嫁せしむべき命を得たることを告ぐ。（二八八）
○廿七日郡奉行等博奕を爲す者あるときは一村を連坐せしめんことを請ふ。（二八九）
○廿八日幕府、前田齊泰が在國して病を養ふの請を許す。（二八九）
○廿八日前田齊廣が行歩等の爲外出の際に於ける作法を告ぐ。（二九〇）
○廿九日金子通用の手續を定む。（二九一）
○諸郡手附等の腰明ある羽織を着用すべからざることを告ぐ。（二九二）
○芝居の衣裳に華麗のものを用ふべからざることを告ぐ。（二九三）

三月

○十六日芝居役者・茶屋女の華侈を禁じ、及び一般婦人の服裝の取締方を定む。（二九三）
○十八日前田齊廣、竹澤御殿に移るを祝し今明日能を演ず。（二九六）
○廿一日明倫堂の講書に出席すべき者の日割を定む。（二九八）
○廿三日大聖寺侯前田利之參覲の途金澤に着す。（三〇一）
○廿四日竹澤御殿鎮守天滿宮の祭禮を延期す。（三〇二）
○廿八日富山侯前田利幹幕府より公役を命ぜられたるを以て加賀藩に助成を求む。（三〇三）
○百姓作得米は皆濟後といへども年内は組主付の指紙を添ふるにあらざれば賣拂ふべからざることを告ぐ。（三〇五）

四月

○五日二ノ丸御殿以下御廣式の下女にして綿服以外を着用する者は之を逮捕すべきことを令す。（三〇六）
○十一日前田齊泰登營して德川家齊の女溶姫と婚すべき命を得。（三〇七）
○十一日前田齊廣能を演ず。（三〇九）
○十三日富山侯前田利幹公役の助成を求めたるを以

て使者に答ふ。(三一〇)
○十六日前田齊廣の女次姫歿す。(三一一)
○十七日金澤田町新町に火災あり。(三一二)
○廿三日藩侯の紋服を拜領したるもの丶着用制限に關して令す。(三一三)
○廿六日金澤に於いて諸士等前田齊泰の婚約を祝す。(三一三)
○能役者及び町人にして藩侯の紋服を受けたる者あるも之が着用を禁ず。(三一四)
○家中に使役する下女の服裝を規定す。(三一五)
○石川郡宮腰の醫毛利東後齋篤行を以て賞賜せらる。(三一六)

五月

○四日前田齊廣、諸士の動靜を報告せしむ。(三一七)
○九日昨今兩日天德院に於いて前田綱紀の百年忌法會を執行す。(三一七)
○九日前田綱紀の百回忌茶湯を江戸廣德寺に修す。(三一九)
○九日辰巳上水江筋の取締方を定む。(三一九)
○九日御郡方惣年寄以下に麁服を着用すべきことを命ず。(三二一)
○十三日金澤町奉行、新に町名を命じたる理由を前田齊泰に上申す。(三二二)
○十七日江戸等へ使人として派遣せられたる者がその周旋者に贈物をなすの慣習あるを戒む。(三二四)
○十七日諸士の轉役・組替若しくは處罰せられたる者ある時は之を竹澤御殿に屆出づべきことを命ず。(三二五)
○廿一日前田齊泰登營して德川家齊の女溶姫と婚約の成れるを謝す。(三二六)
○廿五日前田齊廣能を演ず。(三二六)
○廿八日竹澤御殿に時鐘を揭げ、次いで之を改鑄す。(三二七)
○金澤の一部町名を改む。(三二八)

六月

○朔日前田齊廣、竹澤御殿に能を催し家中をして觀覽せしむ。(三四〇)
○上旬遠藤高璟測器盤を竹澤御殿に獻る。(三四〇)
○廿七日兩替商發行の銀預り手形を改造し御算用場に於いて引替を保證すべきことを告ぐ。(三四〇)
○河川に於ける砂利採取等のことに關して令す。(三四二)

七月

○難破船の救助に關して告ぐ。(三四二)
○博奕を行ふ者ある時一村に過怠免を課する舊制を復すべきことを告ぐ。(三四三)
○四日新番森順之助他出し日を經て還るを以て祿を褫はる。(三四五)
○五日家中居屋敷周圍の道路修理を命ず。(三四五)

○八日犀川及び淺野川の川除地取締に關して令す。(三四六)
○廿九日江戸邸内に藩米精製所を設け、諸士に之を用ひしむべきことを稟議す。(三四七)
○閉門中の士の町會所貸附銀返納方に關して告ぐ。(三五〇)

八月

○朔日前田齊廣の女忠姫名を壽々姫と改む。(三五〇)
○四日金澤城内の時鐘を竹澤御殿に移し今日より十二割の法に因りて之を撞かしむ。(三五一)
○六日町會所仕送り銀の貸附に關して告ぐ。(三五四)
○十一日貯藏の鐵炮及び彈丸に就いて調査すべきことを命ず。(三五四)
○十三日前田齊泰の夫人入輿の後幕府より贈らるゝ金品に就いて議す。(三五五)
○十五日前田齊廣能を演ず。(三五六)
○十八日江戸邸大風の爲に毀損せらる。(三五七)
○廿三日時鐘を正時刻割としたるを以て大工等の就業時間を改む。(三五七)

九月

○六日竹澤御殿水道脇御門の開閉に就いて告ぐ。(三五八)
○十三日前田齊廣能を演ず。(三五九)
○廿四日前田掃部若年寄の職を褫はる。(三六〇)

十月

○八日盜賊改方に陪臣等を召喚する際の帶刀に關して議す。(三六〇)
○十一日諸士の配下に不行狀の者ありとの風聞あるも確實ならざる時は前田齊廣の內意に達して指揮を受くべきを告ぐ。(三六一)
○十二日前田齊泰初めて擐甲す。(三六一)
○十五日前田齊廣幕府より鶴拜領の特典を與へられたることを老臣に告ぐ。(三六二)
○廿四日諸奉行の職務を行ふに誠實を專らとすべきことを告ぐ。(三六三)
○廿七日竹澤御殿の新時鐘成る。(三六五)
○廿八日前田齊廣能を演ず。(三六六)
○晦日竹澤御殿の新時鐘を今日より撞かしむ。(三六七)

十一月

○遠藤高璟正時版を前田齊廣に獻る。(三六八)
○朔日前田齊廣、幕府より鶴拜領の特典を與へられたることを諸士に告ぐ。(三六九)
○五日前田齊廣、頭分以上の士の鳥構を行ふことを禁止せしむ。(三七〇)
○六日前田齊廣能を演ず。(三七一)
○十六日德川家齊、前田齊泰に鶴を贈る。(三七二)
○十七日小松の陶工粟生屋源右衞門を九谷より呼戻さしむ。(三七三)
○廿二日東本願寺燒失したるを以て、郡方の者の上京し又は寄進することを禁ず。(三七四)

十二月　○廿四日前田齊廣能を演ず。(三七五)

○十七日前田齊廣風俗の改善に關する要項を老臣に示す。(三七五)

○廿六日前田齊廣能を演ず。(三七八)

○廿六日本多勘解由政事を議するを以て減知逼塞を命ぜらる。(三七八)

○廿九日前田齊廣風俗の漸く改れるを喜び、更に明春を待ちて人持組にその意を傳ふべきを命ず。(三八〇)

○鳳至郡新崎肝煎次郎右衞門等孝行を以て賞せらる。(三八〇)

○諸郡に用水の打銀を減額すべきことを命ず。(三八一)

文政七年　甲申　皇紀二四八四

正月　○元日前田齊廣年頭の賀を廢し、齊泰は在府中に屬す。(三八二)

○四日射初・乘馬初の儀を行ふ。(三八二)

○六日風俗に關する前田齊廣の意を人持組の士に傳ふ。(三八三)

○六日藩侯の入國に供奉する者の服裝等に就いて令す。(三八四)

○七日前田齊廣盲人救濟の爲に銀子を下附し、及びその正業に關して教諭す。(三八五)

○十四日金澤に地震あり。(三八六)

○十九日前田齊廣能を演ず。(三八六)

○廿一日今日以後前田齊廣人持組の士を召して教諭を加ふ。(三八七)

○廿三日幕府、前田齊泰に本年三月を以て就封の暇を賜ふべき意を告ぐ。(三八八)

○廿七日前田齊泰入國の際努めて費用を節すべきことを告ぐ。(三八九)

○前田齊泰の入國に供奉する諸士以下に特に金子を貸附することを告ぐ。(三八九)

○大小將横目等の江戸往來の際持鑓を一筋に限ることを定む。(三九〇)

○兩茶屋町及び川上芝居に武士を立入らしむべからざることを告ぐ。(三九二)

○金澤に於ける座頭・瞽女の人數を上申す。(三九三)

○金澤の士民萬歳を舞はしむることを廢す。(三九四)

二月　○二日金澤の本町肝煎等、前田齊泰の入國に際し迎馬を出さんことを請ふ。(三九五)

○六日徳川家齊、前田齊泰に鶴を贈る。(三九五)

○十四日非人小屋に收容する者の調査を嚴にすべきことを告ぐ。(三九五)

○廿一日江戸詰人が歸國の際旅用不足するを以てその扶持方の支給方法を改む。(三九六)

○廿三日諸士の使役する男女の宗門改届方に就いて令す。(三九七)

○廿四日前田齊廣、家老等に對し在來の舊慣に拘泥すべからざることを諭す。（三九八）
○廿五日江戸詰の諸士は登營等の外凡べて綿服を用ふべきことを告ぐ。（四〇一）
○廿五日領内道路の修理に就いて告ぐ。（四〇二）
○竹澤御殿内に新たに天滿宮を勸請し、その祭日を四月廿四・五日と定む。（四〇三）
○歸國御供人に道中荷物貫目改の件に關して告ぐ。（四〇三）
○道中に於いて藩侯放鷹の際に於ける行列の進退に就いて定む。（四〇五）
○藩侯の入國を迎ふる爲諸郡より信州牟禮に迎馬を出すを止め、之に代ふるに冥加銀を上納せしむ。（四〇六）
○金澤に痲疹大に流行す。（四〇六）
○女髮結をして結髮せしむることを禁ず。（四〇七）
○盜賊改方奉行にて逮捕せる罪人にして公事場奉行に引渡すべきものに關して議す。（四〇七）

三月

○六日前田齊廣藩政を監するの眞意を告ぐ。（四〇九）
○十三日前田齊泰就封の暇を受く。（四一〇）
○十三日前田齊泰着城の際に於ける奉迎の作法を令す。（四一一）
○十三日廻米積受の爲入港する船舶は澗役人の嚴に臨檢すべきことを告ぐ。（四一二）
○十五日前田齊泰登營して就封の辭見す。（四一三）
○十七日前田齊泰入國の後藩の政務を齊廣に稟請申告することを止めしむ。（四一四）
○十八日前田齊泰江戸を發す。（四一四）
○十八日家中收納米拂切手は金澤中買の外之を取扱ふを禁ず。（四二〇）
○廿五日前田齊泰就封の途越後高田に於いて病に罹る。（四二一）
○廿八日前田齊廣の病痲疹に決す。（四二三）
○廿九日前田齊廣の女勇姬の病痲疹と決定す。（四二三）
○前田齊廣教諭局を竹澤御殿に設く。（四二三）

四月

○朔日前田齊廣の女寛姬の病痲疹と決定す。（四二四）
○四日前田齊泰金澤城に着す。（四二四）
○六日前田齊廣の痲疹順調なるを以て酒湯に浴す。（四二六）
○六日今明日前田齊泰初めて入國するを以て金澤の市民盆正月を行ふ。（四二七）
○十六日前田齊泰の病痲疹と診せらる。（四二八）
○十六日前田齊廣の女恒姬の病痲疹と決定す。（四二八）
○十八日老臣等前田齊泰の襲封入國を祝して物を獻る。（四二九）
○十八日前田齊廣能を演ず。（四三〇）

○廿六日東本願寺使者を遣はして前田齊泰の就封を賀す。(四三一)

○廿六日風邪流行するを以て諸士の長髪出勤を許す。(四三二)

○廿八日遠所御用の爲出役する者の食事は一汁又は一菜に限るべきことを告ぐ。(四三三)

○御馬廻頭が他國に使する際の行裝に鎗又は矢籠を減ずべきことを上申す。(四三三)

○御郡方の者の木綿及び布以外を着用するを禁ず。(四三四)

五月

○朔日前田齊泰の痲疹癒ゆ。(四三五)

○朔日前田齊廣の女直姫の病痲疹と決定す。(四三五)

○二日能州口郡に産する四ヶ縞の判押人を改む。(四三六)

○三日前田齊泰竹澤御殿に齊廣を訪ふ。(四三七)

○四日前田齊廣の子他龜次郎の病痲疹と決定す。(四三七)

○五日前田齊廣の子延之助の病痲疹と決定す。(四三八)

○六日公事場に於いて禁牢に處する者の期間を改む。(四三八)

○七日前田齊廣の女從姫の病痲疹と決定す。(四四一)

○十日大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤に着す。(四四一)

○十四日前田齊廣二ノ丸御殿廣式に臨み能を演ず。(四四二)

○十六日紫野芳春院及び高野山天德院前田齊泰の就封を賀す。(四四二)

○十八日家中諸士にして寺坊の女子と緣組することを禁ず。(四四三)

○廿四日前田齊泰入國御禮の際に於ける御禮人の服裝等を令す。(四四四)

○廿六日前田齊泰特に諸士の罪あるものを宥す。(四四四)

○諸士の子弟にして刑に處せられたるものを給人の養子として遣はすことを禁ず。(四四六)

○前田齊泰諸士以下に仕法調達銀の内を貸附す。(四四七)

○藤内頭より藤内・非人頭・癘癩・穢多・舞々等の勤務に關し上申す。(四五三)

六月

○朔日日蝕あり。(四五五)

○朔日前田齊泰、齊廣を竹澤御殿に訪ふ。(四五六)

○二日本日より諸士等前田齊泰の家督を續ぎたる後初めて入國せるを祝す。(四五六)

○四日前田齊泰復入國の賀を受く。(四五九)

○六日前田齊泰復入國の賀を受く。(四五九)

○六日西本願寺使僧を遣はして前田齊泰の就封を賀せしむ。(四六〇)

○六日前田齊廣の病再び麻疹と診せらる。(四六一)
○七日前田齊泰復入國の賀を受く。(四六二)
○九日前田齊廣の病狀稍安靜を保つ。(四六三)
○十日前田齊泰復入國の賀を受く。(四六三)
○十一日前田齊泰復入國の賀を受く。(四六四)
○十一日前田齊廣の病狀一進一退す。(四六五)
○十三日前田齊泰復入國の賀を受く。(四六六)
○十四日前田齊泰復入國の賀を受く。(四六七)
○十六日前田齊泰復入國の賀を受く。(四六八)
○十六日前田齊廣の病異狀なし。(四六八)
○十八日前田齊泰復入國の賀を受く。(四六九)
○十八日前田齊廣の女壽々姫の病麻疹と決定す。(四七〇)
○十九日前田齊廣一番酒湯に浴す。(四七〇)
○廿三日前田齊廣の病異狀なし。(四七一)
○町會所の銀子を借用したる諸士は公用以外從來外出を遠慮せしめられたる法を撤去す。(四七一)
○町方の者の川殺生を行ふを禁ず。(四七二)

七月

○朔日前田齊廣の病異狀なし。(四七二)
○二日幕府本日より壹朱判の通用を令す。(四七三)
○五日前田齊廣の病狀佳ならざるを以て老臣等竹澤御殿に奉伺す。(四七四)
○六日是日以後前田齊廣京醫竹中文輔をして病を診せしむ。(四七五)
○十日前田齊廣卒去す。(四七七)
○前田齊廣行狀(四八〇)
○十一日前田齊廣の侍醫等その危篤を齊泰に告ぐ。(四九一)
○十二日前田齊廣の喪を發す。(四九二)
○十二日前田齊廣の卒去を幕府に報ずる使者金澤を發す。(四九三)
○十二日前田齊廣卒せしを以て諸士及び庶民の心得を令す。(四九三)
○十四日前田齊廣の法諱を發表す。(四九六)
○十八日徳川家齊老中の奉書を以て前田齊廣の病を問はしむ。(四九六)
○十九日前田齊泰の生母榮操院と稱す。(四九七)
○二十日幕府前田齊廣の病を問ふ爲使者を發し途より歸る。(四九八)
○廿二日徳川家齊使者を本郷邸に遣はして前田齊廣の卒去を弔せしむ。(四九八)
○廿八日前田齊廣の葬儀を天德院に行ふ。(四九九)

八月

○二日徳川家齊及び家慶の慰問狀を披露す。(五〇五)
○四日本日より天德院に於いて前田齊廣の中陰法會を執行す。(五〇六)
○七日前田齊廣の江戸・京より召したる能役者に暇

を與ふ。(五〇七)
○十四日天德院に於いて前田齊廣三十五日忌の法會を行ふ。(五〇八)
○十四日前田齊廣の後室名を眞龍院と稱すべきを告ぐ。(五〇八)
○十八日家老等今後の施政方針に關する意見を前田齊泰に上申す。(五〇九)
○廿一日前田齊廣四十九日忌の法會を天德院に執行す。(五一〇)
○廿六日前田齊泰入國に就き郡方に被下米の戸數調査を命ず。(五一〇)
○廿七日鳳至郡中居にて鑄造せる竹澤御殿の鐘を天德院に寄進し撞初を行ふ。(五一三)
○廿八日前田齊廣百日忌の法會を天德院に執行す。(五一三)

閏八月

○三日前田齊泰政務に關し前代の施設を恪守すべく老臣の輔弼を求む。(五一三)
○四日前田齊泰を加賀守と呼ぶことを止め中將と稱せしむ。(五一四)
○十五日寺島藏人施政の要領に就いて藩の老臣に進言す。(五一五)
○十九日前田齊泰の生母榮操院二ノ丸御廣式に移る。(五二四)
○廿四日今後竹澤御殿を竹澤御屋敷と稱せしむ。(五二四)
○廿九日老臣橫山藏人芝居及び茶屋女を停止するの議を上る。(五二五)

九月

○二日前田齊泰學校に臨む。(五二六)
○八日能登輪島産の漆器取締方を改めたることを告ぐ。(五二六)
○廿二日一向宗東派の者の宗意等の儀に付き相爭ふを禁ず。(五二七)
○廿五日越中魚津在住の吏にして賭碁を行ひたる者の處分に關して議す。(五二八)
○廿七日前田齊泰の輔佐敎養に關し老臣等近侍の士に告ぐ。(五二九)

十月

○三日木梨左兵衞等處罰せらる。(五二九)
○五日文政三年以降五ヶ年間實行せる節略は今年を以て終るも尙當分舊に依るべきを諭す。(五三一)
○七日前田齊泰學校に臨む。(五三二)
○八日前田齊泰瀧之間に於いて中西巴門をして書を講ぜしむ。(五三二)
○廿四日前田齊泰學校に臨む。(五三三)
○川上新町の常芝居は明年以降臨時興行せしむべきことを告ぐ。(五三三)
○諸郡百姓・頭振を金澤に人別送りする件に關して、

告ぐ。(五三四)

十一月　○四日前田齊泰能を演ず。(五三五)

○十日前田齊泰學校に臨む。(五三六)

○廿六日郡方の座頭・瞽女にして他村に徘徊する件に關して告ぐ。(五三七)

○廿七日二條齊信の使者金澤城に登る。(五三七)

十二月　○六日前田齊泰學校に臨む。(五三九)

○十六日前田左衛門知行を召放さる。(五三九)

○十八日給人米を納むる町藏燒失の場合に於ける辨濟方に就いて告ぐ。(五四〇)

○十九日前田齊泰能を演ず。(五四一)

○廿三日前田齊泰瀧之間に於いて林周輔をして大學を講ぜしむ。(五四一)

○廿五日越中高木村藤右衛門領國分間地圖を作製したるを以て扶持を給せらる。(五四二)

○廿七日先に出奔したる繪師野瀨伯英再び年寄奥村榮實に召抱へらる。(五四二)

○廿八日時鐘の正時刻を廢し舊來の法に從ふ。(五四三)

○晦日萬歲・琴三味線・遊獵等に關して心得を諭す。(五四五)

○前田齊泰尙若年なるを以て當分前侯の如く教諭を爲さゞることを告ぐ。(五四六)

文政八年　乙酉　皇紀二四八五

正月　○朔日前田齊泰金澤城に年頭の禮を受く。(五四七)

○二日前田齊泰年頭の賀を受く。(五四九)

○二日例により松囃子を行ふ。(五五〇)

○三日前田齊泰年頭の賀を受く。(五五〇)

○四日前田齊泰年頭の賀を受く。(五五一)

○六日前田齊泰寺社方の年頭の賀を受く。(五五二)

○十二日前田齊泰如來寺及び天德院に參詣す。(五五二)

○十三日前田齊泰能を演ず。(五五二)

○十五日前田齊泰遠所在住の士及び遠所寺庵の年頭の賀を受く。(五五三)

○十九日具足の鏡餅直を行ふ。(五五四)

○廿三日前田齊泰瀧之間に於いて渡邊兵太夫に大學を講釋せしむ。(五五四)

○廿八日德川家齊、前田齊泰に贈る所の鶴金澤に着す。(五五五)

○晦日蠶卵紙は努めて領國產のものを購求すべきことを告ぐ。(五五五)

○晦日大坂廻米を輸送する地船船持の心得に關して告ぐ。(五五六)

○小松詰の馬廻にして文武に勵精する者に賞賜することを定む。(五五七)

二月　○朔日前田齊泰年頭の賀を受く。(五五八)

○二日金澤城内の時鐘を撞込む方向に付き議す。(五五九)

○十八日前田齊泰學校に臨む。(五五九)
○廿五日前田齊泰學校に臨む。(五六〇)
○廿七日高野山天德院の僧金澤城に登る。(五六〇)
○金澤の魚問屋等屑魚の處分に關して稟請す。(五六二)

三月

○朔日先に德川家齊の前田齊泰に贈れる鶴を披露す。(五六六)
○二日前田齊泰能を演ず。(五六八)
○二日寺島藏人の役儀を除き逼塞を命ず。(五六九)
○十日三條西實勳內用を以て使者を金澤に派す。(五七〇)
○十一日前田齊泰家督相續の際祝儀を上りたる諸士に謝狀を與ふ。(五七二)
○十二日前田齊泰、財政窮迫するを以て大に節約の法を講ずべきを告ぐ。(五七二)
○十三日前田齊泰參觀の爲に金澤を發す(五七三)
○十八日金澤桂岸寺に於いて五百羅漢の開眼を行ふ。(五七五)
○廿一日前田齊廣の女直姬病篤し。(五七五)
○廿七日前田齊泰江戸に着す。(五七六)
○廿八日前田齊廣の女直姬逝去す。(五七七)
○廿八日古金銀通用停止に付き引替の爲新銀預手形を發行す。(五七八)
○廿九日德川家齊使者を遣はして前田齊泰の參觀を勞せしむ。(五八〇)
○晦日前田齊泰登營の際に於ける下馬下乘の位置を改めらる。(五八〇)
○晦日前田齊廣の女直姬の歿したることを發表す。(五八一)
○參觀往來の際諸士に貸與したる人馬增賃銀返納の件に關して令す。(五八二)
○諸郡村々組合頭の老年となりたる者の代役に關して告ぐ。(五八三)

四月

○朔日前田齊泰登營して參觀の禮を行ふ。(五八三)
○十日前田齊廣の女直姬の葬儀を行ふ。(五八四)
○廿二日前田齊泰諸士の文武を勵むべきことを諭す。(五八五)
○廿四日金澤に於いて諸士に前田齊泰の着府以後の事情を告ぐ。(五八六)
○廿五日諸士に質素を專とすべき藩侯の諭示を傳達す。(五八七)
○廿九日省略の實行に就き各意見を上らしむ。(五八八)
○古金銀の諸上納は五月中を限るべきことを告ぐ。(五八八)

五月

○廿二日異國船打拂に關する幕令を遠所奉行に傳ふ。(五八九)

六月

○九日去年の詮議に漏れたる諸士に仕法爲達銀貸附

の件を告ぐ。(五九〇)
○十七日新銀預手形の内小割札を發行すべきこと等を告ぐ。(五九一)
○二十日前田齊廣の子他龜次郎病篤し。(五九三)
○廿一日前田齊廣の子他龜次郎歿す。(五九四)
○廿八日來七月行はるべき前田齊廣の一周忌法會を延期すべきことを告ぐ。(五九五)

七月
○朔日錢貨缺乏するを以て錢手形を發行す。(五九五)
○四日藩の收入足らざるを以て諸向入用を節減すべきことを告ぐ。(五九七)
○六日前田齊廣の子他龜次郎の葬儀を行ふ。(五九八)
○廿五日本日より犀川河原に相撲を興行す。(五九九)
○廿九日徳川家齊、前田齊泰に放鷹によりて獲たる雲雀を贈る。(六〇〇)
○廿九日前田齊泰に來嫁すべき夫人の爲に本郷邸に於ける居室の普請初を行ふ。(六〇〇)
○異國船打拂に關する幕令を諸浦に傳ふ。(六〇一)
○諸郡百姓の藩外に出づる者の取締に就いて告ぐ。(六〇四)

八月
○御召米を行ふ。(六〇五)
○十一日先に延期したる前田齊廣の一周忌法會を今明兩日天德院に執行す。(六〇六)
○十四日加賀・越中に大風雨あり。(六〇九)
○廿二日前田齊泰、女御の入內を賀し奉る爲使者を派す。(六一〇)
○廿五日前田齊廣の女恒姫の名を厚姫と改めたることを告ぐ。(六一一)
○廿八日新金銀到來するを以て新銀預手形等の引替を命ず。(六一二)
○彗星現る。(六一三)
○前田齊泰、異國船打拂令に就いて領內海岸防備策の腹案を告げしむ。(六一三)

九月
○九日徳川家齊、前田齊泰夫人入輿の後その居所を住居と稱すべきことを告ぐ。(六一四)
○十六日三條西實勲加賀藩の老臣等にその染筆を贈る。(六一五)
○十六日前田齊廣の女寛姫小倉侯世嗣小笠原忠徴と婚約す。(六一五)
○廿七日是日以後前田治脩夫人の七周忌法會を江戸廣德寺に執行す。(六一五)

十月
○二日金澤に於いて前田齊泰夫人入輿の後はその居所を御住居と稱すべきを告ぐ。(六一六)
○廿五日金澤城惣構堀の內に塵芥を捨つることを禁す。(六一六)
○廿八日收納米の一部を糯にて徴することに關して告ぐ。(六一七)

○小松城に貯蓄する塩辛及び塩の主管を金澤の城代に移す。(六一八)

○種馬下附を希望する者減少するを以てその取扱を改むべきことを議す。(六一九)

十一月

○朔日前田齊泰登營し德川家齊が明年日光社參を延期すべきことを告げらる。(六二〇)

○九日前田治脩の十七回忌取越法會を寶圓寺に行ふ。(六二〇)

○十九日前田齊廣の女寬姫小倉侯世嗣小笠原忠徵との緣組を許さる。(六二一)

○前田齊泰明春を以て袖留等の儀を行ふことに決す。(六二三)

○能登口郡の肝煎等閑地に漆を植うる計畫に反對の意を表す。(六二三)

十二月

○九日加賀藩の本鄕邸北之居宅燒け、富山藩上屋敷全部及び大聖寺藩上屋敷之一部亦類燒す。(六二五)

○十日前田齊泰本鄕邸火を失するを以て指扣を幕府に伺ふ。(六二七)

○十一日是日以後金澤附近の一向僧等宗意の領解に關して東本願寺の取調を受く。(六三〇)

○廿三日越中境關所の過書に松前の國付を省くべきことを告ぐ。(六三七)

○廿六日銀子缺乏するを以て大晦日に至るまで金子の通用を許す。(六三七)

○廿九日御郡方に本鄕邸の失火指扣を要せざりしを以て正月の準備を爲すべきを告ぐ。(六三八)

○尻垂坂高通に死人・繩懸を通行せしめ得ざる禁令を解く。(六三九)

○金澤城の門に用ふる正月の飾松を改むること等を告ぐ。(六四〇)

是歳

○加賀藩歳入の物成及び定小物成・散小物成の銀高の調理翌年に至りて成る。(六四〇)

文政九年　丙戌　皇紀二四八六

正月

○十七日藤内等の夜に入りて春駒を囃すことを禁ず。(六四八)

○十八日前田齊泰袖留の儀を行ふ。(六四八)

○廿八日西本願寺の使僧が用銀を徵集したる風聞あるを以て之が調査を命ず。(六四九)

二月

○二日能登・越中の浦方より諸魚を金澤に搬送する際宿々にて不都合なかるべきを命ず。(六五一)

○三日德川家齊、前田齊泰に鶴を贈る。(六五二)

○四日前田齊廣夫人、竹澤御殿址に新建築物を營まんとするを欲せざる意を告ぐ。(六五二)

○六日能登・越中より堂形御藏に米穀を輸送する代官の心得を告ぐ。(六五三)

○九日途上婦女を傷害する者あるを以て發見者の之

を捕ふべきことを命ず。（六五四）

○十三日前田齊泰前髮を撤す。（六五五）

○廿六日新銀手形は三月二十日限り通用を停止すべきことを告ぐ。（六五六）

三　月　○七日前田齊泰自今登營の際長柄傘を携ふ。（六五六）

○十三日前田齊泰就封の暇を受く。（六五七）

○十六日前田齊泰發駕を本日と豫定せしも之を延期す。（六五七）

○廿五日前田齊泰登營して就封の辭見す。（六五八）

○廿六日前田齊泰江戶を發す。（六五八）

四　月　○四日錢手形の通用は當月廿五日限り停止すべきことを告ぐ。（六五九）

○六日諸郡往還筋に家屋ある箇所の端々に新家を建つるを禁す。（六六〇）

○十一日前田齊泰金澤城に着す。（六六一）

○十二日幕府、前田齊泰の新夫人が入輿すべき時期を告ぐ。（六六四）

○十九日前田齊泰學校に臨む。（六六五）

○廿三日前田齊泰瀧之間に於いて下村宗兵衞に論語を講ぜしむ。（六六五）

○街道の並松を毀損すべからざることを告ぐ。（六六五）

○犀川に於いて鑑札を有せずして漁撈すべからざることを告ぐ。（六六六）

五　月　○五日大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤城に登る。（六六七）

○六日金澤附近の一向僧等宗意の領解に關する東本願寺の取調を終へて歸國を許さる。（六六八）

○十七日諸士に對し藩の借知を明年より五ヶ年間增徵すべきことを命ず。（六七四）

○十九日越中魚津在住の藩吏等に命じ異國船の渡來に對し警備せしむ。（六七五）

○廿三日前田齊泰瀧之間に於いて林周輔に書を講ぜしむ。（六七六）

○廿八日町・在に用銀を命じ、從來の御仕法調達銀の徵集を廢すべきことを告ぐ。（六七六）

六　月　○二日前田齊泰能を演じ老臣等をして之を觀覽せしむ。（六八五）

○五日藩侯の學校に臨席中その構外なる道筋に駕を携へて通行する者の心得を告ぐ。（六八六）

○八日如來寺靈堂の普請成りて供養を行ふ。（六八七）

○十二日家中諸士より增徵する借知に關して細故を告ぐ。（六八七）

○十二日銀子缺乏するを以て銀仲預り百日銀手形を發行することを告ぐ。（六八八）

○廿八日家老山崎庄兵衞等罰せらる。（六八九）

○晦日銀子缺乏するを以て諸上納等に金子を用ふる

を得しむ。(六九〇)
○金澤卯辰八幡宮に駱駝を見世物とす。(六九〇)
○仕法調達銀を借用する家中の返納米指紙面は之を藏宿より給人に返附すべきことを告ぐ。(六九一)
○能登口郡に産する苧がせの仕法に就いて上申す。(六九二)

七月

○十二日昨今兩日天德院に於いて前田齊廣の三回忌法會を執行す。(六九六)
○十九日前田齊泰金澤に於いて齊廣の女厚姬の松平肥後守容敬と緣組を許されたることを告ぐ(六九六)
○廿四日岩田傳左衛門政事を議するを以て蟄居を命ぜらる。(六九七)
○廿五日前田齊泰、齊廣の女厚姬の緣組定まれるを以て能を演じて之を視す。(六九八)
○廿六日諸士に賜與したる紋付の衣服着用に關して令す。(七〇〇)
○廿六日諸士に鳥構場使用の禁を緩くすることを告ぐ。(七〇一)
○廿六日琴三味線演奏の禁を緩くすることを告ぐ。(七〇三)
○廿六日鳳至郡惣持寺、刑法に行はるゝ罪人の門前通行を止めんことを請願す。(七〇四)
○廿九日石川・河北二郡に於ける藩侯の御鷹場に殺生人の入るを禁ず。(七〇五)

八月

○十日諸士の使用し得べき鳥構場の數を改定す。(七〇五)
○廿五日年寄長甲斐守人持組の數を八組に增加せんことを議す。(七〇六)
○廿七日昨今兩日前田齊泰城內を巡見す。(七一一)
○寺方の祠堂銀・當用銀を借用したる諸士に返濟の義務を全くすべきことを告ぐ。(七一三)
○東本願寺使僧を金澤に派して宗意の領解に關し教諭す。(七一三)

九月

○五日前田齊泰學校に臨む。(七一五)
○七日前田齊泰老臣等の調馬を觀る。(七一五)
○九日越前丸岡侯有馬譽純將に金澤を通過せんとするを以て注意を與ふ。(七一五)
○廿八日前田齊泰堂形馬場に於いて乘馬を試む。(七一六)

十月

○二日前田齊泰近郊に放鷹す。(七一七)
○二日米穀の乾燥を充分にすべきこと等を告ぐ。(七一七)
○十三日前田齊泰學校に臨む。(七一八)
○十五日領內往還の人馬賃銀を割增すべきことを告ぐ。(七一八)
○廿三日前田齊泰瀧之間に於いて大島忠藏をして書

を講ぜしむ。(七一九)
〇廿八日嫁娶を行ふ家に石礫を投ずることを禁ず。(七二〇)
〇廿八日古手及び古金商に役銀を徴すべきことを告ぐ。(七二〇)
〇疱瘡大に流行す。(七二一)

十一月 〇二日諸郡に綿羊飼育を希望する者あらば之を下附せらるべきことを告ぐ。(七二二)
〇八日銀仲預り銀手形通用の期限を延ぶべきことを告ぐ。(七二三)
〇九日能登口郡に富山商人の賣藥を購ふべからざることを令す。(七二三)
〇十日前田齊泰、來春三月參覲を命ぜられたることを告ぐ。(七二四)
〇廿二日年頭の禮に大紋素袍及び長上下の着用を廢すべきことを令す。(七二五)
〇廿七日前田齊廣の女鈴姫久留米侯世嗣有馬頼永と婚約を結ぶ。(七二五)
〇諸組足輕小頭等が濫に配下足輕の昇進加恩を稟請すべからざることを告ぐ。(七二六)

十二月 〇八日幕府、前田齊泰新夫人の住居門前の町家引拂を命す。(七二七)
〇十八日定番御歩中村八郎右衞門不行狀を以て越中五ケ山に流さる。(七二七)
〇廿二日前田齊廣の女鈴姫の久留米侯世嗣有馬頼永と婚約を許されたることを發表す。(七二八)
〇廿三日錢相場高直なるを以て錢手形を發行すべきことを告ぐ。(七三〇)
〇金澤町中の男女八十歳に達したる者を届出づべきことを告ぐ。(七三一)
〇老臣長甲斐守その家來に流刑を命ぜんことを稟請す。(七三二)

文政十年　丁亥　皇紀二四八七

正月 〇朔日前田齊泰金澤城に年頭の禮を受く。(七三二)
〇二日前田齊泰年頭の賀を受く。(七三五)
〇三日前田齊泰年頭の賀を受く。(七三六)
〇四日前田齊泰年頭の賀を受く。(七三七)
〇六日前田齊泰寺社方の年頭の賀を受く。(七三七)
〇十二日前田齊泰如來寺及び天德院に參詣す。(七三八)
〇十五日前田齊泰小松城番等の年頭の賀を受く。(七三八)
〇十九日具足の鏡餅直を行ふ。(七三九)
〇廿二日前田齊泰學校に臨む。(七三九)
〇廿三日前田齊泰瀧之間に於いて中西巴門をして論語を講ぜしむ。(七四〇)
〇晦日雲雀を捕獲し又は賣買することを禁す。(七

四〇)

二月

〇諸郡に命じ新開田等の免合を精査せしむ。(七四一)
〇朔日前田齊泰能を興行し老臣等に酒肴を給ふ。(七四二)
〇十四日鶴林寺を以て祈禱寺に列す。(七四三)
〇十六日前田齊泰學校に臨む。(七四三)
〇十八日前田齊泰郊外七ッ屋口に放鷹す。(七四四)
〇十九日前田齊廣の子延之助觀音院に宮參を行ふ。(七四四)
〇廿三日前田齊泰瀧之間に於いて新井周藏をして論語を講ぜしむ。(七四五)
〇廿五日前田齊泰石川郡宮腰に放鷹を行ふ。(七四五)
〇廿六日前田齊泰能を演じ老臣等をして觀覽せしむ。(七四六)
〇廿六日人持組の士に能を催さゞるべく示諭することを通牒す。(七四七)
〇廿九日一橋治濟薨去の報金澤に達す。(七四七)
〇富山侯の臣富田兵作が加賀藩の原田又右衛門に就き學び得たる鎗術を他國に漏さゞるべきことに關し通牒す。(七四八)

三月

〇二日諸郡手附等の行狀に關し戒飭す。(七四八)
〇三日銀仲預り銀百目手形を發行す。(七五一)
〇十一日藩の財政窮乏するを以て節約を議す。(七五二)
〇十三日前田齊泰金澤を發して參覲の途に上る。(七五三)
〇廿二日諸向の費用を半減すべきこと等を命ず。(七五五)
〇廿三日銀仲預り銀手形の通用期限を更に延ぶべきことを告ぐ。(七五六)
〇廿五日前田齊泰江戶に着す。(七五七)
〇廿九日德川家齊使者を遣はして前田齊泰の參覲を勞せしむ。(七五七)
〇晦日年寄より發する御用の紙面等に今後鹿紙を用ふべきことを告ぐ。(七五七)
〇兩替御用聞の者が發行したる銀預り手形を改製し繼續通用せしむべきことを告ぐ。(七五八)

四月

〇朔日前田齊泰登營して參覲の禮を行ふ。(七五九)
〇十四日降霰あり。(七五九)
〇十八日前田齊泰登營して德川家齊陞任の祝賀能を觀る。(七六〇)
〇廿二日德川家齊その陞任を賀して物を前田齊泰に贈る。(七六〇)
〇廿四日金澤六斗林本覺寺燒失す。(七六〇)
〇廿五日大聖寺侯前田利之參覲の途金澤に宿す。(七六一)
〇廿八日前田齊泰登營して本年十一月新夫人の入輿

すべき命を受く。（七六二）
○廿八日新柴種は藩之を買上げ更に賣渡すべきことを告ぐ。（七六二）

五月　○三日東本願寺再建に付門末の志納心得方を告ぐ。（七六三）
○四日近日火災多きを以て火の元を愼むべきことを命ず。（七七〇）
○十八日身延山の祖師像來着するを以て拜禮者の寄進に關して告ぐ。（七七一）
○廿八日年寄中の道中に携ふる鑓數等を改定す。（七七二）

六月　○火災の際に於ける心得を令す。（七七二）
○朔日是日以後東本願寺使僧を金澤に派し宗意の領解に關して教諭せしむ。（七七三）
○七日寺社奉行、東本願寺の教諭を各寺庵より道場に傳達すべきことを告ぐ。（七七八）
○七日家中諸給人の收納拂米切手の藏縮は年末までに解除せしむべきことを稟請す。（七七八）
○十日幕府、前田齊泰の挾箱を中之御門外なる腰懸内に入らしむることを許す。（七七九）
○十七日錢手形の通用を停止すべきことを告ぐ。（七八〇）
○十八日清水齊明薨去の報金澤に達す。（七八一）
○廿九日陰雨爆色を帶ぶ。（七八一）
○晦日前田齊敬の三十三回忌法會を天德院に執行す。（七八二）
○銀仲預り銀手形を貯藏する者に利子を支拂ふべきことを告ぐ。（七八三）

閏六月　○四日銀仲預り銀手形に小割札を發行することを告ぐ。（七八四）
○節約の爲本鄕邸の下御納所を廢す。（七八四）
○江州の苧綛商人能登口郡産の苧綛を一手に買入れんことを請ふ。（七八五）

七月　○九日銀子缺乏するを以て金子入交ぜ通用することを許す。（七八六）
○十日異國船來舶の際に於ける手當方に就いて議す。（七八七）
○十一日越後糸魚川侯松平直春金澤を通過せんとするを以て注意を與ふ。（七九〇）

八月　○九日石動山麓の村々に天平寺領との境塚を復舊すべきことを告ぐ。（七九一）
○二十日御郡鹽稼の村々役人にその製鹽量を增加すべきことを告ぐ。（七九二）
○廿四日銀上納に金子を混用し得るの前令を改む。（七九三）
○廿八日幕府、前田齊泰の夫人たるべき溶姬に合力

米を與ふ。(七九四)
○前田齊泰夫人の入輿後に於ける足輕等の勤務に就いて告ぐ。(七九四)

九月

○六日前田齊廣の女厚姫金澤を發して江戸に向かふ。(七九五)
○八日西本願寺へ密に寄進するものあるを戒む。(七九六)
○廿二日江戸詰に赴く老臣等の物を藩侯一族に上るを廢せしむ。(七九七)

十月

○二日銀仲預り銀手形中、限月の增印あるものを正銀と引替ふべきことを告ぐ。(七九八)
○五日金澤城外なる新坂柵御門を修繕するを以て通行を禁ず。(七九八)
○十六日羽咋郡大念寺新村吉左衛門支那に難船したる始末を上申す。(七九九)
○廿三日前田重教の側室貞琳院の七回忌法會を寶圓寺に執行す。(八〇九)
○石川・河北兩郡米穀不熟なるを以て特に藏宿等に收納を寛大にすべく命ぜられんことを請ふ。(八〇九)

十一月

○四日幕府、前田齊泰夫人入輿の期を告ぐ。(八一〇)
○五日當年作米の損毛高を中勘上申すべきことを議す。(八一一)
○十一日前田齊泰夫人將に入輿せんとするを以て是の日以後道具到着す。(八一二)
○十一日江戸詰に赴く老臣の輕少の物品を藩侯の一族に献ることを許す。(八一三)
○十六日前田齊廣夫人、寛姫・從姫及び延之助を子養することを告ぐ。(八一三)
○廿四日年功・勤功ある者は節約の際に拘らず特に加恩せんことを議す。(八一四)
○廿七日前田齊泰の夫人本郷邸に入輿す。(八一五)
○廿七日前田齊泰の成婚を祝する爲、三千石以上及び前田姓の人持に物を献上すべきことを通牒す。(八一九)
○廿七日前田齊泰、夫人附の吏の行動を戒む。(八一九)
○廿八日徳川家齊、前田齊泰に菓子餅等を贈る。(八二二)

十二月

○二日徳川家齊、寒氣見舞として檜重を前田齊泰に贈る。(八二二)
○六日前田齊泰登營して成婚を謝す。(八二二)
○七日前田齊泰の夫人を姫君と稱すべきことを告ぐ。(八二四)
○十一日金澤に於いて諸士に前田齊泰の成婚を告ぐ。(八四二)
○十六日幕府、前田齊泰の老臣一人を諸大夫に任ずべきことを告ぐ。(八二六)

○廿一日明年以降諸向の經費を節約すべきことを告ぐ。(八二七)
○廿三日前田齊泰夫人に家臣が御機嫌伺をなすべき場合を定む。(八二九)
○廿六日金澤に於いて幕府が諸大夫一人の叙任を許したることを告ぐ。(八三三)
○廿八日前田齊廣の女從姫、鷹司政通の嫡子輔熙と婚姻を內約す。(八三六)
○廿八日年寄等の執筆及び坊主に贈與する銀子減少の件に就いて議す。(八三六)
○廿九日前田齊泰夫人より拜領の物を老臣等に頒つ。(八三八)
○江戸に於ける諸士の扶持方中一部を減ず。(八三九)

文政十一年　戊子　皇紀二四八八

正月
○四日射初・鐵炮打初・乘馬初の儀を行ふ。(八四〇)
○十八日江戸御留守詰に赴く平士以上に無息人を伴ふことを出願せしむ。(八四一)
○十九日具足の鏡餅直を行ふ。(八四二)
○廿五日會津侯松平容敬、前田齊廣の女厚姫に結納を贈る。(八四二)
○廿八日江戸に往來の際諸士の携帯すべき武具を減少すべきことを告ぐ。(八四三)

二月
○十二日德川家齊來月上旬を以て前田齊泰夫人を訪はんとするの內意を告ぐ。(八四五)
○十三日前田齊廣の女厚姫會津侯松平容敬に入輿す。(八四六)
○十五日德川家齊等厚姫の婚嫁を祝して前田齊泰に物を贈る。(八四六)
○廿二日川除普請等の藩費を減ずるを以て自普請を獎勵す。(八四七)
○廿八日本郷邸なる馬場及び門の名稱を改む。(八四七)

三月
○四日江州絹商賈人が能登等の絹買入に就いて冥加銀を增加上納せんとするを拒絶す。(八四八)
○九日本年五月以降に於ける異國船手當を馬廻三番組・四番組に命ず。(八四九)
○十二日前田齊廣の女從姫、鷹司政通の子輔熙に嫁することを許さる。(八五二)
○十二日正金銀子の取扱に就いて告ぐ。(八五二)
○十三日德川家齊本郷邸に臨み前田齊泰夫人を訪ふ。(八五四)
○十四日奉公人取持人の心得を告ぐ。(八六三)
○十八日御部方に貸附したる錢は之を他に預け置くべからざることを告ぐ。(八七〇)
○廿四日本年に限り陶器輸入禁止の令を解くことを告ぐ。(八七一)
○廿八日諸浦出船積入の際に於ける[illegible]入見等のこと

を告ぐ。(八七二)

四月

○朔日前田齊泰就封の爲登營辭見す。(八七三)

○四日金澤町奉行配下の者の越中境關所に對する過書の形式を改む。(八七四)

○六日前田齊泰就封の爲江戸を發す。(八七四)

○十六日小松絹の賣捌を江戸の町人能屋七右衛門に託すべきことを告ぐ。(八七五)

○十八日前田齊泰金澤城に着す。(八七六)

○十九日前田齊泰、天德院及び寶圓寺に參詣す。(八七八)

○廿二日木實天より降る。(八七八)

○廿三日浪人河村安次郎醫王山に於いて足輕太田九右衛門を斬殺す。(八七八)

○廿五日前田齊泰老臣本多左馬助に齊廣の女壽々姫を縁組すべきことを命ず。(八八一)

○廿八日前田齊泰學校に臨む。(八八二)

○前田齊泰、二條齊敬が配偶を求めしを謝絶す。(八八三)

五月

○朔日前田齊泰歸國に付き拜領の物を老臣等に頒つ。(八八三)

○朔日前田齊泰郊外七ッ屋口に放鷹す。(八八四)

○朔日玉泉寺天神の畫像開帳を行ふ。(八八五)

○十一日大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤城に登る。(八八五)

○十一日前田齊泰有松口の郊外に放鷹を行ふ。(八八八)

○十五日淺野川及び犀川の馬場修覆の費用を家中馬持の士等に割當すべきことを告ぐ。(八八八)

○十六日前田齊泰石川郡野田山の祖廟に參詣す。(八八九)

○廿二日前田齊泰學校に臨む。(八八九)

○廿三日前田齊泰瀧之間に於いて大島忠藏をして論語を講ぜしむ。(八九〇)

○晦日組外齋藤兵右衛門越中五ヶ山に流罪を命ぜらる。(八九〇)

○上方中使の外私に貨持するを禁ず。(八九一)

○石川・河北兩郡の浦方に產する海鼠類の一手買入を許す。(八九一)

六月

○二日前田齊泰能を演じ老臣等をして觀覽せしむ。(八九二)

○五日會津侯松平容敬夫人に贈與する金額を定む。(八九四)

○十八日前田齊泰學校に臨む。(八九四)

○廿三日前田齊泰瀧之間に於いて大島忠藏をして論語を講ぜしむ。(八九五)

○廿三日加賀・能登の猪・鹿耕作を害するを以て火藥を與へて退治せしむ。(八九五)

○廿四日西本願寺先住法會執行に就き漫に上洛すべからざることを告ぐ。(八九六)
○廿七日前田齊廣の女從姫名を郁姫と改む。(八九七)
○家中諸給人收納米の藏縮は年内に解除すべきことを命ず。(八九八)
○婚姻又は養子縁組の際檀那寺の不同意を稱ふる者あるを戒む。(八九九)

七月

○三日前田齊泰學校に臨む。(九〇〇)
○六日弓・鐵炮の技に精練なる足輕に賞賜すべきことを議す。(九〇〇)
○十一日前田齊泰犀川に於いて歩士の水練を見る。(九〇一)
○十三日銀仲預り銀手形の小割札を增加發行しその番號の調方を改むべきことを告ぐ。(九〇一)
○十九日金澤町奉行、茶屋町抱女の出奔取捌をその管轄に屬せしめんことを議す。(九〇二)
○廿二日昨日落雷ありしを以て老臣等前田齊泰の動靜を奉伺す。(九〇三)
○廿五日分銅改の爲、後藤四郎兵衛の名代金澤に來る。(九〇四)

八月

○二十日流木平左衛門小者に脇刺を帶せしめざりしを以て譴責せらる。(九〇四)
○廿四日加賀・越中に大風雨あり。(九〇五)
○廿九日地震あるを以て老臣等前田齊泰の動靜を奉伺す。(九〇七)

九月

○二日前田齊泰學校に臨む。(九〇七)
○四日前田齊泰千日町口の郊外に放鷹す。(九〇八)
○八日前田齊泰神護寺に參詣す。(九〇八)
○十一日前田齊泰學校に臨む。(九〇八)
○十五日前田齊泰大豆田口の郊外に放鷹す。(九〇九)
○十八日千秋喜三右衛門等七夕の夜不法の行爲ありしを以て罰せらる。(九〇九)
○二十日東本願寺、領内の末寺に教示の際便宜を得たるを以て使僧を遣はし之を謝せしむ。(九一二)
○二十日辰巳上水江筋の管理に就いて令す。(九一三)
○廿二日前田齊泰堂形馬場に於いて乘馬を試む。(九一四)
○廿五日前田齊泰大豆田口の郊外に放鷹す。(九一四)

十月

○四日宗門改の書附を幕府に提出す。(九一四)
○十一日大聖寺侯前田利之使を金澤に遣はして上野靈廟修理費を上納し得たることを謝せしむ。(九一五)
○十一日金澤町奉行等銀仲預り銀手形を消却すべき議を上申す。(九一六)
○十五日諸士の風俗に關して諭す。(九一八)
○十六日前田齊泰學校に臨む。(九二三)
○十八日前田齊泰大豆田口の郊外に放鷹す。(九二三)

○廿一日銀仲預り銀手形の發行額三分の一を正銀と引替ふべきことを告ぐ。(九二三)

○廿六日年頭等に獻上する太刀馬代又は御禮錢に銀札を用ふる場合の手續を令す。(九二五)

○廿六日家中の人々百姓より納入せしむべき餅米の額を減少せしむべきことを告ぐ。(九二六)

○廿七日明年年頭の作法を簡易にすべきことを告ぐ。(九二七)

○本年八月に於ける領内風雨被害の狀を幕府に屆出づ。(九二八)

十一月 ○八日前田齊泰來年參覲の期を三月と定められたることを告ぐ。(九三〇)

○九日前田齊泰學校に臨む。(九三〇)

○廿三日前田齊泰學校に臨む。(九三一)

十二月 ○五日禁牢者の死刑・拷問等の除日を廢す。(九三一)

○十二日町人小松屋太助道路に於いて傷けられ銀子を奪はる。(九三二)

○十四日藤内頭より乞食取締の件に付き上申す。(九三二)

○十五日前田齊泰能を演じ老臣等をして觀覽せしむ。(九三三)

○廿七日本多左馬助を叙爵し播磨守と稱すべきことを告ぐ。(九三四)

○廿八日酒・醤油等を販賣する者は樽吟味人の極印を施したる樽を用ふべきことを令す。(九三五)

○廿九日町會所より勝手仕送を受くる諸士の心得を令す。(九三八)

○領内の櫨實・漆實を一手に買集めしむることを許す。(九三九)

文政十二年　己丑　　皇紀二四八九

正月 ○朔日前田齊泰金澤城に於いて年頭の賀を受く。(九三九)

○二日前田齊泰年頭の賀を受く。(九四一)

○三日前田齊泰年頭の賀を受く。(九四二)

○四日前田齊泰年頭の賀を受く。(九四二)

○六日前田齊泰寺社方の年頭の賀を受く。(九四三)

○十二日前田齊泰如來寺及び天德院に參詣す。(九四三)

○十四日前田齊泰東照宮及び神護寺に參詣す。(九四四)

○十四日綿羊の飼育現在數を調査す。(九四四)

○十五日前田齊泰年頭の賀を受く。(九四五)

○十九日例により鏡直しの祝儀を行ふ。(九四五)

○廿四日前田齊泰の江戸に携行すべき軍書の提出を命ず。(九四六)

○廿六日能登奧郡海邊手當として御異風二人を發遣すべきことを決す。(九四六)

○廿八日御普請奉行村田九郎右衛門等配下御歩の家

に赴き酒宴を催したるを以て處罰せらる。（九四八）
○降雪多きを以て士庶の年賀の禮を來月に延期す。（九四九）

二月
○朔日前田齊泰年頭の賀を受く。（九五〇）
○二日前田齊泰能を演す。（九五〇）
○四日深雪なるを以て本月中乘物を用ふることを許す。（九五一）
○八日前田齊泰瀧之間に於いて中西巴門をして書を講ぜしむ。（九五一）
○十日天德院の僧藩侯代理たる家老の燒香中着座せざりしを以て譴責を命ぜらる。（九五二）
○十三日前田齊泰夫人登營す。（九五二）
○十五日本多播磨守その叙爵を前田齊泰に謝す。（九五三）
○十七日年寄等財政の困窮を救ふ爲公用の料紙を自辨せんことを議す。（九五四）
○二十日前田齊泰學校に臨む。（九五五）
○廿三日前田齊泰瀧之間に於いて渡邊兵太夫をして書を講ぜしむ。（九五五）

三月
○二日前田齊泰能を演す。（九五六）
○七日前田齊泰參觀の際供奉せしむる人馬の數を定む。（九五七）
○十四日前田齊泰參觀の爲に金澤を發す。（九五八）
○廿六日前田齊泰江戸に着す。（九六一）
○廿八日德川家齊使者を遣はして前田齊泰の參觀を勞せしむ。（九六二）
○廿八日能美郡別宮口留番所備付の弓銃を赤賣す。（九六三）
○前田齊泰夫人の待遇を内輪向に於いて藩侯と兩敬にすべきことを定む。（九六四）

四月
○朔日前田齊泰登營して參觀の禮を行ふ。（九六四）
○十日本鄉邸内に火防の守札を貼る。（九六五）
○十六日前田齊廣の女次姫の七回忌法會を天德院に執行す。（九六五）
○十六日駒込邸の物見・懸塀等頽壞す。（九六六）
○廿七日前田齊泰、富山侯前田利幹及び大聖寺侯前田利之等を招請して能を觀覽せしむ。（九六七）
○晦日前田齊廣の女郁姫金澤に歿す。（九六八）
○晦日去年の不作により米價高值なるを以て貯藏・買占を行ふことを禁ず。（九六九）

五月
○二日本年に限り他國產米を領内に輸入するを許し屆出許可を受けしむ。（九七〇）
○三日前田齊廣の女郁姫の逝去を發表す。（九七一）
○四日前田治脩の子利命の廿五回忌法會を延期す。（九七三）
○十一日前田齊廣の女郁姫の葬儀を天德院に執行す。（九七四）

六月

〇十四日德川家齊使を前田齊泰に遣はして郁姫の逝去を弔せしむ。(九七五)

〇七日町會所より勝手仕送を受くる諸士の心得を改む。(九七六)

〇廿一日前田治脩の子利命の廿五回忌法會を寶圓寺に執行す。(九七七)

〇廿五日藩侯の一門より老臣に書を與へられたる時請書を呈する件に關し通牒す。(九七八)

〇領内の溫泉に湯治を出願する者の往返日數を定む。(九七九)

夏

〇米價高直なるを以て浚墾の工を興し貧民をして食を得しむ。(九七九)

七月

〇九日銀子不融通なるを以て公定相場により金子を混用するを許す。(九七九)

〇十四日永原求馬の家來種田權左衞門贋銀札を使用し後自害す。(九八〇)

〇廿五日御郡方の者の金澤に滯在中無用の參會するを禁ず。(九八四)

〇廿六日稻花の季節に鷹野を禁じ及び秋季用水の川緣に入りて漁撈すべからざることを告ぐ。(九八四)

八月

〇四日前田利常の女龜鶴姫の二百回忌法會を經王寺に執行す。(九八五)

〇廿二日兩替用聞の者發行の銀預手形を改製通用すべきことを告ぐ。(九八六)

〇廿四日能登の女の他國に出づることを許さゞりし古來の禁令を解除す。(九八七)

〇廿七日前田齊廣の女寬姬金澤を發して江戸に向かふ。(九八八)

〇財政困難なるを以て更に省略を加ふべきことを告ぐ。(九八八)

九月

〇朔日日蝕あり。(九九〇)

〇六日大聖寺侯前田利之參覲の途金澤に小憩す。(九九〇)

〇七日金澤片町に災あり。(九九一)

〇七日金子の公定相場を廢し時價に據らしむ。(九九三)

〇廿四日領内の女にして甲州信州に赴く者の從來大聖寺關所を通過せしを改め境關所によることを得しむ。(九九三)

〇廿八日城内の火防に注意し腰懸等に於いて煙草火を用ふる者を戒む。(九九四)

〇川上芝居興行の仕法を改む。(九九五)

十月

〇二日鳳至郡輪島に火災あり。(九九八)

〇四日幕府に提出すべき宗門改の屆書を調ふ。(九九八)

〇五日河北郡東蚊爪に火災あり。(九九九)

〇六日江戸聖堂の火防方辭任を幕府に請ふの不可なることを議す。(九九九)

○十六日石動山天平寺より御撫物を携へて上洛する際相當の敬意を拂ふべきことを告ぐ。(一〇〇〇)

○十六日領内の漆を他國に出し及び他國の漆掻を領内に入らしむるを禁ず。(一〇〇二)

○十八日庭木の珍奇なるものを徴す。(一〇〇三)

○十八日能美郡安宅川の水戸口閉塞し次いで小松町に氾濫す。(一〇〇四)

○廿六日水戸侯徳川齊脩薨去の報金澤に達す。(一〇〇五)

十一月 ○二日犀川大橋改築成る。(一〇〇五)

○四日豊前小倉侯小笠原忠徵前田齊廣の女寛姫に結納を贈る。(一〇〇六)

○六日越中新川郡廣田郷の外鶴・白鳥を除き來春彼岸まで鳥獵を許す。(一〇〇六)

○十五日檢校の家族を伴ひて京都に赴く者の請人に就いて議す。(一〇〇七)

○十九日西本願寺の使僧に宗意教諭の爲の法主の書を披露することを許す。(一〇〇八)

○廿二日公女の外出に會したる際人持以下の士の携ふる鎗を伏すべきことを定む。(一〇〇八)

○百姓の郷里より出奔し病氣の爲江戸邸に歸りたる者の取扱に關し郡奉行より稟請す。(一〇〇九)

○卯辰茶屋町及び石坂新地の園内に於ける取締に就いて令す。(一〇一〇)

十二月 ○四日前田齊廣の女寛姫、豊前小倉侯小笠原忠徵に入輿す。(一〇一三)

○十九日銀子缺乏するを以て、再び金子を混じ通用することを許しその交換比率を定む。(一〇一四)

○廿一日米俵の製法を一定すべきことを告ぐ。(一〇一五)

○廿二日大島忠藏學校都講に任ぜらる。(一〇一五)

○廿八日江戸に於いて年頭の際年寄中等の長袴着用を廢す。(一〇一五)

○廿九日省略に付き年寄中及び家老中の從者の數を減少す。(一〇一六)

○石川郡中奥組の村々に死者の火葬を廻り日藤内に託せしむべきことを命ず。(一〇一七)

就業　侯爵前田家囑託　日置謙

不許複製

昭和十五年三月十五日印刷
昭和十五年三月二十日發行

〔非賣品〕

著作者　侯爵前田家編輯部
東京市目黑區駒場町八百六十一番地

發行者　石黑文吉
東京市淀橋區東大久保町二丁目三百十七番地

印刷者　高橋豊吉
石川縣金澤市高岡町九十番地ノ二

印刷所　明治印刷株式會社
石川縣金澤市高岡町九十番地ノ二



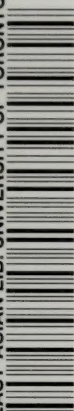


UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER
COLLECTION

purchased from
a gift by

THE DONNER CANADIAN
FOUNDATION


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03017 5558